
アイアリス～虚無の王宮 水晶の棺～

風梨凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイアリスと虚無の王宮 水晶の棺

【Nコード】

N4929I

【作者名】

風梨凜

【あらすじ】

“レインボーヘブン”それは、豊穡の女神、アイアリスに守られた至福の島。残酷無比と人々に恐れられた男、ゴットフリーと、レインボーヘブンの大地の欠片、ジャンは、仲間を伴い、500年前に消えたその島を探して旅を続ける。

旅の途中で、立ち寄った黒馬島。消えゆくその島から、寸でのところで脱出した、彼らの次の訪問地は、繁栄の頂点にたつグランパス王国。だが、華やいだその王国の裏側は？超豪華演出で繰り広げられるストーリー。アイアリスシリーズ第3弾！

プロローグ Chapter 1. グランパープル（前書き）

アイアリスシリーズの第3弾です。

登場人物は、後書きにあります。

前作を読まなくても、分るような展開にしようと思っていますが、よろしければ、第1部「虹と闇の伝説」第2部「黒馬島奇談」も合わせて、どうぞ（＾＾）

プロローグ Chapter 1. グランパープル

レインボーヘブン、それはこの世の富をすべて集めた至福の島。……だが、五百年もの昔、その島は突然、海に消えた。レインボーヘブンの守護神アイアリスは、その島を大地と六つの欠片に分け、そして封印したのだ。遙か未来、住民たちの子孫にレインボーヘブンを返す約束を残して。

レインボーヘブンの伝説にはこう記されている。

ーレインボーヘブンは再び蘇る。その欠片たちが力を取り戻し、その血を受継いだ住民たちが、その地を訪れた時に……また蘇る。

1. グラン・パープル

* * *

何故、残してきた……？

崩壊した大地。海を流離う島……故郷と呼べる場所のすべてをふりきって、たどり着く場所に価値などあるのか？

火照るような体の熱さと胸の痛みに耐えかねて、目を閉じている。それでも、その道標は鮮やかに輝いて、俺を呼ぶ。

虹の道標……。

至福の島、レインボーヘブンへの

* * *

「あ、目を覚ました」

きんと、はずむような声がした。どこか懐かしげな響きにゴットフリーは重い瞼を開く。

気分はすこぶる良くなかった。そして、意識がはっきりとしてゆくにつれ、それは最悪に変わっていった。

「ゴキブリ娘……」

居るはずのない少女が、彼の枕元に腰掛けていた。

襟元で少しはねた紅い髪。くるくるとよく動く大きな茶色の瞳。

「ゴキブリじゃないわよ。私の名前はココ。ガルフ島で一番賢い村、サライ村のココ！」

「……」

一瞬、時が錆付いたかのように、過去をさまよう。火の玉山で別れた泥棒娘……サライ村の連中とガルフ島を捨てると言っていた。

ゴットフリーの故郷、ガルフ島は崩壊した。至福の島、レインボーヘブンの虹の道標が示された日食の日、邪気一海の鬼灯の浸食を受けて、島で唯一の活火山、火の玉が大噴火を起こしたのだ。

あの日、サライ村のココは、ゴットフリーとともに火の玉山に登ったジャンを追ってきた。だが、夜風の力を借りて、島が崩壊する前に、仲間の船に乗ったはずではなかったのか。

解せない様子で、ゴットフリーは、自分が眠っていたらしい部屋の中に目をやった。家というよりは、小屋といった方がよさそうな粗野な佇まい。そういえば、彼自身の記憶でさえも、おぼろげにしか思い出せない。

ジャンやタルクたちと、黒馬島を脱出して船に乗った……消えてゆく黒馬島を眺めていた……

その後の事はまるで覚えがない。

「何処だ？ここは？」

「ここは、グラン・パール島。グランパス王がおさめてる、れっきとした王国よ」

ココがふくれっ面で答えた。

その時、ドアを開けて男が入ってきた。

「グラン・パール島へようこそ！ガルフ島警護隊、ゴットフリー・フェルト隊長」

派手なシャツに右の耳にピアス。同じ側の頬に傷がある。

ゴキブリ娘とくれば、次は、やはりこいつか……。

ラガー。サライ村のリーダーで地質学者。ガルフ島一の頭脳の持ち主。だが、その頬の傷は、島主リリア・フェルトへの忠誠の証として、ゴットフリーがつけたものだ。

「歓迎痛み入る。と言いたところだが、これは一体何の真似だ？」

ゴットフリーが寝かされている真鍮のベッドの足に錠で固定されている重い鎖。その先に縛りつけたれた自分の右足。歓迎とは似ても似つかぬ処遇に、ゴットフリーは苦い笑いをもらした。

「ま、悪く思わんでくれ。警護隊長殿は、一触即発の兵器みたいなもんだからな。そうでもしないとかないと、まともに話もできやしねえ」
ラガーの意地の悪い笑顔に、少しばかりの優越感が見え隠れしている。それを読み取ってか、

「鎖に繋いでおかないと、俺が怖くて声も出ないか」

ゴットフリーはせせら笑うように言った。

「なんなら、左の頬にも右とお揃いの傷をつけてやろうか？」

その瞬間、ゴットフリーの頬にラガーの堅い拳が飛んできた。その勢いのまま、体をベッドの後の壁に打ち付けられる。切れた唇の血をぬぐいながら、ラガーを睨めつける灰色の瞳。

その鋭い眼光にラガーの心臓は、どくんどくと鼓動を早める。

「ラガー！ 警護隊長は、まだ、熱があるんだよ。病人をなぐるなんてっ！！」

ところが、ゴットフリーを守るように、その前に立ち上がった婦人がいたのだ。ふっくらした体つき、田舎風のエプロン姿。それは、サライ村の肝っ玉母さん、フレアおばさんだった。

だが、いつもの癒し系の笑顔はすっかり、なりをひそめている。「そうよ。だいたい、まいっちゃてたゴットフリーを、ラピスの医院から無理に連れてきたりして……おまけに鎖で繋ぐだなんて。絶対、嫌だったんだからね！」

先ほどからその枕元にいたココまでが、彼の支援にまわる。

“何なんだ？ こいつら、二人して警護隊長につきやがって……”

それに加え、

「ラガー！ お前、何で俺ん所から患者を盗むんだっ！」

破れたGパンに腕まくりの白いシャツ、細身で長身。今風に立ち上がった金色の短髪。

突然、開かれた扉から現れた青年の姿にラガーは、眉をひそめた。

「盗むなんて、人聞きが悪いな。それに、この男に、俺たち、サライ村の人間がどんなひどい目に合わされたか、知らないお前に怒鳴られる筋合いはないぜ」

「それでも、医者の中から患者を拉致するなんて、とんでもないクソ野郎だ！」

青年は、ラガーをどんと突き飛ばすと、つかつかとゴットフリーの傍へ歩みよってきた。そして、心配げにその額に手をやる。

「大丈夫か？熱は下がってるみたいだけど……」
合点がゆかぬ様子で、青年を見上げてゴットフリーは、はっとした表情をする。

こいつ……目が

歳は17、8くらいだろうか。だが、その瞼は眠っているかのよう
に堅く閉ざされていた。

「ラピス・ラズリ！余計な真似をすると、いくらお前でも容赦はし
ないっ！！」

仲間を呼ぶようにヒュッと口笛を鳴らす。だが、ラガーがその仕
草を終えないうちに数本の矢がその頬をかすめて飛んでいった。

「たった一人、それも万全でない彼を捕らえるのに、大層な人数が
いるもんだ。でも、覚えておけよ。これ以上手を出すと、お前ら、
全員串刺しだ！」

手にした小ぶりの弓を斜に構えて、ラピスと呼ばれた青年は無然
と言い放つ。

「少なくとも俺の患者であるうちは！」
ラピスが、瞬間的に放った矢は、3本。それらは確実に3つの的
を捕らえていた。

その証拠に部屋の戸口に男が3人、昆虫採集の虫のように貼り付
けになっていた。

その様子を眺めていたゴットフリーが、小気味よさそうに言葉を
はさむ。

「ラピス・ラズリ……それが、お前の名か？目が不自由らしいが
……弓の腕は並ではないな。一体どうやって的に狙いをつけている
？」

彼の手前に立ったラピスは、弓を構えたまま、にやと笑った。
「感覚さ。目など見えなくても、俺は感じる。この世のすべてがこ

の頭に、ピンと浮かびあがってくるんだよ」

プロローグ Chapter 1. グランパープル（後書き）

【アイアリスく虚無の王宮 水晶の棺】 登場人物

●ジャン・アスラン 見かけは15く16歳の少年。レインボーヘブンの欠片”大地”

●ゴットフリー・フェルト 19歳 元ガルフ島警護隊 隊長

●タルク 23歳 ゴットフリーの部下。長剣の使い手

●ミツシエ ジャンと行動を共にする謎の少女

＊ ＊

●ココ 12歳 ガルフ島、サライ村の少女。泥棒を生業としているが、実はゴットフリーとは兄妹

●ラガー 24歳 ガルフ島、サライ村のリーダー、切れ者

＊ ＊

●ラピス・ラズリ 17歳 グラン・パープル島の盲目の青年、弓使い、医者卵

●グラジア・リリース・グランパス 16歳 グランパス王国の王女、通称 スウォード・リリー（剣百合）

＊ ＊

●ブルーウォーター（BW） ゴットフリーの元参謀、レインボ

「ヘブンの欠片」紺碧の海

●霧花^{きりか} レインボーヘブンの欠片”夜風”

●天喜の白い鳥、伐折羅の黒い鳥 2匹で1対のレインボーヘブンの欠片”空”

＊ ＊

●天喜^{あまぎ} 黒馬島の少女、16歳

●伐折羅^{ばさろ} 天喜の双子の弟 夜叉王

＊ ＊

●海の鬼灯^{うみのほおずき} 紅の邪気

Chapter 2

ジャンとタルクは、賑やかな商店が建ち並ぶ城下町を歩いていた。

「どうやら、建国記念祭の真っ最中にこの島へやってきちゃったみたいだな。黒馬島と違って、えらく人出が多いんじゃないか。それに、見てみろよ。あの城、贅の限りをつくしたっていうのは、あーという建物の事を言うんだ」

タルクが指差した北の丘の上に、グランパス王の居城、エターナル城がそびえ建っていた。白亜の尖塔、派手に飾り立てられた大きな窓、繊細な彫刻で縁取られた城門。その城は、どう見ても、見栄っ張りな城主、グランパス王の虚栄の城であることは一目瞭然だった。

グラン・パープルは栄えていた。そして、その繁栄は今、この時が頂点だった。

「ゴットフリーをおいて来ちゃったが、よかったのかな」

巨体に似合わぬ不安げな顔で、タルクはジャンに話しかける。

「熱も下がったし、ミッシェがついていてくれる。ラピスだって大丈夫だって言ってたじゃないか。それより、この島は、潤っているだけあって、刀匠の腕もいいな。タルクの長剣をたったの一週間で鍛えあげてしまうとはね」

一週間もたったのか。

タルクは、真新しく鍛え上げられた長剣を背にしょい直すと、短く息を吐いた。黒馬島でゴットフリーと闘った時に折られた長剣は、新品になって帰ってきた。……が、ゴットフリーの方は、黒馬島を

脱出した後、船で倒れて、朦朧とした状態が続いていた。

「そう心配すんな。あいつはちょっとした事じゃ、くたばりゃしない。でも、グラン・パールを見つけて、ラピスの医院にゴットフリーを運んだのは正解だったと思うよ」

「まあな、最初は医者のおまけに目が見えないなんて、不安でたまらなかったが、あいつはなかなか、信頼できる奴だ。亡くなったっていう奴の師匠の育て方が、よほど上手かったんだろうな。しかし……ゴットフリーがあんな高い熱を出して、寝こんじまうなんてなあ」

「何で？ あいつだって熱ぐらい出すだろ。怪物じゃあるまいし」

笑顔でそうは言ってはみたが、

だが、あのうなされよう……熱と疲れのせいだけじゃない。伐折羅がつけた傷跡がひどく疼いて痛むようだった。伐折羅がゴットフリーにつけた傷……。

ジャンの心に不安がないといえば、嘘になる。それでも、伐折羅がゴットフリーに悪意をもって、あの傷をつけたとは思えなかった。

「ああ、もう、ごちゃごちゃと考えるのはやめたっ！ タルク、あそこで何か面白そうな事をやってるぞ。ちよつと、見てゆこうぜっ」
ジャンは、そう言って、出店の一件を指差した。

―― ARM WRESTLING ――
優勝賞金 2千ラベル 副賞有り 飛び込み参加大歓迎！

「“ARM WRESTLING”って、“腕ずもう”の事だろ。へえ、賞金2千ラベルか。結構いいじゃん。タルク、参加しろよ。お前だったら優勝なんて簡単だろ」

身長2メートルはありそうな巨漢のタルクだ。その上、その背と変わらぬ長さの長剣をいつも振り回しているのだから、力に関しては誰にも負けない自信はあった。しかし、

「何で俺が、こんな見知らぬ島で“腕ずもう”大会に出にやならんのだ。今はそんな事をして遊んでいる場合じゃないだろ」

タルクは気乗りしない様子でそう言った。

「でも、船の金が減ってるって、頭をかかえていたのは、お前じゃないか？ 2千ラベルだぞ。これっていい資金稼ぎだと思うけどなあ」

ジャンのとび色の瞳がうれしそうに輝いている。資金稼ぎ……というより、単におもしろがっているだけだな。こいつは。しかし、確かに2千ラベルあれば、ここにいる間の滞在費がでるな。ガルフ島から持ってきた金目の宝石や武器をいつまでも、金に換えてばかりもいられない。

「仕方ない。家計のためだ。人肌ぬぐか……」

「そうそう、家計のため。がんばれっ、タルク」

＊ ＊ ＊

「俺の患者に手を出すなって……、大きな口をたたくな！ それに、ラピスっ、俺がお前らにどんなに良くしてやってるか、わかってんのか？」

興奮したラガーに、“うるせえ”と、ラピスが弓を向ける。だが、それをゴットフリーが手で制した。

「ラガー、お前は俺に話があるんじゃないやなかったのか。聞いてやるから言ってみろ」

「……ゴットフリー、貴様っ！ 俺らに捕らえられてる自覚があんの

か？その偉そうな態度。俺はそれに我慢がなんねえ」

「自覚？お前は俺を鎖で繋いでいるではないか。それだけでは、安心できないのか？」

「何っ！」

せせら笑うゴットフリーに再び、あげようとした腕を、ラガーはぐっと堪えて我慢した。ココとフレアおぼさんの非難の視線と、ラピスの矢。三つ巴の攻撃にあってはたまったものじゃない。

「……ヘインボーヘブンの欠片、その一つがこの王国の城、エターナル城の地下で眠っている」

さすがにこの台詞は、ゴットフリーを驚かせた。内容も然り、ラガーの口から“ヘインボーヘブンの欠片”という言葉が出るとは、思ってもいなかった。

「だがな、王宮の地下は一旦入ると、入口も出口も、方角さえわからなくなる“永遠の迷宮”^{エターナルラビリンス}だ。さすがの俺も、うかつに手を出せない」

「……お前、どこまで知っている？」

「至福の島、ヘインボーヘブンは七つの欠片を集めれば、蘇るそうだな。しかも、俺たちサライ村の先祖は、その住民だったそうだ。そこにいるココに聞いた話だが、あのジャン・アスランって小僧はその欠片の一つだ。あのバケモノじみた力はヘインボーヘブンの大地の力なんだろう？」

ゴキブリ娘が情報源？ということとは、こいつらは“ヘインボーヘブンの”の“歪められた伝説”については何も知らない……というところか。だが、ラガーの奴、このグラン・パール島に関しての情報はかなり持ち合わせているようだ。

ゴットフリーは少し俯き、ラガーに見えない位置でにやりと笑っ

た。

ほどよいくらいに、こちらの情報を流してやれば、こいつは使える。

……さて、どのカードを場に出してやろうか。

「……俺は既にレインボーヘブンの欠片を三つ、知っている」

ココはぎょっと、ゴットフリーに視線を向けた。一人目はジャン。そして、二人目の欠片は霧花に違いない。……彼女はレインボーヘブンの欠片、夜風だ。ココはその事はラガーには秘密にしていた。でも、三人目がいるって？ 一体……誰？

それに、ジャン。レインボーヘブンを見つけたら、必ずココを迎えにくると約束してくれた、ジャンの行方は？

「まず一人目はジャン・アスラン、大地。二人目、BW、ブルーウォーター海。そして、三人目は霧花、夜風」

そして、四人目は、天喜と伐折羅の母、空。だが、これはラガーに流すには、いらぬ情報だ。

「何っ、BW！ お前の参謀のか？！ それに、霧花がレインボーヘブンの欠片！？」

「ほお、お前は霧花を知っていたのか？」

「知り合いも何も、彼女はサライ村のレストランのウェイトレスだ」

ラガーの台詞にゴットフリーは、わずかに目を瞬かせると、くくっと笑いをもらした。

迂闊だった。そんな場所に彼女がいたとは、……露ほども気づいていなかった。

「……で、エターナル城の地下にもう一人の欠片が眠っているわけか。それは、レインボーヘブンの何だ？そして、その欠片を、お前はどうしたいというんだ？」

「その質問を、ゴットフリー、そっくり、お前に返してやるぜ。それに、ジャン、BW、霧花……奴らがレインボーヘブンの欠片というのなら、今は何処にいる？」

「さあな、ガルフ島が崩壊した後は、影も形も見えなくなってしまったからな」

ゴットフリーの言葉を、ココは鵜呑みにして落胆する。だが、ラガーは、

畜生……白を切りやがって。

ちっと舌を鳴らして、頬の傷をゆがめ言う。

「レインボーヘブンを探しているんだろう？何なら、俺たちが力を貸してやってもいいんだぜ」

ゴットフリーは皮肉っぽく笑う。

「このベッドに縛り付けられたままで？」

「それは、お前の態度次第だ。レインボーヘブンは、その住民の子孫である俺たちの物だ。でも、素直に協力するというなら、お前にも居住権を与えてやるよ」

「ご親切な事だな。屠殺人か、墓場守にでも任命してくれるのか」「ほお、また、えらく高級な職をお望みのようだ」

ガルフ島では、散々、いいように使われてきた。初めてなんだ。俺がゴットフリーの優位にたてる機会がめぐってきたのは。

ラガーは、胸にたまった思いが苦すぎたのか、ぺっと唾を床に吐き出し言った。

「お前は俺直属の使用人にしてやるよ。ただし、五体満足というわけにはいかないな。手足の腱を切ってやるか、目をつぶすか、鼓膜を破るっていうのはどうだ？……それが嫌なら、おとなしく、レインボーヘブンの秘密を洗いざらい話してしまうんだな」

ラガーの奴！ひどい事を言う。そりゃ、ゴットフリーは島主リアの命令で、サライ村の住民を生埋めにしたりしたけど……BWは、それを知ってラガーに脱出用のトンネルを掘らせたじゃない。きつとあれは、ゴットフリーの命令だ。だって、ゴットフリーは、ラガーたちが作ったトンネル知っていたのに、見て見ぬふりをしてたんだから。

無然とした表情で、ココは隣にいるフレアおばさんに目配せを送った。むっつりと頬を膨らませていた、おばさんは、それに気付くと、こくんと一つ首を縦に振った。

事の次第がよく理解できないが、ラガーの憤りはラピスの頭にじんじんと伝わってきた。目が見えない分、研ぎ澄まされた第六感が並外れてよく働く。

ゴットフリー、この人は、何でここまで妬まれてんだ？

ゴットフリーの容姿は、知る由もなかったが、ラピスの後ろにいる彼からは背中ごしにでも、圧倒的な力を感じた。だが、それは人に恨まれる種の物ではない。

統治者、君臨する者、統率者？どの言葉も近いようで、ゴットフリーにはあてはまらない。ただ、そんな感覚とは、別の方向から流れてくる畏怖の思いは、ラピスでさえも怯えを感じた。

はあはあと、呼吸を荒げながら、ラガーはゴットフリーを睨めつけている。

あまり、ラガーを怒らせ過ぎると、後々面倒な事になる。出来れば上手く彼を使いたいからな。
ここらあたりが潮時か。

ゴットフリーは、ふっと息を吐くと、後ろにまわした右手に意識を集中した。

――闇馬刀――

にわかに明るく輝き出した手の中で、黒鋼色の光の粒が形を整え出した。
ところが……

ゴットフリー！

繋がれている右足の鎖をぐいと引く者がいた。それに気を殺がれ、光は消滅した。ゴットフリーは、訝しげに足元に目をやる。
ベッドから垂れ下がったシーツの間から、ココの顔が覗いている。
にやりと目で笑い、手にした鍵を自慢げにちらつかせる。

ゴキブリ娘……ラガーから鎖の鍵を盗んだな

「ラガー、話はまた、後で聞いてやる！俺はお前の使用人になる気は、さらさらないんでな」
叫んだ瞬間、ゴットフリーはベッドから飛び出し、出口に突進した。

「何っ？鎖がはずれてるっ！？」

焦った様子で、扉に立ちはだかったラガーの部下たちを、灰色の瞳が真正面から睨めつける。

退け

無言で目が語った言葉。その威圧感に男たちは震えあがり、無意識のうちにゴットフリーに道をあける。

「ラピス、お前も来い！」

呼ばれてラピスは、磁力にひき付けられるかのように、ゴットフリーの後を追う。

「追え！ゴットフリーを逃がすんじゃないっ！！」

息せき切って、扉の外に飛び出したラガーは、啞然と外の景色を眺めた。

あいつら、どこへ消えた……？

ゴットフリーとラピスの姿はすでになかった。ただ、城下町へと続く一本道に、真っ直ぐに残されている巨大な馬の蹄の跡が、彼らの行く先を示していた。

「畜生！話があるなら、また、ラピスの医院まで、来いということか！ふざけやがって！」

ラガーは悔し紛れに、ゴットフリーを監禁していた家の扉を、思いきり蹴り倒した。

Chapter 3

城下町の“腕ずもう”大会。

「なんだよ。もう終りかあ？ 思ったよりつまんないもんだな」

ジャンが大あくびをしながら言う。

タルクに秒殺でなぎ倒された男たちの数が30人を越えた時、さすがに挑戦者に名乗りをあげる者はいなくなった。

「あいつ何者だ？ ここの大会はけっこう賞金が多いんで、島以外の人間がやってくるのは珍しくも何ともないが……」

「きつと、あれは海賊の首領だ。あの背にしょってる剣の長さを見てみろよ。きつとあれで何百人も斬り殺してきたんだぜ」

汗の一つもかくでもなく、平然と立っているタルクの姿を酒の肴に、観客たちが好き勝手に噂を始める。

“海賊の首領が、“腕ずもう大会”なんかで、ちまちまと賞金を稼ぐかい！”

いささか、退屈になってきて、タルクは審判の男に言った。

「おい、もう挑戦者はいないんだろ？ なら、優勝は俺だな」

馬鹿馬鹿しいと思いつつも、船の資金難、解消のためには仕方ないと自分で自分を慰めてみる。ゴットフリーを先頭に船には、そんな事に気を配る奴なんか誰も居やしない。タルクがいないと、レインボーヘブンを見つける前に、十中八九、船は破産する。

しかし、タルクの快進撃を面白く思わない一団がいるのは、当たり前前の事で、おまけにそれが“腕ずもう大会”の主催者だったものだから、質が悪かった。

「オヤジよ、優勝者は事前に頼んでおいた男に決まりで、賞金払わずに、参加金と掛け金、丸儲けって話はどうなったんだ」

ヤクザ風の男が、場をしきっていた中年男に悪態をつく。

「あいつは、今まで誰にも負けた事がない奴だったのに……おまけに、賞金二千ラベルなんて最初から用意なんてしてねえぞ」

「どうするよ？」

オヤジは、苦々しげに、タルクを睨めつけていたが、

「あの大入道、調子にのりやがって、ちょっと耳かせ」

耳打ちされたヤクザは、中年男から手渡された品を手にすると、にやりと嫌な笑いを浮べた。

「ちょっと、待て。まだ、挑戦者はいるぜ！」

歩み寄ってきた、いかにも下世話な感じのヤクザを見て、タルクは眉をしかめた。悪い顔色、うつろな目。身の丈はそれなりにあるのだが、筋肉はそげおちて、一見しただけでも、葉中毒の臭いがぷんぷん漂ってくる。

こんな奴が挑戦してくるなんて、俺もなめられたもんだ。

だが、タルクはヤクザの男の利き手を見て眉をしかめた。それは、どこぞやで悪事を働いた時にでも失ったのか、作り物の手、すなわち“義手”だった。そして、更に驚いたことには、その義手はよくある木製の物ではなく、節の一つ一つまで、黒光りした厳しい鋼鉄製だったのだ。

「おい、そのいかにも強化されてる作り物の手は、規則違反じゃないのか？そんなので思い切り握られたら、こっちは、たまったもんじゃないだろ」

「別に強化なんかされちゃいないぜ。これだからと言って、力が倍増するわけでもねえし、かえって生身の手じゃない分、俺の方が不利なんじゃないのか。どうしても、それを疑うってんなら、ほら、審判、見てくれよ」

ヤクザはそう言って、審判の男に自分の手を差し出した。お愛想程度にそれを検分してから、“特に問題なし”と、告げる審判の態度にタルクは、これでも審判かよ？と、半ば諦め加減で声を荒げた。

「なら、とっと勝負つけてしまおうぜ。俺はいい加減、こんな勝負に飽きてきた」

「それなら、さっさと負けてしまえ」

「何っ！ふざけやがって」

熱くなって、男の襟首をつかもうとしたタルクを審判が静止する。この審判でさえ、主催者の回し者だった。ただ、タルクのあまりにも早い勝ちに、偽りの判定を下そうにも、その機会に恵まれなかっただけなのだ。

「では、始めっ！」

ヤクザ風の男が、組みあわせたタルクの手をぎゅっと握り締めた。その瞬間、タルクは手のひらに、チクリと嫌な痛みを感じた。

何っ！？腕に力が入らないっ。

そして、勝負は一瞬のうちに終わった。

タルクの太い腕は、ヤクザなの男の手によって、完全に机に押し

付けられていた。

「すっげえ！！あんな柔そうな体で、大入道を倒したぞっ！！」
まわりから、どっと歓声があがる。

「タルクっ！お前が負けるなんて、どうしたんだよ！？」

ジャンが慌ててタルクに駆けよってきた。いくら、相手の手が鋼鉄だからって、あんな瞬間にタルクが負けるなんて信じられない。合点がゆかない様子で、その顔を下から覗き込む。

「畜生っ！腕がしびれちまって、力がでない。やっぱり、あいつ、手に何か細工してやる」

タルクは、悔しげに右の手のひらをジャンにむけた。かすかに小さな穴があき、血がにじみ出ている。

「よし。首尾よくやった。エターナルポイズンの効き目は抜群だな。なあに、大丈夫。この毒はほんの少量なら、手や腕がしびれる程度だ。いくら外海の奴とはいえ、殺しちまったら洒落になんねえからな」

主催者のオヤジは、狡猾な笑いをもらして、ヤクザの男にほくそえむ。

からくりはこうだ。あらかじめ、ヤクザの男がオヤジから手渡された毒薬、エターナルポイズンの小型注射器を手隠し持つ。注射器といっても、画びょうのような針にカプセルをつけただけの、単純な造りだ。

腕ずもうの勝負が始まり、タルクの手を握った瞬間、それをタルクの手のひらに刺す。毒がまわって、タルクは手や腕に力が入らなくなる。そこを、ヤクザがすかさず、倒す。たとえば、エターナルポイズンがその手に漏れ出しても、ヤクザの手は義手なのでその影響は受けない。

「大入道よ。人を見た目で判断しないことだな。ま、俺みたいな不自由な手でも、体の奥底に力を秘めた人間もいるってことだ。お前もいい勉強になっただろ？」

ヤクザは、誇らしげにタルクを見やる。

ちっ、ふざけんなよっ。この野郎！何が奥底の力だ？調子にのりやがると、長剣でぶった斬るぞ」

だが、剣をとろうにも、腕にまったく力が入らない。タルクは、苦々しくヤクザの男をにらみつけた。

その時だった。

「待てよ！今度は僕が挑戦する」

無然とした表情で、ジャンが前に進み出た。

「お、おい。お前が出ちゃ、笑い話にもならんだろ」

ジャンは、レインボーヘブンの大地の力を内に秘めている。へたをすれば、相手をあの世へ送りかねない。

タルクはあせった様子でジャンを止めたが、

「手加減するから。だって、このままじゃ、引き下がれない」

タルクは、その言葉を聞いた瞬間、にやりと笑い、行ってこいとばかりに、ジャンの背を押した。

「何だあ、ずいぶん、威勢のいい小僧が出てきたぞ。お前、いくつだ？15それとも16か？そんな細っこい手で俺に挑戦？」

ヤク中でも、ジャンよりは体格はいい。それに仮にもヤクザだ。勝負となれば、子供なんぞとは場の踏み方が違う。毒など使わなくても楽勝だなと男は笑った。

「やってみなきゃ、わかんないよ。審判、早く始めて」
と、言ってから、ジャンは、あ、ちょっと待ってと言葉をつけ加えた。

「この対戦の前に決めておこう。これで勝った方が優勝！って事でどうだ？」

ヤクザの男は大声で笑う。

「自信満々ってところか？別に俺はかまわないぜ。いい加減に勝負をつけないと、見てる奴らも退屈だろうしな」

そうだ。そうしろと、誰かがおもしろ半分に叫ぶ。この時点ではジャンの勝ちなんて、考える者は一人もいなかった。

「では、勝負、始めっ！」

審判の声と同時に、大地が震えた。

ドドドーン！

ヤクザの男は“腕”の置かれた机とともに、体ごと地面にたたきつけられていた。骨折は確実であろう腕の痛みで顔を歪めながら、ヤクザは地面に這いつくばっている。

その廻りには大破した机の残骸。

まわりの観客は一瞬、呆気にとられたように声を失った。

「僕の勝ちだろ。判定を下してよ」
涼しげにジャンが言う。

「あいつ、あの男を机ごと地面にたたきつけやがった！！」
その瞬間、どっと歓声があがった。

「人は見かけだけで判断するものじゃないんだろ？」

本当は人じゃないんだけどね。

ジャンは、いたずらっぽく目で笑って、ため息まじりに苦笑するタルクにVサインを出した。

「つ、机まで壊しちまうなんて、ル、ルール違反だ！あんなの勝ちとは言えないだろ」

「や、やめとけ、オヤジ。あいつはとんでもない野郎だ」
審判に食い下がろうとする、主催者のオヤジをヤクザが大慌てで制止した。

なぜなら、ジャンが握り締めたヤクザの義手には、おびただしい数の亀裂が入っていた。その手をオヤジに見せようと、ヤクザが骨折の痛みに耐えながら手前に差し出した時、鋼鉄でできた義手は、ボロボロと形をくずしながら地面に零れ落ちた。

ヤクザの義手は、“腕ずもう”の勝負がつく前にジャンの力で握りつぶされていたのだ。

「そんな馬鹿な……」

ぽっかりと口をあけて、真空状態に陥っているオヤジに、ジャンはにここと笑顔を見せた。

「僕の優勝だ。賞金は二千ラベルだったな」

まだ、しびれの残っている腕を押さええながら、タルクが言葉を付け加える。

「それと、副賞もあったけな」

「え、えーと、賞は今日は用意してないんだ」
「何いっ！」

鬼の形相のタルクが怖い。

「い、いや、ちょっと待て……待ってくれ！」

オヤジは大慌てで、胸元に手を入れる。

「と、とりあえず、五百ラベルある。今日のところはこれで何とか……」

「はあっ？ ふざけてんのか……じゃ、副賞は？」

「わ、わしの店に酒樽がある。それを勝手に持ってけ！」

「仕方ねえな。じゃ、二樽ばかりもらってくぜ。ジャン、お前一つ持ってくれるか？」

まだ、少し腕に痺れが残っている。二つの酒樽は持てそうにないんだ。タルクの言葉に、ジャンは、うん！と元気に答えた。

その場に居合わせた人々は、また、目を白黒させた。どう見ても普通の子供のジャンが、自分の胴体よりも大きさのある酒樽を、ひょいっと肩の上に持ち上げたのだから。

「残りの金は用意しとけよ。じゃあな」

悠々と去ってゆく、タルクとジャンを、ため息まじりに見送る人々。だが、その中の一人の男が、興奮した様子で彼らの元に駆け寄ってきた。

「お前ら、これに出ろよ！ 十日後で賞金は二万ラベル！ 王宮主催だから、賞金も保証されてる。お前らだったら、絶対、優勝確実だ」男が差し出したビラ。それには、こう書かれていた。

“ 王宮武芸大会 賞金二万ラベル 優勝者にはグランパス王主催、晩餐会に招待。また、王宮直属の近衛師団へ推薦 ”

「タルク、二万ラベルだってよ」

聞かぬそぶりで、行こうとするタルクの袖をジャンがひっばる。

「おい、お前また、出ろっていうんじゃないだろうな」

「だって、家計の為だろ？」

「……ちよつと、考えさせてくれ」

「なら、僕が出る！」

タルクは、ジャンが手にしているビラを大急ぎで奪い取った。

「駄目だっ！これ以上、目だっってくれるな！」

「なら、お前が出るよ」

「……ゴットフリーが何ていうか……」

「あいつが、くたばってる間にでちまえばいいんだ」

「何て事いいやがる。とにかく、今は宿へもどろう。少し買い物に出るつもりが、余計な時間をとっちゃまった」

まずは、ゴットフリーがよくなってからだ。そしたら、王宮武芸大会だろうが、演芸大会だろうが、俺は何だって出てやるよ。

タルクは、ジャンから奪い取ったビラをくしゃくしゃにして、ポケットにしまうと、ふつと短くため息をついた。

しかし、ゴットフリーは、いつになったら、目をさますんだ……黒馬島を出てからずうつと、眠りっ放しじゃないか……黒馬島……黒馬っ？！

「ジャ、ジャン！く、黒馬だっ！黒馬っ！！」

ぎよつと、目を見開いてタルクが叫んだ。

Chapter 4

グランパス島の中央に位置する城下町。その両脇に添うように、海岸まで長い並木道が続いていた。

巨大な黒馬が、疾風のように、その道を駆け抜けて行く。

「これ、馬……だよな？」

黒馬の背で、ゴットフリーにつかまりながら、ラピスが言う。

「見れば解ると言いたいところだが……何故、そんな事を聞く？ お前はこの世のすべてが、頭に浮かんでくるんじゃないのか」

だから、戸惑っているんじゃないか。イメージができないんだ。力の強さに頭の芯が痺れちまって……馬というよりは何か大きな流れの上に乗っている感じで。

むっつりと黙り込んでしまったラピス。

「これは黒馬だ。黒馬島の御神体の……この馬は俺が求めれば、闇の道を駆けてくる」

「闇の道を駆けてくる……って、ゴットフリー、あんたって一体？」
その時、並木の向こうから響いてきた馬鹿でかい声。

「ゴ、ゴットフリー、ゴットフリー!!」

その声に負けぬほどの、巨体の男が息せき切って走ってくる。

「タルクか……!? 意外な場所から現われたな。いや、意外な場所にいるのは俺たちの方なのか」

ゴットフリーは、胸のすくような笑いを見せた。

＊ ＊ ＊

ラピスの医院

そこに、ゴットフリー、タルク、ジャンそして、ラピスがいた。

「そのヤクザは、エタールナルポイズンを使ったんだ。少量なら、心配することもないが、とりあえず、解毒薬を出しておくから」

そう言って、ラピスはタルクの口に、丸薬を二つばかり放り込んだ。

「エタールナルポイズン？」

「ランカっていう植物からとれる毒薬さ。どういうわけだか、ランカは、エタールナル城のまわりにしか生息しない。だから、エタールナルポイズンって呼ばれてるんだ。軽い痺れを起こさたり、じわじわと効果をみせて息の根を止める風にも、何だって加工ができる。でも、本質は即効性の劇薬だ。王宮側もヤバイ輩に渡らないように、厳しく管理しているようだけど、何処からか流失してしまうんだな、これが……」

その言葉に、ゴットフリーがかすかに眉をひそめた。

「そういえば、ラガーの奴……やけに王宮の内部を探りたがってた」

すると、突然、百年越しの敵を思い出したかのように、

「あの野郎！ゴットフリーを拉致なんて、考えただけでも腹が立つ。それに、いつの間にグランパープルへ来てたんだ！」

そんな風到大声で叫ぶタルクの頭を、うるせえと、ラピスは遠慮なしにぶん殴る。

「痛えな、何すんだよ！」

「お前の声がでかすぎるんだよっ。それはそうと、サライ村の連中がこの島に来たのは、先月の初めだ。旅の途中で具合が悪くなった者がいて、そういう繋がりで、俺は彼らと知り合ったんだ。お前らの間に何があったかは知らないが、きつと、ここに来た時にたまたま、ゴットフリーを見かけた奴がいたんだろうな」

ジャンは落ち着きのない様子で、彼らの話を聞いていたが、意を決したように口を開いた。

「ラピス、それなら、お前、サライ村のココって女の子を知らないか？ 紅の髪に茶色の目をした……」

「ココ……ああ」

紅の髪に茶色の目、へえ、ココってそうだったのか。そんな外見よりも、あんな、やんちゃで、悪辣でしかも、微笑ましい奴を、忘れるはずがないぜ。

だが、ラピスをさえぎるように、ゴットフリーが口をはさむ。

「ラガーの話では、サライ村の女、子供は別の島においてきたらしいが」

「え、何で……」

「さあな。奴等もレインボーヘブンを探しているようだったから、女、子供は邪魔なんじゃないのか」

腑におちないゴットフリーの言葉に、ラピスが顔をしかめる。何で？ 実際、彼はラガーの隠れ家で、ココに会っているじゃないか。

ジャンとココを今、ここで会わす事にゴットフリーは一抹の不安を抱いていた。

火の玉山でジャンとあの娘が別れた時、ジャンの心はひどく揺れていた。それが引き金になって、ジャンは前後の見境もなく自分の力をすべて、ガルフ島に放出してしまったのかもしれない、と。

ゴットフリーはラピスに圧力をかけるかのように、低い声音で話を続ける。

「あの娘の事より、このグラン・パープルと王宮の事だ。地下に眠っているという、レインボーヘブンの欠片の件も然りだが……その他にも何かがあるな……」

その時、同時にあがったジャンとタルクの声。

「王宮の地下にレインボーヘブンの欠片が眠ってるって!?!」

ラピスは中断されたゴットフリーの言葉に、ほっとした気分で言った。

「そーなんだ! “女神アイアリスに分けられたレインボーヘブンの七つの欠片。その一つがエターナル城の地下で眠っている。しかも、至極の宝物、水晶の棺に納められて” ……それは、グラン・パープルでは、“至福の島、レインボーヘブンの伝説”と同じくらい有名な話だぜ。」

「水晶の棺!?! 確かにレインボーヘブンの水晶には邪悪を封じる力があるが、それを棺にするなんて、聞いた事もないぞ」

「……ジャン、お前、まるでレインボーヘブンを知っているかのような口ぶりだな……」

言っておいて、ラピスは、まさかっと思いを表す。

「ジャン……ジャン・アスラン! ラガーの隠れ家で、ゴットフリー

が言ってた、レインボーヘブンの欠片、大地……ジャン・アスラン
ってお前の事か?!」

「うん。そうだよ」

にこと微笑むジャンの顔。目が見えないラピスには、その顔形は
想像にまかすしかなかったが、彼は手を伸ばすと、何かを探るか
のようにジャンの頬に触れた。

どうして、こんなにときどきしてやがる？俺の心臓。

「なんてこった！形は人間なのに、お前にはとんでもない力が宿っ
ている。……王宮の地下に眠る、もう一つの欠片をラガーが欲し
がるわけが、やっとわかってきた」

ゴットフリーが言う。

「だが、王宮の地下は“永遠の迷宮”らしいな。エターナルラビリンスあの頭脳派、ラガ
ーでさえも手をやくような……あいつは王宮の内部をどれほど知っ
ているんだ？」

「い、いや、ラガーは王宮に入った事はないと思う。警備は最強の
近衛兵に守られてて、どんな大泥棒だって忍び込めやしない。あそ
こは特別な許可がない者は誰も入ることができない場所だ……」

「ラピス、お前はどうかんだ？ラガーとはそれなりに親交があるよ
うだったが」

再び、自分に向けられたゴットフリーの言葉にラピスの心臓はま
た、ときりと音を鳴らす。

なんとなく放っておけなくて、ラガーから、かばっちゃったが、
こいつ、鋭すぎるよ。

ヤバイぞ……何か話題を変えなきゃ。

「そ、それはそうと、ゴットフリー、気分はどうだ？ お前、食事もうくにとらずに倒れたって聞いてたが……」

すると、ジャンが、

「一週間も寝込んでた割には、元気に見えるが、それって……ゴットフリーが黒馬島のクロちゃんから、生きる力をもらったからなんだ。でも、そろそろ、その効力が切れるぞ。今のうちに栄養補給をしとかないと、また、ぶっ倒れる」

「そりゃ、大変だ。すぐに何か用意させないと！」

あせった様子でタルクが立ち上がる。だが、次の瞬間、彼は腰をぬかさんばかりに驚いた。

「食事なら、すぐにでも出せるわよ」

開かれたドアからスープの香と共に、入ってきた笑顔の女性。

「ミ、ミツシエ！？ でも、何で……」

腰まで伸びた白銀の巻き髪。吸い込まれそうに澄んだ青い瞳。ただ、以前のように薄汚れた少女ではなくて、ミツシエの肌は透き通るように白く輝いていた。そして、タルクを最も驚かせたことは……

黒馬島では、ジャンより年下に見えたミツシエが、成長している。今ではどう、見ても、タルクやゴットフリーと同年輩としか思えない。

「ミツシエ、お前、何で大人になってるんだ！？」

青天の霹靂！その言葉しか、タルクの頭には浮かんではこなかった。

Chapter 5

一瞬、宿の空気が張り詰めたように密になった。

ゴットフリーの灰色の瞳が、訝しげにミッシェに向けられている。やはりな……と、ジャンに移された意味ありげな視線。それを感じてか、ジャンはおどけるようにこう言った。

「ま、こういうのもあるって事だよ。でも、僕より大きくなるなんてずるいな」

「こういう事があってたまるかつ！」

タルクは半ばヤケクソ気味で言い放った。

「ゴットフリーの目が覚めるのをずっと、待っていたの。ジャンが言うとおり、ちゃんと食事をとらないと、また、寝込んでしまうわよ」

香るような笑みを浮かべて、ミッシェが、ゴットフリーの横の机に食事を運んできた。淡い水色のドレスから豊かな胸元が見え隠れしている。

タルクは、なんだか頭がくらくらしてきた。あまりの理不尽さにジャンにこそっと、つぶやいてみる。

「おい、いきなり、あの美貌であのムネか？ありゃ、ルール違反だろ。心の準備がちつともできてねえぞ」

「胸？お前、何でそんなに慌ててるんだ？ゴットフリーなんて、全然平気じゃん」

「あいつは、あーいう手練には慣れてるから……。本当にもてる奴

って嫌だな」

二人の会話を聞いていたラピスが、おもしろそうに口をはさむ。

「へえ、初耳だ。タルクって胸が大きいのが好きだったのか？残念！俺も見なかったなあ。大きいムネ！」

お前ら、からかうのも大概にしろよ！とタルクが仏頂面で言う。

すると、ムネがどうかしたの？とゴットフリーの給仕を終えたミツシェが、タルクの傍までやってきた。

「そういえば、町でこんなビラをもらったの。建国記念祭の本祭りまであと、二週間でしょ。その前に王宮で大きなイベントがあるみたいよ」

うわっ、近くに来やがった。と、タルクは目をぱちくりさせる。

ミツシェが、差し出したビラには、こう書かれていた。

“王宮武芸大会”

「ああ、これか。僕らなんて出場しないかって勧誘までされちゃった。タルクが“腕ずもう”で大暴れだったからな」と、ジャン。

「おい、暴れたのはお前だろーが！」

王宮武芸大会か……

ジャンとタルクのじゃれ合いを眺めながら、ゴットフリーはくすりと笑みを浮べた。手にしたスूप用のスプーンを置くと、ラピスに問いかける。

「お前は特別な許可がないと、宮中には入れないと言っていたな。武芸大会の出場者ならどうなんだ？例えば、タルクが出るとして…その随行者であれば、許可はおりのないのか」

「ゴットフリー、まさか、武芸大会にかこつけて、王宮の地下を探るつもりなんじゃ」

「絶好の機会だとは思わないか？」

一瞬、口をつぐんでから、ラピスは、あはっと笑った。

「おもしろい事を考えるもんだ。王宮武芸大会は十日後だ。ならば、思いきり目だってゆけ。王族たちは、珍しいもんには目がないぞ。特に…王妃がな。前の王妃が病気で死んで、後妻に入った女なんだが、これが無類の派手好きって噂だ。うまくゆけば、王族、貴族とお近づきになれるぞ」

「なに、なにっ？目立った方がいいのか？それって僕たちの得意分野じゃん」

「ジャンが嬉しそうに、口を挟んできた。これで、思いきり好きな事ができる。」

「駄目だ！人間離れた事はやるな。それに、いるだけで十分目立つんだ、俺たちは」

その背と同じ2メートルはあろうかと思われる長剣を背負った巨漢、タルク。輝く銀の髪と透き通るような白い肌、青い瞳。美貌の乙女に変身したミッシェ…そして、極めつけはゴットフリー、陽光で紅く染まる髪の持ち主。存在感は、拔群だ。

「何だよ、僕の出番はなしかよ」
ジャンが頬を膨らませる。

「お前が暴れると、王宮をぶっ壊しかねないからな。大人しくしてればいいんだ！なあ、ゴットフリー」

「まあな」

俺も目立つのはご免なんだが……

窓の外にかすかに見えているエターナル城。栄華の象徴のような白亜の尖塔。

それを見据えるゴットフリーの灰色の瞳は、タルクの台詞に気のない返事をしながらも、知略の光に溢れていた。

＊ ＊ ＊

「ほら、腰が退けてるっ！そんなへっぴり腰で敵に勝てるかつ！」

ラガーは、目茶目茶に剣を振りまわす若者たちを眺め、短く息を吐く。

城下町から、西に下った海岸の近く。グラン・パープル島に停泊した、サライの住民たちは、そこを野営地にしていた。

人数的には50人は集まったが、にわか作りの軍隊もどきじゃ、やはり駄目なのか……

サライ村から10名、これは火薬、トラップ等の扱いには問題なし。グラン・パープルからは40名弱。意気込みはあるんだが、剣はおろか木刀だって握った事のない奴らもいる”

「全然ダメじゃん。ラガー、お先真っ暗だね」

突然、背後から聞えてきたココの声にラガーは、頬の傷を微妙に

ゆがめる。

「お前は黙ってろ。まったく、邪魔ばかりしやがって」

「へへっ、何の事っ？」

「ゴットフリーを捕らえていた鎖の鍵をあけたのは、ココ、お前だな。奴を助けて、お前に何の得がある？それとも、警護隊長のファンクラブでも作ったのか？」

「作るか！そんなもん。でも、建国記念の本祭まであと二週間だよ。あんな戦力でエターナル城を落とせるの？」

「落とせるさ……」

自分の思いとは反対の言葉。それを無理に吐き出して、ラガーは苦い笑いを浮べた。

作戦面では、俺とサライのメンバーで完璧なシナリオがひけるんだ。だが、王宮の近衛兵に対抗できるだけの兵隊がない。島で腕っぷしのいい奴をラピスに集めさせたが、実戦経験もない、剣の指導が出来る奴もいない。畜生！ガルフ島では、最強の警護隊が島を守っていたからな。俺たちは戦闘なんぞした事もねえ。

「ゴットフリーに頼んでみたら？あいつら、戦いに関してはプロじゃない」

「馬鹿をいうな！頼んで、素直に“はい”と言う相手か？例え、そう言ったとしても、いいように利用されるのは目に見えている」

騙そうとするから騙されるんだ。きっと、ゴットフリーって、ガルフ島で思ってたほど、残忍な奴じゃない。

ココが口を開こうとした、その時だった。

「何なら私が力を貸しましょうか？」

背後から響いてきた、さらさらと流れるような美声。だが、この

声には有無をいわさぬ力があつた。

「BW！（ブルーウォーター）お前、何でここに……？」

風変わりな緑の髪、ほとんど色のない切れ長の瞳。

「警護隊長から聞いたでしょ。私はレインボーヘブン欠片、紺碧の海。海の近くで内緒話はしない事です。波音は私に、その秘密を余すところなく、伝えてきますからね」

BWは端正な顔立ちを更にひき立てるかのように、鮮やかに微笑んだ。

「ラガー、あなたの優秀な頭の中に、どんな壮大な計画があるのかは想像もできませんが、何を血迷って、この国で騒ぎを起こそうとしているんです？」

「ふん、青二才が偉そうに……、この国の豊かさの下で、苦しんでいる下層階級の住民たちの暮らしを見たか？こき使われるだけ使われて、利益は金持ちばかりに還元されて。まるで、ガルフ島での俺たちと同じだ。こんな道理に合わない仕組みには、俺は我慢がならないんだよっ！」

ラガーは吐き出すように、そう言った後、訝しげにBWの顔を見た。

「……で、お前、どこまで知ってやがる？」

「あなたが、この国で計画しているクーデター。その為にエターナル城の下に掘っているトンネル……等などですかね」

ちっ、何もかもお見通ししてわけか？だが、BW……こいつがレインボーヘブンの欠片？

確かにサライ村の住民は幾度となく、この男に助けられたが、未だに敵か味方か、判断ができねえ。……だが、仮にもあの警護隊長の参謀だった男だ。それに、俺たちが、このまま闇雲に事を起こしても失敗するのは目にみえている。

「……わかった。そこまで知られているのなら、戦力面はBW、お前に任せる。ただし、ゴットフリーには一言も漏らさねえと約束しろ。もし、そんな事をしやがったら、

「そんな事をしたら、どうなるんでしょう？」

BWの余裕たっぷりの笑顔にラガーはぐっと息を飲み込んだ。BWを脅すネタが少しも浮かばない。

「……お前の脳天に電極突っ込んで、海の中で感電させてやる！」

「ふっ、感電ですか、了解しました。なかなか面白い趣向ですね。じゃ、さっそく聞かせてもらいましょうか？……あなたが思い描いているグランパス王国への“クーデター”のシナリオを」

舌戦では、どうあがいてもBWには勝てそうになかった。ラガーは、無駄な努力はやめたとばかりに自分の計画について、話し出した。

Chapter 6 王宮武芸大会

年に一度、建国記念の祝祭日のみ、民間人に開かれるエターナル城の城門。それが、王宮武芸大会。

この日、グラン・パールには、島内外から力自慢の豪傑たちがぞくぞくと、集まってきていた。

「見物人の頭ばつかしで、城門がどこにあるか見えないぞ」

ジャンは、タルクの腕につかまりぴょん、ぴょん背伸びをして、前方をうかがう。

「グラディウス、スコープオン、バトル・アックス、なかなか賑やかな顔ぶれじゃないか」

反対にタルクは見物人の頭の上から、悠々と参加者を見渡して言う。

「ちえっ、でかい奴はこーいう時にいいよな。でも、グラディ……とかって、何なんだよ」

「グラディウスは剣、スコープオンは長槍、バトル・アックスは斧だ。どれもこれも使いこなせば、相当な殺傷力をもつ武器ばかりだ。どうするタルク？ お前、勝つ自信はあるのか？」

珍しく快活にゴットフリーが笑う。

人出が多いのは好きではないが、これだけの数の豪傑と武器を目の当たりにしては心が踊らぬはずがない。武芸大会に参加する気などさらさらないが、彼も並々ならぬ剣豪の一人なのだから。

「参加者の登録を打ちきるぞ！ 希望者はさっさと済ませて城門に入れ。見物人の入口はここじゃない。別門にまわれ！」

王宮の衛兵が大声で叫ぶ。

「待て、待て！ 俺も参加者だ。登録してくれ」

人垣をなぎ払いながら、進み出たタルクの風貌に感嘆の声があげ

る。

「すげえ大男が来たぞ。それにあの長剣の長さを見ろよ！」

だが、その背の後ろに隠されていたミツシェの姿が現われた途端、人々の声はため息に変わった。

きらめく白銀の髪、透き通った玉の肌、吸い込まれそうに済みきった青の瞳。

「ありゃ、何者だ……地上に天使が舞い降りたみたいじゃないか」

「スウォード・リリーも綺麗だけど、桁が違う。神々しいっていうのか……あの娘は」

そして、ミツシェの後ろにはジャンが。

“ちえつ、僕には目もくれないのかよ”

奥底に壮大な力を秘めているとはいえ、見かけだけでは、ジャンはただの少年にすぎない。

つまらないぞ。と、後続のゴットフリーに声をかけようとして、ジャンは思わず苦笑した。

黒装束に黒い帽子を目深にかぶった姿は、ある意味、タルクやミツシェより存在感を示していた。空気の色が違う……彼が通る道を、人々は無意識のうちに開けてしまう。知らず知らずのうちに感じ取る畏怖の思い。頭を垂れよと命令しているかのように上からのしかかってくる重力。

「と、登録用紙は？」

衛兵は目立ち過ぎる一行に、かなりたじろいで言う。

「登録用紙い？そんなまどろこしい物があるのか」

「事前に配布があっただろう！用紙がないと、城門の中へは入れな

いぞ」

その時だった。

「これ、忘れもん！」

ひゅっと、音をたてて城門に一本の矢が突き刺さる。それにくりつけられたタルクたちの登録用紙を手にとって、衛兵はむつりと射手をにらみつけた。

「ラピス！お前の弓の腕前はよく知ってる。でも、城門に穴をあけるなっ。登録用紙は手で持って来いっ！」

「人が多すぎて、そんな所までたどり着けるか！俺はこれから仕事なの。武芸大会の真似をして決闘する馬鹿がいるからな。そいつらを見ろってさ」

がんばれよ！とラピスはタルクに手を振ると、あちらこちらからかけられる声（主に女の子）に愛想を振りながら、人ごみの中に消えていった。

「あいつ、本当に見えてないのか？信じられんな」

「でも、この島では顔が広そうだね。それに、けっこう女の子には人気がありそうだ」

ジャンがタルクに笑いかける。

「あのツンツン立たせた金髪がいいのか？それとも、わざとらしく破ったGパンが今風だっていいたいのか？盛場の兄ちゃんって感じじゃねえか」

と、タルクは不満顔だ。

「おい、さっさと行かないかっ。城門を閉じるぞ！」

最後に城門に入って来たゴットフリーを急かせて、彼と目をあわせた衛兵は、一瞬、びくりと身をすくめた。目深にかぶった帽子から垣間見える灰色の瞳。心の底まで見透かされているような鋭い眼光。

「城門を閉じるんじゃないかったのか。人を急かしておいて、動作のろい奴だ」

な、なにをっ！偉そうに。

衛兵はそう思いながらも、ゴットフリーに命じられたかのように、そそくさと城門を閉めはじめた。とても、言い返す事はできなかった。ゴットフリーが怖かった。

城門は閉められた。

王宮武芸大会 開催！

* * *

— グランパス王国に咲き誇る花、グラジア・リリース・グランパス

スウオード・リリース
“剣百合”の名にかけて

集えよ、勇敢なる戦士

永遠なる居城エターナルにその勇士を刻めよ。—

王宮の中庭に作られた競技場に軍楽隊の荘厳な合唱が響き渡る。会場の真上に特設されたバルコニーに現われるグランパス王と妃。そして、同時に王宮の扉が開き、近衛兵に守られながら、一頭の馬が登場する。

金糸と銀糸で縁取られた鞍に跨っているのは、銀の鎖帷子—シルバメールに身をかためたグランパス王国の第一王女、“グラジア・リリース・グランパス”だった。

年齢16。腰まで伸びた金の髪を、三編みに束ねている。きりりとした眉と紫暗の瞳は王族の気位の高さを見せつけているようでもあ

ったが、薔薇色に染まった頬にはまだ、少女のあどけなさが残っていた。

「スウォード・リリー!!」

どっと沸き立った観客からの声が会場に響き渡る。その声に答えるかのように王女は携えた剣を鞘から引きぬき、空高く掲げ上げる。王女を迎えるため、競技場の中央に左右の列に分かれ、膝まづく参加者と随行者の中にタルク、ミッシェ、ジャン、ゴットフリーがいた。

「スウォード・リリーって、誰だ？あの派手な馬に乗った女のことか？」

ジャンが声をあげると、前にいた参加者らしい男がしっと、それを諷めた。

「あの方は、この国の王女だ。だから、“女”よばわりはやめろ。人柄、容姿ともに素晴らしい方だが、ああ見えても、剣の腕は、近衛隊の上層部の者と匹敵する。だから、国民は彼女の事を尊敬の念をこめて、こう呼ぶんだ。“スウォード・リリー（剣百合）と”

王女リリーは馬を歩かせ、品を定めるように、武芸大会の参加者を馬上から見下ろす。

どれもこれも、毎年変わり映えもしない、がさつそうな男ばかり……武芸大会にもそろそろ飽きてきたわね

口元からでそうな欠伸をどうにかこらえる。だが、目立ちすぎる一行を前にした瞬間、リリーの眠気は一気に消えうせた。

「お前たち、どこから来たの？」

馬上からいきなり声をかけられたタルクは、かなり緊張した面持ちで頭を垂れた。

「ガ、ガ、ガルフ島でございます」

「ガルフ島？聞いたことないわね」

「このグラン・パールよりはるか西の孤島ですわ。私たちは、島主のご子息の見聞の為、各島々を漫遊しております」

がちがちに固まったタルクをかばうように後に追いやって、ミッシェが香るような笑顔で微笑む。

畜生！あの大入道。あんな別嬪に守られやがって。

まわりにいた荒くれの参加者たちは、ミッシェに触れられたタルクの腕にさえ嫉妬する。そんな雰囲気を感じとってか、リリーはむっと声を落として言った。

「お前、名は？」

「私の後ろに控えておりますのが、護衛官のタルク。そして、その後が島主のご子息、ジャン・アスラン様」

ミッシェの言葉に、ジャンは、何で僕が！と、とび色の目を見開いた。“ご子息はお前だろっ！”と、後ろを振り向いたジャンは、にやりとほくそえむゴットフリーを見るなり、ちえっと舌を鳴らした。

“詐欺師め……こいつ、何か悪巧みをしてやがるな”

気持ちの上で、シンクロ（同調）することが多々あるのだ。ジャンとゴットフリーは。

「違う。聞いているのは、お前の名よ！」

いらつく様子でリリーがミッシェを指差す。今まで、剣百合——スウォード・リリーと崇められていた自分を押し付け、男たちの羨望の目を浴びるミッシェが気に入らなくてたまらない。

「しがない召使でございます。私の名など王女様にお伝えするほど

の価値もございません」

言葉と裏腹に、ミッシェは王女を哀れむかのような声音を出す。そして、笑う。

「何て無礼な奴！私の質問に答える必要がないとでも言うの！」

リリーは馬から飛び下りると、つかつかとミッシェに元に歩み寄ってきた。

「王女を侮辱して、ただで済むと思うの？お前、見たところ少しも隙がない。何か武芸をたしなむのでしょうか？ならば、私と勝負しなさいっ！」

“おい、おい、どうするんだよ。ミッシェの奴、王女に喧嘩、売りやがった”

タルクは正面に立ちはだかるリリーの方を向いたまま、後に手をやり、ジャンをつつく。

「おもしろいから、やらせておけよ」

小声で囁いたジャンの言葉は、残念ながら、タルクの予想通りだった。

黒馬島でミッシェはジャンの力が暴走するのを、制御したんだ。へたをすれば、ジャンよりもべらぼうな力を持っているんじゃないのか？これは、ヤバいぞ。

タルクはあせった様子で、すぐるように、ゴットフリーの方を見る。しかし、

「残念ながら、私は武芸はたしなみません。でも、もう一人の護衛官なら王女様のお相手にちょうどいいかと……」

ミッシェの青い目が、ゴットフリーを見据えている。それに、導かれるように黒装束の男に目をやり、リリーは一瞬、とまどいを見せた。目深にかぶった帽子のせいで、その表情は見てとれないが、

他とは明らかに違う研ぎ澄まされた空気をまとっている。

それでも、勝気な王女は声を荒げて宣言した。

「おもしろい。でも、私とその男に勝ったなら、お前には、地面に土下座して非礼を謝ってもらう。覚悟していなさいっ！」

おおーっと、雄叫びが上がる中、黒い影が静かに腰をあげた。

「ゴットフリー、本気か？ た、頼むから王女を殺さないでくれよ」
あせって袖を引っ張るタルクの腕を、軽く振り解いて、ゴットフリーは笑う。

「さあ、興が乗れば、それもおもしろいかもな」

「おいっ、王族なんか殺したら、末代まで崇られるぞー」

タルクを完全に無視して、ゴットフリーは王宮の庭に特設された格闘場に進み出た。すでに王女は剣を身構え、戦闘の準備を終えている。

スウオード・リリー（剣百合）、その花言葉は“密会”そして、

“武装完了”

Chapter 7

特設された王宮のバルコニーでは、リリーの父、グランパス王が、苦々しげにその様子を眺めていた。

「また、リリーが戦闘か。あれは王女のくせに、血の気が多くていかん」

「まあ、陛下、最近の王宮武芸大会は多少、マンネリ気味。余興にはちょうどよろしいですわ。それによもや、外海の田舎剣士にスウオード・リリーが負けるはずもございません」

前菜にあの男を血祭りにするっていうのはどう？リリーの奴、そこまでやる勇気があるかしら……。

小太りのグランパス王に、紅銀のドレスに身を包んだ妃がしなだれかかる。

「それより、晩餐会につける宝石の事なのですが、とても良い瑪瑙を見つけましたの」

「ああ、欲しい物があれば、何でも買うがいい。グラン・パープルは栄えている。金は税金が山のように入ってくる。宝石くらい痛くも痒くもないわ」

だるそうなグランパス王の返事に、妃の真っ赤な唇がほくそえむ。妃といっても、この毒々しい化粧の女はリリーの母親ではない。リリーの母は、数年前に病気で亡くなった。その直後、不自然なほど早く王妃の椅子に収まったのが、今の妃だった。

王はもう、私の手の中。ランカを横流しにしたエターナルポイズンのあがりも、入ってくる。もっと、もっと税率をあげてやろう。民が苦しむ？かまうものか。グラン・パープルの富は全て私の物な

のだから。

銀色に染めた長い小指の爪先を、ぺろりとなめると、王妃はリリーが、相手の男に剣を突き刺す瞬間を見逃すまいと、バルコニーから身を乗り出した。

＊ ＊

銅鑼を打ち鳴らすかのような人々の歓声。だが、その99%はスウォード・リリーへの激励の声だ。

「やな感じだな。完全にアウェイだし。ゴットフリーを応援する奴なんて誰もいないじゃん」

不満げにつぶやくジャン。だが、

「心配しなくても、直に静かになる」

タルクはきっぱりと、そう言いきった。

「王女の御前だというのに帽子を脱がないつもり？」

「気にするな。頭の一部と思えばいい」

王女はゴットフリーのそっけない答えに皮肉っぽく笑う。

「禿げた頭でも隠しているの？ 見た目と違って、随分なさけない男ね」

観客がどっと笑い声をあげる。だが、

引きぬいた剣を斜めに構えてから、リリーはむっと表情を曇らせた。

「お前っ、何で剣を抜かないの!？」

ゴットフリーは相変わらず目深に帽子をかぶったまま、身構えるそぶりもみせない。

「なかなかおもしろい武器を持っているな。マンプル……攻撃力は絶大だが、男でも使いこなすのは難しい剣だ。お前にそれが扱える

のか？」

リリーが携えた剣には3つの刀身があった。中心になる長刀の左右にそれぞれ短刀が、1本づつ付いている。ちょうど、フォークのような形だ。しかも鞘と刃の境目にも小さい鉤爪がある。

「いちいち五月蠅いわね。それは、勝負をすればわかる事！」

「そんなに、始めたいなら、遠慮せずに斬ってこい」

「どこまで私を馬鹿にする！ならば、遠慮なく串刺しにしてやるわ！」

リリーの腰まで垂らした三編みの髪が風にひるがえった。手にした剣を目線の位置で水平に切り込む。

「待ってましたあ！」と感嘆の声。グラン・パールのほとんどの住民はリリーの剣の腕をよく知っていた。かろやかな身の動きと形の美しさには目のみはるものがあつた。

それは、剣技というよりまるで、舞踏。ため息が出るほど優雅ではあるが、その剣の切先は鋭く相手の急所を突いてくる。それに加えマンプルという変わった剣を使う王女……その派手な特異さは人々の心を魅了するに十分だった。

だが、優雅な剣の舞に開始早々、幕を引く者。そんな男が現れるなんて……。

ゴットフリー。

彼は、一刀必殺のリリーの剣を首を傾かせただけで、こともなげにかわしてしまったのだ。

な、何で？こんな男に私の剣がかわされるなんて！

信じられない面持ちでさらに突く。だが、またかわされる。

「あの難しい剣を使うだけでも、王女の腕はたいしたもんだ。動きだって伊達じゃない。けれど、マンプルは3本の刃と鉤爪をすべて使えて使いこなしたといえるんだ。こういう1対1の武芸大会なら通用しても、あの様子じゃ本当の戦闘には役立たない」

タルクが得意げにジャンに解説する。

「でも、つまんないな。ゴットフリーは剣を使わない気なのか？まさか、殴ってやろうとか、思ってるんじゃないだろうな。あ……もしかして」

「考えたくはないんだが……」

そりゃ、目立つだろうけど、やっていいのか？

タルクとジャンが目と目を見交わしたその時、

場内の空気が一瞬、暗に染まった。黒い影が通り過ぎた気がした。

一体、何が起こったの？

ぽかんと立ち尽くすリリー、そして、言葉をなくす観客たち。

「お前にはその剣は重過ぎる。お望みならもっと軽くて扱いやすい剣を用意させるが」

そして、長刀をまっぴたつに折られたマンプルが、土の上に転がっていた。

負けた？この私が……。

あせって、声のした後を振り返った。その瞬間、リリーはびくりと体を縮込ませた。

黒刀の剣……いつの間に抜いた！？

ゴットフリーに握られた黒刀の剣は禍々しいまでに研ぎ澄まされた光を放っていた。そして、リリーを見据える灰色の瞳。心の奥底をすべて見透かしているかのような……。

王族の自分が、たかが孤島の護衛官に、なぜ、こんなに震える必要がある？

「王女だろうが、勝負は勝負！斬ればいいでしょう。咎めはしないわ。こんな屈辱に合うのなら、斬られて死んだ方がましよっ！」

先ほどのまでの湧きえるような声援が、今は凍り付いたように静まりかえっていた。

「ほうら、静かになっただろ」
得意げなタルク。

ゴットフリーが使っているのは、黒馬島の神剣“闇馬刀”だ。

あの剣の威力を目の当たりにして、普通に騒げるはずがない。

“闇馬刀”には、鞘がない。なぜなら、その剣はゴットフリーが求めた時のみに姿を現すからだ。強いて言えば、その刀身の中の闇、それが鞘……なのかもしれないが。

だが、タルクの表情は、ジャンの一言で、あっという間に焦りに変わった。

「タルク、大変だ！ゴットフリーの奴、王女を斬りやがった！！」
「何いい！！」

「陛下！王女が！」

地面に崩れ落ちたリリーの姿を見て、バルコニーの王妃が叫んだ。
「なんじゃ？相手を串刺しにでもしたかあ」

グランパス王は、相変わらず、だるそうな眼で玉座にふんぞりかえっている。

「ち、違いますっ。き、斬られました。黒い男に……」

ええっと！この時始めて王は、ぱっちりと目を見開いた。あせった様子でバルコニーに身を乗り出す。

リリーは、地面にひふれすように倒れていた。だが、

「斬って欲しいと言ったからそうしたまでだ。だが、自分の足で立てるだろう？」

ゴットフリーのそっけない言葉に、倒れていた王女が苦しげに顔をあげたのだ。

体の痛みは少しも感じなかった。だが、傷つけられたプライドに心が張り裂けるようで、立ち上がると、リリーは、きつと唇をかみしめゴットフリーを睨めつけた。

その瞬間、王女の黄金の髪がはりとばらけて扇のように広がる。二つに斬られ地面におちたその髪留めを拾い上げると、ゴットフリーは笑った。

「悪かったな。だが、これには王女の紋が入っていたから、お前のかわりに斬らせてもらった」

「な、なぜ私を斬らないのっ！どこまで私を馬鹿にする気！」

「それは……」

「それは、何っ」

「それは、お前が王女だからだ。しかも、国民に愛された……」

ゴットフリーの言葉にリリーは一瞬、絶句する。

「マンプルは、お前には扱えない。だが、ちょうどいい剣をもっている。俺たちの島でも極上の刀匠に打たせたレイピアだ。非礼の詫びに後で届けよう」

「そ、そんな物！」

知らないわ……と、言葉が口から出掛かっているにも関わらず、リリーにはそれが出来なかった。絶対的な力が彼女にのしかかって

いた。逆らう事ができないのだ。

「咎めはしないんだったな。非礼は詫びたし、では、俺はこれで失礼する」

くるりとリリーに背を向け、啞然と見つめる観客たちを尻目にして、ゴットフリーはタルクたちのいる場所へ帰っていった。

Chapter 8

「ゴットフリー、ひやひやさせないでくれー」

タルクは、もどってきたゴットフリーを捕まえて言う。

「何だ、タルク、気の小さい奴だな。そんな事でこれから闘えるのか？王女よりもっと手練れた奴らが列をなしているというのに」

「そういう事じゃなくて、王族相手に無謀すぎるぞ」

二人のやりとりを横で聞いていたジャンが口をはさむ。

「そうだよ。王女の気性がああったから良かったけど、下手すりゃ、僕たち全員、磔の刑だ」

「そこは、そう。いろいろと案は考えてあったのよ」

ジャンの後でミッシェが香るように微笑んだ。

「プラン1、プラン2、プラン3……、まあ、1で上手くいったのは良かったわね」

「おまえら、俺とジャンをはずして、二人してそんな打合せまでしてたのか！」

「あら、ラピスも一緒に考えてくれたのよ。いろいろアドバイスもしてくれて」

「やってらんねー。結局、僕とタルクが除け者だ」

「あなたたちには、余計な事を考えないで、普通に武芸大会に出て欲しかったの」

あ、それと……

ミッシェは、はっと思い出し、手にした白い包みをゴットフリーに差し出した。

「レイピア。船に積んだ武器の中から持ってきたわ。この剣なら軽くて使いやすいし、装飾もお姫様風、持ってゆくんじゃよ」

「ああ。そのまま、俺は帰らない。後はお前たちで上手くやれ」
だが、受け取ったレイピアを携えて、王宮の方へ行こうとするゴットフリーをジャンが止める。

「王宮の地下へ潜入する気だな？ だったら、僕も連れてゆけ！」

しかし、ゴットフリーは首を横に振った。

「だめだ！ お前はここにいろ」

「何で！」

「気がつかないのか？ この王宮の不穏な空気に。王宮武芸大会の猛者どもが放っているんじゃない。もっと、陰気で悪質な何かをお前は感じないのか」

そういわれてみれば……、城門を入った瞬間から胸を押さえつけられるように空気が重い。

「タルクに付いておけ。奴一人では、抱えきれない事態が起こるかもしれない」

ゴットフリーの言葉にジャンは、黙ってうなずいた。

＊ ＊ ＊

エターナル城の西、サライ村の野営地がある海岸。

その砂浜をラピスは悠々とした足取りで歩いていた。肩にはお気に入りの自作の弓を抱えている。

生まれた時から、目が見えなかった。だが、そのことに不便を感じた事はほとんどない。

医者になるために両親を故郷の島に残し、グラン・パープルにやって来た。最初、師匠は、ラピスを弟子にすることを渋った。だが、“見えない症状”まで気づいてしまう、その能力を彼が知るには、そう長く時間はかからなかった。

“この世のすべてが、俺の頭に浮かび上がってくるんだよ”

さすがに、姿、形をあますところなく知る事はできなかった。だが、生命力が強いものほど、おおよその大きさや、位置、行動を知る事がたやすかった。人、動物、植物。建物や橋でさえも、それらを建てたり、使ったりする人々の思いいれ―それが、善意、悪意に関わらず―を感じる事ができれば、ラピスは察知する事ができた。けれども、極まれに、全く知る事のできない物にでくわす事があるのだ。

エターナル城。

何も感じない。近づいて城壁に触れてみても、中身には、虚無の空間があるだけとしか思えない……だが、人はそれを白亜の城と誉めそやす。

あの城には決して入るまい。

ラピスは、そう心に決めていた。

エターナル城が怖かった。

「ラピス、えらくご無沙汰だったじゃないか？もう、計画から抜けたのかと思っていたぜ」

正面から近づいてくる声にラピスは笑顔を作る。この酒とタバコで荒れた声。サライ村のリーダー、ラガーだな。

「仕事が忙しくてさ、この島は医者不足みたいで。あ、それとこの間はお免な。お前が悪いんだぞ、俺の患者を盗むから」

ラガーは多少、むっと眉をしかめたが、敢えて平静をよそつてみせた。

「その話はまた後だ。それより、お前に紹介したい奴がいるんだ」
「紹介？」

「ああ、新しい俺の参謀、BWだ」

「ラピス・ラズリ。ラガーから話は聞きましたよ。医者で超一流の弓使い、しかも盲目とはね」

BWが差し出した手。

ラピスは、ラガーの後ろに感じた気配に向かって“よろしく”と手を差し出そうとした。が……、

お門違いの方向へ手を出すラピス。そして、次の瞬間、顔を強張らせて手を引いてしまった。

「ラピス、お前、どこ向いてる？BWはこっちだぞ」
初めて見る彼のそんな姿にラガーは首を傾げた。

この引力は何だ？大きな波に引き寄せられてるみたいなの……それに、どこが頭で足で手なんだよ？いつもなら、はっきり感じる事ができるのに、こいつ、さっぱり、わけがわからない。

さてよ、BW……って確か

「BW！レインボーヘブンの欠片、海」

「よくご存知で。では、改めて……よろしく願いますね」

今度はラピスは、びっくりするほど、すんなりとBWと握手を交わすことができた。

今はまるで普通の人間だ。この野郎、俺の態度を見て自分の気配を消しやがった。

「あんた、そうとうなくわせ者だな。あの単純明快なジャンとはえらい違いだ」

そういえば、ジャンは触れなければ、力の強さを感じなかった。彼はレインボーヘブンの欠片、大地だというのに。こいつみたいに力を隠しているようにも思えないし……。

「彼にはミッシェがついていますからね」

「俺は何にも言っていないぞ」

「不思議ですね。何となくあなたの考えが私に伝わってきますよ」

「気色悪い奴だなっ」

「あなただって、さっき私の中を覗こうとしたじゃありませんか。お互い様です」

「俺は少なくとも人間だ。お前らと一緒にすんな！」

放っておくと、ラピスとBWの舌戦はどこまでもエスカレートしてゆきそうだ。ラガーは聞いちゃおられんと、口をはさんできた。

「ラピス、弓の稽古をつけてくれるんだろ。例の計画の最終確認も兼ねて、みんなを俺の所へ集めてくれ」

この腐った王国を覆してやる。ガルフ島で出来なかった事を、俺はやるんだ。

これは、王に虐げられてきた、グラン・パープルの住民の挑戦、そして、俺の挑戦でもあるんだ。

ラガーの思いは強かった。

サライ村の野営地にはすでに、30人ほどの人間たちが集まってきた。先日、ラガーの参謀に就任したBWの指示に、彼らは驚くほど早く順応していた。

当初、突然、現れたうさん臭い男のいう事なんて、当てになるかと反抗的だったメンバーも、いざ動いてみると、実に効率がよい。2日とたたないうちにBWに対する不平不満は引き潮のように消え

ていった。

「へえ！随分、以前と空気が違うな。きびきびして、やる気満々って感じじゃん」

ラピスは剣の練習をするかけ声を聞いて、頬を高潮させる。いたい、どんな魔法を使ったんだ？

「これでも、私は、ガルフ島警護隊長の参謀でしたからね。ちょっと、編成を変えてみただけですよ。以前は剣に触れた事もない者が下手な稽古をしていましたから。剣は経験者のみに、あとは、小難しい事は教えずに、基本だけを教えました」

BWが、笑う。

「上段、中段、下段の構え。あとは実践をふまえて、ひたすら地稽古。それだけです。必要なのは」

「でも、剣の経験者以外はとうするんだよ？素手で自分の身を守れってか？」

「武器を扱えない者には3つの秘技を教えました」

「3つの秘技？」

「守る、攻める、そして、逃げる」

「ちっとも秘技じゃないじゃん。そんなんじゃ、武芸大会なんて夢のまた、夢だな。すんなり出場しちまうタルクが羨ましい限りだ」

タルクが武芸大会に？その名を聞いて、BWはふっと皮肉な笑みをこぼした。

なら、見学に行かないとね。今だに、ゴットフリーの忠臣をきどってる、あの男がどれだけ戦えるのか、見てみたいですから。

「……で、俺の弓部隊はどうなった？まさか、解体しちまったんじゃないだろうな」

ラガーが決まり悪そうに口をはさんできた。

「あー、弓部隊はその他のメンバーで構成してあるよ」

「サライ村の奴らか？」

「いや……奴等は、トンネル掘ったり、爆薬をしかけたりで役目があるからな……弓部隊は残りの……」

「わかったぞ！ 剣も使えない、素手でもだめ。落ちこぼれたちを弓部隊に集めやがったな！」

BWがくすくすと笑う。

「そんな事はないですよ。とても優秀です。ただ、平均年齢が少し低くなってしまいました」

「悪い予感がしてきたぞ。まさか……あとのメンバーって？」

「お察しの通り、弓部隊は二人だ。お前と……ココの」

ラガーの言葉にラピスは頭を抱えた。

ココと俺だけ！？ 冗談じゃないよ。

「だって、お前はエターナル城に入るのが嫌なんだろう？ だから、場外から俺たちを援護してくれ。まあ、弓部隊兼連絡係ってところかな」

BWはラガーの台詞に人の悪い笑みを浮かべると、ラピスの肩をぽんとたたいた。

「あれでココはけっこう、戦力になると思いますよ。だから、よろしく指導して下さいね」

Chapter 9

宮中武芸大会の一回戦がまさに、始まろうとしていた。先ほどのスウォード・リリーとゴットフリーの戦いの余韻はすでない。ただ、当の王女、リリーの姿はバルコニー席に見ることはできなかった。

「ゴットフリーに負けた事がよほど、悔しかったんだろうな。王女にもちよつとぐらい、花を持たせてやれば良かったのに、容赦ないもんなあ」

「殺されなかっただけ、まし」

「ミツシエ、お前の台詞も容赦ないな」

ジャンは、涼しげに微笑むミツシエを見て苦笑する。

「それより一回戦の一番目って、タルクの奴、くじ運がいいのか、それとも悪いのか？」

一回戦の対戦者の名が高らかに呼び上げられた。

“長剣のタルク VS ヴァンパイア・ウーマン ケイティ！”

女か？……ヴァンパイア・ウーマン？牙でもはえてるんかい。

ぬつと立ちあがったタルクは、背から2メートルもあるうかと思われる長剣を、軽々と引きぬく。長さだけでなく、刀幅も普通の剣よりはるかに広い。

反対側から現われた対戦相手。女にしては、筋肉質だが、背まで伸びた黒の巻毛、額あての下から、タルクを見据える鋭い瞳は、なかなか野性的な美しさを持っていた。

それにもまして、観客を沸き立たせたのは、胸、腕、膝と断片的に付けられた防具から見え隠れする浅黒い肌が、視覚的にはかなり

セクシーなのだ。

ああいう類は苦手なんだが……勝負はゆずれん。ちょっと、脅してやるか。

と、挑発するかのように、タルクは大袈裟な素振りです長剣の切先を相手の視線に合わせてみせた。

いいぞっ！と、どっと観客の声。

だが、その瞬間、

ヒュッ！

風が唸りをあげた。

「無駄に大きな剣を振りまわすのは、力を誇示したいが為？独活の大木さん」

ヴァンパイア・ウーマン ケイティの鉄鞭が大きくしなって、弧を描く！鋼鉄の柄から伸びた鎖を連ねた鞭先。それが、触手のように、タルクに向かって空を這う。

この女、鞭使いか。

「誰が独活の大木だ！一刀両断にしてやるっ！」

上段に構えると、タルクは長剣を一気に振りおろした。

だが、

ガシャリと鈍い金属音

「あっ、畜生っ！」

長剣の刀身に何重にも絡みつく鉄鞭の鎖が、タルクの動きを封じこめた。

「まるで猛獣使いみたいだ！」

予想外に強いケイティの力に、観客は戦況を見極めようと総立ちになった。

長剣を握り締めたタルクと、鉄鞭で長剣をとらえたケイティの力が均衡する。

「ヤバいぞ！長剣を封じられた」

ジャンは、そう言いながらもなぜか笑顔だ。

「大丈夫、力でタルクに勝てるわけがない」

ミッシェが涼しげに言い放つ。それを証明するかのように、タルクが雄叫びをあげた。

「しゃらくせえっ！」

長剣の柄を強く握り締め、そのまま、ぐいっと空に掲げあげる。長剣に絡まった鞭先がびんと長く伸び、すると、ケイティの体は風のように空に浮いた。

「その鉄鞭ごと、地面にたたきつけてやるっ！」

右手で長剣の柄を握り締めたまま、タルクはもう一方の手を鞭先に伸ばした。その手で鞭先を引き付けて、ケイティを地面にたたきつけようというのだ。

「甘い。血を見るのは、あんたの方よ！」

ケイティの体が加速を増して、落ちてくる！……が、空中で鉄鞭を巻き取りながら、落下地点を巧みに操作した。タルクの顔面めがけて膝を突き出す。その瞬間、彼女の膝当てから鋭い刃物の切先が飛び出した。

「危ない、避けるっ、タルクっ！」

鮮血が飛び散った。ジャンが叫びが終わらないうちに。

＊ ＊

鏡の中の少女―グラジア・リリース・グランパス―

黄金の髪に紫暗の瞳。燐とした美しさと強さを兼ねそえた王女、グランパス王国の華。

だが、自室の大鏡の前で王女リリーは恨むような眼差しで、鏡の

中の自分を見つめていた。

スウォード・リリーは完全な国民のヒロイン。

それなのに、あの失態は何?!

マンプル……お父様からいただいた宝剣。お父様を私の元にひきつけておけるだけの価値をもった剣

負けたくなかった……

どうしようもない悔しさに、リリーは大鏡を割ってしまいたい衝動にかられた。と、その時、扉をたたく音がした。

「何? 今、忙しいんだけど!」

扉を開かず、問いかける。

「男が城門で……どうしても殿下にお会いしたいと、引きません」
多少、うわずった衛兵の声

「男? 名前は?」

「ガルフ島の護衛官とだけ……」

ガルフ島? ……まさか、あの黒装束の男?

「殿下に直接会って、約束の剣を献上するのだと申しておりますが……」

剣? レイピアの事か……。だが、リリーは強い調子で拒絶した。

「そんな約束をした覚えはないっ。門前払いにして、追い返して。しつこいなら牢に放りこんでもかまわない」

「それが、あの……」

それが、できないから、ここに来てるんじゃないか。

「いえ、待つて」

リリーは鏡の中の自分をきりと見つめなおす。なぜ、あんな男を怖れる必要がある?

「下の部屋に通しておきなさい。そうね……1階の礼拝堂へ。あそこなら不測の事態が起っても、誰にも知られず始末もできるし」

「お会いになるんですか？」

「会います」

あの男、只者ではなかった。牢に放りこむのは、もう一度、この目であの男の器量をはかってみてからも遅くない。

＊ ＊

延々と続く王宮のコリドー。両壁に掘りこまれた彫刻の文様はどれ一つとして同じ形はない。等間隔に天井に備えつけられたシャンデリアは、最高級のガラス職人の作であり、煌びやかに王宮を照らしだしていた。

衛兵に導かれて、コリドーを歩きながらゴットフリーは皮肉な笑顔を浮べる。

たかが、廊下にこの贅沢さか。馬鹿げた趣味だな。

そして、壁に飾られた王族たちの肖像画。かなりスリムに修正された王、着飾った王女リリー。だが、それらのよく有りがちな肖像画の横に、否応なしに目に飛び込んでくる違和感たっぷりの王妃の絵姿を見つけた時、ゴットフリーは強く眉をしかめた。

この王妃の肖像……何か変だ。目の光りがやけに生々しい。そう……まるで、獲物を目にした爬虫類の目。

肖像画家は一体どういうつもりで、これを描いたんだ？

悪寒が走る……こんな絵を。

＊ ＊

「ここで、待っている」

肖像画があった壁の前を通り過ぎると、一際大きな扉のついた礼拝堂が見えてきた。

扉を開くと、衛兵は押しこむようにゴットフリーをその中に追いやった。いつ後ろから切り刻まれはしないかと生きた心地がしなかった。やっと呪縛から解き放たれた思いで、衛兵はほっと息を吐いた。

礼拝堂か。それにしても、これは……

今しがた通ってきた豪華な回廊とは、うって変わって荒れ果てた祭壇。窓のステンドグラスは何箇所にもひびが入り、長椅子の背もたれには蜘蛛の巣がかかっている。

使われたのは何年も前の事か。しかし、この豪華な城になぜ、こんな荒れた部屋があるんだ？

ゴットフリーは辺りを見渡し、ふと祭壇の横にあるグランドピアノに目をやった。

ピアノの上に剥き出しのまま放置されたヴァイオリン。白い埃にまみれていたが、弦はゆるんではないようだった。

ヴァイオリン……。

思わずつぶやいたその時だった。

祭壇の下階段が、がたがたと揺れ動いたのだ。

「誰だっ！！」

持ってきたレイピアを鞘から引きぬき身構える。

一瞬の間で、祭壇の階段の板塀が落とし戸となって開き、そこから覗いた少女の顔。ゴットフリーは飽きたように剣を鞘に収めこう言った。

「また、お前か……」

ゴキブリ娘。

「ゴットフリー！何でこんな所にいるのよっ！？さては、あんたも王宮の地下を探りに来たってわけ？」

「あんたも……か。俺をあんたと呼べる度胸があるのはお前くらいなものだ……で、どこからそこへ入った？」

「ふん、忍びこむのはお手のもの。武芸大会の見物客にまぎれて城内に入ったの。あとは、厨房から出し入れされるワゴンに乗ってここまで来たってわけ」

「なぜ、この礼拝堂に目をつけた」

「勘！一番大きな扉の部屋だし、いかにも怪しい感じだもん」

「無謀な奴だ。衛兵につかまりでもしたら、牢にぶちこまれるぞ」

「サライ村のココにかかったちゃ、こんな王宮の衛兵の目なんてザルに砂を通すようなもん。ガルフ島警護隊の宿営地に入りこむ方が、よっぽど大変だったよ」

そのガルフ島警護隊長を目の前に、ココは悪びれもせず言う。

「なるほどな。タルクがお前に手を焼いたのが、今になってよく分かる」

何が難航不落の王宮だ。こんな小娘に簡単に忍び込まれるとは……

……。苦い笑いを浮かびかけたが、ゴットフリーはすぐに刺すような眼差しでココを睨めつけた。

「それで、その祭壇の下が王宮の迷路に繋がっているというわけか」

Chapter 10

「それで、その祭壇の下が王宮の迷路に繋がっているというわけか」
真っ向から視線を合わせられると、さすがにキツイ。ココは思わず、階段から出した体を奥へひっこめた。

「待て！王宮の迷路はお前一人で攻略できるほど、甘くはないぞ」
ゴットフリーは階段の下を覗き込むと、彼には珍しく大声でココを呼んだ。

「大丈夫！迷路の入口を確かめるだけ。ちょっと見てきたら、すぐ戻ってくる」

「無茶はするなっ、戻ってこいっ！！」

その時、礼拝堂の大扉の向かうから複数の足音が響いてきた。
まずい。スウォード・リリーのお出ましか？！ボタンと一旦開いた板塀を閉めるゴットフリー。だが、

「あーっ、そこ閉めないでよっ！中が暗くなるじゃない。ゴットフリーー！！」

ココは叫ぶ事を止めようとしめない。

あの馬鹿娘っ！

礼拝堂の大扉が開く直前、ゴットフリーは苦い表情でグランドピアノの上のヴァイオリンに手を伸ばした。

＊ ＊

「護衛など、いらないうっててるでしょ。心配なら扉の外で待っていれば。礼拝堂の中には入るのは私一人で十分！」

強い調子で護衛官をとまなうことを拒絶した後、リリーははっと、

礼拝堂の中から聞える音色に耳を傾けた。

ヴァイオリン……？

王宮付きの楽団奏者並みに上手い。まさか、あの男が弾いているの？

そして、大きく礼拝堂の扉を開け放った。

ステンドグラスのひび割れから、薄暗い礼拝堂の祭壇に刺しこむ一条の光。その光の間を縫うように流れてくるヴァイオリンの旋律。奏者は黒装束に身を包み、静かに弓を動かしている。

美しく柔らかい……でも、切なくて……胸の奥が締めつけられる。哀しい曲……。

一瞬、囚われそうになった心を無理にひきもどし、リリーはわざと冷淡に言った。

「私はここで、待てと命令したはず。演奏会を開けと言った覚えはないわ」

ゴットフリーは、弓をもつ手を止めると、その灰色の瞳をそっと祭壇の下へ向けた。

やっと、静かになったか。しかし、あの娘、一人で迷宮に入ったんじゃないだろうな。

気にはなったが、今の相手は目前にいるスウォード・リリーだ。「待つのに退屈して、思わず手にとってしまった。以前は暇つぶしによく弾いていたものだから」

「今の曲は、ずいぶん寂しい曲ね。どうせなら、もっと華やかな演

奏を聞いたかったわ」

「それはそうだろう。あれは葬送曲だ。俺の島……ガルフ島が出る時に最後に聞いた別れの曲だ」

「ガルフ島？たしかグラン・パールの西にある孤島とか言っていたわね」

「そう、崩壊して、海に沈んだ俺の故郷だ」
「えっ？」

崩壊して海に沈んだ？こいつらは島主の息子の見聞を広げるために漫遊してると言っていたのに。

一瞬、沈黙し、手にしたヴァイオリンをピアノの上にもどすと、ゴットフリーは、祭壇においておいた豪華な鞆に収められた1本の剣をリリーの前に差し出した。

「ガルフ島警護隊長、ゴットフリー・フェルト。王女グラジア・リリース・グランパスに我が島、ガルフ島の宝剣、レイピアを献上させていただく」

栄えたグラン・パールでも見たことのない程、繊細な造りのレイピアを真近にして、リリーは一瞬、頬を高潮させた。しかし、
「お前、それが王女に物を献上する者の態度？帽子を脱いで頭を垂れなさい。無礼にもほどがある！」

目深にかぶった帽子の下で、灰色の瞳がにやりとほくそえんだ。
無言で静かに帽子に手をかける。

陽光がステンドグラスの隙間から、一筋、ゴットフリーの体を照らし出していた。

え？髪の色が……変わった……

黒から燃えるような、紅に！

何という深遠な至極の紅。そして、心を見透かしているような灰色の瞳。

思わず膝を折り、頭を垂れなくなる衝動を、リリーはやつと思いで自分の中に押さえ込んだ。

リリー、一体、何をするつもり?! 王族はあなたの方! こんな男に平伏しようとするなんて。

「お前の本当の目的は何? 解っているのよ。レイピアを献上したいなんて、この王宮に入り込みたい為の口実だって事くらい」

「ほう、剣の腕だけではなく、頭もそこそこ切れるらしいな」

ゴットフリーは多少、皮肉まじりに言った。

「それでは隠していても仕方ないか……実は、この王宮の地下、水晶の棺の中で眠っているという“レインボーヘブンの欠片”に用がある」

「“レインボーヘブンの欠片”? ああ、あの伝説の。あなた、そんな事を信じてわざわざ、ここまで来たの」

飽きた様子のリリー。その口ぶりでは彼女は“レインボーヘブンの欠片”については、さほど知識がないように思われた。

「そんな物は単なる噂にすぎないわ。王女の私が言うのだから確かな事よ。でも……」

リリーはちらりと、ゴットフリーを垣間見ると、くすと微かにほくそえんだ。

「どうしても、“レインボーヘブンの欠片”を探したいと言うのなら、好きに王宮の地下を探してもいいわ。私が許可します」

「どういう風の吹き回しだ? そんなにあっさりと、侵入者を受け入れていいのか」

「正直いって、あのヴァイオリンの音色はなかなか良かったわ。そ

の返礼とでも言っておきましょうか。でも、王宮の地下は一度入ると右も左も分からなくなる、永遠の迷宮——エターナルラビリンス。仮に“レインボーヘブンの欠片”をあなたが見つけたとしても、生きてもどって来れるかしら？」

「生きて戻ろうが、迷いながら死んでゆこうが、たかが、孤島の警護官一人、お前の知った事ではないだろう？」

そっけないゴットフリーの答えに、リリーは多少、むっと頬をふくります。

「わかったわ。王宮の地下へ続く階段は、礼拝堂の中にある。まずはそれを見つける事ね。明日の夜明けまではここには手を出さないわ。“レインボーヘブンの欠片”を見つけて盗み出したって、それは自由。でも、それを過ぎた後の事は保障しませんからね。衛兵に命じて、迷路の出入口を封じてしまっても恨まないでね」

「迷路の出入口か……おもしろい。明日の夜明けまでだな」

「ええ、せいぜい、がんばることね」

リリーは高らかに笑い声をあげると、くるりとゴットフリーに背を向けた。

礼拝堂の扉を開けてから、ふと気づいたようにリリーは言った。

「もし、無事にもどって来れたなら、私は喜んでそのレイピアを受け取りましょう。ただし……もどってこれたらの話だけれど」

＊ ＊ ＊

王宮武芸大会

顔面に飛び散った鮮血をぬぐう間もなく、タルクは大急ぎで身を伏せた。ケイティのまわし蹴りが肩口を掠め、また、新たな傷をタルクに作る。

先ほどは膝、そして、今はつま先からも、鋭い刃が飛び出している。

「ククッ、このざっくり肉が裂ける感触がたまらないのよね」
ケイティの引きつった笑いに、場内は騒然となった。

「あいつ、全部の防具に刃を仕込んでやがる」

幸い、目をつぶされはしなかったが、額と肩にかなり深い傷をつけられた。長剣はケイティの鉄鞭がからみつき、使い物になりそうもない。タルクは憎憎しげに目の敵を睨めつけた。

“ヴァンパイア・ウーマン”

鞭使いなんかじゃない。

やっとその名の由来がわかってきた。結局、どの戦いでも、相手を切り刻んで血祭りにあげているんだろ？

「スピード勝負じゃ、タルクは相当分が悪い。でも、あのまま切り刻まれ続けるなんて見ちゃいけない」

でも、手なんか出したら、後でタルクにぶん殴られそうだ。

ジャンは不安げに、ミッシェに目をやる。だが、

「避けようと思うから、勝負が長引く。タルクだって分かっているはず」

ミッシェは戸惑う様子もない。

「今度はどこを狙って欲しい？ 喉？ それとも心臓？」

ケイティは、観客にアピールするように腰に手をあてポーズを決める。そして、防具に仕込んだ刃の封印をすべて解き放った。

指、手の甲、肘、膝、踵、そしてつま先。

おい、危険すぎるだろう？あれで飛び掛りでもされちゃ、ひとたりもないじゃないか。

タルクの額に汗が流れた。

「俺は痛いのは苦手なんだ」

閉口したようにケイティに向かって言う。

「なら、もう終りにしてあげる。ただし、相当痛い思いはするわよっ」

「じゃあっ！」

万遍の不気味な笑いを浮かべながら、ケイティが地を蹴った。鉄の刃をタルクに向けて飛びかかるその姿は、ハゲタカが獲物を狙って下りてくるのに少し似ていた。

「でもな。攻撃を避けるのは、もっと苦手なんだよっ！！」

タルクは突然、下りてくるケイティの右足に太い腕を伸ばした。刃があるうとなかろうと、関係あるもんか。手が傷つくのもかまわず、彼女の足をむずと握り締める。

「えっ?!」

「結末は俺がつけてやるぜ！ヴァンパイア・ウーマン！」

タルクの手からほとばしった鮮血が空中に帯を描いた。その軌道をなぞるように、タルクに掴まれたままのケイティの体が弧を描く。

轟く大響音。

次の瞬間、

勝負は終わった。

そして、競技場の地面に思いきり叩きつけられ、気絶しているヴ

アンパイア・ウーマン——その体を救護班の担架がそそくさと運びだしていった。

Chapter 11

「大入道！よくやったっ！」

観客が沸きかえってタルクの元に集まってくる。血だらけの肩や腕を遠慮なしにばんばんと叩く奴もいる。

「畜生！痛えんだ。触るなっ！」

「タルクっ、大丈夫か？！」

邪魔なやじ馬たちを、ひきはがしながら、ジャンもタルクに駆けよってきた。

「何が武芸大会だ、後味悪いったらないぞ。あんなのは、ただ下司な見世物だ。俺はもつとまともな勝負がしたいんだ。」

その時、護衛官の一人がタルクに歩み寄ってきた。

「おい、お前、王妃が呼びだ。すぐにバルコニーの下まで来い」
「俺？」

「先ほどの勝負に甚く感銘されたそうで、褒美を授けたいそうだ」

「そりゃ、有り難いが、ちょっと待ってくれよ。こんな血まみれの姿じゃ失礼だろうが」

「王妃は今すぐと言っておられる」

有無をいわさぬ護衛官の態度に、タルクはため息をつく。しょうがないとばかりにミッシェからタオルを受け取り、額の血をぬぐうと、肩口の傷にそれをぐるぐると巻きつけた。

傷の手当てもさせてくれないのかよ。とんでもない人でなしばかりか？ここの王族は。

「タルク、いいのか？」

不安そうなジャンにタルクは軽く手をあげる。

「ちよっと、行ってくる。下手に断ったりしたら、またややこしい

事になりそうだ」

＊ ＊

「あなた、素晴らしかったわ」

王宮のバルコニーから、タルクを身を乗り出した王妃が猫なで声で話しかけてくる。

主人公が違っていれば、ロミオとジュリエットを思い起こすようなシーンなのだが……

げ、えらくケバイ女だな。

タルクは、心と裏腹に真摯な態度で頭を垂れる。

「お褒めにあずかり光栄でございます」

王妃はタルクの血の滲んだ額を見て、かるく舌なめずりをした。そして、右手をバルコニーから差し出すと、その紫に染めた指先をタルクに向ける。

「これは、あなたの勇士に授ける私からの心ばかりの品よ。受けとるがいいわ」

王妃の指からぽとりと落とされた品を、タルクはあわてて受けとめる。

指輪か……

中央に陣取ったルビー、それを支える、えらくごたごたした金の台座。王妃に負けないくらい派手な造り。相当、高価な物なのだろうが、タルクは思わず苦い笑いを浮べた。

「あり難き幸せ……」

金になる分、有りがたき幸せ。とつとつこんな指輪は売っ払っち

まおう。

そんな考えを浮べながら、深く下げた頭をあげた時、タルクの背筋にぞっと悪寒が走った。

捕らえた獲物を見つめるように爛々と輝く、その眼差し。

真っ赤な唇は、不自然に口角が上がり今にも、大きく裂けてしまいそうだ。

この王妃……普通じゃない。

「晩餐会の後に城門の裏で待っている。あなたが気に入ったわ」
小声で囁く王妃に一瞥を送り軽く会釈してから、タルクは王宮にくるりと背を向けた。

気分が悪かった。たまらない嫌悪感。
そういえば、エターナル城の城門をくぐって時間が経つほど、その感強まっていたのだ。

＊ ＊

あの娘……どこまで行った？

リリーが部屋を出ていった事を確認すると、礼拝堂の祭壇の落とし戸を開き、ゴットフリーは下に続く長い階段を降りて行った。

明かりといえば、壁の所々につけられた小さな薄明かりしかない。階段を下りた場所は岩盤が剥き出しの洞窟のような場所で、カビ臭さと錆びた鉄が混じりあった匂いが、陰鬱さをさらに強調していた。

「ゴットフリー、こっち！」

「お前、ここにいたのか。迷宮に入らなかったんだな」
ココの声を聞いて、無意識にほっと息をつく。

「へえ……心配してくれてたんだ……」

「……」

一瞬沈黙し、憮然として言う。

「自惚れるな。ゴキブリ娘が一人いなくなったところで、こちらは痛くも痒くもないんだからな」

ちえ、わかってるわよ。そんな事くらい。

ココはふんつと息を吐くと、

「ここ、見て！」

と、足元を指差した。

マンホールの蓋のような物が地面に備えつけられている。蓋の中央についている取っ手を掴むと、ココはよいしょと、扉を開くようにそれを引き起こした。

下続く長い穴。穴の壁に添って縄梯子がかけてある。

「きつと、この穴の一番下に迷宮の入口があるんだよ」

一人で行くのはやっぱり、不安。

ゴットフリーと合流できて、やっと先へ進めるとばかりに、ココは縄梯子に足をかけた。だが、不意に首ねっこをつかまれて、引き戻されてしまった。

「何すんの!!」

「本当に馬鹿な娘だな。ここは侵入者を拒むためだけに作られた迷宮だ。来てくださいとばかりに見えている場所は、まずは疑がつかかれ」

「なら、どうしろってんのよ!!」

ゴットフリーは、一瞬、考え込み、それから傍にあった大きめの石に手を伸ばした。

「迷宮の罠に身をさらすのは、お前の自由」

そして、その石を穴の底に向かって投げつけた。

すると、静まりかえっていた薄暗い穴の底が、もやもやと、うごめきだしたのだ。シューシュー、がらがらと何かが擦れ合いながら縄梯子を這い登ってくる。

自分を狙ってやってくる、いくつもの充血した視線……。

へ、へび……この穴の中、全部？

ココは体が硬く強張って逃げることもできなくなってしまった。
だが、

「退け！」

有無をいわせぬ声と共に、ばらばらと音をたてながら、縄梯子は穴の中へ落ちていった。足で乱暴に、ココが開けた穴の蓋をぼんと閉める。

はっと、呪縛から開放されて、ココはゴットフリーに目をやった。
手にしたレイピアが鮮やかに煌いている。

あ……あれで、縄梯子を切ってくれたんだ……

なんだか、ゴットフリーに似合わない剣。でも、きれいだな。リリーとの経緯を知らないココは、漠然とそう思った。

「足手まといになるくらいなら、俺の後ろについておけ！」

ゴットフリーは、叱りつけるように声を荒げたが、震えがとまらない様子のココを見て、多少声を和らげた。

「こういう迷宮にも、必ず一つは抜け道が作ってあるものだ。設計者が自分が作った迷路で迷ったなんて話は聞いた事がないからな」

そして、先程下りてきた祭壇の裏の階段に目をやると、階段の板塀に手をあて、何かを手探りでさがし始めた。

「他の場所と明らかに色が違っていかないか。不自然な突起物や亀裂がないか。隙間風、温度差。些細な変化を探し当てる事で……」

ちようど自分の目線の位置で手を止めると、にやりと笑い、触れている階段の板塀を力まかせに引き剥がす。

べりという音と共に階段の向こうに現れた別の空間。

ココに灰色の瞳を向ける。そして小気味良さそうに笑った。

「迷宮の扉は開かれる」

Chapter 12

突然、目の前に現われた巨大な岩壁。そして、そこに備え付けられた2つの扉。

これが、迷宮の最初の選択……2つの扉のどちらを選ぶかは自分の自由。

何だか息苦しくなって、ココはぐくと唾を飲み込んだ。だが、2つの扉とココたちの立っている場所の間には深く掘りこまれた幅5mほどの溝があった。

「まるで、城を護る濠のようだ。扉へ進みたければ、ここを横切れという事か」

「ええっ、この溝こそ、罠の匂い100%だよ！横切るなんて絶対、嫌！」

“ちょっと、待って”とばかりにゴットフリーの腕を掴む。さっきみたいなヘビの洗礼を受けるのは、もう沢山だ。

なにやら、ごそごそとポケットを探って、黒っぽい物体を取り出すココ。

「さっきから鳴き声がすると思っていたら……お前、それ、どこから持ってきた？」

「階段の下にいたのを捕まえたんだよ。何かの役にたつと思って」屈託なく笑うと、ココは、手したクマネズミをばいっと溝の中へ放りこんだ。

「ヘビは駄目でも、ネズミは素手で握れるのか」

呆れ顔のゴットフリーに、悪びれもせず、こう言う。

「私、によりよろしたのは苦手なの。ネズミは平気！だって、サライ村にも、どっさりいたもん」

そうこうしているうちに、放たれたクマネズミは、ちよろちよろと溝の中を駆けていった。ちょうど、岩壁に沿って50 m程走った頃だろうか、いきなり、

ギギギイ！

軋むような音と共に地面が揺れた。

「な、なにっ、何っ!？」

遠くから、唸るような音が近づいてくる。

水？これ、水の音?！

どどどど……、と、溝の奥からあふれ出してくる、おびただしい水の流れ。クマネズミに反応して、迷宮に仕掛けられた水門が開いたのだ。一瞬のうちに、濠の中は水で埋め尽くされてしまった。

「ネズミ一匹も逃さないとは……えらく神経質な迷宮だな。だが、やっと本当の濠らしくなったじゃないか。……お前、泳ぎは得意な方か？」

この状況をまるで楽しんでるかのようなゴットフリーとは反対に、ココはこの世で一番、嫌そうに顔をひきつらせた。

「泳ぐよりも、ここにすることがもう嫌！私にはよろしいのは嫌いだって言ったのに!」

ほんの一瞬の間に、無色透明だった水の色が真っ白に染まったのだ。いや、水が白いのではなく……その中を泳いでゆく無数の生き物が白い肌を持っていた。

大量の白蛇！

濠の中の水の流れにのって、うねうねと……それこそ、何百匹も

……。

ちょうど、流れの中に先ほど、ココが放ったクマネズミの残骸がぽっかりと流れてきた。溺れたのか、蛇に引きちぎられたかの確認はできなかったが。

「大・中・小とよくも、沢山集めたものだ。ここの城主はよほど、蛇がお好きなようだな」

この中に入ったとたんに、蛇の餌食か。迷宮の扉にさえ、まだ辿りついていないというのに……。

考え込んでいるゴットフリーの前で、また、ココがごそごそとポケットをまさぐりだした。

「これ使えないかな？」

「……」

銀色の機械。柄のような取っ手の先に二つの金属片が取り付けられている。

「電気を起こして、ビリッと相手を痺れさせる機械なんだって。こんなに小さくてもけっこう威力があるらしいよ」

「スタンガンか？」

話には聞いた事はあっても、実物を見たのは初めてだった。ゴットフリーは、ココから、その機械を受け取ると、興味深げに観察を始める。

「これを作ったのは、ラガーだな。電位差やら何やらと、あいつが自慢げに語っていたのを聞いた事がある」

そして、水は電気をよく通すんだったな。

「そういうことなら、お前は後ろに下がっている。派手な感電シヨ

ーを見せてやるから」

スタンガンのスイッチを入れて、バチバチと放電を確認すると、ゴットフリーはくくつと軽く笑った。なかなか、おもしろい玩具を手に入れた。まさか、こんな場所で感電実験ができるとは思わなかった。

ぽいつとスタンガンを濠に投げ込む。

その瞬間、

白いスパーク音が弾けて、あたりが銀色に染まった。ココは思わず、目を手で覆う。

流れる電流の連鎖の中で踊るようにのた打ち回る白蛇の群れ。ゴットフリーは、魅せられたかのように、その姿を見つめている。

「ゴットフリー？」

ココに袖を引っ張られても、微動だにしない。

何か変だ……まるで、心が抜けでたみたいに……

夢の中にいるみたい……

「ゴットフリー、あっちに行っちゃ駄目!! もどって来て!」

何故、そんな台詞を吐いてしまったのか、ココにもわからなかった。自然に飛び出たその言葉。

はっと見返してきた灰色の瞳の中に、自分の姿を確認した時、ココは心底ほっと胸をなでおろした。

溝の中で折り重なりながら、浮かんでいる白蛇の群れ。再び、薄暗いベールに包まれた空間。

「今の内に、この溝を渡ってしまおう。白蛇の全部が死んだわけじゃない。気絶しているだけの奴が目をさます前に」

先程の事など、なかったかのようにゴットフリーは、ざぶんと足

から溝の中へ飛びこんだ。水深は1・5mほどだろうか。長身のゴットフリーなら十分に歩いて渡れる水量だ。だが、ココは……

「何をやってる？早く来い！」

「嫌……」

「お前、泳げないのか?!」

「そんなじゃなくて……」

「なら、何だ!？」

「その蛇がうようよ浮いてる中に、入れるわけないじゃん!!」

大粒の涙が、一斉に瞳から流れ出た。何が何でも絶対嫌だ。一人で礼拝堂に引き返すとココはだだをこね出した。

「礼拝堂に戻ったところで、土牢送りは免れないぞ。多分、迷宮の出入口には近衛兵が配備されている。」

ゴットフリーは頑として動こうとしないココを見て、ため息をついた。

「わかった。俺の肩に乗れ。それならいいんだろう?」

「え、肩に……乗っていいの?」

ガルフ島では、残酷無比な警護隊長と名を馳せていたゴットフリーだ。肩車なんかさせて、ただで済むのだろうか。ココは迷った。

「いいからっ、さっさと乗れっ!!」

怒鳴られると、凄く怖い。ココは目にもとまらぬ早さで、ゴットフリーの言葉に従った。

無然として濠を渡るゴットフリーだったが、さすがに半目開きに浮かんでいる白蛇の間を進んでゆくのは、気持ちのいいものではなかった。

この蛇の目……礼拝堂に行く前に見た、王妃の肖像画の目と似ている。

何かが心に引っかかる。すっきりしない気持ちのまま、扉がある

岩壁の場所にココをおろした時、

「あ、あれ、あれっ！」

引きつったココの表情は、もはや“気持ち悪い”を通り過ぎ、恐怖の色を帯びていた。

濠に浮かんでいた白蛇たちが、天井に吊り上げられるように集結しはじめたのだ。それらは1つの巨大な縄を編みあげながら上に絡み合ってゆく。

鎌首をもたげ、紅い舌を吐き出した……縄……否

白い大蛇！
おろち

Chapter 12 (後書き)

明けましておめでとうございます^^
本年もよろしく願います。

Chapter 13

ぎろりと、大蛇の瞳が紅く光った。

「お前は、隠れてろっ！」

ゴットフリーがココに向かって叫んだ瞬間、それは巨大な鎌首を振り下ろしてきた。

闇馬刀っ！

ゴットフリーの手の中で黒い光が炸裂した。襲ってきた白い胴体を、刃の影が、高速で横切る。天地を裂くような呻きが迷宮に響き渡った。そして、濠の中の水はみるみるうちに血の色に染まっていた。

ゴットフリーは、その血の中に、体半分浸しながら、素早く黒剣の切先を白い大蛇に向けた。

ちっ、急所をはずしたか。

相当なダメージを与えたのは確かなのだ、だが、白い大蛇はまわりの白蛇の体を取りこみながら、傷を癒し、また再生しはじめた。

ココはがたがたと震えながら、目の前の戦いを見据えている。それにしても……

ゴットフリーの黒剣……さっきのレイピアじゃない剣。光と共に現れた……。こんな切羽詰った場面なのに、ココはそれに魅せられていた。

次に奴が襲ってきたら、一刀両断に切り殺す！

目の位置で真一文字に、闇馬刀を構え、間合いを数える。

ゴットフリーは、その瞬間を待っていた。

だが、

シャアアアッ!!

大蛇が呻き声とともに鎌首を振り落としてきた時、

「何っ！足が、動かないっ！」

濠に残った白蛇が、ゴットフリーの二本の下肢に絡み付いてきたのだ。バランスを失い、なす術もなく溝の中へ倒れこむ。血染めの水飛沫が飛び散った瞬間、してやったりと、白い大蛇が襲いかかってきた。

「駄目！その人を傷つけるなんて!!絶対、許さないっ！」

ギャヤアアアアア!!

轟音のような叫びが当たりにこだました。

レイピア―王女リリーでさえも目を見張った至極の宝剣―

夢中だった。ゴットフリーの腰の鞘から引きぬいたその剣を、コは渾身の力をふりしぼって、白い大蛇の額に刺きたてた。

優雅な姿とは裏腹に刃は烈風のように鋭い。

痛みのにた打ち回り、自分を傷つけたココを恨みの眼で睨めつける。そして、白い大蛇は口角を全開に広げ、その紅い牙を剥き出しにした。

「後ろに下がれっ！まだ、あいつは襲ってくるぞ！」

足に絡みついた白蛇を振りほどき、ようやく溝の中から這い上がってきたゴットフリーが、ココを自分の後ろに押しやる。

「俺にしっかりつかまっている。絶対、離れるなっ!!」

白い大蛇の牙が迫る。ゴットフリーは闇馬刀を身構えた。そして、高く剣を上にかざすと、空中に大きく十字を切った。

「シャドークロス! 闇の扉!」

その瞬間、闇馬刀に斬られた空間が大きく十字に裂けたのだ。そして、凄まじい旋風が舞い起った。

「何、これっ?! 風に体が引きずり込まれるっ!」

「こらえろっ! 闇の扉があゝの怪物を吸い込んでしまうまでっ!」

闇馬刀が輝きを増すにつれ、旋風はさらに強い力で、白い大蛇を空間の裂け目に吸い取ろうとする。

ゴットフリーは、裂け目から吹き出る風に吸い込まれないように、ココに覆いかぶさり身を伏せた。

一方、ココはゴットフリーの懷の中で、どきどき、どきどきと心臓を高鳴らせていた。

怖いけど……何かこれって……

やがて、静寂がやってきた。空間の裂け目が完全に閉じたと同時に、闇馬刀の姿も消えていた。白い大蛇はもとより、溝を埋めつくしていた白蛇も一つ残らず姿を消してしまった。

「あいつら全部、闇の扉の向こうへ引きずりこまれてしまったらしいな」

ようやく、体勢を元にもどし、ゴットフリーが言う。

「お前、怪我はないか」

「……」

一瞬、次の言葉を失ってしまったココ。あんなに怖れていた灰色の瞳が、今は妙に頼もしい。

「何だ？ 今ごろ怖気づいたのか。レイピアを大蛇につきたてた娘が」
そう一言いったきり、ぷいっと、そっぽを向いてしまったゴットフリー。

ちえっ、やっぱり、元の警護隊長じゃん。

舞い上がった気持ちを引き戻され、ココはむっつりと黙りこんでしまった。

だが、

あの状況で、咄嗟に大蛇にレイピアを突き刺すとは……それも、急所を的確に貫いて。おもしろい。この娘、磨けば、けっこうな剣の使い手になれるかもしれない。

ゴットフリーは、俯きながら、小気味よさげに笑い、そして、射るような眼差しをココに向けた。

「さあ、迷宮の扉を開く時が来た。もう、戻る事は許されない。ゴキブリ娘、この迷宮を探りたくて、エターナル城に忍び込んできたんだらう？ お前はどの扉を選びたい？」

岩盤に備え付けられた2つの扉。

「生か死か……お前にそれを選ぶ勇氣はあるのか？」

＊ ＊ ＊

「どうだった？ 王妃からのご褒美は？」

むつつりと押し黙ったまま、タルクは王妃からもらった指輪をジャンに差し出した。

「うわっ、ケバい指輪！そんなのタルクに似合わないぞ」

「誰がつけるか。とっとと売っ払っちゃまうよ。ただ、あの王妃……」
苦々しげに口元を歪めたタルクを見て、ジャンは、ん？と顔をしかめる。

「王妃がどうかしたのか？」

「……普通の人間じゃない」

「えっ?!」

その時だった。

「タルク、そろそろ、次の対戦が始まるわよ」

ミッシェが呼ぶ声がした。

王宮武芸大会の二回戦……

それより、この嫌な空気に満ち溢れた王宮……そんな場所にゴツトフリーを一人で行かせて良かったのか？タルクの心に不安の波が押し寄せてきた。

無然とした表情で、競技場へ歩き出すその腕を、“ちょっと待って”と、ジャンが引き寄せた。

「その怪我じゃ、戦えないだろ」

手をそっと、タルクの傷ついた肩口に当てると目を閉じる。すると、ぽうっと明るい蒼の光が浮かび上がってきた。

深い傷が、痛みとともに淡雪が溶けるように消えてゆく。タルクは、ジャンの力はとくに理解しているつもりだった。それでも、実際に自分の体で体感する驚きは、口では到底、言い表せるものではなかった。

「おーい、そこ、男同士で何をこそこそやってんだあ？逢引なら王宮の外でやれ」

からかい半分に近くを通り過ぎた者が言う。

「僕とタルクが逢引？ 気持ち悪い事言うなよっ！」

「逢引……」

「何だよ、タルク？ しみじみとその言葉を繰り返すなよ」

「いや、そういえば」

腑に落ちない表情でタルクは言った。

「王妃に誘われた。晩餐会の夜に待っていると」

「何ィ？ お前を王妃が誘ったのか？」

ジャンは驚きを隠しきれない。そして、からかうような笑みを浮べた。

「お前の言う通り、その王妃、ちょっと普通じゃないかもな」

＊ ＊

王宮武芸大会、第二回戦。

“ 長剣のタルク VS 聖なる騎士ホーリー・カイラス！”

「呪われたヴァンパイアウーマンの次は、聖なる騎士か？ 何か漫画みたいになってきたな」

タルクは、面倒くさそうに長剣を背中から引き抜いた。こんな勝負はさっさと終えて、ゴットフリーを探しに行こう。賞金なんか、もうどうでもいい。

覚悟しとけよ。この長剣で瞬殺にしてやるから

対戦相手を真っ向から睨みつけてみれば、ひよろりと細い体で、長いツバのある帽子から垣間見える肌は、青白く、武芸大会に出場するほどの猛者とは到底思えない。だが、

「お久しぶりですね。タルク、元ガルフ島警護隊第一部隊、筆頭」
優雅な仕草で帽子をとった、その姿にタルクはぎょっと目を見開

いた。

「BW! (ブルーウォーター) お前、ここで何してるっ!」

Chapter 14

風変わりな緑の髪が風にたなびいている。青白い肌は、不思議と不健康さはなく、端正な顔だちを更に引き立たせているように思えてくる。

「それでも、私はガルフ島警護隊長の参謀でしたからね。あなたが武芸大会に出ていると聞いて、お手並みを拝見しに来たんですよ」

「ホーリー・カイルスなんて、偽名まで使いやがって!」

「いや、彼は……きつと、そのへんに寝転がっていますよ。ここへ出る直前に私に出場権を譲ってね」

BWは多少、小馬鹿にしたような笑いを浮かべた。

「お前、黒馬島からついてきたのか? 全く、俺らの廻りをいつも、うろちよろしやがって!」

「へえ、なんだか、あなたがゴットフリー隊長の右腕みたいな言いっぷりだ。それに見合った技量を今は身につけたということですか?」

BWの皮肉めいた言葉が、もともと悪かったタルクの虫の居所を更に悪化させた。

「そりゃ、戦ってみりゃ、わかる事だろっ!」

ガルフ島にいた時もそうだったが、やっぱり……

俺はこいつが大嫌いだ!

タルクの長剣が唸りをあげた。

その動きに合わせ、BWは高々と右手を差し上げる。すると、その指先からきらりと、光がほとばしった。光は長い帯となり、空中でしなりながら、形をととのえてゆく。

「相も変わらず、芸がない。ただ、長剣を振りまわすだけなんて」

空に輝く一本の剣。長く鋭い切先。だが、それには色がなく、ほとんど肉厚のない刀身からは、透けて後ろの景色が見えるほどだ。

「なんだってBWがここに?!それに、あの剣は何だ?」

ジャンの問いに答えたミツシェの声が軽くはずむ。

「ウォーター・ソード!あれは、ダイヤの鉱石をも切裂く水の剣。レインボーヘブンの欠片、海……BWが作り出した最強の武器」

「まずは、ほんの小手調べ!」

BWは軽やかに微笑むと、ウォーター・ソードを振るい、宙に四角形を書きあげた。すると、その線の軌跡上に透明な膜が浮かび上がってきたではないか。

タルクとBWの間を遮る、それは……水の壁。タルク側から、壁を通してみるBWの姿は、水壁のレンズで湾曲しさらに細長く、青ざめて、しかも屈強に思えた。

「もう、俺はこんなもんじゃ驚かねえぞ!変な技は、ジャンやミツシェで見なれてるからな」

大音響で叫びながら、長剣を水壁に振り下ろす。

ぐわんつと壁が壊れた瞬間、無数の水滴が辺りに飛び散った。

「次はこっち!」

BWは、ふわりと身をかわすと、ウォーター・ソードを左右、上下に振りきり、“Z”の文字を宙に書いた。

「一体、何のつもりだっ!?こんな柔な水壁で俺が倒せるとでも思ってたのか!」

今度は自分の左右にできた水壁。それを叩き壊すと次は、後ろに。もう、振向くのも面倒臭く、タルクは長剣を後ろ向きのまま壁に突き刺した。

はあはあと息を切らしながら、タルクはおびただしく舞いあがる、水の玉に目をやった。

それらは、雨のように降り注ぐわけでもなく、かといって一気に落ちてくるわけでもない。壊された水壁から、ほとばしった水滴は激しく飛び散り、その後はシャボン玉のように、辺りにゆっくりと漂いだした。

観客たちは、ざわざわと騒ぎだした。なぜなら、水滴は彼等の場所にも、ふわふわと飛んでくるのだから。

「何だ？これは何かの幻術か？」

「さわっても、大丈夫なの？」

観客席と競技場のほぼ、全域に行き渡った水の玉。BWはウォーター・ソードを手にしたまま、目を閉じ、直立の姿勢で何かを読み取ろうとしている。

観客席右—10%、同じく左—5。出場者枠—3、随行者—同じく3。地下—15。トータル36%、ひどいな。この王宮の4割近くが異分子ですか。けれども、私の感じだと、この数字はもっと高くなるはずなんです。

ぶつぶつと、つぶやくBWに業を煮やして、タルクが叫ぶ。

「俺にやられた時の為に、念仏でも唱えてんのか！怪しい技を使わんで、もっと真っ向、勝負してこいっ！」

最上段に構えた長剣をBW目掛けて、一気に振り下ろす。

「おっと！あせらないで下さいよ。まだ、サーチ“調査”中なのに」軽くウォーター・ソードを差し上げ、頭上ぎりぎり長剣を受け止めるBW。

この野郎！俺の剣をいとも簡単に止めやがる。
タルクの額に汗が流れた。

徐々に消えて行くBWが作り出した水滴。

ミッシェがジャンにぽつりと言った。

「BWは、ここに巢食っている邪念の出所を探っているのよ。あたかもタルクと戦っているかのようなフリをして」

「この水滴を使って？」

「そう、彼は水から情報を得る術を知っている。飛ばした水滴は王宮中に広がって、レーダーのように、異分子を探りあてる」

「また、小難しい技を使うもんだな」

僕なら絶対使わないな。頭が痛くなりそうだと、ジャンは笑った。「それより、タルクの長剣が……」

残念そうに、ミッシェが言った。

「また、壊されちゃったわ」

＊ ＊

激しい水飛沫をあびながら、タルクは啞然と手元を見た。

真っ二つに裂かれた、自分の長剣、それも縦に！まるで、使用後の割り箸みたいに。

畜生！一体、何なんだ。あの剣は！？

驚くタルクを見下すようにBWが笑う。

「ウォーター・ソードの切れ味はいかがです？いい形になったじゃないませんか。次からは二刀流にされてはどうですか」

「ふ、ふざけんな！せっかく作り直した長剣をこんな風にしやがって！」

「作り直した……？ああ、そうか。黒馬島でゴットフリーにへし折られたんでしたっけ？」

「うるせえっ！その小賢しい口を閉じろっ！」

タルクはなす術もない自分に対して、腹がたってたまらなくなっ

情けねえっ！それでも、俺はゴットフリーの一の忠臣なんだぞっ。
誰が何と言おうとも！

その時、突然、二つに裂かれたタルクの長剣が、蒼く輝きだしたのだ。そして、それは、みるみるうちに形を整え、裂かれた刃を復元しながら、元の姿にもどってゆくではないか。

ジャンの力？これは……

思わずジャンの方に視線を向けたタルク。だが、
「違う、違う！僕は何にもやってないぞ」

ジャンは、ぶんぶんと手振りを添えながら、大きく首を横に振る。

そういえば、黒馬島で首のない馬を斬った時も、俺の長剣は蒼い光を放ちやがった。だが、この剣はあれとは違う作り直した剣だ。ならば、この光は……力は……どこからきてるんだ？

しきりに首をかしげるタルクを、BWは苦い笑いを浮べて見つめている。

それは、タルク、あなた自身の力ですよ。ゴットフリーの役に立ちたいと強く願う心が、ジャンたちと行動を共にするうちに、あなたが“使う剣”にその力を芽生えさせた。

「とにかく、俺はもう誰にも負けないっ。それが、人間であろうがなかろうが！」

タルクは、渾身の力をこめて長剣を振り下ろした。

ごうっ！空気が唸った。そして、巨大な光の刃は、迎え打ったBWのウォーター・ソードを粉々に拡散させた。

「そういう事なら、そろそろこの戦いも終わりにしましょうか」

BWは、高く腕を空に掲げた。すると、飛び散った水滴が再び、集結しだした。それは、長く鞭のようにしなり、ぐるりと丸くタルクとBWの周りに軌道を描く。その瞬間、二人は巨大な水の玉の中に入りこんでしまった。

呆氣にとられて、競技場の中央に現われた水の玉を見つめる観客たち。

「大入道と青白い男は、あの水の玉の中でどうなっちまってるんだ？」

水の玉は、無数の湾曲した光に覆われ、外から中はうかがい知ることができなかった。

ざわざわと、ささやき合うが観客たちも、ジャンでさえも、なす術がない。

「ミツシェー」

助けを請うように、ジャンはミツシェの名を呼んだ。だが、

「ミツシェ？」

彼女は、言い寄ってきた見知らぬ男たちをあしらうのに忙しく、タルクとBWの戦いに、ほとんど興味をなくしてしまっているようだった。

ちっ、これじゃ完全にこいつの手の中じゃないかよ。

巨大な水の玉の中で、タルクは吐き捨てるように言った。

「おい、BW。俺をこんな所へ閉じ込めて、窒息死でもさせるつもりか！？」

「ご安心を。この中でもちゃんと呼吸はできますよ。まあ、そう怖い顔をしないで、たまにはゆっくり、お話でもしましょうよ」

「はあ？今はゆっくりお話する時間じゃないだろ！俺たちや戦ってるんだぞ」

「いいんですよ。それより、この王宮にはあまりかかわり合わない方がいい。邪悪な影が多過ぎる」

わかってらあ、そんな事。

タルクは、五月蠅げにBWを睨めつける。

「仕方ないだろ。この王宮の地下に眠っているという“レインボーヘブンの欠片”を俺たちは見つけなきゃならないんだから」

「それが、おかしいと言うんですよ。この王宮からはそんな気配は塵ほども感じない。あるのは、胸を詰まらせるような悪臭だけです。黒馬島での事を思い出してごらんさい。また、きっと何か達の悪い罠がある」

「またかよ……」

「そう。ゴットフリーを闇に獲られるのはもう、御免ですからね。それが何かを知りたくて、サーチをかけてみましたが、大元は結局わかりませんでした」

BWの言葉にタルクは、思い当たる節があった。

「悪の大元……それは、多分……王妃だ。あの異様さは普通じゃなかった」

「王妃ですか？……」

「さっき、バルコニーの下で見た表情は、とても人間とは思えなかった。……歪んでいるというか、とにかく気持ちが悪かった」

「なるほど。王妃がいるバルコニーまでは、私の水滴は流れてゆきませんでしたからね」

わかりましたと、BWが答えたと同時にその足元が徐々にぼやけだした。

「勝ちタルク、あなたに譲りますよ。まあ、せいぜい、がんばって最後まで勝ちあがってください」

「えっ、ちょ、ちょっと待てよ！」

次の瞬間、BWの姿はかき消すように見えなくなり、タルクとB

Wを囲い込んでいた水の膜がぱちんと砕けちった。

「おいっ！」

呆氣にとられながら、叫ぶタルクの耳に響くBWの声。

今回は、少しばかり、あなたの力を認めてあげますよ。それでも、まだまだ、私を差し置いて、ゴットフリーの右腕を名乗らせるわけにはゆきませんがね。

王宮武芸大会、第二回戦。

長剣のタルク VS 聖なる騎士ホーリー・カイラス（偽）

勝者、長剣のタルク！

Chapter 15

風変わりな緑の髪が風にたなびいている。青白い肌は、不思議と不健康さはなく、端正な顔だちを更に引き立たせているように思えてくる。

「それでも、私はガルフ島警護隊長の参謀でしたからね。あなたが武芸大会に出ていると聞いて、お手並みを拝見しに来たんですよ」

「ホーリー・カイルスなんて、偽名まで使いやがって！」

「いや、彼は……きつと、そのへんに寝転がっていますよ。ここへ出る直前に私に出場権を譲ってね」

BWは多少、小馬鹿にしたような笑いを浮かべた。

「お前、黒馬島からついてきたのか？ 全く、俺らの廻りをいつも、うろちよろしやがって！」

「へえ、なんだか、あなたがゴットフリー隊長の右腕みたいな言いっぷりだ。それに見合った技量を今は身につけたということですか？」

BWの皮肉めいた言葉が、もともと悪かったタルクの虫の居所を更に悪化させた。

「そりゃ、戦ってみりゃ、わかる事だろっ！！」

ガルフ島にいた時もそうだったが、やっぱり……

俺はこいつが大嫌いだ！

タルクの長剣が唸りをあげた。

その動きに合わせ、BWは高々と右手を差し上げる。すると、その指先からきらりと、光がほとばしった。光は長い帯となり、空中でしなりながら、形をととのえてゆく。

「相も変わらず、芸がない。ただ、長剣を振りまわすだけなんて」

空に輝く一本の剣。長く鋭い切先。だが、それには色がなく、ほとんど肉厚のない刀身からは、透けて後ろの景色が見えるほどだ。

「なんだってBWがここに?!それに、あの剣は何だ?」

ジャンの問いに答えたミツシェの声が軽くはずむ。

「ウォーター・ソード!あれは、ダイヤの鉱石をも切裂く水の剣。レインボーヘブンの欠片、海……BWが作り出した最強の武器」

「まずは、ほんの小手調べ!」

BWは軽やかに微笑むと、ウォーター・ソードを振るい、宙に四角形を書きあげた。すると、その線の軌跡上に透明な膜が浮かび上がってきたではないか。

タルクとBWの間を遮る、それは……水の壁。タルク側から、壁を通してみるBWの姿は、水壁のレンズで湾曲しさらに細長く、青ざめて、しかも屈強に思えた。

「もう、俺はこんなもんじゃ驚かねえぞ!変な技は、ジャンやミツシェで見なれてるからな」

大音響で叫びながら、長剣を水壁に振り下ろす。

ぐわんつと壁が壊れた瞬間、無数の水滴が辺りに飛び散った。

「次はこっち!」

BWは、ふわりと身をかわすと、ウォーター・ソードを左右、上下に振りきり、“Z”の文字を宙に書いた。

「一体、何のつもりだっ!?こんな柔な水壁で俺が倒せるとでも思ってたのか!」

今度は自分の左右にできた水壁。それを叩き壊すと次は、後ろにもう、振向くのも面倒臭く、タルクは長剣を後ろ向きのまま壁に突き刺した。

はあはあと息を切らしながら、タルクはおびただしく舞いあがる、水の玉に目をやった。

それらは、雨のように降り注ぐわけでもなく、かといって一気に落ちてくるわけでもない。壊された水壁から、ほとばしった水滴は激しく飛び散り、その後はシャボン玉のように、辺りにゆっくりと漂いだした。

観客たちは、ざわざわと騒ぎだした。なぜなら、水滴は彼等の場所にも、ふわふわと飛んでくるのだから。

「何だ？これは何かの幻術か？」

「さわっても、大丈夫なの？」

観客席と競技場のほぼ、全域に行き渡った水の玉。BWはウォーター・ソードを手にしたまま、目を閉じ、直立の姿勢で何かを読み取ろうとしている。

観客席右—10%、同じく左—5。出場者枠—3、随行者—同じく3。地下—15。トータル36%、ひどいな。この王宮の4割近くが異分子ですか。けれども、私の感じだと、この数字はもっと高くなるはずなんです。

ぶつぶつと、つぶやくBWに業を煮やして、タルクが叫ぶ。

「俺にやられた時の為に、念仏でも唱えてんのか！怪しい技を使わんで、もっと真っ向、勝負してこいっ！」

最上段に構えた長剣をBW目掛けて、一気に振り下ろす。

「おっと！あせらないで下さいよ。まだ、サーチ“調査”中なのに」軽くウォーター・ソードを差し上げ、頭上ぎりぎり長剣を受け止めるBW。

この野郎！俺の剣をいとも簡単に止めやがる。
タルクの額に汗が流れた。

徐々に消えて行くBWが作り出した水滴。

ミツシェがジャンにぽつりと言った。

「BWは、ここに巢食っている邪念の出所を探っているのよ。あたかもタルクと戦っているかのようなフリをして」

「この水滴を使つて？」

「そう、彼は水から情報を得る術を知っている。飛ばした水滴は王宮中に広がって、レーダーのように、異分子を探りあてる」

「また、小難しい技を使うもんだな」

僕なら絶対使わないな。頭が痛くなりそうだと、ジャンは笑った。

「それより、タルクの長剣が……」

残念そうに、ミツシェが言った。

「また、壊されちゃったわ」

* *

激しい水飛沫をあびながら、タルクは啞然と手元を見た。

真つ二つに裂かれた、自分の長剣、それも縦に！まるで、使用後の割り箸みたいに。

畜生！一体、何なんだ。あの剣は！？

驚くタルクを見下すようにBWが笑う。

「ウォーター・ソードの切れ味はいかがです？いい形になったじゃないませんか。次からは二刀流にされてはどうですか」

「ふ、ふざけんな！せっかく作り直した長剣をこんな風にしやがって！」

「作り直した……？ああ、そうか。黒馬島でゴットフリーにへし折られたんでしたっけ？」

「うるせえっ！その小賢しい口を閉じろっ！」

タルクはなす術もない自分に対して、腹がたってたまらなくなつた。

情けねえっ！それでも、俺はゴットフリーの一の忠臣なんだぞっ。
誰が何と言おうとも！

その時、突然、二つに裂かれたタルクの長剣が、蒼く輝きだしたのだ。そして、それは、みるみるうちに形を整え、裂かれた刃を復元しながら、元の姿にもどってゆくではないか。

ジャンの力？これは……

思わずジャンの方に視線を向けたタルク。だが、
「違う、違う！僕は何にもやってないぞ」

ジャンは、ぶんぶんと手振りを添えながら、大きく首を横に振る。

そういえば、黒馬島で首のない馬を斬った時も、俺の長剣は蒼い光を放ちやがった。だが、この剣はあれとは違う作り直した剣だ。ならば、この光は……力は……どこからきてるんだ？

しきりに首をかしげるタルクを、BWは苦い笑いを浮べて見つめている。

それは、タルク、あなた自身の力ですよ。ゴットフリーの役に立ちたいと強く願う心が、ジャンたちと行動を共にするうちに、あなたが“使う剣”にその力を芽生えさせた。

「とにかく、俺はもう誰にも負けないっ。それが、人間であろうがなかろうが！」

タルクは、渾身の力をこめて長剣を振り下ろした。

ごうっ！空気が唸った。そして、巨大な光の刃は、迎え打ったBWのウォーター・ソードを粉々に拡散させた。

「そういう事なら、そろそろこの戦いも終わりにしましょうか」

BWは、高く腕を空に掲げた。すると、飛び散った水滴が再び、集結しだした。それは、長く鞭のようにしなり、ぐるりと丸くタルクとBWの周りに軌道を描く。その瞬間、二人は巨大な水の玉の中に入りこんでしまった。

呆氣にとられて、競技場の中央に現われた水の玉を見つめる観客たち。

「大入道と青白い男は、あの水の玉の中でどうなっちゃってるんだ？」

水の玉は、無数の湾曲した光に覆われ、外から中はうかがい知ることができなかった。

ざわざわと、ささやき合うが観客たちも、ジャンでさえも、なす術がない。

「ミツシェ」

助けを請うように、ジャンはミツシェの名を呼んだ。だが、

「ミツシェ？」

彼女は、言い寄ってきた見知らぬ男たちをあしらうのに忙しく、タルクとBWの戦いに、ほとんど興味をなくしてしまっているようだった。

ちっ、これじゃ完全にこいつの手の中じゃないかよ。

巨大な水の玉の中で、タルクは吐き捨てるように言った。

「おい、BW。俺をこんな所へ閉じ込めて、窒息死でもさせるつもりか！？」

「ご安心を。この中でもちゃんと呼吸はできますよ。まあ、そう怖い顔をしないで、たまにはゆっくり、お話でもしましょうよ」

「はあ？今はゆっくりお話する時間じゃないだろ！俺たちや戦ってるんだぞ」

「いいんですよ。それより、この王宮にはあまりかかわり合わない方がいい。邪悪な影が多過ぎる」

わかってらあ、そんな事。

タルクは、五月蠅げにBWを睨めつける。

「仕方ないだろ。この王宮の地下に眠っているという“レインボーヘブンの欠片”を俺たちは見つけなきゃならないんだから」

「それが、おかしいと言うんですよ。この王宮からはそんな気配は塵ほども感じない。あるのは、胸を詰まらせるような悪臭だけです。黒馬島での事を思い出してごらんさい。また、きっと何か達の悪い罠がある」

「またかよ……」

「そう。ゴットフリーを闇に獲られるのはもう、御免ですからね。それが何かが知りたくて、サーチをかけてみましたが、大元は結局わかりませんでした」

BWの言葉にタルクは、思い当たる節があった。

「悪の大元……それは、多分……王妃だ。あの異様さは普通じゃなかった」

「王妃ですか？……」

「さっき、バルコニーの下で見た表情は、とても人間とは思えなかった。……歪んでいるというか、とにかく気持ちが悪かった」

「なるほど。王妃がいるバルコニーまでは、私の水滴は流れてゆきませんでしたからね」

わかりましたと、BWが答えたと同時にその足元が徐々にぼやけだした。

「勝ちタルク、あなたに譲りますよ。まあ、せいぜい、がんばって最後まで勝ちあがってください」

「えっ、ちょ、ちょっと待てよ！」

次の瞬間、BWの姿はかき消すように見えなくなり、タルクとB

Wを囲い込んでいた水の膜がぱちんと砕けちった。

「おいっ！」

呆氣にとられながら、叫ぶタルクの耳に響くBWの声。

今回は、少しばかり、あなたの力を認めてあげますよ。それでも、まだまだ、私を差し置いて、ゴットフリーの右腕を名乗らせるわけにはゆきませんがね。

王宮武芸大会、第二回戦。

長剣のタルク VS 聖なる騎士ホーリー・カイラス（偽）

勝者、長剣のタルク！

Chapter 16

王宮の地下、迷宮の入り口に備え付けられた2つの扉。

「えーっ、私が扉を選ぶの？」

“遠慮しとく”と、言いかけてから、ココはその言葉をぐっと飲み込んだ。ゴットフリーの灰色の瞳が自分を見据えている。逆らう事なんて絶対無理。

「うーん、こっち！」

と、右の扉を指差した。

「根拠は？」

「勘！」

「……」

「あっと、勘じゃない、勘じゃないから怒らないでっ。ほら、ゴットフリーが礼拝堂からの階段をひっぺがした時に言ってたでしょ。他の場所と違っているところはないか探せて。右の扉の真ん中に何かの模様があるよ。だから、そっちを選んだの！」

ココに冷たい一瞥を送ってから、ゴットフリーは視線を右の扉にうつした。埃とカビにまみれて見づらかったが、確かに手のひらほどの大きさで、何かの形が彫り込まれている。

手でこすり、その形が現れた時、ゴットフリーはかすかに笑った。

「“スウォード・リリー”か」

「え？」

「グラジオラスの花を知っているか？別名“スウォード・リリー”または、“剣百合”とも言う」

扉には名の由来どおり、剣状の花びらを開かせた“グラジオラス”の花が彫りこまれていたのだ。

「そして、その名で呼ばれる王女“スウォード・リリー”はこのグ

ラン・パープルの象徴のような存在だ」

なら、右の扉で決まりじゃん。ココは表情を伺うように、その顔を覗き込んだが、“いや、決めるのは左の扉も調べてからだ”と、ゴットフリーは言った。

用心深い奴。こいつを騙せる奴って、この世にいないような気がしてきた。だが、ココがため息を一つ、ついた瞬間、

「ゴットフリー!？」

苦しげに息を荒げると、左の扉の前にゴットフリーは膝から崩れ落ちた。

「ゴットフリー、どうしたのっ!？」

驚いて駆け寄るココ。

激しい痛みが襲いかかっていた。肩口から胸にかけての電流が走るような衝撃。苦し紛れに掴んだ襟もとがはだけた時、

ひどい傷跡……それもあんなに紅く腫上がって……。

その奥に見えた傷の跡に、ココは、はっと目を見開いた。

この傷が痛むほどに、俺はお前を思い出すと……

伐折羅、これはお前の警告か。

夜叉王、闇の行方はお前が誰より知っているか。

激しく息を切らしながら、ゴットフリーは近くにいたココの腕に手を伸ばした。

「俺を……この扉から、離してくれ。力が入らないんだ。少しでもいいから、遠ざけてくれ」

「扉ってこの左側の扉?!」

ココの問いに答えはなかった。大変な事になってるんじゃないの、これ?! ココはもう、なりふり構わず、ゴットフリーの体に手を回すとその体を左の扉から、右へとひきずった。

胸元を押さえながら、ようやく顔をあげると、ゴットフリーは深く息をついた。痛みが徐々に消えてゆく。

「伐折羅……やり方が手荒すぎる。俺たちの行く方向を正してくれるのはありがたいが」

“この先、その傷はあなたを相当、痛い目にあわすと思うよ”

黒馬島でクロが言った言葉を、しみじみと噛み締める。だが、伐折羅につけられた傷が自分の不利になるわけがない。

思いなおすように立ち上がると、心配げに見つめるココに言う。

「右の扉だ。お前の選択は正しかったようだな」

「左の扉は……?」

「死にたくなければ、近づくな」

それが、夜叉王からの警告だ。

右の扉のノブに手をかけ、ゴットフリーは軽く眉をしかめた。

「鍵がかかっている」

「鍵? ちょっと退いて」

急に態度をがらりと変えて、ココが元気に進み出る。そして、ポケットから針金のような金属片を取り出した。鍵穴に入れて、わずかに2秒。

「はい! 開きました」

ギイと開いた扉を背に、得意気に笑う。

「なるほど。さすがはプロといったところか」

サライ村の泥棒娘。その名は伊達じゃなかったわけだ。

最初は足手まといにしか思わなかったが、この娘、けっこう使え
ると、ゴットフリーは苦笑した。

「でも、こんな面倒くさい迷宮をグランパス王は、何のために作っ
たんだろ？」

「達の悪いお遊びとしか思えない。きっと、意にそぐわない役人や
罪人を放りこんで、彼らが迷い死んでゆくのを楽しんでいるんだ」

「えっ、それじゃ、レインボーヘブンの欠片は？」

「単なる呼び水かもな。迷宮に迷いこむ輩たちを集めるための」

「そんなのって、じゃ、私たちがここに来た意味がないじゃない！」

「かもしれない……と言っただけだ」

それでも、この妙な胸騒ぎ……心に響いてくる無言の声

「ここに来た意味、その答はきつとある。この迷宮の果てのどこか
に」

＊ ＊

ゴットフリーは、右の扉を開くと、その中に入って行った。ココ
はかなりびくつきながら、その後を追う。

だが、

「ゴットフリー、何処っ?!」

突然、消えてしまった、その姿。ココは、自分が踏み込んだ場所
を見渡して、一瞬、ぐらりと目がまわりそうな気分になった。

あっちも、こっちも……私、私、私！

鏡の部屋！

＊ ＊

鏡の中で無数の灰色の瞳が睨めつけてくる。“敵は自分自身か”と、ゴットフリーが苦い笑いを浮べれば、相手も同じような笑みを返してくる。

合わせ鏡の迷宮か……よくもこう盛沢山に作り上げたものだ。

「ゴキブリ娘、無事か！」

「無事だけど、全然、道がわかんないよ。どこ？どこ？ゴットフリー、何処にいるのー！」

元にもどろうとしても、その道はかたく閉ざされてしまっている。鏡の向こうから響いてくる、あせりを帯びたココの声。

「五月蠅い、ちょっとは静かにしろっ」

その時だった。

「見つけたっ。何だ。そこにいたの」

ゴットフリーの右側の鏡に、湧き出るようにココの姿が映し出された。だが、笑った顔はすぐに、とまどいの表情に変わる。どんどんと鏡を叩いてみても、迷路の道は開かない。

「鏡の前から離れてろ！俺が叩き割ってやるっ」

するどい金属音と共にガラスの破片が飛び散った。だが、

ココとゴットフリーの間の鏡が壊れると同時に、少女の姿は見えなくなった。その先には新たな鏡の壁があるだけだ。

畜生！俺一人でも手に余るというのに

鏡の迷路。遊技場のミラーハウスとはわけが違う。ただ闇雲に進むだけでは、出口にたどり着けそうもない。

「ゴキブリ娘、俺が指示を出すまでは、絶対にその場を動くなっ。さもないと、永遠に鏡の迷宮から出れなくなるぞ」

ゴットフリーは、思索にふけるように俯いた。

考えろ。鏡の迷宮の構造……俺とあの娘の位置。

右側または、左側に手をついてひたすら壁沿いに進んでみるか。
いや、駄目だな……壁が出口と連続していなければ、永久に迷宮を
さまようことになる。

スタートから分岐点、行き止まり。もれのない探索。目印。

一番、確実な方法は、行き止まりになる毎に分岐点に戻って、ま
た、やり直せばいいんだろうが……そんな悠長な事をやっていたら、
王女と約束した夜明けなど、とうに過ぎてしまうぞ。

限られた時間内で、どこまで広がっているかもわからない迷路の
確実な攻略方法を模索するには、相当な無理があるように思われた。
それでも、今の状況で、そんな言い訳が通用するはずもない。逸る
気持ちを抑えて気を集中しようと両の瞼を閉じた瞬間、ゴットフリ
ーの頭にふと、浮かび上がった青年の顔。

“見えなくても、この世のすべてがピンと頭に浮かび上がって
くるんだよ”

ラピス……

お前なら、この迷宮を越えられるかも知れない……な。

Chapter 17

グラン・パールの西の海岸。その岩場に座り、ラピスはふと空に顔を向けた。西に傾いた太陽の日差しが頬にあたる。それが少し暑い気がした。

王宮武芸大会もそろそろ、決勝戦かな。

優勝者を日没までに決め、夜はその勇士を褒め称えるという建前で、盛大な晩餐会が開かれる。

暇と金を持て余してるのも、今のうちさ。俺たちの計画が上手くいったら、確実にこの国は変わるんだ。

そんな事を思いながら立ちあがろうとした瞬間、頭の中がぐらりと揺れた。

すると、急に眩しいような映像が脳裏に浮かび上がってきたのだ。銀色の閃光が頭の中を駆けて抜けていった。それは、直線に進むかと思うと、左右に曲がり幾何学模様を描き出す。

一体、これは何なんだ?!

やけに明瞭に瞼に写る。ラピスは立っていられない程、脳裏に流れ込んでくる大量の映像に堪らなくなって、頭を押さえながら岩場の上に座りこんだ。

＊ ＊ ＊

鏡の迷宮。幾重にも連なる自分の分身たちの中で、ゴットフリー

は、はっと目を見開いた。

何だ？この薄ぼんやりした光は…

じわりと足元に白い光が浮かびあがっている。目を凝らしてよく眺めてみると、それは薄い線を描きながら、彼を導くように前方へ伸びてゆく。

進路？……まさか、この迷宮の？

一体、誰が俺を助けてる？ジャン、霧花、BW、それとも……伐折羅か。わからない。だが、確かに……

俺には見える。この迷宮の答が！

ゴットフリーは、まずは用心深く、光のナビに従って1歩を踏み出してみた。それから、その道標通りに歩を進めた。壁にぶつかる事もない。ふっと笑みをこぼすと、鏡の向こうのココに言う。

「ゴキブリ娘、俺の声は聞こえているな。何も考えず、前に1歩進んでみろ！」

「えっ、進んでいいの」

ためらう気持ちが強かったが、今、頼れるのはゴットフリーの言葉だけだ。ココは一つ深呼吸をすると、大きく1歩、前に踏み出す。

「行けたよっ！大丈夫」

弾んだ声を聞いて、ゴットフリーはほっと胸をなでおろした。前方を見据え、光の道標を再度、確認する。

「そのまま壁にぶつかるまで、まっすぐ歩くんだ」

「壁にぶつかったよ」

「そしたら、左に曲がれ」

「……！」

途切れた声

「どうした？」

「駄目、壁があって前に進めない」

まさか、俺と逆なのか。それとも、全く別物……そうやってしま
うと最悪だぞ。ゴットフリーはちっと口元を鳴らしてから、一瞬、
思考を止めた。

「右に行ってみろ」

「え？後ろにさがって右、は？また壁、左？あれ？わかんないよ。
どっちが前で後ろだったのー」

馬鹿な奴！あの娘、自分の位置を見失ったな。いらだつ心をなだ
めながら、ゴットフリーはあえて、冷たくこう言った。

「自分の指を噛みきってしまえ」

「えーっ、舌を噛み切って死ねって？いくら何でもそれは酷いよ！」
「違うっ！少しでいいから自分のどこかを傷つける。血が出るだろ
う。それで、鏡に印をつけろ。あとは、俺の指示に従えっ」

ああ、なるほど。印をつけとけば、一度通った場所がわかるもん
ね……痛いけど、仕方ないか。

意を決したように、ふうっの一つ息を吐いてから、ココは人差し
指をじぶんの口元に持っていた。そして、

「痛っ！血が出た」。はあ、とりあえず、前の鏡に印をつけたよ」

「左にゆけるか」

「ゆけるよ」

さっきの位置とは明らかに違う。同じ位置なら、左には壁があったはず。

「右には行けるか」

「ゆける」

「後ろは？」

「壁」

「なら、その壁に印をつけて、右にまっすぐ進め」

「また、壁だよ」

「右に行けるか」

「ゆける」

「左は？」

「壁」

ゴットフリーは、ほっと息を継いだ。どうやら、ココ側の迷路はゴットフリー側と対称にできているようで、ようやく、自分と同じ位置にココをもどす事ができたらしい。

「俺の指示を聞きながら進むんだ。壁にあたったら、必ず印をつけながら」

「でも、印をつけながらだったら、私でも考えれば迷宮を攻略できるかもねー」

ほっとしたのか、ココは急に饒舌になる。

「お前の頭で考えていたら、印のための血がいくらあっても足りないぞ。迷宮を抜ける前に出血多量で死ぬだろうよ」

小ばかにしたように、ゴットフリーが言う。

ひどい事を言うなあ。と、ココは口をとんがらせたが、冷静に考えると確かにそうかもしれないなかった。それだから、

「あはは……、そしたら、ミラーハウスがホラーハウスになっちゃ

うかもね」

笑ってその場を誤魔化した。

＊ ＊

そこから、しばらくはスムーズに迷宮を進むことができた。

やっと、出口か……。しかし、本当にこれで終わりなのか？

ゴットフリーが息をついた、その時

「あっ、見つけた」

振向いた自分の右側にココの姿が浮かびあがる。だが、手で触れてみると、そこには鏡の壁があった。

だが、

「……っ！！」

突然、顔をこわばらせたココの表情。

「おい、どうかしたか？ こちらは、気にせず前に進め。その先に多分出口がある」

ゴットフリーは、訝しげに眉をひそめた。

「い……や、進みたくない」

「何？」

「だって、いるじゃない！？ 前の鏡の向こうに……あ、あの大蛇が！！」

にわかに鏡の正面に浮かび上がった白い大蛇！ 紅い舌を吐き出しながらこちらを見ている、巨大な鎌首。

白い大蛇！……そんなはずがあるものか。あれは、闇馬刀の闇の向こうに消えてしまったはずだろう？！ まさか、他にもいたのか？ しかも、俺とゴキブリ娘側の迷宮に1匹ずつ？

何かが腑に落ちない。それに、床に浮かぶ迷宮の答は、疑いもなく正面の道を指している。ゴットフリーは、突然思い立ったように白い大蛇のいる方向へ歩を進め、そして、大声でココに言った。

「前へ進め！何も気にするな」

「えっ……、でも、白蛇が……」

「これは魔鏡だ！足元をよく見ろ。白蛇の絵が描かれてる。光の屈折を利用して、それを鏡の中に浮かび上がらせているだけなんだ」

魔鏡？白蛇の絵？そういわれてみても、正面に鎌首をもたげている大蛇は生生しすぎて、とても絵には思えない。中に入りこんで足元を確認するなんて、怖くてとてもできやしない。

「駄目……怖くて、前になんか進めない」

「俺を信じろ！こんな“騙し”にのせられるな」

「だって、そっちの方が絵でも、私側のは本物かも知れないよ！」

何とか足を前に踏み出そうとしてはみるが、震えるばかりで、ココの体はどうしても、いうことをきいてくれない。

ふうっと一つ息を吐くと、ゴットフリーは冷たい声音でこう言った。

「わかった。なら、お前とはここでお別れだ。せいぜい、ない知恵をしぼって、一人で“鏡の迷宮”を攻略するんだな」

「ちょっと、ちょっと待ってよ！一人なんて絶対無理！」

ココはあせって、ゴットフリーの名を呼んだ。だが、返事はなく、その姿は鏡の向こうに消えてしまった。

一人ぽつんと鏡の迷宮に取り残されてしまったココ。正面には禍々しく口角を開いた大蛇がとぐろを巻いている。急に迷宮の通路が何十倍にも長く広く思えてきて、目にじわりと涙があふれてきた。

白蛇の二つの瞳が紅に輝き、正面で立ちすくむ少女を舐めるように見下ろしている。その時、鼻につんと流れてきた甘い香り。

花の香り……？

次の瞬間、ココは背中にぞくりと悪寒を感じ、それを振り切るかのように後ろを振り返った。

そこにいるのは、

鏡の中のもう一人の私。

Chapter 18

不安な気持ちがあぐいきれず、ココは恐る恐る、回りを見渡した。

鏡の迷宮に無数に映る自分の姿は、どれもこれも一人ぼっちの迷宮に戸惑い、怯えた表情をしていた。ところが、

ココが視線をもう1度、戻した後ろの鏡。その中の少女がくすりと笑ったではないか。

「……えっ？」

私、笑ってなんかいない……。

思わず両の手を頬にあてがい、鏡に映る自分の姿に目をやった時、ココは、ぎょっと茶色の瞳をその指先に向けた。

先ほど傷つけた指先から、どくどくと赤い血が流れ出している。

「血が……」

何で？全然、痛くもないのに……。呼吸をするほどに、あたりに漂う花の芳香が、胸の中に入り込み、ココは何だかおかしい気分になってきた。

焦って流れる血をぬぐおうとする。すると、それはココの手のひらをすり抜け、ひらりと紅の花びらに姿を変えて空に飛び散った。

「な、何？これ、何なのっ」

それに継いで、大量の紅の花びらが一斉にココの上に降り注いできた。

紅の花の乱舞の中で、鏡の中の少女がまた笑う。その瞳が紅に輝

いた時、耐え切れぬ恐怖が悪寒となってココの背中を通り過ぎた。

「助けて、ゴットフリー！」

ココはぺたりと床に座り込み、絶叫のような悲鳴をあげた。

＊ ＊

「あの声は?!」

鏡の迷宮の中に木霊する少女の声。

ゴキブリ娘……?

一瞬、ゴットフリーは声の方向に足を向けそうになる。だが、

あいつは、自分で選んであの場所に残ったんだ。俺の知った事じゃない。

ぷいと、前に向き直り正面の鏡に目を向けた時、鼻先に感じたかすかな甘い香りに違和感を持ち、鏡の迷宮をぐるりと見渡してみる。合わせ鏡の迷宮の中には、あいも変わらず自分自身の姿が幾重にも映し出されている。

ゴットフリーは、この景色にもいい加減に飽きてきたがと、右の胸に手をあてた。実はココと別れる少し前から、再び、そこにある傷痕が疼き出していたのだ。

夜叉王 一伐折羅一 につけられた傷

一歩進むごとに、傷の痛みが強くなる。

それは、十中八九、凶事が起こる前の前触れと思って間違いはな

かった。

次は何が来る？

ぴしりと鏡がきしむ音。

次の瞬間、ゴットフリーは襟元に銀の閃光が走り抜けてゆくような気がした。

「……！」

思わず床に膝をつき、酷い痛み顔に顔を歪めながら、手前の鏡に映しだされた“敵”の姿を睨めつける。

“やはり、敵は自分自身か”

鏡の中のゴットフリーが、不敵に笑う。その手に握られたレイピアから、赤い血糊をしたたらせて。

「傑作な話だな。自分に自分の首を落とされるなんて」

首から流れ出した血を左手で押さえながら、ゴットフリーは座ったままで後ろの鏡に背をもたれ、深く息をついた。彼の腕をつたい、銀の床を紅に染めてゆく鮮血からは、芳しい花の香りが漂ってくる。じんじんと胸の傷が痛みを増して疼き出した時、ゴットフリーは灰色の瞳を大きく見開き、腰にさしていたレイピアに手をやった。

鏡の中の自分が、手にした剣の切っ先を振り下ろしてくる。

「消えろ！こんな茶番に俺が乗せられると思っているのか！」

ゴットフリーが、引き抜いたレイピアを鏡に投げつけた瞬間、激しい金属音が辺りに木霊し、鏡の部屋が紅色に輝いた。だが……

一瞬の閃光の後に、消えうせた後に残った景色は、今までと変わらない合わせ鏡の銀色の迷宮。

ただ、前と違っていているのは、床には壊された鏡の残骸が散らばり、その中にゴットフリーが投げつけたレイピアが横たわっている事だった。

「笑わしてくれる。あんな物は、この部屋に漂う甘い香りに誘発された、ただの妄想にすぎない」

伐折羅……やはり、お前につけられた傷が俺に不利になるはずがない。

ゴットフリーは、右肩に残る傷跡に手をやり、ほっと息を吐き出した。

この傷が痛み続けていたおかげで、俺は“幻惑の迷宮”に迷い込まなくてすんだのだから。

その傷跡には、もう痛みはなかった。そして、先ほど血をしたたらせていた首には傷もなく、血の色は一滴残らず何処かに消えうせてしまっていた。

＊ ＊

「嫌だ、怖い！誰か助けて！」

激しく乱舞する紅の花の中で、ココは叫び続けていた。何処かに逃れようと、立ち上がろうとしても、腰が抜けたように力が入らない。ぽろぽろとこぼれ落ちる涙をぬぐっても、またすぐに、次の涙が溢れ出す。

くすくすくす

鏡の中の少女が笑う声が聞こえる。

何よ！何で、笑ってんのよ！？

それとも、私の頭がどうかしちゃったの？

両手で耳を塞ぎ、鏡の中の映像が見えないように硬く瞼を閉じた。

ゴットフリー、どうして助けに来てくれないの……。

小さな女の子が死ぬほど、怖い目にあってるっていうのに……普通ならかっこ良く、姿を現すのが定番じゃないのと、ココはちよつと腹を立てていた。だが、悪いのは、彼ではなく、その指示に従わなかった自分の方なのだ。

“俺を信じろ！”

その言葉が、心の奥底をきゅっと強く締め付けた。そう、ここで頼れるのは、ゴットフリーだけだったのに……。

閉じた瞼を開いて、きりと真正面を睨めつけた。鏡の迷宮の奥では、おぞましい姿の白蛇が紅の瞳を輝かせ、ココの方を見つめている。

後ろの“笑う少女”は無視する事に決めた。

怖くて怖くてたまらない。けれども、意を決したように、ココは前に一步を踏み出した。

「ゴットフリー！私を置いてゆかないで！」

そこは、元の鏡の部屋。
白蛇の姿も少女の姿も、大量にあった紅の花びらさえも、すべて
が消えうせていた。

Chapter 19

「ずい分、賑やかに騒いでいたな」

隣を見上げ、鏡の向こうに自分を見つめている黒装束の男を見つけた時、ココは心底、胸をなでおろした。

良かった。やっぱり、待っていてくれたんだ。

「声が聞こえてたんなら、助けてくれれば良かったのにつ！」

だが、ふくれっ面のココを無視して、ゴットフリーは相変わらずの淡々とした口調で言う。

「自分で居残ったんだから、自己責任だろ。まあ、あの甘い香りに惑わされなかった事は誉めてやってもいいが……」

というか、この娘、よく自分の意思だけで、あの“幻惑の迷宮”を抜け出てきたな。

けれども、その思いは口に出さず、ゴットフリーは前方を指差した。

「その先が、出口だ」

「本当！？良かったあ。やっと、ここから出れる！」

鏡の向こうのココは満遍の笑顔だ。しかし、次の瞬間、その表情は曇り顔に変わった。

「駄目。壁があって出られない……」

「何っ?!」

彼女がいる側の迷宮の奥が、軋み出したのは、その時だった。

「大変！鏡が割れる!! ガラスが空から降ってくる」

迷宮の奥から雪崩のように、鏡の壁が崩れ出したのだ。

ココは、絶叫した。

鏡の向こうにいるゴットフリーに助けを求め、思いきり壁をたたいてみても、彼の元へ手は届かない。

やはり、そうは簡単に出してはくれないのかっ。

天井から落ちるガラスの刃が、少女を串刺しにするのは、もう、時間の問題だった。

くそっ！こんな迷宮にやられてたまるかっ！
半ば、無意識にゴットフリーは叫び声をあげた。

闇馬刀っ！

その瞬間、黒い閃光がにわかに湧き上がった。
ゴットフリーとココの間を阻んでいた、銀色の壁の中で、その輝きは高速に照度を増してゆく。

ええっ！……剣？！それも鏡の中に！

ココは、啞然と目の鏡の中に垂直に浮かび上がった、一本の剣に視線を向けた。

その色は、影のように暗く闇に沈んでいる。だが、刀身は北斗七星の先端にある破軍星の煌きを放ち、その切れ味は疑う余地もない。

闇馬刀……光と闇の間から現われる剣。

なるほどな、鏡の中はお前の範疇なのかもしれない。

ゴットフリーは、にやと笑った。それならば……

「闇馬刀っ、その鏡の内側から、このいまましい壁を切裂いてしまえっ！」

ざらりとその刀身が主の声に反応した。

その瞬間、空気が炸裂した。鋭い金属音と共に無数の破片が辺りに飛び散る。

「ゴキブリ娘、こっちへ来いっ！」

いきなりぐいと引かれた腕の方向へ、ココは迷いもなしに飛び込んでいった。

「ゴットフリー、今度はこっちの部屋が壊れるっ！！」

崩壊の連鎖は止まらない。ゴットフリー側までもが大音響をたてて崩れ出したのだ。結合力を失ったガラスの欠片は、一瞬、空中をさ迷い、それから、諦めたように急降下を始めた。

「出口へ進めっ！」

有無を言わず、ゴットフリーは、ココを、間地かに見えていた出口に向かって突き飛ばした。

膨大なガラスの破片が、土砂降りの雨になって降ってくる。

ゴットフリーは間一髪で、それらをすり抜け、迷宮の出口へ倒れ込んだ。

雷鳴のような轟音。

それが地響きに変わった時、鏡の迷宮は、完全に崩壊した。跡には光を失ったガラスの廃棄物が、山をなして積みあがっていた。

＊ ＊ ＊

エターナル城の西に傾き出した太陽を、タルクは手持ち無沙汰な様子で眺めていた。王宮武芸大会もBWとの2回戦が終わった後は、とんとん拍子に勝ちあがってしまった。決勝戦の相手を決める別ブロックの対戦が終わるまではやる事もない。

「あゝあ、待つっていうのは、最大の時間の浪費だな」

「タルクが早く勝ちすぎるからだよ。もう、ちよっと、手加減してやれば良かったのに」

早く終わらせて、ゴットフリーを探しに行きたかったのに……

不満げなタルクの様子に、ジャンが笑う。

「心配しなくても、大丈夫」

「……」

「あいつが御陀仏にでもなっていたら、僕にはすぐにわかるから」

無邪気な笑顔で、けっこう怖い事を言う。よくわからんが、こいつとゴットフリーは、時々、何処かがシンクロ（同調）するらしい。

「姿が見えないが、ミッシェはどこへ行った？」

「何か誘いが多いらしくて、断るのに苦労してる」

「男にか？」

「まあね」

そりゃあ、あの美貌だから、色々な男に誘われるのも無理はないが……。

タルクは、ジャンの言葉に眉をしかめた。断りながらも本当のところは笑顔をひけらかして、媚びを売っている……そんな風に感じるのは俺だけか？

無愛想だったけど、俺は前のミッシェがけっこう好きだったんだ。

そんなタルクの気持ちを表情から察したのか、ジャンは小さく息をついた。その時、別ブロックの競技場から、大拍手が巻き起こっ

た。興奮した様子の男がタルクの方に駆けて来る。

「その大入道、決勝の相手が決まったぞ！ 決勝の相手は、テンペスト修道会のキャリバンだ」

「テンペスト？ キャリバン？ ふざけるのも、大概にしろよ」

無然として立ちあがるタルクに向けてジャンが笑う。

「良かったな、タルク。対戦相手はまともそうな名前じゃないか。きつと真っ向勝負の一騎打ちができると思うぞ」

「お前、知らないんだろう？ 俺はリリア様の道楽に散々つき合わされたから、すぐに気づいたぞ。何かまともな相手だ？！ キャリバンっていうのはな……シェークスピア劇に出てくる怪物の名だ！」

Chapter 20

王宮武芸大会 決勝戦。 長剣のタルク VS テンペスト修道会、キャリバン

大歓声の渦の中で、タルクは仁王立ちで対戦相手の登場を待っていた。審判の呼び出しにもかかわらず、相手はいつまでたっても現れない。

「まさか、おじけづいて、途中棄権か？」

ざわざわと、観客たちが苛立ち始めるタイミングを見計らったように、城門の下から馬のひずめの音が鳴り響いてきた。

馬上の男は、鎖帷子と盾で身を守り、切先に鍵爪のついたランス（長槍）を手に携えて、ほとんど中世の騎士かと見紛う出で立ちだ。だが、顔はまだらに日焼け、体はひからびた魚のように痩せこけている。

落ちつきなく動かす目玉は、どう見ても武芸大会の決勝戦まで勝ちあがる猛者とは思えなかった。

なりの割には、貧相な顔だな。それに馬でお出ましとは、騎馬戦でもやろうっていうのか？

渋い表情のタルクに、騎乗の挑戦者は嫌な笑いを浮かべながら言った。

「俺の名はキャリバン。おらあ、天のお神酒を飲んじまった。その徳利にかけて誓って、あのお方の忠義な家来になったんだ。だから、お前を倒さねばなんない。勝ったら、自由放免だ。忌まわしい術から、さよならだ」

「どうでもいいが、ひでえ田舎訛りだな……わけのわからん口上を述べてないで、早く勝負しろ！俺だって、こんな最低の武芸大会、とっとと、さよならしたい気分だよっ！」

「待て、待て。お前も名を名乗らんか。失礼な奴」

ああっ？名を名乗れって？騎士気取りも、いい加減にしろよ。タルクはまさに、怒髪天を突く——鬼さながらの形相でキャリバンを睨みつけた。

「ガルフ島警護隊第一部隊、筆頭。長剣のタルク！！」

「へえ……」

その一瞬の間について、キャリバンは馬の腹を蹴った。

「卑怯だぞっ！戦うなら、馬から降りろっ！！」

ジャンが叫んだ言葉は、巻き起こった歓声と、激しくぶつかり合う鋼鉄の音に打ち消された。

馬上から振り下ろされるランスが、頭の上から降ってくる。おまけに油断していると馬の蹄に蹴り上げられてしまいそうだ。どう考えても分が悪い。タルクは長剣を盾に防戦に努めるのが精一杯だった。

「こりゃ、愉快でたまらん。今度はあんたの服を肉ごとひきさいてやろうか」

ランスの切先についた鍵爪が、びりっとタルクの衣服を引き裂いた。キャリバンは絡めとったタルクの袖を、獲物を見せびらかすように掲げあげ、醜悪極まりない笑みを浮べた。

「勝手に言ってるっ！あいにく、俺は人前で裸になる趣味は持ち合わせていないんだ！」

うおおおっ！と雄叫びと共に、タルクの長剣がキャリバンのランスに振り下ろされた。鋭い金属音と共に、切断された長槍の片割れが宙を舞う。

「おう、たいした威力だなあ。でも、何本まで折れるかなあ」

喜喜として馬上からタルクを見下ろし、キャリバンは、あたふたと新しいランスを持って駆け寄ってきた小姓の方へ手を伸ばした。

「50本か？100本か？何本、折られたって替わりはいっぱい、あるからな」

「あんなの、ルール違反だろうがっ！何であいつだけ、優遇されてんだよっ！」

ジャンはまくし立てるように叫んだ。だが、

「この武芸大会で、ルールなんて、守る奴はいねえよ。楽しけりゃいいのさ。死ぬのが怖けりゃ、早めに負けを認めればいい。それに、血がいっぱい流れるほど、王族どもが喜ぶしな」

ジャンのもとに戻ってきたミツシェだったが、彼女にまわりついてきた男の一人が言った。肩にまわされた、その男の腕にもたれかかるようにミツシェが笑う。

「だめだめ、タルクは負けを認めちゃあ。だって、賞金がかかってるんだもの。血をいっぱい流したって、ジャンが傷を閉じればいいのよ」

「ミツシェ……」

ジャンは、愕然とその顔を見つめた。

徐々に失われてゆく青い瞳の澄んだ光。だが、それとは裏腹に薔薇のような笑顔をふりまき、その美しさを増してゆく。

お前は僕たちを見守ってくれてるんじゃないのか？

ミツシエは現し身……アイアリス……虹の女神の。

ガルフ島で、ミツシエが僕を訪ねて来た時に、それは、もう分かっていたんだ。ミツシエは成長するほどに、女神アイアリスに近づいてゆく。そして、僕らがレインボーヘブンを見つけた時、お前は再び女神に還る。

とつくに、ゴットフリーもそれに気付いているぞ。

それなのに……

お前は行きつく先をどこで間違えてしまったんだ？！

＊ ＊

武芸大会の最終決戦。競技場には、切り取られたおびただしい数のランスの残骸が散らばっている。

「すげえっ、37本目！」

おどけながら、タルクに折れたランスの数を数えるキャリバンが憎らしくてたまらない。折っても、折っても小姓が新しいランスを奴に運んでくる。小姓はくたくたに疲れるだろうが、敵は馬上で涼しげに笑っているのだ。

まるで埒があかない。このままじゃ堂々巡りの繰り返しだ。

はあはあと息をきらして、タルクは長剣を再び構え直す。なんとか、あいつを馬の上から叩き落とせないか。畜生！ちっともいい考えが浮かばない。

ゴットフリーなら……

一瞬、浮かんだその名前を、タルクは打ち消すように頭を横に振

る。駄目だ！奴に頼っていては。と、その時、黒い旋風が舞い上がった。

「何だっ！！あの馬はっ！？」

会場を埋め尽くしていた観客が、啞然と声を荒げて叫んだ。

王宮の中庭に突然現れた、深い夜の底のような漆黒の馬。馬と呼ぶには神々し過ぎる、太い四肢を大地に踏みしめた堂々としたその姿。

「ゴットフリーの黒馬……」

主がいないこの場所に何故？ジャンは一瞬、我が目を疑った。だが、

あいつ、随分、タルクの事を気にかけていたもんな。

“タルクに付いておけ。奴一人では、抱えきれない事態が起こるかもしれない”

ゴットフリーのその言葉を思い出し、ジャンは、合点がいったように頷いた。

＊ ＊

ゴットフリーの黒馬……まさか俺を乗せてくれるってえんじゃ？

タルクの脳裏に、ふとそんな考えが浮かび上がった。だが、黒い瞳は冷たく自分を見据えている。とても、その背に乘せてくれそうもない。ただ、黒馬はタルクの後ろに四肢を広げ、戦況を見つめているだけなのだ。

「ななな……何だ？この馬……偉そうに。なな……何でこんなに俺は震えてるんだ？」

キャリバンは、揺れる体を止める事ができなかった。それもそのはず、震えているのは自分ではなく、彼が腰にまたがった馬の方だったのだから。

「こらっ、あんな黒馬ごときに震えるんじゃないっ！動けっ、動くんのだあ」

どんなに鞭をあてがわれても、キャリバンの馬は金縛りにあったかのように、その場に立ち尽くしている。

しめたっ！今だっ。

つかつかとキャリバンの馬に歩み寄り、タルクはその足をぐいつかんだ。そして、ありったけの力でそれを引っ張った。

「お馬さんは、びびっちゃまって、もう戦うのは嫌だよ。だから、もう、お前は下へ降りて来いっ！」

キャリバンが地面へ叩きつけられたのと、彼の馬が競技場の出口に向かって脱兎のごとく逃げていったのは、ほぼ同時のタイミングだった。

「さあて、やっと普通の勝負ができるようになったじゃないか。最後のランスを構えやがれ！俺がお前と一緒にそれをへし折ってやる！」

タルクの長剣が蒼い光を放ち出した。そして、その光と入れ替わるように黒馬の姿は薄れていった。

Chapter 21

鏡の迷宮を抜けたココとゴットフリーが飛び込んだのは、細長い円筒形をした部屋だった。

「天井が見えないね」

天体観測の星を眺めるように、ココは上を見上げた。天井はどこまでも高く、その先は暗黒の空洞としか思えない。ずっと見つめていると吸い上げられてしまいそうで、それが余計に得体の知れない不安をかきたてた。すると、

この部屋の形……もしかすると

ゴットフリーの脳裏に派手に飾り付けられた、エターナル城の概観がにわかに浮かび上がってきたのだ。

「どうも、俺たちは城の尖塔の中にいるようだな」

「尖塔って？」

「城壁の内側に付いている塔の事だ。お前も見覚えがあるだろう？ 三角屋根がついた長細いやつ。普通は上に番人がいて、ここは地下だから……まあ、土牢というところかな」

「土牢！？ じゃ、もう捕まってるんじゃない。私たち！」

だが、目をぱちくりと瞬かせたココを見て、ゴットフリーは小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、

「土牢のようだと言っただけだ。だいたい、何処の馬鹿が土牢に出口を作るんだ。後を見てみろ。次の部屋への扉がある」

振り返ってみると、確かにそこには小さな扉がついていた。ココはそうっとノブをまわしてみる。

「ここには鍵がかかっていないね。でも、狭いな、この扉。やっと

私、一人が通れる大きさじゃない」

「鍵がかかっていない？」

上の方から轟音が響いてきたのは、ゴットフリーがかすかに眉をひそめた、その時だった。

不審げに上を見上げた少女の背筋に悪寒が走る。

天井が見える？天井と自分たちの間が狭まって……
違うっ、これはっ

「天井が落ちてきてるんだあーっ!!」

「ゴットフリーッ!!」

その名を呼ぶのが“危機一髪”時の決まりになってしまった。ココは扉の向こうに逃れようと、ご指名の彼の腕を強引にひっぱった。だが、

「騙されるなっ！そちらの部屋が罠なんだ」

力任せに首ねっこを引っつかまれ、ココはその胸元に尻餅をつくように倒れこんだ。ココの体を抱きかかえたまま、ゴットフリー自身も後ろに倒れ込む。それから、落ちてくる天井を鋭く睨めつけた。

ギギイイイ……!!

何かが軋むような音とともに、塔の外壁が小刻みに震えた。その直後に岩の天井が轟音を伴う圧力となって二人の上に落ちてきた。

あああっ……駄目っ！もう、絶対死んだ!!

ココはたまらず頭を抱え込み、ゴットフリーの腕の下に潜り込む。

だが、

座り込んだ二人の上、およそ30cm！

それは、頭をぎりぎりに掠めた微妙な位置。

と、止まった……。

潜り込んだ腕の中から、頭のすぐ上まで落ちてきた岩天井を見上げ、ココは、はあっと息を吐いた。だが、その直後に、がたんつと床が揺れ、扉の向こうにあるはずの部屋……先ほど、ココがゴットフリーを伴って逃れようとした、その場所が地下の更に地下……奈落の底に落ちていったのだ。

冷や汗が噴水みたいに、わき上がってくるのを止められない。

「もし、あっちに行ってたら……」

そんな少女の様子を氣にとめるわけでもなく、ゴットフリーの口調はどこまでも、淡々とそっけない。

「一貫の終りだったな」

「何で？何で、あちらの部屋が罠だとわかったの？鍵がかかっていなかったから？」

「五月蠅い。大きな声を出すな」

「だって、そういう事って知りたいじゃない」

さっきまで、蒼い顔で震えていた娘はどこへ行った？呆れたように、ゴットフリーはココに視線を向ける。

「勘だ」

「え？」

「勘」

「ええーっ！！」

それって、こいつが一番、嫌いな言葉かと思ってた。それなら、私が勘で迷宮の扉を選んでも、ちっとも悪くないじゃない。

ふくれっ面のココに向かって、ゴットフリーは人の悪い笑みを浮かべ、

「だが、俺の勘は、お前のようなあてずっぽうな“くじ”とは違うぞ。考えてみろ。ここの迷宮で“こちらへどうぞ”と開いた場所には必ず罠があるじゃないか」

あてずっぽうな“くじ”で悪かったわね！

一言、言い返そうとその顔を見上げた時、

あ、笑ってる。

初めて近くで見た、残酷無比と言われた警護隊長のその表情。万遍の笑みには、ほど遠いけど、ココは何だか嬉しくなった。この至近距離でこの状況は、超レアかも……。

もう、ちょっと、このままでもいいよ。

しかし、この状況が長く続くわけではないのだ。

がたんっ

二人の下の方の床が揺れる。その瞬間、

「今度は上がるっ！！もう、どうにかしてっー！！」

ココは鳴き声のような叫びをあげて、再びゴットフリーにしがみ

ついた。凄まじいスピードで上昇する部屋の中で、激しい耳鳴りが二人に襲いかかってくる。

上と下から相互にのしかかる耐え難いほどの圧力。今にも押しつぶされてしまいそうな空間の中で、ゴットフリーはココを守るように抱え込むと、たまらず声を荒げた。

「部屋が上昇？だから、尖塔だったのか？！この馬鹿げた迷宮の行く着く先、それは一体、何処なんだっ？！」

＊ ＊

王宮武芸大会の決勝戦

“貧弱すぎる！本当にこいつが、王宮武芸大会の決勝戦の相手か！”

怯えた目をして、ランスの穂先を頭の上に構えるキャリバンを睨めつけ、タルクはちつと舌を鳴らした。

「こ、この木偶の坊、体ばかりの役立たず！脳みそはほとんどが筋肉か？お、おまけに下半身には、おかしい病気でも持ってるんだろ？」

「口ばかりが達者な奴！その足はなんだ？がたがた、震えてるじゃないか」

「うるせえ！馬車の下敷きにでもなって、腸をぶちまけろ」

呆れるばかりの悪態三昧。

「お前の親は一体どういう教育をしてきたんだ？よくそんなので、王宮に出入ができたな」

「親？あー、あれが親だと言うならば、たしかにことばを教えてくれたな、おかげで悪口の言いかたは覚えたぜ。疫病でくたばりやがれ！おれにことばを教えた罰だ」

ほとんど埒があかない状態にタルクは我慢がなくなかった。

「いい加減にその下品な口を閉じやがれっ！」

タルクは、長剣を手前に構えるとキャリバンの心臓めがけて、一気に突きあげた。だが、

長剣の切先が敵を串刺しにした……と思った瞬間、タルクの背筋に戦慄が走った。

ギギギギイ……

唸るような声をあげ、血煙をたてながら、のけぞってゆくキャリバンの体が、徐々に大きく膨らんでゆく。

ぼこぼこ波打った筋肉の筋は、巨大化しながら、その姿をゴレムさながらの怪物に変化させる。みるみるうちに、王宮の2階をはるかに越えた背と大木×10のような体を誇示するように、キャリバンが雄叫びをあげた。

グオオオオオオッ！！

「ひえっ！あ、あいつ怪物に変化しやがった。おまけに、こっちにやって来やがる！！」

大きく拳をあげたキャリバンが観客席に向かって、歩き出した。完全に自分で自分を制御できなくなっている。もう、武芸大会どころの騒ぎではないと、客たちは我先に城門の外へ逃げ出した。

「逃げるっ、タルクっ！踏みつぶされるぞっ！！」

ジャンが叫んだ。タルクが、見上げた頭のすぐ真上に怪物の右足が迫ってきている。

「くそっ！！こんな奴にやられてたまるかっ！」

長剣を投げすて、タルクはキャリバンの右足を両手で掲げ持った。背骨と胸に叩きつけられるような衝撃が走る。しかし、いくら力自慢のタルクでも、その何十倍にも膨れ上がってしまったっている怪物の重量を支えられるわけがない。

びりと嫌な痛みとともに鎖骨が、きしむ音がした。

「畜生っ、支えきれねえっ！！」

万事休すか！？

ところが、その時

ズドドドゥッ！！

王宮が飛び跳ねるように大きく揺れたのだ。

のしかかる重力から突然解放された違和感と、巻き上がる砂煙の凄まじさに、心臓が激しく鼓動する。どくどくと、脈打つ毎に痛む胸を押さえながら、タルクは手前に倒れている怪物を睨めつけた。

「タルクッ！大丈夫か？！」

「ジャン……お前か」

タルクは、彼に駆け寄り、心配げに顔を覗き込んできた少年の邪心のない瞳に、ほっと一つ、息を吐き出した。

こんな子供なのに、いざという時は本当に頼りになる奴だな。

キャリバンを間一髪のところまで、投げ飛ばしたのは、ジャンだったのだ。

＊ ＊

「馬鹿なキャリバン。観客に向かってゆくなんて。私が見たいと言ったのは、あの男が血祭りにされる姿だったのに……」

王宮のバルコニーで、王妃が一つため息をついた。

「でも、あの怪物が踏み潰して、王宮が観客たちの臓物で積み尽くされるのも、それはそれで愉快かしらね」

「何じゃ…何かおもしろい事でも、起こったのかあ」

王妃の横で、ぐでぐでに酔いつぶれたグランパス王がつぶやく。

「ほほ……陛下を楽しませるほどのものでは、ありませんわ。それより、特別に取り寄せたこのお酒、お気に入りまして？」

もっと、どうぞと、酌をする王妃に向けて、王は待ちきれない様子で酒杯を差し出した。

「ああ……、美味じゃ。こんなに上手い酒は今まで飲んだ事がない……。一体何という名の酒なのだ？」

とろんと眠そうな眼を王妃に向けて、墮落しきったグランパス王国の統治者はだらしない笑顔を作る。すると、

「天のお神酒……私どもはそう呼んでおります」

王妃は、その問いに華やかに微笑みを浮かべ、それと正反対の陰湿な低くしゃがれた声でそう答えた。

Chapter 22

エターナル城の迷宮。

「一体、どこまで、上がるのっー!!」

激しく上昇する部屋の中で、ココが叫んだ。その体を抱え込みながら、ゴットフリーは、上目づかいに天井を睨めつける。

すると、明りのない尖塔の中に突然、光が差しこんできた。その瞬間、狭くて暗い空間から二人は、突然、開放された。

きゃやあああああっ!!

足元どころか、体を支えるものが全部消えてなくなってしまった。空が見える、町が見える。エターナル城が見えるーっ! 私たち、尖塔の最上階から外に放り出されたんだ!

駄目っ、もう、助からないっ!!

ぐるぐると景色が回っている。後はもう落ちるだけ。ココは万事休すと目を閉じた。だが、

「おいっ、しっかりしろっ!」

頭の上から聞えてきた、その声に、ココはきょとんと目を見開いた。どうやら自分はまだ生きていて、それに、落ちるはずの体までが空に浮いている。ばさばさと響いてくる羽音。え? これって……鳥?

「ぼうっとしていると、本当に下に落とされてしまうぞ」

人々の姿が、米粒くらいにしか見えない。怯えながら、ココは怖ず怖ずと声のした方向を見上げた。

「こ、これ、何？」

「天喜の白い鳥。レインボーヘブンの欠片、空」

純白の巨大な鳥の背の上から、ゴットフリーの声が響いてくる。というより、ココは、その鳥の背中の羽毛と彼の胸の下に挟まれて、空を飛んでいるのだ。

「レインボーヘブンの欠片、空？」

レインボーヘブンの欠片にそんな物までいたのか。しかも鳥。驚くやら感心するやらで、ココは息をつく暇もない。二人を乗せた、巨大な鳥は優美に羽を羽ばたかせ、尖塔のまわりを旋回している。

「もう一度、尖塔に降りてくれ」

ココは、その言葉にぎょっと目を見開いた。

「それ、この白い鳥に言ってるの？何で、また危ない場所に戻んないといけないわけ。さっさと、下に降りてしまおうよ」

けれども、白い鳥はココを完全に無視して、ゴットフリーの命令に従う。尖塔の三角屋根のちょうど真下が、四角に切り開かれた大きな窓になっていた。ココとゴットフリーを上昇させた部屋はその位置で止まり、滑り台のように斜めに傾いて、彼らを外へ放り出したのだ。

上昇した部屋は、彼らを放り出した後、まっすぐに位置をもどしていた。白い鳥をその場所につけさせると、ゴットフリーは、尖塔に開かれた窓から、再びその中へ入っていった。

「お前は来ないのか？それとも、その鳥の上から見える景色が気に入るか」

冗談じゃない。こんな所へ置いてゆかれてたまるもんですか。

結局、何処にいたって危ないんだから。それなら……と、ココはそそくさと、ゴットフリーの後を追った。

あの鍵のついていない扉を開けると、目の前に別の部屋が見えてきた。

「多分、ここが尖塔の一番上だ」

ゴットフリーの背に隠れるように、その部屋へ入ったココは、一瞬、目を瞬かせた。

エターナル城の尖塔。その最上階は、目を見張るまでの光の世界。尖塔の屋根に大きく開かれた天窓から差しこむ西日が、大理石の柱にはねかえり再び屋根にもどってゆく。幾重にも重なりあつた光の反射が、部屋全体を輝かせている。

そして、部屋の中央に横たえられた無色透明な直方体。その氷のような冷たい輝きを目にした時、ゴットフリーは小さく口笛を吹いた。

「あれって、まさか……本当に？」

ココの言葉に反応するでもなく、ゴットフリーは無言でその無色透明な箱に歩み寄っていった。

「伝説も時には真実を語るというわけか……しかし、王宮の地下というには、この場所は見晴らしがよすぎるな」

水晶の棺。6番目のレインボーヘブンの欠片が眠る、光の寝所。

やはり、お前は、いたんだな。エターナル城の迷宮の果てに。

＊ ＊

棺の中に横たわり、深い眠りで時間を止めるかのように、その人は、かたく瞼を閉じていた。

艶やかな銀の長い髪。少し青みがかつた透き通るような肌。些細

な刺繍を施した白い半絹の、足元まであるアルバ（司祭服）を身にまとい、胸に重ね合わせた手の下に、一枝の緑の葉を持っている。

ゴットフリーが知っているどのレインボーヘブンの欠片より、儂げで凜としたその姿。小さくため息をつく彼の横で、ココも引きつけられるように、水晶の棺の中に目をやった。

「綺麗な人……男？それとも女？この人がレインボーヘブンの欠片なの？」

「……とにかく、この棺を開けてみない事には何もわからない」

ゴットフリーはそう言うと、棺の蓋に手をかけた。相当な重量があり、彼一人の力では、到底開きそうにない。ココの力など助けになるはずもなく、仕方なく、押して蓋を少しずらしてみた。すると、「待って、ゴットフリー、この人、目を開く！」

蕾から咲きはじめた花びらのように、ゆっくりとかたく閉じられた瞼が開いてゆくのだ。

吸い寄せられるほどに美しいその瞳に見入ってしまい、ココは身動きすらもできなくなった。

花緑青の瞳。水晶よりもさらに深く澄んだその色に。

水晶の棺の中の住人は瞬きもせず、横たえたままの姿勢で、ゴットフリーの灰色の瞳に目をあわす。ところが、

“レインボーヘブンの王よ、水晶の棺を開いてはなりません”

静かに頭に響いてきた、張り詰めた声音。

えっ、今、頭の中で声が聞こえた……それに、レインボーヘブンの王って……誰の事？

ココは、少しうろたえた気分で、そばにいる黒衣の男に目を向けた。

まさか……こいつ？

その時、ゴットフリーの灰色の瞳が、急速に研ぎ澄まされた色に染まり出した。がたがたと尖塔が小刻みに震え出したのだ。

「下がれっ！何か異変がくるぞっ！！」

ココの体が、ゴットフリーの手で、後ろに跳ね飛ばされたのは、あっという間の出来事だった。

Chapter 23

棺の中の人が持った緑の小枝が突然、芽ぶき始めたのだ。

凄まじい速度で蔦を伸ばし、よどみ出た枝葉は幾つにも分かれ、そして、蓋の間をすり抜けて棺の外へ溢れ出す。

量を増し、長さを伸ばし……瞬きする間に、波のような緑の群れがゴットフリーとココの廻りを覆い出した。

また、尖塔の壁の隙間からも、同じような葉が芽吹きだしているではないか。みるみるうちに尖塔の最上階の部屋は、緑の海と化していった。

蔦はやがて小さな蕾をつけだした。そして、つんと鼻をつく香りと共に花が咲いた。

緑の花！？水晶の棺の中の人の瞳と同じ色の！

ココは、ゴットフリーの背中にぴたりと体を押しつけて、四方に乱れ咲く花の様を啞然と見つめた。

この花の香り！？まさかっ！

押し寄せてくる緑の洪水の中で、ゴットフリーは唇を震わせた。

同じだ。ザールの紅い花園と

黒馬島で俺を闇に招いた海の鬼灯。その化身の紅い花園。こんな迷宮の果てまで俺を追ってきたというのか。

一瞬、背筋が寒くなる。だが、

「痛っ！」

背中ごしに聞えたココの声。ゴットフリーは、はっと意識をそちらに切り替えた。見れば、右手を押さえながら彼の足元にうずくまっている。

「おいっ！大丈夫か？」

「緑の花の棘に刺された……手がしびれて動かない」
「何っ」

“手がしびれて動かない” タルクも前に同じような事を言っていた。確か城下町の腕ずもう大会でヤクザに毒を使われて……ラピスがタルクの治療をした時

あの時、ラピスはこう言った。

“それは、ランカっていう植物からとれる毒薬さ。どういうわけだか、ランカはエターナル城のまわりにしか生息しない。だから、エターナルポイズンって呼ばれてるんだ”

そういえば、鏡の迷宮で俺たちを惑わせた甘い香りも、これとよく似ていた。まさか……

「エターナルポイズン。この緑の花はその原料のランカなのか！」

だが、ランカの毒の本質は即効性の劇薬……ゴットフリーは、あせった様子でココに目を向ける。

「ゴキブリ娘、お前、大丈夫か」

「だから、しびれてるって言うてるじゃないのっ!!」

悪態をつける元気は十分にあるようだ。短く息をつくとき、ゴットフリーは緑がはびこる水晶の棺に目をやった。

“レインボーヘブンの王よ、水晶の棺を開いてはなりません”

その声が再び頭に響いてきた。おびただしく繁茂を続ける緑の葉――“ランカ”を睨めつけると、ゴットフリーは、突然、叫ぶようにこう言った。

「退け、俺の邪魔をするのは許さない！」

一瞬、空気が凍りついた。
すると突然、

ゴットフリーの足元から水晶の棺までに、はびこっていたランカの群れが、一斉に蔓を縮め出したのだ。

そう、まるで彼に道を開けるかのように。

水晶の棺に駆け寄ると、ゴットフリーは自分が先程ずらした棺の蓋に手をかけた。相当な重量がある蓋は簡単には動かない。後ろにまわり、力まかせに元の位置に押しやった。すると、
尖塔の最上階の部屋を覆い尽くしていたランカの群れが、急速に
しぼみ出した。

“そう、それでよいのです。賢明な王よ。水晶の棺を開いてはならない”

ゴットフリーが棺に目をやった時、その中の人は再び瞼を閉じようとしていた。

「待てっ、俺の質問に答えろっ！お前はレインボーヘブンの欠片なのか？そして、何故、こんな場所に閉じ込められた？」

“私はレインボーヘブンの欠片……樹林。だが、呪われたこの身は、水晶の棺から出る事はできない。さすれば、この城は魔毒の居城となるのだから”

「呪われた？誰がそんな事をした？海の鬼灯か？それとも」

レインボーヘブンの守護神、アイアリスか……

だが、ゴットフリーがその名を口にする前に、棺の中の人のかた
く目を閉じてしまった。

尖塔の最上階の部屋は、再び光の部屋に姿をもどした。だが、以
前と違っているのはおびただしいランカの枯れ枝があたりに散乱し
ている事だった。

深くため息をつきながら、ゴットフリーは尖塔の部屋の窓辺へ歩
いていった。軽く外を見渡すと、ココの元へ戻って来る。

「腕はどうなんだ？まだ、痺れはとれないのか？」

「うん、しびれてる。でも、それだけであとはどうって事ないよ」
「そうか……」

その時、窓から一匹の白い鳥が舞いこんできた。くるりと1度、
部屋の中を旋回すると、ココの肩にふわりととまる。

「あれっ？白い鳥？」

さっきココたちを乗せた超デカ鳥とは、サイズが違う。普通のか
わいい鳥。なんだかほっとした気分で、ココは笑顔をみせた。

一瞬、ココと白い鳥に目を見比べると、ゴットフリーは言った。

「お前は、このままラピスの所へ飛んで行け」

「えっ！？飛ぶって？私にそんな芸当できないよ」

「……相変わらず空っぽな頭だな。その鳥 一天喜の白い鳥」が
お前をラピスの所まで運んでくれると言っているんだ」

「この鳥が？」

ココが不思議そうに肩に目をやった瞬間、白い鳥は再び尖塔の窓

から飛び出ていった。そして、突然、

うわっ、巨大化したっ！

再び、ココの目の先で怪鳥と化して白い翼を大きく羽ばたかせた。

“来い”というゴットフリーの命令に、逆らえるまでもなく、ココは窓のそばまで歩いていった。まさか、これに乗って一人で行くのか？死んだ、死んだ、もう死んだ。

だが、ゴットフリーは淡々と言った。

「ラピスの医院まで行って、腕を見てもらえ。その毒はエターナルポイズンだ。きちんと解毒しておかないと、後々面倒な事になる」

「ラピスの医院？でも、あいつ、今、ラガーの所……」

言いかけて、ココははっと口を閉ざした。

マズい！ゴットフリーたちには秘密だってラガーに言われてたのに。

微妙に眉をしためたが、ゴットフリーは特に何の反応もなく、言葉が続けた。

「適当に指示を出せば、この鳥はお前の言った場所へ行ってくれる。だが、しっかりつかまっていないと、下に落ちれば一貫の終わりだぞ」

「腕がしびれて、しがみつくななんて無理！」

「なら、それを着ろ！」

ココの頭に無造作に投げ捨てられたゴットフリーの上着。片腕を通して見たが、痺れた側の腕は、どうあがいてみても上手く袖に入らない。

まったく面倒な娘だ！口の中でつぶやくと、激しく嫌な顔つきでゴットフリーはココの腕をとり、入らなかった上着の袖をその腕に通してやった。それから、無造作にココを抱き上げると外にいる天喜の白い鳥の背中に彼女を乗せた。

「この上着、ぶかぶか。大き過ぎるよ！」

そんなココの台詞には目もくれず、ゴットフリーはココの手の先から長く余った上着の袖を挟みこむように白い鳥の首に回し、手前で強く括りつけた。

その時、ココの胸元で小さくきらめいた光。ゴットフリーは、はっとそれに目をやった。

銀のロケット？

そういえば、サライ村のレストランでも、こいつはこれを身につけていた。ゴキブリ娘には上等すぎると、あの時は思った。しかし、これは……

似ている……黒馬島でザールが持っていた俺の親の形見だという金のロケットと。

「ちょっと、それに触らないでよっ！大事な物なんだからっ」

「ゴキブリ娘……そのロケットはどこで手に入れたんだ？」

「……知るもんか。どうせ、どこかで盗んだって思ってるんでしょ？それより、これじゃあ、身動きがとれないじゃないのー！」

白い鳥の上にゴットフリーの上着で縛り付けられた状態のココは頬を膨らませて抗議する。

「それでも、下に落ちたなら、お前は相当な間抜けだ！」

「でも、私が白い鳥で行っちゃったら、ゴットフリーはどうするの？ 帰る道がなくなっちゃう。それに水晶の棺の中の人は？」

「俺は尖塔の外側にある螺旋階段を下りて行く。あの棺の事は……また、後日だ。今はどうする事もできない」

ココが持っていたロケットの事も気にはなったが、ゴットフリーはその気持ちを敢て無視した。

「俺は、まだこの城に用があるんだ……だから、お前はさっさと行ってしまえっ！」

その声に従うように、白い鳥が大きく羽を羽ばたかせた。そして、天喜の白い鳥は、心残りの表情のココを乗せて、エターナル城から飛びたっていった。

Chapter 24

尖塔の周りには、ぐるりと取り巻くように螺旋階段が取り付けられており、水晶の棺のある最上階の部屋からも、そこへ出ることができた。

螺旋階段への降り口で、ゴットフリーは、ココを乗せた白い鳥が西の空へ飛び去るのを腑に落ちない気分で見届けていた。

ゴキブリ娘の銀のロケット……そして、俺の親の形見の金のロケット……

心のどこかに何かが引っかかって仕方がなかったが、それを振りきるように螺旋階段を下りてゆく。すると、対面にひとときわ豪華な窓辺が見えてきた。その上に備え付けられた見張台と思われる別部屋を確認して、

多分、城壁の向こうに王族たちの部屋がある。

ゴットフリーは、螺旋階段の途中から横に繋がっている城壁の方へ進む方向を変えようとした。……が、足元に迫ってくる白い靄に視界を遮られ、急に足を止めた。白い靄に邪魔されて階段の先が全く見えない。

霧?! さっきまでは、西日が眩しいくらいに差しこんでいたのに……

そんな事があるものかと、ゴットフリーは思わず自分の目を疑ってしまった。彼の足元が大きく揺れ出したのは、その時だった。

赤い舌先と巨大な白い胴体が尖塔を這い登ってくる。

また、白い大蛇?! まさか!

咄嗟に腰のレイピアに手をかける。びゅうと風が吹いたのは、その瞬間だった。

“騙されないで、それは幻!”

その凜と響く声にかき消されるように、大蛇の姿は見えなくなつたが、急に目の前に開けた足がすくむような高所の視界に、ゴットフリーはひやりと冷たい汗をかいた。

この声はレインボーヘブンの欠片……夜風。

「霧花か……助かった。分かっているつもりでも大蛇の幻に誘われて、危うく空中に飛びこむところだった」

”夕闇が迫るこの時間には、私の力も強くなる。この場所には、何やらおかしいな幻術がかけられているわ。尖塔を覆っている靄は私が全部吹き消してしまうから、あなたは早くここから離れて”

「それが賢明なようだな」

ゴットフリーは空から聞こえてくる声に頷くと、ふと思いついたように、こう言った。

「そう言えば、俺はお前の姿をまだ見た事がない」

一瞬、風は沈黙した。

“……まだ、夜が来ないから……私の姿はあなたには見えない”

そうかと、軽く返事をかえただけで、ゴットフリーは、それに再び触れる事はしなかった。そして、螺旋階段から横へ続く城壁の

方向へ足早に歩いていった。

＊ ＊ ＊

城壁を通り過ぎると、先ほど見えていた王族の部屋へ繋がる回廊へ入る事ができた。すると、城壁の向こうから、異様にテンションがあがった人々の声が響いてきたのだ。

王宮武芸大会の観客?! えらく興奮しているようだが、何かあったのか?

ゴットフリーがいる位置は、ちょうど、会場と正反対でその様子を覗う事ができない。

タルクは大丈夫だろうか、かすかな不安が胸に浮かぶが、今の騒ぎの収拾に借り出されてしまったのか、城壁から続く回廊への入り口には近衛兵らしき兵隊が一人もいない。城の中にほぼフリーパスで入り込める、このチャンスを逃す手はなかった。

＊ ＊

最高級の栗の木に、贅をつくした彫刻の縁取り。極めつけは金細工で作られた“ラジオラス”――スウォード・リリーの紋章の扉飾り。

「ここが、王女の部屋か」

一見して、そうと分かる大扉の前で、ゴットフリーは扉のノブに手をかけてみた。施錠されているわけでもなく、衛兵がいるわけでもない。驚くほど簡単に部屋に入ることができた事に、畏ではないかと不審感がつのってくる。

だが、王女の部屋は、静かにその中へ彼を受け入れた。

開け放れた窓からは秋の風が流れ込んで、絹で織られたレースのカーテンを涼やかに揺らしていたし、部屋の要所に置かれた鉢の小花は、強剣マンブルを振り回す剣豪の王女というよりは、かわいい

姫といった印象に満ち溢れていた。

どうやら、王女も侍女たちも部屋にはいないらしい。

扉と対面側にある大鏡。

それに映し出された自分の姿を見て、ゴットフリーは苦笑した。

ひどい有様だな。

上着はココに渡してしまっただけ、水浸しでおまけにシャツには白い大蛇と闘った時の血のりまでがこびりついている。

大鏡の真横にあった王女のベッドに目をやると、ゴットフリーは腰からレイピアを引き抜き、御役御免とばかりに、そこへぐさりと突き刺した。

確か、王女は、俺が迷宮から無事に戻れたら、これを受け取ると約束したんだっただけ。

そのままごろんと、ベッドの上に横になる。

それにまだ、あの王女には聞きたい事が残っているんだ……。

ベッドから見える、小花の地模様の白い天井を見つめながら、ゴットフリーはふと考えた。

それにしても、この部屋の心地よさは一体、何だ？ 重苦しく陰鬱なエターナル城の中で王女だけが、ご健全なわけか？

俺にとっては、その事が、かえって不自然に思えてならない。
不幸な王女。

お前自身も毒にどっぷり染まってしまえば、さぞや楽だろうに。

この国は熟し過ぎた果実のようだ。繁栄の後には没落が待っている……水晶の棺からあふれ出たあの緑の花が、海の鬼灯の化身ならば、近いうちにお前は見る事になるだろう。自分の国が崩れてゆく……その様を。

まあ、ガルフ島や黒馬島と違って、この国がどうなろうと、俺には関係ない話だ……と、ゴットフリーは小さく笑うと、疲れた思考と体を休めるように瞼を閉じた。

＊ ＊ ＊

王宮武芸大会の会場で、暴走し、怪物と化したキャリバンは、ジャンに投げ飛ばされた位置から、ゆっくりと体を起こしだした。色は赤みがかった黄土色で、ぼこぼここと巨大なコブが幾つも重なったような胴体にはかろうじて、顔かな？と思われる頭部がついている。目や鼻は、膨れ上がった筋肉の下に埋もれてしまって、その機能が果たされているのか否かは知る由もなかった。

「きゃああああっ！！」

「逃げろっー！！踏み潰されるぞっー！！」

ぐるるるるっ……

唸るような声をあげて、キャリバンは観客席に向かって、ゆっくりと歩を進めてゆく。

「これじゃあ、まるで怪獣映画だ……ジャン、何とかなんのかわかんない、観客を踏み殺してしまうぞ！」

もう、これは、俺がどうにかできるもんじゃない。

請うような眼差しを向けてきた、タルクにジャンは、

「ちよっと、待って！今、大地の気呼び集めているから」

静かに目を閉じながら、ジャンは大地を踏みしめるように立っていた。どこからか伝わってくる小刻みな振動。すると、その体がぽうっと蒼く輝き出したのだ。

「へえ、そういうことだったのか、なら遠慮はいらないな……タルク、揺れるからっ！どこかに捕まるか、地面に伏せていて！」

そう言って、とび色の瞳の少年が、前に突き出した右手のひらを開けた瞬間、眩い蒼の光が辺りを覆い、大地がごうっと唸り声をあげた。小刻みだった揺れが突然、立っている事もできない大揺れに変わる。

「きゃあああっ！」

「うああお！！」

観客のパニック状態がさらにひどくなる。すると、巨大化したキヤリバンの四隅の土が、徐々に盛り上がり出したのだ。それは彼の周りに四つの壁を作りながら大きく上に伸びてゆく。そして、頭の上まで丈を伸ばすと、土壁は箱の蓋を閉じるように、その上に天井を作り始めた。

箱？ジャンは、巨大な土の箱に、あの怪物を閉じ込めようとしてるのか……？！

たまらず、地面に這いつくばったタルクは、目の前に作り出されてゆく巨大な“箱”を食い入るように見つめた。

うおおおおおっ!!

出せえっ!とばかりに、箱の中のキャリバンの呻きが響いてくる。中でもがいているのか、どんと壁を打つ音が、地面から伝わってくる。

キャリバンの体は、完全にジャンが作り出した強靱な土の箱の中に入り込んでしまっていた。

「ジ、ジャン……あの箱に怪物を閉じ込めてどうしようってえんだ?」

ようやく、止まった大地の揺れ。冷や汗をかきながら、タルクはジャンの元へ駆け寄ってきた。

「箱?……違うよ。あれは棺だ。水晶の棺をちよつと真似てみたんだ」

珍しく小悪魔のように笑い、ジャンは叫んだ。

「ゼロ・コフィン! 虚無の棺!!」

そして、手前に差し出した手をぎゅっと強く握り締めた。

すると、キャリバンを閉じ込めていた土の箱が、急速に縮みだしたのだ。咄然と見つめるタルクの前で、一軒家ほどのサイズがあった箱は、電話ボックスになり、郵便ポストになり、サイコロのように小さくなって……そして、ほんの数秒のうちに……

中にいるキャリバンとともに、影も形もなくなってしまった。

「ジ、ジャン、お、お前っ、何て技を使いやがるんだっ!？」

あの怪物を消し去りやがった……おい、おい、こんなの有りかよ。

タルクは、ジャンの力の大きさにただ、ただ、飽きれるばかりだ

ったが、ジャンは少し照れたようにこう言った。

「いくら僕でも、何もかもを消しつくすなんてできやしない。奴がいた場所をよく見て、小さな土の山ができているから。あのキャリバンって怪物は、もともとは土くれでできた泥人形だったんだ。大地の気がたまった時に僕にはそれがわかった。土を土に返しただけだから、あんな技ができたんだ」

「泥人形？あのキャリバンが？」

「うん、誰かの呪術で命を吹き込まれてたんだ」

「誰かがか？何を今更って感じたな。俺の頭にはその答えがはつきりと浮かびあがっているぜ」

――王妃だな――

ジャンは、目で語ったタルクの言葉にこくんと一つ頷いてみせた。「きっと、キャリバンだけじゃない。この王宮には、同じように邪悪な術をかけられた怪物たちが、あちらこちらに巢食っているに違いない」

「怪物が出場してる武芸大会なんて、まともに終わるわけがない。そんな大会に出場して、散々馬鹿な戦いをして、俺は猛烈に後悔してるよ」

タルクは、はあと息をつくとき、うんざりとした表情でつぶやいた。たとえ、それに勝ったとしてもだ。

王宮武芸大会終了。 優勝者、長剣のタルク（暫定）！

Chapter 25

エターナル城の回廊を早足に歩き、王女リリーは、止める衛兵の手を振り切って自室に戻ろうとしていた。

「もう、五月蠅いわね！私に話かけないで。王宮武芸大会がどうなろうと、かまわないわ！毎回、最後はルール無視で、負けた者が血祭りになるだけの話でしょ」

それが、王と王妃の楽しみなんだから……

「こ、今回はもっと大変な事になってるんです！！このままでは王宮が壊されてしまいますっ」

ずしんと、王宮のコリドーに響いてくる轟音と、人々の叫び。だが、リリーは、驚いた風もなく、追いつがる衛兵を手で退けた。

「何年前にも、城門を壊した輩がいたじゃない。私は、休みたいの。あんな武芸大会にこれ以上、付き合うのはもう、沢山！」

自分の部屋の大扉を開くと、衛兵を無視してそれをぴしゃりと閉めきった。……が、次の瞬間、リリーは大きく眉をしかめた。

泥と血で汚された絨毯、腐った魚の嫌な臭い……この部屋に誰かいる……

その誰かを自分のベッドの上に見つけた時、リリーの心臓は急速に鼓動を早めた。

あの黒装束の男！？まさか迷宮から出てきたの？

「起きなさいっ！！」

頬に鈍い衝撃を感じて、重い瞼を無理に開く。

「何だ……？ せっかく気持ち良く眠っていたのに……」

「無礼にもほどがあるっ、ここを誰の部屋だと思っているのっ！！」
頬を軽くゆがめると、ゴットフリーは、自分の正面で仁王立ちになっているリリーに、灰色の瞳を向ける。

「女にぶたれたのは初めてだ」

妙に凄みのあるその声音と、ベッドに無造作に突き刺されたレイピア。ごくんと一つ唾を飲み込み、リリーは咄嗟に腰の剣に手をあてた。だが、特に怒った様子もなく、ゴットフリーは静かにベッドから立ちあがった。

「あの迷宮を……通りぬけてきたの？」

「まあな」

「レインボーヘブンの欠片を見つけて？」

「微妙だな」

「どうして、そういう物言いをするっ！ もっとはっきりと私の質問に答えなさいっ！」

くすと口元で笑うと、ゴットフリーは、自分がベッドに突き刺したレイピアを引きぬき、それをリリーに差し出した。

「約束だったな、お前の剣だ。優美な姿と裏腹に切れ味は鋭いぞ。マンプルよりは、はるかに実践に向いている」

目前に輝く至極の宝剣。膝を折り両手を掲げて、それを受け取りたい衝動にかられて、リリーはぐっと唇を噛み締めた。

「私は、ひざまずいたりしないからっ！ 絶対しないから」

自分が言った言葉に、自分で驚き、思わず口元を手で押さえる。

「何を馬鹿げた事を言っている？ その手を伸ばして、このレイピアを受け取ればいいだけの話だろう」

リリーを鋭く見下ろす灰色の瞳。心の奥底まで見透かされているようなその眼光……

この男には逆らえない。私にはその技量もない。

直立の姿勢のまま、リリーは両の手をレイピアに向けて差し出した。膝を折らなかつたのは、最後に残した王女としてのプライドがそうさせたからかも知れなかつた。

「ガルフ島警護隊長、ゴットフリー・フェルト。改めて、王女グラジア・リリス・グランパスに約束の宝剣、レイピアを献上させていただきます」

受け取った剣の輝きに、目をみはる。そして、リリーはおぼろげにこう思った。

警護隊長……そんな身分なんかじゃない。泥と血にまみれていても、生まれもった資質は隠せはしない……この灰色の瞳はるか上から、私を見下ろしている。想像もできない遠い場所から。

＊ ＊

ほどなく、王宮のリリーの部屋に、月の光が差し込んできた。

「すっかり日も暮れたようだ。そういえば、騒いでいた観客の声も聞こえなくなった。王宮武芸大会の結果はどうだったんだ？」

多少、不安げにゴットフリーが言う。

「もう、終わってるわよ。お宅の護衛官……あの太男は、かなり勝ちあがっていたみたいよ。王妃がえらく気に入っていたもの」

「王妃が？ タルクをか？」

「ちよつと、趣味が変わっているのよ。あの人は」

リリーの遠慮無い言葉に、ゴットフリーは“……そう悪くもないと思うが”と、苦笑する。だが、武芸大会も終り、エターナル城の迷宮の潜入にも一応、成功した今、この場所に長居は無用だった。

「俺はそろそろ、帰らせてもらう。礼拝堂での約束は、確か、夜明けまでは手を出さないはずだったな」

リリーは、一瞬、戸惑うようにゴットフリーに目をやった。まだ、彼にエターナル城を離れて欲しくなかった。

不安……そう、私はここに一人にされるととても不安。

頼れる者など誰もいないと思っていた。でも、この男には、ただならぬ力を感じる。その気持ちが強くなり湧き上ってきた時、初めて、リリーは自分の心に気がついた。

リリーは言いたかった。あらん限りの声で叫びたかった。

“誰か助けて！私はこの城が怖くてたまらない”

「そうだ。帰る前にお前に聞きたい事があったんだ」

「聞きたい事？」

平静を装ってみたが、リリーは内心ほっと息をついた。今は、一時でも、彼を城に留めておきたかった。

「エターナル・ポイズン……その原料になる花、ランカはこの城周辺にしか生息しないと聞いたが、それは嘘だな？」

「どういう事？質問の意味がよくわからないわ」

「生息しているのではなく、栽培しているんじゃないのか？」

「……私は知らない」

「自分の国の事なのに何も知らないんだな。では、もう一つ聞くが、西の尖塔を管理しているのは、この国の誰だ？」

「西の尖塔には、誰も入れない。あの場所には誰も行きつく事もない」

ゴットフリーは、リリーの言葉に眉をしかめる。つい先ほど、彼はその尖塔からここへ降りてきたのだから。

「西の尖塔には、いつも白い霧がかかっていて、城の外から内からも近づく事ができないの。でも、そんなの、エターナル城では常識的な事」

「お前たちは、それを異常だとは、思わないのか？」

「だって、私が小さい頃からそうだったから。お父様は、エターナル城に住む古からの守護神が、番人の仙術をかけてるんだって言うてた」

それも、グラン・パープルの伝説の一つか？そんな物を真っ向から信じて、平和の中に沈殿している。確実に近づいてくる崩壊に気付きもしないで……まったく、どいつもこいつも馬鹿ばかりだ。

まあ、俺もその馬鹿の一人かもしれないが……

レインボーヘブンの伝説を信じ、その道標を探し求めていたガルフ島での自分の姿が、今のリリーに重なりあう。歪められた伝説、それでも、人はその伝説を諦めきれない。

ゴットフリーは苦い笑いをもらした。

「わかった、質問はこれで終了だ」

「待って。あなた、その格好で外に出れると思っているの？どう見ても挙動不審者にしか見えないわよ」

それもそうだなと、鏡に映る自分の姿に目を移す。そんなゴットフリーの手を“こっちに來て！”とリリーが引いた。

「王宮の裏手に温泉があるの。私以外は誰も使わないし、誰も入らせない。そこを使ってもいいわ。汚れた服は……衛兵の着替えをこっそり、持ち出してきてあげる」

温泉？それは、まあ、有り難いが……

「でも、何故お前がそこまで世話を焼く？」

「お願いがあるの」

訝しげなゴットフリーに、リリーは初めて笑顔を見せた。だが、すぐにきりと口元をひきしめてから言う。

「王妃を殺して……」

私の願いはただ一つ

あなたに王妃を殺して欲しい。

Chapter 26

「やっぱり、帰っていないみたいだ。ゴットフリーもミツシェも」

城下町のはずれにある宿に戻り、タルクは深いため息をついた。ドタバタのうちに終わった、何だか訳のわからない王宮武芸大会。

一応、優勝者はタルクというアナウンスがあり、表彰は後日という事で観客も出場者も追い払われるように城門の外に出されてしまった。

「キャリバンのせいで、観客席と王宮の一部が壊されてしまったものな。死人が出なかったのが、奇跡みたいだ」と、ジャンが笑う。

「おい、笑ってる場合か。ゴットフリーが王宮の迷路に迷い込んでしまっている可能性大なんだぞ！それにミツシェだって、どこかの達の悪い男に連れてゆかれちゃったのかも知れない」

怒鳴ると胸のあたりがぴりぴりと痛む。やはり、キャリバンの足を支えた際に骨か筋を痛めたらしい。だが、敢てタルクは、その事をジャンに伝える事はしなかった。

こいつはお人よしだから、俺の些細な怪我でも力を使っちゃおうかな。

タルクは悪い予感がしてならなかった。

この国は、これから、もっと酷くなる。その時のためにジャンには力を温存しておいて欲しいんだ。

「ミッシェは……心配いらないよ。あいつは僕なんかより、ずっと強い」

一見して、ジャンは元気だった。だが、その心はタルクと変わらず、どきどきと鼓動を早めてた。

この胸騒ぎ……何かが起こりはじめている……それに、ミッシェ……彼女の力を何も感じなくなってしまったのは何故だ？ゴットフリーは何処にいる？僕らは彼を探さなきゃならない。

その時、軽いノックの後に、開かれた部屋の扉。

「タルクさん？王宮から書簡が届いてますよ」

宿の女主人だった。

「書簡？王宮から？」

タルクは、女主人から手渡された封書を訝しげに見やる。絹目の光沢がある純白の封筒にグランパス王国の紋章、金箔の封印。書簡まで派手な作りだ。

無造作に封筒の口を開くと、タルクはジャンに聞こえるように中の文章を読み上げた。

“タルク殿

明日の夕刻、王宮の中庭にて王宮武芸大会、優勝者祝賀晩餐会の開催が決定いたしましたのでお知らせいたします。

今大会、優勝者のあなた様におかれましては、表彰、賞状と賞金の授与を致したく、必ずの出席が責務となっておりますので、お忘れになりません様。

この書状を招待状と致しまして、当日、夕刻までに城門にお越し下さい

エターナル城、筆頭執事“

「明日の夕刻って、それまでに、壊された王宮を修理できるのか？」
「それにも驚かされるが、何だ、この偉そうな文面、必ず忘れずに出席しろよ！だとよ」

「まあまあ、賞金がもらえるならいいじゃないか。でも……その前に僕たちにはやらなきゃならない事がある」

「ゴットフリーを探さないとな」

タルクの言葉に、今度はジャンも“うん”と強く頷いた。

＊ ＊

王女リリーの部屋出たゴットフリーは、彼女と共に城壁の階段を下りていった。上手い具合に衛兵とすれ違う事もなく、彼らは王宮の裏までやってきた。

「ここでちょっと、待ってて」

そう言った、今の明るい声とは裏腹な切羽詰ったりリーの台詞をゴットフリーは、思い出す。

王妃を殺せ……か。

確か、今の王妃は後妻だったな。前の妃は病死と聞いたが、スウオード・リリーはその娘か？

彼女が王妃を恨んでいるとするならば、前妃——母の死は病気が原因ではないな。

多分……暗殺……依頼主は今の王妃。

脳裏に王宮のコリドーで見た王妃の肖像画が、浮かび上がる。あの嫌な目の光。

“エターナル城の歪みの根源は、やはりあの王妃か”

やがて、リリーが息を切らしながらもどってきた。

「衛兵の服をもつてきてあげたわ。上着は目立つからやめた方がいいでしょ。開襟シャツとズボンだけだったら、普通の服と変わらないから。少し大きめを選んだから、サイズは大丈夫だと思うけど」

少し心はずませながら、リリーはその服を差し出した。こんな状況ではあったけれど、生まれて初めて、自分以外の人のために服を選んだ。例えばそれが衛兵の制服であったとしても、これはリリーにとって画期的な出来事だったのだ。

「そんな事をしてもいいのか？王女が屯所から、衛兵の服を持ち出している所を見られでもしたら、お前、立場をなくしてしまうぞ」
「大丈夫よ。屯所は小さい頃から私の遊び場みたいなもの。お父様もお母様もお忙しくて、退屈な時はいつもそこで、遊んでいたんだから」

なるほど、並々ならぬ王女の剣の腕は、そこで鍛えられたというわけか。

ゴットフリーは納得したように、心の中で頷いた。

「この林道の先に王宮専用の温泉があるわ。王宮といっても、使うのは私だけだし、侍女も衛兵もこの先からは、立ち入る事を許していないから、どうぞ、ゆっくり、してって」

「……で、温泉でゆっくりした後、俺は一体どうすれば、いいんだ？」

「温泉の裏の林道を更に進むと海岸に出るわ。もう、そこは王宮の外。帰りたければ、そこを通してゆけばいい」

リリーの言葉にゴットフリーは眉をしかめる。

「王妃の件は？」

「夜風に吹かれて私も少し頭が冷えたわ。二つ返事で出来るものでもないでしょう。もしやる気があるのなら、明日の夜8時に、またここに来て。今日のように人払いをしておくから。もし、あなたが来なければ、この話はなかった……という事にします。やってくれるなら、それ相当の謝礼はするわよ。他言は無用！もっとも、誰かに話したとしても、疑われるのはあなたとあなたの仲間だけですからね」

一瞬の沈黙。

「まあ、あの王妃は俺にとっても目ざわりだ。殺して欲しいというならば、今夜にでも殺ってやるんだが、俺には少々余計な付録がついているからな。死ぬのは王妃だけではすまないかも知れないぞ」

そう言って笑う声が、夜の中でやけに凄みを増して耳に届く。リリーはごくんと唾を飲み込むと意を決したように彼に尋ねた。

「一体、誰が死ぬというの」

「この国が」

「……」

「この国、全部が滅びるかもしれない」

一瞬、リリーは絶句した。

「……救いはあるの」

リリーの言葉にゴットフリーは、鮮やかに笑った。

「いい質問だな。そういう方面の付録も確かっていたと思うが」

「それは、大きな力？」

レインボーヘブンの欠片たち。そして、ジャン、レインボーヘブンの礎……大地。

「そうだな、多少、おせっかいではあるが、いざとなれば、かなり頼りになるかもしれない」

「なら、いいわ……」

リリーは、むしろせいせいとした表情で言った。

「私はその力を信じます。たとえ、この国が滅ぶような事があったとしても、救いがあるのなら、この国を作り直す事ができるなら……それはそれで構わない」

そうかと、つぶやくと、ゴットフリーは着替えを受け取り、くるりとリリーに背を向けた。

「王妃は殺してやる。まあ、今日のところは辞めておくが……詳しく話は明日の夜に」

「ええ、私の気持ちは変わらないから」

「報酬は温泉と着替え……だな」

軽く笑いながら、ゴットフリーは林道の奥へ消えていった。放心したように夜空を見上げ、リリーはほうっと一つため息をついた。

抜けるような星屑が幾千もの瞬きを作り出している。こんなに美しい空、よどみのない澄み切った空気。それなのに、このグラン・パープルの濁りは一体、何なのだろう？

それにしても、あの男、私が王妃を殺したい理由を一言も聞いてはこなかった。王妃殺しをあの男に頼むなんて、間違いではなかったのか。……でも、あの女がいる限り、この国は腐ってゆくだけ。

何もかもを洗い流してしまいたい。そのために、グランパス王
国が滅びてしまっても……

もう、私は構わない。

Chapter 27 ゴットフリー VS ミッシェ

こんなゆったりした気分など、とうに忘れてしまっていたな……

リリーに教えられた温泉につかりながら、ゴットフリーはほうつと深く息をついた。冷たい空気と岩場の感触が、多少強めの熱さに浸った体に心地よい。

そういえば、タルクが温泉、温泉と騒いでいたが、見つける事はできたのだろうか？

王女に頼んで、今度、連れてきてやろう……なんて、到底無理な話だな。観光旅行をしているわけじゃないんだ。

忘れかけていた、とりとめのない出来事が次々に胸に浮かんでくる。

緑に覆われていた頃のガルフ島
リリアに贈った黄色いカナリア
水蓮の微笑み……

今となっては、取り戻せない平凡な日常。

本当に今日の俺はどうかしている。王妃殺しの片棒を担がされそうだというのに、こんな甘い空想に浸っている場合じゃないだろう。

見上げた月明かりの空に瞬く、秋の星座ペルセウス。

天の川の中に並んだ、美しい曲線の星の列は、蛇頭を持つ怪物メドウサの首を持ち、剣を振り上げている伝説の英雄ペルセウスの姿

を形どっているという。

ペルセウス……

夜が来る度、メドウサの首を掲げ続け

英雄と星座にまで奉られて、それでお前は幸せか……。

お前が座する星座の瞬きは、悲しいほどに澄み渡って、この地上を見下ろしている。

知りたくなかった事が多過ぎる、伝説の裏に隠された真実……。

それを解き明かす日に、俺たちに救いはあるのか。

口元で軽く笑うと、ゴットフリーはそっと目を閉じた。何も考えなくなかった。この温かい心地良さの中に、もうしばらく浸りたい。もう少しだけなら……構わないだろう？と、彼はそう思った。

しばらく、そうしていると、空気が冷たく澄んで頬をなでてきた。それと同時にはらりと舞い落ちてきた落ち葉の気配。

「ここはいい場所ね。ご一緒してもいいかしら？」

ゴットフリーは面倒臭そうに目を開くと、苦々しく口元で笑った。「失せろと言ったら、それにお前は従うのか？」

ミッシェ……月明かりに透けた薄絹の衣の下で、白い裸体が朝露のように輝いている。

「嫌よ、そんな無粋な台詞を言うのは止めて。こんな気持ちのいい、あの五月蠅いジャンやタルクもない場所で、二人きりなのよ……」音もなく、湯の中に体をすべりこませ、ミッシェはゴットフリーの近くに身を寄せてきた。

ジャンとタルクがいない……場所。

微妙に表情を曇らせたその視線を捉えるように、ミッシェは両の白い腕を彼の肩に絡みつかせ、吸い込まれそうな青の瞳をその顔に向ける。

ゴットフリーの灰色の瞳は、冷たく彼女を見据えている。だが、肩から背へ指を移動しながら、頬を胸に近づけてくる、ミッシェを拒もうとはしなかった。

「俺がここにいるのを何故知った？」

「あなたが何処にしようと私にはわかるもの」

濡れた銀の髪が、月の雫の輝きを放っている。甘い吐息をたてながら、白く柔らかな肌をゴットフリーの体に寄せてくる。

夜空の星の瞬きの中で、大地がつぶやくように小さく揺れた。それは、ジャンが以前に語った同じ言葉を醸し出す。

ミッシェ、お前は行きつく先をどこで間違えてしまったんだ？！

お前は、僕たちの旅を見守るために一緒にいてくれたんじゃないかなかったのか？お前は成長するほどに、女神アイアリスに近づいてゆく。そして、僕らがレインボーヘブンを見つけた時、再び女神に還る……至福の島の守護神として。

それなのに……

だが、大地の声に耳をかざず、ゴットフリーの灰色の瞳を見据えながら、ミッシェは女神さながらに優しく微笑んだ。

「あなたを迎えにきたのよ。もう、一人にさせはしない」

—愛しているわ—

ミッシェは甘い囁きでゴットフリーを魅了する

—愛している—

胸に染み入る美しい声音、心がとろかされそうな水蜜桃の香り。
頭の中の痺れたような抑揚感……。

その甘美な言葉が、逆らえきれない木霊になって意識の中に入り込んでくる。

もう、一人にさせはしない……もう……

その声の见えない糸に引きつけられるかのように、ゴットフリーは突然、強くミッシェを抱きしめた。

「他の者はいらない……私たち、二人だけでレインボーヘブンを探しましょう。そこは、二人だけの世界。私たちだけの至福の島」

確かな腕の感触に満足げに微笑んでから、ミッシェは、ゴットフリーの右胸に目を向けた。そこには、黒馬島で伐折羅がつけた傷跡が赤く引きつり、生々しいまでの姿をさらけ出していた。

「身のほど知らずな夜叉王がつけた傷！あなたに自分の印を刻もうなんて。でも、大丈夫よ、この傷は私が消してあげる」

伐折羅がつけた傷にミッシェは、そっと唇を寄せた。白い体を抱き寄せた腕が、ぴくりと動く。その瞬間、夢うつつの中にいたゴットフリーの灰色の瞳が、急速に光をとりもどしてきた。

「その傷にさわるな」

夜を切裂くような冷たい声音に、時が凍りつく。

次の瞬間、ミッシェを岩場に突き飛ばし、ゴットフリーは右の手でその首を激しい力で握り締めた。

「く、苦し……い、や、止め……」

懇願するように見開かれた青い瞳。だが、ゴットフリーはうすら笑いさえ浮べ、首に力を入れたまま、岩場に強くミツシェを押しつけ続けるのだ。

「見え透いた真似は止めろ。このまま首をもぎられても、お前は痛くも痒くもないんだろう？ いい加減に化けの皮を現したらどうなんだ」

すると、大粒の涙を流した青い瞳がくくつと笑いをもらしたのだ。その時、眩いまでの白銀の光がミツシェの体からほとばしった。

思わず、目をそむけた瞬間、ミツシェはするりとゴットフリーの手から逃がれ、空高く舞いあがった。

天空に浮かびあがった白い光。

やはり、そうか。ミツシェ、お前は

白い女神……アイアリス！

Chapter 27

ゴットフリー

VS

ミッシェ (後書き)

* *

ゴットフリー……女難の相WW さあて、戦闘、戦闘。

Chapter 28

「いつからお前は、守護神の座をおりる事に決めたんだ？それどころか、今度はレインボーヘブンを自分の物にしたいというのか？」

白銀の髪が月明かりに輝き、唯一、色をなしている青い瞳が悲しげにゴットフリーを見下ろしている。

「愚かな人間たちを導くなんて、そんな面倒な事はもう止めました。幸福を与えてやれば、それに溺れ、試練を与えればやさぐれる。そんな者たちに至福の島、レインボーヘブンを返してやる必要などあるのですか。でも、あなたは別、あなたは私が選んだレインボーヘブンの王。それなのに……馬鹿なゴットフリー、素直に私についでくれば痛い目をしないで済んだのに」

「おあいにく様だったな、もともと神頼みはしない質なんだ。それも墮落した似非女神なら尚更だ！」

「そんな強がりを言っていられるのも今のうちよ」

アイアリスから零れ落ちた一筋の光が、ゴットフリーの体を覆う。すると、後ろにあった岩場からすると、緑の蔦が芽吹き出した。それは、急速に触手を伸ばし、一瞬のうちに彼の手足を岩場の上に縛りつけた。

堅く蔦のロープに縛り付けられ、動くこともままならない。苦々しげに天空のアイアリスを睨めつけ、ゴットフリーは言った。

「この蔦はランカだな。エターナル城で俺とゴキブリ娘を襲ったのと同じ。あの尖塔で眠っている、レインボーヘブンの欠片”樹林”。あれに呪いをかけたのは、やはりお前だったのか！？」

「呪い？女神である私が何故そんな事をする必要がある？けれども、ゴットフリー、あなたには、少し眠ってもらうわ。その間に邪魔な連中は全部、消してしまおうから。そして、次に目覚めた時には見せてあげる。私とあなた、二人だけの至福の島を」

ゴットフリーは、アイアリスの言葉にあからさまな嫌悪の色を顔に浮べる。

「反吐が出そうな話だな。お前と二人きりの島ならば、俺は闇の王になって真っ先にその島を滅ぼしてやる」

「無駄よ。私の手中にある限り、あなたは闇の王にはならないわ」

勝ち誇ったかのようなアイアリスの声が、夜空に木霊する。

そのとたん、ゴットフリーに絡みついたランカの蔦から緑の蕾が芽を吹き出した。

狂ったように花開き、鋭い棘を捕らえたゴットフリーの全身に突きたてる。

「その棘の先から溢れ出るエターナルポイズン。それは、グラン・パールで作られた毒じゃない。黒馬島でクロの話聞いたでしよう？かつて、レインボーヘブンの住民が盗賊たちに盛った毒、それこそが、ランカから作られた元々の“エターナルポイズン”だったのよ」

棘の激しい痛みで顔を歪めながらも、ゴットフリーは黒馬島で聞いたクロの言葉を思いかえしていた。

薬を使ったんだ。それも徐々に効果を現す陰湿な毒薬を。でもね……それを食べて死んでしまったのは、罪のない、盗賊以外の黒馬島の住民たちだった……

「大丈夫よ、命までは奪いはしない。その棘の毒はごくゆるやかに、あなたの体に入ってゆく。あなたには眠ってもらうだけだから。」

だが、天空で微笑んだアイアリスの表情が、堅くこわばってゆくのに、そう長い時間はかからなかった。

「この時間は眠るには、まだ早すぎる。特に俺にとってはな」

不敵に笑うゴットフリーは、少しも眠気を感じていないようなのだ。

「エターナルポイズンが効かない!? こんなに大量の花の棘に刺されて、何故お前は平然と笑っているの?」

「忘れたのか? エターナルポイズンは、黒馬島の盗賊たちには効かなかった。俺はその長の末裔。盗賊たちの血を受け継いでいるとすれば、毒がきかなくても不思議でもなんでもないだろう。お前が蘇るレインボーヘブンの王に俺を選んだのは、そんな強さを見こんでの事ではなかったのか」

どうしようもなく、こみ上げてくる悔しさにアイアリスは唇を震わせた。女神と崇められたきた自分の意思。それを拒んだだけではなく逆おうとする、この男!

「やはり、少しは酷い目をしないと理解ができないようね」

天空でアイアリスは再び白く輝いた。だが、その光に、神々しさを見つける事は難しくなっていた。

揺れる温泉の湯のあちこちで、ぼこりぼこりと空砲が弾きだした。徐々に温度をあげてゆく湯の中で、一つの泡が碎ける度に熱風のよくな空気があたりに散らばってゆく。

ランカの鳶に絡みつかれた体では身動きすらできず、徐々に上がってゆく温度の中で、ゴットフリーは熱さに喘ぎだした。

畜生! このまま、俺を温泉の中で茹であげるつもりか?!

とめどなく汗が流れ落ちる。喉の乾きと心臓の鼓動が頭の芯まで伝わって、ひどい眩暈を引き起こす。

「そのまま、熱湯の中で気を失っておしまい。体が焼けただれてしまっても、あとで私が修復してあげるから」

修復……？まるで、機械か何かのパーツみたいだな……

思考が薄れてゆく。だが、突然、右胸に感じた鋭い痛みが、ゴットフリーの意識を再び目覚めさせた。

伐折羅——夜叉王がつけた傷。この傷が痛むほどに、俺はお前を思い出すと……。

灰色の瞳が鋭く、夜空を睨めつけた。その時、

漆黒の闇が、天空に浮かぶアイアリスの足元から、滲むように湧き上がってきたのだ。

「ゴットフリーの姿が見えない！それにまわりの景色も……この靄……まさか、これはっ?!」

夜叉王の配下……意に染まない物は容赦なく暗黒に引きずり込む——七億の夜叉……闇の戦士！

Chapter 29

突然、自分のまわりに広がった闇の中で、アイアリスは戸惑いの表情を隠しきれなかった。

闇の戦士の目に見えぬシールドが、ゴットフリーのまわりに張り巡らされていた。月も星も林の木々の間から見えていたエターナル城の尖塔も、もはや、アイアリスの目には映らない。ただ、光沢を失い白濁した自分の光だけが、夜空に浮かび上がっているのだ。

「夜叉王！たかが人間の分際で、私に逆らおうというの！」

青の瞳を凍りつかせて叫ぶ。その一瞬に、闇の中から一陣の風が吹き付け、アイアリスの体を真っ二つに切り裂いた……いや、正しくはその純白の衣を。

「……！！」

白い女神とあまりに対象的な漆黒の乙女がアイアリスの真正面に浮かび上がっていた。だが、闇の中で白い光を受けたその姿は、凛として美しく、彼女よりはるかに清涼な佇まいをもっていた。

「霧花！レインボーヘブンの欠片、“夜風”。夜叉王だけでなく前もかつ、レインボーヘブンの守護神である私にこんな無礼なまねをしてただですむと思うの！」

だが、霧花は怖気づく素振りもみせはしない。

「私は、レインボーヘブンの王にかしづく者。あなたが何であろうと、ゴットフリーに害をなすなら、排除するだけです」

夜の帳をめくる仕草で右手を空にひるがえす。その手先に現われた巨大なアゲハ蝶のような黒い影。それは、旋風で空を切裂く夜扇。「輝きを失った貴方を私たちは、もう女神とは認めない。この夜の中にいる無数の闇の戦士と、夜扇の攻撃を受けたくないのなら、立

ち去ってはいかがですか？その誤ったプライドが切り刻まれる前に」
「何をこしゃくなっ！！」

アイアリスは、全身から白い光をほとばらしらせる。だが、その光の上に覆いかぶさるように更なる闇が湧き上がってきた。朧月夜の月のごとく薄められてゆく自分の姿に、白濁した女神は唇を震わせた。

愚かな者たち……私にたてつこうなど……

霧花が振るった夜扇の旋風が空を走る。だが、それが体に届く前に、アイアリスの姿はかき消すように見えなくなった。

熱気を帯びた空気が急速にさめてゆく。

夜空には星々が瞬きだした。漆黒の闇はいつの間にか月明かりに照らされた静かな宵にもどっている。

熱さと、ランカの蔓でがんじがらめに括り付けられた痛みから解放されたものの、苦しさにあえぎながらゴットフリーは、ようやくの思いで岩場の上に這い登っていった。

そのまま、死んだように草原に突っ伏す。すると、涼しい夜風が体を冷やしてきた。じりじりと焼けたような感覚が治まると、ようやく、生きた心地がしてきた。

「ゴットフリー、大丈夫？」

頭上から響いてくる不安げな声。

「霧花か……、俺を助けてくれたのはお前と闇の戦士だな」

「闇の戦士をここへよこしたのは、伐折羅の意志よ。きっと、あなたが彼を思い出したから」

「伐折羅……助けてくれるのはあり難いが、相変わらず容赦がない」
きりきりと右胸の傷跡がひどく疼いた。闇の戦士のシールドに隠してくれたは良かったが、体の中まで、深い闇が流れ込んでくるよ

うで息が苦しくてたまらない。

熱湯地獄の責め苦よりはましかと、痛む胸を押さえながら、ゴットフリーは後にあった木にもたれかかるように体を起こした。

「あの子の心は、幼すぎて自分の力と感情をコントロールする事ができない。夜叉王の本質は破壊者。あなたを助けようと闇の戦士を放つ事はできても、それらを制御する事ができないの。その胸の傷もそう……あの子はあなたに忘れられたくないがために、その傷を痛ませる。もう、少し時間が経てばあの子も大人になれるでしょうに」

月明かりに照らされた木々の隙間から響いてくる美しい声。目を凝らして、自分もたれかかった木の上を見つめてみると、その主のおぼろげな姿が垣間見える。ゴットフリーは、その声の方向を見据えて言った。

「霧花、そんな木の上にはいないで下りて来い」

一瞬、とまどったように木々が揺れた。

「俺が怖いわけでもないんだろう？」

ゴットフリーは、彼にしては珍しく気を使って言った。

ガルフ島の館では、自分を怖がって近づかない輩がけっこういた。だが、まがりなりに霧花はレインボーヘブンの欠片“夜風”だ。まさか、そんな事はないと思うが。

「怖いだなんて、そんな事はないけれど……ただ……」

「ただ、何だ？」

訝しげなゴットフリーの声。

「最低限のものは身につけていただかないと……やはり、困るんです」

それと共に彼のいた木の上からどさりと落とされたシャツとズボン。それらは、王女リリーがゴットフリーのために衛兵の屯所から

持ち出してくれた物だ。

深くも考えずに、霧花に声をかけたが、そういえば温泉につかっていた自分は何も着衣を身につけていない。一言でいってしまえば、裸のままだった。

「まだ、体が熱いんだ……このままが気持ちがいいのに……」

「なら、絶対、私はあなたの傍にはゆきません」

仕方がないかと、ゴットフリーはしぶしぶ、手元に落ちてきた衣服を身につける。すると、ふわりと冷たい風が頬を通り過ぎてきた。

艶やかな長い黒髪、漆黒の瞳。黒衣のドレスの裾は夜に溶け込みその先が見えない。

霧花……レインボーヘブンの欠片“夜風”

「初めましてというには、たびたび世話になりすぎているな」

静かな夜のように人の心に落ち着きをあたえる美しさ。だが、瞳の奥には凜とした強い意思が感じてとれる。

ゴットフリーは、彼の横に現れた霧花の姿にわずかに目を細めた。

「どこかで……お前には、どこかで会った事があるような気がする……」

だが、霧花は寂しげに微笑んだ。

「きつと、サライ村でしょう。私はあの村のレストランで働いていましたから」

いや……違う。そうじゃない……。

だが、ゴットフリーがその思いを強くする前に、霧花がそれを遮ってしまった。

「アイアリス……ミツシェが成長する最終形態。それなのに、こん

なにも簡単に女神の座を降りてしまうなんて……」

ゴットフリーは霧花の言葉に眉をひそめた。

「お前は、気付いていたのか？ ミツシェがアイアリスの現し身であることに」

「きっと、アイアリスはジャンの力が暴走してしまうのを恐れたのでしょね。ジャンは目覚めたばかりの頃は、夜叉王一伐折羅とまるで同じだった。自分の力を制御できなかったのよ。あの大きな大地の力を制御できるのはレインボーヘブンの守護神アイアリスしかない。それだからこそ、自分の現し身としてのミツシェを作り出した。ジャンの力がきちんと育って、レインボーヘブンの大地に戻る日に、自分自身が、女神アイアリスとして降臨するために」

「それなのに、つい先程までここにいたアイアリス、あれは一体何者だ？！ 女神というより、邪神そのものではなかったか」

一瞬沈黙し、霧花は言った。

「後悔と哀しみ、そして戸惑い……500年前、レインボーヘブンを海に沈め、その地を七つの欠片に分けた時、その住民を海に逃がした時、そして……至福の島を襲撃した黒馬島の盗賊たちを海に沈めた時……女神アイアリスの心に沸き立ったその思いが、あまりにも苦しくて、彼女はそれから目を背けてしまった。そこを海の鬼灯につけこまれてしまったのよ」

「つけこまれた……それは……」

「そう、海の鬼灯。彼等の好物をあなたも知っているでしょう？」

「恨みと後悔……その思いが満ち溢れた時、その者は海の鬼灯となり、すべてのものを破壊に導こうとする……」

馬鹿な！ 奴らの恨みの心は女神アイアリスまでも陵駕するということか！？

「あなただって、ミツシェ……いいえ、アイアリスの誘惑にもう少しでのってしまうところだったじゃない。どんなに屈強にみえても心の隙間というものは、誰でも持ち合わせているものなのよ」

霧花は少し言葉に棘を含めて言ってみた。

「それとも、あれは“意図的”にそうしたのかしら？」

ゴットフリーは、苦い笑いを浮かべるが、その事に関しては特に何も答えなかった。

霧花は言葉が続けた。

「海の鬼灯の恨みの心は、女神までも堕としめす。けれども、アイアリスの心は他の海の鬼灯たちとは、違う方向に向かっている。レインボーヘブンを破壊するのではなく、自分だけの……いえ、ゴットフリー、あなたと彼女だけの至福の島を築こうとしているのよ」

霧花の言葉にゴットフリーは、ただ俯いて沈黙する。

「何とかして、この流れをくい止めなければ……さもなくば、そう遠くない未来に私たちと、海の鬼灯、そしてアイアリスの三つ巴の戦いが起こってしまうわ」

急に黙り込み、背にした木にもたれたままの姿勢のゴットフリー。

「ゴットフリー……？」

どこことなく様子がおかしい。その顔を覗きこむように肩に手をやり、霧花ははっと目を見開いた。

ひどい熱……それに、吐息に混じるこの黒い影は……

闇……闇の戦士が体の中に入り込んでしまっている。

戦士といっても、その姿は霧のように実体がない。だが、闇の戦士は破壊者だ。伐折羅の力が不安定なばかりに、その指揮下から離れてしまった戦士たちは、ただ、無差別に殺戮と破壊を繰り返す。例えそれが、ゴットフリーであろうとも。

どうしよう……どうしたらいいの？

激しく動揺し、霧花はおろおろとあたりを見渡した。

彼らの後ろの木の枝が跳ね上がって、緑の髪の男が飛び出してきたのは、ちょうど、その時だった。

「霧花、一体、何があったんです?! 西の海岸からでも、この辺りの空気の歪みが一目でわかりましたよ!」

霧花は、心の中でほっと息をついた。普段は、気まぐれな皮肉屋を装っているが、この男はゴットフリーに危険が迫れば、どこからともなく姿を見せる。

「BW! 何とかして! そうでないと、ゴットフリーが……闇の戦士に食い尽くされてしまうわ!」

「闇の戦士……それって黒馬島のあの少年の?」

「そう。でも、伐折羅の制御からはずれてしまった闇の戦士が体に入りこんでしまっているの。このままだと、命が危ない!」

苦しげに呼吸を乱しだしたゴットフリー。気がかりな表情でその顔に目をやると、BWは何かを確信しているかのようにこう言った。

「ラピスだ。ラピスの所へ連れて行こう。私がゴットフリーを彼の所へ運びます!」

Chapter 30

サライ村の宿営地がある西の海岸。

ココは夜空を見上げるなり、あっと小さく声をあげた。波の近くまで駆けより、口を閉じるのも忘れて夢中で遠くを見つめている。「ココ？どうしたんだ？」

彼女の近くの岩場に腰掛けていたラピスが言った。聞えてくる小波の音の間から、ココの心臓の高鳴りが伝わってくる。思いが強いほど、その位置や行動を知ることが容易かった。それでも、ココの姿やその見つめる先に何があるかを知る事はできない。

「虹が見えるの。月の下に……」

月の光がやわらかく海を照らし出している。だが、生まれた時から目の見えないラピスには“虹”どころか“月光”というものですら想像する事は難しかった。

「虹って夜にも見えるのか？」

「前にもグラン・パールへ向かう船の中で、これと同じ虹を見たよ。すごく大きくて綺麗な虹を」

ふうん……と、ラピスは気のない返事をしてみたが、

“月虹”か。でも、それって何だか不吉な予感がする言葉だな。と、少し眉をひそめた。

「何だ、もう消えちゃった……」

つまらなそうにそう言うと、ラピスの元へココが戻ってきた。

「それはそうと、ココ、もう腕の痺れはとれたのか？」

「あ、もう全然平気。腕の痺れなんて、あの大きな白い鳥で空を飛んだ時の緊張で吹き飛んじやったもん」

「ああ、鳥ね。お前が空から降りてきたって、どんでもない騒ぎになってたもんな」

天喜の白い鳥……レインボーヘブンの欠片“空”

「なあ、ココ」

ラピスが言う。

「お前がエターナル城の迷宮をゴットフリーと一緒に通り抜けてきた話はラガーから聞いた。その時にランカの棘に刺されて、あの鳥に乗って帰ってきた話も。でも……」

「でも、何？」

いつになく真剣な声音のラピス。

「王宮の地下に水晶の棺に入って眠っているという“レインボーヘブンの欠片”それが、あの鳥だったのか？」

ココは一瞬、言葉を詰まらせた。ゴットフリーと城の尖塔の最上階で見た、レインボーヘブンの欠片“樹林”の事は誰にも秘密にしていた。水晶の棺の中で、呪われながら眠るその姿が痛まし過ぎて、どう人に伝えたらいいか、わからなくなってしまっていたのだ。

だが、ふと見上げたラピスの顔を閉じた顔が、“樹林”の寝顔と重なった。

「ラピス……あのね……」

と、ココが重い口を開こうとした、その時

「ラピス、ラピス！そこにいるのかいっ!？」

息せき切って駆けてきたのは、フレアおばさんだった。呼ばれたラピスは人の悪い笑いを浮べて言った。

「いるけど、どうしたの？そんなに走ったら、血圧あがってぶっ倒れるぞ」

「それどころの話じゃないよ！急患、急患だよ！」

「急患？ 医院の方じゃなくて、こっちに？」

クーデターを企てているメンバーが怪我でもしたのか？ 訝しげに岩場から立ちあがったラピスは、フレアおぼさんの言葉を聞いて脱兎のごとく駆け出した。

「BWが警護隊長を連れてきて……大変な事になってるんだよ。息ができなくて血を吐いて、早くなんとかしないと死んでしまうよ！」

＊ ＊

「おいっ、ジャン、どこへ行くんだ？！」

突然、宿から外に飛び出していったジャンをタルクが追う。

「胸が痛い。締めつけられる……この熱さは何だ？ 奴はどこへ行っ
た？！」

空に向かって狂ったように声をあげる。普段、見た事もない荒立った様子にタルクはただ驚き、その姿を見据えるばかりだ。そのまま、地面にひれ伏したかと思うと、じっと下を向いているジャン。すると、その体が蒼白い光を帯び出したのだ。

「ジ、ジャン。お前、何するつもりだ？」

「ゴットフリーを探す！ グラン・パープル島の大地の気を僕の元へすべて集める」

王宮武芸大会でBWは水滴を使って王宮の情報を得ていた。ならば、僕は大地を媒体にして、この島を探ることが出来るはずなんだ。

「グラン・パープルの大地の気を全部だなんて……とてつもない力があるんじゃないのか？」

「力を全部使いきってしまったって、僕はあいつを探さなきゃなら

ないんだ！」

地面に両手をばんとつけると、ジャンは人には到底出せない声で咆哮をあげだした。

うおおおおっ！！

目を開いていれない程の眩い光。蒼の閃光。

それが地表を覆うともに、グラン・パープルの大地は小刻みに震えながら探索の波を島全体に広げていった。

＊ ＊

「また、血を吐いた。ラピス、どうしたらいいんだ？！」

「顔を横に向けて！でないと、吐いた血が喉にたまって窒息するぞ」

激しく咳き込み続けるゴットフリーをはさんで、BWとラピスが怒鳴りあうように言葉をかわす。ただ、おろおろとその様子を眺めているココにラピスが言った。

「ココ、俺の医院に行つて診療用のカバンと薬品箱をとつて来て！誰かそのへんの奴を捕まえて馬を出してもらうといいからっ」

「え、でも……」

「早く行けっ！！」

ラピスの苛立った声にせかされて、ココは外に飛び出していった。

「誰かに馬を出してもらえって言つたって……」

すると、目の中にあせった様子でこちらに駆けて来る男の姿が入ってきたのだ。

「ラガー！！馬、馬を出して。私を乗せてっ！」

「こいつの体を取りまいてる嫌な空気……これって、一体何な

んだ？」

呼吸と呼吸の間を数えるように、ラピスはゴットフリーの息遣いに耳をすませながら言う。どうも、その嫌な空気の出所は彼の体の中のようなのだ。

「私には、はつきり見えますよ。ゴットフリーの吐く息が黒く濁っているのが……」

「だから、その黒い息は何なんだよっ！！」

ラピスは、我慢がならない様子で叫んだ。BWの遠まわしな物言いが彼を余計に苛立たせていた。

「闇の戦士。だが、今はただの破壊者にすぎませんが」

「ちっとも、言ってる意味がわかんねえよ！」

無意識にラピスは、自分が感じているゴットフリーの回りの“嫌な空気”を払いのけるように手を振った。すると……

「何っ？」

ぎゅっと握りしめる手の中に、うごめく者がいる。

これが、闇の戦士？こんなちっぽけなモノが？

だが、

「痛っ！」

鋭い痛みとともに、ラピスの手の中から血がしたたり落ちてきた。

この野郎！俺の手を食いちぎる気か？まさか、ゴットフリーの体の中でも、こんな悪行を働いてやがるのか？！

そう考えると、無性に腹がたってたまらない。ラピスは手の中のうごめくモノをひねりつぶすように、ぎゅっとその手を握り締めた。その瞬間、

きらりと空間が輝いた。

そして、一瞬のうちに消え去った黒い靄
BWは、ただ啞然とその様を見つめていた。

闇の戦士を浄化した……？

BWの驚きなど、気づきもしないでラピスは次々とゴットフリーが吐き出した闇の戦士を灰汁をすくい取るように握り締め、消し去ってゆく。

「畜生！こんな奴らがまだ沢山、ゴットフリーの体の中にいて、悪さをしてるんだな。こいつら、どうにかして外へ出せないかな」

「……私にはどうにも……」

珍しく弱気なBWに目をやり、ラピスはちつと舌を鳴らした。

「お前もレインボーヘブンの欠片なんだろうっ！！」

「何か勘違いされてませんか？！私はジャンみたいな癒しの力は持ち合わせていませんからね！」

そう。それなのに、人間のラピスがその力を持っているなんて……

苦しげに息を荒げるゴットフリーの胸に、ラピスは心配げに手をあてた。

「この傷、この傷が熱を出させるんだ。でも、前に診た時は闇の戦士なんて影も形もなかったのに」

前みたいには解熱剤くらいでは効きそうもない。それに今回はマジで命が危ない。

ゴットフリーが死ぬ？！俺は嫌だ。それだけは絶対に嫌だ！
知り合ってから、1ヶ月もたってやしない。それでも、ラピスは
そう思わずにはいられなかった。

だが、どうすればいいんだ!?

ラピスは苛立つ気持ちをぶつけるように、そばにあった机の上に拳を打ちつけた。すると、ほんと打ち鳴ったその音と同時に……突然、床が小刻みに揺れ出したのだ。

「地震……!?!」

「にしては、揺れが変だ」

小さな揺れは輪を縮めながら、確実にこちらへ向かってくる。ラピスは鋭い感覚でそれを察すると、ゴットフリーの横へぴたりと身を寄せた。

小刻みな揺れが急に大きく波を打った。……とその時、

「あっ……!?!」

BWはあまりの眩しさに、一瞬、あたりが見えなくなった。

ゴットフリーの体を突き抜けてゆく蒼の光。

そして、ぶわりという音と共に大量の黒い靄が彼の中から飛び出してきたではないか。

「闇の戦士か!?! 畜生、お前ら全部、消えてなくなれっ!?!」

ところが、ラピスの声が届く前に、黒い靄は蒼の光に溶かされ、あっという間に姿を消してしまったのだ。

静寂だけが跡に残った。地面の揺れも今はもう感じない。そして、ゴットフリーの息遣いまでが、少し軽くなったように思われた。

「何が起こった? 闇の戦士はどこへいった?」

きょとんと不思議な面持ちのラピスにBWが言う。

「ジャンだ! あんな眩しい光を放つのはジャンの力以外には考えられない……あんなに大量の闇の戦士を浄化させるなんて、本当に凄

まじいまでの力を持っている」

BWの言葉にラピスはいささか不満げに言う。

「何だ……あいつがやった事だったのか」

「心の準備をしておいた方がいいですよ。グラン・パープル島を媒体にして、彼はゴットフリーの居所を知ってしまった。多分、ジャンはもうすぐ、こちらへやってきますよ。こんな状態のゴットフリーを見て彼が逆上しなければいいんですが……」

Chapter 31

「ラピスの医院へ行けて？！それって、警護隊長のためなのか？」
不覚にも、ココに従わされてしまったラガー。乱暴に馬を走らせる彼の前に座ったココは、落とされまいと馬の首にしがみついていた。

「診療用のカバンと薬品箱を取って来てって。早くしないと、ゴットフリーが死んじゃう！」

あんな奴、死んだって……

だが、その台詞の続きをラガーは口にする事ができなかった。

「しかし、こう頻繁に熱を出したり、瀕死になったり……あいつ、一体、どうしちゃったんだ？何か悪い病気にでもかかってんのか？」
「わからない。でも、何か嫌な空気が……ゴットフリーの回りに浮かんだ」

BWのように黒い吐息は見えはしなかったが、確かにココにも闇の戦士の気配は強く感じられたのだ。

その時、前方で激しい砂煙が巻き起こった。

「何だ？！えらく急いだ奴らがやって来るぞ」

驚いたようなラガーの声にココは正面から猛スピードで駆けて来る1頭の馬に目をやった。そして、叫んだ。

「タ、タルクツ！それにジャン！！」

すれ違いざまに、お互いに顔と顔を見合わせる。

「ラガーとサライ村の泥棒娘？！まさか、てめえら、またゴットフリーを拉致しやがったのか！」

「警護隊の大入道か？何いいやがる。瀕死の隊長を保護してやって

る俺たちに向かって」

「何っ？」

「場所がわかってんなら早く行け！でなきゃ、死に目にも会えないぞ」

人の悪い笑みを浮べて、ラガーは馬を鞭打った。無然とした表情のタルクだったが、ジャンに急かされて彼もまた鞭を打ち、ラガーとは反対の方向に馬を走らせた。

「ジャン、ジャンっ！私、ココ！こっちを見て！」

あらん限りの声で叫んだはずなのに、確かに目と目が合ったのに……

ガルフ島で、ジャンは言った。レインボーヘブンを見つけたら、必ず私を迎えに来ると……

ココは、泣きそうな気分でつかまった馬の鬣をぎゅっと握り締めた。

ジャン、何で知らん顔してるの？！

* * *

ゴットフリーは、夢を見ていた。

火の玉山が燃えていた。彼の故郷、ガルフ島で唯一の活火山。その山がその名のごとく真紅の炎を吹き上げていた。

月の影に隠れた黒い太陽は、無慈悲な表情をして崩れてゆくガルフ島に手を差し伸べようとはしない。

どうしようもない胸の熱さと、息苦しさに喘ぎながら、ゴットフリーは燃える火の玉山を駆け下りていった。行く手を阻むように、巻き上がる紅の灯。日食の日に火の玉山には邪気の群れが集結する。

それを人々は“海の鬼灯”と呼ぶのだ。

早く麓へ、ガルフ島の人々を早く海へ逃がすんだ！

突然、目の前に広がった紺碧の海。

だが、次の瞬間、その海は火の玉山をはるかにしのぐ高さまで膨れ上がった。

“BW、何故、お前はこの地を滅ぼす！！”

大地の声とともに炸裂する蒼の光。

響いてくる断末魔の声に、耳を覆ってしゃがみこんだ。ガルフ島を、黒馬島を、そしてレインボーヘブンを飲み込んだ海に消え、“海の鬼灯”に変わり果てた住民たち。

“止めてくれ！”

その声を俺に聞かせるのは……。

＊ ＊

「ゴットフリー」

さらさらと流れるような美声。にもかかわらず、この声はいつも有無をいわさぬ力で彼を目覚めさせる。

運びこまれたサライ村の宿営地で、まだ、朦朧とした意識のまま、ゴットフリーは心配げに顔を覗きこんでくる緑の髪の子を目をこらして見つめ返した。

BW……レインボーヘブンの欠片、紺碧の海

緑の髪の子をそう認識した瞬間、ゴットフリーの脳裏に再び崩壊

し、海に沈んでゆくガルフ島の夢が蘇ってきた。

「ゴットフリー?! 良かった。気がついたんですね」

だが、BWが浮べた安堵の笑みは、一瞬にしてとまどいの表情に変わった。

灰色の瞳が、鋭く自分を睨めつけている。突然、体を起こすと、ゴットフリーはBWの襟首に掴みかかり、叫びのような声をあげた。
「何故、お前は住民たちを海に沈めた?! 何故、彼らの命を飲みこんだ!」

「ゴットフリー……」

「レインボーヘブンだけでは不満足か?! お前は、ガルフ島にまで手をかけたな!」

「違う……違います! そんなつもりは……なかった……あの時は、自分がわからなくなってしまうて……、怒りや悲しみや後悔の気持ちが大きすぎて……私はそこから逃げたくなってしまう」

そして、その心の隙間を“海の鬼灯”につけこまれた。

「ゆ、許して下さい。私は……私は……」

上目遣いに睨むゴットフリーの灰色の瞳に、BWは凍りついたように体を震わせ、まともに視線を合わせることもできない。

ゴットフリー? 熱のせいで混乱してるのか。何か悪い夢でも見たのか?

耳に流れこんできたBWの悲愴な声。胸がつまるその思いに理由もわからず、ラピスは二人の間に割って入ろうとした。

だが、半ば夢の中をさ迷う意識の中で、ゴットフリー強く握り締めたBWの襟首を、どんっと突き飛ばして言った。

「俺の前に姿をみせるな。失せろ！お前の顔は見たくもない」

「ゴットフリー、止めるんだ！」

ラピスが叫んだ。

駄目なんだ。BWをこれ以上責めては！駄目……

ところが、かけられたラピスの手をふりほどうと、ゴットフリーが振り返ったその時、

灰色の瞳？！

心の奥まで見透かされてしまいそうな鋭い眼光に、ラピスは思わず2・3歩後ずさりをする。にしても……

何故、見えた？何故……。

「BW、消えてしまえ！この世からお前は……」

駄目だ、その先を言葉にしては！

―― 永遠に ――

言うな！言っではいけない、ゴットフリー！！

「ゴットフリー、ごめんっ！！」

ラピスは拳を強く握りしめると、ゴットフリーに駆け寄り、その鳩尾に一撃を食らわした。

ごほと嫌な咳を残して崩れ落ちた彼の体を両手で受けとめる。ぽたりと床に落ちた血玉に苦々しい気分を感じながら、ラピスはBWの方向に顔をあげた。

薄れてゆく……BWの気配が……

「BW！待て！こんなのゴットフリーの真意じゃない。熱のせいなんだ、本気なんかじゃない。だから……」

だが、寂しげな笑みを残しながら、BWはゴットフリーの言葉に従うように、その前から姿を消してしまった。

「BW、行くなっ！帰ってこいっ！！」

ラピスは泣きたい気分で叫び声をあげた。……が、それと同時に、突然開いた部屋の扉。

「ラピス、この野郎っ！ゴットフリーに何をした？！お前やっぱり、ラガーとつるんでやがったな」

まずいぞ……この最悪の状況に、一番やっかいな奴がきちまった。

気まずそうに腕にかかえたゴットフリーをベッドに戻すと、ラピスは言った。

「ジ、ジャン、落ちつけ。落ちついて、俺の話を聞け」

「問答無用だっ！ゴットフリーのそばから離れろっ！！」

ジャンの髪が蒼く燃えて逆立った。その手のひらが開かれたと同じ時に、ラピスの体はピンポン球のように吹っ飛んでいた。

「ゴットフリー！！」

血相変えて、ベッドに駆け寄るジャン。意識がなく、体がひどく熱い。おまけにあたりには吐血したかと思われる血痕までがちらば

っていた。

畜生！何てことをしやがるんだ！

ジャンのとび色の瞳が黄金色に変わってゆく。小刻みに震える体全体を蒼の光が覆いだした。

「ジャン、駄目だっ！暴走してはっ！」

ジャンに続いて部屋に入ってきたタルクは、いきなり響いてきた金属音に、ぎょっと目を見開いた。飛び散った窓ガラスの破片が頬をかすめてゆく。蒼の旋風が部屋の中にあつた椅子や食器類を激しく巻き上げている。

部屋の壁に嫌というほど強く体を打ちつけられたラピスは、その背の後ろがぴしぴしと崩れてゆく音を聞き、血相変えてタルクの元へ駆け寄った。

「タルク、誤解なんだ。何とかしてくれっ！このままだと、ジャンはこの集落全部を吹き飛ばしてしまう」

「そんな事いったって、ミッシェがいないんだ。あいつ以外に暴走したジャンを止めれる奴なんか、思い当たるか！」

「まったく、どいつもこいつも役立たずばかりか！」

ラピスは半ば、やけくそになって戸口に掛けてあつた自分の弓に手を伸ばした。

「おい、ラピス、どうするつもりだっ？！まさか、お前、その弓でジャンを射抜くつもりじゃないだろうな」

「だって、そうでもしなきゃ、あいつは止まらないだろっ！！」

だが、吹き荒れる蒼の旋風が邪魔をして、うまく的をしぼれない。

的なんかどうだっていいじゃないか。とにかく一番、強く力を感じ

じる場所に俺は矢を打ちこんでやる！

Chapter 32

ラピスは渾身の力をこめて弓を引いた。ひゅうつと、弦がしなった瞬間、その手から離れた矢は、ジャンに向かって一直線に飛んでいった。

慌てるでもなく、ちらりと視線を移すと、ジャンは手のひらを飛んでくる矢に向かって大きく開いた。けれども……

ええっ!?

タルクが目丸くするのも無理はない。ラピスの矢は遮られるどころか、ジャンの手の中へ吸い込まれるように、消えてしまったのだ。

その瞬間、蒼の旋風は嘘のようにぴたりと止まった。

「ジ、ジャン！大丈夫か!？」

ジャンの元へタルクが大急ぎで駆け寄る。

飛び散った家具やガラスの中でジャンは、きょとんと目を見開いて立っていた。

「矢は？矢はどこへ行った？まさか、体を貫いちゃったんじゃないだろうな」

ジャンは自分の心臓あたりを指差して言う。

「手のひらから吸収されて腕を通して、多分、ここん所で止まっている」

「何イ!？心臓に入ってるのか?!ラピスっ、お前、何て事しやがるんだっ!」

「知らねえよっ!何も俺には見えないからなっ。だいたい、心臓に矢がつきささって、平気でいられるわけがないだろ」

確かに……な。

タルクは、改めてジャンの方をしげしげと見つめる。心臓に矢が入ってるっていったって、外側からは何もわからない。すると、

「いや、何か胸のあたりがすつきりしてるんだ。妙に落ち着いた気持ちというか……」

と、ジャンは大きく一つ深呼吸をした。目茶目茶に壊れた部屋の中を見渡して言う。

「僕、何でこんなに暴れてしまったんだろう？」

すると、遠巻きにジャンの様子を覗いていたラピスが近づいてきた。

「ちょっと、診せてみる」

と、ジャンの胸元に手を伸ばす。かすかに光るその指先が……、そのとたん、

「あれっ？消えた?!」

ジャンは不思議な面持ちで、自分の胸に手をやった。

先ほどまで感じていた矢の感触が、溶けるように消えうせてしまったのだ。

「確かにここに刺さっていたと、思っただけどなあ……」

怪訝な顔でラピスが言う。

「気のせいだろ。だいたい、矢が手から吸収されて心臓に刺さるなんてありえない。ジャンはゴットフリーの姿を見て興奮してたから、おかしい気分になったんだ。言っとくがな、俺は急患で運びこまれたゴットフリーを診てただけなんだぞ。変に誤解しやがって!」

「……なら、お前が射た矢はどこへ行ったんだよ？」

知らねえよ。そんな事……。

ラピスは、少し戸惑いながら、“そんな事よりこっちの方を心配しろよ”と、ベッドに横たえたままのゴットフリーの方へ歩いていた。

＊ ＊

「ラガー、早くっ、頭がよくても体力ないと、役立たずっていわれるよ！」

「余計なお世話だ。それにあいつらの役になんて立ちたくもねえ！」

馬を降り、ゴットフリーがいる小屋に駆けてゆくココをラガーが追う。手にはラピスに頼まれた診療用のかばんと薬品箱をかかえている。

「ココ、お前、どっちか一つくらい持たないか！俺は荷物もちじゃないんだぞ」

だが、その時、ラガーを呼び止める仲間の声があった

「ラガー、何処に行ってたんだ！！大変な事が起こったっていうのにっ！」

「……どうしたんだ？血相変えて」

「仲間がドジ踏みやがった。王宮へのトンネルを掘ってた時に、近衛兵に捕まった」

ぎよっと目を見開いたラガー。

「何っ？それでトンネルは？」

「掘っていた2本のうち北側の1本は見つかった。西側はまだ無事だ」

まずい。これで、反乱分子がいる事を王宮に知られちゃった。それに、西側のトンネルをうまくカモフラージュしとかないと、計画自体がご破算になる。

ラガーは、ちつと舌を鳴らしてから言った。

「で、つかまった奴らは何人で、今はどうしてる？」

「5人。今は、捕らえられたままだが……建国記念の日に、水磔すいたくにされる」

「水磔？」

「最近、王族が好んでやる刑罰だ。罪人を逆さにしはりつけた十字架を水際に立てて、潮の干満によって溺死させる……」

「くそっ！ いかにもあいづらが好みそうなお遊びだな。何とか、建国記念までに仲間を助けてさないと……そうだ……BW！BWはまだ、警護隊長のところだな」

その言葉を言い終えないうちに、ラガーは、ゴットフリーがかつぎこまれた小屋に向かって駆け出していた。その後をココが慌てふためいて追う。

「ラガー、待ってよっ！！ 私も行くっ」

「さっさと走れっ！ お前の取柄は足力だけだろ！」

その容赦ない言葉に、ココは少し頬を膨らませたが、今は怒っている場合じゃない。

そう、走らなきゃ！ もう、立ち止まってはいられない。

たとえば、その先に不安が満ち溢れていたとしても。

＊ ＊

ゴットフリーが運び込まれた小屋から、そう離れていない仮屋。

ここは、仲間たちの食事の世話を一手に引き受けてくれているフレアおばさんのために、ラガーが用意した厨房兼寝泊りができる場所だ。

「あいつにベッドを渡しちゃったら、フレアおばさんが寝る場所がなくなるじゃん」

厨房の机に肘をついてココが言う。大破した小屋に病人を置いておくわけにもいかず、ラピスたちはゴットフリーをこの仮屋の方へ移したのだ。

「いいんだよ。あんなに熱が高くて苦しそうな警護隊長を放っておけないじゃないか。ここの宿营地でまともに眠れるのは、あの小屋とここくらいなものなんだから。わたしや、ココたちとテントで寝ることにするよ」

「……にしても、何であの小屋があそこまで壊れちゃったのよ」

「さあ……でも、急に蒼い光が見えた瞬間、すごい風が吹いたんだよ」

蒼い光……そして、旋風。ジャンだ。そんな事ができるはジャンしかない。

ココは、小さくため息をついた。ココを知らぬふりをしたジャン。隣の部屋へ飛びこんでいて、彼に“なぜ？”と聞いてみたい。けれども、ココは心を決めかねていた。

「それより、警護隊長は大丈夫なのかねえ……」

フレアおばさんは、心配顔でゴットフリーたちがいる隣の部屋へ目をむけた。

＊ ＊

「この傷がやっかいなんだよ。高熱を出させて、いつまでも下げさせない。まるで、意志があるみたいに、ゴットフリーにすがりついてやがるんだ」

ラピスの言葉にジャンは不安げに言った。

「でも、命にかかわるものではないんだろう？」

「闇の戦士とやらは、お前の力で消えちまったからな。あれが体にいた時には本当にヤバかった。それでも、ゴットフリーが受けたダメージは相当なものだ」

「闇の戦士が体に……おまけにまた、この傷か……伐折羅の制御が完全に効かなくなってしまってるんだな」

ジャンの横で、タルクが強く眉をしかめる。

「薄々は気づいてはいたんだが、やはりこの傷は伐折羅がつけたものなのか？でも、何で……」

「この傷は約束の印なんだ。伐折羅は不安なんだよ。いつか、僕たちがレインボーヘブンを見つけた時に、ゴットフリーが約束どおり、闇の住民である彼にも居場所を作ってくれるのだろうか。伐折羅は自分を忘れられたくないがために、この傷を痛ませる」

伐折羅、傷なんてなくなたって、ゴットフリーがお前を忘れるはずがないのに……

高熱と傷の痛みに耐えかねて、ゴットフリーが時折あげるうめき声を聞くにつれ、苦々しい思いが胸に湧き上ってくる。

伐折羅がつけた傷は、その気持ちが強すぎてジャンの力では癒すことができない。

だが、ジャンは伐折羅を責める気にはなれなかった。なぜなら、彼は彼なりにゴットフリーを守っているのだ。闇の戦士は夜叉王―伐折羅の配下。それらが現れたという事は、何かゴットフリーに危険が迫っていたに違いない。

Chapter 33

その時、話に割り込むタイミングを逸していたラガーが、今だとばかりに声を発した。

「俺には事の成り行きがさっぱりわからんが、警護隊長をここへ連れてきたBWはどこへいった？ 奴に用があるんだ。早急に！」

「BW？ BWがここにいたのか」

タルクが驚いて言う。

「サライ村の仲間が近衛兵に捕まったんだ。早く奴をつかまえて何か策をたてないと、計画が全部ぶっ壊れる」

ラガーの言葉にラピスはぎょっと表情を変えた。

「何だって？！ 仲間が近衛兵に捕まったって。じゃ、トンネルは？」

「一つはバレた。もう一つは、何とか隠しおおせるよう、仲間を向かわせたところだ」

一瞬、絶句したラピス。その様子を見て、ははあ、なるほど。とタルクが眉を大きくしかめた。

「やっぱり、お前ら何か良からぬ陰謀に手を染めてやがったな。近衛兵が敵だとすると、大方クーデターか何かを企んでいたんだろ。それにBWまで加担していたわけか？ ……で、ゴットフリーにその計画を知られでもして、奴をあんな目にあわせたのか！？」

ラガーは俯きかげんにタルクを睨めつけると、吐き捨てるように言った。

「馬鹿げた事を言うな！ あいつはここに連れて来られた時には、すでに息、絶え絶えの状態だったよ。聞きたい事があるならBWを探して奴に聞けよ！」

「BWは……」

確信はなかったが、おぼろげにラピスは思った。

「多分、もうここへは帰ってこない」

「何?! それはどういう事だ。奴には計画の大半をまかしてるんだぞ!」

「だって、仕方なかったんだ……」

「仕方なくないっ!! 俺が計画して、BWが仲間を率いて実行する。その構図が崩れちまえば、クーデターなんて成功するわけがないじゃないか! それにこのままだと、仲間が処刑されちまう。俺はもう、そんなのはまっぴらなんだ」

頭を抱えてこんで、その場にしゃがみこんでしまったラガーにジヤンは、気の毒そうに目を向けた。彼とは、以前、ガルフ島で少し話をした程度だが、サライ村のリーダーとして、島で迫害されてきた仲間を何とかしたいと願う気持ちはジヤンにもひしひしと伝わってきたのだ。

「タルク、何とかならないのか?」

ジヤンの言葉にタルクが意外そうな顔をする。

「お前、何とかしたいのか? こいつらがゴットフリーをあんな目にあわせたかも知れないのに」

「ラガーが嘘を言っているとは思えない。闇の戦士が出てきたからには、ゴットフリーの相手は普通の人間じゃないよ。それに、僕はこのグランパス王国自体が気に入くないんだ。このまま、捕まったラガーの仲間が殺されてしまうのを見ているなんて、そんなのも嫌だ」

「確かに、それは俺も同じだが……」

特にあの王妃だけは、野放しにしちゃいけない気がする。

タルクは今だに意識のもどらないゴットフリーの方へ一瞥を送る

と、何かをふっきったようにラガーの方に視線を移した。

「まずは、話を聞こうじゃないか。話次第では、俺がBWの代わりを務めてやってもかまわない」

「何だと？お前にそんな事ができるのか？それに、警護隊長の命令を聞かずに勝手に動くなんて、ご法度じゃなかったのか」

ラガーは驚いたように言う。

「俺はこれでも、ガルフ島警護隊一番隊筆頭だぜ。BWのやり方は熟知している。警護隊の鉄の統制をなめてもらっては困る。それは、同時に警護隊長、ゴットフリーのやり方でもあるんだ」

この腐りかけた王国を倒す事に、ゴットフリーが反対なんかするものか。それに、いつまでも俺たちが頼ってばかりいたら、奴は休むことだってできないんだ。

いつになく、きっぱりと言い切ったタルクの迫力に圧倒されたのか、ラガーはやや語調を弱めていった。

「……なら、話は長くなるぞ。ここじゃあなんだから、隣の部屋へ仲間を集めるが、それでもいいか？」

ああ、かまわない。と返事をしてから、タルクはラピスに向かって言った。

「ゴットフリーをよろしく頼む。俺はお前の医者としての腕は確かだと思ってる」

普段は人の良さそうなタルクの声音とは、うって変わった厳しさを感じ取って、ラピスは声も出さず、ただ一つ、こくと首を縦に振った。

ラガーの後について、部屋を出てゆこうとするタルク。

「待って、僕も一緒に行く！」

ジャンが、その背中を追いかけようとした、ちょうどその時、

「ジャンっ!!」

意を決したココが、隣の部屋から飛び込んできた。瞬間的に見交わした目と目。だが、頬を紅潮させて息をはずませているココとは対照的に、ジャンはそっけなくこう言った。

「お前、誰？」

「誰って？ サライ村のココだよ！ あの日食の日、火の玉山で約束したでしょ。レインボーヘブンを見つけたら、ジャンは必ず私を迎えに来てくれるって！」

ぼんやりと目をココの顔に移すジャン。だが、彼が口に出した言葉はココを愕然とさせた。

「サライ村のココを僕も探してるんだけど、それはお前じゃない。そっか、お前もココって名前なんだな」

「ジャン、一体、どうしちゃったの？ 私がそのココなんだよ！ そこにいるタルクだって、ラガーだって、私の事を知っているのに」

自分の腕にすがりついてくる少女の手を、無造作に振り払うと、ジャンは戸惑った表情で二人を見つめるタルクの後について部屋を出て行ってしまった。

「ジャン、待って！」

何で？ どうして、私がわからないの？！

涙がぼろぼろとこぼれ出した。ぴしゃりと閉じられた部屋の扉の前に座り込むと、ココはわあっと声を出して泣き出してしまった。

＊ ＊

妙に湿っぽくなってしまった部屋の空気に、ラピスはいたたまれ

ない気持ちでなす術もない。とりあえず、放っておく事もできずココの近くに膝を折ってその頭に手をおいた。

「ココ、そんなに泣くなって……お前らしくもない」

「だ、だって……ジ、ジャンが、私を知らないって……あんなに心配してくれてたのに……あんなに仲良しだったのに……」

必死で涙をぬぐおうとするココの心がいじらしく、ラピスはそつと両腕でココを抱え込んだ。

「きつと、何か事情があつたんだよ。ジャンは、ココを見捨てたりするような奴じゃない」

ラピスはその時、ふと思った。

それにしても、何故、ジャンはココを無視するんだ？ いや……あの態度はわざとじゃない。奴は本当にココがわからなかったんだ……。

もしかして……

以前、医院で俺にジャンがココの事を聞いてきた時、ゴットフリーが言った言葉。そして、ココを知っていたにもかかわらず知らぬふりをしたあの態度。

“ラガーの話では、サライ村の女、子供は別の島においてきたらしいが”

“あの娘の事より、今はこのグラン・パープルと王宮の事だ”

ジャンはゴットフリーのあの言葉に封印されて、ココの事がわからなくなってしまうているんじゃないのか？

まさか……しかし、考えられない事ではないぞ。

ジャンにとってゴットフリーの言葉は絶対の力をもっている。それは、いつもひしひしと感じていた事ではないか……。

彼らの強い繋がりがジャンの記憶に影響を及ぼしている。多分……いや、確かに。

ううっと苦しい声あげたゴットフリーの方へ顔をあげると、ラピスは言った。

「大丈夫、何か考えがあつての事だ。ジャンの心はココ、お前からは一歩たりとも離れちゃいないよ。だから、もうあまり心配するな」そんなラピスの腕から顔をあげてココが言う。

「だったら、ゴットフリーを診てやって。今度はあっちが心配になつてきたんだから」

「何だ？あいつは、お前らサライ村の敵じゃなかったのか？」

「敵じゃないわよ。少なくとも私は……私は……」

エターナル城の迷宮で、ゴットフリーは私を守ってくれたんだもの。

「好きなんだから」

ココの唐突な告白にラピスは思わず、噴出してしまう。

「へえ、奇遇だな」

そして、ココからそっと腕を離すとゴットフリーの方へ歩きながらこう言った。

「実は俺もそんな感じなんだよ」

Chapter 34

「お前たちの計画の大筋はわかった。建国記念祭でグランパス王の演説が始まる前に2つのトンネルから、仲間を侵入させて王を確保って腹づもりだったんだな」

ちくちくと体中に刺さるような視線をあびながら、タルクは思った。

嫌な目で睨みつけやがって……ま、そりゃそうだよな。ここに集まった主戦力は元のサライ村の住民たち……俺たち、ガルフ島警護隊に散々、虐げられてた連中だ。俺の事もさぞや恨んでいる事だろうよ。

仲間の一人が言った。

「だが、トンネルの一つは近衛兵に見つかった。建国記念祭は五日後だぜ。こんな短時間で別のトンネルを掘るのはもう無理だ」

ラガーがそれに答える。

「エターナル城の迷宮に潜入したココの話では、迷宮の入口があった礼拝堂は、ほとんど今は使われていなくて警備の近衛兵もいないらしい。無事な方のトンネルから礼拝堂に向けて、側道を掘るっていうのはどうだ？ それなら、掘る距離は少しで済むだろう」

「何っ！ あの泥棒娘がエターナル城の迷宮に忍び込んだって？ なら、ゴットフリーと鉢あったんじゃないのか？」

驚いてすつとんきような声をあげたタルクにラガーが、

「そのようだな。ココは警護隊長と一緒に迷宮を攻略したと言っていたぜ。ただ、西の尖塔の最上階で奴とは別れたそうだ」

「西の尖塔？」

「そこが迷宮の出口だったそうだな。馬鹿げた話だが、ココはそこから白い怪鳥に乗って帰ってきやがった」

それは……天喜の白い鳥！

タルクの脳裏に純白の白い鳥が、にわかに浮かび上がってきた。

「……で、ココと別れた後でゴットフリーは何処へ行ったんだ？」

「さあ……な。そこから先の事はココも知らないだよ」

あの泥棒娘と別れた後に一体、ゴットフリーに何かが起こった。

……誰が奴をあんな目にあわしたんだ？

だが、ラガーはタルクの戸惑いを無視するようにトンネルの方へ話を戻した。

「掘った側道のトンネルを礼拝堂の下につなげるんだ。上手くゆけば、礼拝堂の中に潜んでいる事も可能だぜ」

すると、先ほどから、話したくてうずうずしていたジャンが、ここぞとばかりに口を出してきた。

「あのさ……トンネルくらい場所を指定してくれたら、僕が何本だっけって作ってやるのに」

タルクとラガーは、その台詞にはっと目を見開くと、嫌な相手と知りつつ、お互いに顔を見合わせてしまった。

そうか。そうだった……ジャンはレインボーヘブンの欠片、大地。こいつはガルフ島では山まで作ってしまった輩だ。トンネルの一つや二つ作るのなんて朝飯前じゃないか！

「ジャン、助かる。本当に助かる！お前がいてくれて本当に良かった！」

いつになく興奮気味なラガーの様子に、ジャンは少し照れて笑う。

「別に何本も掘る必要なんかねえ、欲しいのは礼拝堂に続く1本だけだ。なら、あとは礼拝堂の位置を探るだけか。しかし、それが問題なんだ。ココに聞いてもそれほど、詳しく覚えているわけではないだろうし」

タルクが言った。

「ラガー、お前、もともとは建築家なんだろう。なら、王宮の中に入ればだいたいの構造はわかるのか？」

「俺を見くびるなよ。城なんて、よほど特別な事がない限り構造は限定された何種類かに決まってる。中を少し見れば、俺は手にとるようにその造りを知る自信はあるぜ」

「なら、明日の晩餐会に俺たちと一緒に来い。宮中武芸大会の優勝者として俺たちには、招待状が届いてるんだ」

「本当か？王宮に入れるならば、そりゃあ、願ったり叶ったりだ」

にわかに具体性を帯びてきたタルクとラガーの会話に、集まったクーデター軍の連中も何時の間にか、熱心に耳を向け出した。

「よし、そうと決まれば細かい計画の打ち合わせをやり直すぞ！みんな、今日は徹夜覚悟でいろよ。五日後の建国記念祭までもう一度編成を練り直すんだ」

ラガーの声が皆の士気をよけいに盛りたてた。

おうっ！と弾んだ声がどこからともなく響いてきた時、タルクは少し、とげとげしかった皆の視線が変わったかなと、頬を紅潮させた。

＊ ＊

一夜が明けた。

昨夜の長い作戦会議の後、ほとんどのメンバーは眠り込んでしま

ったようで、昼を過ぎたにもかかわらず、宿営地はやけに静かだった。

「ラピス」

背後からかけられた声に耳を傾け、盲目の若い医者は少し笑顔を作った。

「起きたのか。具合はどうだ？」

傷跡はまだ、痛むか？と尋ねられて、ゴットフリーは“いいや”と首を振り、ベッドの上に身を起こそうとした。

だが、体がひどく重かった。息苦しさはまだ続いていた。

「まだ、熱が下がっていないんだ。無理に起きないで寝てなきや駄目だ」

「ジャンとタルクの声が聞えたんだ……」

ゴットフリーの台詞にラピスは、微妙な表情をした。

「夢でも見たんじゃないのか？奴らには、この場所を知らしていないんだ。下手に教えたりしたら、またお前を拉致したと、怒鳴り込んでくるのは確実だ」

「……BW、そしてラピス……何でそう俺たちを、この野営地から遠ざけようとする？お前たち、ラガーやサライ村の連中とつるんで何かこの国で事を起こそうとしているな」

やっぱり気づかれたかと、ラピスは苦い笑いを浮かべる。

「ま、いずれ、ばれるとは思っていたけどな。でも、お前には関係ない話だ。後でタルクやジャンにも連絡をとってやるから、今は安静にしてろ」

その二人を巻き込んで、クーデターを起こすんだあ。なんて言えるもんか。言ったら最後、こいつはじっと寝てなんかいやしない。それだけは絶対させたくないからな。

だが、グランパス王国を覆すなんて、とんでもない計画が果たしてうまくゆくんだろうか。流行る心を押さえてラピスは、ゴットフリーの前では敢えて平静を装ってみせた。

「そういえば、BWの姿を見ないが……王宮の温泉場から俺をここへ運んだのは奴なんだろう？」

訝しげに問うゴットフリー。

「お前、何も覚えていないのか？」

「……」

ラピスは無言のゴットフリーの反応に、一瞬、言葉を詰まらせたが、すぐにこう答えた。

「BWはお前をここへ届けてから、姿を消しちまった。なあに、気まぐれな奴だから、また、すぐに何処から現われるさ。それより、王宮の温泉場？ また風流な場所にいたもんだ……で、そこで一体、何があった？ お前の体に入り込んでいた闇の戦士が現れた理由は何だ？」

闇の戦士が体になるほどな、この息苦しさは奴らが悪さをした名残なのか……。

だが、彼らはゴットフリーをアイアリスの罠から救ってくれた救世主だ。あからさまに非難することはできない。

「ミッシェと戦った」

「何っ!？」

「というか、レインボーヘブンの女神アイアリスに変化したミッシェ……という方が正しいのかもしれないが」

「わけがわかんねえ! もっと、かいつまんで物を言ってくれ」

「これまでの経緯はかなり複雑だ。お前に説明しても、仕方がないような気がするが……」

けれども、話さないより話しておいた方が良さそうな気がする。

勘や思いつきとは縁遠かった自分が、最近どうもそれに頼りがちになっている。

これもあのゴキブリ娘の影響か？

いいや、熱のせいだ。と心の中で否定しつつ、ゴットフリーはラピスにかなり“かいつまんで”温泉場での出来事を語り出した。

＊ ＊

「おいっ、泥棒娘！そこをどけ。何で俺たちを通さないんだよっ！」

大男のタルクの前に“とおせんぼ”をしてがんとして動かない娘。

「だって、ラピスが駄目だって言ってるんだから、駄目なもんは駄目！」

「駄目な理由があるか！ちょっと、ゴットフリーの様子をみるだけじゃないか」

力任せに自分の体をもちあげようとする、タルクの腕にココはがぶりと噛み付いた。

「いてえっ！！！」

「あんたのごつい顔を見たら、せっかく良くなってきたゴットフリーの気分がまた悪くなるんだからっ。そんな事もわかんないの？！」タルクとココが戦っている？のは、ゴットフリーがいる小屋から少し離れた場所だった。

生意気な娘め、とタルクがあげた拳をそばにいたジャンが静止する。

「止めるよ、タルク。俺たちが今行って、クーデターや何やとまく

し立てたら、またゴットフリーが休めない……」

ジャンは、ココの方を見て言った。

「そういう事なんだろう？」

ジャンのとび色の瞳に見つめられて、ココはぽつと頬を紅潮させた。だが、相変わらず、ジャンは無表情のままだ。

何でわからないのかなあ。

悲しいのを通り過ぎて、情けない気分になってきた。そんなココの表情を見てか、タルクは膝を折り、その耳元でこそりと囁く。

「な、ジャンはどうして、お前の事、知らないフリをしてるんだよ？」

「それが分かれば苦労しないよ。こっちが教えて欲しいくらい。あ、でも言っとくけどね。フリじゃないと思うよ。本当にジャンは私の事、わかってないもん」

「……」

「そんな事より、もう向こうへ行って！王宮の晩餐会に行くんですよ。お風呂にでも入って、そのむさ苦しい成りをもうちよつと、綺麗にしてきたら？」

余計なお世話だと、タルクは吐き捨てるように言った。その時、ジャンが

「本当にゴットフリーは大丈夫なのか？」

気がかりな様子でココに問いかけてきた。

「うん。さっき見てきたらベットから起きて、ラピスと何やら話しかんてだよ」

「そうか。起きれるようになったんだな」

初めてココにジャンが見せた笑顔。でも、それはココではなくゴットフリーに向けられた物だ。

ちえっ、何かズルイ。

と、ココは頬を膨らませた。

一体、ジャンは目の前にいる私の事、どう思ってるのかな？

この宿営地に、たまたまいた、ココと同じ名前の女の子？

それとも、単なる雑魚娘？

ジャンの心の中にいる“サライ村のココ”

その子は、いま何処で何してるんだろ？

＊

「とりあえずは身をひいてやるが、そこまで言うなら、きちんとゴットフリーの面倒はみるんだぞっ」

ラピスにそう言っとけ！

捨て台詞を残しながら未練たっぷり去ってゆくタルクと、飄々とした足取りでその後を着いてゆくジャンの後姿を、ココは複雑な思いで見つめふと首を傾げた。

そういえば、ミッシェがいない……。

ガルフ島でいつもジャンにくっついてた小さな子供。ほとんど口もきかない無愛想な子だったけど、妙に私と気が合った。

何でだろ？あの子の事を誰も口にしないのは。

Chapter 35 虚無の王宮 水晶の棺

王宮、王女リリーの部屋。

「殿下、お急ぎください。王と女王陛下はとうに中庭の方へ行かれましたよ」

「晩餐会なんて出たくもないのに！」
侍女のけたたましい声に、リリーは面倒臭そうにドレスの裾をたくしあげた。

煌びやかに装飾された純白のドレス、薄紫のレースの縁取り、所々に縫いこまれた銀の刺繍はスウォード・リリー（グラジオラス）の花を形どっている。

死んだ母親―グランパス王国の前の王妃がリリーのために、仕立ててくれていた極上のドレスもリリーにとっては、動きにくい鎧みたいなものだった。

こんなドレスより、ふだん着にしている戦闘服の方がぜんぜん楽！

リリーは小さくため息をついて言った。

「それにしても今夜は随分、衛兵の数が多いわね。何か事件でもあったの？」

「昨晚、見つけたトンネルのせいですよ。貧民街の何人かと、彼らを扇動してたらしい外海の人間が捕まったんです」

「トンネル？」

「そのトンネルを使って王宮の物を盗み出そうとしていたらすすよ。まったく、よそ者が島に入りこんでくるとこれだから嫌ですわ」

外海の人間が扇動？まさかあのゴットフリーとかいう男じゃないでしょうね。

リリーは形の良い眉を大きくしかめた。

彼とは今夜の８時に温泉場の近くで会う約束をしている。よもや、捕まって牢に入っているなどという事はないと思うけれど……

リリーは少し不安になって、こう尋ねてみた。

「その外海の人間ってどんな奴？」

「ずんぐりと太った、職人風の男です。でも腕っ節が強くて近衛兵が取り押さえるのにえらく苦勞をしたらしいですよ」

違う。彼じゃない……

ほっと一つ息を吐いて、リリーは言葉が続けた。

「捕らえた者たちは、北の尖塔に入れてあるの？あの王妃が大好きな土牢に」

少し毒のこもった声音のリリーに、侍女が笑みを浮べていう。

「ええ、そのようです。それより、建国記念祭の前に久々に素晴らしいイベントが見れますよ。水磔！これで記念祭が盛りあがると、みんなももう、大喜びで……彼らもいい時に捕まってくれたものですよ」

大喜びねえ……

王妃だけでなく、この侍女もか。と、リリーはうんざりと彼女から顔を背けた。以前は気の付く優しい人だったのに、何時からエターナル城はこうなってしまったのだろう。

「さあさあ、おしゃべりは止めて早く行きましょう。今日の晩餐会

は王宮武芸大会の優勝者の表彰がメインなんです。リリー様がいらっしゃる場所と場がちつとも、盛り上がりがないじゃありませんか」

侍女にせかされて、リリーは仕方なく部屋の扉の方へ歩を進めた。
……だが、ふと足を止め侍女に尋ねた。

「武芸大会の優勝者って誰だったの？」

あら、知らなかったんですか？と侍女は呆れたように微笑んだ。

「長剣のタルクです。ほら、大男でおそろしく長い剣を持った」

「ああ……あの生意気な銀髪娘と一緒にだった男ね」

さりげなく言ってみたものの、リリーはどくんどくと高鳴る心臓の音を抑えるのに随分と苦労した。

長剣のタルク！ゴットフリーの仲間の男。

確かにこの王宮のまわりが何かが起こり始めている。そして、あの男、ゴットフリー・フェルトは多かれ少なかれ、それに関わっているに違いない。

王妃を殺して……

あなたに王妃を殺して欲しい。

私の選択は間違っていない。きっと来る。あの男は私との約束の場所へ。

＊ ＊

「金持った馬鹿野郎たちが、うようよいやがる」

華やかに飾り付けられた王宮の中庭で、金のキャンドルの炎が揺れている。無駄に大きな羽飾りを帽子に乗せた夫人や、宝石ばかりが目立って、実戦では使えそうもないサーベルを腰に携えた貴族の男たち。

これが同じグラン・パール島に住む人間かよ。

晩餐会のご馳走の山が盛られたテーブルを目にして、ラガーは苦い笑いを浮かべた。

「しかし、巨大化したキャリバンがあんな派手に壊したっていうのに、一晩でよくこれだけ修復ができたもんだ」

ジャンが呆れたように言う。

「宮大工たちが、不眠不休で働かされた光景が目には浮かぶようだが」ちっと、唾を吐き出したから、ラガーは手にもった布袋をよいしよと担ぎなおした。

「じゃあな。俺は俺で勝手に動くから」
すると、タルクが、

「おい、勝手にしてお前、一人で大丈夫なのか？」

「この城の構造はしごく単純で、粗方の部屋の配置はわかったぜ。近衛兵は最強なんて噂がたっているが、中に入ってみると城自体はえらく無防備だ。案外、俺たちは、思っていたよりも簡単にこの城を落とせるかもしれないぞ」

「へえ、こんな短時間でわかつちまうのか？」

「仲間が捕まっている場所もだいたいの予想はつくぜ。迷宮の出口があったという西の尖塔はただのお飾り。彼らが捕まっているのは北の尖塔の地下だ。尖塔の最上階に見張り台があるだろう？ ああいう塔は、大抵は地下に土牢を備えている」

土牢といってもただ、穴を深く掘っただけのじめじめした場所だから、早く出してやりたいんだが……

「とにかく、城の中に入って礼拝堂の正確な位置を確認してくる。……で、一仕事を終えたら、俺はそれで宿营地にもどるから、あとは適当にやってくれ」

「おいおい、いくら客でもそんなに簡単に城の中には入れないだろう？それにその肩に担いだ袋？それは一体、何なんだ？」

タルクの言葉にラガーは人の悪い笑みを浮かべて、袋の中身を取りだした。

「警護隊長が宿営地に運び込まれた時に着ていた服だ。どういう理由か知らないが、奴は近衛兵の制服を身につけていたんだ。上着だけは、間抜けそうな近衛兵からさっき一つ失敬してきた。近衛兵になりすませば、城内にだって入れるだろう？」

タルクの横でジャンは不思議そうに小首をかしげる。

「でも、まだ袋に何か入ってるじゃん。それって何なんだよ？」

「俺が開発した超小型、超高性能の時限爆弾だ。城の主柱や出入口に土産に置いていってやろうと思ってる。最悪、クーデターに失敗しても、この城一つくらいは破壊できるぞ」

ちょうどその時、城内から派手な金管楽器のファンファーレが響いてきた。

「ほら、主役！さっさと行けよ。表彰式が始まるぞ」

タルクの背中をどんと押すと、近衛兵に変身したラガーは何気ない顔つきで城の方へ入っていった。

なるほど、頭脳と知識に関してはゴットフリーが一目おいていただけはあるな。だが、人の事を感心してばかりはいられない。

“優勝者 長剣のタルク、前に出よ！！”

大音声で呼び出された自分の名に、ぶると一つ武者奮いをしてから、タルクはおうっ！と声をあげ、その身長よりも長い剣を大きく振り上げて前に進み出た。

人垣の群れが、自然に両脇に分かれ王宮武芸大会の優勝者に道を

あける。羨望と好奇に満ち溢れた視線を威圧するように、タルクはわざと顔を強くしかめ、普段より2歩は大股でグランパス王たちが待ち受ける王座までの道を歩いていった。

へえ、タルクもああやってると、ゴットフリーに負けないくらいに迫力があるじゃないか。

ジャンはにやと笑みを浮かべてから、ふと夜空を見上げた。

何かが来る……？

新月の空には星もなく、晩餐会の会場の煌びやかさとは裏腹に深い闇が広がっている。その闇の一欠けがずっと自分の方向へ落ちてきた。

あれっ？……

ふわりと肩に降りてきた漆黒の小さな鳥に目を向け、ジャンは少し驚いた顔をした。

伐折羅の黒い鳥。

天喜の白い鳥と対をなす2匹で1つの、レインボーヘブンの欠片
“空”

「お前が僕の前に姿を見せるなんて、珍しいじゃないか？」

黒馬島で伐折羅は僕の事を嫌ってたからな。伐折羅にいつも影のように寄り添っていた、この鳥が来るなんて何かよほどの用があるのか。

すると、ふいにジャンのまわりの空気が急に暗に染まった。

「お、おいっ、ちょっと待てよ！」

突然、おこった黒い旋風。それは、一気にジャンをエターナル城の上空まで巻き上げた。

巨大な闇の翼を広げた“伐折羅の黒い鳥”が、西の尖塔に向けて飛んで行く。

西の尖塔？エターナル城の迷宮の出口があったという？

黒い鳥の背の上でジャンはとび色の瞳を凝らして最上階の窓を見つめた。

尖塔の屋根の街燈が、蛍灯のようにちらちらと、ジャンを誘っている。

「お前、僕をあそこへ連れて行こうとしているのか？」

ジャンの言葉に答えるかのように、黒い鳥は尖塔の窓に身を寄せていった。

Chapter 36

その塔の窓に足をかけたとたん、ジャンはあれ？と眉をしかめた。敵？いや、味方？危険を感じるわけでもなく、かといって安全ともいえない。妙に混沌とした空間。

だが、ただ一つだけ、強く気を感じた場所があった。部屋の中央部分にやけに明るく輝いている。明かりといえば、天井にあるシャンドリアが一つあるだけなのに……。そこへ向かってゆこうとした時、ジャンの鼻先にふいに黒い羽毛が落ちてきた。

伐折羅の黒い鳥……レインボーヘブンの欠片、空……

振り返ってみても、その闇の翼を持った鳥は何かを語るわけでもない。ただ、黒い瞳でジャンを見つめているだけなのだ。

「これ、持っていてもいいだろう？」

にこと微笑むと黒い羽を胸のポケットにしまい込み、ジャンは光のある場所に小走りで駆けていった。

＊ ＊

部屋の中央に見つけた水晶の棺。

その中で眠っている銀の髪の人を目にした時、ジャンはどうしようもなく高鳴る心臓の鼓動を抑えることができなかった。

胸に一房の緑の枝を持ち、静かに瞼を閉じている儚げなその姿。

“エターナル城にレインボーヘブンの欠片が眠っている。それも水晶の棺に納められて”

「お前が、そのレインボーヘブンの欠片なのか?!」
たまらず、手を棺の蓋にかけた時、

“レインボーヘブンの大地よ。水晶の棺を開けてはなりません”

静かな声が、ジャンの頭の中に響いてきた。

「やはりそうなんだな……ならば、お前はレインボーヘブンの何なんだ？」

“私はレインボーヘブンの欠片、樹林”

かつて、その至福の島に溢れんばかりの森の緑で、清涼な酸素を送り込んでいたレインボーヘブンの”樹林”？だが……

「……僕は、お前の事をよく覚えていない」
すると、棺の中の人は笑いながら、瞼をゆっくりと開きだした。

その瞳は、吸い寄せられそうなほど美しい、花緑青の色をしている。

“私はあなたをよく知っています。だが、私が待っていたのは、あなたではない。レインボーヘブンの王……私はもう一度、彼に会いたい”

「レインボーヘブンの王にもう一度って？やはりゴットフリーはここに来たんだな?! お前、奴に何を話した？水晶の棺を開けてはならないってどういう事なんだ?!」

“この身にかけられたおぞましい呪い。だが、私は気づいてしまった。私を救える者。その唯一無二の存在に”

水晶の棺の中で、“樹林”が胸に持った一枝の緑の葉がかすかに芽吹き出した。

「救える者？それがゴットフリーだと言いたいのか？だが、呪いて？誰がそんなものをお前にかけた？」

“あなたに話しても甲斐のないこと、邪魔になるだけです。だから、レインボーヘブンの王をここへ来させてください。”

「邪魔って、随分な言い方をするんだな。お前も僕も、レインボーヘブンの一部であることに違いはないんだろ。いわば、仲間のようなものじゃないか！」

少し怒った風の口調のジャンに、水晶の棺の中に横たえたまま“樹林”は冷ややかに笑いかける。

“私の事を覚えてすらいない、あなたに仲間呼ばわりされたくはない。私の望みはこの水晶の棺を出て……そして、誰にも拘束されない場所で自由に暮らしたい。ただ、それだけなのです。レインボーヘブンなど、別にどうなろうと、私の知った事ではありません”

「レインボーヘブンはどうでもいいって！？僕と他の欠片たち、それにゴットフリーだって、あの至福の島がもう一度蘇る事だけを望んで、ここまでやってきたというのに、そんなに身勝手な話があるもんか！」

“あなたに私の気持ちはわからない！この水晶の棺の中で、時を数えているだけの気の狂いそうな日々……今、やっと、そこから開放される術がわかった。だから、はやくレインボーヘブンの王……ゴ

ットフリーををここへ呼びなさい”

澄んだ声のトーンを低く下げて“樹林”は、ジャンを脅すように睨めつけた。

こんな理不尽な事ってあるもんか。レインボーヘブンは七つの欠片が揃わないと蘇らない島なんだ。欠片のままでいいわけがないだろう？そんな事が起こったら、僕たちは永遠にこの世をさ迷うことになる。

後悔の思いを胸に抱いてさ迷う邪気……それは、あの“海の鬼灯”とたいして変わりが無いじゃないか！

ジャンの体が蒼く燃えた。“樹林”に対するどうしようもない怒りが心の底から湧き上がって来る。

同じレインボーヘブンの欠片同士なのに、なぜこいつにはそれがわからないんだ？！

「そんなに水晶の棺から出たいなら、さっさと出てくればいいじゃないか！お前にかけられた“呪い”がそんなに邪悪なものならば、僕がそれを消し去ってやるよ。誰がゴットフリーをここに連れてなどくるものか。奴はレインボーヘブンの王、お前一人にかまっていられる暇はないんだ」

吐き捨てるようにそう言うと、ジャンは両手を水晶の棺の蓋にがしっとかけた。ゴットフリーがずらすだけに留まった重い蓋の重量も、ジャンにとってはないのも同じだ。こともなげに持ち上げる。だが、その時、

“私の忠告を無視するなら、お前にも私と同じ苦しみを味合わせて

あげる”

“樹林”の手にした木の枝が、突然激しく蔓を伸ばし、あつという間にジャンの体を取り巻いたのだ。

「何しやがるっ！ふざけるのも大概にしろよっ！」

ジャンの体から蒼の光がほとばしった。こんな蔓ごときに負けるはずがないだろう？……が、次の瞬間、ジャンはとび色の瞳を大きく見開いて蔓から芽吹いた花々を見つめた。

緑の花？！だが、この花からは……？

黒馬島のザールの紅い花園とまるで同じ香りがする！

力が萎えてゆく。体に、がんじがらめに巻きついてくる植物を引き剥がそうにも、少しも力が溢れてこない。

ザールの紅の花園、

あの紅の花は、海の鬼灯の化身だった……

そして、レインボーヘブンの海に沈められ、海の鬼灯になった盗賊たちの断末魔の声を聞いてしまった、この僕は、海の鬼灯を攻撃することができない。

あの時、持ってしまった哀れみの心が、今も僕を呪縛する。

この緑の花も……海の鬼灯？！その化身か！

「畜生っ！罨にはめやがったな！」

体中を覆い尽くした蔓が、水晶の棺の中へジャンを引きずり込む。激しく繁茂する植物の間からかすかに見える緑の瞳。レインボーヘブンの欠片“樹林”

泣くでもなく笑うでもない無感動なその表情が何を物語っている

のか……それは知る術もない。

ジャンが棺の中に入り込んだ瞬間、“樹林”は静かにその瞼を閉じていった。

そして、水晶の棺は再びかたく閉ざされた。その中に“大地”と“樹林”、二つのレインボーヘブンの欠片をかかえたままで。

＊ ＊

好奇と拍手喝采を背に受けながら、タルクは王座に進み出た。

王宮武芸大会の優勝者への授与式。だが、肝心の王は王妃が勧めた酒で、すっかり出来あがってしまっている。とてもじゃないがプレゼンターの役割は果たせそうにない。

「いいのよ。陛下の代わりは私が務めます」

真っ赤な口紅で染め上げられた笑みを浮べて、王の横に侍っていた王妃が立ち上がり言う。

「金子をここへ」

御付武官が、うやうやしく差し出した供物台の上におかれた錦袋――優勝賞金二千ラベル入り――それにちらりと目をやってから、王妃は“もっと近う寄れ”と、猫をなでるような声でタルクを呼ぶ。

う……、何だか体中がむず痒くなってきた。美人？そう言えなくもないんだが……この王妃には近づきたくないんだ。

自分の正直な拒否反応に従いたいのはやまやまだが、賞金の二千ラベルを捨てるわけにはゆかない。

もらえるもんはもらっておかねば。主婦っぽくて嫌だったが、船の家計を預かっているタルクとしては、引くに引けない場面なのだ。それにクーデターを起こすにしたらって、それ相当の金がいるはずだ。

「有難き幸せにございます」

ひざまづき、深く頭を垂れながら供物台から布袋を受け取る。

「城門の裏で待っているわ……授与式が終わった後で」

耳元で囁かれた王妃の声に、タルクは思わず眉をしかめた。嫌だ……この王妃からは魔性の匂いがぶんぶんする。

真紅のドレスを長く引きずりながら、正体のない王の元へもどつてゆく王妃。それと入れ替わるように、王女リリーが席から立ち上がった。

「優勝者に銀杯を渡すわ」

王妃の方を見ないよう、わざと顔を横に背けてタルクの方へ進み出る。

長剣のタルク……ゴットフリーの仲間の……

紫暗の瞳で自分より何廻りも大きい男の顔を見上げる。柔らかなドレスを身にまとったリリーは、武芸大会の時とうってかわって愛らしく、きりとひきしめた口元が、少し生意気で、いかにもお姫様という雰囲気醸し出していた。

へえ、このお姫さん、こうしていると、なかなか可愛い。

いかめしさを装ったタルクがふと、表情を和ませた時、リリーとタルクの視線が一瞬、交錯した。大慌てで、また眉間に皺を寄せるタルクにリリーはふっと吹き出してしまった。

あいつの仲間にしては、愛嬌があるじゃない。

会うたびに震えを感じるゴットフリーとは、全然違う。それでも、あの長剣とこの巨体。威圧感には彼に勝るとも劣ってはいない。

「銀杯をここへ」

とくとくと波打つ鼓動を抑えながら、リリーは心とは裏腹に、わざと冷たい声音でそう言った。だが、

「銀杯の前に副賞を優勝者に授与致します！」

御付武官の声と同時に、管弦楽団のファンファーレが大きく響いた。それとともに会場に引き出されてきた供物……

生きた小羊が一頭。しかも二本の交差した棒に逆さに縛られて、めえめえと悲しい声をあげている。

タルクと自分の間に掲げられた羊の姿に、リリーは大きく眉をかめた。

一体、何のつもり？こんな話は聞いていないわ。

誰かが笑った。

そして、武官が手を一振りした瞬間、辺りに鮮血が飛び散った。鼻にかかったきいきいした高笑い。そして、その後に続く無数のほくそえみ。

分かってるわ！笑っているのは王妃でしょう？それにっられて、この王宮のみんなが一緒に微笑むのよ！

長槍に貫かれた小羊が、血に染まりながら苦しげな断末魔の声をあげている。わざと急所をはずされて、死ぬに死ねない憐れな供物。びくびくと血の泡を吹きながら悲しげに手足を空にばたつかせている。

リリーは、なす術もなく、ただ呆然とその前に立ち尽くしていた。

こんな国が滅んでしまっても、もう、私は構わない……。

ぽろりと、リリーが一滴、涙を流したその時だった。うおおっ！！と

タルクが一声、宙に吼えた。

そして、その背の丈より長さのある長剣を大きく空に振り上げた。一刀のうちに、小羊の体を真っ二つに切り裂く。

「死なせる時は、苦しまないようにもっと綺麗に突いてやれ！」

地面には、完全に絶命し無残に二つに分けられた小羊の胴体が転がっていた。

タルクは、長剣を横に振るうとついた小羊の血のりを払い、はき捨てるようにこう言った。

「無駄な殺生はするな！こんな気持ちの悪い副賞なんか、俺はいらねえんだよっ！」

Chapter 37

サライ村の宿営地の小屋。

「寝てなきや駄目！また、熱が出てきたんだからっ！」

「俺にかまうな」

「かまうわよっ、ラピスにそうしろって言われてる」

まくしたてたように言うココに、ゴットフリーは小さくため息をついた。

「ラピスはどこへ行った？」

「用事があるって、町の方へ出かけたわよ。すぐに戻ってくるけど、その間ちゃんとあんたを見とけて」

「お前は俺の母親か？その五月蠅い口を脳天から、闇馬剣でたたき斬ってやろうか？」

冗談じゃないわよ。と、ココは口をへの字にまげた。

こいつの母親って、サライ村の住民を何人も生埋めの刑にした、あのリリア・フェルトじゃない。

「あんな頭のおかしいババアと私を一緒にしないでよ！」

言った後で、ココは顔を凍らばせた。灰色の瞳が鋭く自分を睨めつけている。

本当に斬られてしまうのではないかと、背中に一瞬、ひやりと汗をかく。だが、ゴットフリーはふっとココから視線をおとすと、こう言った。

「リリア・フェルトは俺の本当の母親じゃない。子供の頃に捨てられて、道で泣いていた俺を拾って育ててくれた恩人だ」

え……そんな事、ちつとも知らなかった……。

「なら、私と一緒にだね。私も捨て子だったんだよ」

ちよつとぼつが悪くなつて、ココはわざと明るく笑った。だが、ゴットフリーはどこまでも、淡々とそっけない。

「別にお前と一緒にでも嬉しくも何ともないな」

ちえ、本当に愛想のない奴。

ココは、ふくれっ面をしてみせたが、

「あ、そうだ。この前、言つてた私のロケット、見せてあげるよ。だから、機嫌を直してよ」

と、首にかかった鎖をはずして、差し出してきた。

「誓つて盗んだ物なんかじゃないよ。これは私が捨てられてた時に持っていたロケットなんだから。この中の写真の人。それが私のお父さんなんだって」

ロケット？ エターナル城の西の尖塔で見たあの銀のロケットか？ 黒馬島の古物商、ザールが持っていた金のロケットとよく似た……

にわかに、脳裏にザールの言葉が蘇ってくる。

“わ、わしは持っているんだぞ。金細工のロケットだ。ガルフ島の当主リリア・フェルトから預かったお前の父の遺品を！ お前の本当の親の物だぞ。中にお前の父の写真が入っている。お前によく似ていると島主リリアも言っていたぞ”

気乗りはしなかったが、ココから受け取ったロケットの蓋を開けてみる。だが、ちらりと中身を見ただけで、すぐに閉じてしまった。無言でロケットをココに返すと、そのままベッドにごろんと横た

える。放心したように、小屋の天井を見つめている。そんな彼の様子に、ココは首を傾げた。

「どうしたの？また、具合が悪いんじゃないの？」

と、顔を覗き込もうとした時、

「今、何時だ？」

「え？時間？」

急に話題を変えられて、ココは少し戸惑い気味に壁にかかった時計を見た。

「7時20分だけど……それが、どうしたの？」

7時20分……王女との約束は確か8時だったな……。

「喉がかわいた」

「え？」

「やはり熱があるらしい。冷たい物が飲みたくなった」

額に手をあてながら、初めて弱気な声を出したゴットフリーに、

「待ってて！すぐに何か持ってくるからっ、確かフレアおばさんが

テントの近くで氷を作ってた」

「……、ちょっと待て」

「え、何？」

一瞬、戸惑ったような表情して少女を見つめてから、ゴットフリーは再び目を閉じた。金のロケットと銀のロケット……だが、今はそんな事に関わっていられる場合じゃない。

「……、いや、いいんだ。何でもない」

こいつが、こんな態度をとるなんて相当具合が悪いんだ。熱がまだ高いのに、無理するから……

不安が心に満ちてきて、ココは大急ぎで小屋から駆け出していっ

た。

＊ ＊

ココが部屋を出て行ってしばらくすると、ゴットフリーはベッドからむくりと起き上がった。

まったく、単純な娘だな……。

部屋にあったクローゼットを開け、中にあった適当な服と靴を身に着ける。小汚いとまた王女に文句を言われそうだが、そんな事にかまってはいられない。

小屋の扉を開こうとした時、また右胸の傷跡が痛み出し、もともと熱かった体がさらに火照りだした。

伐折羅……俺と王女が会うのを邪魔しようとしているな。

「お前の警告はよく分かった。だが、今は、そんな物は余計なお世話だ」

ゴットフリーは吐き捨てるようにそう言うと、ドアを開け小屋の外へ出て行った。

＊ ＊

“駄目よ。そんなに熱があるのに、王女の所へ行こうなんて”

サライ村の宿営地から出た場所で、夜風が耳元に吹きつけてきた。

霧花……レインボーヘブンの欠片“夜風”。

だが、知らぬそぶりで海岸に向かって歩いてゆく。

海岸に添った林。そこを抜けると王宮の温泉場に出るはずだった。

“ゴットフリー、聞こえているの?!”

夜風の声が頭に響いてきて、なんとか持ちこたえている意識を吹き飛ばしてしまいそうだ。

「五月蠅い、俺にかまうな!」

“ゴットフリー!!!”

霧花が彼の腕を引こうとしたその時、突然、黒い旋風が吹き上がった。

自分の前に姿を現した巨大な黒馬の姿に、思わず笑みをもらす。

「素直に俺に従うのは、お前だけだな」

だが、黒馬のたてがみに手をかけ、足を胴体にかけた時、

ひゅっと、1本の矢がゴットフリーの頭をかすめて飛んでいった。

「誰が出かけていいって言った?!」

小振りの弓を手にした青年が、正面に立っていた。大急ぎで駆けってきたのか息を激しくきらしている。

ラピス・ラズリ……、盲目の弓使い。

「何でお前の許可がいる?俺が何をしようと俺の勝手だ」

「馬鹿な事を言うな!そんな状態で一体、何処へ行こうというんだ?」

「お前には関係ない話だ」

ラピスを無視して、ゴットフリーは黒馬に再び足をかけた。そこ

ろが次の瞬間、大きくバランスを崩して、前のめりに倒れこんでしまった。それもそのはず、目の前にいた黒馬の姿が、突然消えてしまったのだ。

もう1本のラピスの矢が、黒馬がいた後ろの木にささっていた。ラピスが射た矢が黒馬を貫こうとした瞬間、それは矢を避けるように姿を消してしまったらしい。

「ラピス、余計な真似をするなっ！」

「俺はタルクからお前を任されてるんだ！それに、医者として、こんな事が許せるか！」

「タルク？やっぱり、タルクとジャンはここに来てたんだな」

一瞬、しまったと顔をしかめたが、ラピスは再び弓を構え、矢先を手前に向けた。

「どうしても言う事を聞けないってんなら、この矢で、お前が動けないように後ろの木にはり付けてやるが、それでもいいのか！」

きりりとラピスが矢とともに、弓の弦をひいた時、

“乱暴な真似はやめて！”

黒い風が舞いあがった。ゴットフリーとラピスの間に割り込むように姿を現した漆黒の乙女。

突然変わった空気の密度に、ラピスは、思わず弦にかけた指の力を弱める。

「誰だ？そこにいるのは！？」

“私は霧花、レインボーヘブンの欠片”夜風“”

「レインボーヘブンの欠片“夜風”？また、ややこしそうな奴が現れやがった……」

でも、今回はちょっと毛色が違うぞ。女か？それに、この凜と冴

え渡った感じ……イメージ的にはかなり美女っぽい。

見えなくなたって、そういう事は何より先に感じ取れてしまう。ラピスは苦笑した。

倒れこんだゴットフリーをかばいながら、霧花は乞うような眼差しで言う。

“ラピス、あなたが、ゴットフリーにどんなに良くしてくれてるかは分かっている。でも、その矢を彼に向けるのは止めて”

だが、ゴットフリーはそんな霧花の台詞に我慢がならない様子で、その手を振り払った。

「霧花、何でこいつにそこまで謙る必要があるんだ？お前もそうだが、どいつもこいつも、俺におせっかいを焼くのは止める！」

「本当にわからず屋なんだな。おせっかいでも何でも、俺は、絶対にお前をこの先へは行かさないぞ！」

ラピスが再び弓矢を構えなおそうとした時

“待って！ゴットフリーが会いに行くのは、この国の王女よ。どうしても、ゴットフリーが彼女と話がしたいというなら、私が王女を迎えに行くわ。そして、ここへ連れてくればいいんでしょ”

また、夜風の声が響いてきた。

「王女だって?!」

そりゃあ、武芸大会で目立てば王族、貴族とお近づきになれるぞとは言ったけど、よりによって“スウォード・リリー”かよ。

「信じらんねえ。ゴットフリー、お前って見かけによらず手が早いんだな」

霧花は“違う”とラピスに反論しようとしたが、胸を押さえ込んでその場にうずくまってしまったゴットフリーに、慌てて手を差し出した。

“本当にこんな状態では、王女に会うなんて止めた方がいいのよ……でも、あなたがどうしても言うのなら、私が約束の場所……あの温泉場まで行って王女をここへ連れて来ます。ラピス、それなら許可してくれるでしょう？王女にはここまでの道筋は決して悟られないようにするから”

クーデターを計画してるアジトに敵の王女を連れてくるなんて、とんでもない話だ。だが、そんなにまでして王女に会おうとするなんて、この男と“スウォード・リリー”の間に一体何があったんだ。

やはり、黙ってやり過ごすわけにはいかないか。

「宿営地の他の奴らには、決して王女の姿を見られるな。そんな事になったら、もう俺は助けてやれないぞ」
しぶしぶだが、“仕方ない”と首を縦にふったラピスに霧花はほっと息をついた。

“ありがとう”

その声がするりと、耳元を通り過ぎていった瞬間、ラピスが感じている霧花の気配が消えてなくなった。

あの夜風もかよ……

いや、ココが好きだといったのとは少し違うぞ。

懸命に尽くしてるって感じた。

あれは完全にゴットフリーに……

惚れてるな。

ちえっと、小さく舌を鳴らして、弓を降ろしゴットフリーの方へ歩いてゆく。どうにか一人で立ち上がった彼をを手で支えて、ラピスは怒ったように言った。

「こんな事を繰返してたら、いつまでも良くなんかなりっこないぞ」
「……大丈夫だ。大分、慣れてきた……」

かすかに響いてきた、低い声にラピスはぎくりと身を縮込ませた。

何だ？この重い雰囲気は……。

「熱にも傷の痛みにも……慣れてきた」

「冗談じゃないっ。そんな物に慣れられてたまるかっ！」

そう言っではみたものの、何かが違う。何かが変わってゆこうとしている……

明から暗へ

生から死へ

ラピスは、少しうろたえながら、かすかに笑みを浮かべるゴットフリーの顔に目をやった。背中を通り過ぎてゆく、ひやりとした冷たいもの……

それを強く感じながら。

Chapter 38

王宮の晩餐会。

エターナル城の中庭で、タルクは仁王立ちに授与式の観客席を睨めつけた。鬼のようなその形相。

大回しに背に戻した長剣の刃が、今にも自分たちの首に飛んできそうだ。王宮武芸大会の供物にされた、子羊の惨劇を笑っていた人々の表情は一変してひきつっていった。

「俺は金だけもらえれば、それでいいんだ。副賞の子羊とやらは、ジンギスカン鍋にでもして、とっとと食っちゃえ！」

そう言ってみたものの、目前に血まみれで転がっている羊を王宮の奴らが食ってる姿なんて、想像するだけでも身の毛がよだつ。

賞金の入った錦袋をわし掴みにすると、タルクは玉座にくるりと背を向けた。そのとたん、観客が慌てふためいて道を開ける。だが、タルクがその人垣を通り過ぎようとした時、不意に後ろから声がした。

「お、お前、王妃が呼びだ。お、俺について、こ、来い」
ちっ、と 半分逃げ腰の衛兵をタルクはぎろりと睨めつけた。

何のつもりで、俺を呼び出すのか想像もつかんが、どうせ、ろくでもない罠を仕掛けているんだろ。

だが、真近に見た王女リリーが流した涙。

これ以上、王妃の奇行を許すわけにはいかない。

行ってやろうじゃないか。鬼が出るか蛇がでるか、この目でしか確かめてやる！

タルクに斬られた子羊を、下働きの卑官たちがそそくさと片付けだした。

「部屋に下がります。気分が悪くなった……」

俯きながら王女リリーは、侍女に言う。

「本当に申し訳ございません。せっかくの趣向をあの男が台無しにしてしまつて」

そうじゃない！もういい加減にして。

たまらなく悲しくなつて、リリーは一刻も早く、この場を立ち去りたい気分になった。

「おや、“スウォード・リリー”ともあろう人が、意外と意気地がないのね」

小ばかにしたようにほくそえむ王妃に軽蔑の一瞥を送る。

「今、何時？」

「は？」

「今、何時かと聞いているのよ！」

まくしたてるように言うリリーに、侍女は少し慌てて答えた。

「8時です」

8時！私は、あの男……ゴットフリー・フェルトに会わなきゃいけない。必ず、彼は来る。そうでなければ、私は……私は……

駆け出したい気持ちを、優雅なドレスが邪魔をする。破りつつしまいたい衝動にかられながら、リリーはその裾をたくしあげ王宮の中に足早に消えていった。

＊ ＊

月明かりのない深い闇の中で、エターナル城の西の尖塔は、怪しく息づいていた。

確かにその塔は巣くわれていたのだ。邪な物たちによって……。塔の最上階で、ほのかに白く輝く水晶の棺。

—レインボーヘブンの欠片“樹林”と“大地”を取り込んだ魔破の牢獄—

だが、その色は、“樹林”が持つ一枝から芽吹いた毒の花、“ラシカ”の色に染めあげられ、濃い緑に変わろうとしていた。

ところが、その中心にぼつりと墨のような黒が滲み出したのだ。すると……急速に棺の中に黒が広がりました。それらはむくむくと膨れ上がり、沸騰した鍋からこぼれでる湯のように、水晶の棺の重い蓋を押し上げはじめたではないか。

ふわりと一枚、飛び出した漆黒の羽……その瞬間棺の蓋を吹き飛ばし、おびただしい数の黒い羽が、西の尖塔の中に舞い上がった。

闇のような羽の乱舞。その中心に立っている、どう見ても闇には似つかわしくない快活そうな少年。

ジャン・アスラン、レインボーヘブンの欠片“大地”

おびただしい黒羽は、徐々に形をなし巨大な黒鳥に姿をかえてゆく。

「ありがとう。お前の羽が僕を水晶の棺の外へ出してくれたんだな」西の尖塔に入る前に、なんとなく胸元にいれておいた黒い鳥の羽。その羽が水晶の棺の中に引きずりこまれたジャンを、毒の花から

包み込むように守ってくれた。

自分の後ろで大きく翼を広げた“伐折羅の黒い鳥”を背に感じながら、ジャンは正面に浮かびあがった白い影をきりりと睨めつけた。

「レインボーヘブンの欠片“樹林”！ やっと水晶の棺から出る気になったのか」

艶やかな銀の長い髪。白い半絹の足元まであるアルバ（司祭服）を身にまとったその姿。聖職者さながらの優雅さで、“樹林”はジャンに微笑みかける。

だが、その足元から蔓を伸ばし芽吹き出したランカの花の色は、緑から紅に色を変えていた。そして、“樹林”の花緑青の瞳までもが、紅い遺恨の色に染まり出した。

「棺の中でおとなしく眠っていればいいものを……余計な事をしてくれた。この棺から私を出すのは……レインボーヘブンの王、彼でなければ意味がなかった。こうなれば、邪魔なお前を始末して、私はこの牢獄から外へ出てゆく」

“樹林”が手を振ったとたん、紅の花は鈍く輝く光となりジャンに向けて攻撃をしかけてきた。

「紅い光！ ……“海の鬼灯”か？！ 畜生、“樹林”、お前、やはりこいつらに操られていたんだな！」

この紅の灯はかまいたちの刃のように狙った獲物を引き裂くのだ。

とっさにジャンが身を伏せようとしたその時、黒い旋風が巻き起こった。

“伐折羅の黒い鳥”

その翼から放たれた黒い羽毛は、漆黒の息吹となり“海の鬼灯”の紅を次々にからめとってゆく。

「くっ……」

ジャンにたどりつけぬまま、床に落ちてゆく“海の鬼灯”を目の当たりにして“樹林”は唇を震わせた。再び、ジャンを攻撃しようにも黒い鳥に守られたジャンに、紅の閃光は届かない。

「無駄だよ。もう諦めろ。それより、もう一度、僕に話を聞かせてくれないか。お前を水晶の棺に閉じ込めたのは誰だ？ 何故、お前にかけられた呪いをとけるのは、レインボーヘブンの王、ゴットフリーだけなんだ？」

「話など何もない。私は、もうここから出てゆく」
尖塔の窓から吹き込んでくる風に“樹林”の銀の髪がたなびきだした。

「おいっ！ 逃げる気か！ それにお前が水晶の棺を出れば、この城は魔毒の居城になるんじゃないのか！」

「私はもう構わない。この城がこの先どうなろうと」

「無責任な事を言うな！」

ジャンの叫びに、“樹林”は皮肉な微笑みを浮べて言った。

「水晶の棺から私を出したのは誰だ？ お前だろう。この開放感はどうだ？ 私はもう二度と、あの棺の中には戻らない」

何かを守りたい……かつては持っていたその思い。だが、そんな物は水晶の棺を出た瞬間、すべて忘れてしまった。

徐々に風の中に溶け込んでゆく、“樹林”の姿にジャンが叫んだ。
「待てっ、そうはさせるかっ！」

ジャンの体が蒼く燃えた。そのとたん、その足元から閃光が飛び散った。

「こんな根性の腐ったレインボーヘブンの欠片を外になんか出したら、“海の鬼灯”の思うがままだ。お前は水晶の棺の蓋を閉めちまえ、また、身動きできなくなるんだろ。なら、僕はこの西の尖塔の部屋全部を水晶に変えてやる。窓も扉も何もない部屋！どうだ？これで、お前はもう外には出れないぞ」

レインボーヘブンの水晶には、邪悪を封じる力がある。レインボーヘブンの水晶……もともとそれは、僕、レインボーヘブンの欠片“大地”の一部だ。

ジャンの足元が大きく震えた。みるみるうちに色と質をかえてゆく西の尖塔。壁、天井……そして、大理石の床に横たえた水晶の棺を取り込んで、尖塔の最上階にあったすべてのものが、無色透明な光の塊にかわってゆく。

澄んだ輝きは水のような冷たさで、逃れようとする“樹林”をふたたび水晶の部屋に閉じ込めた。

ジャンは、ゆがんだ表情をした“樹林”に挑戦的な笑みを送った。「さて、話を聞かせてもらおうじゃないか。場合によっては僕がお前をゴットフリーに会わせてやってもいいんだぜ」

ただし……別の場所で。僕は、ここにあいつを連れてくる事だけは、絶対にしない。

ジャンの言葉に一瞬、唇を震わせた“樹林”だったが、「お前ってつくづく甘い奴だ。私はやはりここを出てゆく」
そのとたん、白い風がジャンの上を飛びぬけていった。

何っ!?

するりと水晶の壁を通り過ぎた一枝の緑の葉。

水晶の壁が尖塔全体を覆う直前、ジャンが気づかぬうちに、一枝の蔓が外へ這い出していたのだ。

「しまった！」

大急ぎで窓に歩み寄り、ジャンはその位置に手をかざした。その部分だけ、水晶の壁がぱらりとほじけ飛ぶ。

外の空気の中をくると舞う一厘の緑の花。おもむろに、それは緑の光となり、西の空を目指して飛んだ。

“あれが”樹林“の化身の花か!?”

ジャンは目を少し細めて遠くを見た。ジャンの目は障害物がなければ、千里でも遠くを見渡す事ができる。とび色の目に映るはるか彼方から、グラン・パールに向けて飛んでくる、おびただしい数の紅の灯……“海の鬼灯”！

ジャンは伐折羅の黒い鳥に飛び乗ると大声で叫んだ。

「“樹林”を捕まえるんだ！あいつが“海の鬼灯”と合流する前に。後悔と恨みのうねりに込みこまれてしまう前に！」

ジャンが作り上げた水晶の壁が粉々に崩れてゆく。その間を抜け、尖塔の窓から飛び出した黒い鳥の背に乗ったジャンは、高速で“樹林”の後を追う。

エターナル城の西の尖塔。その最上階だけが音もなく消えていった。崩壊した水晶の壁は銀の粉となり、さらさらとジャンの後をついていった。

西に向けて流れてゆく銀の帯。そして、西の尖塔の先だけが妙に暗闇に溶け込んでいる……白い靄に隠された、その裏の異変に気づ

く者が今の王宮にいるのだろうか？……否。

だが、確かにエターナル城の崩壊は始まろうとしていた。西の尖塔の最上階―その消失を幕開けとして。

Chapter 39

“着替えていた分、遅くなってしまったわ”

王宮裏の林の中で、王女リリーは大きく息を切らしてあたりを見渡した。

煌びやかなドレスは、どうも性に合わない。それに、その姿でゴットフリーと会うのは、なんとなくばつが悪い。

温泉場の近くのこの場所で、今夜8時。

だが、時間をかなり過ぎているにもかかわらず、ゴットフリーの姿はあたりになかった。

“まさか、おじけづいたんじゃないでしょうね……”

普通、王妃殺しを頼まれて二つ返事でやる方がおかしいのだ。それでも、彼は来る。来てくれる。その期待をリリーは捨てる事ができなかった。

その時、夜風がひゅうとりリーの髪を舞い上げた。そして、突然、闇の中から響いてきた声。

“彼は今夜、ここには来ません”

「誰っ！？ここには誰も入るなど言っておいたはずっ！」

リリーは、咄嗟に腰のレイピアを握り締めた。

目を凝らして見つめてみても、暗闇の中に人影は見えない。だが、薄いベールをかけられたようなこの感じ……確かに誰かがここにいる！

“私は、ゴットフリーの使いの者。彼は……ここには来れません。ですから、私があなを彼がいる場所にお連れします”

リリーは、とくとくと波打つ心臓の鼓動を懸命に抑えながら、こう答えた。

「使いの者ですって？誰がはいはいと、そんな怪しい誘いに乗ると思うの？約束は、今夜8時にこの場所で！何故、あの男はここに来ない？！」

“彼はひどく具合が悪くて……ここへ来る事は到底無理です”

「昨日は、普通に元気だったわよ。見え透いた嘘をいわないで！」
風は空気の間隙から沈痛な声をもらした。

“あなたと別れた後で……本当に命が危なかった。今日になってようやく、起きれるようになったけど、あれでは、とてもここにたどり着くことはできないでしょう”

命が危なかったって？何故……

一瞬、リリーは表情を曇らせた。

“無理に来てくれとは申しません。あなたに会わない方が、彼にはいいのかもしれない”

ゴットフリーが無意味に王女に会いたがるとは思えない。でも、このぬぐいきれない悪い予感、王女と彼が再び出会ったその時から、きっとこの国は崩れてゆく……。

ひゅうと辺りの木の葉を舞い上げ、夜風は空へ身をひるがえした。

“それでは、もうこの話はなかった事にしましょう。ご安心を。私も決して他言は致しませんから”

予想外にあっさりと引き下がろうとするその声が、かえってリリーを慌てさせた。

「待って！私は彼と話がしたい」
すると、半ば冷ややかに風は言った。

“私と一緒に来る気ですか。怪しい誘いには乗らないと言ったのは、あなたの方なのに”

「……その言葉は撤回するわ。ゴットフリー・フェルト、あの人はそんな事はしない！多分……いいえ、絶対に！」

それに私には他に頼る相手もない……。

脳裏に浮かぶ子羊の血で染まった授与式。王妃の歪んだ笑顔。知らず知らずのうちに浮かんできた涙を懸命にこらえる王女を見かねてか、夜風は少し声を和らげて言った。

“……わかりました。あなたがそれでいいのなら、ゴットフリーの元にお連れします”

にわかに黒い旋風が舞い上がった。目前にあらわれた巨大な黒馬。その時、リリーの口を無意識についてきた言葉

「シャドウ」

巨大な影—shadow—のような馬。

「この黒馬はシャドウでしょ？昔、絵本の挿絵で見た事があるわ。闇を駆ける幻の馬の……」

唐突なりリーの台詞に夜風は軽やかに笑った。

“確かにこの馬にその名はよく似合っていますね。ならば、シャドウにお乗りなさい。私が闇の中にあなたの姿を隠します。行き先は言えない……それはあなたを守るためでもあるのです”

張り詰めていた空気が和らぐと、その声は夜想曲のように優しく耳に響いてきた。何だかほっとした気持ちになって、りリーは夜風に向かって言った。

「あなたは誰？」

闇の中から聞こえる凜とした声。

“私は霧花、レインボーヘブンの欠片” 夜風“

そして、レインボーヘブンの王、ゴットフリーにかしづく者です

＊ ＊

「ゴットフリー、眠っているのか？」

サライ村の宿営地の小屋で、ラピスは気がかりな様子でベッドの方向に意識を向けた。半ば無理やりに薬を飲ませて、ゴットフリーをそこに押し込んだはよかったが、どうも以前と様子が違う。

それに、こいつを連れ戻す時に感じた空気の重さは……何だったんだ？

ラピスは一つ大きく深呼吸をしてから、ベッドの傍に歩み寄った。両腕を頭に回し、ベッドにごろんと仰向けになったまま、ゴット

フリーは天井を見つめていた。

「起きてるのか。ちょっとは楽になったか？」

声をかけても返事がない。

気詰まりな空気を変えてやろうと、ラピスは頭の中で色々な台詞を考えるが、それを口に出すことができない。だが、

「ラピス」

と、不意に声をかけてきたゴットフリーの質問は、

「お前の両親って何処に住んでるんだ？」

それは、彼の口から到底出るとは思えない世間話の定番だった。

「お、俺の親？ 出し抜けに一体何を言い出すんだ？」

「いるのか？」

「そりゃあ、いるさ。天から降ってきたとでも思ってたのか？」

「お前なら、それでも不思議はないな」

「やめろよ。冗談じゃない」

かなり驚いたが、相当軽くなった部屋の空気にラピスは、何だかほっとしてベッドの脇に腰をかけた。

「グラン・パープルの近くの小島に住んでる。ちっちゃな果樹園を持ってるんだ。でも、体が弱くてさ、だから、俺はグラン・パープルで医学を勉強して将来は、両親の近くで小さな診療所でも開ければいいと思ってる」

「兄弟は、いないのか？」

「……弟がいるけど、今はまた別の島で働いてる。うちは金持ちでもないのに、ここで勉強させてもらってる俺は幸せなんだ。でも、それがどうかしたのか？ お前、やっぱり何か変だぞ」

両親がいて、弟がいて……やはり、ただの人間か。こいつを特別に思うのは、俺の見込み違いだったのか……

また、黙り込んでしまったゴットフリーに、ラピスは訝しげな表情をする。

「ゴットフリー、お前は？ 兄弟がいるようには思えないが」

「……微妙だな。いる……かもしれない」

「なんだ、そりゃ？」

一瞬、間をおき、ラピスは言った。

「生き別れでもしたのか？」

「……」

「へえ、初耳だ。会いたくないのか？ お前の兄弟ってどんな奴なんだろうなあ」

でも、こいつと似てたらかなりヤバイ感じかな。

「会ったとしても、お互いに気詰まりなだけだ」

「そうでもないんじゃないか？ 案外、気があうかもしれないぞ」

苦い笑いを浮かべたが、ラピスは知らないうちに気分が高ぶっていた。ゴットフリーが、こんなに個人的な事を自分に話してくれるなんて、ありえないと思っていたから。

「俺からも一つ聞いていいか？」

気分が高揚した分、気が大きくなってラピスはゴットフリーに尋ねてみた。

「ジャン……あいつって、お前にとって何なんだ？」

長い沈黙の時間。

ラピスが、“こんな質問しなきゃ良かった” と思いはじめたその時、ゴットフリーがぼつりと言った。

「何故そんな事を聞く？」

「ちよっと気になる事があって」

「気になる事？」

かなりためらいながら、ラピスが言った。

「ゴットフリー、お前、前にココに会っておきながら、ジャンに嘘を言っただろう？他の島にいるって。あれって、どういうつもりだったんだ？」

また沈黙。

「ジャンはどこに行った？」

そういえば、ジャンの姿を随分見ていないような気がする。それに、ずっと感じている嫌な胸騒ぎ……、ゴットフリーの心の中にわかに不安な気持ちが湧き上がってきた。

「……タルクと一緒に王宮の晩餐会だ。でも、話をそらさないで、俺の質問に答えろよ」

小さく吐息をもらすと、ゴットフリーはラピスに灰色の瞳を向けた。固く閉じられた両の瞼。それなのに、ごく自然に心の中に入り込んでくるその声音。

どうもこいつといると、話したくもない事でも、口をつぐむ事ができなくなる。

「……あいつは、真っ直ぐすぎるんだ。だから、損也得も考えないで自分の力を使ってしまおう。特にサライ村のあの娘……ガルフ島の火の玉山である娘と会った後、ジャンの心はひどく揺れていた。それが元で力を全部、島の崩壊をくい止めるために使ってしまったんだ……自分には少しも残さずに」

馬鹿な奴。あの時は、ミッシェがいたから何とかあったが……

「なるほどな、そういう事なら納得がゆく。でもな、お前が言った“ココはこの島にいない”って言葉に記憶を封印されて、ジャンはココの事がわからなくなっちゃってる」

「……」

「ココが大泣きして、大変だったんだぞ。もう、ちょっと何とかしてやれよ」

「ジャンはあの娘に会ったんだな……」

わからなかった？あの娘の事が……俺の言葉に封印されて。

ゴットフリーの態度はどこまでもそっけない。

「放っておけ。俺は何もする気はない」

むっつりと黙り込んでしまったゴットフリーの様子に、おしゃべりが過ぎたかと、ラピスは反省する。ジャンとココの事は、そうだな……もうしばらく、このままにしておいてもいいか……。

その時、不意に感じた空気の流れに、ラピスははっと外の方角に顔をあげた。

しまった、もう少しゴットフリーを休ませてやれば良かった。でも、もう遅いか。

だって、近づいてくる……この感じ。

大きな流れが天空を駆けてくる。

風に守られて、

黄金の光が一点だけ、その中に輝いて

「ゴットフリー」

先ほどとは打って変わった真剣な声で、ラピスが言った。

「王女が来るぞ」

Chapter 40

突然、闇に閉ざされていた視界が大きく開けた。

王女リリーは、見慣れぬ風景に目を瞬かせる。

殺風景な草原の丘にぽつんと立った粗野な小屋。少し離れた場所には、そこらこらにカンテラの灯に照らされたテントが見えている。

“彼はあの小屋にいます。誰に姿をみられたら面倒な事になる。だから、早く行って”

「待って！あなたも一緒に……」

ところが、リリーがそう言い終わらないうちに、夜風と黒馬は気配を消してしまった。

潮の香り……？ここは、海岸の近くの村？

見た感じでは、どうやら、グラン・パールの下層階級の集落らしい。けれども、そんな場所は話に聞くだけで訪ねた事など一度もない。

いいえ、今はこんな事に驚いている場合じゃない。

きゅつと唇を噛みしめると、リリーは、正面の小屋へ小走りに駆けていった。

だが、

「お、おいっ！あ、あれって、スウォード・リリーじゃねえのか！？」

「まさかっ！でも、確かに……」

偶然、この場所に通りがかった宿営地の男たちに、王女は姿を見られてしまったのだ。

「とにかく、仲間を集めるんだっ。クーデターの計画がバレたのかもしれねえ」

男たちは、そう言うで大慌てでテントの方へ駆けていった。

＊ ＊

小屋に備えられたちっぽけな木の扉。

この扉の向こうに彼がいる……。

心臓の鼓動が、大きく波打っている。ふうっと深呼吸をしてから取っ手に手をかけた時、

「あっ！」

リリーは小さく声をあげた。不意に開いた扉から飛び出してきた腕が、彼女をぐいっと小屋の中に引き入れたのだ。

「しっ、声を出さないで」

ばたんっと扉を閉めてから、腕の主は、前のめりになって彼に支えられたリリーをそばにあった椅子に座らせてから言った。

「悪いが、ここで待っていてくれ。ちょっと、取り込んでるんだ」

固く閉じられた面の瞼。金の短髪。腕まくりの白いシャツ……消毒薬の臭い？

リリーは、正面に立った青年　ーラピス・ラズリーー　の姿に驚いたように目を見開いた。

盲目なのに人を診る……腕のいい医者が下町にいる。

王宮でもその噂は何度も聞いた。もっと年寄りかと思っていたの

に、まさか、この青年がそうなの？それに、その医者がここにいるのは……？

その時、低いうめき声が響いてきた。リリーははっと顔をあげ、部屋の奥にあるベッドの方向へ目をやる。

「ゴッドフリー、ちゃんと息をしろっ！でないと死んじまうぞ」
青年にささえられながら、痛みに顔をゆがめ、激しく呼吸を荒げている。押さえた胸元をかきむしるように手を握り締めている。

そんなベッドの上の男の姿に、リリーは、全身の血の気がひいてゆくような気がした。

「ゴットフリー！」

ラピスは乞うようにその名を呼んだ。だが、

「……いい加減にしろ……」

その喉から搾り出された声に、急に顔をこわばらせた。

空気の色が、変わってゆく。重い重い暗黒色に……

2，3分が何十分にも思える時間が過ぎてゆく。そして、

「伐折羅……もう、慣れたと言っただろう」

そう言った声音には、妙に凄みがあった。

「……お前、大丈夫か……？」

王女の気配を伝えたその直後に、急に様子がおかしくなった。激しい痛みに襲われて、耐え切れぬようにベッドに突っ伏した。けれども、今は……

ゆっくりと胸元から手を離しながら、ゴットフリーは薄く笑みさえ浮かべているのだ。

熱にも痛みにも慣れてきた。

王女に会いに行こうとした彼を止めようとした時、彼が言った言葉。それが、ラピスの脳裏にわかに浮かびあがってきた。

そうだ、あの時も、何かがおかしかった。

ぞっとするほど研ぎ澄まされて……俺たちには触れられない所……そんな場所にこいつはいたんだ。

本当に一瞬の事だったけど、俺にはそれがわかったんだ。

「あ、あの……」

遠巻きに二人の様子を見ていたリリーが、おそろおそろ声をかけてきた。

具合が悪いなんてもんじゃない……そういえば、命が危なかったって、あの夜風が言ってた……。

ひどくうろたえながら、ベッドの方へ近づこうとする。だが、

「……！」

ラピスにささえられた腕の間から垣間見えた灰色の瞳。それが自分に向けられた時、リリーは凍りついたように、その場から一歩も動けなくなってしまった。

怖い……あの瞳はとても怖い。

心の奥底まで見透かしているような灰色の瞳……。自分の中に潜んでいる邪な箇所をすべて暴かれてしまいそうなその眼光。

「王女か……」

ベッドを降りようとするゴットフリーを、ラピスはやっきになって止めにかかった。彼が心配？そうじゃない。心配なのはスウォー

ド・リリーの方だ。

まるで、蛇に睨まれた蛙みたいに、王女の心がおびえてる。

ラピスでさえも、背中走ってゆく冷たいものに耐えようと四苦八苦している。こんな状態で、この男が醸し出す重い空気の渦に飲み込まれてしまったら、王女はどうにかなっちまう。

「王妃を殺してほしいだと……その気持ちは今でもそうか？お前の心に変わりはないか？」

地を這ってゆきそうな低い声で、リリーに向かって笑ってみせる。
「あ……」

呪縛の術にかかったかのように、ただ震えるばかりの王女に、ゴットフリーが手を伸ばそうとしたその時だった。

「ゴットフリー、止めろっ！王女を闇に引き入れるなっ」

意を決したように、その肩を掴み、ラピスが叫んだ。すると……

「……離せ。肩が痛い」

一瞬にして、あれほど重厚だった空気が消えうせてしまったではないか。

迷惑そうに眉をゆがめて、ゴットフリーは何事もなかったかのようにラピスの手を払いのけた。

急に雰囲気元にもどった……元々、近寄りがたはあったけど、さっきの震えるような冷たさは何だったの……？

「あ、あの夜風とシャドウはあなたの使い？」

とまどいながらも、リリーはそう問いかけてみた。

「シャドウ？」

「あの大きな影のような黒馬よ」

だが、腑におちない表情のゴットフリーを遮るようにラピスが口

を出してきた。余計な話はさせたくなかった。今の彼は不安定すぎる……。

「スウォード・リリー、あんたはこの男と話がしたくて、こんな所までやってきたんだろ。それなら、余計な詮索はやめてとっとと本題に入れよ。ゴットフリーのさっきの台詞、王妃を殺すとかなんとか、あれってどういう事なんだ？それが本当ならとんでもない話だぞ。王女が王妃殺しを目論んでるなんて！」

リリーはきりと盲目の医者を睨めつけると、声を荒げた。

「あなたは誰っ！？事によっては黙って見過ごすわけにはゆかないわよ」

あんなに怯えていたくせに、今はどうか？と、腰のレイピアに手をかけ殺気を放ってくる王女に、ラピスはあきれ顔で言う。

「噂どおりの血の氣が多いお姫様だな。俺は……医者の卵だ。今はそれだけしか言えない」

「それだけでも、あなたの所在が知れるわよ。グラン・パープルで名を馳せている盲目の医者。でも、こんな若造とは思ってもみなかったわ」

その言葉にラピスは苦笑した。

王族にまで知られているとは、誇らしい氣もするが、何で自分より年下の王女に若造よばわりされなきゃいけないんだ？

すると、ゴットフリーが二人の会話に割って入ってきた。

「こいつの事は氣にするな。意外と口は堅い奴だ」

やっぱり、王妃を殺る氣なんだ！それも王女の依頼で。

ラピスは驚きのあまり、二の句がつけなくなってしまった。

「……で、何時、殺って欲しいんだ？ 派手に切り殺して欲しいのか？ それとも、人知れず闇に葬むるのか」

どちらでも、望み通りにしてやるが……

リリーは声を押し殺し言う。

「建国記念祭の日に……方法はあなたにまかすわ。あの人がこの世から消えてくれれば、私はそれでいいのだから」

建国記念祭？ それって俺たちがクーデターを企ててる日じゃないか！？

“ とんでもない話になってきた ” と、ラピスが表情を変えたその時、

「スウオード・リリー！ こちらへ来てもらおうっ！」

激しい力で小屋の扉が開け放たれ、数人の男たちが、小屋の中へなだれ込んできた。

しまった！ あんなに姿を見られるなど言っておいたのに！

ラピスがちつと舌をうつ。

「やめろっ！ ここには病人だっているんだ」

病人……？

確かに、ゴットフリーの状態が普通でない事はリリーにもよくわかった。今、ここで騒ぎを起こすのは絶対に避けたいと思った。

「よく状況がわからないけれど、私と一戦交えようっていうの？ い

い度胸だわ。ならば、外に出なさい！」

意を決したように、リリーは男たちの間をすりぬけ外に飛び出している。

「おい、ゴットフリー、どうするんだ？！王女がやられちゃうぞ」

だが、彼はベッドにごろりと横になり、そっぽを向いてしまった。

「放っておけ。王女の剣の腕はあれでも伊達じゃない」

また、放っておけか？それって、冷たすぎないか。

霧花に王女が見つかったても助けないとってはおいだが、見て見ぬふりなんかできるもんか。

壁の弓矢を握り締める。そして、ラピスはゴットフリーを残し、慌てふためいて小屋の外へ駆け出していった。

Chapter 41

黒い空に、澱んだ灰色の雲がゆらゆらと流されてゆく。

エターナル城の裏門は震えながら、ただ、ひたすら息をひそめて
いる。

こうして、夢魔が通り過ぎてゆくのを幾度、見届けたことだろう。

裏門につけられた街燈が、そのシルエットを地面に浮かび上が
せる。それは、晩餐会のきらびやかな賑わいの中に、ぽっかりと開
かれた“虚無”のおぼろげな景色の影。

＊ ＊

「そこで待っているとの、王妃様からのお達しだ」

人払いでもしてあるのだろうか、王宮の晩餐会の会場から、人っ
子一人いない裏門にタルクを連れてくると、衛兵はお役御免とばか
りに、その場を去っていった。

まったく、あの王妃にぴったりの怪しげな夜だな。それで、当の
本人はどこから現れやがるんだ？

タルクは訝しげに空を見上げ、軽く眉をひそめた。西に向かって
銀の光が帯になって飛んでゆく。

あの光は……

妙に心をひきつけられる。タルクが光の帯の方向へ足を向けた時
「待たせたわね」

背後からのしなった声に五感をぞくりと逆撫でられ、タルクは慌

てて声の方向に振り向こうとした……が、

「駄目、そのままです。この隆隆とした背中の筋肉が……たまたまなく、いいのよ……」

背からまわされてくる、二本の腕の感触。人間の体温をかけ離れた氷の抱擁。

王妃の皮を被った化け物。こいつをきれいさっぱり切り捨てる為に、俺はここにきたんだ。

ぺろりとした舌の感触を肌に感じた時、タルクは背中にしよっている長剣を引き抜く間合いを数えだした。

だが、

「……！」

次の瞬間、それは激しい力で弾かれ、手の届かぬ位置に飛んでいた。そして、タルクの分厚い胴体に、太く白い触手が巻きついてきたのだ。

「駄目って言ったでしょ。どうして私にはむかうの？ おとなしくしていれば、夢見心地のまま、食われてしまえたのに……」

それは、ぐるぐるとどろを巻きながら、凄まじい力で体を締め付けてきた。

頬にぺろりと感じた舌先。身動きができず、どうにか、その方向へ目をやったタルクが見たものは……

巨大な白蛇の鎌首！ それも、王妃の顔をした。

「畜生っ！ それがお前の正体かっ！！」

全身をぞっと駆けめぐる悪寒に吐き気がしてならない。

それを振り切るように、タルクはあらん限りの力をふりしぼって、自分を拘束している“蛇の体”を引き剥がそうとした。

無駄よ、無駄、無駄、むだ……むだ、だ、ダ、ダ……シュ、シ
ユウウ……

人のから爬虫類のものへと変貌してゆく、王妃の声。

シャアアアツツ！！

その声とともに、ぼきりとタルクの鎖骨が嫌な音をたてた。

あっ！くそっ、武芸大会でキャリバンを支えた時に痛めた肩が……

タルクは苦痛に顔を歪めた。

武芸大会の決勝戦で、巨大化したキャリバンの負荷を受けて弱っていた肩口の骨が、ついに壊れてしまったらしい。

畜生っ！力はいらねえっ！

巨大な白蛇は、タルクをあざ笑うかのように尾を鳴らし、ずるずるとその体を裏門の向こうに引きずり出した。

きりきりと締め付けてくる蛇の体の隙間から、垣間見えたステンドグラスの窓。

礼拝堂？ラガーが探していた、迷宮の入り口があったという……まさか、そこがこの怪物の棲家なのか？！

礼拝堂の壁の下が大きくえぐれている場所を、王妃の顔をもった白蛇は尾で軽くたたいた。すると、そこに地下に掘り込まれた巨大な穴が現れた。

「くそっ、こんな場所に蛇穴を作ってやがったのか。王妃の皮をかぶった怪物！　こうやって、お前は何人の人間をこの穴に引きずりこんだんだ!?」

蛇穴なんかに引きずり込まれたら、もう終わったも同然だ。白蛇の方の体は半分以上が穴の中に入り込んでしまっている。タルクは両の足を懸命にもちこらえて、何とか外の世界に踏み止まろうとした。

その時、あざ笑うようなしやがれた声が頭の中に響いてきた。

“長剣のタルク……私のお家に来てくれて本当にありがとう。あなたに会えて本当に良かった。私はこんなに感謝している……だから、もう諦めて、私の可愛い子供たちに会いに行きましょう。蛇穴の中で、お腹をぺこぺこにすかせて待っているから……”

だから、さっさとあの子たちのご馳走になっておしまい。

シャアアアッ……

白蛇の牙からつんと鼻をつく毒液がしたたってきた。首筋にぶい痛みを感じた時、タルクは目の前が、霞のようにぼやけて見えた。礼拝堂の向こうから、ざんざめく王宮の楽しいげな人々の声が響いてくる。

ヤバイな……これ、相当ヤバイ……

本当にかなりの危機一髪の状態。

だが、その時

ギアアアアアッッ!!

耳をつんざかんばかりの、叫び声をタルクは聞いた。
はっと気づいてみれば、あたりには白蛇が流したと思われる血飛沫が飛び散っているではないか。

「動かないでっ！今、毒を吸い出してあげますから」

幾度となく聞いた美声にタルクは思わす眉をひそめた。声だけではなく、この青白い丹精な顔立ちの男には覚えがある。

「言っとくがな、俺はそちの趣味なんてさらさらないんだからな」タルクの台詞に男は、その首筋から吸い出した血交じりの毒をぺっと吐き出すと、恐ろしく複雑な笑みを浮かべて言った。

「私だってそんな話は願い下げですよ。絶世の美女というならいざ知らず、誰が好き好んで、あなたの首になんか噛り付くものですか」男の手に握られた薄い刀身の刃。だが、タルクは知っている。この刃はダイヤの鉱石をも切り裂くのだ。

“ウォーター・ソード”

そして、言わずと知れた、その使い手は

ブルーウォーター

BW

“レインボーヘブンの欠片” 紺碧の海“

「お前、ここで何してる！？クーデターの指揮官がいなくなったって、ラガーが慌てふためいてたぞ」

訝しげな目でみつめるタルクにBWは、わるびれもせず言う。

「あなたが怪しいっていうんで王妃をずっと監視していたんですよ。でも、悪い事をしてしまいましたね。もう少し早く助けてあげれば良かったんですが、どうしてもこの蛇穴の場所が知りたくて……

痛い思いをさせてしまった」

「別にお前に助けてもらう筋合いなんかないな」

大丈夫ですか？とBWから差し出された手を、タルクは余計なお世話だと、はたいて自力で立ち上がった。

そうですかと、BWは笑い、そして言った。

「あの白蛇は深手を追って、蛇穴に逃げ込んでいった。でも、この先は私に任せてください。この蛇穴の中は、もう人外境。一旦、中に入ってしまったら、タルク、あなたでは生きては帰れません」

BWの言葉にタルクはぐっと息を飲み込んだ。

「あの化け物を一人で相手にする気なのか？」

「心配いりませんよ。私だって、あなたから見れば化け物みたいなものでしょう？」

どうしたんだ、この野郎？いつもと何だか様子が違うぞ……わざと人を寄せつけないような言い方をして……。

「……俺はお前を化け物だと思った事は一度もないぞ！」

BWはタルクの台詞に、少し俯き加減で微笑んだ。

「それは、有難い言葉ですね。でも、あなたにはあなたの役目がある。宿営地に帰ってゴットフリーを守って下さい。彼の心にはああ見えても、とても繊細な場所がある。誰かが守ってやらないと、彼は不安の波に飲み込まれてしまう。何の損得もなしに彼についてきてくれる人間……タルク、あなたのような人物がゴットフリーには必要なんです。だから、ここは私に任せて早く行って下さい」

何か言おうとしても、次の言葉が見つからない。そんな、タルクをおいてBWは蛇穴の中へ足をかけた。

「おいっ、待てよ、BW」

ああ、そうだ。と、思い返したように振り向き、BWはタルクに言った。

「……ゴットフリーの右腕の役目は、もうあなたに譲りますよ。だ

から、彼を守りぬいてください……それがあなたの生き様……なの
でしよう？」

「BW！」

そうして、思わず伸ばしたタルクの腕をすり抜けるように、BW
の体は蛇穴の中へ消えてしまった。

タルクの心になんともいえぬ、後悔の念がわきあがる。BWを一
人で行かせてよかったのか？

“彼を守りぬいてください”

それでも、BWのその言葉が、強く心に響いてきた。

唇をきりりとひきしめると、白蛇に地面に飛ばされ地面に横たえ
た長剣に手を伸ばす。肩に激痛が走った。おまけに蛇の毒の影響で
頭がくらくらする。それにも増して心を占めるBWへの苦い思い。

だが、蛇穴にもう一度目を向けてから、タルクはそれらを振り切
るように走り出した。

そして、城門を出て行った。

Chapter 42

生臭い死臭が漂った蛇穴の中で、BWは切れ長の瞳をさらに細くして辺りの様子をうかがった。暗闇の中でも、この男の目はごく普通に物の姿を見きわめる。

穴の中は、奥にゆくほど広く拡がり、人ひとりが十分立って歩けるほどの洞窟のような造りになっている。そして、ごつごつした岩壁の下には、無数の人骨がちらばり無残な姿をさらけ出していた。

哀れな犠牲者たちの成れの果てか……。

王妃の皮を被った白蛇に引きずり込まれ、この蛇穴の中でどろどろに腐っていった命と体。穴の中にうず高く積みあがった髑髏。

その骨の間をすり抜け吹いてくるすきま風が、ヒューと耳元をかすめてきた時、

嫌だな……亡霊たちの歌が聞こえる

この蛇穴に巣くっている、泣き叫ぶ、ふるえている……恨んでいる。

BWは、その戦慄を振り切るように頭を軽く横に振った。その時、ぴたぴたと何かが彼の足元に近づいてきた。

「さっそく、子供たちのお出ましですか」

岩壁のすきまからBWを見つめている無数の紅い瞳。ぺろりと舌をなめずりながら、湧き出あがってくるおびただしい白蛇の群れ。

王宮には誰も気づく者がいなかったのか？このおびただしい白蛇の群れ……よくもこんなに育つまで、放っておいたものだ。

ぐるりと周囲を“白蛇”一王妃の子供たち一に囲い込まれて、BWは呆れたようにため息をついた。

「申し訳ありませんが、私を食べても水っぽいだけですよ。それに、あなたたちの相手をする暇は、私にはないんだ」

軽く握り締めた拳の指側を上に向け、BWは何かを解き放つかのようにその手を開いた。すると、きらりと光がほとばしった。くると円を描きながらつぎつぎに現れる透明な水の輪。ダイヤの鉱石をも切り裂くウォーターソード、その刃と同等の効力をもつ、ウォーター・リング。

それらは、研ぎ澄まされた光を放ちながら高速に回転し、ねらった獲物を余すことなく切り裂くのだ。

BWがふつと息を吐きかけたとたんに、ウォーター・リングの一団は、白蛇たちを目掛けて一気に飛びだしていった。

「地獄の門から這い出てきたあなたたちは、もう故郷にお帰りなさい。腐ったこの国の中にも、まだ、人の命は燃えているんだ！その火を消す異形の存在を私は……許すわけにはゆきません。その水の輪は、半永久的に回り続ける。あなたたちの体が血の海に変わってしまうまで」

レインボーヘブンと黒馬島で、私が飲み込んでしまった多くの命……今ここで、グラン・パープルを守ったところで、何の懺悔になるだろうか？……それでも、守りたい者があるから、私はここにやってきました。

その時、蛇穴の中に不意に差し込んできた一条の光。

この蛇穴の上にある部屋の灯りか？上は、確か……王宮の礼拝堂だったな。

そうか……多分、その場所に王妃がいる！

BWはきりと光を見据えると、即座に光の方向へ身をひるがえした。

ギアアアアアッ……！！

BWの姿が消えたその後でさえも、のけぞる白蛇の群れを切り裂きながら回り続ける、ウォーター・リングの威力は止まらない。蛇穴の中はたちまち、白い残骸が吹き上げる黒い血の色に染まっていた。

それでも、まだ、血の海にはもの足りない、蛇穴に残されたBWの思念がそう言った。

それらは、永遠に回り続けるのだ。

邪気の群れを切り裂きながら、

エターナル城、この虚無の空間に描かれた“メビウスの輪”のように。

＊ ＊

グラン・パープルの西の海岸。

サライ村の宿営地では、天地をひっくりかえしたかのような大騒動が起こっていた。

王女を助けようと、血相かえて外へ飛び出したラピスだったが、ばたばたと倒されてゆく男たちのうめき声を聞きつけると、

ゴットフリーの言う通りだ……、俺の出る幕なんかありやしない。

呆れたように弓をおろし、リリーに向かって大声で叫んだ。

「手加減しろっ！スウォード・リリー、お前んとこの国民だぞ。こいつらを殺すな！」

「わかってるわよ。峰打ちにすりゃあいいでしょっ！！」

男たちの間を縫うように、軽やかに剣をふるう。それは、剣技というよりまるで、舞踏。それでも、一寸の違いもなく人を倒す急所を押さえてくる。

たちまちのうちに、辺りにはわき腹や胸を押さえ込んだ男たちの山が積みあがっていった。

リリーはひらりと近くの岩にかけあがると、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて、言った。

「さて、この集団は一体、何？！グランパス王国へのよからぬ陰謀を企む秘密結社？それにしては戦闘力はお粗末なようだけど」

「スウォード・リリー、どこからこの情報を聞いた！？よくも一人で乗り込んできたもんだ。このまま王宮に無事に帰れるとでも思ってたのか？！」

いつの間にか、リリーのまわりには騒ぎを聞きつけた者がちがぐりと取り囲んでいた。それでも、リリーは臆する事もなく、きりりとした紫暗の瞳を彼らに向ける。

「この中に、私を倒せる者がいるとは思えないわ。正直に全部話すと言うなら、悪いようにはしないわよ。でも、次は峰打ちじゃませられない、そこところは覚悟しなさいよ」

宿営地の男から奪い取った、切れの悪そうな剣を放り投げると、リリーは腰に刺していた“レイピア”をすらりと抜いてみせた。鋭い光を放ちながら輝く刀身。それを見せつけるように真正面に構えてみせる。

たかが小娘と思いきや、一欠片の隙もないではないか。おまけに王族の気高いオーラにすっぽりと包み込まれている。それらに邪魔されて、男たちはリリーに近づくのをためらった。

その時、

「……!!」

急に立ち込めた白煙！それが、リリーの目を眩ました。

「そんなに馬鹿にすんなよ。お姫さん、俺たちだって捨てたもんじやないんだぜ」

せき込みながらうずくまったりリリーを見て、男が笑う。

派手なシャツ、右耳にはピアス、それと同じ側の頬の傷。手には王女に向けて打ち出した発炎筒を握り締めている。

「ラガー、晚餐会に行ってたんじゃないのか！」

「それより、そのお転婆をとっと取り押さえろっ！逃がすとまた、ひと暴れされちまうぞっ！」

両の腕と体を数人の男から押さえつけられて、リリーは悔しげに自分の正面に立ちはだかる男に目をむけた。

「ラガー、止めろ！スウォード・リリーがここへ来たのには訳があるんだ」

ラピスが叫んだ。だが、ラガーはそんな警告は無視して王女の元に歩み寄る。

「こいつを人質に、捕まった仲間を助けだすっていうのはどうだ？王宮から帰ったとたんに、この吉報だ。王女が手に入るなんて思ってもみなかった。だが、こいつ、本当に本人か。影武者を送り込んで、何か罠でもしかけてるんじゃないだろうな」

品定めでもするように、リリーの顎に指をかけその顔を覗き込む。

「無礼者っ！」

ぺっと王女から顔面に吐きかけられた唾に、ラガーはかっとその頬を平手で打った。

「ラガー！乱暴な真似はやめろっ！」

血相かえて、二人の間に飛び込んでいったラピス。

辺りの空気が急に暗に染まったのは、その時だった。

宿営地に集まった男たちは、裂けられたかのように二つに分かれ、知らず知らずのうちに道をあけた。その中心をゆっくりと黒い影が歩いてくる。

異様に空気が密になり、目に見えない壁が影の周りを取りかこんでいる。

「ゴットフリー……」

凍りつくような灰色の瞳に、ラガーはびくりと身をすくませ、後ずさった。

Chapter 43

「手をだすな。王女は俺の客人だ」

「ふ、ふざけた事を言うな！クーデターを計画しているアジトに敵の王女を客人として呼ぶ奴がいるものか！」

ラガーの言葉に、リリーははっと瞳を見開いた。

クーデター！？、やはり、ここは、王国への反乱分子の拠点だったんだ。

「クーデター？笑わしてくれる。王女はそんな物とは無関係だ。だから、その手を離してやれ」

「関係ないって？王女は俺たちが転覆させようとしている王族の一人じゃねえか！この計画を知られたからには、もう王宮へ帰すわけには行かないぜ」

ゴットフリーは冷ややかな笑みを浮かべると、

「ほう……クーデターとやらを実行する前に、全滅したいというわけだな」

おもむろに、右の手を前方に差し出した。

その手の中が鈍く輝き出した。光の粒は、黒鋼色に変えながら一本の剣に姿をかえてゆく。

一闇馬刀一

黒い刀身は鏡のように輝き、切れ味は疑う余地もない。

あの剣は何だ？！闇の中から現れた。

禍々しいまでに黒く輝く“黒刀の剣”。

「畜生っ！お前なんか俺たちの計画を邪魔されてたまるかっ！！」
ラガーが叫ぶと同時に周りにいた男たちは、一斉に刃を向け、ゴットフリーに踊りかかっていた。

「ガルフ島では奴隷風情だったお前たちが、今は俺に逆らうか！」
ゴットフリーが振るった闇馬刀が、黒い疾風を巻き上げた。その瞬間、

「うわわっ！！」

手元からばらばらと地面におちてゆく、自分たちの剣に男たちは啞然と目をやった。いや、真っ二つに折られたそれらは、もう武器と呼べる代物ではなかった。

「さて、どいつから斬って欲しい」

ゴットフリーがその剣を真一文字に構えなおし、残酷な笑みを浮かべた時、

宿営地の男たちは、その眼光にふるえ、一步も動けなくなってしまった。

「ゴットフリー、止めてくれっ！ここの奴らに何の恨みがあるんだっ！！」

この男がまどっている、ただならぬ空気。

今のこいつは絶対、おかしい。まるで、殺戮する事が楽しいみたいに笑ってやがる！

「ラガー、みんな、退け！ここは俺が何とかする！」

ジャンの時みたいに上手くゆく保証はないが……

ラピスは弓を構えると、ゴットフリーを狙い済まして、力まかせ

にその矢を引いた。

なんとか、ゴットフリーにたどり着いてくれ。俺の矢！

凍りついた風が、吹き荒れている。ラピスの矢が、非常線をかいくぐるように、その中を飛んでゆく。

その瞬間、闇馬刀が空気を切り裂いた。

「ラピス、最初はお前か」

ゴットフリーが悦にいった笑いを浮べる。

そして、ラピスが渾身の思いを込めて放った矢は、こともなげに地面にたたきつけられていた。

「随分早い終わりだな」

感情のないゴットフリーの声とともに、喉元に感じた鋭い闇馬刀の切っ先。

万事休す……俺の命もこれまでか。

でも、何で俺がゴットフリーに殺されなきゃなんないんだよ？
ちっとも、納得がいかねえ。こんな風に、死んじゃうなんて。

諦めたように構えた弓を下に降ろすと、ラピスは、悔しさに唇をかみ締めた。

「馬鹿なまねは止めて！！その人は私を助けようとしてくれたのよ。あなただって、世話になってたじゃない。それに、全滅だなんて……私はそんな事は望まない！」

男たちに拘束されたまま、リリーは悲愴な声をあげた。だが、ゴットフリーはそれを完全に無視して、ラピスに向けた闇馬刀に力を込める。

「止めろ、ゴットフリー！ラピスはお前の味方じゃなかったのか！！！」

ラガーの叫びが、空しくあたりに木霊した。

野太い声が響いてきたのは、その時だった。

「お前らっ、何してるっ!？」

そして、宿営地の男たちを押し分けるように現れた一人の巨漢。よほど急いで走ってきたのか、激しく息をきらしている。痛めた肩を押さえ込んだ姿が痛々しい。

「タルク……」

虚をつかれたように、ゴットフリーはその方向に目をやった。すると、彼の握り締めた闇馬刀が、急速に光を失いだしたではないか。

黒刀の剣が消えてゆく……

宿営地の男たちは、啞然とその様を見つめた。

「こんな夜中に大勢で何の騒ぎだ。それに、ゴットフリーまで一緒になって……お前、まだ、具合が悪かったんじゃないかったのか」

タルクには、ゴットフリーがラピスに闇馬刀を突きつけていた状況は分らない。何故ならタルクが歩みよってきた時には、すでに

“その剣”は、ゴットフリーの手の中から消えうせていたのだから。

「別に……少し余興が過ぎただけだ。それより、その肩はどうした？王宮の晩餐会に行ってたんじゃないかったのか」

余興って……あれが？

平然とそう言っただけのけるゴットフリーの声音が、かえってラピスを動揺させた。

「ラピス」

「なっ、何だ？」

「タルクを診てやれ。それと、ラガー……」

突然、ゴットフリーに名前を呼ばれ、ラガーはびくんと体を硬直させた。

「王女を放せ」

怯えきった男たちは、とまどいながらラガーの方に目をむけた。すると、王女が声をあげた。

「私がクーデターの計画を邪魔するとも思っているなら、とんでもない話だわ。あなたたちが、グランパス王国を倒してくれるなら、それはそれで有り難い！」

突然の王女の台詞に、場にいた者たちはぎょっと目を見開いた。

「何っ、あんた、本当に王女なのか？」

「この王国が滅んでしまっても、私はもう構わない。その覚悟はしているつもりよ。でも、その前に、私にはやらねばならない事がある」

リリーは戸惑いながらも、ゴットフリーに紫暗の瞳を向けた。

「だから、私はここに來たの」

何で王女がここにいるんだよ？

ようやく、男たちの拘束から解き放たれたリリーの姿に、眉をかめたタルクだが、理不尽な事にはもう慣れっこになってしまっていた。

その理由を聞くのは後回しでもいいだろうと、彼はこう言った。

「それは、王妃の事だろう。あれは白蛇の化け物だ。ついさっきまで、ぐるぐる巻きにされていた俺が言うんだから間違いないぞ」

タルクの肩を診ていたラピスが声を荒げる。

「王妃が白蛇?! おまけに化け物? 確かにあの王宮には、近づきたくもなかったが……」

「礼拝堂の下に蛇穴を作ってやがる。どうも、その中には蛇の子供

たちがうじゃうじゃいるみたいだぞ。寸でのところで俺は、そいつらの餌にされるところだった」

タルクの言葉に、ゴットフリーは納得がいったかのように頷いた。

「王妃が普通でない事は前々からわかっていた事だ」

“死にたくなければ近づくな”

夜叉王があの時、俺に伝えた警告。

「なるほどな。俺とあの娘が、礼拝堂の下で見つけた迷宮への入口。二つの扉……左の扉の向こうには、その蛇穴があったというわけか」

Chapter 44

西の空の果て、紅の薄様に染まる天空に向かって漆黒の鳥が飛んでゆく。

その背にジャンを乗せた伐折羅の黒い鳥は、高速で逃げてゆく緑の光、“樹林”をぎりぎりのところで捕らえられずにいた。

夜空に湧き上がった、おびただしい紅の灯。

「海の鬼灯！いつの間にこんなに数を増やしたんだ？」

恨みと後悔……その思いが満ち溢れた時、その者は海の鬼灯となり、すべてのものを破壊に導こうとする。

これは、警鐘か？この世が悪意で染めつくされる、その前の。

“樹林”の化身である緑の光は、あと少しで紅の灯に溶け込みそうな位置まで来ている。

ジャンは、息の詰まるような気分で紅の空を見渡した。

「畜生！とりあえずは、あの“緑の光”を確保だ。海の鬼灯に、取り込まれてしまつてはゴットフリーに顔向けもできない。“樹林”！お前をもう1度、水晶の棺に閉じ込めるなんて本当はやりたくないんだ。でも……」

その言葉が終わらないうちに、ジャンの後ろから、夜空をすべるように眩い光が飛びぬけていった。

ジャンの後をついてきた、銀の帯……それは、消失したエターナル城の最上階、水晶の部屋の断片。

すると、小さな緑の光が大きく息づいたではないか。光はみるみるうちに人の形に姿を変える。そして、銀の帯に取り巻かれながら聖職者さながらに微笑むその姿は……

レインボーヘブンの欠片“樹林”！

「もう私は水晶の棺には戻らない。あれ程言った言葉の意味を、お前は少しもわかっていない」

銀の帯は長方形の軌道を描きながら、空に浮かぶその体の周りに、水晶の棺を形作ろうとしている。だが、“樹林”はこれまでとは違って変わって、勝ち誇ったような笑い声をあげた。

「馬鹿な奴。騙されているとも気づかずに、こんな空の果てまでついて来るとは」

「何っ?!」

その瞬間、閃光がほとばしり、“樹林”の体が紅く燃えた。

「レインボーヘブンの欠片“樹林”。本当にそんな者がこのグラン・パープルににいるかと思っていたのか。それは、作られた伝説。私がレインボーヘブンの欠片などあるものか。私は、エターナル城の西の尖塔——あの最上階——で眠っていた……ただの屍にすぎない。けれども、私は命を吹き込まれたのだ。あの紅の灯と契約をかわしたその時から……」

炎と化して飛び散る前に“それ”はふと首をかしげた。

契約……あの紅の灯と? いや、もっと別の何かがいたような……わからない。もう、その中身は忘れてしまった。ただ、ゴットフリッド……その名だけは覚えている。

それから声を荒げて言った。

「彼に会いたかった。それが叶わないというならば、ただ壊してしまいたい。何もかもを破壊して、そして私は自由な身になりたい!」

炸裂し、自分の周りで完成しかけていた水晶の棺を、既でのころで吹き飛ばす。そして、ジャンを尻目に大量の紅蓮の火の粉が、グラン・パープルの方向へ飛び出していった。

行き場を失い降り注いでくる銀の粉。再び、光の粒へともどつてゆく水晶の棺を、ジャンは愕然と見つめ、唇をかみしめた。

もともと、レインボーヘブンの欠片“樹林”など、グラン・パープルにはいなかった……。

エターナル城の尖塔で水晶の棺に眠っていたのは、ただの屍。

あれは、無念のままに城で死んでいった誰かの魂だったのかもしれない。けれども、あいつは、もう“海の鬼灯”だ。紅の炎に心を染め上げられた邪気だ。

畜生！今になって僕にはやっと分かってきた。“海の鬼灯！あいつら、黒馬島の時と同じに、ここでゴットフリーを待ちぶせていやがったんだ！”

“レインボーヘブンの七つの欠片。その一つがエターナル城の地下で眠っている。水晶の棺に納められて”

それは、ゴットフリーを自分たちの世界に引き入れ、闇の王に変えるための“出任せの伝説”だったんだ。

闇が動き出している。そして海の鬼灯が集結する。奴らはレインボーヘブンを……いや、この世のすべてを恨んでる。駄目だ！そんな時にゴットフリーが、闇馬刀で闇の扉をこちらの世界に開いてしまったら、この世は間違いなく崩壊するぞ。

飛び去った炎を追おうと伐折羅の黒い鳥の背に手をおいたジャン。

だが、彼の頭上に、湧き上がるおびただしい紅の灯が、彼の行く手の邪魔をした。

焦土のように紅に染まった天空をジャンはきりと睨めつける。

レインボーヘブンの海に沈められ、海の鬼灯になった盗賊たちの断末魔の声……それを聞いてしまった僕。でも、それが、どうしたっていうんだ？　ここまで非道を働く海の鬼灯に、何故、同情する必要がある！？　葬り去ってしまえ！　そうしないと、この世は本当に闇に食い尽くされてしまうぞ。

きつく唇をかみ締めて、ジャンは周りを見渡した。こみ上げてくる静かな怒りが、蒼の光となって体の中から溢れ出してくる。だが、

駄目だ……

その蒼の光はジャンを覆い尽くしたまま、陽炎のように揺れるだけなのだ。

それでも僕は……海の鬼灯に攻撃はできない。

あの時、持ってしまった哀れみの心が、今も僕を呪縛する。

その時、ジャンの頭上の紅の灯が一斉に攻撃を仕掛けてきた。

「……！！」

ひどく落胆した気持ちでジャンは、迫ってくる海の鬼灯の方向へ両手を差し出した。

急降下してくる紅の灯に、蒼の光が突進する。両者がぶつかりあった瞬間、紅と蒼のまだらの光が、天空全体に炸裂した。

「フリーズ、空間凍結！」

ジャンが叫んだ。

その時、天空の時間がぴたりと止まった。

「その蒼の光の力が消えるまで、お前たちは動けない。レインボーヘブンにも真冬は来る。僕もその時ばかりは、厚い氷で大地を覆うんだ……そう、今みたいな沈んだ気分です。僕はお前たちに攻撃はできない。でも、防御なら……できるんだ」

西の空一面の海の鬼灯。だが、そのどれもこれもが、身動きがとれないままに宙に浮かびあがっていた。それらは拘束されていた。ジャンに放たれた蒼の光に固く凍りつかされて。

ジャンは伐折羅の黒い鳥に飛び乗ると、悪そうに、けれども強い口調でこう言った。

「ごめんな。疲れているんだろ。僕が馬鹿だったばかりに、お前をこんな空の果てまで来させてしまった。でも、もう1度、グラン・パープルに戻ってくれ。そうしないと、ゴットフリーを闇に獲られてしまうから」

光と闇の狭間にいても、あいつの本質はレインボーヘブンの王。破壊者なんかじゃない。だから、僕は絶対、闇なんかにゴットフリーを渡しはしない！

黒い鳥はジャンに答えるように、漆黒の翼を大きく羽ばたかせた。

「僕がここを離れば、蒼の光の力は徐々に薄れてゆくだろう。力が消えれば、この海の鬼灯たちは一斉にグラン・パープルを襲いに来る。それに海の鬼灯は、ここにいる奴らだけじゃない。僕一人の力では無理だ。ゴットフリーとほかのレインボーヘブンの欠片たち、みんなの力を集めなければ、グラン・パープルとこの世界を救う事なんてできやしない」

空を切って飛翔した伐折羅の黒い鳥。目指すは、一路、グラン・

パール。だが、それが飛び立った後、ジャンの力で蒼に凍りついた天空に黒い影が沸きあがってきた。

それらは、みるみるうちに蒼の光に押さえ込まれた海の鬼灯を飲み込んでいった。

“闇の戦士”

夜叉王“伐折羅”の闇の軍。だが、伐折羅の制御を離れた彼らたちは、出くわした戦いに勝手気ままに参戦する。

ただ、殺戮だけを目的に戦い続ける兵士として。

Chapter 45

「王妃が白蛇の化け物ですって?!」

サライ村の宿营地で、王女リリーはタルクの言葉に大きく眉をしかめた。

「礼拝堂の下は蛇の巣窟だ。あの王妃の言い草じゃ、蛇穴の中は食われた奴らの死骸でいっぱいだろうよ」

王妃の顔をした白蛇の鎌首。あの赤い舌……今、思い出してもぞつとする。タルクの渋い表情に、リリーは一瞬、言葉を詰まらせ、そして言った。

「……王宮がおかしくなったのは、明らかにあの人が王妃になってからだもの。化け物であろうとなかろうと、これ以上、王宮でのさばらしておくわけにはゆかないわ」

ラガーをクーデターの指揮官と踏まえ、刺すような紫暗の瞳を彼に向ける。

「この腐りきったグランパス王国を救うには、もう壊すしかない。あなたたちがクーデターを起こすというなら、私は喜んで手を貸すわ。仲間を助きたいなら、その手引きをしてもいい。ただし、王族になりかわって権力を手に入れたいだけならば、そんな話はお断りだわ。約束できる? 必ずこの国を平和に作り直すと」

「……本気で言ってるのか? 例え俺たちに協力したとしても、クーデターが成功して王家が転覆したら、あんたは王女でも何でもねえ、ただの娘になりさがっちゃうんだぜ。事の次第によっては、命がなくなるかもしれないぞ」

「私はそれでも構わない。そうなったとしても、恨みはしないわ」

ラガーは上目使いにリリーの顔を見やると、考え込むようにタバ

コに火をつけ、ふうつとため息まじりにその煙を吹きだした。

沈黙が居合わせた者たちの間に広がり始めたその時、

「ラガー、王女がここまで言ってるんだ。受け入れてやってもいいんじゃないのか。彼女は、スウォード・リリーだ。グランパス王国の全国民が敬愛してやまないグランパス王国の華だぞ。彼女が嘘を言って、俺たちを陥れるなんて……そんな恥しらずな真似をするわけがないよ」

ラピスの言葉に、宿営地の男たちは妙に納得させられてしまう。たしかに、リリーの凜とした立ち振る舞いには、人の心を自然に引き付けてしまう力があつた。

仕方がないかと、ラガーもついには、その首を縦に振った。

事の展開を楽しむように、ゴットフリーが笑う。

「どうせ先のない国だ。王女にとっては、都合のいい王妃殺しの理由が更に増えたというだけだろう……クーデターを仕掛ける先の、王族の妃は白蛇の化け物。俺も、これで遠慮なく、王妃を切り刻めるというわけだ」

その声音はひどく凍りついていて、先ほど喉にあてがわれていた闇馬刀が再びもどってくるのではないかと、ラピスは不安で仕方がない。

だが、タルクの次の言葉は、

「王妃を切り刻むって？ゴットフリーがか？ち、ちょっと待てよ。BWが一人で蛇穴へ入っていったんだ。あの化け物を退治するため」

さらにラピスを驚かせた。

「BWが?! あいつ、王宮なんかへ行ったのか! タルク、お前、BWに会ったのか」

「ああ。……でも、何だか様子が変わった」

「……」

熱にうかされていたとはいえ、ゴットフリーが言ってしまった無防備な言葉

”BW、消えてしまえ！この世からお前は……”

そして、BWの気配がなくなったあの瞬間の、胸を引き裂かれそうな思い。

「俺……王宮へ行ってみる」

切羽詰った様子で、弓を背に背負い込む。そんな、ラピスをタルクが慌てて制止した。

「ラピス、どうしたんだ？お前は王宮に入るのはあれほど嫌だと言ってたのに……。お前が行ってどうなるもんでもないだろう？それだったら、俺がもう一度行って様子を見てくる！」

「タルクはもう無理だ。肩の骨が折れちまってる。だから、俺が行く。BWが一人でなんて、やっぱり心配でたまらない」

そんな二人を斜めに見据えてから、ゴットフリーはその視線を暗い空に向けた。すると、夜が遠くの方でかすかに揺れだしたではないか。

まずい……。また、あの黒馬がやってくる

「駄目だ、ゴットフリーはここにいろ！」

タルクとラピスは、ほぼ、同時にそう叫んだ。

寸でのところで消えてなくなった黒馬の気配にほっと胸をなでおろしたが、

“油断してると、また闇のグッズが飛び出してくるぞ”

これは、彼と長年過ごしてきたタルクが身をもって知った事だが、闇馬刀や黒馬がやたらに出てくる時は要注意だ。なんだかんだといつても、それらは闇にゴットフリーの精神を引き込んでゆく。

ゴットフリーの気を散らそうとタルクはわざと明るく言った。

「大丈夫。BWはガルフ島警護隊、隊長の参謀だった男じゃないか。別に俺たちが行かなくなたって、あの白蛇を3枚くらいにはおろしてくれるさ」

今のラピスの不自然な態度、それにも増してやけに好戦的なゴットフリー。

まだ、ジャンがいる時はいいんだが……。

そういえば、ジャン……

タルクがその言葉を口にしようとした時、

「ジャンは何処へ行った？」

突然、ゴットフリーにそう切り出され、タルクは少し慌てて言う。「ぶ、武芸大会の授与式までは一緒にいたんだが……姿が見えないんだ。俺はもうこっちに帰ってきてるんだとばかり思っていた」

「姿が……見えない？」

急に黙り込んでしまったゴットフリー。

えっ

その方向に、ラピスは驚いたように顔を向けた。盲目のラピスだからこそ、垣間見えた心の隙間。

おぼろげに心が揺れている。

まさか……でも、俺にはわかる。

不安……なのか。

ゴットフリーが？この冷徹な男が。

ジャンがない……

その事が。

「今は止めた！やっぱり王宮には行かない」

態度を急変させたラピスをタルクは怪訝な顔つきで見る。

「何だ？こころと気分の変わる奴だな」

「いいんだ。それよりタルク、お前、こっちへ来い！怪我の手当てもちゃんとしなくちゃ」

タルクの肩に軽く手を回す。それから、ラピスはその耳に小声でこう呟いた。

「BWは後で俺が見てくるから、お前は絶対、ゴットフリーのそばを離れるな。ジャンがない今、タルクだけが頼りなんだ。一緒にいるだけでも……それでもいいんだ」

タルクが現れた瞬間に、ゴットフリーは俺に突きつけた闇馬刀を手放したじゃないか。ゴットフリーが、レインボーヘブンの欠片たち以外で心を許すのは、タルクだけだ。闇に向かってゆく、彼の心をつなぎとめる歯止めが必要なんだ。だから、不安の波の中で、ゴットフリーを一人にさせちゃいけない。

それはもう絶対に！

Chapter 46 天上縊死

遠夜に光る松の葉に
懺悔の涙したたりて
遠夜の空にしも白き
天上の松に首をかけ
天上の松を恋うるより
祈れるさまに吊るされぬ

／＼作 萩原朔太郎

＊ ＊

厚雲にとざされた闇夜の下で、エターナル城は陰鬱な吐息をたてていた。

暗い礼拝堂の中で、唯一薄灯りを放っている埃まみれのシャンデリア。その灯に照らされステンドグラスの文様がゆらゆらと揺れている。

流れてくるピアノの旋律。

悲しく艶かしく、だがいびつに歪んだその音色。

「“レクイエム”……。これは、あの蛇穴で死んでいった人々のために弾いているのですか？それとも……」

王妃を追って蛇穴から礼拝堂へあがって来たBWは、皮肉な笑みを浮べて言った。

「あなたの可愛い子供たちへの一葬送曲—ですか」
すると、ピアノの響きがぴたりと止まった。

「お前は何者？よくも私の子供たちをあんな酷い目に遭わせてくれ

たわね……」

鍵盤からぼろりと床に落ちた二つの手。

手首から切断されたそれらは、マネキンのように不自然に白く、やけに整った形をしている。

「名乗るほどの者ではありませんが……それより、その手でピアノを弾くのは不便でしょう？ 私がウォーター・ソードで斬ったのは、あなたの両手だったんですね。実に残念だな、本当は……」

徐々に白蛇に変化してゆく、王妃の姿に視線を据えるとBWは言った。

「心臓をえぐりだしてやりたかったんですよ」

「五月蠅い、その小賢しい口を閉じろっ!!」

BWの言葉を聞き終わらないうちに、白蛇に変化した王妃は口角を大きく開き、彼に襲いかかってきた。

シャアアアアアッ!!

毒を含んだ唾液がぽとりと、落ちた瞬間、礼拝堂のグランドピアノがじゅつと音をたて焼け焦げてゆく。体をくねらせながら突き立ててくる白蛇の牙を、身をひるがえしてかわしてはみたが、予想外に機敏な動きをする白蛇に、BWは眉をしかめた。

毒液を受けて黒く焼けたBWの袖元から、何ともいえない甘美な香りが漂ってくる。

ランカ……エターナル城にはびこる麻薬花。この花の香で一体、何人のまともな人間の精神を狂わせたのだ？

この化け物は邪悪そのものだ。清浄な箇所など何処にもない。

再び鎌首をもたげ襲い掛かろうとしている白蛇を睨めつけてから、BWは言った。

「白蛇といえば、神の御使い。それなのに、あなたは何故そんなおぞましい姿をさらして、この城に巢食っているんです!？」
すると、白蛇の動きが、一瞬止まった。

シューシューシューと、その贅音だけが、静まりかえった礼拝堂に響き渡る。

おもむろに白蛇が口を開いた。王妃だった時とはうってかわった、地獄を這うような低い声で語りだす。

「お前のいうとおり、私と私の番いの白蛇は、古より、このエターナル城の守り主だった。そして、西の尖塔を根城とし、襲い来る敵を“番の仙術”により悉く退けてきたのだ。

神の使いと崇められ、神酒と供物を供えられ、伝説として語り告がれる。それは、誇りであり、また、生きがいでもあった。だが、ある日、我らはふと気づいてしまったのだよ。

それが、いつの間にか、年に一度きりの“儀式”に成り下がっている事を。その日以外に、白蛇の姿を思いおこそうとする者も、西の尖塔に登ってこようとする者もグラン・パールには誰もいなくなってしまうていた」

それに気づいた時の惨めさ、情けなさがお前には分かるか。

白蛇はシューシューと尾を鳴らしながら、言葉を続けた。

「だが、前の王妃が死んだ後に、結婚したばかりの次の王妃が西の尖塔に訪ねてきた。儀式の日以外に人が訪ねてくるなんて、本当に嬉しかったよ。そして、王妃が供えてくれたお神酒一天のお神酒一と呼ばれる真紅の酒を一口飲んだ時、我らはそのとりことなったのだ。何という甘美で力みなぎる酒なのだろう!それからは“人の味がしたのだ。一度飲むと忘れられなくなった。その味を求めて、

蛇穴に人を誘い込んだ」

「真紅の酒……それは……人の血だ！あなたたちにお神酒を運んだ王妃、その心は、前の王妃を暗殺した時に、すでに海の鬼灯に侵されてしまっていたんだ！あなたはその王妃の血まですすりましたね？そして、その体に移り移った」

BWは愕然と声を荒げてから、口落ちそうに鎌首をもたげてくる白蛇に言った。

「あなたの番い……それは、今、何処にいるんですか？」

「……闇に堕ちていった。黒い男に闇の扉を開かれて」

闇の扉？黒い男……それは闇馬刀とゴットフリー！そうか、彼はここに来たんだな。

「神の使いとまで崇められた白蛇が……哀れなものだ。けれども、堕ちた者たちが行きつく先は、闇の中しかないのですよ」

BWは深く息をつく、寂しげな笑みを浮かべてこう言った。

「もう、引き返す事はできません。……でも、せめてもの慰めに、私が歌ってあげますよ。可愛そうな、あなたとあなたの番いの白蛇のために」

一 鎮魂歌を――

みるみるうちに薄れてゆくBWの姿と、何処から響いてくる不思議な音色に

白蛇は訝しげに鎌首をもたげた。

波の音……？

声であって声ではない

いや…これは歌だ。

小波のような、または美しい金管の音のような、

歌が聞こえる……

心なしか、礼拝堂のよどんだ空気が海の色に染まったように蒼く思えた。

どこまでも、広がっていく清涼な空間、一片の濁りもない世界……

「これは海なのか？……礼拝堂の中に海が広がってゆく……そんな馬鹿な！」

白蛇は目を大きく見開き、自分のまわりをとりまく蒼い海を見つめた。

「そうか、私には今、わかった。あの至福の島の伝説……お前はレインボーヘブンの欠片……紺碧の海！」

そう言った瞬間、白蛇は苦しげに身をもたげだした。

“濁りきったあなたには、この清涼な海の水は耐えれまい。邪心にまみれた神の御使い、そんな者の場所は現世にはありません。闇に堕ちるのは嫌でしょう？ 私には浄化の力はありませんが、あなたをこの海に溶かして、きれいさっぱり消しさってあげますよ”

海の中から聞こえてくるBWの声に呼応するかのように、礼拝堂から、果てのない紺碧の海があふれだしていった。

幻術？……と呼ぶにしては、生気に満ちた海の水はあまりにも美しかった。ただ、その海には波がなかった。かわりにBWの歌が、小波のように幾重にも響いてきた。

「その歌を止めろ！私はまだ、消えたくはない。もっと、人を食らいたい。もっと血をすすりたい。この国と人が全部滅んでしまうまで、この場所を離れてなるものか！」

尾の部分から溶けはじめた白蛇は、苦しげな断末魔の叫びをあげながら、海水を卷上げのたうちまわる。

だが、首の下あたりまでが海水に溶けてしまった時、もたげた白蛇の鎌首が突然、王妃の顔に変化した。その顔は歪にゆがみ、半分とけてしまった紅い唇で、醜悪きわまりない笑みをうかべて声を荒げた。

「何が清涼な海だ。レインボーヘブンの紺碧の海よ、私にはわかるぞ。この蒼海の中には人々の悲哀と怨念がたつぷりと溶け込んでいるではないか。ほら、今しも外へ飛び出してゆこうと、紅い無数の邪念の灯がお前の中で待ち構えているぞ」

その声を待っていたかのように、BWが作りだした海の中からぼこりぼこりと紅の灯が浮かびあがってきた。そして、海の表面を覆いつくしたその澱みは海の蒼をみるみるうちに紅の色に染めていった。

「レインボーヘブンの欠片、紺碧の海。これがお前の正体だ。お前が今まで飲み込んできた無数の命。私が手をかけた人の何百倍もの命をお前は飲み込んできたのだろうか？どんなに奇麗事をいつてても、お前も私と同じ穴のムジナなのだよ」

お前も私も“海の鬼灯”だ。破壊と殺戮の喜びに身をふるわせる紅い邪鬼だ！

その時、海面が大きく盛りあがった。その波の上から再び姿を現し、BWは悲愴な声をあげた。

「違う！私は、そんなものじゃないっ！！そんな戯言に私が怖気づ

くとも思っているのか！」

手元からウォーター・ソードを取り出し、白蛇に向かって刃を向ける。だが、その剣をかくぐるように、白蛇は身をひるがえし宙に舞った。

再び、王妃の姿をとりもどし、白蛇はけたたましい笑い声をあげた。

「……の割には、何故そんなに苦しげに顔を歪めているんだ？ ipp その事、認めてしまえ。自分は“海の鬼灯”になったのだと。殺戮は楽しいと。さすれば、その苦しみは喜びにかわるだろうよ」

「言うな！ 今度は本当にお前に心臓をえぐり出してやる」

だが、BWが剣をふるうその前に、王妃の姿をした白蛇は礼拝堂のステンドグラスを打ち破って外へ飛び出していった。

「待て！ 逃がすものかっ！」

一瞬のうちに作り出したウォーターリングを、王妃に向かって投げつける。

ギアアアアア……

闇を引き裂く悲鳴をあげながら、それは礼拝堂から遠ざかっていった。

逃がしましたか……。

BWは放心したかのように、礼拝堂に広がった海の上に仰向けになって、体を伸ばした。ぽっかりと浮かびあがったBWのまわりの海は、紅から漆黒に色をかえていった。

何という失態。これでは、タルクに顔向けもできないな。

暗い礼拝堂の中には、一条の光も差しはこない。

……この苦しさに耐え切れなくなった時、私は“海の鬼灯”になるのか？その時、レインボーヘブンの紺碧の海は、魍魎の棲家と成り果ててしまうのか。

嫌だ！だが、私にはもう、あの紅の灯の幻惑を退けるだけの力がない……。

BW、消えてしまえ！お前は……

ゴットフリーに掛けられた言葉が、何度も何度も頭の中で繰り返される。

……彼の言うように、この体を消してしまえば……突き刺す苦い思いから、私は解放されるのかもしれない。人間臭い感情を捨てて、ただの海にもどってしまえば、“海の鬼灯”に翻弄される事もないのだから。

ゴットフリー、あなたの力は、まだ計り知れない。それでも、私は信じています。あなたがいつか私たちをレインボーヘブンに導いてくれる事を。

私はレインボーヘブンの欠片、“紺碧の海”。“海の鬼灯”になど断じてなるものか。

逃げていった白蛇に壊された、礼拝堂のステンドグラスに目を向けてから、BWは静かに目を閉じた。波の音も聞こえない静寂の海の上で、まだ見ぬ至福の島に思いをはせていた。

この体を捨ててしまおう。すべての邪心を消し去るために。そう、それが残された唯一の道だ。

再び見上げたステンドグラスの向こうには、灰色の雲の間に白い月が切れ切れに浮かび上がっている。

だから、私は……

……明日の朝、首を吊ろう

闇の中では、あまりにも心が哀しみに満ちてしまうから
明日の朝、朝の光が差すのを待って

あのステンドグラスの窓に綱を掛け

私は

首を吊ろう

Chapter 47

”仲間たちが捕らえられている北の尖塔の様子を見てくる。この際だから、奴らの救出作戦を王女と二人でたててくる”

サライ村の宿営地で、タルクはラガーの言葉を思い起こし、

「お姫さんはラガーと一緒に王宮へ戻ったんだな」
多少困惑した顔つきでそう言った。

他のメンバーたちは、とりあえず待機せよという、ラガーの指示で、それぞれのテントへ戻っていった。

残されたタルク、ラピス、そしてゴットフリーの3人は、今の状況について話し合う……とはいっても、話しているのはほとんどがタルクとラピスで、ゴットフリーは海岸付近の岩場に腰掛け、二人の会話にはさほど興味がないように、ぼんやりと海を見つめていた。

タルクがラピスに言う。

「ラガーの仲間たちが、掛けられる水磔の刑って、いつなんだ？」
「二日後の建国記念祭の午前。ちょうど、引き潮から満ち潮に変わる時間帯に行われる。だから、明日中にはどうしても彼らを救出したいんだ」

「でも、王女をクーデター軍に引き込むなんて、少し無謀だと思うぞ。いくらスウォード・リリーといえども、自分の国が倒れてゆく手助けを最後までやり遂げれるのか。もし、心変わりでもされたら、それこそ俺たちは根こそぎ近衛兵にやられちまうぞ」

すると、ゴットフリーがやっと重い口を開いた。

「闇にまぎれて、霧花が二人に付いていった。王女の護衛のつもりだろうが、王女が怪しいマネをしたら、あれは、夜扇の刃で迷うことなくスオード・リリーの首をはねるだろうよ」

「霧花って、レインボーヘブンの欠片“夜風”の事か。あのサライ村のレストランでウェイトレスをやった美人だろ？お前は知らなかったかも知れないが、BWとも噂があったし、まあ、同じレインボーヘブンの欠片同士だったと知った今では、その理由はわかるんだが……警護隊には何人も、彼女の信奉者がいたんだぞ。あんな儂げな人がそんな思いきった事をやるのか?!」

と、タルク。だが、ゴットフリーは、その問いに、
「王女が我々に害をなすと思えば、容赦はしない。なんだかんだといっても、あれは“闇の住民”だからな」

そんな二人の会話にラピスは苦笑する。

ふうん、霧花ってやっぱり美人なんだ。

でも、容赦しないのは、我々というより、ゴットフリーに害がありそうな場合だろ？

にしても、“闇の住民”か……伐折羅といい、ここにきて闇が光より存在感を強めているのは確かなんだ。マズいな。BWの事も気になるし……何とかゴットフリーの気持ちを光の方向に向けたいんだが……やっぱり、お日様の申し子みたいな、ジャンがないのは、かなり辛いぞ。

すると突然、タルクが大声をあげた。

「まあ、ラガーが帰ってくるまで、我々には打つ手もないし、ここらでどうだ。酒でも飲んで待っていようや!」

ばんっと、何処からか持ってきた樽酒をみんなの前に引き出してくる。

「酒って？冗談じゃないよ。お前、怪我に響くぞ！それにゴットフリーだって体調万全ってわけじゃないんだろ」

迷う事もなく、元気な側の手でむずと酒樽をもちあげると、どくどくと杯に酒をそそぐ。タルクは、にこりと笑ってゴットフリーとラピスに、それを突き出した。

「酒でも飲んでいないと、こんなもはやした気持ちには晴れないぜ。大丈夫だ。俺たち、ガルフ島警護隊にとっては酒なんて水と同じだ」

なっ！と嬉しげにゴットフリーの顔を見るタルク。

「お前、この酒樽どこから持ってきた？」

「ラガーのテントから拝借してきた。ほら、飲め飲め！酒なんて随分飲んでないような気がするぜ」

タルクの勢いにゴットフリーは、苦笑いしながらも、すすめられるままに酒杯を口にする。もともと、嫌いな方ではないので、強く拒む理由が何もなかったのだ。

「ほら、ラピスも！」

相当、おかしくなってきた展開にラピスは慌てふためいて言う。

「馬鹿な、俺はまだ17歳だぞ。未成年に酒をすすめていいのかよ！それに医者がいざという時に酔っ払ってちゃ話にならないだろ」
「堅い事言うなよ。ゴットフリーだって、まだ19だ。それでも、もうザルだ」

大声でまくしたてて、タルクが笑う。

何？ゴットフリーってまだ、19歳だったのか？海千山千を通り抜けてきた感じなのに、俺と2つしか変わらないのか

「そうだよ。ラピス、私なんか10の時から飲んでるのに」
そばで聞こえた少女の声。さすがにこれだけは、許せない。
「ココ！お前まで飲むな！」

ゴットフリーの横にちょこんと座って、酒杯に手を伸ばそうとするココ。一体、いつからそこにいたのか、すっかり場に溶け込んでしまっている。血相変えて、ココから杯を取り上げたラピスを、タルクが笑う。

「お前、いける口か？さすが、サライ村の泥棒娘。でも、子供は寝てる時間だろ。おまけに酒まで飲んでちゃお巡りさんにしょっぱかれるぞ」

「みんなが五月蠅すぎて、目なんか覚めちゃったよ。そうだ……今、急に思い出した」

ココはゴットフリーをぎらりと睨みつけてこう言った。

「昼間は、よくも私を騙してくれたわね」

「何の事だ？」

一瞬、間をあけたから、ゴットフリーは人の悪い笑みを浮かべた。
「しらばっくれないで！喉が渴いたなんて、私を騙して外へ出て行ったじゃないの」

少しの恐れも感じないのか、悪態をつきながらゴットフリーにまくしたてるココの態度にラピスは、かなり驚かされた。

もう一人、助っ人を見つけた。いや、容赦がない分、ココはジャンより強いかも……対ゴットフリーに関しては。

＊ ＊

「お前はもう寝ろ！俺にまわりついてくるな」

ココの剣幕に、さすがにこれ以上は相手はしていられないと、ゴ

ットフリーが声を荒げようとした時、

「……」

急に口を閉ざし、海の方角をはっと見やった彼の態度に、ココは首を傾げた。

「ゴットフリー、どうしたの？」

「歌が聞こえる……」

「えっ、歌？」

ガルフ島の海岸でも、何度も聞いた……この歌……

「なあんにも聞こえないよ。ねえ、ラピス、タルク、歌なんて聞かないよね」

腑に落ちない表情のココの手を振り解いて、ゴットフリーは暗い海に向かって歩いていった。

歌が聞こえる。俺を呼ぶ声が小波の中から流れてくる。

頭の中で美しい調べが、水の波紋のように何度も繰返してくる。突然、猛烈な眠気におそわれてゴットフリーは、それを振り払うように首を振り、みんなの元へ帰ってきた。

「何だかひどく疲れた。もう、休ませてくれ」

何故、眠らせようとする……？ それなのに、何故、俺を呼ぶ……。

頭を手で押さえ、少しふらつきながら、タルクとラピスの横を通り過ぎ、ゴットフリーはもといいた小屋へ歩いていった。

「ゴットフリー」

思わず手を出し、彼の後を追おうとしたラピスをタルクが止める。

「そつとしておいた方がいい。急に飲んだ酒が眠気をさそつたなら、それはそれでいいじゃないか。あのまま、ぐっすり眠れば、ゴットフリーの気分もいい方に変わってゆくさ」

遠くから聞こえる小波の音に耳を澄ませて、ラピスは不安げに遠ざかってゆくゴットフリーの気配を追った。

本当に？ 本当にそれでいいんだろうか？

歌が聞こえる。そうだ、俺にも聞こえてくる。波にまぎれて、幾重にも響く柔らかな旋律。

これは、BWの……海の歌。

Chapter 48

グラン・パープルの西の空。
闇の中を滑空する漆黒の鳥。

吹きつけてくる疾風に飛ばされまいと、ジャンは伐折羅の黒い鳥の首にしがみつきながら、前方を飛んでゆく紅の灯に目を向けた。
「しめた。やつらもさすがに疲れたのか、速度をおとしてきているぞ」

偽“樹林”が変化した紅の灯。彼らに追いついて、しばらくの間でも、“空間凍結”してしまえば、時間かせぎにはなる。その間に、僕らは戦闘態勢を整えればいいんだ。大丈夫、みんなの力を合わせれば、あんな邪気に負けやしないさ。

「とはいえ、僕もかなり疲れてきた。お前も……」
と伐折羅の黒い鳥に話しかけようとして、ジャンは、遠くの海から響いてくる音にはっと耳をそばだてた。

歌?……だが、これは……

その時、ジャンが追っていた紅の灯がかき消すように消えてしまったのだ。そして、

「おいっ! 駄目だ。眠っては!」

伐折羅の黒い鳥までが、うつらうつらと揺れながら失速しだしたではないか。

歌っているのはBWか!? やつはこの歌で、黒馬島でも暴走する海の鬼灯を眠らせていてくれた。でも、この鳥までまきこむなんて

……

BW、何故こんなにも心を乱しているんだ？

ついには羽ばたく事もできなくなった黒い鳥とともにジャンは、暗い海の中へ落ちていった。

＊ ＊

漆黒の海の中を土の香だけをたよりに泳いで、とりあえず、たどり着いた小島の海岸に這い上がる。土のある場所とは勝手が違う。海の中では、持ち前の力も役にはたたず、ジャンはへとへとに疲れ果ててしまった。

おまけに怖いほどの静寂が、不安をかきたてて仕方ない。

何も聞こえない。小波の音さえもBWの歌に深く眠らされてしまったのだろうか。

そのBWの歌でさえも、今は聞こえては来ない。

嫌な感じ……すごく嫌な……

ジャンは、小さく息を吐くと、両手に包み込むように持っていた小さな黒い鳥に目をやった。

「大丈夫か？やっぱ少しは休まないとな」

海岸の少し先に、家の灯かりがぼつんと一つ見えていた。

「あの家に行ってみるか？せめて、濡れた服と羽ぐらいは乾かせるだろ」

＊

「まあ、こんな時間にこんな子供がずぶ濡れで、どうしたつていうの?! 乗ってた船が沈みでもしたの」

時計は午前四時を指していた。どう考えてみても、15〜16歳の少年にしか見えないジャンが訪ねてくる時間ではない。

玄関の扉を開いた初老の婦人はたいそう驚いて、すぐにジャンと黒い鳥を家の中に入れてくれた。

こじんまりした家の中は、極々質素な内装で暮らし向きはそれほど、良いようには思えなかったが、部屋の中にはカモミールの花の香が、ほんのりと心地良く香っていたし、奥の部屋から出てきた主人らしい男性は、婦人と同じくらい優しい目をしていた。

「息子の服を貸してあげるから、まずは、着替えなさい。その後は熱いお茶? それとも、お腹が空いてる? そうだ、あなた、その鳥の羽をドライヤーで乾かしてあげて! ただし、温度は低めでそうっとその子が焼け焦げてしまわないように」

婦人から手渡されたタオルで体をふいてから、ジャンはほっとした気分を着替えの服に袖を通した。少し大きめのそれに、ふと気づいたように婦人に尋ねる。

「息子の服って、これ、勝手に借りていいの?」

すると、ティーカップに熱いお湯を注ぎながら婦人が笑った。

「それはあの子たちが残していった服だから、遠慮しないで着ていいのよ」

「残していったって?」

「私たちには息子が2人いるんだけど、今はそれぞれ別の島で暮らしてて、こちらにはなかなか帰れないの。特に上の子はね、とても偉いのよ。目が見えないのに、グラン・パール島で医者になる勉強をしているの」

誇らしげに言う婦人の言葉に、ジャンは、思わず“えっ”と声をあげてしまった。

「ど、どうしたの？」

「も、もしかして、その息子って……、弓が上手い？」

「そう、その通りだけど……」

目と目を見交わす婦人とジャン。

「ラピス・ラズリ！ここって、もしかして、ラピスの生家か？！」

……てことは、この人たちは、ラピスの両親？

一瞬の沈黙が部屋に流れた後、

「あなたは、ラピスの友達？」

「ラピスは元気にやってる？」

「きちんと医者の仕事はこなしているのか？」

等、矢継ぎ早に尋ねてくるラズリ夫妻の質問せめに、ジャンは苦笑する。それでも、ラピスの友達というだけで、突然訪ねてきた客を怪しむでもなく、心を許して話しかけてくる二人の姿に、

本当にラピスは可愛がられて育ったんだなあ。

ジャンは、手渡された暖かいお茶をすすりながら、何だか羨ましいような気分になってきた。

すると、その気持ちを察したようにラズリ夫人がこんな事を言い出した。

「あの子は目が見えなくても、普通以上に何でもこなすけど、生まれた時には本当に大変だったのよ」

唐突なその言葉にジャンは、少し戸惑う。

「大変？ラピスが……やっぱり目の事で？」

ううん。そうじゃなくて、

と、夫人は少し厳しい表情をした。

「実はね、あの子は……死んで生まれた子だったの」

「えっ」

驚いた様子のジャンに、笑顔を作る。

「そんなにびっくりしなくても大丈夫よ。生まれて30分くらいは息がなかったけど、その後すぐに産声をあげたから……でも、目だけはその影響からか、見えなくなってしまうていたのだけれど」

「それって、ラピスは生まれてから今まで、一度も自分の目で何かを見た事がないって事？」

そうねと、ラズリ夫人は少し寂しげに答えたが、それを補うようにご主人が言った。

「でも、あの子は見えない物まで感じとってしまう“心の目”ってやつを持っている。ラピスには他の人とは違う類まれな才能がある。だがね、それがかえってわしらを不安にさせるんだ」

「不安って、何で？」

ジャンの質問に、ラズリ氏はこう答えた。

「あの子はこんな小さな島にもどってくるような子じゃないような気がするんだ。いつか何処かへ、それも、手の届かない遠い場所へ行ってしまう……わしらには、そう思えて仕方がないんだよ」

そうこうしているうちに、窓から薄日が差し込んできた。

すっかり、話し込んでしまっているうちに夜が明けてしまったのか。

「僕はもう、行かなくちゃ。本当にお世話になりました。ラピスの両親とこんな所で会えるなんて思ってもみなかったけど、話が聞けて何だか良かった」

「行くって、何処へ？」

「グラン・パープルへ」

急いだ様子で出てゆこうとするジャンを、ラピス夫妻はあえて止めようとはしなかった。ジャンと話しているうちに二人は、彼から

感じ取ってしまったのだ。ラピスと同じこの世を超越した力の
ようなものを。

海岸まで、見送りに出てくれた二人にジャンは笑顔で言う。

「心配しないで、ラピスはちゃんと、ここへ帰ってくるから」

突然、舞い上がった白い風にラズリ夫妻は目をみはった。

眩く輝く朝日の中で大きく翼をひろげた純白の鳥

その鳥の背に飛び乗り、ジャンは強い調子でこう言った。

「僕がラピスをここへ帰すから」

一天喜の白い鳥――

その背の上から、ジャンはラズリ夫妻に軽く手をふり、朝日の方
向へ飛び立っていった。

グラン・パール向けて去ってゆく白い鳥の透き通った輝きを見
つめながら、ラズリ夫人がこう言った。

「驚いた……あの子は、天から舞い降りてきた少年だったのかしら。
でも、名前も聞かなかったけど、彼はいい子ね。……ねえ、あなた、
あんな友達がいるんだもの。私はラピスが帰ってこなくても、仕方が
ないと思っているの。あの子はここに留めておくべき子じゃない
って、あなたもわかっているのでしょう」

ラズリ氏はそれに深く頷いた。

「ああ、わかっているさ。それでも、やはり寂しいもんだなあ」

二人は静かに肩を寄せ合い、いつまでも遠ざかってゆく白い鳥を
見つめ続けていた。

Chapter 49

何故、眠らせようとする……？それなのに、何故俺を呼ぶ……。

同じ疑問が波紋となって、頭の中に繰り返される。だが、深い眠りの中に自分を引きとめていた“海の歌”が突然止まってしまった時、ゴットフリーはゆっくりと重い瞼を開いた。薄い朝日が窓辺から、寝入ってしまった宿営地の小屋に差し込んでいる。

ぼんやりと部屋の中を見やった時、ふと頭をよぎったよく似た記憶。

宿営地の小屋か？また俺はここで目覚めたのか……だが、確か前にも同じような事が……いや、違うな。あの時はもっと体が熱くて、ひどく悪い夢を見ていた……。

“ゴットフリー”

聞きなれた、透き通った声……

“良かった。気がついたんですね”

紺碧の海に人々が飲み込まれてゆく、残酷な夢。

BW……あの声に起こされて、俺は……

その瞬間、ゴットフリーは愕然と口元を押さえ、ベッドの上でがばと身を起こした。

俺は、BWに何を言った？

“ お前、何も覚えていないのか？ ”
ラピスが言ったあの言葉。

何もない空間に視線を向ける。その位置がゆらりと歪んで見えた。
それと裏腹に徐々に鮮明になってゆく記憶。

“ BW、消えてしまえ！ この世からお前は…… ”

―― 永遠に ――

「馬鹿な！」

ゴットフリーがそう叫んだ瞬間、目の前が黒く輝いた。空中に徐々に形をなし、彼の前に浮かび上がった黒刀の剣。

闇馬刀……

戸惑い、心乱して響いてきた“ 海之歌 ”
今まで聴いたこともない、切なすぎるあの旋律……

闇馬刀の柄に手をかけ、その刀身に目を向ける。灰色の瞳に映し出された一本の道。闇馬刀の中には、闇へと続く道がある。

俺がおとしめた……俺の言葉で

BWを闇の向こうへ

何処からか聞こえてくる馬の蹄の音。闇馬刀の中に走る一本道に目をやり、その消失点からこちらに駆けて来る黒馬を見据えると、ゴットフリーはかたく結んだ唇をわずかに開いてつぶやいた。

“シャドウ”――暗黒の道を駆けてくる黒馬……。

「ならば、ここに来い！俺を闇の中に連れてゆけ」

BWを闇になど行かしてたまるものか！

あれは、俺の事を一番知っていてくれた……ガルフ島警護隊隊長参謀。

そして、

失くすわけにはゆかない、夢の欠片。

* *

宿営地の部屋に突然、舞い上がった旋風に目覚めされられ、ココは、ベッドの足元であつと声を上げた。

急に小屋へ戻ってしまったゴットフリーを心配して、その跡をついていったココ。

“もうテントに帰れ”というタルクの命令を無視して、小屋の中に居座ろうとするココをラピスは敢えて、彼から引き離そうとはしなかった。

「なら、ココ、お前はゴットフリーのそばで寝てろ。俺らはとなりの厨房で寝るから、何かあったら教えるんだぞ」

“うん”と強く返事をしたが、今、目の前に起こっている事態をどう伝えたらいいんだろう。

ココの頭上に浮き上がった黒刀の剣が、黒い旋風を吹き上げている。

“闇馬刀?!”

吹き付けてくる風を手で遮りながら、ココは、はっとベッドに目をやった。ゴットフリーがない?!

遠くに去ってゆく馬の蹄の音に、ココはぎよっと、宙に目をやった。

まさか……そんな事って。

ベッドに飛び乗り、こわごわ、闇馬刀の柄に手をかけてみる。その刀身を覗き込んだ時、

ココはあらん限りの声で叫んでいた。

「ゴットフリー、もどって来て! あっちに行っちゃ駄目!!」

蹄の音が消えるとともに、手の中で薄れてゆく黒刀の剣。ココは、その声に驚き部屋に飛び込んできたタルクとラピスに気づきもしないで、その場に立ち尽くしていた。

手のひらを見つめながら、ベッドの上に突っ立っているココ。異様に密になっている部屋の空気にはラピスはあせった様子で言った。

「おいっ、何があった? ゴットフリーは何処だ?」

「黒い馬に乗って行っちゃった! 闇馬刀の中に……あの一本道の向こうに!」

「何っ?」

どういうことだ?! と、眉をしかめるラピスとは反対に、タルクには事の次第が手にとるようにわかった。

それは、ゴットフリーとタルクが黒馬島の萬屋で、闇馬刀を見つけた時の事だった。

闇馬刀の刀身には、暗黒の闇が広がっていた。だが、ゴットフリーの灰色の瞳には、闇馬刀の奥へと続く一本の道が見えたのだ。その時、彼は啞然と声を荒げた。そのはるか先の消失点から……小さな黒い点が、速度を増しながらこちらの方に駆けてくる！

「黒馬だ。この黒剣の中を黒馬が駆けてくる！」

ゴットフリーの声に、タルクが半信半疑で覗き込んだ刀身。そして、その姿を見定める間もなく、蹄の音と共に黒馬は闇馬刀から外の世界に飛び出していった。

「あれは黒馬島の御神体だ。そして、闇の世界とこの世界の間を行き来する馬だ。まさか、今度はゴットフリーを闇の中へ連れて行ってしまったのか！」

タルクが声を荒げた時、

「大変だ！ 奴ら水磔の刑の日を変更しやがった！」

勢いがかって、小屋に飛び込んだのは、ラガーだった。

「刑の執行は今日だ！ それも今朝の干潮から満潮時に合わせて。もう1時間も時間がねえ。ラピス、タルク、俺と一緒に来てくれ！ 王女と必死で探し回って、やっと捕まった仲間たちの居所を探り当ててきた」

「え……でも、ゴットフリーがいなくなってしまったんだ」

ラピスの言葉にラガーは怒ったように言う。

「ゴットフリー？ あいつには人の助けなんぞいらねえだろ！ それより急げ。お前たちが必要なんだ。大人数だと、かえってまずい」
「じゃ、俺だけが行くよ。タルクは無理だ。肩の骨が折れちまってる」

「いいからタルクも一緒に来い！お前は授与式の時、王宮でかなり悪名を轟かせたそうじゃないか。それが、かえっていいんだ。考えでも見ろ。王宮側は、まだ、つかまった仲間たちの事を単なる盗賊と思ってる。ここで、俺たちクーデター軍がしゃしゃり出ていったら、計画が丸バレじゃないか。だから……」

タルクはラガーの台詞に、合点がいったように苦い笑いを浮かべた。

「わかったぞ。俺とラピスに盗賊の仲間を演じろというんだな。王宮を狙っていて捕まった彼らを助けに来た、極悪人たちという設定で」

わかってんなら、さっさと来い！

二人の顔を見もしないで、ラガーは再び外に飛び出していった。ラピスとタルクは一瞬、沈黙してから、

「仕方ないか……、ココ、お前はここで待っている！もしかしたら、ジャンが帰ってくるかもしれない」

と、大急ぎで、ラガーの後を追いかけていった。

Chapter 50

エターナル城の回廊、礼拝堂の手前で、近衛兵の一人は、不満げに口をとがらせた。

「いきなり、今朝の満ち潮に合わせて、水磔の刑をやるだなんて、準備する俺たちの事も考えてくれよな。しかし、何で王妃は急にこんな無理を言い出したんだ」

「さあ、ここんところ、えらく体調が悪そうだったから、何か気晴らしがしたかったんじゃないのか」

同僚の兵士は、苦い笑いを浮かべながら言う。

「あの大男が大立ち回りをやって、王宮武芸大会の授与式を台無しにしちまったからな。それより、貴族たちへの連絡は万全か。見逃しでもしたら、代わりに俺たちが磔の刑にされかねないぞ」

まったくだと、笑みを返そうとした、その時

「……!?!」

少し先の回廊の何もない空間がぐらりと揺れた。その位置に訝しげな視線を送り、兵士は大きく目を見開いた。

どこからか、馬の蹄の音が響いてくる。それが、大きく耳に届いてきた瞬間、

「うわあっ!!」

黒い旋風が巻き上がった。そして、唐突に引き裂かれた空間から、巨大な漆黒の馬が飛び出してきたではないか。

黒馬が空中から飛び出てきた?! そんな馬鹿な!

回廊を礼拝堂の方向に駆けて来る黒馬。兵士の一人は、その背に

乗っている黒装束の男に、見覚えがあった。あの男だ！いつかりり様に、剣を献上するのだと言って、城に乗り込んできた……。確か……ゴットフリー・フェルト。

「ま、待て！き、宮中に馬で乗り付けてくるなんて、一体、どういうつもりだっ！！」

渾身の勇気を振り絞って、叫んでみる。だが、馬上から、彼らに向けられた灰色の瞳に、凍りつかされたように身を縮ました。

地獄の闇を映すような陰鬱な光。

「俺の邪魔をするな！」

ゴットフリーの声に合わすかのように、黒馬は大きく嘶き、礼拝堂の扉の前で前足を高々と差し上げた。たじろぎ、後ずさりする近衛兵たちを尻目に黒馬は、振り上げた前足で礼拝堂の扉を思い切り蹴破った。

その一瞬、扉からあふれ出た海の気配。

ええっ……

目の前が蒼に染まり、息がつまるような感触に眉をしかめる。

だが、近衛兵たちが、瞬きした間に礼拝堂の扉は固く閉ざされ、黒馬もゴットフリーの姿もその中に消えてしまった。

「ま、待て！この扉を開けろ！」

どんどんと、その場しのぎに扉をたたいてみる。だが、もう一人の近衛兵に“や、やめとけ。さわらぬ神にたたりなしだろ……”と、袖をひっぱられ、二人は震えながら、礼拝堂の扉の前で、とりあえず中の物音に聞き耳をたててみるのだった。

＊ ＊

海だ。紺碧の海……

海といっても、水もない、波もない。音も聞こえてはこない。それが、幻影であることは、一目で知ることができた。

黒馬の背から、床におりると

ゴットフリーは、放心したかのように辺りを見渡した。礼拝堂の中には、目に染み入るような透き通った海が広がっている。

俺はこの海を知っている。

レインボーヘブン

これは……レインボーヘブンの紺碧の海。

だが、

「……BW！」

ゴットフリーがその名を呼んだ瞬間、礼拝堂の中を覆っていた蒼が一斉に消えうせてしまった。

薄暗い蜘蛛の巣だらけの礼拝堂。

埃にまみれたグランドピアノの上には、迷宮を探しに侵入した時、騒ぐココの声を王女から誤魔化すために弾いた、バイオリンがそのまま残されていた。

胸を詰まらせるような寂しげな風景の中で、ステンドグラスの窓から差し込む朝日だけが、唯一、清涼と思える光を礼拝堂の中に送り込んでいる。

その朝日に照らされた窓に目をやり、光を浴びたゴットフリーの黒い髪が、紅の色に変わった時、

「馬鹿な！こんな事があってたまるか！」

BW！何でお前は！？

聞かずとも、その答えは胸の中からこみ上げてくる。口元を強く押さえると、ゴットフリーは礼拝堂の床の上にくんと膝から倒れ込んだ。

“BWをおとしめたのは自分だ。こんな寂しい廃墟の中に置き去りにしてしまったのは、この俺だ”

明日の朝、首を吊ろう

あのステンドグラスの窓に綱をかけて

それでも、私は信じています。

ゴットフリー、あなたがいつか私たちを、至福の島へ導いてくれることを……

＊ ＊

礼拝堂の扉の前で、中の様子に聞き耳をたてていた近衛兵たちは、突然聞こえてきた大音響に、飛び上がって驚いた。

「な、何だ？礼拝堂の中で何があったんだ……」

相当恐れをなしてはいたのだが、音を聞きつけた他の衛兵たちが駆けつけてくる。これ以上、見てみぬふりもできないと、二人の近

衛兵はおそろおそろ礼拝堂の扉に手をかけ、それを開いてみた。

固く閉ざされていた扉は、嘘のように軽く開いた。

「……おい、礼拝堂の中で改修工事でもやってたのか」

大破したステンドグラス側の壁に唾然を目をやる。

かすかに耳に響いてくる遠ざかってゆく蹄の音。

「あ、あいつら、礼拝堂の壁を壊して、外へ出て行ったのか。と、とりあえず、ここからいなくなったのは、有難いじゃないか……」
目に焼きついて離れない巨大な黒馬の姿と、凍りついた灰色の瞳に、ぞくりと身を震わす。

壊れてしまった礼拝堂の言い訳を……考えないとな。それも一苦勞するだろうが、あんな寒々しい思いをするよりはずっといいと、二人の近衛兵はお互いの目を見交わし、ほっと安堵の息をもらした。

* *

海の香りにひきつけられるがままに、ゴットフリーは黒馬を走らせた。

BWの体を葬るには、海しか行きつく場所はなかった。

たどり着いた海岸は、グラン・パープルのどの方向の海かもわからない。けれども、そんな心配は脳裏の片隅にも、沸きあがってはこなかった。

小さく波打つ海の浅瀬に、いつも自分に影のように寄り添っていた参謀の屍を横たえる。

BWは、レインボーヘブンの欠片。

これは、入れ物にすぎない。これは仮の姿だ。これは、BWじゃない。

そう自分に何度も言い聞かせてみた。

それでも、海の中へ溶け込むように消えてゆくBWの姿を見届ける事ができず、ゴットフリーは砂浜に膝をつき、顔をうつぶせた。強く砂を握り締め、ほとばしりそうになる嗚咽を堪えるように固く唇を噛み締めた。

“俺が殺した。俺の言葉で……”

引き裂かれそうな苦しい思いが、胸の上に湧き上がってくる。

ガルフ島、黒馬島、そして、ここでも……俺は大切な物を失ってしまった。

これも守護神アイアリスの意思なのか？

いいや、あれはもう、女神とは呼べない。

それならば、俺は何故

至福の島、レインボーヘブン。そんな錆ついた伝説を見つけるために、こんな苦い思いを繰返しているんだ？！

Chapter 51

激しく咳き込み、寄せてきた波に体をとらわれそうになった時、ゴットフリーの脳裏にふと、浮かんできた言葉。

“……何もかも壊してしまえ”

引いてゆく波の中で、無表情に宙を見つめる。

“さすれば、この世から苦しみはなくなる”

一瞬、心を梳くような思いが胸をよぎった。

「……何もかも壊してしまえば……」

暗く陰鬱な光を帯びた灰色の瞳が、かすかに微笑もうとした時、

“ゴットフリー、そんな風に考えては駄目”

強く耳元に吹き付けてきた風に思考を中断させられ、虚をつかれたように、ゴットフリーは空を見た。

「霧花か？ お前、何処にいる？」

“……朝の光の中では私の姿は見えない”

弱々しいその声に、皮肉に唇をゆがめて言う。

「そうか、お前は“闇の住民”だからな。今、ちょうど、そちらの世界の事を考えていたところなんだ。伐折羅……あいつのように殺戮や崩壊を喜ぶことができるならば、それは作りあげるより、よほど楽しい事なんじゃないのか……と」

どんなに精魂こめて作り上げたとしても、いつかそれは崩れてゆく。ならば、壊してしまえ。無くしてしまえば、失う苦さを味わう事もないのだから。

“馬鹿な事を言わないで。お願いだから、闇に心を向けるのはやめて！”

そう言うってから、霧花はふと、言葉を止めた。ゴットフリーは、手を伸ばせば届く位置にいるのだ。だが、彼に触れる事ができないもどかしさが、胸をつまらせた。

闇に心を向けるのはやめて……？でも、それは私の本心なのだろうか？

……本当の私は……彼と片時も離れずいるジャンやBWが羨ましくてたまらない。

今まで、“闇の住民”である自分と一緒にいる事で、ゴットフリーの心が闇に向かわないよう、なるべく距離を置いてきた。けれども、今、彼を闇につれていってしまったえば、

そうすれば……私は、ずっとゴットフリーのそばにいれる。

心が闇を向いている今なら……

容易く、彼はこちらに来る。

その背中を見据えて、肩に手を伸ばしそうになる。

“闇の王”

それにかしづく、レインボーヘブンの欠片“夜風”

いいえ、もうその島は、暗黒の島。それでも、私は……

だが、突然高く打ちあがった波が、海岸の岩場に激しく砕け散った。その音に驚かされ、霧花は、はっと思考を止めた。

BW……？

すると、海の波間が漆黒に揺れた。

海の浅瀬に姿を現した黒馬。

その姿を見据え、ゴットフリーはかすかに微笑んだ。

「シャドウ……おまえの行く先は、いつも俺の心が望む方向だ。お前の背に乗れば、俺はこんな理不尽な思いから解放される。そうだろう？」

黒馬の方に、ゆっくりと歩き出したゴットフリー。その灰色の瞳は、朧がかかったように暗く沈み、胸のすくような以前の輝きはほとんど、見る事ができなくなっていた。

ところが、その手が黒馬の背に掛かった時、

「駄目よ、ゴットフリー！」

黒馬の姿をかき消し、突然、目の前に現れた見知った顔に、ゴットフリーは、驚いたように目を見開く。

淡い金の長い髪、透き通ったスミレ色の瞳。少女と乙女のちょうど、狭間にいるかのような繊細な顔立ち。

「水蓮……！」

ゴットフリーは信じられない面持ちで、浅瀬の中に立ち尽くした。

ガルフ島の館から姿を消してしまった後も、ずっと、探し続けていた……それなのに、何故、こんなにも唐突に俺の前に現れた……？

子供時代、唯一、心を開いた人。島主リアの恩に早く報いたいと焦り、周りから孤立した自分を諫め、支えてくれた姉のように慕

った人。

「ゴットフリー、あなたは私が言った事を忘れてしまったの？」

きつい口調で水蓮は、ゴットフリーに問いかける。

「もともと、この世界を善にするか悪にするかは人の心次第。その心を正しい方向へ導くこそが、上に立つ者……ゴットフリー、あなたの役目。それなのに、何故、あなたは闇に心を向ける？」

「上に立つ者？ ガルフ島の島主としてか？ それとも、俺がレインボーヘブンの王だとかいう戯言の事か。それを決めた女神アイアリスは、今、どういう有様だ？ あれは、もう邪神だ。至福の島の伝説も今となっては、まがい物の御伽話だ」

ゴットフリーは、上目遣いに水蓮を見遣って言った。

「レインボーヘブンを探す事は、もう、俺にとって苦痛以外の何物でもないんだ。ガルフ島では、住民、部下、そして、誰よりも幸せになってもらいたかったリリアを失い、グラン・パープルでは、BWを亡くした。次はタルクかジャンか？ こんな事を繰返して、至福の島にたどり着いた時、俺の手元には一体何が残るというんだ？」

「ガルフ島にもまだ、生き残った住民たちがいる。黒馬島にも……、それにレインボーヘブンの欠片たち。みんな、あなたに自分たちの運命を託している。その人たちの事を忘れないで！」

水蓮の言葉にゴットフリーは、せせら笑うように口を開いた。

「水蓮……いや、どこぞの満たされない魂の抜け殻か？ わかっているぞ。お前も“海の鬼灯”が俺を欺くために、水蓮の姿を真似た化身なのだろう。おかしいじゃないか、お前は館にいた時から少しも年をとっていない。あの時、水蓮は17歳、俺は12。だが、今はどう見ても、俺の方が年上に見えるぞ」

「違うっ！ 私が“海の鬼灯”であるならば、あなたが闇に心を傾けるのを止めるはずがないでしょう？」

一瞬の沈黙。その合間を縫うように、小波の音が響いていた。

手を伸ばせば届きそうな二人の距離を大きく隔てるように、波が

水蓮の腕を引いた。

「水蓮……何故、俺の前から姿を消した……」

そう問いかける間もなく、薄れ出した水蓮の姿に、ゴットフリーは声を荒げた。

「待て！もう少し、話を聞かせてくれ。俺はずっと考えていたんだ……お前は、俺たちがまだ、見つけていないレインボーヘブンの欠片なのでは……」

けれども、水蓮は海の色に溶け込みながら、小さく横に首を振った。

「これでお別れです。二度とあなたに会うこともないでしょう。私は、幻影にしかすぎません。私はもうどこにもいない……けれども、BWが……多分、彼の力が一瞬だけ、私の姿を呼び起こしてくれた……」

「BW……」

「姿を亡くしてしまっても、彼の願いは、あなたに託されているんです。レインボーヘブンを探してくださいと」

そして、BWは私に芽生えそうになった邪な心をも正してくれた。そう、私の思いは変えようもない。

“闇の住民”……レインボーヘブンの欠片“夜風”―霧花―と名を変えた今でも、

私は、ゴットフリー

あなたの幸せを願っています。

何もかもがわからなくなってしまっていた。水蓮の姿が完全に消えてしまった後で、ゴットフリーは浅瀬に力つきたように膝をつき、誰に呼びかけるでもなく、ただ遠くに引いてゆく波に向かって消え入りそうな声でこう言った。

何もいない。

もう、俺は何も望まない。

だから……

ただ、そばに

俺のそばにいてくれ。

Chapter 52

「ラガー、これってかなりマズイ事になってないか？」

エターナル城に隣接した、グランパープルの東の海岸。

その浅瀬に備え付けられた5基の磔台に目をやり、タルクは大きく眉をしかめた。

水磔。

罪人を逆さにしぼりつけた十字架を水際に立てて、潮の干満によって溺死させる刑。

海岸の周囲には、刑の執行の御触れを聞きつけてきた野次馬たちが、早朝にもかかわらず、かなりの人数集まってきている。

「陛下、わくわくしませんこと？建国記念祭の余興としては、最高のイベントになりましたわね」

特設された貴賓席で締りのない笑顔を浮かべた王に王妃が微笑みかける。それに物見遊山な貴族たちが相づちを送ると、ほどなく、数人の衛兵に連れられて、近衛兵に捕らえられたラガーの5人の仲間たちが、引き立てられてきた。

「BWはやはり、王妃をしとめられなかったのか……奴の事も心配だが、潮の香りが強くなってきた。じきに潮が満ちてくるぞ。こうなったら、強行突破するか?!」

磔台に有無をいわず、逆さに縛りつけらる彼らの様子をラガー、タルク、ラピスの3人は、海岸の近くの林に身を隠しながら覗いていたが、

「なら早く行って!」

背後からかけられた声に、ぎょっと後ろを振り返った。

「スウオード・リリー！」

「早くしないと、本当に潮が満ちてしまうわよ。あの人たちが波におぼれてしまう前に、あの磔台を叩き壊して！」

紫暗の瞳で鋭く見つめ、リリーは言った。

「あなたが捕まっても、私が後から何とかするわ。だから、早く！！」

そうこうしているうちに、本当に潮が満ちてきた。

「見てみるよ。あの囚人たちの引きつった顔！」

「自業自得だ。宮中の物を盗もうなんて考えるからだ」

海岸のあちらこちらから、興奮気味の歓声があがる。磔台に逆さに縛り付けられた囚人たちの頭にあった海の水が、徐々に額へと水かさを増やしてゆく。それに怯えた彼らの表情が、観客たちのテンションをさらに引き上げた。

「わかったっ。お姫さん、その言葉、忘れるなよ！ラピス、タルクっ、俺の後に続けっ！！」

林を飛び出したラガーの手元が大きく弧を描くと同時に、白煙が舞い上がった。それにむせて、少しひるんだタルクの横を、お先に！と、弓を構えたラピスが平然と駆け抜けてゆく。

「な、何だ、お前は武芸大会の優勝者じゃないか。怪しいと思っていたら、お前、やっぱりこの盗賊たちの仲間だったんだな！」

浅瀬の中で囚人たちを監視していた衛兵たちは、突然巻き起こった白煙にむせ返り、浅瀬に突然現れた大男の姿にぎょっと目を瞬かせた。

「その通りだ。俺たちは“長剣のタルクとその一味”の盗賊だ！仲間を返してもらいに来たぞ！！」

白煙にまぎれてラガーが叫ぶ声がする。

その瞬間、ラピスの弓がひゅうと風を切った。すると、礫台の近くにいた数人の衛兵が、ばたばたと海の中に倒れこんだ。

ラピス……あいつ、本当に何も見えてないのか？ いや、この煙の中じゃかえって、あいつの方が有利だな。

でも、やっぱり盗賊の首領は俺か？

苦い笑いを浮かべた後で、タルクは折れた肩とは逆の腕一本で、背中の長剣を抱えあげた。

「退け！ 水礫なんてとんでもねえ！！」

集まってくる衛兵たちを、一振りでけちらすと、タルクは長剣を力まかせに礫台に向かって打ち下ろした。

「ちよっと乱暴だけど、我慢できるなっ！」

根元から折れて崩れてゆく礫台。縛り付けられた仲間の無事を見定め、少し薄れた白煙の間から、観客たちを睨みつけ大音声で叫ぶ。「お前ら、まだ懲りないのか！ こんな馬鹿げたお遊びはいい加減に終わりにしろ。でないと、この長剣で全員、ぶった斬るぞ！！」

その時、タルクの背後から斬りかかろうと衛兵たちが近づいてきていた。ところが、歩を進めた瞬間、どこからともなく飛んできた矢に返り討ちにされてしまった。

「俺らとお前らとは、戦力が違う。そこんこと、わかつとけよっ！」
タルクは、長剣を振りかざし、仁王そのけに言い放つ。

といっても、ラピスとラガーだけだが……ま、下手な近衛兵よりはずっと頼りになるか。

「死にたくない奴は、邪魔すんな！」

数的には少ない戦力を誤魔化すように、わざと大げさに声をあげてから、次の礫台に長剣を振り下ろす。それから、タルクはさらに凶暴な顔であたりを見回した。

ざわと観客の輪が3歩ほど、後ずさりした隙に再び、ラガーの声がした。

「残りの礫台は俺が破壊する！タルクが奴らを引き付けてる間に、ラピス、お前と俺で仲間を下ろしてやるんだ」

大音響とともに舞い上がる赤い炎を伴った白煙。礫台の根元にラガーが仕掛けた、小型爆弾の破裂音を聞くと、

「わかった。タルクもなかなかの役者ぶりじゃないか」

弓矢をひょいっと肩にかけ、ラピスはあっという間に白煙の中へ消えていった。

一方、ラガーはあらかじめ用意しておいた小刀を口にくわえると、爆発で倒れた礫台の間を、すらすらと通り抜け、仲間が拘束された綱を切っていった。

＊ ＊

「近衛兵、何をやっているの！早くあの男を捕まえて！」

「待って、殺しては駄目。生け捕りにして！」

慌てて声を荒げたりリリーに、王妃は冷たい一瞥を送りながら言った。

「当たり前じゃない。殺すなんてもったいなすぎる。でも、あの男は私の物なんですからね、横取りは許さないわよ」

リリーは苦い笑いを浮かべたが、今回ばかりは、ちよっぴり王妃の“変わった好み”に救われたような気がした。

だが、そろそろタルクたちの大立ち回りが通用するのも限界がやってきていた。王宮中の兵士という兵士が全員、集結を始めたのだ。

ぐるりと回りを取り囲まれては、さすがに身動きがとれなくなる。

苦々しい顔をして、タルクは彼の横に戻ってきたラピスに囁いた。
「さて、お次はもう、スウォード・リリーに天命を任せるだけか？」
「とりあえず、捕まっていた仲間たちは、煙にまぎれて逃がしておいた。今頃、他の仲間が保護してくれてる」

やはり、もどってきたラガーが、タルクの背中に背中をぴたりとくっつけて言う。

「でもな……、どうやら助かるのはタルク、お前一人のようだぜ」
近衛兵の長らしい男が叫んでいた。

王妃様の命令だ。大男は生け捕れ！あとの奴らはなぶり殺せ！

ラピスとラガーは顔を見合わせ、苦い笑いを浮かべる。

「すぐく有難い命令だな。俺とラガーは殺せってか？」

「そう。逃げなきゃ、死ぬな」

でも、どうやって……？

……が、万策つきちまったと、つぶやいたのと同時に、ラガーは、
「おかしいぞ」

「おい、おかしがってる場合かよ」

「そうじゃなくて！今は潮が引く時間じゃない。それもこんなに急速に」

その言葉に、ラピスは、去ってゆく足元の冷たい感触に注意を向けた。

満ち潮になろうとしていた海の水が、突然、潮を引き出したのだ。
海の水が引いてゆく。東の海岸に集まった観客たちは、遠くに逃

げ去ってゆく波をただ呆然と眺めていた。

鉄砲水が押し寄せる前には、急激に水位が下がる事があるが……

その思考が頭をよぎった時、ラガーは何かを思いたったかのように大声をあげた。

「津波だ！津波が来る！こんな風に海の水が急激に引くのはその証拠だ。みんな早く高台へ逃げろ！さもないと、引いた海水が一斉に押し寄せて来るぞ！」

「津波が来るって?!」

「何で急に?!」

「迷ってる暇があったら、とっとと逃げろ！」

「うわああ、逃げろ、津波が来るぞ！」

ラガーの一言をスタートの合図に、観客も衛兵も貴族たちも、海岸に居合わせた全ての人間が、慌てふためいて高台の方へ駆け出した。

去ってゆくパニックの群れ。

後に残されたのは、お菓子に弁当、双眼鏡、海岸に残された膨大なゴミの山。

それらをあきれ顔で眺めながらタルクが言った。

「あいつら、本当にピクニック気分が集まってやがったんだ……」
すると、ラピスがラガーに、

「……で、本当に来るのか、津波」

「わかんねえ。咄嗟に思いついたただけだから。でも、奴らを追い払うにはいい手だっただろう？集団心理でえのは、ちょっとくすぐっ

てやると、恐ろしいほど統率がとれるもんなんだ」

ラガーは、皮肉な笑いを浮かべ、足元に落ちている弁当の箱をぐしゃりと踏み潰した。

水が引いた海岸には、爆破されてなぎ倒された礫台の木片があちこちに転がっている。誰もそれに繋がれていないところを見ると、どうやら、仲間は上手く逃げおおせたらしい。ほっと息をついてから、タルクは、

「何だ？津波っていうのは嘘だったのか。そういえば、また潮が満ちてきた。でも、津波にしては、えらくお上品だ」

ゆるやかに海の水が、3人の足元に戻ってきた。その時

「……」

ラピスは、小波に紛れて流れてきた気配に、ふと首をかしげた。

一少しは私にも感謝してくださいよ……彼らを追い払う手助けをしてあげたんですからねー

そんな波の囁きが聞こえた気がして。

Chapter 53

「まあ、いいじゃないか。ともかく今のうちに俺たちも逃げてしまおうぜ」

ところが、

「タルクっ!!」

足元のぬれた砂が、突然、ぼこぼこ膨れだし、タルクの体を浅瀬の中に引きずり込みだしたではないか。

崩れかけた声が砂の中から響いてくる。

“おらあ、天のお神酒を飲んじまった。だから、お前を倒さねばなんない。おらあ……未来永劫、この呪縛からもう離れられないんだ”

タルクの背筋に走る悪寒。

「お前、キャリバンか!?! 武芸大会でジャンに土に還されたはずの?!」

“おらあ、何度でも生まれてくる。死んでも、死んでも、あの方がおらを作り直す”

土くれが、触手を伸ばしながら足元から上に這い上がってきている。獲物を逃がすまいと、悲壮な決意がみなぎらせて、それはタルクを土の中へ引きずり込んでゆく。

「タルクっ、どうにか振り切れっ!」

「無理だ! 足元が不安定で、ちっとも力が入らねえ!」

ラガーとラピスはなす術もなく立ち尽くしている。底なし沼に落

ちてゆくかのように、浅瀬に沈んでゆくタルクを助けようとも、ぼこぼこと湧き上がってくる土くれが二人を妨げた。ところが、タルクの体が腰元まで沈んでしまった時、

「……?!」

突然、首元に感じた刺すような感触。そして、“ここを狙え”とばかりに呼びかけてくる誰かの思念。

くるりと振り返ると、ラピスは半ば無意識にその方向へ弓矢を番え、力いっぱい弓をひいた。

ギャツ!

王宮のバルコニーの方向から、小さくうめく声が聞こえた。

「やっぱり王妃か?! いや、あれは白蛇の化け物だ! あいつ、向こうからこっちに変な力を送りこんでやがった」

まだ、弓を構えたままのラピスが声を荒げた。そのとたん、タルクを拘束していた土くれはしゅんと、浅瀬の中に姿を消してしまった。

「畜生、あの女、どこまで人をコケにしたら気がすむんだ!」

四苦八苦しながら砂泥の中から這いずり出し、王宮の方向をぎろりと睨めつける。だが、その方向にもう王妃の姿はなく、やけに明るく輝いているバルコニーの後方の空に、タルクは腑に落ちぬ様子で目をやった。

「お、おい。あれは何だ?!」

そういえば、王宮のあの辺りにはいつも白い靄がかかっていた……

その靄が風に流され消えてゆくのだ。差し込んでくる太陽光とともに、おもむろに見えてくるエターナル城の尖塔。城に備えられている他のどの尖塔より高くそびえていたであろうその姿。

あれは、西の尖塔だ。ゴットフリーとココが攻略した迷宮の出口があったという……だが、

ラガーは、その先端を見据え、驚愕の声をあげた。

「西の尖塔の先がない?! 尖塔の最上階は何処へいった!!」

＊ ＊

「王妃様、王妃様っ、どうなさいましたっ!?!」

右肩を押さえながら、王宮のコリドーに姿を現した王妃。肩からばたばたと、流れ出しているどす黒い血を見据え、近衛兵はわななくように声をあげた。

「王妃様、血が……」

「五月蠅い! 誰も来るな、近づくな! それ以上近づくと、全員、首を搔っ切るわよっ!!」

睨めつけてきた瞳の中に、ぞくりとした狂気があふれ出している。

おのれ、あの弓使い……妙な力で私の魔力を弱らせたな。だが、私の正体を見破ったからと、いい気になるなよ。次にあった時はひきさいてやる……お前の五体をばらばらにしてやる……。

その時、王妃の首もとで、透明な水の輪がきらりと輝いた。その輪は首の肉に深く食い込んでしまっている。王妃は忌々しげに首をもたげ低く嗚咽をもらした。

その光景のおぞましさに、一步も動けなくなってしまった近衛兵たちを残し、血まみれの妃は王宮のコリドーを駆けていった。

だが、その跡を追いかけてゆく者が一人だけ、王宮にいたのだ。

スウオード・リリー

王妃が自室に駆け込み、その扉を固く閉じた時、王女リリーは床に残された王妃の“忘れ物”に目をおとし、ぞっと身を震わせた。

血にまみれた右腕……

そこには王妃の右腕が残されていたのだ。

無残に二つにへし折られた、ラピスの矢とともに。

Chapter 54

水磔での大騒動が嘘のように、人気のなくなってしまった東の海岸。

津波を恐れ逃げていった人々と衛兵たちが、再び集められる事もなく、姿を消した囚人たちを搜索する動きもなく、砂浜には、まだ、片付けられていない磔台の残骸とゴミの山が無残な姿で残されていた。

「グラン・パープルの海岸がやっと見えてきた。でも、あのゴミの山は何だ。建国記念祭は明日のはずだろう？」

空を斜めに滑空する天喜の白い鳥の背から、ジャンはいぶかしげに目を瞬かせた。

“樹林”を追って、僕が、グラン・パープルから離れているうちに何かあったのか……。

心に芽生えた不安な気持ち、灰色の靄となって胸いっぱい広がってゆく。

そういえば……どうしただろう？

僕が水晶の粉に変えてしまった西の尖塔。尖塔の最上階がなくなっているだけでも、とんでもない話なのに……
ジャンは少しだけ笑うと、西の方向に目をやった。

それが、僕の仕業だって分かったら、また、ゴットフリーの機嫌が悪くなるぞ。

だが、西の尖塔には深く白い靄がかかり、その姿を見ることがで

きなかった。

ふと、下に視線を移した時、

「……！」

東の海の浅瀬を駆けてゆく黒馬。そして、その背に揺られる黒装束の男。

「待てっ、そんな所で何をしてるっ?！」

ジャンは驚いた様子で、白い鳥を急降下させた。

具合が悪くて、サライ村の宿営地にいるはずじゃなかったのか?!

黒馬が向かう方向に黒い靄がかかっている。黒い靄……? いいや、違うぞ。

あれは闇の戦士だ!

「ゴットフリーー!!」

声を荒げて呼びかけても、振り向こうともしない。

まさか、また、あいつ……

「待てと言ってるのが、聞こえないのかっ!!」

多少、手荒でもそんな事にかまってはられない。ジャンは黒馬がいる手前の海に向かって素早く手を差し出した。

海面の波を碎きながら、蒼の走光が駆け抜けてゆく!

突然、立ち上がった水壁。それに驚いて後ろ足で仰け反った黒馬をなだめながら、ゴットフリーーはかすかに笑った。

背に強く感じる、大地の気配。

そのまま、振り返りもせず言う。

「ジャン、何処に行っていた？」

明けることのない夜を見たかのような、低く陰鬱な声音。

「僕の事より、ゴットフリー、お前こそ何処に行くつもりだ!？」

「何処にも……ただ、時がたつのを待っているだけだ」

東の海を凍りつかせてしまいそうな研ぎ澄まされた空気が、ゴットフリーの周りを取り巻いている。それが、見えない壁となって陽の光を退け、終結する闇を彼の元に呼び込もうとしている。

“……闇の王?!”

その言葉を思い浮かべた時、ジャンの背中にぞくりと冷たいモノが通り過ぎていった。

いや……黒馬島でゴットフリーが“闇の王”になりかけた時には、僕の声など一言だって届きはしなかった。それでも、今のこいつはいつもと違う。明らかに心は闇を向いている。

おもむろに白い鳥の周りに湧き上がってきた闇の戦士を、ジャンは鋭い瞳で睨みつけた。

あからさまな攻撃態勢。こいつら僕と一戦やろうって腹か？

「時がたつのを待っている？へえ、待っているだけのわりには、やる気満々じゃないか。ゴットフリー、いつの間にこいつらを手なずけたんだ？“闇の戦士”は夜叉王の配下だと思っていたが……それとも、お前まで、おかしな輩に操られているのか」

ようやく後ろを振り向いたゴットフリーに合わせるかのように、ジャンは天喜の白い鳥から飛び降り、黒馬の近くまで駆け寄っていた。

ところが、刺すような灰色の瞳が向けられた時、どうしても前には進めなくなってしまった。呪縛の魔法にかけられたように、足が止まってしまふ。苛立だしげにゴットフリーを見据えて、ジャンは言った。

「僕の言う事をよく聞けよ。お前が迷宮で見つけたレインボーヘブンの欠片は、“海の鬼灯”が変化した偽者だ！これは確かな話だぞ。“樹林”を追って僕が、本人から直接聞いたんだからな」

だが、
「レインボーヘブンの欠片“樹林”？そんな物には、もう興味がなくなつた」

ゴットフリーは冷めた表情を崩そうとはしなかった。

「興味がなくなつたって？馬鹿な事を言うな！よく考えてみる。“海の鬼灯”は何故、そんな罠を仕掛けてきた？ゴットフリー、黒馬島でも同じ罠にはめられかけたお前になら、わかるだろう？奴らの望みは、この世を破滅させる事だ。だから……奴らには、闇の扉をこちらに開く、“闇の王”が必要なんだ」

「破滅……崩壊。おあつらえ向きの台詞ではないか。この世が壊れてしまつても、俺は一向に構いはしない。この世は腐りきっている。壊してしまえ、壊さぬ事には浄化もできぬ。壊さぬ事には、今の俺の気持ちは治まらない！」

その声に呼応するかのように、新たな“闇の戦士”がジャンの回りに沸きあがってきた。徐々に人の形を成してくる“戦士”たちの姿に、ジャンは目をみはった。

“闇の戦士”が人の形をとるなんて……そんな事があるのか？！こいつら、ただの闇の塊だと思っていたのに。

漆黒の闇の鎧を身にまとい、必殺の呪をこもらせた長槍を携える……七億の夜叉たち。

だが、その兜の下には目もなく、鼻もない。およそ、顔と呼べる物は存在しなかった。鎧の下にも体はなかった。そして、その中から聞こえてくる、ほら貝を吹いたような、ぼうと響く彼らの声は、虚無の中の住民が持つ危なげな殺意に満ち溢れていた。

闇……鎧兜の下にあるのは、無限の空洞。人の型をとってはいても、やはりこいつらは闇でしかない……。

ぐると周りを取り巻かれ、無数に湧き上がってくる闇の戦士の攻撃に神経を尖らせながらも、ジャンのとび色の瞳はゴットフリーから目を離そうとはしなかった。

見え隠れする荒涼とした心

「ゴットフリー、……何があった？」

無表情なゴットフリーの声音。

「俺が殺した」

「……」

BW……？

「……礼拝堂で首を吊って」

「やめろ！その先はもう言うな！」

突然、怒濤の波となって苦々しい思いが湧き上がり、ジャンは叫ぶような声でゴットフリーを制止した。

だから、BWはあんなに哀しい歌を歌っていたのか。だから、お

前は心を闇に向けてしまったのか。

「BWはきつと“海の鬼灯”の悪意に飲み込まれないように……」
だが、ジャンがその言葉を最後まで言い切らないうちに、ぐるりと回りを取り巻いた闇の戦士たちが、長槍の切っ先を一斉に、彼に向けてきた。

「ゴットフリー！闇に心を捕らわれるな！」

ジャンの体からほとぼしる蒼の光。その光に触れた瞬間、闇の鎧は悉くかき消され、もとの闇に戻ってゆく。だが、ジャンを取り巻く闇の戦士の輪の内側、それが消えたとたん、輪の外側にまた、新たな戦士が浮かび上がってくる。永遠に続く水の波紋のように、彼らは止めどなく消滅と再生を繰り返すのだ。

闇の戦士……夜叉王、伐折羅の制御をはずれた七億のごろつきども！だが、こいつら……

「相変わらず甘い奴」

黒馬の背から、見下したように自分を見つめているゴットフリーに、ジャンは鋭い視線を送った。

「たとえば七億の夜叉であろうとも、大地の力をもってすれば、一挙に消し去る事もできるはず。それなのに、お前はいつも手加減する。それが、事を悪くしている事にも気づきもしないで！ガルフ島で、お前と俺が戦ったあの時も、何故、一思いに俺を殺してしまわなかった？そのおかげで、俺はアイアリスの思惑に乗せられ、レインボーヘブンを探すはめになった。嘘だらけの伝説に嫌気がさし、この世を破壊したくなった。心を闇に向けるな、闇の王になるなといいながら、そのレールを引いているのは、お前、レインボーヘブンの欠片たち、そして、女神アイアリスではないのか！」

滅ぼされてしまった方が幸せな時もある……それをお前も知るべ

きなんだ。

冷たい灰色の眼光が、その言葉とともに胸の奥を突き刺してくる。それでも、ジャンは、ゴットフリーから決して視線を離そうとはしなかった。

「だから、お前は闇の王になるのか？」

僕にはわからない。ゴットフリー、今のお前は

“闇の王”……なのか？

「駄目だ！どんな理由をつけようとも、お前はレインボーヘブンの王。闇に心が届いても、それを闇に奪われる事などありはしない！」

ジャンの体から蒼の閃光が弾け飛んだ。

その瞬間、“闇の戦士”も、かき消されるように消滅した。深い闇に閉ざされた東の海岸に突然明るく差し込んできた太陽の光に、黒馬は驚いて嘶き、両の前足を高く上にふりかざした。

薄れてゆく黒馬の姿が消える前に、ゴットフリーはその背から飛び降り、東の海の浅瀬の中でジャンと対峙した。

「それでも、まだ、手ぬるい。まだ、足りない……」

口角をかすかにあげて、皮肉な笑みを浮かべると、ゴットフリーは右手を前に差し出した。彼の髪が太陽の光をあびて紅に色を変えた時、新たな闇が再び海上に渦を巻きだした。すると、

ゴットフリーの右手の中が、暗黒色に輝きだしたのだ。

闇馬刀

目前に、その漆黒の剣を真一文字に構え、灰色の瞳でぴたりと標的に視線をあわせる。その背後には彼を援護するかのように再び、

浮かび上がってきた人型の“闇の戦士”が陣形を作る。

「手を出すな。こいつ……ジャンにはガルフ島での借りがある。俺がそれをきっちり返すまで、お前たちは一歩たりともその場を動くな」

ゴットフリーの命令に、ぴたりと動きを止めてしまった“闇の戦士”

その様にジャンは愕然と見入った。

夜叉王―伐折羅が制御できなかった“闇の戦士”を今のゴットフリーは完全に服従させている。そんな事ができる者はこの世に一人……

闇の王

Chapter 55

「ゴットフリー！馬鹿なまねはやめろっ！！」

その台詞が終わらぬうちに、間髪を容れず斬りこんできたゴットフリーの剣。危うく胸を貫かれそうになりながら、どうにか切っ先を交わしてはみたが、ジャンは以前、戦った時とは圧倒的に違う力とスピードに、思わずひやりと汗をかいた。

こいつは……手ごわい。前のように刃を素手で止めるなんてできそうもない。いや、あの闇馬刀で、闇の扉を開かれでもしたら、僕の力などゴットフリーには到底、及びもつかないぞ。

闇馬刀を封じなければ……今の僕に勝機はない！

「ジャン、迷うな！そんなにこの世を救いたいのなら、今、ここで俺を消し去るがいい！！」

それでも、迷わずにはいられなかった。その一瞬の隙を貫くように、ゴットフリーは闇馬刀をジャンの胸に突き立ててきた。

「あっ……！！」

激しい痛みが体を貫いてゆく。闇馬刀の切っ先が体を突き抜けてしまった時、ジャンは、驚いたようにゴットフリーの顔を見据えた。そして、

凄まじいまでの咆哮の声をあげた。

うおおおおおっ！！

大地が震え、蒼の風が爆風さながらに舞い上がる。その時、ジャ

ンの胸に闇馬刀を突き立てたまま、ゴットフリーはかすかに笑った。髪が逆立ち、とび色の瞳が黄金の光を帯びてゆく。

激しく光を放つ瞳でゴットフリーを睨めつけてから、ジャンはゆつくりとその手を闇馬刀に伸ばしていった。そして、漆黒の刃を力をこめて握り締めた。

蒼の光に覆われたジャンの全身から零れ落ちた光の粒が、その手を伝わり闇馬刀の中を駆け抜けてゆく。

すると……

「ジャン、思い出さないか。あの時、ガルフ島でもお前は俺の黒剣を白銀の剣に変えたんだったな」

ジャンの方から徐々に白銀に色を変えてゆく闇馬刀の刀身を見据え、ゴットフリーは胸がすくような笑顔を浮かべた。

「だが、何度もそんな真似ができると思うなよ。今の俺は、この闇馬刀をお前の胸に突き刺したまま、闇の扉を開ける事だってできるんだぞ」

シャドー・クロス “闇の十字”。それをお前の体を引き裂きながら、空に描けばいいだけの話。

「ゴ、ゴットフリー、お前……」

体の奥から湧き上がる痛みが、怒りと混ざり合って、ジャンの体は更に強く蒼い光を放ちだした。

闇馬刀を封印せねば、僕はゴットフリーに勝つ事はできない！

見交わすゴットフリーの灰色の瞳とジャンの黄金の瞳が、激しく火花を散らした。闇馬刀の刀身は、柄の近くまでが白銀にかわりつつあった。だが、その時

「……止めた」

突然、ジャンが握り締めていた闇馬刀から手を引いてしまったの

だ。

しゅんと消えてしまった蒼の閃光。再び元の漆黒にもどってゆく闇馬刀。

ゴットフリーは虚をつかれたように、灰色の瞳をジャンに向けた。

「何のつもりだ？」

「ゴットフリー、もう、お前の好きにさせてやる。だから、この剣を僕の胸から抜いてくれ」

「……早々と負けを宣言するわけか」

ちっと舌を鳴らしてから、ゴットフリーはジャンの胸を貫いている闇馬力を力まかせに引き抜いた。

「痛っ！！」

胸を押さえて、しばらくその場にうずくまる。

「畜生……情け容赦もないんだな。せめて、もっとゆっくりと引き抜けよ。いくら僕だって、心臓が止まればこの体の中にはいられないんだから」

だが、剣を抜いたとたんに消えてゆく、ジャンの胸の傷に目をやり、ゴットフリーは皮肉な笑みを浮かべた。

胸を剣で貫ぬいたぐらいで、ジャンを殺せるとは思いもしないが、この凄まじいまで攻撃力と癒しの力……こいつを倒せる奴など、この世にいないのではないか。

「ゴットフリー」

彼の思考が終わらぬうちに、ジャンが言った。

「お前が滅ぼしたいというなら、もう、僕は邪魔はしない。僕はお前に逆らえない」

「……レインボーヘブンの欠片“大地”とは、思えない台詞を吐いたな。ジャン、お前はそれでいいのか」

「ああ……構わない」

少し沈黙した後、

そうかと、ゴットフリーは、つまらなそうに闇馬刀の柄から手を放した。

東の海岸の浅瀬の中に消えてしまったその刀身。すると、それと入れ替わるように、波の間に黒い馬が姿を現した。

二人の周りに浮かび上がっていた闇の戦士たちが、ただの闇に還ってゆく様を眺めながら、ジャンが言った。

「ゴットフリー、お前は言ってたな。時がたつのを待っているって……それは、何時の事なんだ？」

黒馬の背にまたがりながら、ゴットフリーはジャンを冷たく見据えた。

「建国記念祭。王女との約束の日だ。その日、俺は王妃を斬り、そしてグランパス王国を崩壊させる」

「明日の建国記念祭か……皮肉な話だな。その日を王女が選ぶなんて……」

不気味なくらい成りを潜めてしまった“海の鬼灯”。きっと、奴らもその日を待っているんだろう。“闇の王”がこの国に降臨する、その時を見据えて。

ジャンは、闇の向こうに去ってゆこうとするゴットフリーに言った。

「お前は滅ぼすがいい。僕が守る！それでいいんだろう?!」

ゴットフリー、それが、お前の真意なのだろう?!

黒馬の背にまたがり、ゴットフリーは振り返りもせず、問いかけてきた。

「……ジャン、どうして戦いから手をひいた？何故、闇馬刀を封印しなかった？」

ジャンは迷いもなく、こう答えた。

「僕は、お前を信じているから！」

「……殊勝な話だな。甘すぎて、かえって末恐ろしくなる」

吐き捨てるように言ってから、ゴットフリーは黒馬とともに、闇の戦士が待ち受ける闇の中へ消えていった。

再び、午後の日差しが戻ってきた海岸の浅瀬に立ち、ジャンは放心したようにその様を見つめ続けていた。

だって、ゴットフリー、お前の闇馬刀は、僕の心臓を貫きはしなかった。微妙にそれを避けたのは、やり損ねたわけではないのだろう？

「レインボーヘブンの王。それこそが、お前の本性。その事を疑った事など、僕は一度だってありはしない」

だから、必ずお前は帰ってくる。

僕らの元へ、光の向かう場所へ！

僕はそれを信じているんだ。

＊ ＊

暮れなずんでいたサライ村の宿営地の空が、ようやく薄暗くなりかけた頃、

「ゴットフリーに会ったって！何処で？！」

タルクは白い鳥に乗って宿営地に戻ってきたジャンの開口一番の台詞に、夕食にとフレアおばさんが作ってくれたピカタの具を口か

らぼろりとこぼしてしまった。

「東の海岸で……でも、もしかしたら、もうあれは、元のあいつじゃないかもしれない……」

その場に集まっていた、王女リリー、ラピス、ラガーは一樣に腑に落ちない表情をして、とび色の瞳の少年を見やった。

「闇の王か……？ゴットフリーは闇の王になってしまったのか」
タルクの声は多少、上ずり、あせりの色を帯びている。

「わからない。黒馬島の時とは違って、ゴットフリーと意志を通わす事はできたんだが……闇の王……今のあいつは、確かにそうなのかもしれない。闇を引き連れ、奴は来る。建国記念祭の日に、グランパス王国を滅ぼすために」
おそろしく複雑な沈黙の後に、最初に口を開いたのはラガーだった。

「クーデターに興味を示さなかったゴットフリーが、グランパス王国を壊したがる理由がわからない。それに、闇の王って何の事だ？前から胡散臭くは思っていたが、お前ら、今更隠し事をしたって無駄だろ。もう全部話してしまえよ」

「それに、あの人が私たちの城の迷宮で“レインボーヘブンの欠片”を探していた理由も！」

たたみかけるように声をあげたりリーの台詞に、ジャンはぎょっと目を見開く。

私たちの城？さっきから、どこかで見た娘がいると思っていたが……

「お前っ、スウォード・リリーか？！グランパス王国のお姫さんが、クーデター軍の中で一緒に晩ご飯、食べてるって、どういう事だよっ？！」

だが、思いつきり不審げなジャンを“その話はまた後で”とタル

クが制止した。

「わかった。この際、すべてを話してしまおう。ここまでこじれてしまった事態が、この国……いや、この世を目茶目茶に壊してしてしまう……そんな悲劇を避けるためにも」

＊ ＊

「レインボーヘブンの伝説を知っているか？」
と、タルクは問うた。

「それは、伝説よ。500年前に海に沈んだ至福の島“レインボーヘブン”は、その七つの欠片と住民たちが集まれば、再び蘇るとい
う」

リリーの答えに、ラガーが補足した。

「そう。そして、俺たち、サライ村の住民は、そのレインボーヘブンの子孫なんだ。そして、レインボーヘブンの欠片たちは……」

「その事なら、僕が話すよ。レインボーヘブンの7つの欠片の一つ、“大地”であるこの僕が」

ラガーを遮って、口を開いたのはジャンだった。

「僕ら、欠片と呼ばれる者たちは、レインボーヘブンが海に沈んだ後、長い時を眠り続けていた。そして、500年がたった今、再び、レインボーヘブンを蘇らせるために、ゴットフリーと僕の元に集結を始めたんだ。だが、僕が把握している“欠片”は今のところは5つまでだ。残りの2つはまだ分からない」

その5つのうち、まずは、1つ目の僕。

ジャン・アスラン、レインボーヘブンの欠片“大地”

2、BW“海”

3、霧花“夜風”

4、天喜の白い鳥、伐折羅の黒い鳥、2羽で1つのレインボーヘ

ブンの欠片“空”

5、黒馬島のクロ“黒馬島”

ジャンがここまで話した時、タルクが驚いたように声をあげた。

「クロ？それって、ゴットフリーが黒馬島で伐折羅に刺された時に現れたあの少年か?!」

確か、ジャンは、クロはジャンの友達で、黒馬島が少年に具現化した姿だと言っていた。

「そう。あの時、ゴットフリーとクロちゃんの間どんな話があったのかは、僕にもわからない。けれども、あんな風に、意志をもつて姿を変え、しかもゴットフリーに会いたがる者は、“レインボーヘブンの欠片”以外には考えられない」

「でも、“黒馬島”が“レインボーヘブン”の欠片だなんて、おかしいんじゃないのか？二つはそれぞれ別の島なんだろう？」

「……だから、その答えはきつと、ゴットフリーが知っている。そして、それは僕たちには話したくない事だったのかもしれない」

Chapter 56

あいつは、色んな事を一人で抱え込むタイプだからなあ……そういや、ここに来てから、あいつはろくに飯も食ってないんじゃないのか。

テーブルに残された夕食の残りに目を向け、タルクはむっつりと口をつぐんでしまった。

その時、二人の会話にリリーが割って入ってきた。

「ちよっと、待って。ジャン？　っていったわね。あなたが“レインボーヘブンの欠片”だなんて、とても突拍子のない話だけど……エターナル城の迷宮で眠っていたという、もう1つの“レインボーヘブンの欠片”の方はどうなったのよ。ゴットフリーはあの迷宮にそれを見つげるために忍び込んだんでしょ？！」

「“樹林”の事か……」

苦々しく眉をひそめて、ジャンは言った。

「レインボーヘブンの欠片“樹林”……あれは、偽者だ。迷宮の果てで水晶の棺に眠っていたのは、この城で死んだ誰か、ただの人間の屍だった」

「えっ？」

「偽“樹林”を追って、僕が本人から直接聞いたんだから、これは確かな話だよ」

城で死んだ、ただの人間の屍……でも、それって誰の？

不安と疑問がとめどなく胸に広がり、リリーの心は大きく揺らいだ。だが、屍の事よりも“ゴットフリーの事”に気をとられていたジャンには、リリーの気持ちは伝わってはこなかった。ジャンは言

う。

「女神アイアリスに分けられたレインボーヘブンの七つの欠片。その一つが水晶の棺に納められて、エターナル城の地下で眠っている”それは、ゴットフリーを闇に誘うために紅の邪気によって仕掛けられた偽りの伝説だったんだ”

「何だって?! 紅の邪気? まさか、この島まで、“海の鬼灯”に侵されちゃってたって言うのか! ?」

「タルク……知らずしらずのうちに、あの邪気の“紅の罟”に僕たちはまた、入り込んでしまったようだよ」

ぽつりとそう囁いたジャンの声音に、何故だか苛立つ気持ちを止められない。ラピスは堪らず声を荒げた。

「ジャン、欠片の話はもういいから、ゴットフリーの事を話せよ。

あいつはレインボーヘブンの欠片とは関係ないんだろ? ならば、何故、欠片たちは奴の元へ集結する? そして、闇の王とは何だ?! “海の鬼灯”って一体、何なんだ! ?」

リリーとラガーは、ラピスの声に惹きつけられ、一緒にジャンの方に目を向けた。

「ゴットフリー……あいつは500年前、レインボーヘブンを襲った盗賊たちの長の末裔だ」

「えっ?」

「そして、レインボーヘブンの守護神アイアリスが選んだ。蘇る“レインボーヘブンの王”なんだ」

「一体、どういう事なんだ? 何でレインボーヘブンを襲った盗賊の子孫を守護神のアイアリスが王に選ぶんだ?」

訝しげなラガーにジャンは、真っ直ぐな視線を送って答えた。

「女神アイアリスは、レインボーヘブンを襲った盗賊たちを憎む反面、その団結力と活力を羨ましく思っていた。もし、レインボーヘブンにあの力があつたなら、どのような敵にも負ける事はないだろ

うと……だから、残した。彼らの中から一房だけの人間を……その子孫を。やがて、蘇るレインボーヘブンを総べる者として。それが、ゴットフリーだ」

けれどもと、ジャンは声を落した。

「残りの盗賊たちと家族たちには、アイアリスは手を差し伸べなかった。断末魔の苦しみを味わいながら、彼らは海に沈んだんだ。この世のすべてを呪いながら、……その悔恨の思いが、あの紅の灯“海の鬼灯”になった。血筋からいえば、ゴットフリーは“海の鬼灯”側の人間なんだよ。それだから、奴らはゴットフリーを欲しがるんだ。至福の島、“レインボーヘブンの王”としてではなく、この世を崩壊させる“闇の王”として」

しばらく考え込むように、沈黙していたラガーがおもむろに口を開いた。

「なるほど……女神アイアリスに選ばれた“レインボーヘブンの王”そして、“海の鬼灯”が求める“闇の王”か。至福の島の伝説には、そんな裏側があったのか。で、今の警護隊長は、あの“紅の邪気”の罠にまんまとはまって、闇の王になっちまってってわけか？」

「それは……少し違う……」

「ジャン？」

急に口を閉ざし、うつむいてしまったジャンの顔をタルクは、訝しげに覗き込む。

「BWが……」

「BW？」

「“海の鬼灯”の罠に捕らえられたのではなく、あれはゴットフリー自身の選択だったんだ……」

消え入りそうな声でジャンは言った。

心が闇を向いてしまったから……BWが逝ってしまった事に耐え

切れなくて……。

「何だって！？BWが……逝った？奴が死んだのか？そんな話は知らないぞ！」

「……首を吊ったんだ。エターナル城の礼拝堂で」

“BW、消えてしまえ！この世からお前は”

熱に浮かされ、ゴットフリーがBWに言ってしまった言葉が、何度も頭に浮かび上がり、ラピスは耳をふさぎたくなった。

何という過ちを犯してしまったんだ。あの言葉を言ってしまったゴットフリーも、そして、自ら命を絶ってしまったBWも！

何ともいえない重い空気が、宿営地に広がっていった。その中で、タルクは憮然と声を荒げた。

「そんな馬鹿な事があるもんか！BWは白蛇に変化した王妃を追って礼拝堂へ行ったんだ。白蛇に殺られたってんならまだしも、首を吊る理由なんてないだろうっ！」

「白蛇？なるほど、それが王妃の正体か。そして、BWは白蛇と戦ったんだな。彼の死は……命を落とした……というのとは、少し違うかもしれない。BWは、人間としての姿を捨てたんだよ。奴はガルフ島で、“海の鬼灯”に翻弄されて島を飲み込んでしまった事を悔いていた。そして、レインボーヘブンが海に沈んだ時に彼が飲み込んだ多くの命の幻影にいつも、心を痛めていた。“海の鬼灯”はそんな心の隙をついてくる。きっと、礼拝堂でも同じような事があったんじゃないのか。BWは、ガルフ島での惨劇を再び、このグラン・パールだけでは繰り返したくなかった。だから、邪心が心に満ちないうちに自分の体を捨てたんだ」

「なら、またBWは蘇る事ができるのか？」

ラピスの問いに、ジャンは小さく首を横に振った。

「彼の意味は、死んではない。BWは今でも、レインボーヘブンに戻る事を願っていると思う。けれども、人間の姿に還る事は2度とないだろう」

胸に詰まった苦々しい思い。それを取り除こうとするように、ふうとラガーはタバコの煙を吐き出した。

「ひどいもんだな、何が至福の島の伝説だ！まあ、冷静に考えてみれば万人が幸せになれる場所なんて、あると思う方が浅はかなんだ。光ある所には必ず影がある。光の場所にいれるのは、よほど運がいいって奴なのかもしれねえな」

「そうとも言えないよ。伐折羅のように好んで影に向かう者だっているんだ。“光ある場所には影がある”その調和が保たれてこそ、本当の至福の島が生まれるんだ。ゴットフリーは光と闇の狭間を架ける者、二つの世界を同時に統べる力を持つ“アイアリス”が選んだ唯一の王だ。それだから、僕たちは光と闇、どちらの世界にいるかは関係なしにゴットフリーに魅かれてしまう。けれども、僕たちはあまりにも彼一人に期待を負わせすぎた。あいつの心にできた傷を癒してやる事もしないで」

「心の傷ねえ……ゴットフリーてそんなに柔か？あの警護隊長の鋼の心臓は、雷に打たれたってびくともしねえんじゃないのか」

冗談めかして言ったものの、タルクにぎろりと睨めつけられて、ラガーは慌てて話題を切り替えた。まわりを軽く見渡して言う。

「全部を信じたわけではないが、ま、だいたい事は解った。他に何かいい忘れている事がある奴はいねえか？クーデターの決行は明日だ。警護隊長が“闇の王”になって来るのかどうかは知らないが、

俺たちの計画に変更はないからな」

「闇の戦士をひきつれてゴットフリーは必ず来る。ラガー、だから奴が来る前になるべく素早く王を確保し、グランパス王国を制圧して！そして、住民たちを1ヶ所に集めるんだ」

請うようなジャンの言葉にリリーは眉をしかめる。

「住民たちを1ヶ所に集める？一体、何をするつもり？」

「ゴットフリーが壊すなら、僕が守る！あいつがグランパス王国の崩壊を望むなら、僕はそうさせてやる。ただし、BWのような後悔の海の中にあいつを沈めるような事だけはさせない」

「だから、罪のない住民たちを集めて……ジャン、お前が“闇の軍”から彼らを守ろうっていうのか。でも、白蛇や“海の鬼灯”の事を忘れてはいないか？奴らもきつと、この機に乗じてグラン・パールの攻めに来る。へたをしたら、お前……、“白蛇”と“海の鬼灯”そして、“闇の戦士”その全てを敵にまわす事になるかもしれないんだぞ」

タルクの問いに、ジャンはにこりと笑顔を浮かべた。

「それは、ありえない事だよ。少なくとも“闇の戦士”は決して、僕らに刃を向いたりはしない。ゴットフリーは僕が住民を守るのを邪魔したりはしない」

「ゴットフリーがそう言ったのか？」

その答えをジャンは、躊躇なく言っただけだ。

「奴は何も言っていない。けれども、それは確かな事なんだ」

壊してしまえ。壊さぬ事には、今の俺の気持ちは治まらない。

闇に包まれたゴットフリーの心の中で、唯一、僕に伝わってきた言葉。

“壊すのは俺……けれども、お前は守りきれ”

「僕は何があらうとも、グラン・パールを守る！みんなの希望、そしてあいつが戻ってくる光の場所。それが消えてしまわないように」

有無をいわさぬジャンの言い様に、反論する気にもなれず、ラガーは、多少皮肉まじりにこう言った。

「クーデターを素早く終えて、住民たちを1ヶ所に集めるんだったな。“闇の軍”とか“海の鬼灯”なんて化け物は、俺たちじゃ、もう手に負えねえ。クーデターの後の俺たちの運命は、ジャン、全部お前に託したぞ。だから、グラン・パールを守りきると言った、その言葉をお前は決して違えるな！」

そして、ラガーは鋭くジャンを見据えてから、くるりと背を向け他のメンバーが待つテントの方へ駆けていった。

Chapter 57 建国記念祭

ラガーが去った後、ラピスは、戸惑った表情で王女リリーに目を向けた。

国民のヒロイン、“スウォード・リリー”をグランパス王国をぶっ壊すクーデター軍に率いれるなんて、本当にやっていいのか。と、ラピスはまだ躊躇していた。

「あまり長く留守にすると、おかしく思われる。とりあえず、俺が城の近くまで送ってゆくから王女は城に帰れよ」

行こうと、ラピスに手招きされたが、

「私はもう飽きちゃうほど、クーデターでの役割をラガーから聞かされたけど、あなたたちは、彼と一緒に行かなくて良かったの？まだ色々打ち合わせがあるんでしょ」

リリーは訝しげに眉をしかめ、ラピスの後についてゆくののためらった。

「タルクとジャンはあんたが仲間に加わったおかげで、ラガーたちとは別行動になったし、俺とココはただの遊軍だから、打ち合わせするほどの用事はないからね」

「……でも、送ってゆくたって、あなたじゃ……」

盲目の医者に護衛についてもらったって、かえって足手まといになるだけだわ。

そんな王女に、

「お姫さん、ラピスを侮っちゃいけないぜ。ラガーがラピスを遊軍に据えているにはそれ相当の理由があるんだ」

東の空に輝き出した一番星に目を向け、タルクは笑う。

「それに、暗闇の中でこいつほど、役にたつ護衛はいないぞ」

その台詞に涼しげに頷き、ラピスが弓矢を背にしょった時

「ちよっと、待って。王女がクーデター軍にいる理由！それをまだ、僕は聞いていない！」

ジャンがまくしてるように言った。

「そういえば、俺も聞いてなかった」

タルクの言葉に、ラピスとリリーは顔を見合わせ、そういえば、まだ話してなかったと笑った。

結局、ジャン、タルク、ラピスの3人の護衛に守られて、王女が城へ向かう道すがら、ラピスはリリーがクーデター軍に入った経緯をジャンとタルクに話して聞かせた。

「なるほどな。王妃によって狂わされたグランパス王国を王女はもう1度、立て直したいってわけか」とタルク。

「でも、壊してしまったでもいいのか？自分の国なのに」

「だって、あなたが守ってくれるんでしょ？」

さらりと言ったのけたリリーに、もちろん、守るつもりだがと……ジャンは小さく笑う。

エターナル城の方向に、灰色の雲が流れてゆく。月も星も光ある物をすべて拒むかのように、集結してゆく厚い雲。

それでも、誰一人傷つけずにといいわけにはゆかない。きっと多くの血が流れる、そして、町や家や……城が壊れる。

ジャンの胸に込み上げてきた息が詰まるような思いを感じてか、ラピスは軽いため息をもらした。その時突然、

「そうだ……まだ、話していない事があった」

こんな大切な事を、言い忘れていたなんてと、ラピスは迂闊な自分に呆れかえった顔をした。

「ミッシェの事だ！彼女は……女神アイアリスの化身だったんだ。」

だが、今のアイアリスは“海の鬼灯”に心を狂わせた邪神になりさがっていると、ゴットフリーは言っていた」

「何い！ミツシェがアイアリスの化身？……何でまた、そんなややこしい事になってんだ。もう、何がきても驚かないと思っていたが、これはさすがに……」

そういえば、急に子供から大人になってたり……しかも、あの美貌……女神か。今考えてみれば、わからない事もないんだが……。

無理無理に自分を納得させようとしているタルクを助けるように、ジャンが言った。

「あいつも“海の鬼灯”に翻弄された一人だよ。僕もミツシェがアイアリスの化身である事には、薄々は気付いていたんだが、あの紅の灯は女神の心までも凌駕する。」

多分、アイアリスはミツシェに姿を変えて僕らを見守ってくれるつもりだったのだろうが、レインボーヘブンの海に沈めた人々への後悔の念が強すぎて、どこかで道を誤ってしまったんだよ」

「そう。俺がゴットフリーから聞いた“もの凄くかいつまんだ話”はこうだ。奴は王宮の温泉場でミツシェと戦った。その時、ミツシェはアイアリスの姿に戻りこう言った。“私は至福の島を手に入れる。ゴットフリーと自分、二人きりの至福の島を”」

ラピスの話の後、リリーは少し頬を膨らませたまま口を噤んでしまった。

あの銀髪娘が女神アイアリスの化身？それに、ゴットフリーと二人だけの至福の島？

なぜだか、妙にむかつて気分が悪くて仕方がない。

そんなリリーの様子に気づく事なくラピスは言葉を続けた。

「とにかく、温泉場から闇の戦士に追われて消えたという、アイアリスの動きにも、注意を払っておいた方がいい」

「“白蛇”と“海の鬼灯”にゴットフリーに率いられた“闇の戦士”そして、“邪神アイアリス”か？また、一人、敵が増えやがった。こうなったら、もう何百人でもかかってきやがれ！俺はもう何にも怖くないぞ」

半ばヤケくそ気味なタルクを笑い、

「そう力まなくても、明日になれば敵も味方もてんこ盛りの戦いになるさ。こんななんだったら、夕食の珈琲、もっとゆっくり飲んどきゃ良かったな。まあ、グラン・パールの行く末は神のみぞ知る……と言いたいところだが」

ラピスとリリーをきりと見据えて、ジャンは言った。

「もう、女神は力を貸してはくれないぞ。だから、僕たちは何があっても、自分たちの力で、この島を守りぬくんのだ」

＊ ＊

建国記念祭

建国記念祭当日の空は、胸がすくほどの澄み切った蒼天だった。

天上からエターナル城を祝福するように眩しく降り注いでくる朝日は、一片の汚れもないほど清らかだった。それに臆する事もなく魔毒の城は相も変わらず白亜に輝いている。

「クーデターなんかやめて、ハイキングにでも行けよって天気だな」薄暗いトンネルから顔を出したラガーは、皮肉な笑みを浮かべて、エターナル城の主塔にあるバルコニーに目をやった。

あのバルコニーで王と王妃を捕らえ、この国を鎮圧する……本当にそんな事ができるんだろうか。

失敗すれば、今日が、俺たちにとって最後の日になるかも知れねえ。

だが、脳裏に浮かんだその考えをすぐに打ち消し、ラガーは彼の後についてきたトンネルの中の仲間たちに、こっちだと手招きした。結局、最初に予定していた2本のトンネルのうちの1本は完成できず、あきらめざるを得なくなった。ラガーが率いるクーデター軍は、残りの1本のトンネルを通り、予め王女リリーの指示で近衛兵の警備を手薄にしておいた温泉場の方から王宮に侵入するルートを選んだ。

クーデター軍の面々は、全員、近衛兵の制服を身につけている。相当に緊張している顔つき以外は、部外者と疑われる箇所は見つからない。この制服の調達も王女がすべて整えたのだ。

“クリーニングに出された近衛兵の制服をちよつと、失敬してきただけよ”

リリーは事も無げに言つてのけたが、昨晚から今朝の短時間にすべての準備を終えてしまえる手際の良さには、切れ者で名を馳せているラガーでさえも舌をまいてしまうほどだった。

「王の建国記念祭の演説まであと1時間ほどだ。俺たちはこれから王宮に入って近衛兵たちに紛れ込み、別行動をしているタルクたちからの合図を待つ。配置の位置は打ち合わせ通り、変更はなし！」
ラガーは、張り詰めたクーデター軍の空気をほぐすように笑って言った。

「まずは深呼吸！大丈夫、俺の計画が狂った事など、今だかつてなかったのだから」

了解と小声で囁きながら、クーデター軍はそれぞれの位置に散らばっていった。仲間の背中を見送りながら、ラガーは晴天にもかかわらず白い靄に包まれたままの北の尖塔に目をやった。

人と人との戦いは、俺が請け負う。だが、ジャンとタルク、人外境のごたごたは、もうお前たちに任せたぞ！

そして、ラガー自身も小型爆弾を詰め込んだ袋を小脇にかかえ、エターナル城の中へ侵入していった。

Chapter 58

城門の外には、王の建国記念祭の演説を聞こうと、早朝から国民たちが長い列を作っていた。ほぼ1ヶ月を費やして行われた建国記念祭の数々のイベントのクライマックスを見逃すまいと、物見胡散な人々が島のあちろちろからエターナル城を目指して、ぞくぞくと集まってきているのだ。

「へえっ、まだ、城門も開いてないのに人がいっぱい集まってきてる。あんなアル中の王とバケ物の王妃を見たいなんて、グラン・パールにはずいぶん馬鹿が多いんだね」

エターナル城の上空を旋回する白い翼の上で、悪態をつきまくるココにラピスは思わず苦笑する。

「彼らの目当てのほとんどはスウォード・リリーじゃないのか。王女はここでは、アイドル的な存在なものな」

ココとラピスにラガーが与えた指示は、“監視と連絡”あとは、“好きにしろ”。それならば、上空からが一番やり易かろうと、二人は“天喜の白い鳥”の背に乗り、王族の居館へと続く回廊の屋根の上まで密かに飛んできたのだ。

居館の隣にある主塔の中ほどに王が演説を行うバルコニーが見えた。ココたちが降り立った回廊の屋根からは、王宮武芸大会が行われた中庭も見渡すことができたし、城壁の外に並ぶ人々の様子も覗く事ができた。

敵兵が侵入してきた時に、矢を放つための矢狭間の影に身を隠してから、

「ここが城門の外と王宮の中が同時に見渡せる一等席だってラガーは言ってたが、見晴らしはどんなもんだ？」

そう言つて、ラピスは、小さく姿を変えて彼の肩にとまった、白い鳥の背を労をねぎらうように軽くなぜた。それから、ふと足元に顔を向けた。

「絶景、絶景！王宮のバルコニーの中までバッチリ見えるよ。でも、ラガーって本当に凄いね、晩餐会の時にちよこつと城の中を覗いただけで、そんな事までわかってしまうなんて」

だが、

確かにな。ぽつりと気のない返事をしただけのラピスに、

あれ？何だかさっきまでと様子が違う……と、ココは戸惑いの目を向けた。まさか、ラピスに限って、ここにきて怖気づいたなんてわけではないと思うけど……。

固く閉じた瞼、背にしよつた愛用の弓矢。盲目であるにもかかわらず、それらを自在に操る彼が、ただの青年ではない事は重々承知していた。けれども、

「俺には何も見えないんだ」

そんなココの気持ちを代弁したかのようにラピスは言う。

「だから、監視といわれても、俺には何もできないんだよ」

「だって、ラピスは見えなくても心で感じる事ができるんでしょ？

！この世のものがすべて頭に浮かんでくるって、いつもそう言ってるじゃない」

だが、ラピスはその言葉を打ち消すように首を横に振った。

「この城だけは別なんだ。だから、この城には近づくだけでも嫌だったんだが……ここからは何も感じない。俺にとってはエターナル城は虚無の空間以外の何物でもない。ただし……」

ひどく緊張した様子で回廊の屋根の下に気を配りながら、ラピスは言う。

「ただ一人だけ、嫌になるほど俺の五感を引きつらせる、あの女を

除いては」

「あの女？」

「いや、女ではなく白蛇のバケ物だ！胸をつかえさせるとてつもなく邪悪な気が、この屋根の下でうごめいている。ちょうど、この下……大広間の入り口あたりにあの王妃はいるぞ。禍々しすぎるその動きの一つ一つが、今も手にとるように伝わってきて、俺は怖くてたまらないんだ。その反動なんだろうか、王妃以外の物が、今の俺にはさっぱりわからなくなってしまっている。それでも、今回だけは逃げちゃいけない気がするんだ」

守らなきゃいけない何かがある

まだ、ラピスは心の奥でおぼろげに感じていたその言葉を、はっきりと意識できないままだった。

「だから、頼む。ここでは、ココ、お前が俺の眼になってくれ」

「うん……」

と、うなずいてみたものの、一番頼りにしていたラピスに反対に頼りにされてしまうなんて……ココの心臓は“どうしよう？”と不安げに鼓動を早めていった。

ここに来る前に護身用にとラガーからもらった小刀を懷中に忍ばせてはいるが、そんなに頼られたって、使いこなす自信もない。やっぱり、“眼になる”なんて、前言撤回してしまおうかと、

「ラピス、あのね……」

ココがおずおずと声を出した、ちょうどその時、

「しっ、しゃべらないでっ！！」

「……！！」

いきなり口元にあてがわれた長い指に、ココは目を白黒とさせた。「ココっ、何も考えるなっ！あの女にこちらの居場所を知られるぞっ」

＊ ＊

「王妃様？　どうかなさいますして？」

王宮の大広間へ続く回廊。

その天井に備え付けられた豪華なシャンデリアに食い入るように目を向けたまま、じっと動こうとしない王妃の姿に、お付の侍女は軽く眉をしかめ、彼女の視線の先に目をやってみた。

ダイヤモンドで形づくられたシャンデリアの繊細な星細工が、最高級の絹で織られた天井の月模様の壁紙に光を添えている。

「本当にこの王宮は素晴らしくて……」

だが、口から思わず零れだした言葉に同意を求め、王妃の顔を覗き込んだ時、

「……！！」

侍女の足は知らず知らずのうちに2・3歩ほども後ずさっていた。死んだ魚のように濁った網膜。その中央から天井を凝視している水銀色の瞳。毒々しい紅色の唇は微妙に歪んでちろちろと、口の中で紅い舌先をうごめかしている。

「お、王妃様……！？」

ところが、王妃がおもむろに振り向き、彼女に微笑みかけた瞬間、侍女は急に無表情に膝を折り、しゅんと王妃の足元にかしづいた。

「なんでもないのよ。ちょっと、ぼうつとして……シャンデリアのダイヤモンドの輝きが眩しすぎて、私らしくもなく、それに心を囚われてしまっただけ。それより、そろそろ建国記念祭の演説の時間よ。陛下をバルコニーにお連れしなくてはいいわい」

「は……い」

王妃は先ほどとはうって変わった華やいだ表情で、夢遊病者のように呆然と彼女を見つめている侍女の頭に軽く手をのせ、くくくっ

と笑ってみせた。

棘をはらんだ魔毒の触手でエターナル城の中身を撫で回す。それが楽しくてたまらない……といった風に。

王妃がいる回廊の屋根の上。

しばらくの沈黙の後で、ラピスはココの口元を押さえた手をゆっくりと離しながら、ほっと安堵の息を吐いた。

「危なかった……あのバケ物、今、一瞬、こちらの気配を感じやがった」

「お、王妃に、バレちゃったの？ 私たちのいる場所が?!」

「今はなんとか誤魔化せたみたいだ。でも、雑念だらけだったココを無視したところを見ると、あいつの意識はどうやら俺だけに集中しているようだ。あいつ、水磔の時の事で相当、俺を恨んでいるな……畜生！ やっかいな事になってきた。王妃にこちらの気配を悟られないように、一時も気を抜くなっていうのか？」

「水磔の時の事って？ タルクが泥のお化けにひきずりこまれそうになって、それを操っていた王妃にラピスが矢を打ち込んで助けたって話？」

深くため息をついてラピスは頷いた。

「あの時放った矢の事を恨んで、王妃の意識は常に俺を探してるんじゃないのか？ 何てったってあれは“蛇のバケ物”だもんな。執念深さも相当なものだろうよ」

足元から生暖かい風が吹いてくる。それが、まるで、

おのれ、あの弓使い……私の正体を見破ったからと、いい気になるなよ。次にあった時はひきさいてやる……お前の五体をばらばらにしてやる……。

そんな言葉をはらんだ王妃の裂けた赤い唇からの吐息のようで、ココは背中に思わず、ぞくりとした悪寒を感じずにはいられなかった。

「蛇の王妃なんか、蒲焼にしちゃえばいいんだあっ!!」

不安が頭のとっぺんまで上り詰めてしまいそうで、それを払いのけようと、ココはとりあえず、そんな悪態をついてみた。すると、その声に合わすかのように王宮の中庭から高らかなファンファーレの音が響いてきたのだ。

「王様の建国記念の演説が始まるよ!……でも、あれは……」

回廊の屋根からバルコニーを覗き込んだココは驚いたように目を見開き、ラピスの腕をぎゅっと握り締めた。

Chapter 59

今や名ばかりの“グランパス王”は、酒の吐息とおぼつかない足腰を連れ添わせ、バルコニーに用意された玉座から立ち上がろうとしていた。

開門の後、一目でも王族を目にし、その声を聞きたいと、中庭に走りこんできた国民たちが王を呼ぶシュプレヒコールを巻き起こしている。

ところが、全身をアルコールに侵された王はどうしても立ち上がる事ができない。そんな王の体たらくを予測していたかのように王妃はほくそえみ、お付武官を傍らに呼んだ。

「王はお疲れのようだわ。仕方がない、今年の演説は中止という事に致しましょう。ちょうど、王宮の酒蔵で仕込んだ新酒があったわね、集まった民衆たちに舞い酒を出しましょう。彼らも毎年、変わり映えもしない演説を聞くより、その方が喜ぶんじゃないかしら」だが、

「駄目よ!」

そんな王妃の台詞を遮る声が、彼らの背後から響いてきたのはその時だった。

後ろで一つに編みこんだ黄金の長い髪、足元まである白い一枚絹の布地でできたドレスを身にまとい、その両肩を“スウォード・リリー”の紋章、グラジオラスを型どったブローチで止めている。ウエストベルトで腰を絞ったイオニア風の出で立ち。まだ、少女らしさを残した薔薇色の頬とは対照的に、大きく開いた右側の布地の間から、すらりと伸びた足が垣間見える。

王妃は、鋭く自分を睨めつけてくる王女リリーの紫暗の瞳に、一

瞬、たじろぎを見せた。

「建国記念祭を祝うために来てくれた人々をお酒で誤魔化すなんてとんでもない話だわ。王ができないというのなら、その演説、私が代わりにやりましょう！」

「馬鹿を言わないで！王女が王の代わりに建国記念祭の演説をやるなんて、聞いたこともないわ」

「私は第一皇位継承権を持った、グランパス王国の王女よ。いくら王妃といえども、あなたに、私の邪魔はさせない。どうしても、私の演説を聴くのが嫌だというなら、そこで耳をふさいでいればいいでしょう？」

きりと唇を結んでから、止める王妃の手を振り切り、リリーは、毅然とした態度でバルコニーに進み出た。

「スウオード・リリー！！」

普段より大人びた王女の姿が、バルコニーに現れたとたん、王宮の中庭を埋め尽くした人々から、歓喜の憧憬の声が渦となって巻き上がった。

＊ ＊

「ラピスっ、バルコニーに出てきたのは王じゃないよ。王女……“スウオード・リリー”が、建国記念の演説を始めようとしてるっ」
たまげたようなココの声。そして、王女がバルコニーからぐると民衆たちを見渡した瞬間、

「スウオード・リリー！！」

彼女の名を呼ぶ熱烈な叫びを耳にして、ラピスはにやりと笑顔を

浮かべた。

「すげえ派手な演出だな、おもしろくなってきたぞ。ならば、彼女の演説、篤と聞かせてもらおうじゃないか」

＊ ＊

王女リリーは、バルコニーの下に一目でも彼女の姿を見、その声を聞こうと、集まった人々に視線を向けると、ふうっと一息を吐いた。そして、

「親愛なるグラン・パープルの人民たちよ。今日は、よく集まってくれました」

いつもどおりの凛とした透き通った声で、建国記念の演説の第一声を口にしたのだ。民衆たちは、先ほどとはうってかわって静まりかえり、彼女の言葉に一心に耳を傾けている。

「グランパス王国は、我が王、グノークス・J・グランパスが皇位に即され建国の宣言をなされて以来、繁栄の時を過ごしてきました。そして、今や王国の瑞光と国力は揺るぎのないものとなったのです」

ここまで言うと、リリーは一寸沈黙し、再び紫暗の瞳でぐるりと辺りを見渡した。人々は期待に胸をときめかせ敬愛する王女の次の言葉を待っている。憧憬の眼差し of 若者、感激の表情を露にした老人、そして、無邪気な子供たちの真っ直ぐな視線。

見せ掛けの繁栄の中でも、今は幸せに暮らしている国民たち：その安穏とした生活をクーデターなどという乱暴な方法で、こんなに性急に壊す必要があるのだろうか？ 何かもっと平和的な解決はで

きないものかと、弱音が心にこみあげてくる。

：だが、それこそが、王妃の邪念の源なのだ。リリーは、自分の気弱な思いに強く首を振り、きりと前を見据えた。

それから何かをふっきるかのように声を高め、言葉を続けた。

「だが、光ある場所には影がある。繁栄の海の中にも、一縷の没落の荒波が押し寄せてくる時もある。それを私達は決して忘れてはなりません！ 私がグランパス王国に向ける願いは、言葉にするとしても短い。けれども、それを成就するには、気の遠くなるほどの長い道程を行く覚悟が必要なのです」

聴衆は、息を飲むように王女の次の言葉を待っている。そんな彼らにリリーは心の丈をすべて打ち明けるかのように声を高めた。

「皆が、幸せに暮らせる、そんな国を作りましょう！」

この記念すべき建国の日に、私は、国家、国民をこぞって祝福し、繁栄の時も困難な時も、自らの命をかけて、故国の平和に寄与する事を心より誓います。

国民に幸あれ！

そして、グランパス王国に神のご加護のあらんことを！！」

一拍の間の後に、怒濤のような拍手喝采が巻き起こった。

“ スウオード・リリー、万歳！グランパス王国、万歳！！ ”

いつまでたっても鳴り止まぬシュプレヒコールに、ラピスは、ほうっとため息をついて、こう言った。

「この後、クーデターを起こそうっていう王女が、今の演説に込めた思いを、分かるやつがここに何人いるだろうか？それでも、聴衆は皆、知らず知らずのうちに王女リリーに惹きつけられてる。俺は心底、こう思うよ。“スウォード・リリー” あれは、まるで王女になるために生まれてきたような女の子だ」

その時のラピスの様子があまりにも真面目だったので、ココはちよつとこんな事を言いたくなってしまった。

「なら、私は？私は何になるために生まれてきたような女の子？」

「……」

「何で答えてくれないのよ」

ラピスは肩をすくめると、からかうようにこう言った。

「ココは何で女の子に生まれてきたか、わかんないような女の子だよ」

そして、大急ぎで両手を広げて、ココの攻撃から身を守った。

Chapter 60

その頃、ラガー率いるクーデター軍は、幾手にか分かれて近衛兵の間に紛れ込んでいた。総勢にして20数名。王宮の1階には比較的腕に自信のない者たちが10名、リリーが演説をした2階のバルコニー付近には、ラガーを先頭に多少なりとも戦闘の経験がある残りの者が、ラピスとココからの“行動開始”の合図を待っていた。

「王女が演説をやるなんて想定外の事だったが、堂々としたもんだな。びびっちゃってた自分自身が、恥ずかしくなってきたぜ」

王たちがいるバルコニーに続く大広間。その窓の近くで警備を装いながら、ラガーは苦い笑いを浮かべ、ラピスたちのいる居館の屋根に目をやった。

あいつら、ちゃんと俺が教えた場所にいるんだろうな。

屋根の上の矢狭間に、ラピスとココらしき人影が、ちらちらと揺れている。よし。と軽くうなずき、ラガーは他の近衛兵に気づかれぬように窓から少し身を乗り出した。

＊

「あ、ラガー、見つけたっ。バルコニーの近くの窓際にいるよっ！」
一発で見極め、すっと盗る。それが、盗賊の極意だと誰に教わったわけでもないが、そうやって日々の食い扶持をかせいできたココは、目敏さでは誰にも負けない自信があった。

ラガーの方もココの視線に気づいたようで、制服の襟を直すしぐさで軽く手で合図を送ってきた。

「向こうは準備、OKみたいだよ」

ココの報告に、ラピスは黙ってうなずいた。
そして、王女リリーがバルコニーの席にもどり、演説の余韻が冷めかけた頃、

「グランパス王国の華、そして一の剣士と名高いグラジア・リリス・グランパス殿下に物申すっ！！」
城門の向こうから、そんな地響きのような物凄い大声が聞こえてきたのだ。

誰も彼もが、ぎょっと目を見開いて城門の方向に顔を向けた。すると、2メートルもあろうかと思われる長剣を振りかざした大男が、慌てて道を開けた民衆の間を、づけづけと歩いてくるではないか。

「我は先に行われた王宮武芸大会の優勝者、長剣のタルク！ 王女といえども、女子に一の剣士を名乗られては、俺の面目丸つぶれだっ。この建国記念祭の晴れの舞台で、真のグランパス王国一の剣士を決めるべく、本日は参上した！ いざ、尋常に勝負されよ！！」
その後ろに、大男とは対照的に人懐こい笑みをたたえた少年が控えている。だが、集まってくる近衛兵を悉く、蹴散らしているのは、大男の方ではなく主にこの少年のようだった。

「ラピスっ、ジャンとタルクが来たよっ！ 声が聞こえるでしょ。こっちもすごい派手に登場してきた！」

タルクの大声は、城壁を通り越して海の向こうまで轟くかのような大音声だ。ラピスは先ほどもまでの、張り詰めた気分からすっきり抜け出して、楽しい気分になえてきた。

「タルクが、クーデター計画開始の銅鑼の鐘を鳴らしたんだ。あの大声なら俺にもかなり予測はつくが、ココ、実況中継よろしく頼む

ぞ！」

＊ ＊

割れんばかりの大歓声の中を、出来うる限りのしかめ面をして、タルクは王宮の中庭に進み出てきた。

「ゆけ、ゆけっ！大入道！」

「ふざけんなー！王女がお前なんかに負けるもんか！！」

「“スウォード・リリー”！早く出てきて、あの大男をのしちゃってー！」

建国記念祭のメインイベントにこれほど面白い余興はない。物見遊山な人々は好き好きな台詞を吐き、勝手に盛り上がってしまっている。

「えーっと、お客さんたちが、王女の名を呼びながら騒いでいます。タルクはバルコニーの下で王女を待っていますが、まだ出てきません。あっ、お客の一人がタルクに空き瓶を投げつけました。でも、ジャンに吹っ飛ばされました」

さっそく、実況中継を始めたココに、ラピスは苦い笑いを浮かべて言った。

「ココの実況がなくても、あの声援だ。タルクを応援する奴が、ほとんどいないって事はよくわかるよ。そりゃ、美女と野獣じゃ、やっぱり野獣に歩が悪い」

ところが、やる気満々で長剣を背から抜き放ったタルクをもっとよく見ようと、矢狭間から身を乗り出したココは、ふと、おかしい事に気がついた。

「ねえ、ラピス、タルクって平気な顔してあの重い剣を使ってるけど……右肩の骨が折れてたんじゃなかったの？」

実は、その事はラピスも気にかかっていたのだが、ジャンに癒しの力を使ったのかと聞いてみても、そうでもないらしい。

「俺が診た時は、確かに折れていたんだけど、タルクはもう直ったなんて言いやがるんだ」

そんなはず、あるわけないんだけなあ。と、ラピスは小首を傾げた。

一方、王宮では、

「あの男、あの男よ。あの男！ リリー、待たせるのは失礼よ。さっさと行って勝負をなさい。でも、殺しては駄目、駄目よ。駄目よ。絶対に！」

ぺろりと人に見えない位置で舌なめずりをする王妃に、ぞっと背筋が冷たくなる。けれども、リリーはその気持ちを押し殺し、敢えて笑顔を作ってみせた。

「あの大男は、王妃様の大的お気に入りですものね。大丈夫、きちんと上手く料理してやりますわ」

「お願いよ。殺さないでね。絶対に、絶対によ！」

そして、死ぬんだったら、リリー、お前が死んで……

王妃の考えを読み取ったかのように、一瞬、眉をしかめる。そして、くるりと踵をかえすと、リリーは、止めに入った下仕官の手を振り払い、ドレスの裾をたくし上げながら中庭へと続く階段の方へ歩いていった。

ちょうど、バルコニーの横の窓にさしかかった時、近衛兵の一人が、駆けてくる王女に小さく囁いた。

「その格好で戦闘か？」

頬の傷をゆがめながら、にやりと笑う。

「一平卒に、とやかく言われる筋合いはないわ」

リリーは、彼に向かって、紫暗の瞳を小気味よさげに輝かす。

その直後、ばさりと顔に被された1枚の白絹。大慌てで、それをめくり上げ、近衛兵姿に身を変えていたラガーは、小さく口笛を吹いた。

足元まである白いドレスを脱ぎ捨て、鎖帷子で身をかためた戦闘服で、階段を駆け下りて行く“スウオード・リリー”

確か前に、グラン・パープルの誰かから、こんな事を聞いたものだ。

“スウオード・リリー”（剣百合）の花言葉は、“密会”そして、

“武装完了”

＊ ＊

朝から続いていた胸のすくような晴天が、少し翳りだした。

建国記念祭に集まった人々の心模様を描き出すように、風に流れされてくる雲の切れ間から、太陽の眩しい光と、翳ろう光が交互に差し込んでくる。

ちょうど、日の光がエターナル城を明るく照らし出した時、王女が現れる瞬間を待ちわびていた群集たちの好奇と憧憬の瞳が、一斉に王宮から中庭に続く階段に向けられた。

階段を駆け下りてくるのは、武装の姫。

腰まで伸びた三編みの長い髪と身にまとった鎖帷子が、太陽の下で金と銀に煌いている。そして、気品に満ちた紫暗の瞳は、きりり

と涼しげで、ほのかに頬を紅に染めた少女の顔に、別格の聡明さを付け加えていた。

「待たせたわね。逃げも隠れもしないわよ。戦いましょう！心ゆくまで！」

タルクの前に堂々と進み出た、“スウォード・リリー”の生出たちに、

「へえ、まるで百年戦争の女騎士みたいだ」
ジャンは思わず、そんな言葉を口に出してしまった。

タルクの返事を待つまでもなく、王女リリーは、腰のレイピアをするりと抜き放った。

「そんな護身用の軽い剣で、俺の長剣が受けられるとも思ってたのかあっ?!」

すると、妙にわざとらしい大声で笑い飛ばし、タルクは、いきなり、2mもあろうかという長剣をリリーに向けて振り下ろしてきた。ぐあんとその刃がうなりを上げたたん、爆風が巻き起こった。

“暴風”圏内の視界はまき散らかされた砂塵で、ほとんどが見えない。ところが、

「軽くたって、高性能！」

リリーはその切っ先を軽くかわし、タルクの喉元を狙ってレイピアを鋭く突きたててきたではないか。

何っ!!

慌てて長剣でレイピアを阻止してから、タルクは驚いたように、リリーの方へ目をやった。

このお姫さん、恐ろしく剣さばきが早い……俺が戦った相手では、ゴットフリーに次ぐぞ。

剣を振り下ろした低い姿勢から、慌てて大上段の構えをとる。やばい、油断していると先手を取られる。

そんなタルクの表情に、リリーは満足げに微笑んだ。

「護身用なんて、言葉、撤回してもらいたいもんだわ。でも、あなただって、大男の割には動きが機敏ね。それに、その凄まじい剣圧、当たったら生きてはいられないかも」

お互いに構えた刃と刃の間から、リリーとタルクは顔を見交わし、意味深な笑顔を浮かべて言った。

「さすがは、王宮武芸大会、優勝者」

“スウォード・リリー”（剣百合）の名は伊達じゃなかったな」

Chapter 61

王宮の回廊の屋根の上でラピスとココは、呆れた様子で二人の戦況を覗っていた。

「王女もタルクも、勝負を、楽しんでる場合じゃないんだけどな」
「でも、タルクの肩ってやっぱり、直っちゃってるみたいね。そうになると、ちよっぴり、二人の決着を最後まで見れないっていうのは残念」

“直っちゃってる”というココの言葉には相当な抵抗感があったが、とりあえず、ラピスはこくんと頷いてから言った。

「そりゃ、“剣豪の美女”と“長剣使いの猛将”。こんなに見ごたえのある戦いはなかなか見れるもんじゃないけど……」

先ほどから感じて仕方ない、ぴんと髪を引っ張られるような感覚。空気がやけに冷たく頬を撫でてくる。なかなか、決着のつかない二人の戦いに、いらついているのだろう。バルコニー席の王妃が落ちて着かない様子で髪をいじり始めた。

「駄目だ。王妃が痺れを切らし始めてる。ここらでそろそろ動いておかないと、クーデターの計画が行き詰っちゃう」

＊ ＊

王宮の中庭に集まった観衆は、間合いを取り合ったまま、動こうとしない王女とタルクの姿を固唾を呑みながら見つめている。更に4～5分もたっただろうか、じりじりとした空気に耐え切れず、観衆の誰かが言った。

「どっちが先に攻めて出るんだ？ “スウォード・リリー” か？ それ

とも大入道か？」

そして、たまりかねたようにバルコニー席から王妃が立ち上がった瞬間、

「であああああっ！！」

地を震わせるような大音声でタルクが叫んだ。

「大入道の方が打って出た！！」

堰をきったような人々の歓声。

それらが耳に届くか届かないうちに、タルクの長剣が大上段の位置から、リリーに向けてうねりをあげた。

空気が引き裂かれる。

砂塵が巻き起こる。

地面が揺れる。

そして、長剣の刃をかわした王女の体が、タルクの膝を蹴り上げて宙に舞った。その時、身を乗り出して二人の戦況を見届けようとした人々の声が、

ええっ！？

と、おかしい感じで、どよめいた。

飛びついてきた王女の体をひょいと肩の上に持ち上げると、タルクがくると王宮に背を向けてしまったのだ。

「王女はもらった。兵隊も民衆も、返して欲しきや俺の後について来い！！」

一瞬、何が何だかわからない空気に包まれた観客たちの間を、タ

ルクは王女を担いだまま城門に向けて駆け出した。鬼のような形相に恐れをなした人々が、大慌てで道を開ける。

異常事態を察知した近衛兵たちが集まってきた。彼らを蹴散らすくらいは、タルクにとっては大した問題ではないけれど、さすがに2mもある長剣を、王女を担ぎながらは使いたくなかった。

“ジャン！”と、彼らを先導して前を走る少年の名をタルクは呼んだ。

「あの兵隊、どうにかしてくれよ。それと、この長剣、預かっといてくれ。でも、振り回すんじゃないぞ。お前が使ったら、それこそ大地を斬り裂いちまう」

「わかってるって！」

“後で返せよ！”と、無造作に投げ渡されたタルクの長剣。自分の身長をはるかに越える長さのそれを軽々と受け取り、肩に担ぎ上げてから、ジャンはにこりと笑った。

でも、ちょっと退屈していたんだ。見ていただけじゃつまらない、戦闘は参加してこそ意義がある。

王女を取り戻そうと、近衛兵たちが血相変えて挑みかかってきた。ところが、

「退けっ！文句があるなら、僕らの後をついて来いっ。邪魔する奴はみんな、ふっ飛ばすぞ！」

ジャンの手がぱつと開かれただけで、見えない力が彼らを根こそぎ弾き飛ばし、地面にたたきつけてしまうのだ。

奇声を発する者、笑う者、泣き出す者、王宮の中庭は、もう、てんやわんやの大騒ぎになってしまっている。

「早く、城門を閉めろっ！王女を大入道に盗られるな！！」
慌てふためいた近衛兵たちが、城門に向けて駆けていった。

その頃、王宮の回廊の屋根の上でも、“大騒ぎ”の華が咲いていた。

「タルクがお姫さんを拉致ったよ！兵隊が追いかけて、今、ジャンが蹴散らしてる！でも、城門が閉めらちゃう。ジャン、負けるなーっ！そんな城門、壊しちゃえっ！！」

怒涛のようなココの実況に、ラピスはあはっと笑い、自分の背中に片手をまわした。

「そう、その報告を待っていたんだ。それこそがクーデターの始まりの合図なんだ！」

ラピスが、目にも留まらぬ早さで背中 of 矢を弓につがえ、ひゅんっとならば引く。いったい、いつ矢を手にもったのか、その手を引いたのか、動きが早くて検討もつかない。

青い空を一直線に突き進んで行くラピスの矢。だが、

ぱんつと弾ける爆発音とともに、それは、眩いばかりの“黄金の光”となって空中にはじけとんだ。

ココは空から降り落ちてくる光の粉に、あっけにとられたように目を向けた。

「は、花火い！？何でラピスの矢が？」

「ラガーが作ってくれた特製の矢だ。空気とすれ違った時、その抵抗で発火するそうさ。しかし、あれやこれやと発明して、あいつ、ノーベル賞でもとる気なのかな？」

「……ノーベル賞って何？」

不可解そうなココの問いにラピスはおどけたように言った。

「どっかの雲の上の話」

「なんだ、私たちとは、関係ない話ね。そんな事より、今っ、王宮の方に白煙があがった！」

ラピスの答えを軽くうけながし王宮のバルコニーに目をやったコ

コは、“ラガーが動いた！”と、盲目の弓使いの腕を強く引いた。

＊ ＊

「ラピスからの合図が来た！クーデター軍は、なだれ込んで、王と王妃を確保しろっ！！」

空で弾ける花火を見たたん、ラガーは懷に隠し持っていた手榴弾を、王と王妃がいる王宮のバルコニーに向けて投げ込んだ。手榴弾といっても、ラガーお得意のただの目くらましの白煙筒だ。だが、それだけで、酒で正体をなくしている王を捕らえるには十分だった。

王宮には、真っ白な煙の霧がたちこめている。

近衛兵たちは、事の次第が理解できず、ただ奇声をあげるばかりだ。

玉座のまわりにいたクーデター軍のメンバーたちは、ラガーの合図ですばやく防煙マスクをつけ、ぐでんぐでんに酔っ払ったグランパス王を取り押さえた。王妃にはどうやら逃げられたようで、姿がない。

賊に押さえつけられていても、自分のおかれた状況が把握できず、名ばかりのグランパス王国の統治者は、ただ、ぼんやりと集まってきた近衛兵たちを眺めている。

手はず通り、残りの仲間がバルコニーに駆け込んできた。それを確認し、発煙筒の煙が薄れたと同時に、ラガーが大声で叫んだ。

「王の身柄は我々、クーデター軍が確保した！王を傷つけたくなければ、おとなしく武器を捨てて降伏しろ！」

「何っ、クーデターだと？お前ら……いつの間に……」

ラガーは、クーデター軍をぐるりと取り巻いた近衛兵たちを見渡し、不適な笑みを浮かべた。実は、心臓はばくばくと波打っていた。けれども、そんな素振りを見せたら、敵にこちらの状況を見切られてしまう。

クーデター軍は30人弱、それに対する城内の近衛兵は、ざっと見積もっても500……外の近衛兵はタルクたちが引き付けてくれてはいるが、まともにやってっちゃ、勝てっこないぜ。

じりじりとクーデター軍を囲みこんだ輪をせばめながら、近衛兵たちが近づいてくる。だが、剣を突きつけられた王を慮り、誰も彼もが敵に攻撃ができない。

一方、バルコニーの奥に身を隠した王妃は、言葉もなく、ただお付の侍女の腕の中に身を沈めながら、小刻みに体を揺らしていた。怯えではなく、悔しさにその紅の唇を震わせながら……。

私のグランパス王国にそれも建国記念の日に謀反を起こすなんて、何て不遜な奴ら。

許せない……でも、まだ、私の正体を皆に見せるわけにはゆかない。

引き裂きたい、喉ぶえを噛み切ってやりたい。
今にも曝け出しそうな惨殺の衝動。

それを抑えるのに、王妃はえらく苦勞をしていたのだ。

Chapter 62

「俺たちの後ろと横にいる近衛兵は、全員、バルコニー側へ移動しろっ！さもなきゃ、この酔いどれの爺さんを串刺しにするぞ」

仲間にグランパス王の胸に短剣を突きつけさせると、ラガーは声を荒げてそう言った。そして、近衛兵たちの動きに気を配りながら、小声クーデター軍の他のメンバーに呟いた。

“兵隊が移動したら、お前たちは後ろの階段から王を連れてこの城を出ろ。俺もこいつらの相手をすませたら、後が続くから。”

その時、近衛兵の中心にいた男が前に進み出てきた。大柄でいかにもふてぶてしい態度の輩だ。だが、どことなく生気がなく足取りも重い。

「指示どおりー、全員、バルコニー側に移ったぞ。だが、お前たちみたいな、寄せ集まりの集団でクーデターなんてものが上手くゆくと思ってるのかああ？」

ラガーの不安な気持ちをかきたてようかとするように、小ずるい瞳を向けてくる。

「俺はなあ、グランパス王国近衛連隊長だ。こんな馬鹿な真似はやめないか？な、今なら、悪いようにはしない。何か要求があるなら、言ってみろよお……ただし、国を渡せという以外はな」

その近衛連隊長らしくもなく、ろれつの回らない声と汚く白濁した灰色の瞳が、自分に向けられた時、ラガーは背中にぞっとする悪寒を感じてしまった。

この連隊長……仕事中だというのに、酔っ払ってやがる。こいつもあの王妃のおかしな術に操られている輩か。まさか、近衛隊全部が、そうなってしまうているんじゃないだろうな。水磔の時に、タ

ルクを襲ったキャリバンとかいう、あの土くれのお化けみたいなのがぞろぞろ出てきたりしたら、もう逃げる事なんかできないぞ。

つい、弱気が心を占めそうになった時、ラガーは、ふと、今、対峙している連隊長と同じ色の瞳の“ガルフ島警護隊長”の事を思い出してしまった。

ゴットフリー・フェルト

同じ灰色の瞳でも、奴の瞳は真冬の朝の空気のように研ぎ澄まされていた。こんな場面でも、あの男なら事も無げに切り抜けてしまふんだろ。畜生！闇の王かなんか知らないが、一体、何処へ行きやがったんだ。

だが、首を大きく横に振ると、“あいつだってまだ、敵だ”と、ラガーは目の前にいる近衛連隊長を睨めつけてから、隠しもついていたポケットのリモコンに手をやった。

王宮の2階は、バルコニーを境にしてクーデター軍側と近衛兵側にきれいに東西に分かれている。部屋の西側に敵を固め、東側を味方の逃走用に確保する。もともと、それがラガーの狙いだったのだ。王妃を捕らえる事には失敗したが、王さえいれば、グランパス王国の覇権を握る事に関しては何ら問題はない。

「誰がお前らの甘言に耳を貸すか！クーデターはやり終える。邪魔する奴には消えてもらうだけだっ」

後ろ手に仲間に、行けっ！と合図を送り、ラガーはリモコンのスイッチをかちりと押した。そのとたん、激しい爆音が王宮の中に鳴り響いた。

「あばよ」

引きつった顔で沈んでゆく近衛連隊長に、ラガーは冷ややかにそ

う言い放った。

王宮のバルコニーの床が、轟音と共に崩れ落ちたのだ。それに連動するように王宮の西側に連続した爆発が起こった。

バルコニー近くの近衛兵たちは、崩壊した瓦礫と共にほぼ、全員が階下に落ちていった。窓ガラスが大きく揺れ、吹き上がる火焰とともに、王宮の2階の片側だけが壊れてゆく。

タルクとジャンと一緒に王宮の晩餐会に行った時に、ラガーが王宮に仕掛けておいた小型爆弾。王宮の2階部分の東側を残し、西側を完全に崩壊させるその位置計算は完璧なまでに、正確だった。

くると踵をかえすと、ラガーは後方にある階段に向かおうとする。先に逃げていった仲間を追って早く王宮から脱出しないと、支柱を失ったエターナル城は、いずれは東側も崩れてゆくだろう。ところがその時、

「……！」

ラガーは崩壊した階下の瓦礫の中から、突然、巻き上がった白煙に大きく目を見開いた。

白煙の中にねじれながら舞い上がってくる巨大な長い胴体。

天を噛み砕くように大きく開かれた血色の口腔。

鼓膜が破れるかと思うほど甲高く鋭く響く、その咆哮が辺りに響き渡った時、

「し、白い大蛇！！きさま、王妃かっ？ついに正体を現したなっ！」

王宮の3階の床を軽く打ち破り、自分の後方に現れた巨大な蛇。逃げようにも足がすくんで動かない。その邪悪な瞳の光に全神経を射殺されてしまったように、ラガーは、ただ、啞然と頭上に鎌首をもたげる大蛇の姿を見つめ続けた。

＊ ＊

王宮の城門。

王女リリーは城門めざして駆けてゆくタルクの肩の上に揺られながら、上を下への大騒ぎを演じている群集たちに目を向けた。

足元に迫ってくる興奮し秩序をなくしかけている人々の生々しい表情。おまけに、王女を奪取されまいと王宮の外に配備された近衛兵たちが、血相かえて城門に集まってきている。

彼らをエターナル城から連れ出し、1ヶ所に集める事が私たちの役目。

けれども、ここまで混乱した人々を一体どうやってまとめろというの？

1対1の武芸大会では剣豪の名を馳せた王女も、大人数を相手の戦闘など、まるで経験がない。さすがに怖いような気持ちになり、つかまっていたタルクの首筋に更に強くしがみついた。強気の姫の“弱気”を見抜いたのか、タルクは少し笑うと、リリーの心配を吹き飛ばすように言った。

「大丈夫！あんたは、グランパス王国のカリスマ“スウォード・リリー”だろ。バルコニーでの演説は見事だった。あの調子でもう一席ぶってやれ！騒ぐ奴らは、俺たちにまかせろっ」

「でも、私は、あなたみたいに大声でねじ伏せるなんて芸当はできないわよ」

一転して、元の勝気な王女にもどった、その言葉に
「俺ってそんなに大声か？」

近くにいたジャンに軽く尋ねてみる。間髪いれずに、こくんと頷

く少年。その態度に苦笑すると、タルクはすうつと息を吸い込み、次にその息を思い切り強く吐き出した。

“おまえら、ちょっと静かに聞けっ!!”

耳をつんざくようなその大声は、有無を言わさぬ力で人々の頭の中に入り込んでいった。びくんと体を縮こませ、王宮の中庭に集まった誰も彼もが、タルクの方向に目をやった。

「バトンタッチだ。ねじ伏せたかどうかはわからんが、とにかく、静かになっただろ」

耳元がまだ、じんと痺れた感じがする。やっぱりね。と心の奥から笑いがこみあげてくる。先ほどの緊張感はもう消えてなくなってしまった。リリーは、紫暗の瞳を凜と輝かせると、タルクの肩の上から身になるべく高く伸ばして、観衆に向かって叫んだ。

「みんな、そのまま私の話を聞いて!! 私、グラジア・リリース・グランパスは、たった今、このグランパス王国に反旗をひるがえし、クーデター軍に参加した事を表明します!」

突然の王女の告示に、ええっと、わけの分からない顔、顔、顔。それがたちまち、困惑のざわめきを伴って、王宮の中庭に広がってゆく。

「馬鹿な! “スウォード・リリー” がグランパス王国を裏切るなんて、そんな事、あるわけない」

誰かが言ったその台詞に、リリーは声を高める。

「あの王の体たらく、驚くほど広がってしまった貧富の差、王宮に

蔓延する贈賄、そして、暗殺。あなたたちは、それをおかしいと思った事はないの?! その諸悪の根源は一体、誰?! それはすべて、王妃の仕業なのよ! あいつをのさばらしておく事に、私はもう我慢がならない!」

「王妃様が諸悪の根源って……いったい王女は何を言ってるんだ」

まだ、腑に落ちない表情の群集を刺すような紫暗の瞳で睨めつけ、リリーは王宮の方向を指差した。
その瞬間、耳をつんざく爆発音が響き渡った。

「いい加減に目を覚ましたらどう! 後ろを見てご覧なさい。あれが、あなたたちが奉っている王妃の正体よ!」

一斉に王宮の方を振り返る群衆。

あ、あれは何だ?!

王宮の西側が大きく崩れ出している。

そして、瓦礫の中から地獄の咆哮を叫びながら、巨大な白蛇が湧き上がってきた。

「あの白蛇が王妃よ! あれが何十年にも渡りグランパス王国に邪悪の巣を作っていた怪物。思い当たる事はない? 前の王妃の体調が突然悪くなったのも、王が酒びたりになったのも、そして、城内の行方不明者の数が急に増えたのも、あの女が王妃になってからなのよ!」

リリーの言葉にタルクが付け足す。

「実際に俺は、王妃が白蛇に変身するのを見た。あいつは、王宮の礼拝堂の下に作った蛇穴に気に入った男たちを引き込んで、子蛇の

餌にしてやがったんだ！」

そう言われてみても、まだ、ぴんとこない。戸惑った様子の群衆の迷いはらすかのように、リリーはきっぱりと言った。

「あれにかしづきながら、魔毒の牙にかかって死にたいというの？！この王宮はもうどつぷりと毒に浸されてしまっている。私はみんなと共にまだ生きていたい。だから、王宮を捨てて、新しいグランパス王国をつくるの。私は自分の誇りにかけて、決してみんなを欺いたりはしない。クーデターが終わった後で王女の地位を剥奪されても構わない。だから、みんな、お願い、私を信じて、そして、私について来て！」

顔を見合わせる群衆。王宮の方向から白蛇のおぞましい咆哮が響いてくる。

「そうだよ。彼女は“スウォード・リリー”だぜ。グランパス王国の華が、俺たち、国民を騙すはずなんかないんだ」

誰がか言ったその言葉に、それぞれがこくと頷ずいた。

そうだ、“スウォード・リリー”がいてこそ、グランパス王国に華が開くんだ。

Chapter 63

おもむろに群集の輪は列となり、ぞろぞろとタルクに担ぎ上げられたリリーの後に続きだした。だが、城門はすでに固く閉ざれていた。城門の外には王妃の術に操られている近衛兵たちが集まり、王女と民衆を逃がすまいと人垣の硬いバリケードを築いている。

「ちよつと退いて」

すると、“僕の出番”とばかりにジャンが、タルクから預かった長剣を握り締め、前に進み出てきた。

どうも、先ほどから、弱っちい近衛兵を吹き飛ばしてるだけで、戦闘というより力仕事って感じがする。僕にもたまには剣ぐらい振らせろよ。

「おおいつ、その剣は使うなって言っただろ！！」

タルクがそう声をかけてくるのはもう見越していた。嫌だよ。とばかりに、ジャンは、大急ぎで肩にかつぎあげたタルクの長剣を両手で振り上げる。そして、城門と城門が閉じた隙間に力まかせにたたきつけた。

鼓膜をぶち破りそうな大激音。

地鳴りどころの騒ぎではなかった。

あまりの衝撃に耳を塞ぎながら、城門のまわりの人々は、剣を握り直して照れ笑いをしている少年に啞然と目を向けた。

「ごめん、はずした……長剣だと思って、間合いをとりすぎた。やっぱり剣は難しいな」

ジャンが振るったタルクの長剣は、城門にかすかな割れ目を残しただけだった。……が、そのかわりに、城門の下の地面が粉々に砕け散って、そこには地の底まで届きそうな深い穴ができあがっていた。

「もう1回、やりなおし。でも、もう剣は使わなくていいや」

いかにも申し訳なさそうに、怒り顔のタルクに長剣を手渡して返す。

「俺の言いつけを聞かないもんだから、余計な時間をとっちゃっただろ。お前、あの大蛇が見えてないのかっ！ この非常時におまけに、こんな危険な穴まで作って、みんなが逃げれなくなっちまうじゃないか！」

「あ、大丈夫だよ。開いた穴はちゃんと閉じておくから」

ジャンは、そう言っていると、呆氣にとられて傍観している人々の視線を気にもせず、自分が作り出した大穴に向かって、すたすたと歩き始めた。

歩くほどにジャンの体から、蒼い光がほとぼしってくる。すると、みるみるうちに大穴の土壌が元の位置に盛り上がってくるのではないか。

「これが、レインボーヘブンの欠片“大地”の力……」

跡形もなく元の状態にもどった地面。

自分の肩の上で、驚いたように呟いたリリーに向けて、タルクが言った。

「まだまだ、こんなの序の口だ。人がいいから、そんな事は考えもしないだろうが、ジャンがその気になったら、グラン・パープルの一つくらい、簡単に崩壊させてしまうだろうよ」

閉じられた城門と城門の間に自分がつけた、お愛想程度の割れ目を見つめ、ジャンは小さく息を吐いた。やっぱり、自分は剣豪には向かないらしい。

後で、タルクにゴットフリーには絶対言うなって口止めしておく。

ちょっと、複雑な笑みを浮かべてから、ジャンは、自分が長剣でつけた城門の割れ目に両手を差込んだ。指先に気を集中する。そして、力まかせにそれをこじ開けた。

ありえぬ少年の数々の行動。

城門の外にいた近衛兵たちは、面食らいながらも外側から懸命に門を押さえつけた。

「城門は分厚い鋼鉄製だぞ。な、何で、こんな小僧が……」

ジャンは、彼らの必死の形相について笑みを漏らしてしまう。

「ごくろうさま」

心の底からそう言った。

それでも、容赦はしないから。

ぎぎぎ……と軋んだ音とともに、ジャンの体が再び蒼く燃えた。そして、ぎゅっと握りしめられた城門の枠がひしゃげだした。その瞬間、ジャンは左右の手でそれぞれの門をひきちぎり、思いっきり、それらを城門の外へたたきつけた。

「……!!」

どどーんっと城門の重みで地面が揺れたと同時に、近衛兵たちは、慌てふためき蜘蛛の子を散らすように逃げてゆく。そんな彼らを尻目に、“道をあけてもらったよ”と、ジャンは事も無げにタルクに言った。

「あ、あいつはやっぱりとんでもない野郎だ。腕相撲大会で、もう一度、勝負なんてしないで、本当に良かった……」

義手を壊されて、おまけに賞品もごっそり持っていかれたが、あいつが本気でかかってきたら、俺なんて……瞬殺だった。

群衆の中で胸をなでおろしているのは、腕相撲大会でタルクにイカサマを仕掛けて、その後にジャンに負けたヤクザだった。

タルクは、そんなジャンの姿に苦笑する。

見慣れてはいても、ジャンの力の凄まじさには今更ながらに驚いてしまう。けれども、余興はもうこの辺でおしまいだ。

「城門の外に馬を待たせてあるんだ。王女と俺は馬に乗って、人々を王宮近くの丘の上に連れてゆく。ジャン、後の事はもうお前にまかせたぞ！」

「わかってる」

珍しく不敵な表情を浮かべてジャンは、タルクにそう答えた。すると、王を連れたクーデター軍が王宮の方向から駆けてきた。だが、その中にラガーの姿がない。

「ラガーは？」

「奴はまだ中だ。後から来るって行ってたんだが……」

王宮が崩れ出している。吹き上がる炎柱の向こうに、とぐろを巻いた白蛇の影が不気味にうごめいている。そして、王宮の中庭の土壌がぼこぼここと沸き立ち出した。どろどろの沼と化してゆく中庭から、現れた黒い塊に目を向け、タルクが叫んだ。

「キャリバン！ また、あいつかよ！ しかし、今度は1匹じゃねえ！」

無数のキャリバンが泥の沼でうごめいていた……それは、王妃と交わした殺戮の契約に、踊らせ続けられる泥人形たち。

ぬかるんだ顔は、無差別な殺意に満ち溢れている。それらが泥の触手を伸ばしながら、城門から出てゆくとする民衆たちに迫ってくる。正体を暴かれた王妃は、もう形振り構わず総力戦を仕掛けてくる腹のようだ。

キャリバンの姿を見て、怯えのような声の人々の間から沸きあがった。

“人外境のごたごたはまかせたぞ”と、そんなラガーの言葉が、ぴたりと当てはまるような状況に、ジャンは声高に叫んだ。

「早く行ってやらないと、ラガーが危ない！ だから、ここは僕に任せて、みんなは、早く、この王宮を出るんだ！！」

“王宮を出るって言ったって……あんな怪物からどうやって逃げるんだよ……”

人々は醜すぎるキャリバンの姿に震えあがり、半ばパニックのような状態に陥ってしまっている。

「慌てるな！ みんなは、あの少年の力を見ていただろう？ 俺が知ってるあいつの力はこのなんじゃやない。あの怪物を始末するのなんて、ジャンにとっては朝飯前だ。だから、落ち着いて、みんなは王女の後についてゆくんだっ！！」

ジャンの力は無論の事、こういう混乱時において、タルクは絶大な指導力を発揮する。リリーは、ゴットフリーがタルクを信頼する理由がわかるような気がしてしまった。

クーデター軍の男に支えられた王は、自国の危機を目の当たりにしても、相変わらずぼうっと表情が定まらない。王女リリーはそんな姿に眉をしかめ、一瞬、遠くに目をやった。だが、タルクが大急ぎで引いてきた馬に飛び乗ると、自分の後に続いてくる人々をきりと見据え、何かを振り切るように、声をあげた。

「みんな、私についてきて！！ こんな悪意にまみれた王宮は、もう捨ててしましましょう。どんな困難も、みんなで行けば、きっと乗り越えられる！」

力強いタルクの声とリリーの言葉は、怯えきったそれぞれの心へ、一筋の光のように差し込んできた。民衆たちは、こわばった顔を少し和らげ、それを前に向けた。

そして、王女が先導する馬を追いながら、大破した城門の上を踏み越えて、エターナル城から出ていった。

＊ ＊

「畜生！ 足をくじいた。動けねえっ」

王宮の2階は、東の一部分を残し、建物のほとんどが崩れ落ちていた。床に倒れた姿勢のまま、ラガーは後方に迫ってきている白

い化け物の姿に、唇を噛みしめた。

白蛇は、苛立ちと怒りを隠そうともせず、大きく口角の裂けた鎌首を振り上げて、こちらの方向に照準を定めている。

とにかく、這ってでも逃げるんだ。時間をかせげ。そうすれば、ジャンが来てくれる……。

手を階段脇の手すりに伸ばし、片方の足だけをたよりに、逃走経路の階段へ向かう。

転げ落ちてでも何でも、この階段を下りれば1階にたどりつける。クーデターの成功も見れずに、こんな所で死んでたまるか。

だが、ちょうど階段の下り口にたどり着いた時、頭上に大轟音が響き渡った。振り上げられた白蛇の尾が階段を破壊したのだ。うねうねとしなりながら、白い大蛇は、憎い反乱軍の首謀者を逃がしてたまるかと、狂ったように王宮の壁を壊しにかかった。

激音と炎と白煙の中で、前に進むどころが、動くことさえままならない。

がらがらと降り注いでくる瓦礫の山を手で遮り、吸い込んでしまった塵灰に、ラガーは強く咳き込んだ。すると、一瞬、時が止まったように、辺りがしんと静まり返ったのだ。

「……」

背中に走るぞくりとした感覚。はっと頭上を見上げた瞬間に、ラガーは、恐怖で瞳を大きく見開いた。

両側に裂けた大きな口が、すぐ頭の上にある。血色にそまった咽喉から吹き出してくる唸り声。その地獄の雄叫びを真近に聞いてしまった獲物は、もうその呪縛から逃れることはできない。

血生臭い吐息が頬にふりかかる。

駄目だ……もう、これまでだ。

声もだせぬ恐れに震えあがり、ラガーは万事休すと目を閉じた。ジャン、タルク……後の事はもう、お前らに任せた……。

ところが、

「ラガーっ！ 危ないっ！！」

その声と共に

ギャアアアア！！

断末魔のような白蛇の叫びが、王宮の中に響き渡った。仰け反りながら、後方に崩れてゆく。その大蛇の右の目には、1本の矢が深く突き刺さっていた。

「頭からかぶりつこうだなんて、何てお行儀の悪い奴なんだ」

ラガーは、耳に自然に響いてくる聞きなれた声と、小振りの弓を構えた姿に全身の力が抜けるような気がした。

今風に立ち上がらせた金の短髪、袖まくりのシャツ、そして、固く閉じられたその瞼。

「ラピス」

やっと、喉から出すことのできた声で、ラガーはその名を言った。

そうか……クーデター軍には、他にも頼りになる奴がいるって事を忘れてた……

Chapter 64

「ラガーっ、大丈夫っ?!」

ラピスの後ろから、飛び出してきた少女の茶色の瞳が、さらにラガーの張り詰めていた気持ちを軽くさせた。

「ココも一緒か。大丈夫……。足をくじいただけだ。それより、何でこんな場所にお前らがいるんだ?」

「何でって? もっと有難い顔をしてよ。王宮がひどい事になってるんで、白い鳥に乗って、来てやったっていうのに」

ふくれっ面のココに目をやり、ラガーは少しだけ笑う事ができた。それでも、後方では一旦、倒れた白蛇が、目に突き刺さったラピスの矢を忌々しげに振るい落とし、鎌首だけを持ち上げて……。何かを察知したかのようにじっと、彼らの方向を伺っていた。

ヤバイ……。あの化け物、俺の位置を完全に見極めやがった。そりゃそうか、お互いさまだな……。俺だって、さっきから神経がびんびん、引っ張られるみたいに、王妃の殺気を感じてるんだから。

赤くはれ上がったラガーの右足に、そっと手を触れ、ラピスは思った。

これじゃ、ラガーは歩くのは無理だ。それに、王妃は俺を恨んでる。俺と一緒にいると、ココやラガーまで王妃の毒牙の巻き添えにしてしまうぞ。

ラピスは一瞬、考える。そして、言った。

「ココ、お前とラガーは白い鳥に乗って、先にここから逃げろ。そして、王宮近くの丘に避難した王女の所へ飛んでゆけ」

「えっ、でも、ラピスは?!」

「いくらなんでも、あの鳥は3人は乗せれないだろ。ココたちを丘に降ろしたら、また迎えに来てくれればいいから。俺の事なら大丈夫、何とか持ちこたえてみせるよ。それに、ジャンだって、そのうちに来てくれるだろうから」

「でもっ！」

「早くしないと、また、白蛇がおそってくるぞ！ココ、手を貸してくれ、ラガーを白い鳥に乗せるんだ」

「おい、本当に大丈夫なのか……？」

ラピスに持ち上げられ、翼をひろげて待っている、巨大な白い鳥に寄せられながらも、ラガーは不安な気持ちを隠しきれない。

「大丈夫だ。あの白蛇の攻撃も防御もすべて、お見通しさ。それに、どういうわけだか、あいつは俺の矢が苦手らしい」

さらりとそう答えると、ラピスはココにラガーの後ろに乗るように指示を出した。

「さっさと行け！そして、白い鳥をなるべく早くここへ戻してくれ！」

ラピスの声が聞こえたのか、“天喜の白い鳥”は巨大な翼を羽ばたかせると、王女たちが待つ王宮近くの丘に向けて飛び立っていった。

一方、白蛇は宿敵のラピスを見つけ、興奮した様子で紅の瞳を輝かせた。

やっと見つけた……。目障りな弓使いめ、子憎たらしいリリーの前にお前を血祭りにあげてやるわ。

殺戮の喜びに、楽しげともとれるリズムでがらがらと尾を鳴らします。

ひどい悪寒を体全体に感じながら、ラピスは弓を持つ手をぎゅっと握り締め、白蛇の方向に精神を集中させた。敵も警戒しているのだろう、微妙な距離をとりながら、ラピスの出方を覗っている。ところが、その時、

何かが、つんと彼の腕を引っ張るのだ。

「ココっ！お前っ、何でラガーと一緒に行かなかったっ！！」

ラピスは、慌てて腕の方向に顔を向ける。

紅の髪を陽光にきらめかせ、くるりとした茶色の瞳を輝かせた少女。

例え、それが見えなくても、体中からほとぼしる元気なオーラはすぐに判る。だが、

迂闊すぎた。普段なら、ココならすぐにわかったのに……今回ばかりは、まるで察知できなかった。

「私がこっそり、白い鳥から降りた事すらわからなかったなんて」

ココの口調は、半分は心配そうで、後の半分は相当に怒っていた。

「そんなんで、ここからどうやって逃げるって言うの？だいたい、そんな頼りないラピスを、私が置いて行くなんて本気で思ったの？！私はラピスの“眼”なんですよ！そうなってくれて言ったのは、いったい何処の誰でしたっけ？！」

「今となっては、そんなもの、余計なお世話なんだよ！あいつが狙ってんのは、俺一人なんだ。むざむざ、危険に飛び込む馬鹿がいるかっ！」

ラピスがそう叫んだとたん、轟音がとどろいた。白蛇の長い尾が、二人のいる、すぐ横の床を打ち砕いたのだ。

王妃が化身した白い化け物は、先手を取ったとばかりに、鎌首を大きく空にもたげ、獲物に向かって毒液を吐きかけてきた。ココをぐいと自分の方に引き寄せ、ラピスは、それこそ全身を目にして、敵の位置を見極める。正直言って、ココがいないと、他の物は勘に

頼るしか知る術がなかった。それなのに、王妃の一挙手一投足だけは、手にとるようにわかってしまう。

毒液で溶けた床からは、硝煙めいた焦げた臭いが漂ってくる。コは、大破した階段を見つめて、焦った声でラピスに言った。

「駄目！一階へ行く階段は壊されて、下にはゆけない」

「なら、とりあえず上へ逃げろ！」

＊ ＊

王宮の中庭

“まるでクソまみれの粘土細工みたいだ”

地面の中から、ぼこぼここと現れたキャリバンたちを見据えて、ジヤンは吐き気が胸からこみあげてきた。

王宮の整備された白砂利の庭は、今や見る影もなく、ぬめぬめと悪臭を放つ泥沼に姿を変えていた。その中から口だけをぽっかりと開いた土くれの塊がいくつも顔を出している。

醜くすぎるその姿は、彼らの心の奥底にわだかまる、卑しい欲望や感情を恥じもしないで、白日の下に曝け出しているではないか。

とりあえず、王女たちは全員、王宮から出て行けたみたいだ。あとは、ラガーを助けるだけだが、ゆっくりやってる場合じゃないな。例えば、時間に余裕があつてとしても、ジヤンはそうしたくはなかった。嫌だった。一刻も早く、目の前にあるおぞましい泥の塊をどうにかしてしまいたかった。

「しゃらくさい。ちょこまか出てこないで、一斉に現れろ！でなきや、こっちから先にやらせてもらうぞ。お前ら、全部、一気に片付けてやる！！」

ジャンの体が蒼く燃えた。手のひらを大きく開いた彼の右手が、うごめくキャリバンたちに向けられた時、怒号のような声が地の底から響いてきた。

“ フィールドチェンジ・ソレアイト！ ”

ぴしぴし、ぴしぴしと、王宮の外側からきしんだ音が聞こえてくる。その音は高速の円を描き、輪を縮めながらジャンが立っている中庭に集まりだした。目に見えぬ音の波紋に色をつけるように、ジャンの体からほとばしった蒼の光が、その上を流れてゆく。

光が中庭全体を覆いつくした時、泥の上に顔を出していたキャリバンたちは、

“ な、何だ？ 体が……体が固まってゆく…… ”

一様に苦しい悲鳴をあげた。

足元がつっぱり、胸が詰まり、顔がこわばる。

そして、声が出せなくなった時、彼らは、ようやく、ぴしぴしとひしゃげたその音は、自分自身の体が奏でていた音……だという事に気がついたのだ。

あれほど、どろどろと王宮の中庭にはびこっていた、キャリバンたちの姿も泥も今は見る影もない。

中庭のキャリバンたちは固められ、硬質な岩石と岩砂の地面に様を変えられていたのだ。

「崩れろ！！」

ジャンは、命令するように大地に向かって声をあげた。

すると、岩石の像に変えられたキャリバンたちの体に無数の亀裂が走りだした。それが風が吹きつける度にぴしぴしと音をたてながら、崩れていった。

中庭のあらゆる場所で、キャリバンが崩れ砂塵が舞った。ジャンは、少し哀れむような目をしてそれを見ていた。

「ソレアイトは地中のマグマから出来た硬質の岩石だ。僕は、泥でできたお前たちを、がちがちに固まった鉱物に変え、そして砂に戻したんだ」

砂嵐のような風が、悲鳴のような唸りを上げて、王宮の中庭を吹き抜けてゆく。

「もう、二度と還ってくるな！永遠の砂粒になって、この世の果てへ飛んでゆけ」

半分以上も壊れてしまった王宮と、崩れてゆく中庭の光景は、戦争が終わった後の廃墟みたいだった。

ゴットフリーが壊さなくても、もうこの国は壊れてしまっているんじゃないのか？

それでも、王宮の向こうから響いてくる白蛇の雄叫び、王妃に操られた宮廷内の“物”や“者”の怪しい息づかい。白い霧をはぎとられ、不気味に姿を現した最上階のない西の尖塔。

まだ、中身は何も変わっちゃいないんだと、ジャンは首を大きく横に振った。すると、その時、

「あれは？」

王宮の方向から、巨大な白い鳥が飛んでくる。そして、その背に乗っているのは……？

「ラガー！！良かった、無事だったんだな！」

ジャンは万遍の笑みを浮かべ、跳んでくる白い鳥にちぎれんばかりに手を振った。ところが、

「ジャン、早く王宮へ行ってやれっ！でないと、ラピスとココが白蛇の餌食になっちゃうっ！！」

急降下をしながら、まくしたてるように言った、その言葉に、ジ

ヤンの心は再び大きく荒れだした。

「ラピスの奴、足を痛めた俺をかばって、一人で白蛇に向かっていきやがった。それにココがついて行って……」

その言葉を言い終わらないうちに、ラガーは白い鳥から飛び降り、これに乗ってさっさと行けっ！」とジャンの手を強く引いた。

「わかった！でも、ラガーは?!」

「俺はそこらへんの馬を飛ばらって、王女たちの後を追う！だから、お前は早く行けっ！」

“天喜の白い鳥”が再び、大きく羽を広げた。白い翼が風をきって上にあがろうとしたその時、その背から、ふとジャンは、ラガーに目を向けた。

「ラガー、お前、足は？痛めてるんじゃないのか？」

「そんな事どうでもいいから、さっさと行くんだったっ！」

追い立てられるように、空に舞い上がった白い鳥。その後姿を見送ってから、ラガーは不可解そうに、自分の足に目を落とした。

何でだ?……直ってやがる……。

あんなに赤く腫れ上がって、歩けないほど痛んでいた俺の足が……。

Chapter 65

ラピスの手を取り、ココは白蛇に壊されていない東の階段を駆け上がった。しかし、その上は、3階の天井から降ってきた瓦礫の山にうずもれている。これ以上は、上にも行けない。白蛇は、彼らが通った道筋を巨体で崩しながら後を追ってくる。

懸命に逃げ道を探して、ココは目をこらしてあたりを眺めてみた。

ガルフ島で、だてに泥棒家業はやってなかったもん。大丈夫、諦めたりしない！逃げ道は必ずどこかにある。

くじけそうになる自分の心を自分で励ましてみる。すると、

その視界に、3階から別棟に続く渡り廊下が飛び込んできた。廊下の奥にある階段を上れば、ラピスとココが最初に白い鳥で降り立った、居館の屋上へ上がる事ができる。

「ラピス、こっち！！」

ぐいと、ラピスの腕を引っ張りながら、懸命に廊下を走り階段を駆け上がる。見えないとはいえ、ラピスは少しのナビがあれば、従来の勘の良さでココの意思を読み取って後についてきてくれる。巨体の白蛇が落ちてくる瓦礫に手こずっている間に、二人は驚くような速さで、居館の屋上に上がっていった。

すると、こちらに向かって飛んでくる白い鳥が見えてきたではないか。その背にジャンの姿を見つけて、ココは歓声のような声をあげた。

「ラピスっ、ジャンだよ。ジャンが白い鳥と一緒に来てくれた！」

「助かった！何とか、間に合ってくれたんだな」

「こっちだよ！こっち。白い鳥さんっ、早く降りてきて、私たちはここっ！！」

強く握り締めていたラピスの手を離し、ココは、居館の屋根の中央にある張り出し口に駆けてゆくと、そこから、空に向かって大きく手を振った。ところが、ほっと息をついたのも、つかの間、ラピスは、全身を駆け抜けてゆく悪寒に気が遠くなるような恐怖を覚えた。

「ココっ、さがるんだっ!!」

その瞬間、張り出し口の真下から巨大な白い鎌首が、湧き上がってきた。ココとラピスが居館の屋上に向かうことを予測した白蛇は、王宮の外側へ体をくねらせ、それを大きく上へ伸ばして、彼らの逃走経路をふさぎにかかったのだ。

驚いて後ろに倒れたココに、白い牙を向ける。だが、白蛇がもたげた鎌首を動かす前に、電光石火のような弓矢が、まだ潰されていない白蛇の左の目に向けて飛んできた。

グワアアアッ!!

右の目は、すでに射抜かれ視力を失っていた。矢が刺さった左の目からは、耐え難い激痛がこみ上げてくる。それに加え、全身を貫くような凄まじい衝撃。

あんなちっぽけな弓に、何でこんな力が……!!

白い大蛇は、ラピスの矢から伝わってくる痛みから逃れようと、狂ったような仕草で何度も鎌首を振り回し、空に恨めしげな咆哮をあげた。

「目を潰されたくらいで情けない声をだすなよ。条件が俺と同じになっただけじゃないか」

弓矢をのたうちまわる白蛇に向けながらも、ラピスは近づいてくる白い鳥の羽音に注意深く耳を澄ましていた。

見えなくても音は聞こえる。風の流れだって皮膚で感じ取れる。今まで、自分が持って生まれた特殊な感覚ばかりに頼っていたが、こうしてみると、色々な事が再び頭の中に見えてくる。

＊ ＊

一方、“天喜の白い鳥”の背から事の次第を見つめていたジャンは、ラピスとココに向かって大声で叫んだ。あと少し飛べば、ジャンは彼らの元へたどりつける。

「矢狭間の見張り台の上に白い鳥をつけるから、そこに登って待っていてくれっ！あの白蛇がまた襲ってこないうちに」

さすがに見張り台に上るには、目が見えず、王宮で白蛇以外の物の察知もできなくなってしまっているラピスには、ココの誘導が必要だった。

手を貸してもらい、矢狭間に這い上がってから、まず彼が先に見張り台に上った。急がなければ、射抜かれた矢を振り落とした白蛇が徐々に体をこちらに向けだしている。ところが、ラピスがココに手を伸ばし、その体を上につ引っ張り上げようとしたその時、

「あっ、ロケットが……」

鎖が何度も切れてゆるくなっていた銀のロケットがココの胸から外れて、ところどころと居館の屋根を転がっていつてしまったのだ。ココにとっては、父の写真の入った掛け替えのないロケットだ。不意に自分の手を振りほどき、駆けていったココにラピスは、叫びのよな声をあげた。

「ココっ！！何やってんだっ！早く戻って来いっ！！」

王妃が変化した白い怪物が、再び鎌首をもたげだした。のっそりと自分に傷をつけた忌々しい弓使いの気配に向かって、体を伸ばす。

奴も見えないんだ。だから、余計に俺の気配を強く感じている。そして、なりふり構わず回りを叩き壊しながらこちらの方角へやっ

てくる！

駄目だ！白蛇と俺の間にはココがいる。さっさと白い鳥に乗せてしまわないと、あいつも一緒に潰されてしまうぞ。ラピスは見張り台から飛び降りると、大声でココの名を呼んだ。

何処にいる？早く答えてくれ！そうしないと、今の俺にはお前の位置がわからない。

「ココっ！答えろ、何処に行った！？白蛇が近づいてくるぞ、早く俺の所へ戻って来いっ！」

＊ ＊

「あいつら、一体、何、やってんだっ！」

白い鳥はもう、王宮のすぐ手前まで来ていた。それと同じく白蛇も、ココたちに近づいてきている。だが、たまりかねて、居館の上に飛び降りようとした時、

「おいっ……！！」

ジャンは、焦ったように大声をあげた。

事もあるうに、天喜の白い鳥が、王宮の居館にくるりと背を向けてしまったのだ。その背で立ち上がろうとしていたジャンを邪魔するように、白い鳥は翼を大きく羽ばたかせ、王宮とはまるで逆の方向へ飛んでゆく。

「どこへ行く気だ？！早く、戻れっ！ラピスたちが白蛇にやられちゃうじゃないかっ！！」

だが、白い鳥はジャンの言葉など、まるで聞こえない様子で速度を増しながら、王宮から飛び去っていった。

その時、ココは居館の屋根の隅まで転がった銀のロケットを拾い上げたところだった。ロケットを手にして、ほっと息をついたとた

んに、ココの耳に届いたのは、自分と呼ぶラピスの声と、手が届きそうな位置までココに近づいていた白蛇の吐息だった。

「ラ、ラピスっー！！助けてっ、化け物に食べられちゃうっ！！」

「ココっ、そこかっ！！」

矢を射おうと、ラピスは手を背にまわした。ところが、矢を入れていた袋がばさりと下に落ちてしまった。焦って拾い上げようにも布地に矢がからまって上手く取る事ができない。

畜生！何で、こんな時に！

弓を投げ捨て、ココの声がした方向に身を投げ出すように駆けてゆく。

「ラピスっ、こっち！こっちだよっ！！」

その声を聞き取ったラピスと白蛇が同時に、ココに向かって爆進した。

「ココっ！捕まれっ！」

そして、ラピスがココの体を自分に引き寄せたと同時に、白い怪物は牙を向き、真っ赤な口を二人に向けて大きく開いた。

グオオオオツツツ！！！！

地を揺らすような白い大蛇の唸りが聞こえる。その音は心なしか、勝ち誇ったかのように軽やかなリズムで響いてくる。

ざまあみろ、弓使いめ、血祭りだ。私を散々、小家にした報いだ。

居館の床に投げ出され倒れたままの状態で、ココは魂が抜け落ちた亡者のように頭上を見上げた。

ばたばたとおびただしい量の鮮血が、空から落ちてくる。それが、居館の屋上を紅に染めてゆく。

「ラピス……」

その体は、白蛇のきつく閉じられた口に挟みこまれたまま、力なく宙に浮いていた。するどい牙が体に食い込み、そこからは、ココが今まで見た事もないほど多くの血がしたたっていた。

「ココ……に、げろ……」

やっと出せた声で、ラピスが言った。

お前だけでも……逃げてくれ

請うようなラピスの声音に、ココは身を震わせた。

これって夢だね。私、きっと、ものすごい怖い夢の中に、今、いるんだ。

もう、現実がわからなかった。いや、それを知りたいとは、ココは少しも思わなかった。

Chapter 66

このまま、何も見ずに逃げていってしまいたい。

それでも、目の前には血まみれのラピスを食らいこんだ白蛇が、大きく鎌首をもたげている。

嫌だ……。こんなのは絶対に嫌！

その気持ちが胸から溢れそうになった時、ココの脳裏に冷たく、けれども心を奮い立たせるような低い声音が浮かび上がってきた。

“何だ、今ごろ怖気づいたのか。この城の迷宮で、レイピアを大蛇に突き立てた事のある娘が……”

ココは、はっと茶色の瞳を見開いた。

そういえば、……ゴットフリーと私が、この白蛇の片割れに襲われた時……

ココは、思わず自分の腰に手をまわす。私って何て馬鹿！こんな場所にラピスをおいて、一人で逃げようだなんて。

王宮に来る前にラガーから、手渡されていた短剣。その柄を両手で握り締めると、ココは白蛇を睨めつけ、

「白蛇の馬鹿ーっ！！　ラピスを離せっ！！」

大声で叫びながら、形振り構わず白蛇の胴体にその刃を振り下ろした。

それは巨大化した白い怪物にとっては、蚊にさされたほどの衝撃

だった。ところが、

「私がやらなくても、ゴットフリーがお前を退治するんだから！それに、レインボーヘブンの欠片だって、みんな、私の味方なんだよっ！」

そのココの声に呼応するように、白蛇の喉元が小さくきらりと輝いた。その光はくるくると弧を描きながら徐々に大きくなってゆく。

な、何っ！　わ、私の首が……

身をえぐられる痛みが、喉の奥から込み上げてきた時、白蛇は、忘れかけていた“水の輪”の事を思い出した。

取り出そうにも取り出せず、咽喉に深く食い込んでいたウォータ・リング。

それは正体を見破られた王妃が、エターナル城の礼拝堂から逃げる時……レインボーヘブンの欠片、紺碧の海―BW―から投げつけられた物だ。

高速で回転する水の刃。それが空中へ飛び出したと同時に、

グアアアアツツッ！！

白蛇の苦悶の叫びが空に轟いた。

白い肉片が、どす黒い血飛沫になって宙を飛び散る。

次の瞬間、白い化け物の首は大きく刃を広げたウォーター・リングによって、胴体から真っ二つにかき切られた。

畜生……、あと少しだったのに……あと少しでグランパス王国を手に入れる事ができたのに……

呆然と空を見上げるココの上に、その口元からようやく開放され

たラピスの体が落ちてくる。すると、自ら繋がりを解いたウォーター・リングが、水の粒子に姿を変えてラピスの体をゆるりと取り巻き出した。

薄く張られた水の膜に取り巻かれながら、ラピスが自分の横に降りてきた時、ココは初めて大粒の涙を流した。

「ラピス……しっかりして」

体に白蛇の毒がまわり牙に傷つけられた状態のラピスは、手の施しようがないほど、血にまみれて弱りきっていた。それでも、わずかに右手を動かし、ココを自分のそばに呼ぶ。そして、

「俺は、もう……駄目だ」と、そっとココの頬にその手を伸ばした。指先におちてきた少女の涙を感じてか、消え入りそうな声で言う。

「いつも悪態ついてるけど……、タルクが言ってた……ココって可愛い顔してるんだってな。紅の髪に……茶色の瞳……。どうせ死ぬなら、一度は……自分の目で見てみたかったなあ……」

「ラピス、死ぬなんて言っちゃ駄目っ！ ジャンが来たらきつと、力を使って直してくれるから、そんな事言わないで！！」

乞うように言った、ココの時間間隔は、完全に麻痺していた。わからなかったのだ。ジャンを乗せた白い鳥がすでに、王宮から飛び去ってしまった事が。

それを知ってか知らずか、ラピスは口元に軽く笑みを浮かべた。その笑みが消えると共に、ココが支える体から次第に力が抜けていった。そして、ぱたりと自分の頬にかけられた手が下におちてしまった時、

「ラピスっ！！ だめ！ だめなんだってば！」

ココは、懸命にラピスの名を叫んだ。けれども、返事は返ってこない。

「嫌だ……こんなのは、嫌！」

ラピスの体を抱きしめたまま、ココはわんわんと声をあげて泣い

た。何で、ロケットなんか拾いに行ってしまったんだろう。とうに死んでしまっている父の写真なんかより、生きているラピスの方がずっと大切だったのに……。

ラピスの眼になるどころか、私がラピスを死なせてしまったんだ。

胸からとめどなく溢れてくる後悔の思いにさいなまれ、ココには泣く事以外に、もうなす術が見つからなかった。

けれども、その背後では、白蛇の胴体が失った首を捜すかのよう
に、うねうねと蠢きだしていた。

白蛇の体には、すでに王妃の意思というものは宿ってはいなかったが、その猛烈な憎悪とグランパス王国への断ち切れぬ執念を引き継いだ白蛇の体は、首を失くした後も尚、その思いを断ち切れずにいたのだ。

引きちぎれ、叩き潰せ、串刺しにしろ。

体に残された出会ったすべての物を、破滅に導こうとする暗い思い。それを、証明するかのよう
に、白蛇は巨大な尾の尖端を前方に見える獲物に狙いませた。

ところが、ココの周りには、白蛇から醸し出されるどす黒い感情とはまた別の空気が、急速に広がり出していたのだ。

苦しくてたまらない少女の胸の内に、すうっと入り込んできた清涼な風の流れ。

何だろう……こんな時なのに……この澄んだ感じ……。

違和感たっぷりの不思議な気分で見渡してみる。けれども、何も見当たらない。その時、抱えたラピスの体がかすかに動いたような気がして、ココは真っ赤に泣き腫らした目を手元に向けた。

緑の光……？

ラピスの体から、薄ぼんやりとした緑色の光がほとぼしっている。

ジャン？ ううん、ジャンの光は蒼いはず……なら、これは？

すると、

「まったく、ひどくやられたもんだ……」

「……え？」

ココは思わず自分の耳を疑ってしまった。呼んでも呼んでも答えなかった、ラピスの口から、そんな声が漏れ出てきたではないか。驚くココを気にもとめず、緑の光は、瞬く間にラピスの体を染め上げていた血の色を消し去り、その回りに透明な光のベールをかけながら、深くつけられた傷を癒してゆく。

「き、傷が……消えた……？」

ジャンじゃない。これ、ジャンの力じゃないよね。

次の瞬間、ラピスの顔に目をやったココは、啞然とそれに見入ってしまった。

「ラ、ラピス、ラピスの目、目が……！？」

その固く閉じられた両のまぶたが、ゆっくりと、ゆっくりと開いてゆく。

花緑青の瞳。

水晶よりもさらに深く澄んだその色の。

驚きすぎて腰を抜かしそうな少女にその瞳を向け、優雅に微笑みながらラピスは言った。

「ああ、タルクが言った事って本当だ。ココって、やっぱり、かわいい顔してる」

それから、自分を支えていたココの腕をそっとはずすと、深い傷などなかったかなように、すつとその場に立ち上がった。

「あ、あんた、誰っ！　ラ、ラピスじゃないでしょっ！」

「ココったら、今の今まで一緒にいたのに、何、寝とぼけたことを言ってるんだ？　ラピスだよ、正真正銘の」

冗談じゃないわよ。姿や声は同じでも、こいつは違う。ラピスじゃない！

少女の心の中で、先ほどの悲しい気持ちが一気に吹き飛んでいった。

「ラピス？　ううん、違うもん！」

「何だよ？　おかしい奴だな。もしかして、白蛇に追いかけられすぎて頭が混乱しちまってるのか？」

からかうような彼の笑みを指差し、ココは叫んだ。

「だって、だって、ラピスは……ラピスは……そんな風に上品に笑ったりしない！！」

すると、青年は、半ばおもしろそうで半ば困ったような緑の瞳をココに向けた。

「あんたは、ラピスじゃない。だって、私は知ってるんだから！」

“エターナル城に、もう一つのレインボーヘブンの欠片が眠っている。それも、水晶の棺に納められて”

城の迷宮で、ゴットフリーと一緒に迷い込んだ西の尖塔の最上階。あの時に見た花緑色の瞳。その情景が、脳裏に湧き上がってきた時、あそこにいたのは偽者だったって、ジャンが言ってた。本物は…

…よりによって、こんな所にいたなんて！

ココは、思いの丈をぶちまけるように目の前に立った青年を指差し、その名を叫んだ。

「レインボーヘブンの欠片、“樹林”！！」

Chapter 67

「騙されないからっ！ まさか、あんた、ラピスの体をのつつちやたんじゃないでしょうね！ そんな事になってるんなら、私は絶対に許さないんだから！！」

「えーと……でも、ココがどう思おうと、俺は本当にラピスなんだよ」

「なら、あんたは“樹林”じゃないって言うの？ ラピスの傷を消し去った緑の光と、その緑の瞳！ そんなのって、レインボーヘブンの欠片“樹林”以外にはありえないじゃない！」

「そう言われても、困る……」

誤魔化さないでっ！ と、反論してくるココを制止してから、彼はその手で前方を指差した。

「そんな話より、俺は視界に入ってきたあの目障りな白蛇を仕留めてたくて、うずうずしてるんだけどな」

見えるって言うのは、見たくない物でも、見ろって事なんだよな。

迷惑そうに眉をしかめながら、少し先の場所に落ちている弓矢に手を伸ばす。ココを白蛇から助けようとした時に、誤って落としてしまったラピスの弓矢だ。すると、それらは、磁石に引きつけられるようにひゅうと宙を飛び、青年の手の中にすっぽりと納まってしまった。

きょとんと、目をぱちくりさせているココには気もとめず、ラピスは手にした弓に矢をつがえて、自分の瞳の焦点をぴたりと狙いの的に合わせた。

白蛇の尾先が、しゅうしゅうと不気味な音をたてている。血祭り

にしたはずの天敵ーラピスーの無傷な姿を目の当たりにして、白い怪物は焦りと怒りが混濁した激情をむき出しに、体を大きく上へしならせた。すると、ウォーター・リングに切断されたはずの白蛇の頭が、黒い影となってその切断面にぬるりと沸きあがってきたではないか。

それは、現世を諦めきれない白蛇の怨念が作り出した本体の鎌首の虚像。残された白い体の上で、その頭が恨みの咆哮をあげる度に、空には奈落の底で熾された紅の炎が吹き上がった。

「その血塗られた紅の色、禍々しい光！ やはり、白蛇をあやつっていたのは、お前たちだったんだな！」

その紅の光は、すべての生きとし生けるものを恨み、出会った物を破滅におしやろうとする。

“海の鬼灯”

緑の瞳の弓使いは、手にした弓を前に差し出し、叫ぶような声をあげた。

「ディアナリス ボウ！」

その瞬間、彼の手元から眩いばかりの銀の光が溢れ出した。すると、見る見るうちに小振りだったラピスの弓の丈が、上下に長く伸び出したではないか。

「え、ええっ！！」

目前で形作られてゆく巨大な弓。空から落ちた月の雫のように煌く銀の弓成りに、末弭から本弭にかけて、凜と一筋に張られた弦。夜明けの空に残された三日月が、地上に落ちてきたかと思紛うほどの精錬な輝きを彼の背中越しに見ていたココは、その様と弓使い

の姿を交互に見合わせ、心底驚いた表情で目を瞬かせた。

自分の前に立っている　一ラピスのような青年―
だが、その髪は、長弓の輝きを受け銀色に輝いている。
風になびく銀の髪に、花緑青の澄んだ瞳。

「レインボーヘブンの欠片“樹林”……」

咄然とそう呟いた少女の方に涼しげな緑の瞳をむけ、

「まあ、そう呼んでくれても、今は構わないけど」

意味深な声音でそう言ったかと思うと、弓使いは、彼の背丈をとうに越えてしまった弓に番えた矢を思い切り後方に引いた。

次の瞬間、白濁した空気を二つに切り裂きながら、敵に照準をびたりと合わせた銀の矢が高速で飛んでいった。

ギヤアアアッ！！

その矢が白蛇の本体から伸びていた鎌首の虚像を貫いた時、断末魔の叫びが地の底から轟き、黒い影が一斉に空に飛び散った。

上空に激んでいた紅の灯が嬉々としてそれらを飲み込んでゆく。
だが、その紅の灯を生み出し、空に吹き上げたのは、それらに今飲み込まれようとしている鎌首の影だったのだ。

我が身を我が身が食らってゆく。

残酷な紅が更にはびこりだした王宮の空を見上げて、ココはぞくりと身を震わせた。

再び首を失った白蛇の本体は、次の弓が飛んでくるのを嫌ってか、うねうねと苦悶の舞踏を舞いながら王宮の居館の屋根に這い上ってゆく。

「樹林っ、あいつを逃がさないでっ!!」

思わず、そんな風に彼の名を呼んでしまったココに、
「了解」

小気味良さげな緑の瞳を少女に向けた射手は、電光石火の早業で弓を引き、逃げてゆく敵に向かって再び銀の矢を放った。

それは、狙った獲物に向かって数ミリの誤差もなく飛んでゆく。

胴体を射抜かれた時、白蛇は大きく体を仰け反らせた。研ぎ澄まされた銀の輝きが白濁した体を侵食する。それに耐えかねたように白蛇は忌々しげに尾先を何度も床に叩き付け、怒号のような轟音を立てながら居館の床へ倒れこんだ。

「やった! 仕留めた!」

ところが、そんなココを樹林は“まだだ”と、言わんばかりに手で制した。

目前でうめき、身悶えながら身をもたげる白蛇。

その攻撃圏内に身を置いている二人は、固唾を呑むようにその様子を眺めている。すると……

おもむろに白蛇の本体がめりめりとひび割れ、そこから、おびただしい数の紅の灯が湧き出てきたではないか。

「海の鬼灯!!」

二人の目の前で、白い体から漏れだすその紅の灯の数は、巨大に膨れ上がり、白蛇の抜け殻の上に徐々に物の形を作り出していった。

一つの頭が、八つの蛇頭に分かれてゆく。

胴体から伸びた紅の灯は、巨大な蝙蝠を思わせる尖った翼を生成し、

炎のように燃えたつ尾は、しなりながら火の粉を辺りにまき散らす。

それが紅の翼を大きく広げ、八つの頭から、殺意に満ちたおぞましい咆哮を空にあげた時、

モンスター
「怪物……」

ココは、その怪物のあまりに醜悪な姿に体の震えを止められず、そばにいた樹林に身を寄せると、その腕を強く握り締めた。

＊ ＊

後方から獣のような雄叫びが轟いてくる。

ジャンは不安に心を押しつぶされそうな気分で、王宮から遠ざかってゆく白い鳥の背から、何度も何度も後ろを振り返った。建国記念祭を賑やかに彩っていた花々や祝い旗は、散り散りにちぎれ飛び、抜けるように青かった空は、地表の裾野から徐々に紅の光に侵食され始めている。

「戻れよ！ 何でだ！ 何で、お前は僕がラピスたちを助けに行こうとするのを邪魔するんだ？」

だが、その問いが聞こえないかのように、天喜の白い鳥は羽音をさらに高めて王宮とは反対の方向に飛翔する。やがて、王宮の西側にあたる小高い丘が視界に入ってきた時、

あれは、クーデターの計画で、タルクと王女がみんなを連れて行く予定になってた西の丘じゃ……？

その考えが頭をよぎった瞬間、ぞっとするような悪寒がジャンの背筋を通り過ぎていった。

とてつもなく悪意にまみれた塊が、こちらに向かってやってくる

……。

唇をかみしめ、視線を遠くに向ける。レインボーヘブンの欠片”大地”の力をその体に秘めた彼の目は、障害物がなければ千里の先まで見通すことができる。瞳を細め、その焦点を遥か西方に合わせた時、

「海の鬼灯!!」

西の空を炎の色に染めながら、おびただしい数の紅の灯がグラン・パープルに集結し始めている。通り過ぎる場所のすべてを破壊し飲み込んでゆく紅蓮の葬列。

ジャンは、それを正視するのが耐え切れぬように、天喜の白い鳥に視線を戻した。

「そうだったのか。エターナル城の崩壊を待ちわびながら、ずっと姿を潜めていた海の鬼灯がグラン・パープルに集まりだしたのを知って……だから、お前はこんなに急いで、僕をみんながいる西の丘へ連れて行くこうとしてるんだな」

その時、ジャンの脳裏にクーデターを起こす前日にラガーから言われた言葉が浮かび上がってきた。

”人外境のことはもうお前に任せた。だから、何があってもグランパス王国を守ると言った、その言葉をお前は違えるな!”

ジャンは頭の中でそれを何度も繰り返し試してみた。もちろん、嘘をついた覚えはなかった。だが、やはり、心には釈然としない思いが残る。

「グランパス王国の国民を守るために、今まで一緒に過ごして、彼らよりずっと僕らに良くしてくれた、ラピスやココはもう見捨てろって、お前はそう言いたいのか!? そんな話ってあんまりじゃないか!」

だが、巨大な翼を広げた天喜の白い鳥は、ただ淡々と西の丘があ

る方向へ飛ぶばかりで、ジャンの問いには、答える素振りも見せようとしなかった。

Chapter 68

「畜生！ 馬なんて一頭も残っちゃいねえ」

兵士が残っていた馬を奪い取って、王女たちが避難していった西の丘へ向かうとしたラガーは、ぽつりと取り残されてしまった王宮の中庭で、愕然と辺りを見渡した。

ジャンが砂粒に変えたキャリバンたちが去った後の中庭は荒れ果て、瓦礫と砂粒が混じり合った、からからに乾燥した風が吹くばかりで、自分以外にまともな生き物がいるとは思えなかった。おまけに、王宮へ続く小道の向こうから獣の遠吠えに似た不気味な声が響いてくる。

戦場にたった一人、取り残されてしまったような圧倒的な不安。ぞくりと冷たい悪寒が背中を通り抜けた瞬間、ラガーは、形振り構わず王宮の出口に向かって駆け出した。

崩壊する王宮の音と混ざり合った怪物の嘶きが、背後から執拗に追いかけてくる。

見上げた空には、おびただしい数の紅蓮の炎が瀑布のように、主を失ってしまった虚無の王宮に流れ込んでゆく。

白い鳥の背に乗って王宮へ向かった、ジャンはどうしちまったんだ？

それに、ラピスとココは、白蛇から無事に逃げることができたのか？

止め処のない不安。けれども、

とにかく、俺が今やるべきは、西の丘に逃げていった王女たちと合流することだ。

ラガーは必死の思いで王宮の出口へ向かった。だが、妙な違和感に足もとに視線を落とした瞬間、

「な、何なんだ、これは……？」

地面から溢れ出した緑の蔦が、彼の両足を捕えていた。見る見るうちに、それらは足首から膝へと這いのぼってくる。すると、足に絡まる蔦の先に小さな蕾が芽生えだした。緑のがくから浮き出してきた血玉のような紅い蕾。

甘い匂いを放ちながら、それらが大きく膨らんだ時、頭が痺れるような眩暈に襲われ、ラガーは、がくんとその場に膝をついた。

ゆらゆらと揺れるようなおかしい感覚が頭の中に湧き上がってくる。

くそつ、騙されるな！　こんな物は王宮に巣くっている誤魔化しを作り出した幻に過ぎないんだ。

けれども、顔をあげた彼の目前に広がった光景は……

生々しいほどに咲き乱れる、一面の紅の花園。

「……」

ラガーは地面に膝をついたまま、呆然とその光景を眺めていた。すると、こともあろうに次々と数を増やした紅の花々が、醜く顔を歪めた兵士たちに姿を変えてゆくではないか。

血色の軍服を身にまとった殲滅隊

それが、幻影であるか現実であるかも分からないまま、乾いた風が紅の花びらを空に散らす毎に、紅の兵士たちが生み出されていった。そして、エターナル城に向かって高く槍を掲げて歩いてゆくのだ。

「うわああああ!!」

そう叫んで、心に充満した恐怖を外に吐き出さなければ、気が狂ってしまいそうな光景の中で、ラガーは一刻も早くこの場から逃れようと、足に絡まる緑の蔦を護身用のナイフで引き剥がそうとした……が、彼の傍を通り過ぎようとした一人の兵士の視線が、その姿をとらえてしまったのだ。

充血した瞳の兵士の槍が、自分を狙いすましている。それに気づいたラガーは、死に物狂いで、持っていた手榴弾を兵士に向かって投げつけた。

今や、王宮の周りの空も庭も白亜だったエターナル城の概観さえもが、紅蓮の色に変わり果てようとしていた。

お願いだから、消えてくれ!

こんな寒気のする光景は、俺はもう見たくないんだ。

白煙の中に紅の花が散らばり、一瞬、視界が閉ざされる。

すがるような思いで、薄れてゆく白煙の向こうに目をやった時、不意にラガーの襟元を黒い影が掠めていった。

頬に飛び散る生暖かい感触。もともとあった頬の傷をゆがめながら、不審げにそれを手で拭い取る。すると、

「血……だ」

痛みは少しも感じられない……ということとは……ラガーは、足元に倒れこんできた紅の兵士に恐る恐る視線を向けた。

海の鬼灯が邪気だとしても、紅の花を人間に変えるなんて出来るわけがない。まさか、こいつら……生身の人間なのか?

先ほど通り過ぎていった黒い影は、いつの間にか消えうせていた

が、足元で息絶えている兵士は一撃にその影に急所を突かれたようだった。一瞬、黙考してから、きりと唇を噛みしめ、ラガーは受入れたくない事実を胸に刻み込んだ。

この軍隊は、王妃に操られた元々はエターナル城を守っていた生身の兵士たちと、紅の花の幻影の兵士が混ざり合って編成されているんだ。そして、俺たちが闇雲にこいつらを攻撃すれば、生身の兵士までが命を失うって寸法か！

そんな事になれば、もっと多くの血が流れる。そして、人の心に後悔と憎しみの感情が生まれる。

それこそが、紅の邪氣”海の鬼灯”の最高のご馳走なんだ。

「畜生！！ これも海の鬼灯に仕掛けられた罠だったのか！」

ところが、ラガーがそう叫んだ刹那に、東の空に暗黒のような靄が湧き上がった。漆黒の闇が、東から徐々に紅に染まった空を飲み込んでゆく。

おぞまじやかに聳え立つエターナル城を分かれ目にして、グランプルの空は、漆黒と紅の二つの色にくっきりと東西に分けられていった。

王宮の中庭に獣のような遠吠えが響いてくる。それが城の尖塔から空に轟き上がった時、ラガーは恐怖に耐えかねて、両の耳をふさごうとした。……が、

ひずめの音……

東の空から馬の蹄鉄のような音が聞こえてくる。不思議な気分で、その方向に顔を向けてみると、紅の灯を侵食しようとしている闇色の厚い雲の一角が、ゆらりと揺れた。

「何だ……あれは」

ラガーは、その暗黒の闇に一筋の光を見た。闇の奥から地上へと伸びてくる一本の道。そして、そのはるか先の消失点から何かが道をやって来る――黒い点のようなものが――速度を増しながらこちらの方向へ……

「黒い馬だ！ 黒馬が闇の中を駆けて来る！」

周囲に蔓延るおびただしい闇をもろともせず空を駆け下りてくる漆黒の馬。

その姿が、ひずめの音とともに大きくなり、自分のすぐ手前までやって来た時、ラガーは、黒馬の背で手綱をとる黒装束の男に唖然と視線をむけた。

「ゴットフリー……」

その黒髪は、陽光が当たる程に色を変える。日が翳ろえば漆黒に、そして、晒されれば紅の色に。エターナル城の上空を二分して占拠している漆黒と紅。だが、今の彼の髪色は錯雑に入り混じり、見る方向によっては、どちらの色にも見て取れた。

「闇の王……」

愕然とした表情のラガーに、馬上から、凍てつき研ぎ澄まされた灰色の瞳を向ける。その男の背後には、止め処ない暗黒の闇が広がっていた。ところが目を凝らして眺めてみると、その闇は一瞬、人の形をとる時があるのだ。

暗黒の鎧をまとった闇の戦士

すべての敵を闇に引きずり込む、夜叉王、伐折羅の闇の軍。

その戦士たちは、王宮の中庭を占拠する紅の兵士を長槍で突きさすごとに、再び闇に還ってゆく。そして、敵とみなすや、再び人型

の戦士に姿を変える。その無数の繰り返しを続けながら、それらは黒馬に跨る男を援護しつつ、進路を阻む物のすべてを殲滅しながらエターナル城に向けて進軍してゆくのだ。

再び、背後から生暖かい血吹雪が舞い上がった時、ラガーはようやく、身の回りでおこっている事の成り行きを理解した。

さっき俺の横を通り過ぎて、紅の兵士を一刺しにした黒い影……あれはこいつらだったんだな。……で、闇の王……とかになっちゃまったゴットフリーの邪魔をする輩は、紅の花の兵士であろうが人間の兵士であろうが、無差別に切り刻もうってわけなのか。

闇の戦士に攻められた幻想の兵士は、紅の花びらを撒き散らして消滅する。そして、闇の戦士の槍に貫かれた生身の兵士からは、鮮血が飛び散る。

ゴットフリーは黒馬の背で揺れながら、冷たい灰色の瞳で、その様を見つめているだけなのだ。

ラガーは、意を決して、彼を無視して横を通りすぎようとする黒馬に向かって声をあげた。

「警護隊長！　こんな無慈悲なことは止めろ！　海の鬼灯以外にも、紅の兵士の中には、生身の人間だって混じっているんだ。これじゃ、まるで無差別殺人じゃないか！」

だが、馬上の男の荒涼とした瞳が、自分へ向けられた時、ラガーは、ぞくりと身を震わせると、その場から一步も動けなくなってしまう。

そんな彼の慄きを嘲るように、ゴットフリーは皮肉な笑みを浮かべた。低く感情のない声で言う。

「人も人外も俺には関係ないことだ。俺の前を横切ろうとする者は始末する。口を出す者は、闇の戦士が切り刻む」

「そんな……す……少なくとも、ガルフ島の警護隊長であった頃は、お前は住民を守ろうとしていたのに……」

「ガルフ島？ そんな場所は、もう、記憶の果てへ流れて行ってしまった。この我慢がならない程に汚れきった世界は、浄化せねばならぬ。その最良の方法は崩壊させることだ。壊さぬことには俺の気持ちは治まらない。ラガー、お前も命が惜しければ、俺の記憶の外にお前の姿が消えるまえに、さっさとどこかへ行ってしまう。こうやって話しているうちにも、俺はお前がわからなくなる。ただの障害物としか思えなくなる。消えろ！ 目障りだ。もう二度と、俺に声をかけてくるな！」

その暗い声音に、ぞっと身を震わせ後ずさりする。ところが、逃げ出す意思はあっても足が凍りついたように動かない。すると、ゴットフリーの背後からくすくすと笑う声が響いてきた。

「だめよ、あの疎んだ足じゃ、ラガーは歩くことだってできやしない」

その声の主は、黒馬の背に、ゴットフリーと背中合わせに片膝を立てて座り、墨色の扇を優雅に風にはためかせていた。癖のない長い黒髪、それと同色のロングドレス。だが、その裾は辺りを覆う闇の中に溶け込み、その先が見えない。

凜とした漆黒の瞳が自分へ向けられた時、ラガーは、

「霧花！」

信じられないという風に、上ずった声をあげた。

霧花……俺がガルフ島で馴染みにしていたレストランのウェイトレスだった彼女は、実はレインボーヘブンの欠片”夜風”だったのだと、ジャンから聞くには聞いていたが……

故郷のガルフ島にいた頃、少なからず好意を持っていた女性の真の姿を間のあたりにして、ラガーは驚きを隠すことができなかった。

何故なら、彼が知っている”霧花”は、清楚で大人しげな美人という感じで、凄絶と飛び散る血吹雪の中で、涼しげに微笑んでいる”霧花”とは、まるで別の人物だったのだから。

「霧花、邪魔だ。そいつをさっさと消してしまえ」

ラガーの方向にはもう目もくれず、黒馬の手綱を引きながら、ゴットフリーが命令する。

「仰せのとおりに」

主命を即座に聞き入れて、霧花が、手にした扇を右手で一振りすると、それは彼女の手の上で、巨大な黒蝶が羽を開くように大きく空に広がった。

”夜扇”

それは、レインボーヘブンの欠片”夜風”が用いる刀扇。

一瞬、どきりとするような魅惑的な瞳を的の男に向け、今では、支えるのに両手が必要になってしまった巨大な扇を高く空に掲げる。
「ラガー、知ってる？ 私の夜扇の一振りは、硬い岩だって切り裂いてしまう鋭い刃物だってことを」

「や、やめろ！ 止めてくれ、霧花っ！ お前は昔馴染みの俺を切り刻んだりする奴じゃないだろっ」

だが、

「あら、それは違うわ。同じレインボーヘブンの欠片でも、ジャンたちとは違って、私は“闇の住民”なのよ。^{あるじ}主の心が“闇”にあるなら、崩壊の地は安住の場所。殺戮には胸を梳かれる思いがする。だから、ゴットフリーがあなたを消せと言うなら、私は喜んでその命に従うわ」

霧花は高らかにそう笑うと、手にした夜扇を一気に下に振り下ろした。

うわあああああつ

王宮に蔓延った紅の花を盛大に撒き散らしながら、突風に吹き飛ばされてゆく傷の男。

「消し去りましたわ」

背中越しに伝えてきた、小気味良さげな僕の^{しもべ}報告に耳を傾けるでもなく、その主の男はただ無言で、黒馬の手綱を引く。そして、紅の花と漆黒の闇と血飛沫が交じり合う喧騒の中を闇の戦士に守られながら、崩壊を待つばかりの虚無の王宮に進軍して行くのだった。

Chapter 69

東の空をにわかに覆いだした漆黒の闇。それに拮抗する西の空の紅蓮の灯。それらのちょうど分かれ目に聳え立つエターナル城からは、奈落の底へ落ちてゆく獣の絶叫のような凄まじい遠吠えが響いてくる。

東の空から城の尖塔へ向けて、おびただしい闇が渦となり怒濤の勢いで流れ込んでゆく。しかし、闇の勢いに空気の渦が押し上げられ、上空に空白の領域が出来たとたん、西から押し寄せた紅い灯の渦が、猛烈な勢いでその場所を侵食してゆく。

我先に領空を手に入れようと兵を進める、二つの軍の空中戦。その中で、漆黒の闇と邪気の紅は激しくぶつかり合い、それらの進行方向は不規則に曲げられ、螺旋し、黒と紅のまだらの渦は更に大きく禍々しく、グランパープルの空に広がってゆく。

＊ ＊

その頃、エターナル城の居館の上では、ココと、自称“ラピス”のレインボーヘブンの欠片“樹林”が、尖塔の上で大きく翼を広げた怪物の姿を固唾を飲みながら見つめていた。

同胞の紅の灯を阻もうとする闇の軍に苛立ち、怒号の叫びをあげながら、八つ頭の怪物が強風を巻き上げ空へ浮かび上がってゆく。

「樹林、あいつを絶対に逃がさないでっ！！ あんなのに襲われたら、西の丘にいるみんななんて、あっという間に全滅させられちゃう！」

吹きつけてくる生臭い風に懸命に堪えながら、ココが声をあげた。口調は強がっていても、彼の腕を掴んだ手から少女の震えが伝わってくる。緑の瞳の弓使いは小さく微笑み、

「そんなに怖がらなくても大丈夫。ここは、俺が何とかしてみせるから」

「何とかするって……あの怪物をやっつけちゃうってこと？」

「それは、俺の力だけじゃ無理っぽい。やっかいな事に奴の仲間の海の鬼灯に加えて、闇の戦士まで出てきちゃったし……それでも、あの怪物を放っておくわけにもいかないだろ」

「闇の戦士……？」

その言葉の意味がよく分らず、ココは不思議な気分で、東の空から迫ってくる漆黒の集団に目を向けた。

「闇の戦士って、あの黒いやつ？ でも、あれは、大丈夫なんじゃないの」

「大丈夫って！？ お前……それ、本気で言ってるのか？」

樹林は驚き、悪びれる様子のない少女の顔に目を向ける。

けれども、ココは事も無げに、

「だって、海の鬼灯の光は濁ってて気持ち悪いけど、あの闇は、汚れた景色を全部消してくれる……ほら、星のない夜みたいに綺麗だよ」

海の鬼灯には怯えるのに、どうして、あの暗くて深い闇は平気なんだ？

この娘は、一体……？

だが、一瞬、囚われそうになったその疑問を心に押し込めて、

「とりあえずは、あの怪物を止めるのが先だ！ ココ、後ろに下がって」

樹林は、ぐいと少女を自分の後ろへ押しやった。それから、握り締めた銀の大弓を手前に差し出し、王宮の向こうに見える、まだ少しだけ蒼い色を残していた海の水平線の位置に重ねるように、それを真横に向けた。再び銀の光を放ちだしたその弓が、今度は彼の手

の中で小さくなってゆく。それがすっかり手の中に入り込んでしまったのを確認すると、

「伝え命ぜよ！」

その台詞とともに、樹林は、ゆっくりと手のひらを前方に開いた。

その瞬間、矢のような閃光が、大地と天の境を駆け抜けて行った。水平線の彼方にその光が消えて見えなくなる。それを見届けてから、レインボーヘブンの欠片”樹林”は、闇と紅がはびこる空の彼方に向かって、朗々と声をあげた。

一 東方の蒼海、西方の霊峰、北巖の大地、南空を渡る赤きアルファイド

我は豊穰の地の欠片、幾億の緑生は我が命の拠点なり

四神により生み出され、目覚めを待つ生命の種子よ、ここへ来たれ古より彼の地を護る虹の女神よ、その芽生えに生命の息吹を与えん—

深く澄みわたるその声と、王宮の居館から中庭を見下ろした”樹林”の凜然とした立ち姿に、ココは目を見張る。やっぱり、こいつはラピスじゃないと、改めてそう確信した時、ちらちらと彼女の頭の上に銀色の光が降ってきた。

「何……これ？」

エターナル城の上空に渦巻く漆黒と紅の隙間を縫いながら、小雪のように降りてくる光の粒。

自分の腕を引っ張る摩訶不思議な表情の少女を振り返り、樹林は優雅に微笑んだ。

「俺が天の四方で育ててる草木の種。集められた種は大地に根づき、芽を出し、そして花を咲かす。レインボーヘブン産だから、それは美しくも強靱な花を咲かせるぞ」

だが、

「馬っ鹿じゃないの！？ 今から種を植えて育つの待ってたら、怪

物を止めるどころか、花が咲く頃には、グランパープルなんてとつくの昔に潰されちゃってるし」

そんな風に悪態をつき、居館の床にごろんと腰を下ろしたココに、樹林は、

「ココ……俺の気のせいかもしれないけど、お前、あの闇を目にしてから、態度がでかくなってないか？ さっきまで、あんなに怯えて震えていたくせに」

「だって、あんたがあんまり悠長なことを言うもんだから」

まあ、いいかと、呆れたように吐息をもらしてから、樹林は王宮の周りをぐるりと見渡した。そして、表情をきりと引き締めた。

空には紅蓮の怪物が翼を広げ、中庭には、エターナル城を目指して血色の殲滅隊が続々と進攻してくる。そして、それを追うように、東の空から触手を広げてくる止め処ない漆黒の闇。

だが、八つ頭の怪物がそれぞれの喉元から吹き上げる、おびたらしい数の紅の灯に気圧され、闇は再び紅の灯に飲み込まれようとしていた。戦況は圧倒的に闇の戦士に不利に動いていた。

闇の戦士は敵か味方か……。わからない。けれども、あれほど多くの海の鬼灯に対抗できるのは、闇の戦士しかいない。今は、とにかくあの怪物を止めることが先決だ。海の鬼灯の勢力をこれ以上、広げさすのは絶対に不味い。

樹林は、自分を納得させるように頷くと、居館の屋根の一番端まで進み、王宮の中庭の沸き立つような紅の乱舞に目を向けた。そして、その中に光るかすかな銀の輝きを見つけると、鮮やかに瞳を煌かせた。

”萌芽”

彼は、小さくそう呟いた。それから、その呟きとはまるでトーンが違う、大地が震えるほどの玲瓏な声でこう叫んだ。

「命の鼓動よ、集結せよ！」

生きとし生ける命を殺ぐ、紅蓮の炎を聖玲なる枷鎖で呪縛せよ！
」

その瞬間、居館の床に座っていたココの体が大きく上に飛び跳ねた。

王宮の中庭が突然隆起しだしたのだ。轟音を伴って大地は裂け、その裂け目から、先程までココたちを追いかけていた白蛇と見紛うまでの巨大な緑の蔓がうねり出てきた。

王宮に咲き乱れる紅の花を、化身の紅の兵士ごとなぎ倒しながら、それは、見る見るうちに、上へ上へと成長する。そして、二つに分岐し、その先を伸ばし、すさまじい速さで天へ羽ばたいている紅の怪物の後を追っていった。

その体を強靱な二本の蔓に、左右からがんじがらめにされた時、紅の怪物は、天が轟くほどの咆哮をあげた。……が、執拗に巻きつく緑の枷から逃れられず、恨みの声をあげる度に、その喉元からは紅の灯が吹き上がった。

「その蔦は、天の四方で育まれた緑の命脈。ちよつとやそつとじゃ切れやしないぞ。さて、どうする？ その呪縛から逃れる手立ては、分裂して元の紅の灯にもどることだが、その瞬間、闇の戦士に、お前たちは取り込まれる。そうすると二度と怪物の姿には戻れないな」

樹林がその台詞を言い終わらないうちに、海の鬼灯の劣勢を感じ取った闇が、八つ頭の怪物が撒き散らした紅の灯を次々に飲み込んでいった。その様を王宮の居館の上で、緑の瞳の弓使いは勝ち誇った笑みを浮かべて眺めていた。しかし、

呪縛して足を止めたは良かったが、このままじゃ、この怪物に勝つことはできない。それに俺の力だって、それほど長く続けられるわけじゃないんだ……。

眉をしかめて、次の策を思案しながら王宮の中庭に目を向ける。
……が、その時、樹林は突然、翳ろいだした辺りの風景に瞳を大きく見開いた。

闇が集まってくる……。

グランパープルの上空に散開していた闇の戦士たちが、一ヶ所に集まろうとしているのだ。

王宮の中庭で残酷な紅に寄生され、意味のわからぬ雄たけびをあげている兵士たちを悉く蹴散らしながら、漆黒の集団がエターナル城に向けて進軍してくる。

その闇の中心にいる漆黒の馬。

そして、その背で手綱をとる黒装束の男は……

「ゴットフリー」

レインボーヘブンの欠片” 樹林は、初めて謁える自分の主の姿に、胸に込み上げてくる憧憬のような畏怖のようなぞくりとする奮えを止めることができなかった。

闇の王

ただ、彼自身は、その主の心が今ある場所の” 闇の住民” 一ではなかったのだけでも。

Chapter 70

大量の濁った紅の灯に今にも飲み込まれそうなグラン・パープルの西の空を、唯一、穢れのない純白の鳥が滑空してくる。

「助かった、やっと、ジャンが戻ってきてくれた！」

崩壊寸前の王宮から逃れ、王女と共に住民たちを率いて西の丘へ来ていたタルクは、上空に見えてきた白い鳥の姿にほっと安堵の吐息をもらした。

海の鬼灯は、かまいたちの刃のように狙った獲物を切り刻む紅蓮の灯だ。タルクやクーデターを起こした仲間だけでは、どう策を練ってみても、その残酷な攻撃から王女や住民たちを守りきる自信はなかった。

「良かった！ 王女もみんなも無事にここに逃げてくることができただな」

と、満面の笑みを浮かべて、西の丘に降りたったジャンに、タルクが嬉々として駆け寄ってゆく。

だが、

「安心するのは、まだ早すぎるわ！」

王女リリーは、きつい紫暗の瞳を二人に向けて、ジャンが降りてきた方向の空を指差した。

大量の紅の灯は、もう、その色のはっきりと目に映る距離まで迫ってきている。その上、東の空からは漆黒の闇が、巨大なブラックホールのようにその勢力圏を広げようとしているのだ。

「とうとう闇の戦士が出てきちゃったか。できれば、あれとは会いたくはなかったんだが……ゴットフリーの奴、やっぱり闇の王になっちゃったん……だな」

やり切れない表情で、そうぼつりと呟いたタルクに、ジャンは、

ただ、こくんと一つ頷くだけだった。

「でも、あいつは……」

ところが、ジャンがその続きを言い終わらないうちに、王女が彼らの会話に割り込んできた。

「あの男が闇の王に！？ まさか、あなたたちがサライ村の宿営地で言ってたのって本当の話だったの？」

レインボーヘブンの欠片”紺碧の海”BWが、海の鬼灯の幻惑から逃れるために王宮の礼拝堂で首を吊った。その事への後悔と海の鬼灯への怒りが引き金となって、闇に心を向けてしまったゴットフリーは、グランパス王国を崩壊させる闇の王になるのだと。

リリーは、以前にゴットフリーがサライ村の借宿で垣間見せた、ぞつとするほど研ぎ澄まされた灰色の瞳を思い出して、ぶるりと体を震わせた。

怖い、あの瞳はとても怖い……。

誰しもが胸の底に隠し持っている心の闇。それを容赦なく見透かしてしまいそうなあの眼光。

口を閉ざし、表情を硬く強張らせる。すると、そんな王女を氣遣ってか、ジャンが話題を変えてきた。

「そういえば、ラガーはどうした？ 僕と王宮の中庭で出合った時に、馬を拾ってここに逃げると言ってたんだが」

リリーとタルクは、その質問に一瞬顔を見合わせ、お互いに分からないと首を横に振る。だが、その時、

「おぉーいい」

彼らの足元から、たった今、自分たちが話題にしている男の声が響いてきたのだ。

「ラガー!!」

ジャンとタルク、そして王女は、三者三様の顔で崖の下を覗き込む。

「助けてくれ。風に吹っ飛ばされて、何とかここまでたどりついたが、もうこれ以上は歩けねえ」

「お前、怪我してるのか？ 王宮の中庭で戦闘でもしたのか!？」

見れば、息絶え絶えの様子で、崖の下に座り込んだラガーの姿は、あちらこちらが破けてぼろぼろになってしまっている。

「すぐに行くから、そこで待ってて!」

ところが、

「ジャンは、ここにいろ! あの紅の灯が何時、襲ってくるかわからない」

白い鳥の背に飛び乗ろうとしたジャンの襟首を、ごつい手でぐいと自分の元に引き寄せたのはタルクだった。

「ラガーは俺が迎えに行ってくる」

そう言って、馬の手綱を手にしたタルクの姿に、ジャンはとび色の瞳を心配げに曇らせたが、確かに息がつまるような紅と闇の均衡が崩れるのは、もう時間の問題だった。

「タルク、くれぐれも気をつけて。ラガーを拾ったら、すぐに戻ってくるんだぞ」

「お前に言われなくても、そうするよ。こんな時に寄り道するほど、俺は酔狂にはできてないんでね」

苦笑いのタルクを乗せて、西の丘を下っていった馬の後姿をジャンとリリーが見送る。すると、彼らの後ろで様子を覗っていた住民の一人が、おずおずとジャンに声をかけてきた。

「おい、小僧。ほ、本当にお前は俺たちを守ってくれるんだろうな？ お前の力は、腕相撲大会や王宮の鉄扉をなぎ倒したのを見て疑っちゃいないが……あの紅だか闇だかに勝てる自信が、お前にはあるんだろうな」

痩せぎすで、顔色の悪い義手をつけた男。

その男が、町の腕相撲大会で、ジャンとタルクをペテンにかけようとしたヤクザだと気づき、ジャンは思わず苦笑する。

「それが例えあんたであっても、守ると言った約束は絶対に破らない。けれども、僕はあの紅の灯を攻撃することはできないんだ。それだけは分かっておいてくれ」

それを聞いて、リリーは驚き、

「攻撃ができないですって、また、何で！」

「五百年前にレインボーヘブンが海に沈んだ時、波に飲み込まれて死んだ盗賊たちの断末魔の声を聞いてしまった僕。その時、持ってしまった彼らへの哀れみの心が、今も僕を呪縛している。奴らが海の鬼灯になって蘇り、どんなに残忍な所業をしても、僕はあの紅の灯を手にかけることはできない。それは、僕にとって、自分の意思だけでは外すことのできない、忌々しい心の枷になってしまっているんだ」

「そ、そんなことって！？　じゃあ、あなたはあの紅の灯　一海の鬼灯　には勝てないっていうの？」

「そう。今、あの紅の灯に勝てるのは、闇の戦士と、そして、ゴットフリー　一闇の王　だけなんだ」

「……でも、もし、ゴットフリーが海の鬼灯に勝ったとしても、闇の王である彼が、この地を崩壊させて暗黒の闇に浸してしまったら……私たちには、もう生きる術など残されていないじゃないの！？」
だが、ひどく不安げな王女の言葉を遮るように、ジャンが言った。
「とにかく、状況がどんな風になろうとも、僕がみんなを守る！」

それが、建国記念祭の前の日に、王宮近くの海岸で僕がゴットフリーと戦った時、奴の剣が僕の心臓を貫かなかった真の理由だと思うから。

胸に湧き上がるその思いをジャンは敢て言葉にはしなかったが、

遠巻きにジャンたちの会話を聞いていた住民たちに目を向けると

「だから、みんなは僕の目が届く場所に、一つになって集まっておくんだ。そして、けっしてばらばらになることのないように、親は小さな子供の手を離さないで。年寄りには若い人が手を貸してあげて」

声高にそう言うてから、天喜の白い鳥の背に飛び乗ろうとした時、それを待ち構えていたかのように、紅の灯の一団が空から急降下してきた。

「みんな、後ろへ下がるんだ！」

敵の攻撃に備えて、手の中に蒼の光を蓄えだす。ところが、そのジャンの上空で、滑空してきた紅の灯の一団が、突然、物の形をとり始めたではないか。

鋭く輝く紅い瞳。燃え立つような紅の髪。だが、その紅は時間が進むにつれて、緑の瞳と長い銀の髪を持つ、人の姿に変化していった。足元まである聖職者のような純白のアルパを風になびかせながら、その人は空中で優雅に微笑む。

「お前！　しょうこりもなく、また現れたのか！？」

偽レインボーヘブンの欠片”樹林”！

”レインボーヘブンの欠片が眠っている。エターナル城の迷宮の果てにある水晶の棺の中で”

その偽りの伝説にかこつけて、ゴットフリーに罠を仕掛けようとした紅の灯。

それが作り出した偽りの欠片。

胸に湧き上がってくる怒りの感情。それをやっとの思いで抑えているジャンとは対照的に、偽”樹林”は、落ち着き払った声音で言

う。

「そんな怖い顔をしないで、どうか、私の話を聞いてください」

「話なんかあるものか！ あんな風に僕やゴットフリーを騙しておいて！」

ところが、その様子を傍で見っていた王女リリーは、紅に染まる空の上から、ちらりちらりと彼女の方へ視線を向けてくる、偽樹林の姿に驚きを隠せないでいた。

あれは……あれは、忘れるはずがない、髪や瞳の色が違ってたって、あの女の人は……！

ジャンは、すぐさま天喜の白い鳥に飛び乗り、空に浮かび上がる偽樹林と対峙しようとした。……が、その瞬間、彼の後ろに飛び乗ったリリーに、

「王女！ 何のつもりだよ。あいつは危険なんだ。だから、早く降りるんだ！」

「嫌よ！ お願い、どうかこのまま、私をあの人の所へ私を連れてって！」

「連れてゆけだって……！？ 一体、どういうつもりなんだよ！」
解せない顔つきのジャンを、紫暗の瞳で見据えて王女は言った。

「だって、あの人は、十年前に死んだ、このグランパス王国の王妃なのよ！」

「何だって！ 今、何て言った？」

「あの人は、前の王妃！ そして、私のお母様なのよ！」

Chapter 71

その台詞に、ジャンは哑然と天空の”偽樹林”に目を向けた。慈愛に満ちた微笑を浮かべ、その人は、ジャンと王女を乗せた白い鳥が近づいてくるのを待っている。

グラン・パープルの西の空は、相変わらずの紅で染めつくされていたが、天空に浮かび上がるその人と、天喜の白い鳥に乗ったジャンと王女がいる場所だけが、ぽっかりと異空間に入り込んでしまったような捕らえ処のない空気に満たされていた。

お互いに言葉が出ず、顔を見合すばかりの王女とジャン。すると、偽樹林の切羽詰まった声音がその沈黙を破った。

「十年の月日は長かった。それでも、やっと、私は水晶の棺の外へ出ることができた」

そして、天喜の白い鳥の翼の上から、自分の方へ身を乗り出した王女に視線を向けると、緑の瞳を涙で潤ませた。

「リリー、その私ゆずりの紫暗の瞳と金の髪。会いたかったわ。片時でも私はあなたの事を思い出さない日はなかった」

その言葉にジャンは、大きく眉をしかめる。

偽樹林が前の王妃だっただなんて……そんな馬鹿な話があったたまるか！

……が、その考えを彼が口にしようとした時、王女が空に向かって声をあげた。

「お母様！ 私だって、私だって……ずっと会いたかった！ でも、あなたはとうの昔に、グラン・パープルの土になった人。私はあの時、胸が張り裂けそうな思いで王妃の墓前に花を手向けた。それなのに、昔のままの優しい笑顔で……何故……何故、あなたはそこに

いるの！」

天空の王妃は一瞬、口を閉ざし、それから、哀しげに言葉を続けた。

「どうして忘れることができませんでした……まだ年端もゆかぬグランパス王国の王女が、涙をこらえながら亡き王妃に捧げた白いグラジオラスの花を。エターナル城に蔓延る魔毒に倒れ、命を落とした後でさえも私の魂はそれを見ていた。愛する王と王女、そして国民たちを、あの白蛇の化身に食い荒らされ、荒廃に向かってゆくばかりのグランパス王国に残して逝くことが、私には悔やまれてならなかった。その時です、暗い私の棺の中に、あの虹の女神の声が響いてきたのは」

ジャンは、その言葉に驚きが隠せず、

「虹の女神！？ まさか、それって、アイアリスのことか！ レインボーヘブンの守り神が、十年前にグラン・パープルに現れてたって？」

すると、王妃は言った。

「虹の女神の姿は棺の中の私には見えなかった。けれども、自愛に溢れたあの声は、暗い土の中で泣き叫んでいた、私の心にこんな風に伝わってきた」

”哀れな王妃よ。芽吹き、咲き誇った大輪の花も、いつかはその花びらを散らせて枯れ落ちてゆく。時の流れに生きる者たちは、その自然の理から逃れることはできません。けれども、この国を守りたいというお前の心が私には哀しくてならないのです。

私は至福の島、レインボーヘブンの豊穡の女神。この国もやがては、熟した果実が腐り落ちるように滅んでゆく。それでも、この国を守りたいというのなら、お前の骸と共に朽ち果ててゆくその広葉樹の棺を捨てて、水晶の棺にお入りなさい。そして、その中で、この国の平和と繁栄を祈り続けるがいい。

レインボーヘブンの水晶には、邪を退ける力がある。エターナル城の光の部屋に私はその水晶の棺を納めましょう。さすれば、お前は未来永劫、この国の守護神となるのだから”

「哀れな亡骸に成り果てたこの身が、グランパス王国の守り主となるなら、それは至上の喜びだった。私は即座に、水晶の棺に入ることに同意した」

すると、それを聞いていたジャンが、

「でも、おかしいじゃないか。その時に、お前がグランパス王国の守護神になったのだとしたら、何故、この国はこんなに荒れ果ててしまっているんだ？ レインボーヘブンの女神、アイアリスは、たとえ、今は海の鬼灯に翻弄されて光を失いかけているにしても、決して嘘をついたりはしない。それは、僕の命にかけて誓ってもいい！」

「レインボーヘブンの大地を司る少年よ。お前の言う通り、虹の女神の言葉に偽りはなかった。だが、彼女は大きな間違いを一つだけ犯してしまった」

「間違い？」

「私をグランパス王国の守護神に据えるために、彼女は、もともとエターナル城の西の尖塔に住み、この国を番で守護^{つかい}していた白蛇をその座から下ろしてしまったのです」

すると、それまで固唾を飲むように二人のやり取りを聞いていた王女が、突然、声をあげた。

「白蛇ですって！？ 確かにエターナル城の西の尖塔には、守護神がいると昔からの言い伝えはあったけれど、それが、今の王妃に化身していた、あの白蛇だったと言うの！？」

「そうです。守護神としての力を失った白蛇たちは、次第に人々からも忘れられ、その心はすさんでいった。そして、番の雄はゴットフリーに闇に送られ、私を毒殺し、新しく王妃になった女の……そ

の血をすすり、彼女に化身した雌だけが後に残った……」

ジャンは、天空の王妃の言葉に頭を抱え込みたくなってしまった。守護神の座から引きずり下ろされた怒りと哀しみ。それは、邪気である海の鬼灯の最高のご馳走だ。白蛇たちのその心の隙間に、あの紅の灯は入り込んでいったんだ……。

だが、白蛇たちをそこまで貶めた原因を作ったのは、虹の女神、アイアリスだ。レインボーヘブンを襲った盗賊たちを海に沈めた時のような、取り返しのない間違いを、また、あの女神は繰り返してしまったのか！

天空の王妃は、そんなジャンの憤りには触れずに、
「それでも、私が守護神に成り代わって数年の間は、グランパス王国の平和は保たれていたのです……けれども」

「けれども……？」

王女リリーとジャンの口元から同時に出了問いに、王妃は苦々しく唇をゆがめ、

「平穏な時が経つうちに、私は水晶の棺で眠る日々が辛くてたまらなくなってしまったのです」

ジャンはその時、啞然と天空の王妃を仰ぎ見た。すると、エターナル城の西の尖塔で、“偽樹林”と最初に会った時に交わした言葉が、彼の脳裏に、にわかに蘇ってきた。

“あなたに私の気持ちはわからない！ この水晶の棺の中で、時を数えているだけの気の狂いそうな日々……この身にかけられたおぞましい呪い。だが、私は気づいてしまった。私を救える者、その唯一無二の存在に。だから、早くレインボーヘブンの王……ゴットフリーををここへ呼びなさい”

あの時、僕は偽樹林にこう問うた。

“救える者？　それがゴットフリーだと言いたいのか！？　だが、呪いって何だ。誰がそんなものをお前にかけた？”

背中にぞくりと冷たいモノが通り過ぎてゆく。

「海の鬼灯か……」

そう呟いた瞬間、ジャンの頭の中で、エターナル城にまつわる“水晶の棺”と“レインボーヘブンの欠片”の伝説の謎が、雪が溶けるように詳らかになっていった。

「偽樹林！　いや、グランパス王国の前王妃！　十年前に毒殺された後に、女神アイアリスの力を借りて番の白蛇たちを追い出し、お前はこの国の守護神になった。けれども、その永遠の住処になるはずだった水晶の棺の前に、海の鬼灯が現れたんだ。確かにレインボーヘブンの水晶には邪を退ける力がある。あの清浄な輝きの中には、邪気である海の鬼灯は入り込めない。けれども、水晶の棺の中での日々が辛くなり、悲観にくれだした弱い心を、お前も、あの紅の灯につけ込まれたんだな！　それが、海の鬼灯とお前が交わした契約……いや、お前が海の鬼灯にかけられた一呪い——だったんだ！」

そして、お前は……と、言ってから、ジャンはふうと息を吐き、そして、苦々しげに言葉を継いだ。

「海の鬼灯と契約するため、その邪気を退けるはずの水晶の棺の蓋を……自らの手で開いてしまったんだ」

息の詰まるような沈黙。天空で唇を震わす王妃を鋭く睨めつけ、再び、それを破ったのはジャンだった。

「そして、その契約の中身というのが、偽レインボーヘブンの欠片“樹林”になりすまし、“水晶の棺の伝説”に引かれてエターナル城にやって来る、ゴットフリーを捕えよということだったんだな。」

奴らはゴットフリーを欲しがっている。闇の王として降臨させ、この世のすべてを滅ぼすために！ 海の鬼灯はその代価に何を約束した？ 大方、ゴットフリーを手に入れたあかつきには、お前の魂を自由にしてやるなどと、甘い言葉を囁いてきたんだろう！？」

Chapter 72

天空の王妃は、鋭く真実を問い詰めてくる、ジャンの真っ直なとび色の瞳を正視することができなかった。……が、

「確かに私は、西の尖塔にやって来たゴットフリーが水晶の棺を開けた時、彼を棺の中に引きずりこもうとした。けれども……あの深遠な灰色の瞳と目を合わせた瞬間、つい口走ってしまったのです。

“レインボーヘブンの王よ。水晶の棺を開けてはなりません”と。

その台詞に、ジャンはさもありなんと頷き、

「そりゃそうさ、お前とあいっじゃ、格が違う。海の鬼灯でさえ、ゴットフリーには簡単には手が出せない。だから、あの邪気は、奴を手に入れようと、あれやこれやと汚い罠をいくつも仕掛けてくるんだ」

グラン・パープルの東の空から、にわかに黒い影が沸き立ったのは、ちょうどその時だった。

闇の戦士が進軍してくる。光と闇の間を駆ける黒馬に乗り、意に添わないすべての物に奈落への扉を開く”暗黒の王——ゴットフリー——に率いられて。

その瞬間、天空の王妃の背後にあったおびただ夥しい紅の灯がびくりと震え、西の空全体が、どくんどくと、落ち着かない脈拍を打つように蠢き出した。東の空の闇に顔を向けてから、天空

の王妃は、寂しげな亡霊のように、その手をリリーの方へ差し出した。

「リリー、私の可愛い娘。守護神の座を熱望しておきながら、それ

を簡単に手放してしまった私のことを、あなたは、さぞや軽蔑していることでしょうね。ただ、これだけは分かって欲しい。邪心にまみれて、王国を守るという志を忘れてしまった後でも、ただ、あなたに会いたい。会って、この腕にもう一度、この胸に抱きしめたい。その思いだけは失くすことはなかった。それを遂げることができれば、私はあの深い闇に飲まれて暗黒の彼方へ消えてしまってもかまわない……だから、ここへ来て。天にも昇れず、この世にも留まることのできない哀れな母の最期の望みをもう一度だけ叶えて……」

すると、王妃の手に導かれるように、リリーの体がふわりと宙に浮いたのだ。

「王女、行っってはだめだ！ こいつを信用するな！」

ところが、そう叫んだ瞬間、ジャンは、王妃の背後から湧き出てきた紅の灯に、ぐるりと周りを取り囲まれてしまった。

「海の鬼灯！ 僕の邪魔をするな！」

自分で自分の力を呪縛し、その紅の灯を攻撃できない苛立ちに唇を噛み締める。

けれども、空へ昇ってゆこうとする王女に手を伸ばそうとしても、今のジャンには、どうすることもできなかった。濁った紅は、それをあざ笑いながら、さらに高く彼の四方に炎の壁を築いてゆくのだ。その上、

「余計な手出しはしないで！」

と、リリーまでがジャンの助けを強く拒み、思慕の思いに背を押されるまま、天空の王妃の胸に飛び込んでいってしまった。

紅蓮の空の中で、王妃は、大粒の涙を流しながらその体を強く抱きしめた。「リリー、この瞬間を私はずっと待ち焦がれていたのよ。これでもう、思い起こすことは何もない。……たとえば、この体がある闇へ飲み込まれてしまっても、私は……」

王女の背中に回した、その腕が微妙に震えている。

「そんな事を言うのは止めて！ 嫌よ！ たとえ、うかばれない魂であつたとしても、お母様を闇になど、行かせてたまるものですか」
天空の王妃は嗚咽のような声を漏らし、リリーの体をもう一度、しかと抱きしめ、その金の髪に愛おしげに顔をうずもらせた。けれども、ちらりと、ジャンの方へ向けられたその瞳は……

おぞましくも残酷な視線。

にやりと口角をあげて彼女が笑い、その緑の瞳が紅の色に変わった時、

「王女、騙されるな！！ そいつの体は王妃でも、もう魂は邪心だらけだ！！」

声を荒げたジャンに、天空の王妃がけたたましく笑う。

「もう遅いわ。ゴットフリーが手に入らないなら、せめて、この娘を燃え尽くして、海の鬼灯への贄にしてやる！！」

王女を抱きしめたまま、王妃の体が紅蓮に燃える。たちまち、西の空には、濁った紅の火柱が高く立ち上がった。

「リリー！！」

……が、ジャンがそう叫んだ刹那、その炎は急激に力を失ってしまった。空高く立ち昇った火柱が空気の重みに押し下げられ、ゆるやかに降下しはじめたのだ。それから、それらは小さな火の粉に分散し、風に流されるままに西の丘の崖下へ落ちていった。

天空に浮んだ王妃は、啞然と胸に抱いた愛娘に目を落とすと、呻きのような声をあげた。

「リリー？ ……馬鹿な。本当に私はあなたの嘘偽りもない母だったのに……」

足元から我が身が崩てゆく……

王女リリーが腰に帯刀していたレイピア。王女は炎に包まれた瞬

間に、その剣を引き抜き、紅蓮の王妃の胸元を一突きに貫いたのだ。

天空の王妃は、王女の体を抱いたまま、紅の空へ消えようとしている。

リリーは紫暗の瞳を大粒の涙で潤ませて言う。

「そうよ。抱きしめられた瞬間に、私には、あなたが真実の母なのがよくわかったわ。でも、今、目の前にいるのは、汚れた魂を吹き込まれたその骸。お母様、もういいのよ。グランパス王国を本当に愛した、あなたの純粹な嘆きでさえも利用しようとした海の鬼灯を私は許せない！ だから、その呪縛を私は渾身の願いをこめて、このレイピアで断ち切ってあげたの！」

哀しげに娘の方を見た王妃に、王女リリーは、さらに声を高めて言った。

「天にも昇れず、現世にも留められず、闇にも逝かせられない魂ならば、せめて、消えてなくなつて！ お母様は、いなくなるの。そしたら、どんな苦しみからも解放されて、その魂は自由になれるわ」するとその時、王女の願いを聞き届けたと言わんばかりに、彼女が手にしたレイピアが鋭く輝き出した。

レイピア……王宮の礼拝堂で、ゴットフリーから託された至極の宝剣……。

あの灰色の瞳は、私には想像もできない遠い場所から、こちらを見下ろしていた。

胸に湧き上がる畏怖の思い。

……けれども、どんな禍いもあの懷にいれば、切り抜けることができる。

その瞬間、王女リリーは、もう一度、彼女の想いのすべてを込め

て、手にしたレイピアを天空の王妃に向けて突き立てた。

「消えて！　そして、無に還れ！　お母様のグランパス王国を思う心は、この私が引き継いでみせる。例え、国が崩壊しても、ここに逃げてきた住民と共に、私は必ずまた、新しい国を作り直す！」

その光が、邪心にまみれた王妃の体を蕩かしてゆく。その姿が消えてゆくと同時に、王妃に天空で支えられていたリリーは、真っ逆さまに、西の丘の崖下に落ちていった。

「リリーっ！」

助けようとしても、海の鬼灯の壁が邪魔で手を出せない。そんなジャンの隙をつくように、上空に膠着していた紅の灯が、一斉に攻撃をしかけてきた。

ジャンはとび色の瞳をきりとそちらに向けると、手のひらを大きく開き、叫ぶような声をあげた。

「フリーズ！　空間凍結！」

その瞬間に彼の手から迸った蒼の光。その穢れない光彩が、押し寄せてくる紅の灯を、触れた先から怒濤の勢いで凍りつかせてゆく。「レインボーヘブンにも真冬は来る。その時、僕は大地の極をこの力で凍てつかせるんだ。僕はお前たちを攻撃することはできない。けれども、防御することならできるんだ！」

ジャンを中心に、西の空に見る見るうちに広がってゆく、紅の灯を氷結させた巨大な同心円。

けれども、延々と続く紅の隊列を何時まで凍らせ続けることができるのか？　どのくらいの距離、どのくらいの時間？　ジャンの力がどんなに大きくとも、海の鬼灯が押し寄せる源の世界の果てまで、その力が届くわけではないのだ。

「それでも、僕は僕の力の尽きるまで、この紅の灯を止め続ける！」

天喜の白い鳥の翼の下から、漆黒の闇が湧き上がってきたのは、
ジャンがその言葉を口にした直後だった。

Chapter 73

このまま、地面にたたきつけられて、死んでしまうんだわ。

こんな私がグランパス王国を作り直すなんて、できっこないじゃない……。

天空の王妃の姿が消え、西の丘の崖下に落ちていったリリーは、空中で薄ぼんやりとそんな事を考えていた。

それにしても、妙な気分だった。下へ下へと落ちている感覚はあるのだが……急降下してゆくはずの自分の体をふわりとした黒い影が包み込んでいる。おまけに、周りに蔓延っていた紅蓮の紅は、どこにも姿が見当たらない。

もしかしたら、私、とっくに死んでしまっているのかしら……？
だって、このままぐつぐつと眠り込んでしまいたいような、柔らかな気分。

ところが、そんな考えが脳裏に浮かんだ瞬間、どさりと体全体にきつい衝撃が走った。自分の体を支えている今までとは全く違った、ごつい腕の感触に、リリーは、はっと紫暗の瞳を大きく見開く。すると、

「危ねえっ、しかし、何でお姫さんが空から降ってくるんだよ！？」

見上げた先に、見知った顎鬚の男の顔がある。

「……タルク？」

自分を抱き上げている大男の腕の中で、きょとんと辺りを見渡す。

その近くの馬上では、ぼろぼろに服が裂けた頬に傷のある男が、同じような不可解な顔で、リリーの方を見つめていた。

「ここって、西の丘の崖の下？　もしかして、ラガーを迎えに崖下に行ってたタルクに、私、受け止められたの？」

そんな王女に大男は、

「そりゃ、空から、あんたがふわふわ落ちてきたら、受け止めないわけにはゆかんだろ」

「ふわふわって……？　でも、私は……空から真っ逆さまに……」

そんなタルクと王女の会話を馬上の傷の男――ラガー――が、上空を指差しながら制した。

「手荒なやり方だったけど、結局は俺らはあの女に助けられたのかもな」

黒い扇を広げた黒衣の女が、上空の風の中で小気味よさ気に笑いながら、彼女を見下ろしている。

霧花―レインボーヘブンの欠片―夜風

だが、彼らがその名を口にするより前に、霧花は、空に蔓延った紅の灯を黒扇の一振りで蹴散らすと、空気の流れの中に身を翻し、そのまま姿を消してしまった。

苦々しく頬の傷をゆがめながら、ラガーが言う。

「俺は王宮の中庭で、闇の戦士を引き連れたゴットフリーとあの女に出会ったんだ。ゴットフリーの命令で、霧花は俺を、あの扇で思いきり王宮の外へ吹き飛ばしやがった。まあ、そのおかげで寒気がするような紅の殲滅隊から俺は逃れることができたんだが……」

すると、タルクが、

「ゴットフリーの命令でだって！？　黒馬島で奴が闇の王になりかけた時には、俺たちの声はゴットフリーにはまったく届かなかったんだ。って事は、このグラン・パープルでは、あいつには、俺たち

を助ける意思があるって事なのか？」

だが、その問いにラガーは首を横に振って、こう答えた。

「……タルク、あまり事を樂觀しねえ方がいいと思うぞ。あの時、ゴットフリーは俺に言った。”失せろ！ そうしないと、俺にはだんだんお前がわからなくなる。ただの障害物としか思えなくなる”と。あの王宮の中庭で、凍りつくような灰色の瞳に睨めつけられた時、俺にはよくわかったよ。奴が闇の王である限り、あいつの目的は守ることではなく崩壊させる事なんだ。その邪魔をする者は、誰であつてもあの男は切り刻みにくる。ガルフ島警護隊長時代もそうだったが、ゴットフリーはそんなに甘い奴じゃない」

そんなラガーの言葉を裏付けるかのように、西の空に漆黒の闇が迫ってきた。タルクは、空を見据えてから、腕に抱きかかえたままの王女に目を向け、

「ここには危険だ。お姫さんは、ラガーと一緒に、もう一度上へ戻った方がいいんだが……けど、崖の上で何があつたんだ？ まさか、住民たちの間に内輪揉めが起こって、あんた、あいつらから崖下に放り出されたってわけじゃないんだろうな？」

上を見上げたりリーの目に、タルクの心配顔が映し出される。張り詰めていた心の帯をゆるめてくれるような優しい眼差し。すると、見る見るうちに、彼女の普段の凜とした紫暗の瞳からは、想像できないような大粒の涙が溢れ出した。

「……違うの。住民たちには責任はなくて……ただね、ちょっと、失くした物が大きすぎただけ……」

それきり、自分の襟元に顔をうずめて黙り込んでしまったリリーにタルクは次の言葉が継げず、閉口してしまっている。

「おい、おい……スウォード・リリーともあろうお姫さんが、何をめそめそ、やってんだよ。崖の上に逃げるなら、さっさとしないと、闇がどんどん広がってくるぜ」

馬上から二人の様子を見ていたラガーが不満げに言った。

「それに、どうせ泣くんなら、そんな厳つい大入道じゃなくて、もつと色男の所で泣けよ」

” 厳つい大入道 ” 呼ばわりには眉をしかめたが、一刻も早く、ジヤンと合流した方がいいのは確かなのだ。タルクはリリーを馬上のラガーの後ろに掲げ上げると、

「とにかく、仲間うちにトラブルがなかったんなら、お姫さんはラガーと一緒に、この馬で崖の上に戻るんだ。その馬には三人は乗れない。大した距離でもないし、俺は歩いて登ってゆくから」

「歩いて一人でだなんて、あなただって、危ないんじゃないの？」

「大丈夫だ。ガルフ島、黒馬島と、ゴットフリーには散々、つき合わされて、こんな状況には、俺はもう慣れちまってる。だから、こっちの事は気にせずにあんたらは、さっさと上へ行け」

「……でも」

だが、気がかりそうに何度も、タルクの方を振り返る王女に、

「そうそう、気にせずに行こうぜ。あいつは闇であろうが光であろうが、何時でも、あの警護隊長にくつついてきた奴だから」

意味深な視線をタルクに送ると、王女を後ろに乗せた馬の胴を蹴り、ラガーは湧き上がる闇を振り切るように、それをまっしぐらに崖の上に向かって走らせた。

＊ ＊

二人を乗せた馬の蹄の音が山道の向こうに遠ざかってゆく。それとともに、紅の灯が蔓延っていた空の色が急激に翳ろいだした。

タルクは深い吐息をもらして、東の空から攻め上って来る闇の軍に目を向けた。

あの凄まじいまでの暗黒。黒馬島の時なんて、比べもんにならね

え……けれども、もし、闇がグラン・パープルを覆い尽くしてしま
ったとして、本当にゴットフリーは、俺たちの元に戻ってくるのか？
いいや、体半分、闇に属してるとしても、あいつの本拠地は光の
場所のはずなんだ。それを信じて、俺もジャンもゴットフリーにつ
いて来たんだ。

ひやりとした氷の欠片がタルクの頬に降ってきたのは、その時だ
った。

氷？ 何で空の上から……

不思議そうに頬に手をやり、再び、上に視線を向ける。すると、
闇と灰色が交じり合った雲の微かな切れ目から、西の上空が見えて
きた。

凍りついた紅蓮の空が、蒼の光をまத்தまま、上空に重く垂れ
込めていた。ぽとりぽとりと地上に落ちてくる氷の雫。足元に滲む
その色は血の色のような紅をしている。

空が凍りつくなんて、そんな馬鹿な事があってたまるか！

その考えが、タルクの脳裏をかすめた瞬間、突然、西の崖の上で
蒼の光が炸裂した。

刺すような閃光に、思わず目を背ける。それと同時に蒼の光が、
ドーム型を作りながら西の丘全体をすっぽりと覆い始めた。

蒼の光！？ まさか、海の鬼灯を空の上で凍りつかせているのも、
西の丘の周りの闇の戦士をかき消しているのも、全部、ジャンの仕
業か？ あいつが、こんな、フルパワーで動いているなんて、上は、
相当ヤバイことになってるんじゃないのか！？

先に行ったらガーと王女は、無事なんだろうな……。

心の中に様々な不安が渦巻いてくる。こうしちゃおられないと、タルクは、形振りかまわず、西の丘の頂上に向けて走り出した。

＊ ＊

王宮の中庭でうごめく紅の兵士たち。それは、紅蓮というには、あまりにも穢れた血色の殲滅隊。

暗黒の槍をつがえた闇の戦士に粉碎され、ねっとりとした声をあげながら、倒れ、散らばる紅の残骸を、その王の到来に勢いづいた、暗く音のない闇の波紋が次々に飲み込んでゆく。

敗色を濃くした紅の灯は、巨大な植物の蔓に捕縛されながらも、八つに分かれた蛇首から同胞の灯を空に吹き続けている怪物の元へと、助けを求めて逃れていった。すでに、その紅の灯には兵士のような形はなく、邪氣の光をまとった海の鬼灯に姿を戻している。

紅の灯の流れてゆく先を追って、中庭から王宮の居館に灰色の瞳を向けた時、ゴットフリーは口元に薄く笑みを浮かべた。

「珍しい奴があそこにいるな。今となっては、何の興味もわからない水晶の棺……そこで眠っているはずの”欠片”が、何故、この場所に姿を現す？」

レインボーヘブンの欠片“樹林”

“水晶の棺の伝説”に導かれ、ゴットフリーがエターナル城の迷宮に潜入したその時から、グランパス王国の運命の舵は、崩壊へと向けられていたのだ。

だが、居館の上から中庭を見下ろしていた“樹林”は、彼の主で

あるゴットフリーに言葉を返すことができなかった。胸の奥に流れ込んでくる畏怖の空気に威圧され、声を出すことができなかったのだ。

そんな隙をついて、巨大な植物の蔓で空に捕縛されていた怪物が、八つに分かれた鎌首をあげ、空に向かって大きく雄叫びをあげだした。

樹林は、再び、闇を押しつけようと、怪物の喉元から大量に吹き上げられる邪気の灯を見据えて、

どうしろって言うんだよ？　どんなに闇に飲み込まれても、あの怪物が生きている限り、紅の灯は次々に生まれてくる。いや、怪物が死んだとしても……あの灯は、いつもどこからか湧き上がってきやがるんだ……。

畜生！　だからといって、これ以上、この場所で海の鬼灯を生み出されてたまるものか！！

「ディアナリス・ボウ！！」

そう叫んだ瞬間、大きく上下に伸びた銀の弓に弓矢を次々に番え、電光石火の早業で二つの蛇首を射抜いてみせた。

矢に粉碎された二つの首から大量の血飛沫が空に吹き上がる。怒号のような叫びをあげながら、八岐の怪物は、がんじがらめにされた植物の蔓から逃れようと、左右に大きく体を仰け反らせた。その姿を冷ややかな灰色の瞳で見据えてから、ゴットフリーは、ふつりと暗い空に向かって囁いた。

「霧花、覚えているか。あいつはあの矢で、俺を宿営地の裏の木にはりつけようとしたんだ」

すると、闇の中の声は不本意そうに、

「そう、私が止めに入っただから良かったものの、あなたに矢を向けるなんて不遜にも程があるわ」

Chapter 74

一時的に有利に動いたかと思われた戦況。けれども、樹林が三本の矢を弓に番えた瞬間に、それは突然悪い方向へ移りだした。二つの首を失った八岐の怪物の残り六本の首の中の一つが、残った自分の他の首を、空中に捕縛されたまま、ばりばりと食らいだしたのだ。

それは、我が身の血肉を口元に滴らしながら、それらを飲み込む毎に、ぶくりぶくりと大きく膨らんでゆく。そのうちに、巨大になった力に任せて体に巻きついていた蔓を断ち切った怪物は、体の重みに耐え切れず、背にある翼で飛ぶこともできずに、エターナル城の中庭に落ちていった。

耳をつんざく大轟音。

ところが、その衝撃に弱るところか、邪魔だとばかりに役に立たなくなつた翼までを食らいだす。

「……こんなのおぞましい過ぎるだろ。自分の体を自分の糧にして成長してゆくななんて……」

元の白蛇の姿の方が、まだ、少しは神々しさが残っていた……と、樹林は吐き気がしてならなかった。何故なら、目の前で大きく体を膨張させてゆく塊は、口角だけが蛇口に裂けた太りきった紅のナメクジを見ているようで、あまりにも醜くかった。その上、ねばねばと腐った表皮をうねらせながら、未練たつぷりに王宮に向けて移動してくるのだ。

その時、ふらりと眩暈を感じて、樹林は弓を持つ手を下ろすと、

体を支えるために居館の手すりに手をやった。

まずい……。この辺りが限界か……？

「ゴットフリー、これ以上は俺の力では無理だ。後のことは、あなたに託す。お願いだから、そのモンスターを止めてくれ！」

ところが、彼の言葉を、ゴットフリーは冷酷に一蹴した。

「お前の頼みなど、聞く耳もたぬ。それに、お前に何かを託されるいわれはないな」

「そんな……このままだと、グラン・パープルの住民たちは全滅してしまうぞ！」

だが、彼の答えは変わらなかった。

「死ぬ奴は、勝手に死ね」

そんなやり取りをあざ笑うかのように、足元に再び、沸き立ち出した紅の灯。

「畜生！ うっとうしい奴らだ」

樹林は、先ほどから、彼の後ろで固唾を呑むように事の成り行きを見守っているココの方に目を向けると、

「ココ、お前、さっきから黙りこんでるけど、大丈夫か！？ まさか、状況がヤバすぎて、精神崩壊とか、起こしちゃってるんじゃないだろうな？」

気丈な面持ちで、首をぶんぶんと横に振る少女。その顔を見据えて、わずかに笑い、それから、緑の瞳の弓使いは、体に残る渾身の力をこめて、再び、空に向けて詠唱しはじめた。

“大地を照らす精錬なる光

其より生まれし神秘なる種子”

玲瓏な声が、汚濁された王宮の中庭の空気の中を滑るように通り

ぬけてゆく。すると、地面のあちらこちらから、銀色に輝く光が沸き立った。それらは、逃げ水のように、輝いては消えてを繰り返しながら、王宮に向けて這ってゆく怪物の後を追いかけていった。そして、

”許されざる存在を捕える光の桎梏しごく
いでよ！ 盟約により集結せし命の葉芽！”

その声に命じられた瞬間、王宮の中庭のあちらこちらで、銀の光の種がはじけ、芽吹き、茎を伸ばした。そして、触手に似た緑の蔓を螺旋に回転させながら、その植物は、瞬く間に怪物の体を四方八方から拘束し始めた。

王宮の中庭に、無数の蔓で拘束され、自由を奪われた怪物の恨みの咆哮が轟きわたる。

すると、不意に、黒馬の馬上からその様子を眺めていたゴットフリーが、馬の背から王宮の中庭へ降り立ったのだ。

「レインボーヘブンの欠片”樹林”……おもしろい。お前は自分の言霊に天地四方の力を呼び込むことができるのか。ならば、その力、今度は俺が使ってやろう。有り難いな、剣を抜く手間が省けた」

主が背から離れた瞬間、黒馬の姿はかき消すように見えなくなった。

闇と紅と銀の光が混在する中庭をゴットフリーは、怪物の方向に二、三步進むと立ち止まり、凍てついた灰色の瞳を空に向けた。それから、大地に染み入りそうな重低音な声でこう言葉を紡いだ。

” 我は闇の扉を開く者

森羅万象、如何なる法則も、我の前では逆流する”

樹林は、この展開に驚きを隠せなかった。

まさか……そんなことって……でも、

ゴットフリーは、俺の言霊を自分の言葉に取り込んで……俺の力を負の方向へ動かすつもり……なんじゃ……？

己の声に、ざわと緊迫した辺りの空気を感じ取り、満足げに笑うと、ゴットフリーは、更に言葉を続けた。

“ 盟約のもとに芽吹きし光の花梗よ

禁断者を掃滅せよ

その血糊は異世界への元肥

永久に光を遮る深淵の闇への虚無なる貢物”

「ゴットフリー、だめだ！！ 闇の扉を開いては！」

そう叫んだ樹林の声を聞き流し、ゴットフリーの言霊に従った緑の蔓は、地面に縛り付けた怪物の体を嫌というほど強く締め上げた。断末魔の咆哮の中で、耐え切れぬほどに拘束された怪物の体が血肉となって飛び散った時、その残骸は、空に逃れようと紅色の光を放ちながら海の鬼灯に変化した。……が、その瞬間、槍を番えた闇の戦士が、ぐるとそれらの周りに立ちはだかったのだ。

樹林は、その様を王宮の居館から身を乗り出し、食い入るように見つめていたが、

ゴットフリーは、怪物から元の姿にもどった海の鬼灯を供物にして、こちらの世界に闇の扉を開くつもりなんだ。

それだけはさせてなるものか！ と、再び声を荒げ、天に向かって叫んだ。

“穢れなき慈愛に満ちる銀の花冠

明瞭たる光を解放せよ！

蒼穹に汚濁の紅を覆きて蕩かせ！”

すると、ゴットフリーの負の言霊に操られていた緑の蔓が、再び、元の契約者　一樹林一の指揮下に戻ってきた。

先端に幾つもの小さな蕾が現れた時、緑の蔓はそれらが大きく膨らむのを待たずに、強引に花を開かせた。そして、王宮の中庭に銀色に輝く無数の花びらが舞い上がった。

殲滅の憂き目にあった同胞を見捨てて、どうにか闇の戦士の槍先をすり抜けた紅の灯が、西の空へ逃げてゆく。だが、盟約に従い、樹林の言霊に従った銀の花びらは、有無を言わずそれらを絡めとり、光の中に溶かしてゆく。

一方、王宮の中庭のゴットフリーは、海の鬼灯を捕らえながらエターナル城の上空で光溜まりを広げてゆく、銀の花びらの乱舞を無表情に見つめていたが、

「愚かだな。レインボーヘブンの欠片“樹林”、お前が言霊を紡げば紡ぐほどこの地は闇に堕ちてゆく。未だに、それに気づかないとは」

皮肉まじりにそう呟くと、再び、空に向かって声をあげた。

“光に束縛されし、紅蓮の炎よ
其の墓標に手向ける儚花の中に

消えてこの世の藻屑となれ！”

突然、天空で暗く翳ろいだした銀の光。

それが、徐々に光を失い、黒い雲となって東の空に長く棚引いでゆく。

やがて、天のあちらこちらから、茶色く枯れ果てた花びらが落ちてきた。

その後から、粉々に崩れおち、光を失くした海の鬼灯の残骸が砂の雨となって降ってきた。

その雨を受けながら、王宮の中庭で芽吹いた緑の蔓が徐々に干からびてゆく。

空には人型を解いた闇の兵士が、再び、形のない暗霧となって蔓延りだす。

ゴットフリーは、もてる力をほとんど使い果たし、王宮の居館の手すりに寄りかかった樹林の姿に勝ち誇ったような笑みを向けると、更に言葉を上塗りにした。

”草木を司る豊穰の欠片

彼の者が奏でし滅びの歌よ

崩滅の空に鳴り響き

すべてを履いて闇に還せ！”

草木を司る豊穰の欠片？

滅びの歌？

まさか、それって、俺と、俺が今までに使ってしまった言霊のことを言っているのか？

ゴットフリーの言葉に誘導され、自分の声が天の四方から聞こえてくるような気分になって、樹林が、ぼんやりと暗い空に眼を向けた時、

空が枯れ落ちてゆく……

大地が暗黒に閉ざされる。

そして、闇の扉が、地表に浮かび上がってくる。

「こんなことってあるもんか！ 俺は、グラン・パープルを滅ぼすために、閉じていた瞳を開いたわけじゃない！！」

レインボーヘブンの欠片”樹林”は、絶叫のような声をあげると、立っていることが耐え切れぬように、がくと王宮の居館の床に膝を落とした。

Chapter 75

王宮の西の丘。

槍を番えた人型の闇の戦士に、ぐるりとその周りを取り巻かれた時、王女に連れられ西の丘に避難していた住民たちの間から、一斉に悲鳴が沸き起こった。

「無理もない」と天喜の白い鳥を彼らの元へ急降下させながら、ジャンは思った。闇の戦士を目の当たりにするのは、住民たちにとっては初めてのことなのだ。しかも、自在に形態を変えれる闇の戦士たちは、この時、修羅のような二面の顔とそれぞれに槍を構えた四本の腕を持ち、顔の片面は海の鬼灯が蔓延る西の空を、もう一方は住民たちへと、どちらにも容赦なく槍先を突き立てられる方向に向けていたのだから。

逃げることもできずに、パニックだけが大きくなる。

そんな住民たちの頭上で、突然、蒼の閃光が炸裂した。

「みんな動かないで！ 僕の張ったシールドの中から絶対出るんじゃないぞ！」

蒼の光が、侵攻してくる闇の戦士を蹴散らしながら、西の丘の周りにドーム型を作り出してゆく。だが、純白の鳥の背に乗ったジャンは、その頂点で強く眉をしかめた。

延々と続く海の鬼灯を空に凍らせ続けながら、立て続けに姿を現す闇の戦士から西の丘をシールドするのは、さすがにきつかった。

元王妃と一緒に崖下へ落ちて落ちていったリリーは生きているのだろうか？ それに、王宮に残ってきてしまった、ラピスとココは？

切れる息と、胸に激しく打ちつけてくる心臓の鼓動を整えるために深く息を吸い込み、気がかりな表情で、西の空に目を向ける。その時、ジャンの視界に、凍りついた紅の灯の中に湧き上がる、いくつかの黒い染みが入り込んできた。

「あれは……」

だが、その言葉を言い切らないうちに、その染みは突然、爆発的に増殖した。西の空に凍りつかされていた紅の灯が、次々に広がる”漆黒の闇”に飲み込まれてゆく。

「闇の戦士！」

人型でない闇の戦士までが参戦してくるなんて……！？

“闇の王”がその中心にいることは、もう疑う余地がないほど、闇側は勢力を増やし続けている。けれども、

「いつこちらが襲われるかもしれないが、とりあえずは、紅の灯を闇の戦士に任せることができるのは有りがたい。力を使い切らないですむ」

もう一度、心を落ち着かせるように深く息を吸い込み、王宮の方向へとび色の瞳を向ける。

東側に見えるエターナル城の上空は、暗黒の闇に閉ざされていた。紅の灯どころか、光の一欠片も目にするのができぬほどに……。

あの暗黒……こんな容赦のない崩壊の中で、僕の蒼の光はあいつに届くんだろうか。

紅の灯が闇の戦士に飲み込まれ、自分が作り出した蒼の光以外は、徐々に光が消えてゆく西の丘の景色に、再び心に不安の波が押し寄せてくる。

それに耐え切れぬように、ジャンは完全に闇に閉ざされた東の空

にむかって、一人呟いた。

「ゴットフリー、お前、まだ、こちらの世界に留まっているか？」

＊ ＊

「行き止まり……だな」

西の丘の頂上への道。その道の途中を我が物顔で占拠している大岩に目を向け、馬上でラガーは途方にくれたようにため息をついた。
「さてと、どうする？ お姫さん。頂上にいるジャンの元へ逃げてゆくにしても、ここで馬を降りて、獣道を登ってゆくってえのは、俺はちよつと遠慮したいんだが」

頬の傷を歪め、苦い笑みを浮かべて、後ろに座った王女リリーの方を振り返る。

「分かってる。へたに脇道なんかに入ったら、どんな化け物が出てくるかわかりやしないもの。それに、あなた、傷だらけじゃない。そんな姿で歩いて上まで行こうなんて絶対に無理だわ」

その時、二人の頭上から細かな岩と砂礫が、がらがらと落ちてきた。馬の手綱を大慌てて引いて、ラガーは、

「危ねえ！ 油断していると、今度は俺らが下敷きになっちゃう」

「でも、こんなに道が壊れてるなんて……ここで、崖崩れでもあったっていうの？ まさか、あの紅い灯に上にいる住民たちが攻撃されたんじゃない……」

ところが、その台詞を言い終えないうちに、

「お姫さん！ 避けるんだ！！」

その瞬間、リリーはラガーに思い切り体を突き飛ばされた。二人のちょうど真ん中を漆黒の刃が通り過ぎる。その直後、彼らが乗っ

ていた馬の背から、おびただしい鮮血が吹き上がった。

倒れる馬から転がり落ちて、嫌というほど体を地面に打ち付けられたが、その衝撃が収まらないうちに、今度は目前に黒い霧が浮びあがってきた。そして、それらは見る見るうちに鎧と槍を身につけた人型の戦士に姿を変え、彼らの前に立ちはだかった。

「闇の戦士……？　こいつら、ただの黒い靄かと思ってたら……人にも姿を変えられるのか!？」

ぼおっとほら貝を吹いたような空虚な声が鎧の奥から鳴り響く。それを皮切りに、ラガーの胸先に必殺の槍先が飛んできた。……が、「こんな所で、一平卒に殺られてたまるもんですか!」

リリーが腰から抜きはらったレイピアが、一刀の元に闇の戦士を切り裂いたのだ。

徐々に消えて、空気の中に溶け込んでゆく黒の鎧。王女は、その様を紫暗の瞳できりと睨めつけると、手にしたレイピアをすらりと横に構えなおした。

”　まるで、百年戦争の女騎士みたいだ”

その凜とした姿に、ジャンが以前に言った台詞が頭に蘇ってくる。ラガーは、地面に座ったまま、啞然と王女に視線を向けた。

「すげえ……な。お姫さん」

王女リリーの手の中で、精錬な光を湛えているレイピア。

「すごいのは、この剣よ。このレイピアには特別な力が宿ってる。さすがは、あのゴットフリーが至極の宝剣と呼んだだけのことはあるわ」

ところがその言葉に、ラガーは一瞬、口を噤んでから、珍しく真摯な声音で、こう言った。

「いいや、違うな。闇の戦士をぶっ壊した、あんたを見て俺は確信

した。そのレイピアに特別な力があるんじゃないくて、王女リリーがその剣に力を呼び込むんだ。きっと、ゴットフリーが呼んだ”至極の宝剣”ってえのは、そのレイピアを差して言ったんじゃない。このグランパス王国を護る“剣聖の王女”。それを奴は”至極の宝剣”と呼んだんだ……何故って、考えてもみろよ。それって、まさしく”剣百合“―スウォード・リリー―の字名あざなにふさわしい言葉じゃないか」

Chapter 76

タルクは西の丘を走っていた。

巨漢の彼にとって、その傾斜は走るにはきつすぎる角度に思えたが、今はそんなことを言ってる場合じゃない。ぜえぜえと切れる息を整えようと、少しだけ足を止める。その時、先ほど、崖下から見た天空で炸裂した蒼の光が、オーロラのように幕を降ろしながら下へ下と移動してきた。

あれは、ジャンが操る大地の光だ……。あの蒼の光は、俺たちの故郷のガルフ島が、火の玉山の大噴火と大津波に飲み込まれた時も、天空から降り注いで、住民たちを助けてくれた。

脳裏に崩壊していったガルフ島や、救いきれなかった人々の姿が浮かび上がってくる。

このグラン・パープルでも、同じことが起こるなんて、俺はもう御免だぞ！

ところが、タルクのその思いは、坂の上から響いてきたけたたましい馬の嘶きに止められてしまった。

まさか、先に馬で行ったラガーと王女が、海の鬼灯やら闇の戦士やらに、殺られちゃったんじゃないだろうな！？

上空の紅の灯は、頭上の蒼の光と辺りを覆う闇に隠され、その姿を確認することができない。

不穏な雰囲気を感じがって、耳をすませてみると、ほら貝を鳴らしたような空洞な音があちらこちらから響いてくる。すると、人型

をした闇の戦士が、タルクの足元から湧き上がってきた。

「邪魔だ！ お前らはとっとと消えうせろ！！」

背中の長剣を抜き、折り重なって現れる闇の戦士をなぎ払いながら、タルクは上へと向かった。その2m近くもある長剣の刀身は蒼に輝き出していた。どうやら、タルクの仲間の役に立ちたいと思う心と呼応しあった時、その長剣は、ジャンの蒼の光をその刀に取り込むようなのだ。

切れる息もそこそこに、タルクは坂道を駆け上がってゆく。

うまく蒼の光の圏内に逃げ込めているならいいんだが、あの光の届かない場所でこいつらと戦闘なんて、王女たちには絶対に無理だ！

そう思った直後に、坂道の先から、突然、白煙が立ち上った。そして、絶叫のような少女と男の叫び声が響いてきた。

＊ ＊

「だめだ！ やっぱ、こいつらにゃ、白煙筒なんて効きやしない」「もともとが闇だもの、煙いなんて感覚、あるはずがないわよ！」

次々に現れる人型の闇の戦士をレイピアで切り裂いても、また、次の戦士が現れてくる。ラガーがだめもとで投げた白煙筒は、ただ、闇の戦士の寒気のするような漆黒の姿を無駄に空中に浮き上がらせるだけに終わっていた。

激しく息を切らしている、王女に目をやり、

「おい、大丈夫か？」

そう言ったラガーも、痛めた体のあちらこちらから、血が滲み出している。

「あなたね、人のことを心配するより……」

だが、次の瞬間、王女リリーの真後ろに新たな闇の戦士が浮かび

上がってきた。大きく上に構えた暗黒の槍。そして、彼女が気づくより早く、それは槍先を獲物の頭めがけて振り下ろしてきた。

「お姫さん、危ない！！」

おおい！！ 串刺しになった王女なんて、とんでもないぞ！

ところが、万事休すと瞳を閉じた、ラガーの頭上から、

「はぁ……、やっと間に合ったか」

息も切れ切れな野太い声が響いてきたのだ。恐る恐る、目を開き、
「タルク……」

ラガーはその時、今でも敵だと認識している大男の姿に、不覚にも、ほっと胸をなでおろしてしまった。

王女の背後にいた闇の戦士が、蒼の光を伴ったタルクの長剣が巻き起こした剣圧に吹き飛ばされ、人型から闇の塵に姿を崩してゆく。リリーは、ラガーと同じような安堵の瞳を長剣使いに向けてから、
「蒼の光が降りてくるわ……」

空を見上げて、小さく感嘆の声をあげた。

漆黒の闇の中を降りてくる蒼の光

その中には、邪心の紅も、暗黒の闇も到底入り込めないであろう、天上から柔らかく降り注いでくる大地の永輝。

「あの蒼の光に守られているうちは、何が来たって大丈夫だ。だから、お姫さんは、さっさと上へ行け！ 俺はラガーを背負って後に続くから」

そう言って、西の丘の頂上を指差したタルク。リリーは、その言葉に思わず眉をしかめてしまった。

「だって、あの道をふさいでる大岩。いくら私だって、あれを乗り越えることなんてできないわよ」

だが、タルクは平然した笑みを浮かべると、王女を手で後方に押

しやり、

「心配しなくても、お姫さんにロッククライミングをさせる気は全くないから……だから、ちょっと、後ろに下がってってくれないか」手にした長剣を上段に構えてみせた。

タルクの長剣の刃には、まだ、ジャンの蒼の光が輝いていた。

黒馬島では、この長剣で、俺は暴走した機関車の連結器を車輛ごと叩き切ったことだってあるんだ。大岩なんてちよいもんさ。

「うおおおっ!!」

大音声をあげ、大岩に向けて一気に長剣を振り下ろす。それとともに、蒼の閃光が宙を舞った。その瞬間、耳をつんざく轟音と瓦礫と爆風が辺りに立ち上った。

その2・3秒後に、

「確かに道は出来たわね」

王女リリーは、真っ二つに裂けた大岩と、その前に仁王立ちのタルクに姿に、呆れたように吐息をもらした。だが、すぐに表情をきりと引き締めると、手にしたレイピアを鞘に収め、

「行くわ! だから、二人とも、この蒼の光の中を私の後に着いて来て!」

くるりと身を翻すと、後ろを振り返りもせずに頂上への道を駆け上がっていった。

「そこいらの兵士より、あのお姫さんの方がよほど勇猛果敢だな」と、王女の後姿を苦笑いで見送ってから、タルクは地面に座り込んでいるラガーに目を向け、

「さて……と、こんな大入道に背負われるのは、嫌だろうが、その傷じゃ頂上までは登れないだろ?」

その皮肉まじりな口調に、ラガーは、自分がタルクが崖から落ちた王女を抱えあげた時に言った台詞を思い出す。凶体の割りに、け

っこう細かい事を根に持つ奴なんだなと、頬の傷を微妙に引きつらせ、

「どうせなら、俺は、大入道より、あの夜風みたいな美女に運んでもらいたかったよ」

けれども、そんな舌戦を続けていても意味がない。二人を覆うように蒼の光が降りてきたのは、タルクがラガーを背負おうとした、ちょうどその時だった。すると、

「えっ？」

ラガーが突然、おかしな声をあげたのだ。

「どうした？」

「傷が……」

見る見るうちに、体のあちこちについた傷が淡雪が溶けるように消えてゆく。……が、心底、驚いた表情のラガーとは対照的に、タルクは落ち着いた様子で、

「それは、ジャンの癒しの力だ。きっと、あいつの蒼の光は、光の圏内の生きとし生ける物の痛みを全部、拭い去ってくれるだろう。

けれども、こんなに大判振る舞いしてしまっ、彼自身は大丈夫なのか？ ジャンが疲れきってしまったようにと……ゴットフリーはいつもそれを気にかけていた。あいつはお人良しだから、少しも自分に残さずに力を使い切ってしまうんだと」

「癒しの力……か。だが、この感じは前も経験したことがある……王宮で白蛇に追いかけられた時に痛めた足が、いつの間にか治っていたんだ。こんな光が降ってきたわけじゃないけど、本当に気がつかないうちに、足の痛みは消えていた」

ラガーは、自分の言葉を頭の中で反芻するように、一瞬、沈黙し、「……あれは、ラピスに診てもらった後のことだった」

「偶然じゃないのか？ それか、一時的に足に痛みがあっただけとか」

そう言葉を繋いだものの、タルクは、ふと、以前に折れた自分の肩の骨のことを思い出し、

「そういえば、俺もラピスに肩を診てもらった、少し後に同じようなことが……」

何かが、お互いの脳裏で一致しそうになって、ラガーとタルクは、思わず目と目を交わしてしまったが、

「とにかく今は、そんな事より、上へ行くことが先決だ!」

その考えを振り切るように、タルクは、今は自力でも動けそうならガーを急かし、頂上への道を駆けあがってゆくのだった。

＊ ＊

闇に閉ざされてゆく地表と空の間で、元々の形が想像できないほどに壊されてしまったエターナル城のがらんどくに吹き抜ける風は、もう戻らない王国の栄華を惜しむように、冷たく、空虚な旋律を辺りに響かしていた。

その居館の上に、ココと一緒に取り残されたしまった”レインボーヘブンの欠片、樹林”は、彼の体から漏れ出しては陽炎のように薄れてゆく、緑の光をどうにか彼の主に届かせて、こう乞うた。

「ゴットフリー、お願いだ。闇の扉を開くのは止めてくれ!」

だが、

「そんな戯言をきく耳はもたぬと、何度言えば、お前はその口を閉じることができるんだ? 俺の邪魔をしないと云った、ジャンの方がまだ聞き分けがよかったな」

と、ゴットフリーは意に介そうともしない。その時、同じ”レインボーヘブンの欠片”のジャンと比べられたことに対して、樹林は、何とも言えない心地悪さを感じてしまった。

「俺とジャンと一緒にするな! お前は、今は、闇の王……なのだとしても、レインボーヘブンの王でもあるんだ! だから……」

ところが、

「”ラピス”もう、終わりにしろ」

その名前をゴットフリーが口に出したとたん、”樹林”は、緑の

瞳を大きく見開いた。そして、虚をつかれたように口を嚙むと、エターナル城の居館の床にがくと膝をつき、そのまま、前方に倒れこんでしまった。

「樹林!!」

居館の後ろからその様子を眺めていたココは、大慌てで彼の元に歩みよる。だが、

「血が……」

その手の間から床に流れ落ちた鮮血。自分を助けるために、白蛇の牙にわき腹を貫かれた弓使いの惨状を思い出し、ココは、
「やっぱり、ラピス……なの？」

彼の体から醸しだされていた、緑の光が徐々に力を失ってゆく。それと共に更に広がりを増してゆく闇……が、その中心から、研ぎ澄まされた灰色の瞳をこちらに向けてくる男の姿をエターナル城の居館の上から見下ろした時、

闇の王？ あれが？ ううん、だって、あれは、”ゴットフリー”
”なの……”。

ココは、不思議な違和感を感じずにはいらなかった。

Chapter 77

そんなココの心に気づくそぶりもみせず、ゴットフリーは、これが最後だとばかりに、低く辺りに響く声音で、闇の扉を召還し始めた。

“光の賜暇、唯一の眠り、それを聞き届くは深遠なる闇”

手を大地にかざすと低く呟く。

「闇馬刀」

大地の底から、唸りのような大轟音が響いてくる。それとともに、エターナル城の中庭全体に巨大な一文字が浮かび上がってきた。それは、先端の尖った黒い陰影となり、使い主の言葉を待つように、一瞬、地の中で動きを止めた。

ココはその影の形に見覚えがあった。ゴットフリーと迷い込んだエターナル城の鏡の迷宮。その鏡の中に現れた黒刀の剣。

闇馬刀は、光と闇の中から現れる剣。

グラン・パープルの暗い土の中からもその剣は現れ、そして、その主——ゴットフリー——の命に応じて、大地を切り裂いてくる……そして、闇の扉を現世に開く。

灰色の瞳を居館の上の少女にちらりと向け、

「本当に、ゴキブリ並にしぶとい娘だな。ならば、その欠片の面倒は、お前が見てやれ」

ゴットフリーは、ほんの一瞬、畏れとは無縁な笑みをくすりと口

元に浮かべた。

……が、その瞳が再び、研ぎ澄まされた光を放ちだした時、
「ラピス、伏せて！ そうしないと闇に引きずりこまれる！！」

ココは、ラピスの上に自分の体を投げ出した。

「シャドークロス！ 闇の扉！！」

ゴットフリーの叫びとともに、闇馬刀が、地中でぎらりと煌いた。
その瞬間、漆黒のうねりが大気をつんざき、エターナル城の中庭は、
内側から真っ二つに切り裂かれた。

轟音と激しく回りを吸い取ってゆく黒い風。

旋風を吹き上げながら、闇の扉がグラン・パープル全体に開け放
たれてゆく。

王宮の中庭に蔓延っていた紅の花も兵士も、”レインボーヘブンの
欠片” 樹林が天の四方から呼び集めた緑の蔓でさえも、黒く枯ら
し、すべてを闇の中に沈めながら。

空と大地を覆い尽くす漆黒の中で、姿を確認できるのは、西の方
向に輝く蒼の光と、闇の中心に立つゴットフリー、そして、王宮の
居館の上で懸命に床にしがみついている、ココとラピス。そんな容
赦のない暗黒が、グラン・パープルを飲み込みながら広がります。

ところが、

「大丈夫！ 闇に引きずられさえしなければ、絶対に大丈夫なんだ
から！」

懸命に旋風に耐えながら、ココは、ラピスの体を抱えて、呪文の
ようにその言葉を繰り返していた。……が、

「畜生……ふざけんなよ。ゴットフリーの奴、何で俺がココに面倒
を見られなきゃなんないんだよ」

先程まで、ぐったりとしていた青年が、少女の腕をぐいと自分の
方へ引いたのだ。

「ラピス？ 樹林？ ……あんた、まだ、動けるの？」

「ココ、もつと、こっちに寄って。とにかく、お前だけは俺が守るから……」

緑の瞳の弓使いが、そういう終わらないうちに、居館の床下から、淡い花の香が立ち昇ってきた。

「な、何っ、これっ？」

居館の床を突き破り、彼らの真下に伸び上がってきた、巨大な緑の蔓。

” 守護残花 ”

その弓使いの呻きと共に、緑の蔓の先端に芽吹いた蕾が、巨大な花を咲かせ始めた。睡蓮のような薄桃色の花びらが徐々に綻びてゆく。その花冠に四方を囲われた時、ココは、甘い香りにうとうとと、眠気を感じずにはいられなくなってしまった。

だめだ。こんな所で眠ってる場合じゃないのに……ゴットフリーにラピスの面倒を見ろって言われたのに……

けれども、花の中で体を起こした緑の瞳の青年は、

「いいんだ……俺たちの出番はここまでだ。もう、この花の中で、二人して眠っていよう。グランパールの後の運命は、時に委ねるしか手立てはない。目覚めた時に、例えばそれが、光であっても闇であっても、運命に抗うことはできないのだから……」

うつらうつらと眠り始めた少女の体を抱き寄せ、緑の瞳をかたく閉じた。それと共に、巨大な花も、二人を包み込むようにその花びらを閉じていった。

＊ ＊

ラピスとココを花卉の中にしまいこんだまま、かすかに薄桃色に

輝いている巨大な花と、ジャンが作り出した西の丘に浮かび上がる蒼の光のドーム。それ以外は暗闇に閉ざされたグラン・パールの大地の上で、ゴットフリーは、己が開いた闇の扉の威力に酔いしれ、放心したように立ち尽くしていた。

空と大地に蔓延っていた紅の灯は、その暗黒に気圧されたように、消えうせてしまっている。その時、ゴットフリーの右胸の傷跡がにわかには痛み出したのだ。眉をしかめ、胸を手にとると、夜叉王、伐折羅に黒馬島でつけられた傷口が開き、鮮血が零れ落ちてきた。

「伐折羅、この期に及んで何故、割り込んでくる！？ この恍惚に浸っていたい俺を邪魔しようというのか」

仰ぎ見た暗い空には、風にのった灰色の雲が濁流のように流されてゆく。

そう……。まだ、物足りない。まだ、俺は満足していない。

ゴットフリーは、彼の手元を紅に染めた鮮血を振り払うと、西の方向に輝く蒼の光に向けて、声を荒げた。

「ジャン、俺の声が聞こえたなら、欠片の鳥の背に乗って、今すぐここへ飛んで来い！俺の好きにさせるといった、お前の言葉が偽りでないというなら」

Chapter 78

さながら、真夜中の嵐の海に立つ灯台。

闇馬刀が切り裂いた地中からの旋風に堪え、西の丘は、闇の海の中で儚げに蒼の光を灯し続けていた。逆に、丘をぐるりと囲んでいた闇の戦士は、暗い海に広がる水紋の輪となって、島を覆いつくしてゆく。

ジャンは、かろうじて空に留まっている天喜の白い鳥の背の上で、唇をかみしめた。

容赦のない闇。

グラン・パールが闇に堕ちてゆく……だめだ！ このままでは、ゴットフリーは、この場所の未来を驚づかみにしたまま、闇の彼方へ消えてしまう。

……が、その時、ジャンは彼の名を呼ぶ、有無をいわさぬ声を聞いたのだ。

一瞬、頭の中で時間が止る。

この声は……？

「ゴットフリー……」

ジャンは、不安を心に疼かせながら、闇に閉ざされた、エターナル城の方向に目をやった。

以前からジャンとゴットフリーは、シンクロ気持ちが同調することがよくあったのだ。今、行かなければ、彼は闇の王となり、二度と手にとどかない場所へ行ってしまう。けれども、ジャンが、この西の丘を

離れば、蒼の光の力は徐々に弱まり、闇の戦士は住民もろとも、この地を暗黒に包み込んでしまうだろう。

「それだけは、できない！　でも、僕は行かなきゃならないんだ」
なす術のない状態に、迷いきつて空を見上げる。……すると、

”ジャン、行けよ。闇の戦士は僕が率いる”

再び、頭の中をよぎっていった声に、ジャンは、はっと、とび色の瞳を見開いた。

「お前は……まさか……」

”この世にゴットフリーを引き止めておけるのは、ジャンくらいのものだろ。さっさとしないと、僕はあの人を闇の世界へつれてゆくよ。それでも、後悔はしない？”

天喜の白い鳥が色を変えたのは、その瞬間だった。ジャンを背に乗せたまま、純白の輝きが闇に溶けてゆく。そして、それと入れ替わるように漆黒の鳥が大きく天空に翼を羽ばたかせた。

伐折羅の黒い鳥……この鳥はいつも影のように彼のそばに寄り添っていた。

ゴットフリーがお前を呼んだ？　いや、彼の想いが無意識にお前を、ここに引き寄せたのか……。

夜叉王、伐折羅。

「伐折羅！　お前は実体じゃないな。でなけりや、黒馬島にいるはずのお前が、何故、グラン・パールに現れることがある！？」

ジャンは声を荒げると、目に見えぬ夜叉王の姿を見極めようと、

ぐると辺りを見渡した。

闇の中には何も見えない。だが、ジャンの並外れた五感は、徐々に密になってゆく辺りの空気を敏感に感じ取っていた。闇がゆらりと揺れた。そして、彼が作り出した蒼の光のドームの上に、凜とした漆黒の乙女が姿を現したのだ。

「霧花！ ……レインボーヘブンの欠片”夜風” ……でも、僕には分かるぞ。お前の姿は霧花でも、中身は彼女じゃないだろう！」

静かな夜の湖底のように、哀しいほどに澄みきった黒い瞳。

「そこにいるのは伐折羅だな！ お前は……霧花の体を仮宿にして、ここで何をしようっていうんだよ！？」

「ゴットフリーの強い思いが僕をここに引き寄せたのさ。まったく、ジャンがついておきながら、あの人をあそこまで追い詰めるなんて、こういうことなんだよ。それに我慢ができなくて、僕は意識だけをこちらへ飛ばしたんだ。幸い霧花は闇の住民だ。何の不平も言わずに僕に体を貸してくれたよ」

その台詞を真に受け止めることができず、ジャンは眉をひそめた。多分、伐折羅は半強制的に霧花の意識の中に入り込んできたに違いない。

伐折羅は、言った。

「僕は警告しておく。海の鬼灯が姿を消したからといって、油断してると後で取り返しつかないことになるよ。それに、このグランパス王国の王宮の下に巣食った激しい欲望が、また、新たな邪気を生み出そうとしている。その根本をゴットフリーは叩き潰したが、つてるっていうのに、ジャンは、何で、いつまでも手ぬるいやり方をし続けているんだよ」

黒馬島の夜の守り手、夜叉王 一伐折羅。レインボーヘブンの欠片”空”と人間の間にできた子供である彼は、双子の姉、天喜と二人で、レインボーヘブンの欠片”空”の”夜と昼”の顔を二分して受け継いでいる。

彼の容赦のない糾弾に、ジャンは返す言葉がなく、口を閉ざして俯いてしまった。すると、

「あの紅の邪氣の我が物顔には、僕も我慢がならない。ゴットフリーが闇の王として、君臨している今のうちに、出来る限り、あの邪気を叩き潰しておかねばならないんだ。けれども、僕が追わなきゃならないのは、次の行き先に向かった海の鬼灯の方なんだ」

「次の行き先……？」

合点がゆかぬ様子のジャンをきつく見据えて、伐折羅は言った。

「レインボーヘブン。何故だか理由は分からないが、この場所の壮絶な戦いのうちに、あの邪氣は、かつて、その至福の島があった位置を探り当ててしまったらしいよ。……そして、黒馬島も……」

「何だって！　だって、ゴットフリーと僕ら、”レインボーヘブンの欠片”は、その場所を探して、今まで苦勞して旅を続けてきたんだ。ここでの戦いで、海の鬼灯が先にそれを知ってしまったただなんて……そんな馬鹿なことがあってたまるか！」

だが、ジャンは、

「待てよ……、伐折羅、お前、確か黒馬島も……って言わなかったか？」

黒馬島は、自分の意思にかかわらず、移動を繰り返してきた流浪の島だ。まさか、その島まで、ゴットフリーに引き付けられて……。

「そうさ、黒馬島が近づいてくる。やがて、あの島は、ゴットフリーのもとに現れる……だから、ジャンは早く、あの人の元へ行け！　行って、この腐りきった王国に巢食った紅の邪気を消し去ってく

るがいい。この西の丘の住民のことは僕が引き継ぐ。闇の戦士は元々は、夜叉王の配下だ。僕の命令に逆らわせはしないから」

そう言うってから、黒馬島の夜の守り手は、自分が操る漆黒の乙女の腕を動かし、夜の帳のような扇を空に掲げあげた。すると、西の丘を取り巻く闇の戦士たちが、ざわと、一斉にその方向を振り向いた。……が、ジャンは、

「待てよ、殺戮と掃滅は夜叉王の好むところじゃなかったのか!? そんなお前が、何故、縁もゆかりもないグランパス王国の住民を助けようとするんだ? ゴットフリーが闇の王になることは、夜叉王の願いでもあるんだろ……それなのに、何で、今になって僕らに力を貸そうとするんだ!？」

すると、霧花の顔をした夜叉王　一伐折羅　は寂しげに微笑み、「……だって、天喜が泣くんだ。ゴットフリーが闇の王になって、光の場所からいなくなると、天喜があの人から預かった金のロケットを返す約束を守れなくなると。……だから、今は、僕はジャンに協力してやる。だから、早く行けよ!　僕の気が変わらないうちに」

闇の住民は、光のある場所には暮らせない。そして、光の中に住む者は、闇の住民と相い謁することはない。

霧花が前に言った言葉が頭に中で繰り返されて、ジャンは、哀しいような気持ちになってしまった。けれども、

「分かった。伐折羅、住民たちのことはお前にすべて任せる。だから、決して気を変えてくれるなよ!　もし、住民たちに何かあったら、僕だって黙ってはおかないからな!」

「へえ、その方が僕はおもしろいような気がしてきた」

珍しく好戦的な台詞を吐いたジャンに、伐折羅は小気味良さ気に言葉を返す。

……が、

「馬鹿を言うな！ もう、僕は行くから！！」

ジャンは、伐折羅をとび色の瞳で一瞥すると、黒い鳥をせかして、ゴットフリーのいる王宮の中庭へ飛んでいってしまった。

その後姿を冷涼な瞳で見送ってから、くすりと笑みを浮べる。それから、伐折羅は、霧花の体を翻して、再び、ジャンが作り出した蒼のドームの上へ舞い上がった。

Chapter 79

「蒼の光が薄れてゆくわ……」

闇の戦士を振りきり、西の丘にたどりついた王女リリーは、徐々に消えてゆく蒼の光を見据えて、不安げに闇が吹き荒れる空を見上げた。

”レインボーヘブンの欠片” 大地”であるジャンの作り出した蒼の光は、生きとしいけるすべての物を守ってくれる。けれども、その光が消えてしまったら……。

すると、事の成り行きを見守っていた住民たちが、たまらずに声を荒げた。

「あの蒼の光がもし、全部消えてしまったら……ここに在る皆はあの闇に一齐に飲み込まれてしまうぞ！ 俺たちはどうやって、自分の身を守ったらいいんだ……！」

「あの子は私たちを絶対守ってくれるって言ったのに、あれは嘘だったのね……！」

たった今、丘の上に駆け上がってきたタルクとラガーが、騒ぎを止める余裕もなく、息を切らしている。

「待て！ あれは何だ……！」

天空の闇と蒼の光の間に突然、黒い影が浮かび上がったのだ。徐々に姿を現してくる漆黒の乙女。彼らは上空から悠然と彼らに視線を向けてくるその姿に目を見張った。

「霧花か……？ 有難い。俺らの加勢に来てくれたのか……？」

そう笑みを浮かべた後でラガーは、強く眉をしかめた。霧花は二人の男に一瞬、冷たい視線を送りはしたが、すぐに知らぬそぶりを決め込んだのだ。西の丘の周りをぐるりと取り巻いた闇の戦士に向

かって、手にした夜扇を広げる。そして、言った。

「夜の隸属、闇の戦士！ この女はお前たちの主、夜叉王の現し身。この地を攻めるのは、”夜叉王” 伐折羅の意思ではなく、”闇の王” ゴットフリーの意思でもない。主のいぬ間に、規律も統一も失った烏合の衆よ、息も絶え絶えのこんな国を、奈落の闇へ誘って何の意味がある？ 須く、我に続け！ 勝手な行動は、”夜叉王” 伐折羅が悉く夜扇で首を掻ききる！」

グラン・パールの空に広がった闇の戦士がびくりと身を震わせた。漆黒の闇がざわと揺れた。その瞬間、何億と天空に広がった戦士たちは、一斉に夜叉王の方向へ軍列を整えだしたのだ。

「闇の矛先を向けるは紅蓮の灯！！ あの世界の果てが沸きあがってくる紅の灯を、一つ残らず捕らえ、引きずり、奈落の底へ墮としてしまえ！」

命ずる霧花の表情は、美しく、清廉な乙女そのものだった。けれども、その声は、その場に居合わせた、ありとあらゆる者の命までを浚^{さら}ってゆきそうに、冷涼に空に鳴り響いていた。

＊ ＊

「大変な展開になってきたぞ……。夜叉王の現し身かなんかは知らないが、あの夜風が闇の戦士の長になってやがる」

幾億もの暗黒の兵士の頂点に浮かび上がる漆黒の乙女を、西の丘の中腹から、ラガーとタルクは啞然と見上げている。

……が、その漆黒の乙女が、くると西の丘に背を向けた時、

「伐折羅！ 頼むから俺の言うことを聞いてくれ！！」

突然、ラガーの隣にいたタルクが彼女に向けて大声をあげたのだ。

彼が呼んだ名前が、”霧花”ではなく”伐折羅”だったことも、ラガーには意外だったが、何よりも驚愕したのは、天空で立ち止まるように歩を止め、こちらを振り向いた美女が、にこりと彼に微笑んだことだった。

「タルク、久しぶりだね。天喜が会いたがっていたよ」

一瞬、戸惑ったようにタルクは表情を変えたが、

「おい……タルク、お前、あの夜叉王と知り合いなのか!？」

ラガーのその問いには答えず、タルクは、

「伐折羅! お願いだから、力を貸してくれ! ジャンは、ゴットフリーの元へ行ったんだろ? それなのに、お前までここを離れてしまったら、誰がこの西の丘を守れるっていうんだ!!」

だが、

「誰がここを守るかだって? それは、ほら、そこにいるだろ」

「え?」

一瞬、虚をつかれたように、瞳をしばたかせた巨漢に、天空の乙女はピアニストのような指先を向けた。

「……俺?」

「だって、タルクは黒馬島が炎馬に焼き尽くされそうになった時にも、先頭きって住民たちを守ってくれたじゃないか。でも、本音をいえば……」

「本音……?」

「正直言って、僕はこの国が気に入らない。海の鬼灯やゴットフリーがやらなくても、闇の戦士を使って、僕がこの国を滅ぼしてしまいたいくらいだ。何故って、自分の国は、自分で守るべきじゃないのか。いつも誰かを頼っているような国は、いつか必ず誰かに滅ぼされる。黒馬島に守られていたレインボーヘブンが、自らを守る術を持っていなかったように!」

吐き捨てるように言ってから、伐折羅は霧花の体を使って、闇が

吹き荒れるグラン・パールの空に身を翻した。

「分かったなら、もう僕は行くから。僕が、お前たちにしてやれることは、闇の戦士をこの地から去らすことだけだ。あの闇の戦士は僕がついていないと、通り過ぎてゆく他の国や町まで、無駄に壊滅の憂き目にあわせてしまいそうだしね。あとは、残った人間たちで上手くやってゆくんだな。滅びようが生き残ろうが、それは、僕の知ったことじゃないが、せいぜい、あの律儀なジャンを泣かせるような事がないようにって、一応は祈っておくよ」

漆黒の乙女は、もうこれ以上は聞く耳もたぬと冷淡な一瞥をタルクに残すと、先にグラン・パールの空から遠ざかるうとしている闇の戦士たちの間に消えていった。

闇の戦士たちが去った後の、グラン・パールの空には荒涼とした闇と、その暗黒を巻き上げる旋風だけが轟音をあげて吹き上がっていた。

徐々に薄れてゆく蒼の光の隙間から、居館の部分をだけを残して崩壊してしまったエターナル城の黒い影だけが垣間見える。西の丘の周りのそれ以外の建物は闇に吸い取られてしまったのか、立つものは一つも無く、抜け落ちた木々が旋風に乗って、しだれ柳のように西の丘の周りをぐるぐると飛び交っていた。

「だめだ……蒼の光が消えてゆく。もう、俺たちは終わりだ」

「嘘つき！！ 誰も助けてなんかくれないじゃないの！！」

西の丘にいる住民たちが、悲嘆にくれた声をあげる。不安になった子供が泣くのも構わずに、頭を抱え込んで地面にうずくまってしまふ母親もいる。

「いい加減にしないか！！ さっき、夜叉王が言ったように、”自分の国は自分で守る”って気持ちを前らは持ち合わせていないの

か!!」

そんな人々を見やってタルクが言う。けれども、

「国を守るったって、俺らは、あんたみたいに強くも頑丈でもないんだよ!!」それに、こんな瓦礫だらけになってしまった国を守る価値なんてあるのか! もう、国なんてどうでもいい。俺は自分と自分の家族が生き延びりゃ、何だって構わないんだ!!」

そんな言い争いの最中にも、ラガーだけは、

“国としてのまとまりもなしに、こんな荒野で、自分と自分の家族だけが残って、無事に生き残れるとは思えねえけどな……”と、かなり白々と冷静に周りを見つめていたが、

「守る価値のない国なんて、あるわけがないじゃない!!」その凜と張り詰めた声に、はっと西の丘の頂に目をやった。

どうしようもない暗黒の中で、その声の主が立つ場所だけが眩しく思えた。光のない闇の中でも、背中一つに束ねられた髪は風になびき黄金に輝いていた。そして、弱気を一切受けつけない覚悟の紫暗の瞳は、きりと前を見据えていた。

「スウォード・リリー……」

啞然とする彼らの前に、すらりとした足で仁王立ちする武装の姫。王妃に化けた白蛇に酒漬けにされ、我を見失った国王に成り代わって、いまや、グランパス王国の主となった王女は、渾身の願いを込めて国民たちにこう問うた。

「あなたが愛したのは、グランパス王国の豊かさ? 自然の美しさ? それとも、その象徴だった豪勢なエターナル城? 違うでしょ? 少なくとも私の愛したグランパス王国はそんな物じゃなかった!」

Chapter 80

返す台詞が見つからず、住民たちは、ただ、王女を見つめている。すると、彼ら、一人一人の顔を王女は、切々とした瞳でぐるりと見渡した。

「私が大好きなのは、”あなたたち”よ。そう、グランパス王国の礎を支えてくれた国民のすべてを私は愛していたの」

誰も彼もが、言葉を失ってしまった。そんな反応を見極めることを一切しない王女の表情は、ただ、一心に自分の心を伝えたいだけといった風に見えた。

「この国には守る価値は十分に残っている。何故なら、この国の命はまだ、ここに息づいている」

だから……と、王女は続けた。

「この国を守ることは、この国の命を守ること。自分を守るのも家族を守ることも、それはすべて、同じ意味。あんな虚栄の城なんて、潰れてしまった方が、むしろ上等！ 城や建物なんて、後でいくらでも作り直せばいいんですもの。だから、どうか、私についてきて！ グランパス王国を守るのよ。私たちにはそれができるわ！！」

先ほどとうって変わって、顔を上に向け出した住民たち。

あつという間に空気が変わったなど、タルクとラガーは、思わず、顔を見合わせてしまった。

「カリスマ性があるっていうのか、やっぱり、このお姫さんには敵わねえな」

それならば俺はと、ラガーは、つと住民の方へ歩を進めると、
「俺はさっきから見てて、ちょっと気づいたことがあったんだが」と、自分に彼らの視線が集まるのを待ってから、王宮の方向を指差

し、こう指摘した。

「この暗黒を吹き上げ、同時に辺りを吸い込んでいる旋風の中心はエターナル城の敷地の中にある。……でな、重要なことは、その中心は大型の竜巻みたいにこちらには移動してこないって事だ」

住民たちは、彼の言葉に腑に落ちない表情で、

「それって……どういう事だ？」

「まあ、続きを聞けよ。ジャンが作ってくれた蒼の光が全部消えてしまった後には、相当の暴風が、この西の丘に吹き込んでくるだろうが、今では危険極まりなかった、あの紅の灯も、闇の戦士ももういない」

ますます訳がわからなくなって、住民たちは困惑に満ちた顔をする。すると、ラガーは、

「これだけ言っても、まだ分らねえか？ 確かにあの風は、ここら辺りの光を全部吸い取って、暗黒に染めちまってるが、風自体は、刃で切り裂いてくるわけでもないし、槍を突き立ててくるわけでもない。そう考えてみると、この状況は“ちょっとばかり勢力の強すぎる竜巻の夜”と考えてもいいってことだよ。もちろん、あの闇の中心地に吸い込まれてもしたら、もう、俺らは終わりなのかもしれないが、あの中心は見たところ動く気配はなさそうだ。……ってことは、あの風に耐えきれることができれば、俺たちにも生き残れる望みは十分にあるんじゃないかねえのか」

それでも、住民たちはまだ、狐に化かされたようにラガーに視線を向けるだけなのだ。蒼の光はもうその色が見えぬほど薄れ、そのこぼれ目から、強い烈風が吹き込んでくる。じれた表情のタルクが言葉を挟んできた。

「ラガー、時間がないんだ！ 前説はその辺にして、何かいい方法があるなら早く教えろ！ あの暴風を耐えるために、俺たちが今、できる事を……！」

ラガーが言った。

「ハリケーンや強い竜巻から身を守る方法の基本は……」

「方法は!？」

「まずは姿勢を低くすること。戸外の場合は、なるべく根を大地に張った大木等に体を固定し……」

タルクが住民に向けて声を張り上げたのは、まだ、その台詞が終わらないうちだった。

「住民たちは、四・五人に別れて、なるべく根の張っていそうな木の下に体を固定しろ! 子供は大人の前に抱えて、この風の勢力が収まるまで耐え切るんだ! ロープが足りなければ、ベルトでも上着でも、何でも利用できるものは利用しろ! 急げ! 蒼の光が消えて、暴風が吹き込んでくる前に!!」

大地を揺らしそうなタルクの大声に、眠っていた目を一気に覚まされた住民たちは、我先にと、彼の言葉に従いだした。

抜群の連携で住民たちに指示を送りながら動き回る、二人の男。

彼らを見やり、王女リリーは、

「なるほどね。タルクとラガーって、ゴットフリーが目をかけてただけあって、かなり頼りになる部下だと思うわ」と、紫暗の瞳を頼もしげに細めた。

＊ ＊

天空に重なる墨染めの雲をつんざき、切り裂かれた大地から激風が吹き上がる。王宮の中庭を彩っていた花々や繊細な彫刻をほどこした城の飾柱は、見る影もなく崩れ落ち、轟音を伴った容赦のない闇は、グラン・パール島を灯す全ての明りをかき消さんかとする勢いで、広がり続けていた。

すでに、西の丘の蒼の光は、ほとんどが消えうせ、四方八方が闇に閉ざされたエターナル城の中では、居館の上でココとラピスを蕾

に護り込んだ巨大な花だけが、旋風の中にかろうじて、ほのかな薄桃色の光を保ちながら立ち続けている。

その暗闇の中を、漆黒の鳥が音もなく滑空していった。

レインボーヘブンの欠片”大地”―ジャン・アスラン―は、伐折羅の黒い鳥の背の上から、轟音が暗黒の風となって吹き上がってくる大地の裂け目に、とび色の瞳を向けた。

「どんなに闇が深くても、僕の目を誤魔化せるはずがないだろう！
！」

闇の扉の傍らに立つ”暗黒の王”

その姿を視界にとらえた瞬間、ジャンは、体の中の力を全て吐き出しそうな勢いで声をあげた。

「グラン・パープルの大地よ、生きとし生ける”者と物”の輝々たる光よ！ この暗黒に蒼の光を灯せ！！」

ジャンの体が突然、蒼に輝きだした。輝きは瞬く間に大きく広がり、光を失ったグラン・パープルの大地を蒼の光で照らしだした。

闇の扉からの激風は、傍らに立つ彼らの王を迂回しながら、空に向かって吹き上がっていた。何食わぬ表情で、降下してくる黒い鳥を眺めていたゴットフリーは、蒼の光が天上で炸裂した時、その眩しさに思わず、手をかざして目に入る光を遮ってしまった。

光の下に、自らの姿を強引にさらけ出された時、滑空してくる黒い鳥に目をやり、苦い笑いを浮かべる。

「ジャン、そこで止め！！ これ以上は俺に近づくな！」

右手を掲げて、空を半分ほど降りてきた、ジャンを制止する。すると、彼を乗せた伐折羅の黒い鳥が、その声に見えない枷をか

けられたように、先へ進めなくなってしまったのだ。苛立った様子で、ジャンは言う。

「ゴットフリー！ 僕をここへ呼びつけておいて、今更、何故、この鳥の行く手を遮るんだ。それに、お前は、どういうつもりで、こんな中途半端な形で闇の扉を開いたんだ。闇馬刀の力をもってすれば、この地のすべてを闇に沈めるなんてわけのない事だろう？ お前は……僕に何をやらせようっていうんだ！？」

「まるで、完全に闇の扉を開かなかったのが不満そうな言い草だな。闇の扉の奥に引きずり込んでやりたかった邪悪の灯は、敗色をそうそうに悟って、この地から逃げていったからな。けれども、このエターナル城の大地の下には、まだ、この世への恨みを晴らし切れない邪悪の紅がはびこっているぞ。俺は、俺を欺き毘にかけ、BWを闇に貶めた海の鬼灯を許すことはできない。そのために、お前をここに呼んだ。邪心の紅を悉く、闇の世界へ引き連れてゆくために」

「……それって、どういう意味なんだ？ まさか……ゴットフリー、お前は……」

ジャンの背中を冷たいモノが通り過ぎていった。

” 同調^{シンクロ}している ”

そう、これまでの長い旅の間にも、ジャンには、ゴットフリーの考えが手にとるようにわかってしまうことが幾度となくあったのだ。そして、それはいつも、事が悪い方向へ向かう時だった。

Chapter 81

黒い鳥の背で戸惑ったように表情を変えた少年に、闇の王は、淡々と言葉を返した。

「ジャン、これは命令だ。海の鬼灯に食い尽くされたエターナル城の敷地を、開いた”闇の扉”ごと、グラン・パール島から切り取って、海の底へ沈めてしまえ。その後で俺は、闇の扉を完全に開く。俺はお前と違って、無駄な力を無駄な時に使うほど、お人好しではないんだ。俺は確実に狙った獲物だけの墓標を闇に刻む」

ジャンの心臓がどくと嫌な音を打ち鳴らした。何故なら、

「……この地を海に沈めろって……なら、ゴットフリー、お前は？」

「俺も一緒に。その後で、お前は、二度と闇に葬られた海の鬼灯が地上へ出てこれないように、この地の上に新しい大地を作り上げろ。崩壊したガルフ島を再生させた、お前にならできるはず。まだ、それだけの力は残しているんだろう？　そうでなければ、俺がわざわざ、闇の戦士を遣わして紅の灯の勢力を殺いでやった意味がない」

「だめだ！！　そんなことをしてしまったら、お前も海の鬼灯たちと一緒に、闇の世界へ行ってしまうじゃないか！」

「別に俺は構わない。俺の帰る場所は結局は闇の中なんだ。これは、闇の扉を奴らに開き、未来永劫、出ることのできない暗黒の世界を奴らに見せつけてやる絶好の機会だ。俺は、ここから逃げていった他の海の鬼灯にこう知らしめす。”闇の王”を欺き、それを利用しようなどという馬鹿げた思惑を二度と持つなと」

「そんなことって……僕は絶対に嫌だ！！　お前は”闇の王”であると同時に、”レインボーヘブンの王”でもあるんだ！　ガルフ島での女神アイアリスの啓示を忘れてしまったのか？　レインボーヘブンへの虹の道標は、ゴットフリー、お前が生きているかぎり、輝き続ける。けれども、もし、お前が闇の中へ行ってしまったら、残

された僕らは、あの至福の島を探す指針を失ってしまう。それに……」

ところが、ジャンが続けようとした次の言葉は、ぷちりと音をたて、ゴットフリーの足元から這い出てきた紅の灯の一欠片に遮られてしまった。

海の鬼灯！

再び、エターナル城の下から姿を現そうとする、紅の邪気をゴットフリーは靴底でむげに踏みつけ、天空に向かって声を荒げた。

「ジャン、急げ！ そうしないと、また、この下に広がる邪気どもが再び、グラン・パープルの空に湧き上がってくるぞ！ そんなことになれば、俺は次は躊躇なく”闇の扉”をこの場で完全に開く。グラン・パープルの住民を守りたいなどと戯言を言うお前が、今更、何を迷うことがある！？ それに、お前は俺の命令には逆らえないはずだ！」

「でも……ゴットフリー、僕は……」

「お前は、西の海岸で”俺の好きにさせてやる”と言った、あの言葉を忘れたのか！！」

黒い旋風が、ゴットフリーの苛立ちを代弁するかのように、蒼の光を切り裂いてジャンの頬をかすめていった。切れた顔の傷をぬぐいもしないで、ジャンは伐折羅の黒い鳥の背で身を震わせている。

「そう……レインボーヘブンの欠片”大地”である僕は”レインボーヘブンの王”ゴットフリーの命令には逆らえない」

きりと唇を噛み締め、両の手の拳を握る。すると、ジャンの体を取り巻いていた蒼の光が、再び強く輝きだしたのだ。ジャンは、途

切れ途切れの声で言う。

「……けれども、僕は信じてる。お前は必ず、帰ってくる。僕らの場所に……光のある世界に……」

ジャンの頬に一粒、涙が伝った。

その直後に、

うおおおおおおお！！！！

ジャンは、この世の大地をすべて揺り動かしてしまいそうな声を空にあげた。

意味もない言葉を。

人の声とは思えぬ、大地が軋むほどの咆哮を。

手元に強く光を放ちだした蒼の光を蓄えてから、両の手をぐんと前に伸ばす。そして、ジャンは心の奥に抱いたやりきれぬ思いを吐き出すように、それを前方に押し出した。

「汚濁の大地に食い尽くされた白亜の城よ、沈め！　そして、蒼海の中に深く眠れ！！」

ぐらりと城の周りに円を描くように蒼の光が走行する。崩壊寸前のエターナル城の立つ敷地が、轟音を立てて沈みだしたのは、その直後だった。

蒼の光に切り取られて、下へ下へと堕ちてゆく虚無の王宮。

陥没した、その敷地の断層の分かれ目が、大量の砂礫や岩とともに崩れてゆく。

ジャンは、露にされたエターナル城の下の地盤に視線を向けた時、その光景のおぞましさに目を背けたくなってしまった。

それは、すべてが血のような紅の色に覆われていた。

おびただしい数の紅の灯が、巢をつつかれた蜂の子のように、わらわらと断層の中から地上へ溢れ出してくる。

沈んでゆく大地の上に、微動だにせず立ちながら、ゴットフリーは、ジャンと同じ光景を冷ややかな灰色の瞳で見据えていた。足元が闇の世界へ堕ちてゆく。その過程が心地よくてたまらないといった風に、悦にいった笑みを浮かべる。そして、おもむろに右手を自分の目前に差し出した。

暗黒の故郷に帰らんとする”闇の王”の手の中で、徐々に暗い光を放ちながら、姿を整え出す漆黒の剣。

一 闇馬刀 一

「ジャン、よく、見ておけ。これが虚栄の城の終焉だ！」

真一文字に構えたその剣を間髪をいれず、十字に振り抜く。

「シャドークロス 闇の扉!!」

その瞬間、上空に這い上がろうとする紅の灯を闇の旋風が取り巻いた。沈んでゆく大地を加速させるように、闇は紅の灯を閉じ込めながら、更にその場所を下へ下へと引きずり込んでゆく。

Chapter 82

「ゴットフリーー!!!」

漆黒の鳥の上からジャンは、闇の中へ消えてゆく彼を引き止めるように、その名を呼んだ。……しかし、

しばらくすれば、また、あの紅の灯は、闇を振り切って地上に湧き上がってくる……海の鬼灯を、蒼の光で作り出した清浄な大地で塞いでしまわなければ、この地上で、再び、壮絶な戦いが始まってしまうんだ。

けれども、それは同時に、ゴットフリーを永遠に闇の世界へ行かせてしまうことにもなる……。

迷いきった表情で空を見上げる。胸が締めつけられるような想いに苛まれながら、手の中に蒼の光を蓄えだす。すると、その耳元に、

”手を出さないで！　ここは私に任せてください”

そんな声が響いてきたのだ。

瞬間、グラン・パール島の廻りの海から、大波に押し寄せられた大量の海水が、エターナル城の上になだれ込んできた。

フルーウオーター
「BW!?!」

海の鬼灯に翻弄された自らの意思を捨てるために、エターナル城の礼拝堂で首を吊った、レインボーヘブンの欠片”紺碧の海”声に、ジャンは、一瞬、戸惑いを隠せぬ顔をした。

流れ込んできた海の水は、闇も紅も崩壊したエターナル城も、そして、ゴットフリーさえも、渦の中に巻き込んで満ち溢れてゆく。

「だめだ！ BW！ ゴットフリーを闇の世界に行かせては！！」
伐折羅の黒い鳥の背から、ジャンは、悲壮な声をあげた。けれども、信じる以外には、闇の扉の向こうの世界に行こうとするゴットフリーを止める手立てを、ジャンは何一つとして持ち合わせていなかった。

＊ ＊

落ち着きのない海鳥が甲高い声をあげながら、波打ち際を飛び回っている。

グラン・パール島に夕刻がせまる頃、

悪夢のように島の廻りに渦巻いていた風はすでに凪ぎ、闇がはびこっていた空にも西日が差してきた。

けれども、ジャンに沈められ、BWの波に囚われた王宮の敷地は、底が見えないほどに深く海の中に陥没してしまっていた。

その周りの土地も流れ込んできた海水に削がれ、かつて栄華を極めたグラン・パール島は、今では、住民たちが避難していった、西の丘周辺を残すだけの荒廃の島と成り下がってしまった。

かろうじて沈まずに残った王宮の門の横に、伐折羅の黒い鳥を降りさせると、ジャンは岸壁になってしまったその場所から海を見下ろし、エターナル城があったはずの場所に空虚なとび色の瞳を向けた。

「僕が守れたのは、結局は、グラン・パール島のわずかな土地だけだった……」

西の丘に残してきた王女や住民たちはどうしたのだろうか。

その心配と同時に、なす術もなくゴットフリーを闇の向こうに行かせてしまった自分に、どうしようもない悔しさが込みあげてきた。……と、その時、

突然、海の表面にいくつもの小さな渦が湧き上がってきたのだ。

ほのかな甘い香りが、波の音とともに漂ってくる……。

直後に、渦の一つから現れた薄桃色の淡い光。

それは、見る見るうちに丈を伸ばし、睡蓮のような巨大な花の蕾を海面に浮かび上がらせた。

ジャンは突然、現れたその姿を見据えて、啞然と目を見開く。

蕾……？ 花の？

まさか、これって……。

かたく花卉を閉じた蕾は、花を開かす様子は見せなかったが、ジャンはその睡蓮のような花をよく知っていた。

この清廉な香り……この花はかつての至福の島に所狭しを咲き誇り、その地を訪れる者の傷を悉く癒していた……。

そして、その花を司るのは、

「レインボーヘブンの欠片”樹林”！」

海面のあちらこちらで水輪を作っていた渦の一つ一つから、波飛沫を上げて、無数の巨大な植物の蔓がうねり上がってきたのは、ジャンがそう叫んだ瞬間だった。

＊ ＊

「お、終わったのか……」

グラン・パープルの西の丘で、体を吹き飛ばされてしまいそうな暴風に、どうにか耐えきった住民たちは、お互いの顔を見渡し、ほっと表情を和らげた。

丘にあった大木に体を結わいつけ、吹き付けてくる闇風を凌いだタルクも、住民たちと同じように安堵の息をもらした。そして、傍

にいた男に目を向け、

「おい、生きてるか？」

頬の傷を微妙に歪めながら、男は言った。

「何とかな。しかし、タルク……お前って奴は、性懲りもなく、また、どさくさに紛れて、得な役回りをしてやがるんだな」

と、”傷の男” ラガーは、大男の胸元に抱きかかえられて、安堵の表情を浮かべている王女リリーの姿に苦笑する。

差し込んできた西日に溶かされて、グラン・パープルに蔓延っていた灰色の雲が、徐々に姿を消してゆく。だが、見渡す限りのその風景は、前とは全く違ってしまっていた。

抜け落ちた木々と、削り取られた大地。

グランパス王国で最も賑わった場所だった大通りは、影も形もなく消え去り、その跡には外海から流れ込んできた波が、漂う海鳥の声に合わせるように、空しく行き来を繰り返している。

「おい……みんな、大変だ……」

ふらつく足取りで、立ち上がり、東の方向に目を向けた住民の一人が唖然と声をあげた。

「城がない！ エターナル城の姿がどこにも！」

「何だって！ そんな馬鹿な！」

その声を聞いた、タルクとラガーは、西の丘の小高い場所に駆け上がり、目前に広がる海に目をやった。

まさか、あの闇も紅も……そしてエターナル城も、海の中に飲み込まれてしまったのか……？

愕然とした思いが胸を貫いてゆく。

「こんな……ことって、あっていいのか！？ こちらへ逃げてこれ

なかった住民たちは？ それに、ゴットフリーとジャンは、どうな
ってしまっただ？」

最悪、海の中に沈んだにしても、尖塔の一角でも、残ってはいな
いのかと、二人は、グランパス王国の栄華の象徴であった白亜の城
の姿をやっきになって探し始める。

「だめだ……。城どころか、グラン・パープル島の半分以上が海に
沈んじまってる」

その時、ふと背後の影に気がついて、タルクは躊躇いながら後ろ
を振り返った。

崩壊し、海に沈んだ王宮の方向の海を、王女リリーの紫暗の瞳が
大粒の涙を流しながら、見据えていた。その形の良い唇が小刻みに
震えている。

西日が夕日に変わる間際の眩しい陽光が、彼女の凜とした表情と
黄金の髪を煌かせていた。その様に目を細め、ラガーが言った。

「……泣くなよ。お姫さん」

その時、にわかに西の丘が騒がしくなり始めたのだ。タルクとラ
ガーがわき立っている住民たちに視線を移すと、

「お前たち、無事だったのか！？」

町にはいたが、難を逃れた人々が、西の丘の頂を目指して、続々
と登山道を上ってきている。王女リリーの無事と所在をどこからか
知った住民たちが、西の丘に集結し始めたのだ。

どんな状況であっても、生きようとする力っていうのは強いもん
だ。

ほうっと、一息を吐き、タルクは少し笑みを浮かべてみせた。

「城も華やいだバザールもすべて、海の中に沈んじまったが、俺た
ちはどうにか生き残った。島だって、半分以上はそのままの姿を残

しているし、俺の故郷のガルフ島に比べりゃ、ここは随分いい方だよ。大丈夫、まだ、この島は作り直せる」

王女リリーは、その言葉にこくりと強く頷いた……が、次の瞬間、
「……」

夢現の中にいるように遠くの海を見つめた。

「お姫さん……？ どうしたんだ？」

タルクの問いに、唇を無意識に開き、こう呟く。

「綺麗……」

腑におちない顔をしたタルクは、王女の紫暗の瞳に導かれるように視線を東の海の方角に移し、思わず感嘆の声をあげた。

東の海の一面に咲いた、睡蓮の花。

その一つ、一つの花弁から、黄金の光の粒が、天に向かって舞い上がってゆく。

一体、いつ蔓を伸ばし、いつ蕾を開かせたのだろうか？ それも、わからないほど瞬く間に、エターナル城を飲み込んだ海のところ狭しと、薄桃色の睡蓮が花を咲かせている。

「まるで夢だ……」

王女リリーは、もとより、タルクもラガーも、西の丘の上に集まった住民たちも、我を忘れたかのように、黄金の光の乱舞に心を奪われていた。

Chapter 83

やがて、グランパープルに夜が訪れ始めた。闇の戦士が撒き散らした凄まじいまでの暗黒とは違った柔らかな宵闇。東の藍色の空には、澄んだ光をたたえた一番星が輝き、睡蓮からの光の粒は、その星の光を指しながら、止め処なく煌いて空に昇り続けた。

「なあ、もう下へ降りても、危険はないんじゃないのか？」

穏やかな夜の景色を見据えて言ったラガーの言葉に、タルクも同意見だった。

「それに、俺は、ゴットフリーとジャンのことが心配でたまらない。闇も紅も蒼の光も消えうせて……あいつらは、一体、どこへ行ってしまったんだ？」

すると、ラガーも

「ラピスとココのことだって、忘れるなよ。俺はあの二人を王宮に残したまま、一人で逃げてきちゃった。何とか、生きていてくれるといいんだが……」

ばらばらになって消息をたってしまった仲間たちのことを慮り、表情を曇らせる。その時、王女が、

「彼らを探しに、海の方へ下りてみてはどうかしら？」

彼ら……というより、リリーは、率先して、ゴットフリーを探したい気持ちにかられていた。王女は、サライ村の宿営地で中途半端に別れてしまったゴットフリーに、会いたくてたまらなかったのだ。彼が闇の王になってしまったなんて信じたくもない話だが、こんな形で彼からもらったレイピアが、形見のようになってしまうのだけは、絶対に嫌だった。けれども、

「どんなに穏やかそうに見えても、下には、まだ、危険があるかも

しれない。グランパス王国の華”スウォード・リリー”にここで何かあったら、せっかく生き残った住民たちの希望が失われてしまう。だから、お姫さんは、ここで待っていてくれ。下には俺とラガーで行ってくる」

諭すような口調で言うタルクに、無理を押し通すわけにもゆかず、「分かったわ。二人とも気をつけて行ってきて」

リリーは、はやる心を抑えて、そう言葉を繋いだ。

＊ ＊

連れてきた馬が風で飛ばされてしまったせいで、徒歩になったが、西の丘からの下山は気が抜けたように楽だった。

「この山道って、こんなに短い距離だったか？」

ジャンの作り出した蒼の光だけを頼りに、続々と湧き上がってくる闇の戦士に怯えながら、頂上を目指した事がまるで嘘のようだと、タルクとラガーは、不思議な気分でお互いの顔を見合わせた。

さらに下に下りて、何とか形を留めている城下町の一角を通り過ぎると、城に続く大通りの並木が無残になぎ倒され、その地盤に幾つもの亀裂が入っている場所に出た。大きく開いた地割れの中に落ち込まないように注意しながら、先へ進む。そして、視界と通り道を同時に遮る、折り重なった大木を二人が乗り越えた時、

「本当に何もかもが、海の中に沈んでやがる……」

タルクとラガーは、変わり果てた栄華の国の姿に啞然とし、その先の言葉が出せなくなってしまった。

もともとはエターナル城があったはずの場所は、今は深く陥没し、外海から流れ込んできた海の水に浸されて、すっかり海の一部と化してしまっている。ただ、普通の海と違っているのは……

海の中から、花卉を広げ、黄金の光の粒を空に巻き上げている睡蓮のような薄桃色の花の群れ。ただ、その姿は、西の丘からも眺め

ることができたのだが……

「何だ：あの巨大な花は？」

所狭しと立ち上る黄金の光の眩しさが、その姿を隠していたのだろうか。無数の花の群れに取り囲まれるように、人の背丈の二倍はありそうな巨大な花の蕾が、海の表面を貫いて空に伸び上がっている。

その薄桃色の光をたたえた巨大な花の蕾は、まだ、開く意思がないかのように、かたく閉じられていた。

二人は、啞然とした気分のまま、陥没した穴に落ち込まないように細心の注意を払いながら、その水が触れるほどの近くまで、海に近づいて行った。すると、タルクが突然、

「ジャン！！」

少し離れた海の先に視線を向けて、そんな風に大声をあげたのだ。

その少年は、藍色の海の波間に両膝をつきながら、打ちひしがれたように首をうなだれていた。小麦色の髪が寄せる小波に浸りそうなほど、深く頭を垂れて。

隣にいたラガーの袖を引き、タルクは、あそこだと、ジャンのいる方向を指差した。だが、眉を強くひそめて、

「BWなら話は分かるが、あいつ、何で海の中に沈んでしまわないんだ。この海って、かなり深いと思っていたが、そうでもなかったのか」

すると、

「タルクよ、よく見てみる。遠くから見ている時には、海の色に同化して分からなかったが、ここの海の中には夥しい植物の蔓が、絡まった網のように繁殖してしまっている。それが絨毯みたいに海面に広がってやがるんだ。ジャンはその上にいるだけだ。一体、どの範囲まで蔓を伸ばしているのかは知らないが、今、目の前で咲き乱れている睡蓮みたいな花は、この蔓の先から芽を広げているんだ。」

もちろん、あの馬鹿でかい花の蕾もそうだろうよ」

そう指摘され、タルクが海面に目を向けてみると、

「なるほど……。これなら、俺たちでも、海の上を歩けそうだ」

日が落ちたせい、体に吹き付けてくる風は冷たかった。ジャンはこの程度の寒さなど、意に介さないことは分かっていたが、海の中で膝をついた彼の姿はひどく痛々しく、行こうと、ラガーに目配せをしてから、タルクは寄せる波を膝に受けながら、絡み合った蔓の上を少年のいる方向に歩き出した。

「ジャン……？」

二人が傍に近づいて来たことに気づいたにもかかわらず、ジャンは、彼らの方を振り向こうともしない。

一体、何があったんだ。普通のこいつなら、俺たちの無事を知ったら、満面の笑みで迎えてくれそうなもののに……。

タルクは心許ない気分で少年に近づいた時、はっと表情を変えた。ジャンの両の手のひらは、何かにひどく擦りつけられたように赤く腫れ上がり、そこからは血が染み出していた。

「ジャン、その手はどうしたんだ……」

すると、俯いたまま、ジャンは、

「この緑の蔓を引きちぎってしまいたいんだ。でも、僕には、もう力がなくて……何度、やってもこの蔓はびくとも動こうとしなくて……」

ジャンが元気な時ならば、彼は素手で難なくそれらを引きちぎってしまっただろう。たとえば、この海を覆いつくす緑の蔓が、どんなに強力に絡み合っているのだ。

「……でも、どうして、そんなことをする必要があるんだ」

ひどく悪い予感が脳裏をかすめてゆく。タルクは、再び、ジャンに目をやった。

「……ゴットフリーが……この下にいるんだ。この海の中で、緑の蔓にがんじがらめに捕らえられて……」

「ゴットフリーが？ 本当に！？」

「こんな冷たい海の中から、僕は一刻も早く、あいつを外に出してやりたいのに……」

「また、何でそんな事になっちゃってるんだ？」

俯いたまま答えないジャンに苛立ち、ラガーは、

「あの男が、この下にいるっていうのは確かなのか？ それにいたとしても、海の中で蔓に捕らえられてるんだったら、とっくに、溺れて、くたばっちゃってるんじゃないのか」

「ううん……僕には分かるんだ。ここにいて、ゴットフリーの心臓の鼓動が伝わってくる。あいつは確かにこの下で生きている」

ラガーはその言葉に不可解な顔をしたが、今まで、彼らとずっと一緒に、旅をしてきたタルクには、すぐに合点がいった。ジャンとゴットフリーは、同調する^{シンクロ}ことが多々あるのだ。そして、それは”良い”より”悪い”時の方が、圧倒的に多いという事も。

Chapter 84

「ちょっと退け！ 俺がやってみる」

焦った様子で背中中に担いだ長剣を鞘から引き抜くと、タルクはジャンの手前の海に蔓延っている緑の蔓に向けて、力任せにそれを振り下ろした。……が、

「だめだ……びくともしない」

海の中の緑の蔓は、何重にも巻き付けられた頑丈な鎖のように絡み合い、一切の侵入者を拒んでいるように思われてならなかった。

＊ ＊

夜が更けるにつれて、気温が更に下がりはじめた。秋から冬に向う季節を裏付けるように、東の空にはもう冬の星座オリオンが姿を現している。

海から吹き付けてくる風の冷たさに、ラガーとタルクは、仕方なく、一旦ゴットフリーの救出を諦めて、海岸へと避難していった。たった一人、海の上に残されたジャンは、まだ、俯いて、その場を動こうとしない。

エターナル城を飲み込んだ海一面に咲き乱れる花々は、相変わらず、夜空に金の光を舞い上げている。その光景を見つめ、ラガーがタルクに言った。

「俺はこんなに穏やかな気分になれたのは、久々の事だよ。島は半壊状態だが、住民は沢山生き残ったし、ざっと見渡したところでは、居住区はかなりの範囲で残っている。グランパス王国は、表向きは繁栄の国だったが、その中身は腐りきっていた。その国を何とか、持ちこたえさせてくれたのは、ジャンが蒼の光で守ってくれたのと

……やり方はどうであれ、あの警護隊長が、海の鬼灯やら闇の戦士をまとめにして、闇の世界に引きずり込んでくれたお陰かもしれないが……」

すると、タルクはむっと眉をしかめて、

「その中途半端な言い方は何だよ。この国が完全に崩壊しなかったのは、どう考えたって、ジャンとゴットフリーのお陰だろ」

「けどな……」

「けど、何だよ！」

「死んだ奴らだって、大勢いたんだ……。まあ、それは今更、どうしようもないが。俺が一番言いたい事は……ゴットフリーは、もう、あのままにしておいた方がいいんじゃないかねえのか」

「お前、気は確かか!？」

今にも、殴りかかってきそうなタルクを制して、ラガーは、

「考えても見ろよ。あの邪気―“海の鬼灯”―も、“闇の戦士”も、そして、ジャンを中心とした“レインボーヘブンの欠片”たちも、結局は、あの”ゴットフリー”に引き付けられて集結してくるんだ。とするならば、あの男が動かなければ、この世は平穏無事ってわけじゃねえのか」

「馬鹿なことを言うな!　なら、レインボーヘブンはどうなるんだ!？　ゴットフリーが動かなければ、あの至福の島を誰が探せるっていうんだよ」

ラガーは頬の傷をゆがめて、皮肉な笑みを浮かべる。

「至福の島、レインボーヘブンか。なあ、タルク、お前らは事あるごとにその名を口にするが、それって、本当に万人に必要な場所なのか？　ガルフ島やこのグランパス王国に、再び緑の木が生い茂り、ささやかな幸せが訪れたとしたら、俺は別にそんな所へ行きたいなんて思わねえけどな」

「そ、それは……」

「俺にとっては、結局は、レインボーヘブンは夢物語。単なる贅沢品にすぎないんだよ。俺は海の鬼灯や闇の戦士と戦った後に得られ

る血まみれの戦利品より、ささやかな平和の方がよほど手にいれた
いよ。ゴットフリーの行く場所は、必ず崩壊の憂き目にあっている。
あの男は、諸刃の剣だ。だから、奴はもう、このまま海の中に眠ら
せておいた方がいいんだよ。ゴットフリー自身も、その事に気づい
てるんじゃないのか？ それだから、奴は闇の向こうへ行こうとし
たような気がして、俺はならないぜ」

「違う！ それは断じて違う！」

ラガーにタルクは、血相変えて反論する。

「海の鬼灯は……確かにゴットフリーにつきまとっているが、奴ら
がそうする理由は、この世の全てを崩壊させるために”闇の王”と
して、彼が必要だからだ。もし、ゴットフリーが海の中に拘束され
たままだったとしても、海の鬼灯は、きっとまた別の方法で、何か
を仕掛けてくる。その時、俺たちだけで、あの邪気を止めることが
できると思うか？ ゴットフリーは黒馬島でだって、捨て身の思い
で島を守ってくれたんだ。奴がいなかったら、闇の戦士の暴走を誰
が止めれたっていうんだよ！」

大男の真剣すぎる眼差しに睨みつけられ、ラガーは沈黙する。そ
んな彼から視線をはずすと、タルクは、まだ、海の上に膝をついた
ままのジャンに目をやり、こう言葉を続けた。

「正直言うとな……お前と同じように、俺にとっても、レインボー
ヘブンっていうのは、今じゃ、それほど重要じゃなくなっちゃって
るんだ。なら、俺がレインボーヘブンを探す理由は何だと思う？

それは、ゴットフリーに限って言えば……皆の幸せを願って苦しい
思いをしているあいつに、俺は幸せになって欲しいんだよ。ささや
かな幸せ？ けれども、より多くの人々が、それを手に入れるには、
より大きな基盤が必要なんだ。ゴットフリーは、生まれながらの統
治者だ。彼が望むか望まざるかは別として、光も闇もすべてが彼に
己の運命を委ねようとする。レインボーヘブンは皆の希望だ。その
指針を至福の島の方に向けることなく、ゴットフリーが海の中に

眠り続ける事など、決して有ってはならないんだ」

タルクの大きな背中が、小刻みに揺れている。海岸となってしまった岸辺に腰を下ろしながら、ラガーは、深い息を吐いた。

＊ ＊

夜空には、白い月が浮びあがっている。

ざざ……と、耳に沖から寄せる波の音が伝わってきた時、

「……？」

不思議な感覚に、ラガーは視線を海の方に向けた。

歌が聞こえる……？

「おい、タルク、沖の方から人の声が聞こえないか？」

いや、人というより、これは海の小波の音か？

美しい笛の音のような、金管の調べのような

言いようのない懐かしげな思いが胸に浮かび、ラガーは、流れてくる音に耳を澄ませてみた。そうだ、この声は、故郷のガルフ島でも何度も聞いたことがある。すると、タルクが、

「俺も、故郷のガルフ島でこの声を聞いたことがあるよ。この海から流れてくる歌は、毎夜のように暴走する前の”海の鬼灯”を眠らせていてくれた」

「タルク、それって……もしかしたら？」

タルクはこくりと首を縦に振り、

「BWだ。ー レインボーヘブンの欠片”紺碧の海”ー。この歌はBWが歌っているんだよ。ゴットフリーの気持ちに闇に向かってしまったのは、エターナル城の礼拝堂で、彼を失ってしまったことが切っ掛けだった。人としての姿にはもう戻らないが、奴の心は今で

も俺たちに着いてきている。BWは、この歌で、ゴットフリーの迷
いきった心を癒そうとしてくれているんじゃないのか」

「もしかして……BWなのか。あの警護隊長を海の中に沈めたのは
？」

「そうなのかもしれない。けれども、今は……」

タルクは、深いため息を吐くと、響いてくる海の歌に耳を傾けな
がら、こう言った。

「俺たちは、願うしかないんじゃないのか。この歌に、ゴットフリ
ーが少しでも耳を傾けてくれることを」

＊ ＊

海の中だというのに、息苦しさは少しも感じられなかった。
ゴットフリーは、その感覚が奇異に思われてならなかった。

緑の蔓で拘束された、夜の暗い海の中。だが、絡み合った蔓の隙
から、ちらちらと金の光が見え隠れしている。

眉をしかめ、その光を灰色の瞳で鋭く睨めつける。

失くすばかりの世界の中で、自分ばかりが跡に残る。闇の中に沈
んでしまいたいと望んでも、どこからか光が入り込んでくる。

海水は身を切るように冷たかった。

たまりかねて体を動かそうとしても、緑の蔓が、がんじがらめに
絡みついて、身動きがとれず、締め付けられた手首や足首に痛みが
走った。

考える事すらも嫌になり目を閉じた時、かすかな音色が体の中か
ら響いてきた。血流の音というには、あまりにも優美で柔らかな旋
律。それが、静かに波立ちながら耳に伝わってくる。

ゴットフリーには、一その歌一を体の中で奏でている者の正体が、すぐに分った。

なるほど……海の中でも苦しさを感ぜないのは、お前が俺の体の中に入り込んでいるからか。

BW……エターナル城の礼拝堂で、人間としての体を捨て、ゴットフリーが海に還した一レインボーヘブンの欠片“紺碧の海”――

「BW！ 余計な事はするな。今すぐ、俺の体から出て行け！」

苛立つゴットフリーの心を諫めるように、その声は、彼の内側から響いてきた。

“ゴットフリー、私があなたの参謀だったことを覚えていてくれますか。あなたは、聞く耳もたぬと言いながらも、私の助言を必ず心に留めておいてくれた。あなたは、光と闇を架ける者。闇に堕ちていった者にとっての唯一の光への導きなのだ。光は希望、闇は癒し。その二つを同時に率いることができるのは、あなただけなのです。あなたには、光の世界を守ると同時に、闇に堕ち、光の世界に戻れない者たちを癒す力がある”

「俺はただの人間だ。人を癒す力などあるものか。穏やかな日々には焦がれてたまらないのは、この俺だ。救いをもとめているのも、この俺だ。光の世界は失うものが多すぎる。俺にとっては何も生み出さず、生れぬ闇の世界だけが、唯一の安息の場所なんだ！」

そんなゴットフリーに、BWの声はただ、

“あなたを照らす光は、地上に残っている。まだ、幾つも”

そう言っただけ、後は言葉のない美しい旋律となって響いてくるだけなのだった。

Chapter 85

海岸の近くにある岩場。

美しい波の歌に誘われて、睡魔がうつらうつらとやってくる。こんな時に、寝ちまうわけにはゆかないと、それを振り払うように、タルクは、首を横に振った。その時、ふわりと感じた暖かな布地の感触。

「眠たい目を無理に見開いても、いかつい顔が余計に強面に見えるだけだぜ。近くの民家から、毛布やら食料やら燃料やらを拝借してきた。こんな非常時だから別に構わないだろ。俺たちは今のうちに少し眠るところ」

持ってきた毛布にくるまり、自分の横で寝息をたてだしたラガーに、タルクは、少し拍子が抜けたような気分がしてしまった。

仕方なく、毛布にくるまり目を閉じてみた。けれども、次から次へと様々な思いが脳裏に浮かび上がってきて、少しも眠ることなどできやしない。

悶々として、そんな風に時間ばかりが過ぎていった。

海に蔓延る薄桃色の花々が巻き上げる金の光は、幾分、その輝きを薄れさせている。

いつの間にか、BWの歌声も聞こえなくなってしまった。それと入れ替わるように、沖の向こうから海鳥の甲高い声が響きだした。

そろそろ、夜が明けるのだろうか。少し白みだした空に目を向けてから、タルクは、ラガーを岩場に残したまま、海に向かって歩き出した。

寒い朝だ。着実に冬が近づいている。ゴットフリーを拘束してい

る頑丈な緑の蔓の上を、ジャンのいる方向に進みながら、タルクは唇を噛み締めた。

いくら、ゴットフリーの運命に女神アイアリスの意思が働いていたとしても、このまま、何も起こらず、海の中に拘束されたままだったとしたら……、あいつだって、いつかは死ぬ。体は朽ち果てて、心は……多分、奴が開いた闇の扉の向こうに堕ちてゆくんだ。けれども、絶対に、そんな事をさせちゃあいけない。

昨夜と同じ場所に、ジャンはしょんぼりと座っていた。赤く泣きはらした目をした少年は、迷子になって途方にくれている小さな子供のようで、タルクは、

「ジャン、そんなに情けない顔をするなよ。ほら、もう夜が明けるもつと、空が明るくなったら、西の丘にいる王女や、他のみんなを呼びに行こう。みんなにも力を貸してもらって、何とか、ゴットフリーをこの緑の牢獄から外に出してやるんだ」

だが、ジャンは、

「だめだ……。たとえば、この緑の枷をはずせたとしても、ゴットフリーの心が闇を向いたままでは、奴は僕らの場所には戻ってこない。タルク……僕はどうしたら、あいつを光の世界に呼び戻すことができるんだろう？　ゴットフリーがいないと、レインボーヘブンへの虹の道標は……永遠に消えてしまう。そうなってしまったら、僕ら、欠片たちがこの世に存在する理由って一体、何なんだ？　僕には、もう、何もかもが分からなくなってしまったんだよ」

タルクは肩をすくめ、

「“レインボーヘブンの王”だか”闇の王”だか、そんなご大層な者のことはよく分からないが、俺のゴットフリーに対する気持ちは、今だって、少しも変わっちゃいないぞ。ゴットフリーは、生身の間だ！　そして、”人”として、俺たちの前に戻ってこなければならぬんだ。なら、ジャン、お前はどうかんだよ？　お前は、自分

のことを”レインボーヘブンの大地”だと言う。そんな”人ならざるモノ”が”人”の姿になってまで、ゴットフリーや俺たちと一緒に旅を続けてきた理由ってえのは、本当に”レインボーヘブン”を探すただけだったのか」

ジャンは一瞬、口を閉ざした。

僕がゴットフリーと一緒に旅を続けてきた理由……って？
そんな分かりきった事を今更、聞かれたって……。

だって、あいつは女神アイアリスが選んだ”レインボーヘブンの王”だから。

彼がいないと、至福の島への虹の道標が消えてしまうから。

僕たち、レインボーヘブンの欠片が本来の姿に戻るにはゴットフリーが必要。だから、僕は……

戸惑った表情で、自分の横に立っている大男の顔に視線を向ける。

やがて、東の海の水平線から朝日が昇りだした。太陽の頭がきらりと海面に輝いた瞬間、オレンジ色の光が水平線に一気に直線を描き出した。

幾重もの波が黄金色の層を作りながら、岸边に寄せてくる。その輝きを見つめるうちに、ジャンの胸に詰まっていた靄が、溶けるように消えていった。

違う。僕が、今、ゴットフリーに言いたい唯一つの言葉は……

ジャンは、海に視線を移すと、緑の蔓に遮られたその表面に手をつき、海の中に呼びかけるように声をあげた。

「ここにいて！」

レインボーヘブンの大地に戻ることができないままに、この体の中にい続ければ、人としての、僕の体だって、やがては老いて朽ちてゆく。けれども、僕は、人として生まれ変わった短い時間をゴットフリーや、タルクや、他の仲間たちと共に生きていたいんだ。

たとえば、レインボーヘブンが見つからなくても……僕は、ゴットフリーに、ここにいて欲しい。僕たちの場所に、この夜明けみたいに濁りのない光の中に。

＊ ＊

ゴットフリーの意識は、暗い海の下に広がる闇と同化するように翳っていった。

ちらちらと上の方向で輝いていた黄金の光も、今は見えない。海の水の冷たさも、手足を締めつけて離さない緑の蔓の痛みも、もう感じられなくなってしまっていた。

BWの歌う声はすでに途絶え、彼に話しかけてくる様子もなく、それはゴットフリーの体の中に深く沈みこんで、水の中で酸素を供給するだけの存在になり代っていた。

ふと、心に空虚なものが通り過ぎてゆく。

だが、ゴットフリーは、それを無視して、暗い眠りの中に溶け込んでしまおうと瞼を閉じた。

永遠に閉ざされた闇。何も失くすことのない漆黒の世界に。

……が、その時、彼の右の胸が鋭く痛みだしたのだ。

”夜叉王、伐折羅がつけた胸の傷！”

痛みに眉をしかめると、憤ったように目を見開く。すると、先ほどまで光のなかった、海の上の方向がほのかに白く輝いているではないか。

夜が明けたのか

その光の柔らかさとは裏腹に、傷の痛みはますます、彼の胸を締めつけてくる。

” 伐折羅は言った。この傷が痛むほどに、俺はお前を思い出すと”

『ゴットフリー、その傷は約束の印だよ。あなたは言ったね。レインボーヘブンを見つけたら、きつと、闇の住民である僕のためにも、そこに居場所を作ってくれると』

その言葉を思い出したとたん、ゴットフリーは、先ほど目にした白い輝きに再び、視線を向けた。

白い光は、暗い海の中に入り込むのを戸惑いながらも、彼をその方向に誘うように海の上でゆらゆらと揺れていた。

その中で、頭上に届いてきた一筋の光。その色が、海の中で胸をすくような輝く蒼に色を変えた時、

“ ここにいて”

光の中に、そんな声を聞いた気がして、ゴットフリーは、無意識にその光へ手を伸ばそうとした。……が、その直後に強く眉をしかめた。両の腕に絡んだ緑の蔓が彼を邪魔したのだ。

闇に堕ちることも、光に手を伸ばすこともできず、自分の意思さえも拒もうとするかのような“闇と光”の二つの世界に、心が苛立

つ。すると、堪えようのない激しい怒りが、心に湧きあがってきた。

ふざけるな。何が光だ！ 何が闇だ！

俺の世界に、光も闇もあるものか！ そのどちらにも拘束されたりはしない。自分の道は自分自身で切り開いてゆく。

ゴットフリーは、胸に感じる痛みを体から吐き出すように声をあげた。

BW、この海を退かせろ！

樹林、この蔓で俺を縛り付けるな！

頭上に輝く蒼の光に、渾身の思いをこめて言う。

ジャン、払いされ！ 俺を縛りつける、この明滅の牢獄を！

Chapter 86

海の中から、緑の蔓の隙間を縫って、白銀の光がせり上がってくる。

ジャンは、足元に、突然弾け飛んだ波に目をみはった。何故なら、この光は、以前にも見たことがあったのだ。

「この光……ミッシェ……か？」

ジャンとタルクは目と目を見交わす。

「分からない。けれども、ミッシェ以外の誰がこんな光を放つってうんだ」

ミッシェは、女神アイアリスの仮の姿だったんだ。邪神となり、ゴットフリーと二人だけの至福の島を作り上げようとしている彼女が、僕らに力を貸す理由って……？

ゴットフリーを助けた方がいいが、今度は、アイアリスが彼を奪いにやって来るんじゃないのか？

そんな不安が心に浮かび上がってきた。

それでも、その光を浴びると、海の鬼灯と闇の戦士との戦いで消耗してしまった力が、体の中に蘇ってくる。

「タルク、ミッシェは気になるが、その事は後回しだ。今なら、僕はこの緑の牢獄を壊して、ゴットフリーを外に出してやれる気がする。だから、少し離れて！ この光の力を受け取って、それをどこまで制御できるか、僕自身にも分らないから」

こくと頷き、岸边の方へ歩き出したタルクの位置を確認してから、ジャンは、目を閉じ全神経を手元に集中させた。手の中で蒼の光を大きく広げてゆく。そして、ありったけの声で叫んだ。

「生命いのちを育む大地の力よ、蒼の永輝よ！ この海に広がる緑の枷を

己が力で掃き散らせ!!」

手に蓄えた光を足元に叩きつけるように投げ出す。

瞬間、輝く蒼が炸裂した。すると、海の上に蔓延っていた緑の蔓が、蒼の光に気圧されたように、するすると萎え出したのだ。光が広がるにしたがって、そこに芽吹いていた睡蓮のような花々が花びらを閉じてゆく。

……が、それと反対に、

「花だ! あの巨大な花が、蕾を開くぞ!!」

岸边にいたラガーが、沖の方向を指差しながら、慌ててこちらへ駆けてくるではないか。

昨夜から、沈黙が続いていた巨大な花。

それが、ゆっくりと薄桃色の蕾を膨らませてゆく。

蕾の上部が開いた時、それは大きく息を吐くように淡い光を空に舞い上げた。一枚一枚の花びらが開いてゆくに連れ、ぴりりと引き締まった清廉な香りを辺りに漂わせて。

完全に花が開ききった時、その中に人の姿が見えた。花のがくの上に座って眠っていた様子の青年は、抱きかかえていた少女をその上にそっと下ろすと、

「ちえっ、なあんで、こんな、中途半端な時に起こすんだよ」

うんざりした顔で立ち上がった。

「ラピス……? それに、あれはココか?! あいつら無事だったのか」

まだ、少女は蕾の中で眠っているようだった。まさか、死んでんじゃないだろうかと、ラガーが彼らの方へ駆けてゆく。ところが、青年の横を通り過ぎようとした時、

「ラピス? お前、本当にラピスなのか……?」

啞然とその顔に目をやった。

ラピスは盲目で医者の方使用

その両の瞼は生まれながらに、かたく閉じられているのではなかったのか。それなのに、ラガーに視線を向けた青年の目には、胸がすぐような花緑青の色の瞳が輝いていたのだ。

ラガーのことなど、そ知らぬ顔で、ラピスはジャンの元へ歩いてゆく。そうしながら、彼は苦い笑いを浮かべずにはおられなかった。海に蔓延った緑の足元に広がる蒼の光を踏みしめるほどに、体の奥に暖かいモノが流れてくる。

おせっかいめ、頼みもしないのに、この”大地”の力は勝手に人の疲れきった体を癒そうとしやがる。

「ジャン、そんなに大盤振る舞いしているのかよ？ 分かってないんだろ。お前が投げかけた蒼の光は、海に蔓延る緑の蔓を萎えさせはしたが、それと同時に、使い果たしてしまった俺の力を蘇らせてるってことを」

ラピスは、ジャンの力に萎えさせられ、今にも枯れてしまいそうな足元の植物に、瞳を向けた。彼の体から緑の光が溢れ出す。その光は波に溶け込み、強く波飛沫をあげて、ジャンの蒼の光を打ち消していった。

勢力を削がれていた緑の蔓が、再び、瑞々しさを取り戻してゆく。「この緑の蔓は、俺が天の四方で育んで、契約を交わした大切な植物だ。それをこうも無碍に枯らされてしまったては、俺だって、黙っているわけにはゆかないんだよ」

ラピスはきつい口調で言うと、むっとして立ち上がったジャンと真正面から対峙した。

「ラピス……お前が本当のレインボーヘブンの欠片”樹林”だったんだな。こんなに僕らの近くにいて何もかもを見ていたくせに、盲目だなんて嘘について、お前は、どうして、今の今まで僕らに正体

を隠していたんだよ!!」

「嘘をついてたってわけじゃないが……ラピスに目を閉じていても
らわないと”樹林”が彼の体に乗っ取ってしまっただったんだ」

その時、後方で様子を伺っていたタルクが、業を煮やして前に進
み出てきた。

「言ってる意味がちつとも分からねえんだよ! お前はラピスなの
か、それとも、レインボーヘブンの欠片”樹林”なのか、はっきり
と答えろよ。説明はもっと分かりやすいようにしろって、お前の師
匠は教えてくれなかったのか!!」

けれども、緑の瞳の青年は、

「BWが呼び込んでくれた、この清涼な海の水。これは、闇の世界
へ押し込めた海の鬼灯を地上へ出さないための防護壁だ。この緑の
蔓は、それを補うと共に闇に心を向けてしまったゴットフリーを、
光の世界に留まらすための命綱でもあるんだ。今、その命綱を枯ら
せてしまった、彼が、永遠に闇の世界へ行ってしまったら、どうす
るつもりなんだよ! 俺が誰かなってことより、もっと、そのこと
を考えた方がいいんじゃないのか」

ところが、ジャンは、ふと耳をすませて、にこりと笑顔を浮かべ
た。

「ラピス、何を馬鹿な事を言ってるんだ? この緑の蔓を枯らして
しまっても、ゴットフリーは闇の世界になど行きはしない。お前が
レインボーヘブンの欠片”樹林”であるなら、もう、あいつの声が
聞こえてるはずなんだけどな」

声……?

ラピスが気持ちを落ち着かせてみると、それは確かに頭の中に強
く響いてきた。

“樹林、この蔓で俺を縛りつけるな！”

思わず、胸が熱くなる。

その時、激しく波打つ心臓の鼓動と共鳴して、海から低い轟音が響いてきた。小波が幾つも起こり、足元に溢れていた海の水が見る見るうちに引いてゆく。

BW……お前にもゴットフリーの声が聞こえたんだな。

「ジャン……俺は……」
すると、

突然、緑の蔓の四方八方の隙間から、爆風のような銀の光が飛び出してきたのだ。何万本もの銀の槍と見紛うまでの鋭い光が、一斉に空に斬りこんでゆく。激しい怒りを帯びた閃光に、その場に居合わせた者たちは、一瞬、ぎょっと、目を見開いた。

「な、何だ？ 今の光は？」

「また、ミツシェか？！」

「いや、ミツシェじゃないぞ！ 同じ白銀でも、彼女の光は、あんなに激しい光じゃない」

ジャン、タルク、ラピスの三人は、顔を見合わせる。

「まさか……まだ、俺たちが出会っていない、レインボーヘブンの欠片なんじゃ……！？」

女神アイアリスに七つに分けられた、レインボーヘブンの欠片。ラピスが、その六番目のレインボーヘブンの欠片“樹林”なのだとしたら、残りはあと、一つ。

ジャンは、戸惑った瞳で、白銀の光が消えていった空を見上げた。

「七番目のレインボーヘブンの欠片が、ここにいたっていいのか！？」

だが、どんなに神経を集中してみても、もう、その気配を見つけることはできなかった。

Chapter 87

啞然と空を見上げたままの三人。けれども、銀の光が飛び去ってしまった後に、不意にに東の空の一角から別の眩い光が差し込んできた。

それが、地上に注がれた天の煌きのごとく、弧を描きながら降りてくる。誰も彼もが、感嘆の声をあげずにおられないほどの七色に輝く光の帯となって。

「虹の道標……」

それは、”至福の島、レインボーヘブン”への光の指針。

生まれて初めて自分の目で見る七色の虹。それに魅せられ、立ち尽くしているラピスを見て、ジャンは胸のすくような笑顔を浮かべた。

”ラピスに目を閉じてもらわないと、”樹林”が彼を乗っ取ってしまいそうだったんだ”

彼が言った、その言葉の意味はまだ分からない。

けれども、

「ラピス、あれは、ゴットフリーの意思だ。女神アイアリスは言った。レインボーヘブンの虹の道標は、レインボーヘブンの王である、あいつがこの光の中で生きている限り輝き続けると。だから、この緑の蔓でゴットフリーを縛り付けておく必要など、もうないんだよ」

「それでも……俺は、この海に広がる全部の緑の蔓を取り除いてやるわけにはゆかない。前にも言ったように、これは、闇の世界に閉じ込めた海の鬼灯を地上へ出さないための防護壁でもあるんだ。だから、俺は、ゴットフリーを外に出せる隙間の分だけ、力を解いて

やる。それで、いいな」

ジャンは、にこりと快活な笑顔を浮かべて言った。
「うん。それでいいよ」

ラピスは深いため息を吐くと、その足元から伸びる緑の蔓から芽吹いた花を一つ手折った。それから、すまなそうに目を細め、

”散花”

口元で小さく呟き、それを手の中で枯らせていった。枯れた花びらをぱらぱらと下に落とす。すると、それが落ちた周辺の緑の蔓が茶色く萎え始めたのだ。

「ほら、あとはお前とタルクに任せるよ。俺は、自分の咲かせた花々が手折られてゆく姿を見るのはつらい」

「分かった」

ジャンは破顔すると、

「ありがとう。ラピス」

と、足元で萎えた緑の蔓を次々に素手で取り除きだした。タルクもそれに加勢し、ジャンは緑の蔓を払いながら、それらが絡まった海の中へ入っていった。

BWが潮を引かせてくれている間に、あいつを外に出してやらな
いと。

下にゆく程に、ゴットフリーの鼓動を大きく感じて、ジャンは胸の高鳴りを押さええなくなってしまうた。

「ゴットフリー、待ってるよ！　すぐに光の中へお前を出してやるからな」

* *

体の回りの冷たさが徐々に消えてゆく。

これは……？

海の水が引き、手足をがんにがらめに捕えていた緑の蔓が、茶色く色あせてゆくのに気づいた時、ゴットフリーは、ゆっくりと腕を動かしてみた。

すると、あれほど強く彼を拘束していた緑の枷が、いとも簡単に振りほどけるではないか。だが、上へ上がろうとしても、長く海の中に捕えられていたせい、手足に痛みと痺れが走り上手くゆかない。それでも、苦しい息使いをしながら、枯れ枝のようにしなった蔓を手綱にして、上へ這い上がってゆく。……と、突然、目の前が明るく開けた。

朝の光だ……

ゴットフリーは、自分の方向へ差し込んできた眩しい光をつかみ取るように、思わず手を上に差し伸ばした。すると、その腕をぐいと強い力で持ち上げられたのだ。

一瞬、辺りの景色が見えなくなる。けれども、目が眩しさに慣れた時、その灰色の瞳の中に、
「おかえり、ゴットフリー！」

映し出されたのは、明るく彼を迎えてくれた少年の笑顔

俺は帰ってきたのか……。

縛り付けてられていた重い鎖が解けるように心が軽くなる。

ジャンと、その後ろから心配そうに覗き込んでくるタルクの顔を
見た時、ゴットフリーは、何も言葉は出さず、ただ、口元で小さく
微笑んだ。

Chapter 88

” あいつはもう海の中にいたままの方が、いいんじゃないのか”

ゴットフリーを”諸刃の剣”を呼び、そんな風に冷淡に振舞っていたラガーが、実は、彼を海から引き上げた後には、一番、よく働いていた。

ひどく体が冷え切って、立ち上がることもできないゴットフリーのために、ラガーは海岸に火をおこし、近隣に残った住居へ向かい、毛布やら食べ物やら、着替えやらを持って来た。おまけに、まだ眠ったままのココを抱えると、焚き火のそばへ運んで、毛布で体をくるんでやったりもした。

そんな彼らが、全員、海岸へ上がるのを待っていたかのように、引いていた海の水が再び満ちてきた。

人の形は亡くしても、まだ、BWの心は僕たちを守り続けてくれているのか。

海の鬼灯からの呪縛から逃れるために、人としての命を自ら絶った—BW—”レインボーヘブンの欠片、紺碧の海”を思い、ジヤンは切ないような気分になってしまった。その時、

「ジャン！ こっちへ来よ。熱い珈琲が沸いたぞ」

ラガーの声にそちらの方へ目を向けてみると、タルクに毛布でぐるぐる巻きにされた状態のゴットフリーが、閉口した様子で、焚き火の傍に座らされている。タルクの世話の焼きっぷりが、何だか”お母さん”ぽくて、ジヤンは思わず笑みをもらしてしまった。……が、

「ラピス……そんな所でつつ立ってないで、お前もここへ座れよ」
そんなラガーの呼びかけにも、動こうとしない青年に、タルクが、

「なあ、ラピス、もう隠し事はなしにしようや。それでなくたって、そんな涼しげな瞳を向けてくるお前を見て、グラン・パープルの連中が不審に思わないわけがないんだから」

ラピスは腕のいい医者で、類稀な弓の名手、けれども”盲目”
その両の瞼は生まれながらに、かたく閉ざされているのではなかったのか。

グランパス王国の王族にまで、その噂が流れていた彼なのだ。ラピスは小さく息を吐き、仕方ないかと、焚き火の傍に近づいてきた。
ゴットフリーの傍にかがむと、そっと彼の手に自分の手をかざす。
緑の蔓に拘束されたために、みみず腫れになってしまっているゴットフリーの手足の傷はひどく痛々しかった。

「ごめんな、これ、随分と痛むだろう。けど、こうしないと、お前はこっちの世界に留まってくれそうもなかったから」

その手から澄み切った緑の光が溢れ出す。自然からの恩恵を余りあるほど蓄えた”樹林”の緑の輝きが、瞬く間に、ゴットフリーの傷を癒してゆく。

ゴットフリーはようやく口を開き、

「ラピス……いや、レインボーヘブンの欠片”樹林”か？ お前も、ジャンと同じように癒しの力を持っているんだな」

「ああ、でも、ジャンほど、大きな力ではないけどね」

日が高くなり、朝の光が眩しく差し込んできたが、空気は相変わらず冷たかった。

「ほら、受け取れよ」

湯気があがった熱いコップを手渡しながら、ラガーはラピスをじろりと見据えた。

「なるほど、レインボーヘブンの欠片”樹林”の力か……それが、ラピスが盲目なのに、超優秀な医者で弓使いだった理由なんだな。」

俺やタルクの傷がお前が診た後ですぐに直ってしまった訳がこれに分ったよ。レインボーヘブンの欠片”樹林”がラピスであったなら、”癒しの力”と、見えない物でも察知してしまう”特殊能力”を持つていても、何ら不思議がないはずだから」

だが、青年はむっと態度を尖らせて、

「随分、心外な事を言うんだな。それじゃあ、まるでラピスが”樹林の力”がなければ、ただの青年のように聞こえるじゃないか。ラピスが名医である理由は、人のために尽くしたいと切磋琢磨してきた彼の努力の成果だよ。それにあの弓の才能は、ラピスが持つて生まれたってきた”天賦の才”ってやつだ。その才能に”樹林”の力が加わっただけで、”樹林”が彼に弓の才能を与えたわけじゃない」

「おいおい、今、ここで俺たちと話してるお前は、”樹林”か？それとも”ラピス”か？……よく分からなくなってきたぜ」

眉をしかめるラガー。タルクが言う。

「そう言えば、お前はさっき、『”ラピス”に目を閉じてもらわないと、”樹林”が彼を乗っ取ってしまいそうなんだ』って言ったな。それって、どういう意味なんだ？」

「それは……」

すると、その質問に答えあぐねている彼をじっと見つめていたジャンが、思い立ったように声をあげた。

「死んで生まれてきた子供……確か、ラピスの両親はそう言った」
「えっ？」

唐突なジャンの台詞に、一同は困惑する。

「ジャン、お前、何で俺の親のことを知ってるんだ？」

「以前、偽樹林を追ってグラン・パープルに戻る途中に、偶然に僕が世話になったのが、ラピスの両親だったのさ。彼らは僕がラピスの知り合いだって分ると、色々な話をしてくれた。その時に僕はラピスの生い立ちのことを聞いたんだ」

そこまで話してからジャンは、ゴットフリーに目を合わせ、かく頷いて、

「その話の中では、ラピスは生まれた時には、呼吸をしていなかったそうだ。しばらくすると、すぐに産声をあげたけれど、そのせいで目は生まれつきに見えなくなってしまったのだと。けれども、ラピスには類稀な才能が備わっていた。それが、”見えない物でも、心で感じてしまう力”だったんだ。これは、僕の想像にすぎないが、レインボーヘブンの欠片である”樹林”は、人としての姿を得るために、その死んだはずの子供一赤ん坊一が、生まれた時に彼の中に入り込んでいったんじゃないのか？ それ以来、”樹林”は”ラピス”の中に同居して、ひっそりと、自分の存在を隠しながら生活を続けてきた。けれども、僕にはどうしても分からないことがあるんだ」

「分からないこと？」

タルクとラガーが、腑に落ちない顔をする。

「何故、わざわざ”樹林”は、死んだ子供の中になど入っていったんだろう？それに、入った方がいいが、”樹林”はわざわざ、ラピスに目を閉じさせて、彼を支配してしまわないように自分の力を封印している。”樹林”は、僕たちに見つけられるのを嫌うように、どうして、ラピスの中に隠れ続けていたんだ？」

その場に居合わせた者たちの視線を一度に浴びせかけられた青年は、一瞬、戸惑い、絶句した。けれども、

「……あてもなくさ迷っていた俺一”樹林”が、同調してしまった相手が、”生まれたばかりのラピス”だったのさ。けれども、彼の命は生まれた瞬間に尽きようとしていた。だから、俺は慌てて、彼の中に入り込んだんだ」

「……って、ことは、”樹林”が”ラピス”の命を支えたってことなのか？」

ジャンの問いかけに、樹林は頷くと、

「今もそう。だから、俺が表へ出てしまうと、ラピスの精神は完全に”樹林”に成り代わってしまうんだよ。おまけに、俺がレインボーヘブンの欠片として、至福の島に還ってしまったら、ラピスの命

はその時点で尽きてしまうんだ。もともとは、ラピスは生れてすぐに死んだ人間なんだ。彼の命は”樹林”が彼の中にいることで、生き長らえされている。俺は長年、ラピスの中にいて、こいつがすっかり好きになってしまった。だから、俺はせめて、こいつの寿命が尽きるまで、この青年の中にいる。たとえば、他の六つのレインボーヘブンの欠片が集まったとしても、その考えは変わらないから」

ジャンは“樹林”の告白に思わず口をつぐんだ。けれども、

「ラピスの寿命が尽きるまで……それは無理だ。何故なら、夜叉王一伐折羅は言った。グラン・パールでの壮絶な戦いのうちに、あの紅の邪気一は、レインボーヘブンのあった位置を探り当ててしまったらしいと。そして、もう一つのレインボーヘブンの欠片“黒馬島”も時をおかずに、ゴットフリーの元に現れるだろうとも。もう事態は至福の島の復活へと動き出してしまっているんだ。僕らの意志に関わらず、女神アイアリスに七つに分けられた欠片は集結し、一つになって復活する。至福の島ーレインボーヘブンーとして。樹林、お前、一人が嫌だと言っても、それは抗えない運命なんだよ」

先ほどから、押し黙っていたゴットフリーが口を開いたのは、その時だった。

「レインボーヘブンの欠片“樹林”が、ラピスの体から出てゆけば、その命は尽きる……だが、それは確かなことなのか。お前は、今まで、それを試みたこともないんだろう？ それに、ラピスが死んだ人間であるなら、今、あるラピスの意志は一体、何処から湧き上がってきた物なんだ？」

樹林は驚いたように声を荒げ、

「試すなんて、できるわけがないだろう！ もし、それで、ラピスが本当に死んでしまったら、どうするつもりなんだよ!!」

「別に試せと言っているわけではないが、俺が言いたいのは、物事を一つに決めつけて考えない方がいいということだ。それが証拠に、俺たちが、これまでに見聞きしてきた“レインボーヘブンの伝説”

は、間違いだらけの偽りの伝説だった」

「ゴットフリー、お前はとんでもない勘違いをしているよ！ 俺が支えなければ、ラピスの体は確実に弱ってゆき、やがて、命は間違はなく尽きる。それが信じられないなら、実際にその目でその様を見てみるか？ そうしないと、お前はいつまでも、俺の言う事に納得はしないのだろうか？」

レインボーヘブンの欠片”樹林”の緑の瞳と、ゴットフリーの灰色の瞳が、お互いをきつく睨めつけている。気詰まりな空気に耐え切れず、タルクが二人の間に入ってゆこうとした時、

樹林が凜と輝いていた目を覆うように、まぶたを閉じたのだ。その瞬間、タルクは慌てて彼の体に手を伸ばした。崩れるように倒れていった青年は、すでに意識を失くしてしまっていた。

「お、おいっ！ まさか、”樹林”はラピスの体から出ていつちまったんじゃないだろうな!？」

血相を変えたラガーが、ラピスの胸に耳をあててみると、

「……大丈夫だ。心臓はちゃんと動いてる」

タルクとラガーは、ほっと息をつき、心底胸を撫で下ろす。

「ゴットフリー、これからどうするつもりなんだ？ まさか、レインボーヘブンを復活させるために、もうラピスの命は見捨てろって言うつもりじゃないだろうな」

すると、ゴットフリーは、

「レインボーヘブンの欠片”樹林”か……あいつは、俺の言うことを半分も聞きもしないで、ラピスの奥に隠れてしまいやがった……まったく、レインボーヘブンの欠片っていうのは、どいつもこいつも、早とちりでおせっかいな奴ばかりか？」

苦い笑いを浮かべ、ラピスと同じように地面に倒れてゆくジャンの方へ目を向けた。ジャンは、そのまま、地面にうつ伏せ、深い寝息をたてだした。疲れ切っていたのだ。おまけに焚き火の傍では、ココが眠りこけてしまっている。そんな姿を見かねて、タルクが、

「こんな場所で眠ってちゃ、風邪を引くし、疲れだつてとれやしな
いぜ。それに、ゴットフリー、お前、いつから寝たり食ったりして
ないんだ？」

「そんな事をするものだ。という事でさえも忘れていた」
それを聞いて、ラガーがいう。

「本当に呆れた男だな。闇の王にならなくたって、疲労と栄養失調
であの世行きになるところだ。ラピスやジャンのことをとやかく言
う資格はお前にはないぜ。とにかく、俺はもう一度、西の丘へ上っ
て、王女たちを呼んでくる。皆で強力して、多少壊れていても、残
った民家をうまく修理すれば、ちゃんと寝泊りできる場所は確保で
きそうだからな。だから……」

けれども、その先を言おうとしたラガーをタルクが制止した。タ
ルクは軽く笑みを浮かべて、前方を指差す。その指の先には、住民
たちを後方に引きつれて、彼らの元へやってくる騎乗の少女の姿が
あった。

鮮やかに煌く黄金の髪と、紫暗の瞳。

「王女か?! 有り難い。下に危険がなさそうなので、西の丘から
降りてきてくれたんだな」

ラガーの言葉に前方に目を向けた時、ゴットフリーは、朝の陽射
しを薄れさせる程に高貴に輝く、一欠片の光をそこに見たような気
がした。

スウオード・リリー

剣百合……グランプス王国の”至極の宝剣”

灰色の瞳を細め、思わず口元でそう呟く。すると、ふわりと空に
舞い上がるような感覚が体に広がった。そして、目の前が急に白い
霧に覆われるように何も見えなくなった。

意識が遠のいてゆく。

「ゴットフリー?!」

タルクが自分の名を呼ぶ声が聞こえる。けれども、深い眠りに妨げられた彼の耳には、やがて、どんな音も聞こえなくなってしまった。

ゴットフリーも疲れていたのだ。

Chapter 89

王女リリーが、西の山から無事に下りてきた日から次の日にかけて、生き残ったグラン・パープルの人々は、ラガーとタルクを中心に、実によく働いた。

なぎ倒された木々を取り除き、使えそうな家屋を修理し、また、食糧や水を確保し、男も女も大人も子供も全員がグランパス王国の再生のために労を惜しまなかった。

そのおかげで、廃墟のような佇まいを見せていた居住区は、何とか、人が過ごせるだけの場所と物資を整えることができたのだ。

「こらっ！！　ココ、その食糧を勝手にもってゆくな！」

「知くらない。だって、お腹をすかした子が、あちこちにいてるって
いうのに、全然、食べ物が回ってこないだもん」

舌を出しながら、戦利品を胸一杯に抱えて逃げてゆく少女に、大人たちは苦い笑いを浮かべる。修理済みの家の窓ごしに、その様子を眺めながら、ラガーは、

「一番、元気なのはココだな。あの巨大の花の中で眠っている姿を見つけた時は、死んじまったんじゃないかと心配したが、一晩眠るとけろりとあの調子だ」

すると、タルクが、

「あれでも、けっこう、あれやこれやに気がついて、大人たちを引っ張ってる。第一、あの娘は逆境に強いし、物怖じしないところが凄い。ゴットフリーをガルフ島時代に怖がらなかったのは、あの娘とジャンくらいなものだったからな」

ラガーは、微妙に頬の傷をゆがめた。確かに、ゴットフリーがガルフ島の警護隊長だった頃には、自分は姿を見ただけでも、震え上がっていたのだから。

「そういえば、ゴットフリーとジャンは、どうしてるんだ？ 海岸で疲れて眠り込んでしまった奴らを、王女たちが、居住区に運んだは良かったが、それからどうなったんだ？ 俺は他のことが忙しくて、その先を知らないが……」

「二人とも別の場所でまだ寝てる。まあ、ジャンの方は、力を使いすぎて、そう簡単には起きてこないと思うが……けど、あいつは寝かしておいてやれば、そう心配することもないだろ」

「……で、ゴットフリーは？」

ちょうど、ラガーがその質問を口にした時、奥の部屋から、フレアおばさんが出てきた。彼女はラガーやココと同じサライ村の出身の気のいい婦人で、今では、このグラン・パールでも”頼りになるお母さん”として、皆に慕われるようになっていた。

タルクは、フレアおばさんと目を交わして、苦い笑いを浮かべる。「まあ、どうか、ゴットフリーは、ジャンと同じ場所にいるんだが……俺たちにはちょっと手が出せないくらいに過保護にされてる」

「……？」

腑に落ちない表情のラガーに、フレアおばさんが、

「グランパス王国のお姫さんが、あそこまで外海の人間に気を使うなんてねえ。やれ、毛布をもってこいだとか、部屋をもっと暖めろだとか、ゴットフリー隊長が運び込まれてきた時にゃ、意識もなくて、体も全然温まらなくて心配もしたけど、一晩中、彼女が隊長にずっと付き添っていたのには、さすがに驚いたよ」

「何だよ。結局、そういうことになっちまってるのか」

ラガーは、タルクに目を向け、

「いくらお前が騎士^{ナイト}ぶりを発揮しても、最終的には、女っていうのは、むさ苦しい大入道より、いい男の方へいつちまうってことだな」

タルクは、放っとけと渋い顔をしてはみたが、奥の部屋から低いうめき声が聞こえてきた時、表情を硬く変えた。フレアおばさんが、再び部屋に戻ってゆく。その後姿を目で追いながら、

「ジャンやゴットフリーは、大きな怪我もなく、目が覚めるのを待てばいいんだが……こっちはそうもいかなそうだ」

「ラピスか？ 悪いのか？」

こくんと頷いてから、タルクは、

「白蛇の化け物の牙に貫かれた腹の傷は、ふさがってるんだが、その時に流し込まれた毒に、解毒剤が一時的にしか効かないんだよ」

「毒って、エターナルポイズンか？ しかし、あれって即効性じゃなかったのか？ なら、助かっている方が不思議ってもんだ」

「それはそうなんだが……」

そんなタルクの脳裏には、昨日、焚き火を囲みながら聞いた、レインボーヘブンの欠片”樹林”の言葉が浮かび上がる。

”俺が中で支えなければ、ラピスの体は確実に弱ってゆき、やがて、命は間違いなく尽きる。それが信じられないなら、実際にその目でその様子をしてみるか？”

樹林”は、まさか、あの言葉を実行するために、ラピスの体から出ていっちゃったんじゃないだろうな。

不安がタルクの胸をよぎる。けれども、”樹林”は同時にこうも言った。自分はラピスが本当に気に入ってしまった。だから、その寿命が尽きるまで、自分はラピスの中にいるのだとも。

深くため息をついて、隣の部屋の扉に目を向ける。すると、その視線と一緒に追ったラガーが、部屋の入り口に置かれた小さな花束や、果物などが入った籠を見つけて、

「あれは？」

と、タルクに尋ねてきた。

「ああ、ラピスが具合が悪いっていうんで、心配した居住区の娘たちや、ラピスが前に診た患者たちがお見舞いにもってきた品物だよ。

まあ、これを見ても、あいつがどんなに皆に好かれてるかっていうのが分かる気がするな」

そんなラピスを見殺しにしてまで、レインボーヘブンを手に入れる必要は確かにないのかもしれない。タルクは複雑な表情をした。

その時、ラピスの様子を見に行っていたフレアおばさんが、隣の部屋から出てきた。表情を曇らせながら言う。

「ラガー、悪いけど、ちょっと居住区まで行って、医者 of 先生を呼んできてくれないかい？ ラピスの熱がひどいんだよ。私が行けりゃいいんだけど、これから、みんなの食事の用意をしなきゃならなし」

分かったと、ラガーが立ち上がる。

「他の医者もこの状態じゃ色々忙しいだろうが、今まで、散々、皆に尽くしてきたラピスなんだから、まずは、こちらを最優先に診てもらわねえとな。タルク、後はお前に任せた。俺はひとつ走りして、医者をここに呼んでくる」

タルクは、その言葉に強く頷いた。

* *

一方、ゴットフリーは、ラピスがいる家とは別のベッドの中で目を閉じたまま、あたりの様子を伺っていた。とっくに目覚めてはいたが、今、起きるのは得策でないと感じていたからだ。

周りで女たちが、話す声をする。

「王女さま、ちつともあなたが姿を現さないので、住民たちが不安がっています。いくらグランパス王国を救ってくださった方々とはいえ、この方たちは、怪我もなく、寝かせておけばもう大丈夫ですよ。ここは私たちに任せて、みんなの所へ行ってください。生き残った国民たちは、よく働いています。王女さまが励ましてあげれば、彼らの士気もあがるというのですよ」

王女リリーは、戸惑った表情をした。せめて、ゴットフリーが目覚めるまでは傍にいたいと思っていたからだ。一言でいいから、話

がしたかった。彼は、リリーの望み通り、グランパス王国を崩壊させ、同時にこの国を救ってくれた。けれども、

ゴットフリーにこの国に留まってもらいたい。

自分の傍にいて欲しい。

リリーはその確約が欲しかったのだ。

けれども、侍女たちの懇願するような目には逆らうことができなかった。父であるグランパス王は、王妃に飲まされ続けた酒の中毒となり、廃人同様になってしまっている。グランパス王国の命運は、王女に委ねられていたのだ。

「分かったわ。彼が目覚めたら、何か軽い物を食べさせてあげてね。きっと、ものすごくお腹が空いていると思うから。くれぐれも後はよろしく」

リリーは部屋を出て行きざまに、ふと気になって、侍女たちに問うた。

「そういえば、彼はどうしているの？ ほら、目が見えないのに医者で弓使いの？」

「川向こうの家で寝てるそうですが、具合は良くないみたいですよ。こちらより彼の方がずっと心配だと、タルクさんが言っていましたから」

「そう……そちらにも後で、寄ってみたいなとね」

王女が出て行った後で、侍女たちはほっとしたように息をつく。

「ようやく、ここから開放されるわ。いくら世話になった方たちとはいえ、王女はやりすぎよ。とても、付き合っていられないわ」

その言葉に別の侍女が、ベッドで眠っているゴットフリーに目をやり、人の悪い笑みを浮かべる。

「それだけじゃないのよ。ほら、この人って、王宮武芸大会で王女

を散々に負かしたあの人でしょ。遠くて見学してても、格好が良かったもの。負けた悔しさより王女はあの時に、この人に惚れちゃったんじゃないの？」

そんな話をしながら、侍女たちも部屋から出て行ってしまった。その直後に、

やっと、五月蠅い連中から解放か。

ふうと息を吐き、ゴットフリーはベッドからむくりと起き上がった。疲れて海岸で意識を失ったことはあっても、傷の痛みもなく、気分は悪くなかった。それはそうだなと、同じ部屋の少し離れた場所に視線を向ける。

ジャンは、そこにあったベッドの上で泥のように眠り込んでいた。

俺やこの住民たちは、みんな、レインボーヘブンの欠片”大地”であるジャンの蒼の光と”樹林”の緑の光に癒されているんだ。その分、奴らは疲れきってしまっただろうが……。

そんなことを考えながら、ゴットフリーは椅子の上においてあった自分の服に着替えると、もう一度、ジャンをちらりと見てから家の外に出て行った。

Chapter 90

久々に見た真昼の陽射しは眩しかった。居住区は、散々なほどに荒れ果てていたが、なぎ倒された木々の間を通り抜けてくる木漏れ日が、瑞々しい輝きとなって目に飛び込んできた。

こんなに明るい日差しを見たのは何日ぶりだろう。

崩壊し、腐りきった大地の中へ堕ちてゆくエターナル城を胸の梳く思いで見届け、それを引き連れて、闇の中へ沈み込んでしまいたいと願った自分を別人のように感じながら、ゴットフリーは川向この家を目指して歩いていった。すると、背中越しに何ともいえない、まどろこしさを感じたのだ。

グラン・パープルの生き残った住民だろうか？ 見知らぬ若い娘が3人、近づいては遠ざかるを繰り返しながら、後を着いてくる。

「何だ、俺に用か？」

刺すような灰色の瞳を向けられた時、娘たちは、一瞬、たじろいで足を止めた。……が、

「……あの、あなた、ラピスのお友達ですよね」

「ラピス？ 知り合いは知り合いだが」

ゴットフリーの冷やかな声音に戸惑いながらも、一人の娘が彼に近づき、手にした果物籠を差出してきた。

「……これから、ラピスのいる場所に行かれるんですよ？ 私たち、ラピスがすごく心配で、彼が面会できないくらい具合が悪いって聞いたんで、ハイラスの実を集めてきたんです。これって、すごく、咽喉越しが良くて体にいいんです。島が半壊してしまっ、西の山以外には採れる場所が平地にはほとんどないんだけど、できるだけ探して集めたんで、彼に食べさせてやって。私……いえ、私た

ち、ラピスが大好きなんです。だから、早く良くなって欲しいの」
ゴットフリーは、かすかに笑い、差し出された籠に入ったハイラスの実に目を向けた。それは、小さな緑の実がついた葡萄のような果物だった。

「西の山には沢山これがあるのか」

「でも、私たちは馬を扱えないから、西の山には行けないの」

「わかった。渡しておく」

短くそう言い、娘たちから籠を受け取ると、ゴットフリーは再び歩き出した。すると、先ほどから娘たちの一番後ろにいた一人が、意を決したように、彼の前に進み出てきたのだ。

「あの……これはあなたの分にして」

おずおずと、ハイラスの実の一房をゴットフリーに差し出す。

「王宮武芸大会、見てました。あなた、すごく強くて素敵だったわ」
はにかんだような笑み。彼にとっては、無意味ともとれる、この種の笑みには、故郷のガルフ島時代から慣れっこになってしまっていたが、当時ほど邪険な反応をするでもなく、ゴットフリーは、娘からそれを受け取った。

そして、そのままラピスのいる家に向かって再び歩き出した。

後ろから、彼に直に声をかけたのが嬉しかったのか、舞い上がる娘を中心にして、3人の娘たちが騒ぐ声が響いてくる。

まったく、^{かしま}姦しいことだ。

ゴットフリーは、小さく息をつく。けれども、切り取られた国の半分や、傷ついた仲間を憂いながらも、明るく振舞う娘たちの姿に、どうしようもなく病んでいたグランパス王国の中に息づいている健康な箇所を垣間見たような気がして、幾分心が軽くなった。

＊ ＊

ゴットフリーが目指していた川向こうの家で、タルクは、具合の

悪いラピスを起こさないように、そつと、隣の部屋の扉を開いた。けれども、

「タルク……」

部屋の中から彼を呼ぶ声が聞こえてきたのだ。

「ラピス、起きてたのか？」

タルクは、ラピスの元へ歩み寄ってゆく。ぐったりとベッドに横たえ、熱がひどいのは一目瞭然で、息遣いも苦しそうだった。相変わらず、そのまぶたは固く閉ざされていたが、部屋に入ってきた人間をすぐにタルクだと判別したところを見ると、見えなくても、物を感じ取ってしまう力は失くしてはいないようだった。

「……クーデターは終わったって、フレアおばさんが言ってたけど……それで、ゴットフリーとジャンは？」

タルクは笑みを浮かべ、

「心配しなくても大丈夫だ。二人とも別の場所でまだ寝てるけど、疲れているだけだから」

「ココ……は？」

その質問を口に出してから、不安げにラピスは表情を硬くした。崩壊前のエターナル城の居館の上で、ココをかばって白蛇の化け物に食いつかれたまでは覚えていたが、あの娘は無事に逃げることできたんだろうか？ その先の記憶が全くなかったのだ。

「あいつが、グラン・パープル中で一番元気だよ。さっきも、無理やりここに入って来ようとするんで、俺が追い出したところだ。あんな五月蠅い奴に来られたら、お前だって休んでられないだろう？」

そうか……と、ラピスはほっとしたように笑みをこぼしたが、その直後に激しく咳き込みだした。枕元に吐血した赤い染みが滲んでゆく。タルクは慌てて、ラピスの背をさすってはみたが、目に見えて悪くなつてゆく彼の様子に弱りきった顔をした。

「大丈夫か？　すぐに医者が来てくれるからな。そしたら、少しは楽になるから」

「……ご免。自分も医者なのに……こんな時にちつとも役に立たな

いなんて……」

タルクの心に、身の置場のない不安と苛立ちが広がってゆく。

レインボーヘブンの欠片”樹林”は、何処で何をやってんだよ。奴はラピスを見捨てる気なのか?! 冗談じゃない! このままの状態が続いたら、本当にこいつは危ないぞ。

その気持ちを読み取ったかのように、ラピスは、窓辺にある戸棚の上に置いてあった彼の愛用の弓を指差し、

「タルク……もし、俺がこのまま死んだら……あの弓を別の島に住んでいる俺の両親に届けてくれよな。何も便りがないままだなんて……心配するだけだから」

「何言ってやがる。お前、まだ若いんだから、そんなことを考えるんじゃない!」

「もしってことがあったらだよ……」

タルクは慥然とした表情で声を荒げた。

「なら、俺がくたばったら、お前は、俺の長剣を俺の親に届けるんだぞ! それと交換条件なら言うことを聞いてやるよ」

「お前の親って? ……何処にいるんだ」

「知るもんか。ガルフ島が崩壊してからは行方知れずだ。だから、お前もそんな余計なことを言っただけで、今は寝てろ!」

ラピスの枕を取り替えてから、タルクは睨みつけるように、窓辺の弓に目を向けた。

「俺は絶対に嫌だぞ。誰が弓なんぞを届けるもんか」

＊ ＊

陽光に煌きながら、さらさらと川の水が流れてゆく。その蛇行をなぜるように、涼やかな鳥の声が響いてくる。けれども、崩壊の憂

き目を、かろうじて免れたグラン・パールの家々の壁は剥がれ落ち、道には風になぎ倒された木々が山となって積みあがっていた。

ラピスがいる家の玄関先までやって来た時、ゴットフリーは、そこに座り込んで目をこすっている少女　—ココ— に、冷ややかに目を向けた。

「お前、そこで、何してる」

「見ればわかるでしょ。泣いてんのよ」

「さっさとどけ。邪魔だ」

「そんな言い方ってないでしょ。何で泣いてるのか、理由くらい聞いてくれたっていいじゃないの！」

興味なさげなゴットフリーを見やって、ココは不満げに口をとがらせた。けれども、彼が手に持った緑の果実を見つけると、けろりと表情を変えて、

「あっ、ハイラスの実。もしかしたら、それって、ラピスへのお見舞い？　それって、エターナルポイズンの解毒剤にもなるんだってね」

「解毒剤？　そんな効き目がこの実にはあるのか」

「うん。前にラピスがそう言ってた。それにすごく美味しいし」

欲しいならくれてやると、ゴットフリーは、居住区の娘がくれた一房のハイラス実をココに渡そうとして、ふとその手を止めた。彼のためにそれを差し出した娘のはにかんだような笑顔が、頭をよぎったのだ。仕方ないかと、その一粒を先に自分の口に入れる。

「なるほど、ほどよい甘さで食べやすいな」

そうでしょと、ココは、受け取った緑の実をほおばりながら、

「……で、私が何で泣いてたかっていうと」

と、聞かれもしない、その理由を勝手に話し出した。

「タルクに、この家の前で門前払いにされたの。ラピスの具合がすごく悪いから、会わせられないって。それって、きっと王宮でラピ

スが私をかばって、白蛇の化け物に死にそうなくらいに食いつかれたせいなんだ。だって、怖いくらいに血が流れてたもの……だから、もし、本当にこのままラピスが死んじゃったら、私……私……」

また、ぼろぼろと泣き出したココに、泣いたり笑ったり忙しい奴だと、ゴットフリーは、眉をしかめる。……と、突然、思いついたかのように、

「お前、このハイラスの実があるという、西の山の場所を知っているか」

「知ってるけど……頂上の少し手前に沢山、生ってるよ。でも、それがどうかしたの？」

「なら、誰か馬を出せる奴を探して、一緒にそれを集めて来い。薬として使えるなら、他の住民たちにも色々と役に立つだろうから」
けれども、ココは、

「馬なんて必要ないよ。私、一人でも西の山にならゆけるし」

事も無げにそう言うと、ひゅっと一つ大きく指笛を吹き鳴らした。

空がきらりと煌いた。そして、突然、雲一つなかった青の中に純白の光が湧き上がった。その瞬間、空に大きく羽を広げた巨大な白い鳥。

天喜の白い鳥……

伐折羅の黒い鳥と対をなす、レインボーヘブンの欠片”空”

日の光を背にうけながら、ココの元へ降りてくる純白の鳥。天女が纏う羽衣のように優美な姿に、ゴットフリーは思わず目を細める。
「お前、いつの間に、この鳥を手なづけた？」

「だって、何回か乗せてもらっているうちに、友達になっちゃって……。見てて、黒い鳥の方はちょっと気難しそうだけど、そのうちに仲良くなってみせるから。この白い鳥の背に乗って行ったら、西の山までなんてあっという間でしょ。待っててよ！　すぐに籠いっ

ばいにハイラスの実を集めてくるから」

軽く手を振りながら、白い鳥の背に乗るココの胸には繊細な細工の銀のロケットが輝いていた。意気揚々と、西の山に向けて飛んでゆく少女と白い鳥の後ろ姿を、ゴットフリーは、複雑な気分で見送る。

俺の金のロケットと、あの娘が首にさげている銀のロケットには……同じ父の写真が入っていた。

ガルフ島が崩壊した時、天空に現れた女神アイアリスは言った。

“私は至福の島　ーレインボーヘブンー　を襲った略奪者達を憎む反面、彼らの活力、団結力を羨ましく思っていたのです。もし、レインボーヘブンにあの力があつたなら、どのような敵にも負ける事はないだろうと……だから、残した。彼らの中から一房だけの人間を……その子孫を。やがて、蘇るレインボーヘブンを総べる者として”

「女神アイアリスが、略奪者の子孫の中から、レインボーヘブンの王として残した者が、俺というなら、あの娘はその予備か……」

苦々しい気持ちちが心の奥から湧き上がってくる。

そんな者は俺一人で十分なのに。

そう呟きながら、ゴットフリーはラピスのいる家の中へ入っていた。

Chapter 91

居住区の修復に勢を出す国民たちを励ましてから、王女リリーは、侍女を連れて、海が見える岩壁にやってきた。時間は正午を少しまわったところだった。

太陽が南中に昇った冬晴れの空を映す鏡のように、青く澄み渡った海。けれども、その底には虚無の王宮と成り果てたエターナル城が、闇の桎梏に囚われたまま、深く沈み込んでいるのだ。

白亜の王宮の名残を探して、辺りをぐるりと見渡してみる。けれども、唯一、岩壁に残された城門には、夥しい亀裂が入り、それは、過去の華やいだ記憶を辿ろうとする自分を嘲っているようにも思えて、かえって心が苦しくなった。

リリーは無理に笑みを浮かべて、侍女の方を振り返る。

「皆はよくやってくれているわ。国の半分以上が海に沈んでしまったというのに、不平不満も言わずに働いてくれている」

「それもこれも、あの二人　ー　ラガーさんとタルクさん　ー　のお陰ですね。ラガーさんは、建築の知識が豊富で、住民たちに修復の手ほどきができるし、タルクさんは拔群の指導力で皆を引っ張ってくれています」

「そうね……クーデターの件にしても、彼らは外海の人間で、グランパス王国には何の縁もないのに、本当に有り難いわ」

ええ、と、侍女は穏やかな笑みを浮かべたが、それまでと打って変わって口調を硬く変えて、

「王女さま、一言、言わせていただいてもいいですか？」

「何？　急に改まった顔をして？」

「王女さまが世話を焼いていた、もう一人の外海の男のことです。いくら、グランパス王国を救ってくださった方とはいえ、あの人を

……好きになっではいけませんよ。王宮武芸大会の時に突然、彼の手元に現れた黒剣のことといい、あの男は、何か計り知れない危いものを背負っている。一緒にいると、絶対に良くないことが起こる。私には、そう思えてならないのです」

「それって、ゴットフリーのことを言ってるの？ 冗談じゃないわ！ 彼がそんなに”危ういもの”なら、グランパス王国はとっくに消えてしまっているわ。それどころか、彼は捨て身になって、この国を救ってくれたんじゃないの！！」

「けれども、私はラガーさんとタルクさんが話しているのを小耳に挟んでしまったのです。あの男……”ゴットフリー”の本性は、”闇の王”なのかもしれないと」

かん高い鳥の声が頭上から響いてきたのは、リリーが、侍女をの言葉に強く眉をしかめた、その時だった。

岸壁のはるか上で羽ばたき、西の丘を目指してゆく巨大な白い鳥と、その背に乗った少女。

……レインボーヘブンの欠片の鳥と、クーデター軍の村にいた女の子？ ……でも、何であの子があの子に？

西の方向へ消えていった二つの姿をリリーは腑に落ちない気分で見送る。……と、そんな彼女の視線を遮るように、岸壁に強い波が打ち付けてきた。波飛沫を避け、思わず目を閉じたその後に、

「えっ……？」

リリーは、再び、開いた目を何度も瞬かせた。誰もいなかったはずの岸壁の突端に、小さな子供が一人、立っている。

黄色っぽい髪に、無表情な顔。その子の服も顔もすべてが薄汚れていた。けれども、瞳は抜けるように澄んだ青。それだけが、妙に

人の心を引きつけた。

鈴のようなその声は、子供の小さな口元から響いてきた。

「王女がいくら望んでも、だめ。ゴットフリーはこの国にはのこらない。だって、ゴットフリーは、レインボーヘブンの王だもの」

「あなた……誰？」

「ミッシェ」

「ミッシェ！？」　嘘よ、あの娘はあなたみたいに小さな子供じゃなかったわ！」

王宮武芸大会で、ゴットフリーに付き添っていたミッシェは、銀色の髪と艶やかな肌を持つ天使のように美しい娘だった。そういえば、あの後に、彼女は何処へいったの？　色々なことがありすぎて、私はずっと、その事を忘れていた……。

戸惑った表情の王女に、その子供は青い瞳を翳らして言う。

「かわいそうな王女。たった一人で、グランパス王国を守らなきゃいけないなんて」

「おかしい事を言わないで！　国民たちだって沢山生き残っているじゃないの。グランパス王国を守ってゆくのは、私、一人じゃないわ。それに、ミッシェは、もっと美しかったのよ！　薄汚れた貴方と彼女は全然違う！！」

すると、青い瞳の小さな子供は王女を哀れむように微笑み、手のひらを手前に差し出してきた。そこには、ほのかな銀の光が輝いていた。

「さいしょ、ミッシェは、小さな光の中にじぶんを閉じ込めていた。けれども、光はレインボーヘブンの”大地”と”王”がであった時に、子供の姿になった。そして、”大地”の力が大きくなって、ミッシェはもとの姿にかえった」

「レインボーヘブンの”大地”と”王”？　それって、ジャンとゴットフリーのことを言っているの？　でも、私には、あなたの言葉の意味が全然、分からない……もとの姿って……それって私が知っているミッシェのこと?!」

すると、子供の手のひらの銀の光が、突然、眩く輝きだしたのだ。王女が息もつかぬ間に、光は小さな子供の体を取り巻き、その姿形を変えてゆく。

「そう、この姿があなたの知ってるミッシェ。でも、まだ、これは完全じゃないの」

煌く白銀の髪、透き通った玉の肌、吸い込まれそうに済みきった青の瞳。

目前に立った天使と見紛うまでに美しい乙女の姿に、リリーは嘔然と紫暗の瞳を向ける。

「ミッシェ？　……あなたって一体？」

その時、不意に王女の脳裏に、建国記念祭の前の日に、ラピスから聞いた話が浮かび上がってきた。

“ミッシェは……女神アイアリスの化身だったんだ。けれども、今のアイアリスは“海の鬼灯”に心を狂わせた邪神になりさがっていると、ゴットフリーは言っていた。奴が王宮の温泉場でミッシェと戦った時、彼女はアイアリスの姿に戻りこう言った。“私は至福の島を手に入れる。ゴットフリーと自分、二人きりの至福の島を”

「あなたは……まさか……レインボーヘブンの女神、アイアリス!」
「？」

そんな王女の問いを無視して、青い瞳の乙女はきつい口調で言う。

「グランパス王国を作り直すためですって？　あなたがゴットフリーをこの国に留めておきたい理由はそうではないでしょう？　ゴットフリーは私が選んだレインボーヘブンの王、それなのに、彼に色目を使う不届き者！　お前は売女よ！　その女がグランパス王国の王女とは、聞いて呆れるわ！」

「お前っ！！　王女さまに向かって何て不遜な口を！！」

突然、現れた見知らぬ女のあまりの言い様。それに、堪りかね、リリーの後ろに控えていた侍女が、血相を変えて彼女に掴みかかっていった。けれども、激しい銀の光を手に溢れさせたミッシェは、片手を上げただけで、侍女を岩壁の隅まで吹き飛ばしてしまう。

リリーは啞然と、ミッシェの手の中で輝き続けている銀の光に目を向けた。

目が痛くなるほどの荘厳な輝き……あれはジャンの蒼の光と同種のもの……やはり、この女は女神アイアリス……けれども、あの銀の光の残酷な輝きは一体、何？！

大きな不安が心に広がってゆく。それでも、確信となって脳裏に刻み込まれてゆく、どうしようもない真実。

あの弓使いが言ったように、この女神は、”邪神”に成り下がっている……。

顔に色を失って、侍女の元に駆け寄っていった王女をあざ笑いながら、銀の髪 of 乙女は、畳み掛けるように言葉を続けた。

「水晶の棺に入り、未来永劫、グランパス王国の守護神となると、涙を流しながら私に誓ったグランパス王国の前王妃！　あの女は、命を落とし、朽ちてゆくばかりの自分の身を憂っていた。そんな彼女の願いを叶えてやった私への恩を忘れ、時の長さに耐え切れず、

守護神の座を投げ捨てたお前の母の罪を誰が償う？ おまけに、その娘はゴットフリーまでも、この国に留めおこうなどと不埒な考えを持ち、私を欺こうとする。お前たちは許せない。グランパス王国は、私にとっては目障りな塵。この国は私が滅ぼす！」

「待って！！ あなたは、レインボーヘブンの女神”アイアイリス”なのね！？ 母の魂は、私がレイピアでこの世から消し去りました。母はもう、何処にもいない。だから、母と私があなたの怒りに触れたとしたなら、その償いは私がします！ 国民には何の罪もないわ。彼らは今、グランパス王国を復興させるために懸命に生きている。後生ですから、この国を滅ぼすのは止めて！」

すると、銀の髪を風になびかせた乙女は、鮮やかな笑みを浮かべながら、こう言った。

「ならば、母の代わりに、お前が水晶の棺に入りなさい。このグランパス王国の生きた”守護神”として」

その純白の衣は空の青に透け、姿は天空に咲く白百合のように美しい。けれども、その青の瞳は冷たく、頬に浮かべる笑みは氷の女王のように残酷だった。銀の光を溢れさせながら徐々にその姿は神々しさを強めてゆく。

天空に浮かび上がり、真の姿を現した乙女に、王女リリーは愕然と紫暗の瞳を向けた。

「やはり、あなたは……レインボーヘブンの女神、アイアイリス」

……そして、この世で一番残酷で邪気にまみれた”幸せの女神”。

Chapter 92

壊れた壁を板塀で修理した一軒家。

ココと天喜の白い鳥が、西の丘の方向へ消えてゆくを見送ってから、ゴットフリーはその家の中へ入っていった。居間に人の姿はなく、テーブルには、飲みさしの珈琲カップが残されていた。

「確か、ここにラピスがいて、王女たちが話していたが……」

怪訝な顔をして、とりあえず、居住区の娘たちから預かったハイルスの果物籠をテーブルに下ろす。その時、ふと隣の部屋に人の気配を感じて、ゴットフリーは、居間を通り過ぎ、そちらの扉を開いてみた。すると、窓辺にあるベッドの横の椅子に座ったタルクが、はっと彼の方を振り返ったのだ。

「ゴットフリー！ 目を覚ましたのか」

「もっと早く来れるはずが、五月蠅い侍女たちの見張りがきつくて、なかなか外に出れなかった」

なるほどなど、肩をすくめた巨漢に、少し表情を和らげたが、

「ラピスは？」

そのとたんに、顔を曇らせたタルク。

「今、やっと眠ったところなんだが……」

彼の視線の先に目を向けてから、ゴットフリーは強く眉をしかめた。

ベッドに横たえたラピスは、高い熱にうなされながら、浅い呼吸を苦しげに繰り返していた。王宮で白蛇に流し込まれたエターナルポイズンの毒が体に回ってしまっているのだろうか。それにしても

……

あの時に致命傷を受けたとしても、こいつの中に同居している、レインボーヘブン欠片”樹林“は、癒しの力を持っている。あの力を持ってすれば、ここまで、ラピスの具合が悪くなることはないだろうに。

エターナル城が海に沈んだ跡の海岸で聞いた“樹林”の告白。それが、脳裏によぎってゆく。

すると、

「なあ、ゴットフリー、俺は思うんだが」

黙り込んでしまった彼の思考を代弁するように、タルクが言った。「レインボーヘブンの欠片“樹林”は、ラピスの体から出るのが嫌で、あの海岸での言葉をそのまま、実行しようとしてるんじゃないのか？ ラピスが生きてゆくには、自分の力が必要だってことを俺たちに見せつけるために」

「……そのようだな」

ちっと唇をならすと、馬鹿なやつと、呟きながら、ゴットフリーはラピスの枕元に近づいていった。

「ラピス」

そう言って、彼の肩に手をかけようとした時、

「ううっ、あっ」

突然、ラピスが声をあげたのだ。背を丸め、握り締めたシャツが、血で真赤に染まっている。

「まさかっ、白蛇に食いつかれた腹の傷が、今頃になって開いたんじゃないだろうな!？」

焦って立ち上がったタルクにゴットフリーが言う。

「医者は何?! こいつ以外にも生き残った奴がいるんだろう!」

「ラガーが呼びに行ってるんだが……でも、俺も行って急かしてる!!」

血相変えて、扉の方へ向かった大男を横目に見ながら、ゴットフリーは、痛みにベッドから転げ落ちそうになったラピスを支えよう

と、その体に手を伸ばした。揶揄するような声が、彼の頭の中に響いてきたのは、その時だった。

“放っておけば？ どうせ、お前たちにとって、ラピスの命なんて、物の数にも入らないんだろ”

灰色の瞳に押さえきれぬ怒りの色を湧きあげる。腕で支えたラピスを斜めに睨めつける。そして、ゴットフリーは彼の襟元を握り締めると、自分の方へぐいと強く引き寄せた。

「いい加減にしろ!!」

胸倉を掴んで持ち上げられ、見る見るうちに血で染まっていくラピスの体の下のシャツの色に、タルクは顔を青くしてしまった。何が起ったのか、さっぱり分らないが、たまりかねて、二人の間に入ってゆこうとした時、

「……ゴットフリー？」

目を覚ましたラピスが、腑に落ちぬ声でその名を呼んだのだ。

「ラピス、お前はいいんだ。お前は眠っている」

「……」

その言葉に青年はがくりと頭を下に落とす。その瞬間、ゴットフリーは、彼の体を思い切りベッドに叩きつけた。

「ゴットフリー、よすんだ!! そんなに乱暴に扱おうとラピスの傷が余計に開く」

おおい、いくら何でも、これはないぞ!!

怪我人に対するあまりの所業。タルクは目玉が飛び出しそうになっってしまった。けれども、

「レインボーヘブンの欠片”樹林”! お前が、まだそこにいるのは分っているんだ。こそこそとラピスの中に隠れるのは止めて、今すぐに俺の前に出て来い!!」

絶叫したゴットフリーが、部屋の空気を凍りつかせる。”レインボーヘブンの王”であり、”闇の王”の属性まで持ち合わせた彼を怒らせてしまったのだ。ベッドの上に突っ伏した青年の体が、ぴくりと動いた。

そして、

「ひどいな……こんな風に扱われるなんて思ってもみなかったよ。まったく、本当にラピスが死んでしまったらどうする気なんだよ……」

血に濡れた腹を押さえながら、体を起こした盲目の青年。そのかたく閉じられた瞼が、ゆっくりと開いてゆく。

花緑青の瞳。

レインボーヘブンの欠片“樹林”

「そう思うのなら、さっさとラピスの傷を閉じろ！ 俺に海岸で言った言葉を思い知らせたいなどと、幼稚な考えを持つ前に！」

瞬く間に塞がってゆくラピスの傷。冷ややかな灰色の瞳を向けながら、ゴットフリーは、きつく表に現れたレインボーヘブンの欠片“樹林”を睨めつけた。

「だって、こうでもしないと、お前たちは俺の言葉を信じないから……」

「そんなことのために、ラピスの傷を癒しもしないで放っておいたのか。自分が支えないと、こいつの命が尽きる？ そんな傲慢な台詞がよく吐けるな。それに、俺はラピスの命を捨ててまで、レインボーヘブンを手に入れると言った覚えはないぞ！」

樹林は腑に落ちない顔をする。

「レインボーヘブンの伝説も、お前たち、欠片がもっている情報も、もう、ほとんどが歪められてしまっている。そして、レインボーヘブンの豊穡の女神、アイアリスの心は、どうしようもない程に海の

鬼灯に蝕まれてしまっている。そんな邪神のために、俺たちが苦勞して島を蘇らす必要などあるのか？」

「……蝕まっている？ レインボーヘブンの女神が海の鬼灯に？」

「そう。レインボーヘブンを海に沈めた時に、持ってしまった悔恨の思い。それを紅の邪気につけこまれた女神アイアリスは、今では住民たちに至福の島を返す約束を忘れて、蘇るレインボーヘブンを己が欲望の巢にせんと暗躍する邪神になりさがっている」

「で、でも……もし、レインボーヘブンを蘇らせなかったら、アイアリスに、ばらばらにされてしまった七つの欠片たちは？ 俺はいとしても、ジャンやBWは、元の姿に戻することを願って、お前と一緒に旅を続けてきたんだろ」

黙りこくって、二人の話を聞いていたタルクが、一言、言いたげに口を開こうとした。だが、それを目で制して、

「女神アイアリスによって分けられた七つの欠片が集結した時、レインボーヘブンは蘇る。確かに伝説には、そう記されているな。けれども、俺は気づいてしまったんだ。至福の島に拘り^{こだわ}さえしなければ、七つ集まらなくても、欠片たちは元の姿に戻ることに」

「ゴットフリー、俺、お前が言っている意味がさっぱり、分からないんだが……」

元々の渋顔を、もっと渋くたタルクに、ゴットフリーは薄く笑みを浮かべ、

「よく考えてみる。人の姿を捨てたBWは、すでに海の姿に還っている。それは、欠片たちは、人や物の姿を捨てさえすれば元の姿へ戻れるということではないのか。ジャンは大地に、霧花は夜風、そして、伐折羅の黒い鳥と白い鳥は空に。ただ、レインボーヘブンの欠片”樹林”がラピスの中に留まり、まだ、見つからない他の欠片が欠けたまま復活させた島は、緑に満ち溢れた幸せの島とは、ほど遠い瘦せた場所かもしれないな。けれども、ガルフ島、黒馬島、グラン・パープル。海の鬼灯に蝕まれて、崩壊し、焼き尽くされ、海

に沈んだ、それらの場所を見届けるうちに、俺はそれでもいいと思えるようになってきた。何の苦勞も知らぬ人間が、レインボーヘブンのような豊穡に満ち溢れた場所に放り込まれても、それは、人を墮落させるだけなんだ。迷い、考え、働き、生み出してゆく。その過程の繰り返しが頑強な国を創り上げる……俺たちは、”至福の島”に固執しすぎた。だから、俺は、今、ここに集まっているレインボーヘブンの欠片たちと、その意思のある住民とともに、レインボーヘブンとは違う、まったく新しい国を興す。女神アイアリスの支配を受けない、俺たち自身の国を」

だからと、ゴットフリーは、灰色の瞳を”樹林”に向けた。研ぎ澄まされたその視線は、彼の中で眠り込んでいるラピスをも見つめているようだった。

「レインボーヘブン”樹林”の姿に還るか、ラピスの中に留まるかの、その選択は、お前自身が決めろ。俺は何も無理強いはいしない」
「でも、そんなことが本当にできるのか？ それに、女神アイアリスが、そんなことを黙ってみているはずがないじゃないか」

「それでも、あの女の手元から離れないと、俺たちは何時までも、“歪められたレインボーヘブンの伝説”に翻弄され続ける。あの女がすべての元凶なんだ。アイアリスは、きっと、近いうちに俺の元にあらわれる。あの女神の呪縛から逃れ、あの女神が作りだした悔恨の連鎖——海の鬼灯——を断ち切らないことには、俺たちに安息の日々が訪れることはないんだ」

女神アイアリスの支配を受けない国を作り出す？ レインボーヘブンの伝説を無視して……そんなことを真に受けてもいいのだろうか？ 他の欠片たちが黙っているはずがないのに。

そんな樹林に、ゴットフリーは人の悪い笑みを浮かべた。

「どうしても、至福の島を蘇らせたいというのなら、ラピスの寿命

が尽き、七つの欠片が集まるまで、お前たちは待てばいいだろうか？
俺たち人間の命は短いが、欠片たちの命は長い。その場合にでも、俺は女神アイアリスと海の鬼灯との決着はつける。たとえば、“閻馬刀”で再び“閻の扉”を開くことになろうとも」

俺は一体、どうすればいいんだ……。

戸惑い、口を閉ざして俯いた時、樹林は、不意に熱く感じた自分の胸に手をあてた。

ラピス、お前、俺の中で何で腹を立ててるんだ？

“ラピスが死んだ人間であるなら、今、あるラピスの意志は一体、何処から湧き上がってきた物なんだ？！”

エターナル城が海に沈んだ跡の海岸で、ゴットフリーが言った言葉が、脳裏を巡る。

「ゴットフリー、お前って本当に意地の悪い奴だ。分っているんだろう？俺たち欠片は、レインボーヘブンの王である、お前には逆らえないことを」

ゴットフリーは、樹林にただ無言で一瞥を送る。

「俺は、お前を信じて、ついて行けばいいのか」

「ついて来いと言った覚えはないが」

どこまでも、主導権を握ろうとしない男に、樹林は深いため息をついた。そんなことを言われたって、こいつの灰色の瞳には、有無を言わせぬ力がある。

「分ったよ。でも、俺がラピスの中に留まるかどうかの選択は、もう少し考えさせてくれ。それに、ラピスが、弱りきっていることは確かなんだ。失くした血までは俺の力では癒せない。頼むから、さ

つきみたいに乱暴に扱うのはやめて、こいつをゆっくり休ませてやってくれ」

それきり目を閉じて、“樹林”は“ラピス”に体を返すと、ベッドの上に倒れ込んでしまった。そんな彼をタルクが支える。そして、寝かせ直したラピスを見やって、ゴットフリーに非難の声をあげた。
「お前な！　いくらなんでも乱暴すぎるぞ。ベッドが血だらけだ。それに、女神アイアリスに支配されない俺たちの国？　そんなことを何時、考えたんだ！？」

「闇の中に、俺が降り立っていた時に。光の中では、見えないものが、闇の中では見えたのさ。それを思うと、たまには、“闇の王”になってみるのも、いいのかもしれないな」

笑って答えた目の前の男に、タルクはとんでもないと眉をひそめた。

「辞めてくれよ。また、こちらの世界にお前を呼び戻す自信なんて、俺にはないんだからな」

仏頂面で血に汚れたシーツを取り替えたタルクと、ベッドの上のラピスをゴットフリーは横目で見る。その時、ふと、何かに引きつけられたように、視線を窓の方向に向けた。冬晴れの青い空。けれども、彼の灰色の瞳には、青の切れ間を突いて地上に差し込んでくる、強い銀の光が見えたのだ。

「タルク……」

低く、妙に張り詰めた声音に巨漢の男は訝しげな顔をする。

「窓の外がどうかしたか？」

ゴットフリーは、その問いには答えず、ベッドサイドに歩み寄ると、窓のカーテンを素早く閉めた。

「タルク、俺が言うことをよく聞くんだった。たとえば、具合が良くなっても、ラピスを絶対に外へ出すな。女神といえども、アイアリスの千里眼はもう濁ってしまっている。王宮の温泉場で闇の戦士に囲まれた時にも、あの女は俺を探すことができなかったんだ。女神アイ

アリスはまだ、レインボーヘブンの欠片”樹林”がラピスの中にいることを知らない。そして、俺たちは、絶対にそれを知られてはならない」

「何だよ、まるで、アイアリスが今にも、ここにやって来そうな言い方をして……」

怪訝な表情のタルクの言葉に唇を噛み締める。そして、

「少し外を見てくる。分ってるな、俺の言葉を決して違えるなよ」

ゴットフリーは踵を返して、足早に部屋の扉の方へ向かっていった。

当のラピスは、ベッドの中でよく眠っている。

ラピスの中の”樹林”の存在を絶対に知られるな。

その台詞を頭の中で反芻するうちに、タルクは、徐々に湧き上がってくる緊張を押さえることができなくなってしまった。確かに今のアイアリスが邪神に成り下がっているなら、彼女は形振り構わずに、ラピスから樹林を引き剥がしてしまうだろう。たとえば、そのことによって、ラピスが命を失ってしまおうとも。

タルクは、ラピスを隠すように、彼がきていた毛布をその肩先まで引き上げた。その時、医者連れて戻ってきたラガーが、勢いよく部屋の扉を開いたのだ。

「ゴットフリー?! お前、いつ目を覚ましたんだ」

川向こうの家で寝ているはずの男の姿に驚き、ラガーは頬の傷を歪めた。……が、その後方にいる医者に、

「ラピスを、診てやってくれ」

と、ゴットフリーは短く声をかけると、ラガーをちらりと見やり、「後はよろしく頼む」

と、足早に部屋を出て行ってしまった。

呆気にとられたように、頬に傷のある男は部屋の中をぐるりと見渡す。

赤に染まったシートに、血糊の付いたベッドサイドの壁。
ベッドで死んだように眠っている青年。

「おおい……一体何があった？ 何時からここは、野戦病院になったんだ」

「い……や、ちょっとな、ただ、ちょっと、ゴットフリーがラピスをぶっとばしただけなんだ」

ばつが悪そうなタルクの台詞に、医者トラガーは、理由が分からず、ただ、顔をしかめるだけだった。

Chapter 93

ラピスたちがいる場所とは、川の対岸にある家の中。部屋の奥にあるベッドの上で、ジャンは、耳元をちりちりと焦がすような感触にもどかしそうに体を動かした。

何故、僕を起こそうとするんだよ……。

グランパス王国の住民を海の鬼灯と闇の戦士から守り、グラン・パール島の崩壊にまで力を貸してしまった彼は、くたくたに疲れきっていた。もう、少しだけでいいから眠らせて欲しかった。……が、

ジャンは、突然、とび色の瞳を大きく見開き、がばとベッドの上に身を起こした。そして、部屋の窓に煌々と差し込んでくる銀の光に唾然と目を向けた。

この光は……

「アイアリス！」

形振りかまわず、ベッドから飛び出す。部屋を横切り、玄関の扉をちぎれんばかりに開け放つ。そして、銀の光が見える空の方向へ脱兎のごとく駆け出していった。

何で、今、この場所に、レインボーヘブンの女神が現れるんだよ？！

解りきっている”その答”。湧き上がってくる不安が大きくなるほど、それは強く胸に刻みこまれてゆく。その時、別の方向から駆けて来た黒装束の男の姿に、ジャンは、目をみはって声を荒らげた。

「ゴットフリーー！！ 来ちゃ駄目だ！」
「ジャン、急げ！ エターナル城が沈んだ跡の岩壁だ」
「行くな！ アイアリスはきつとお前を探しに来たんだ」
「行かなければ、この国に災いが起こるぞ！！」

＊

窓のカーテンの隙間から、部屋の中にねじ込むように入ってくる銀の光。ゴットフリーが出て行ってしまった家の中で、タルクは強く眉をしかめた。やはりという思いと、避けて通りたかったという思いが錯綜し、じわりと額に汗が滲む。

畜生！ ゴットフリーが心配した通り、邪神の女神が降臨してきやがった。

がたんと椅子から立ち上がると、壁に立てかけてあった長剣を鷲掴みにする。そして、ベッドの上のラピスに目を向けてから、ラガーにその視線を移し、

「レインボーヘブンの女神だ！ 早く行かないと、ゴットフリーを連れてゆかれる。俺は奴の後を追うが、ここは、ラガー、お前に任せたぞ。樹林の存在を知られると、ラピスもヤバいんだ。だから、絶対に……絶対にラピスを外に出すんじゃないぞ！」

タルクは、家の外に飛び出していった。

＊ ＊

上空に舞い上がったレインボーヘブンの女神――アイアリス―の光輝が、殺気だった光を岸壁に撒き散らしている。異様に煌く銀に色を変えた海の青。その変化に怖れをなした海鳥たちが、甲高い声

をあげながら、飛び去ってゆく。

エターナル城が海に沈んだ跡の岸壁で、岩肌に強く弾けとんだ波飛沫に晒され、王女リリーと侍女は、身と身を寄せ合っていた。そんな姿をなぶるように天空から、白い女神は残酷な笑みを投げかけてくる。

「闇の王“とうそぶくわりには、”闇の扉“を完全に開こうとせす……ゴットフリーは、まだまだ、こちらの世界に未練があるよ。うね。けれども、恩を仇で返すようなお前たちに情けをかける必要などないのよ。私は、この銀の光でグラン・パール島の生きとし生ける物を全て焼き尽くしてしましましょう。そうすれば、彼も自分がやっていることの愚かさに気づくだろうから」

「お願いだから、みんなを殺さないで！ それだけは止めて!!」

王女は、銀の光を体中に迸らせたアイアリスに向かって声をあげ、戦慄くように身を振るわせた。

これは、何？ 慈愛も温容も憐みも失くし、プライドと力だけを残して……

天空の女神は、グラン・パール島を哀れむどころか、その崩壊を夢想し薄笑いさえも浮かべている。

“この国を救いたいのならば、お前が”水晶の棺“に入りなさい。生きた守護神として”

アイアリスの言葉が脳裏に浮かんだ時、王女は唇を噛み締めて、天空に紫暗の瞳を向けた。

逆らえない……。この邪神と化した女神には。

「待って!! 私を”水晶の棺”に入れば、グラン・パールは救われるのね。ならば……」

「王女さま、止めてください!! 生きたまま棺の中になるなんて、惨すぎます!!」

天空に舞い上がったアイアリスの真下にある、岸壁の突端。ふらりと立ち上がり、そこに歩いてゆこうとするリリーに侍女がすがりつく。その手を沈痛な表情で払いのけ、自分の足元までやって来た王女に、女神は勝ち誇った笑みを浮かべた。その時、

「……!!」

突然、体を黒い影が真二つに切裂いたのだ。アイアリスは、青い瞳を大きく見開いた。切裂かれたといっても、血もでなければ、痛みも感じない。けれども、纏っていた白い衣から、溶けるように空気の中へ消えてゆく自分の下肢に目をやり、天空の女神は、口惜しさにまみれた声で、黒影を解き放った男の名を呟いた。

「ゴットフリー……」

陽光がその髪を紅に染めていた。冬の冷気を帯びた灰色の瞳。王女がいる岸壁の少し下の場所に、彼——ゴットフリー——は立っていた。黒刀の剣——闇馬刀——を握り締め、その傍らに至福の島、レインボーヘブンの礎——ジャン——を従えて。

「王女、こっちへ来るんだ!」

血相変えて走り寄ってきたジャンが、王女の手をぐいと引いた。

「ゴットフリー! ジャン! 来てくれたのね!!」

飛び込むように、彼らの傍へ駆け寄っていった王女。けれども、そんな彼女の背中に向けて天空から銀の光が投げかけられた。

「アイアリス!! 何で、そこまで堕ちてしまったんだ!」

王女と銀の光の間に立ちふさがったジャンの手のひらが大きく開く。その瞬間、”銀の光”と”蒼の光”が辺り一面に炸裂した。

Chapter 94

ぎらついた銀の光が天空に飛び散った時、居住区の人々は、一様に顔を見合わせた。

「何だ？ あの光は！？」

けれども、その直後に、

「みんな、岸壁に急げ！！ あの方角には、王女が行ってるはずだぞ！」

誰彼なしに叫ぶと、住民たちは岸壁に向かって駆け出した。これは、非常事態だ。それも、とてつもなく不吉な前兆の。グラン・パールの崩壊を目の当たりにしてきた彼らは、知らず知らずのうちに危険を察知する力を身につけていた。それから目をそらすことを止めることも。

誰もが悟っていた。逃げてはならない。それが、新たな紅の邪気――海の鬼灯――を生み出すのだから。

＊ ＊

銀と蒼の光が弾け飛ぶ岸壁で、ジャンは、ゴットフリーと王女リリーを背後にかばいながら、白い女神アイアリスと対峙していた。

その時、岸壁の向こうから王女の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのだ。息を切らしてグラン・パールの住民たちが、坂道を駆け上がってくる。

「何て、馬鹿げた連中！ そろいも揃って、こんなに荒れ果てた国に未練を持つなんて」

「どんなに細やかだって、ここには、命が息づいている。その価値があなたには分からないの？！」

王女の言葉を、天空の女神は乾いた笑みで黙殺し、その前に立ちはだかる黒装束の男を白く長い指で手招いた。

「ゴットフリー、こんな連中と関わるのはもう止めて、私のもとへいらっしゃい。レインボーヘブンはあと少しで私のものになる。あの紅の灯や闇の戦士をすべて消し去ってしまえばね」

「お断りだな。考えただけでも反吐が出る」

女神の誘いを一蹴するゴットフリー。すると、それに続けて、ジヤンが、

「そんなことは絶対にさせない！ 分かっているんだぞ。アイアリス、お前は、”レインボーヘブンの王”である彼を支配できても、”闇の王”でもあるゴットフリーの意思を曲げてまで、自分の意のままにすることはできないだろう！？」

その瞬間、アイアリスは天に突き抜けてしまいそうな高笑いをあげた。けれども、裏腹に瞳には苛立ちの炎がくすぶっている。

「まあ、いいわ。その男が私についてくるのは、もう、時間の問題よ。では、邪魔なこの国にはもう滅ぼしてしましましょう。王女の母が水晶の棺から出た瞬間に、この地の命運は尽きた。守護神がない国など救いのない荒野と同じようなものだから」

銀の光が再び、女神の体を覆い出し、グラン・パールの大地が細かく震えだした。足元に伝わってくる振動が徐々に大きくなってゆく。……が、

「待って！！ 私を”水晶の棺”に入るから……お願いだから、みんなを助けて！！」

ジヤンを押しのけて、アイアリスの元へ進み出ようとする王女。けれども、腕を強く掴まれて、その場に立ち止まされてしまった。ゴットフリーが、腑に落ちぬ顔つきで彼女を見つめている。

「どういふことだ？」

「時の流れに耐え切れずに、”守護神”の座を降りた元王妃の代わりに、私が、”水晶の棺”に入れば……アイアリスは、この国を許してくれると……」

その言葉に、岸壁に集まった住民たちから、どよめきがあがった。

そして、

その言葉は、ゴットフリーの感情をさらに逆撫でた。

「何が幸福の女神だ！ 人の運命を狂わすような馬鹿げた契約はもう止めろ！ 歪められたレインボーヘブンの伝説に翻弄されるのは、お前一人で十分だ。レインボーヘブンにも、グラン・パープルにも、守護神などもういない。人間は人間の力で、国を作り、それを守ってゆく！」

アイアリスは、せせら笑う。

「ゴットフリー、そこまで言うなら、私抜きで、レインボーヘブンを復活させてみるがいいわ。けれども、今、ここで、私とあなたが戦ったとしたら、この地は間違いなく滅びてしまうわよ。やはり、約束を違えた元王妃の代わりに、その娘には水晶の棺に入ってもらわないとね。都合のいいことに、そこにはレインボーヘブンの欠片“大地”がいる。ジャン、大地の力を使って、今、ここで“水晶の棺”をお作りなさい。それこそ、グラン・パープルの王女”スワード・リリー”にふさわしい至極の棺を」

「馬鹿を言うな！ 王女は、王妃と違って、まだ生きているんだ！ それなのに、棺の中に入れるだなんて、そんなことができるわけではないだろ！！」

「欠片の分際で何を偉そうに……」

だが、アイアリスは、天上で少し首を傾げてから、

「そうね、ただ、水晶の棺に入ってもらうのも面白くないわ。ならばゴットフリー、私と賭けをしましょう。私抜きで、レインボーヘブンを復活させることができたなら、その時には、その娘は水晶の棺から出してやりましょう。もちろん、グランパス王国を再び興したとしても邪魔はしないわ。ただし、至福の島が蘇らなかった場合は、未来永劫、その娘にはこの国の守護神として、水晶の棺で生きながらえてもらいます。そして、ゴットフリー……」

女神の残酷な青の瞳と、ゴットフリーの凍てつく灰色の瞳が睨め

つけ合う。アイアリスは、それが、快くてたまらない風に笑みを浮かべ、

「あなたは、私が蘇らせた至福の島　ーレインボーヘブナー　の中で、僕^{しもべ}となって、一生、私のためにつくすのよ」

怒りとも理不尽さともいえない空気の中で、一同は絶句した。それをあざ笑いながら、天空のアイアリスが言う。

「話は決まったわね。ならば、ジャン、私が言ったように、水晶の棺をここに用意しなさい。王女にはその中に入ってもらおうわ。心配しなくても大丈夫よ。水晶の棺の中では、王女は不老不死。永遠にこの国を想いながら、生き続けることができるわ」

堪らず黒馬刀を握り締めたゴットフリーを、王女リリーが制止する。

「待って！　あの女神が言うように、ここで戦ってしまったては、共倒れになるだけよ。私が水晶の棺に入れば、とりあえずはこの場を治めることができる。私はあなたを信じてる。だから、必ず至福の島を復活させて！　そして、私を水晶の棺から出してちょうだい」

返す言葉が見つからないまま、ゴットフリーとジャンは王女の顔に目を向ける。けれども、迷いを振り切ったような声音で、王女は天空の女神に言った。

「もう、覚悟を決めました。私は亡き母の代わりに“水晶の棺”に入ります。けれども、せめて今夜一晚だけ、みんなと共に過ごせる時間を……私が彼らにお別れを言う時間をください」

すがるような紫暗の瞳を向けてくる王女に、アイアリスは、

「まあ、いいわ……そうするがいい。明日の同じ時間に、私は居住区近くの海岸に現れる。それまでは好きにすればいいでしょう」

そして、銀の光と共に空の中へ消えていった。

＊ ＊

この日の夜は、いつになく落ち着かない空気が居住区に溢れていた。

ベッドの上に起き上がり、ラピスは、訝しげに、見舞いに來たジャンとゴットフリーの様子を伺う。具合は良くなっていたが、二人から流れてくる心許ないような気配を感じ取っていたからだ。

「お前らが二人が揃ってるのって久しぶりだよな。もしかして、王宮武芸大会以來じゃないのか」

ジャンは、少し考えてから、そうかなと、ゴットフリーと顔を見合す。

「それより、気分はどうだ？」

「良いよ。まだ、起き上がると少しふらつくけど、あんなに熱があったのが嘘みたい。それより、今日は、みんなで晩餐会やってるんだって？ 何で俺だけご馳走を食べれないんだよ。タルクに文句言っても、お前はまだ寝てるの一点張りだし」

けれども、ラピスは、外から帰ってきた時のタルクの強張った声音が気になって仕方がなかった。何かが変だ。それに、国が崩壊の憂き目にあって間もないっていうのに、晩餐会っていうのも腑に落ちない。

ゴットフリーが言う。

「ご馳走など何も出ないし、晩餐会といっても名ばかりのただの集会で、居住区の娘がお前に持ってきたハイラスの実がこの辺りじゃ一番の贅沢品だ。それに、ラピス、お前、まだ顔色が悪いぞ。タルクの言うように無理をしない方がいい」

「……そういえば、あのハイラスの実って、どんな子が持ってきてくれたんだ？」

「俺に、あれを手渡したのは、3人の娘だったが」

「3人娘じゃよく分らないな……俺の親衛隊には、色々といえるから」
親衛隊がいるのかよ！？ と、ジャンは、思わずラピスに突っ込みを入れたくなってしまった。その時、ふと、ゴットフリーが、

「そういえば、あの泥棒娘は、どうした？ ラピスにハイラスの実

を採ってくる、えらく意気込んで、天喜の白い鳥で西の丘へ飛んでいったんだが」

「天喜の白い鳥で？ あ、五月蠅い娘がか？ よくあの鳥が言うことを聞いたもんだ。けど、そんなこと、お前が気にすることでもないだろ。きつと、もう戻ってきていて、その辺りをうろついているよ」ジャンのそっけない言い様に、ゴットフリーは、少なからず気がとがめた。彼の言葉に記憶を封印されたジャンは、レインボーヘブンを見つけたら必ず迎えに行くと、ガルフ島で誓い合った”サライ村のココ”と、あの娘が同一人物ということが、分からなくなってしまうているのだ。

サライ村のココ……それにしても、俺とこの家の玄関で別れたとき、一度も姿を見ないのは、やはりおかしい……。

ところが、ゴットフリーの思考は、突然、部屋の扉を開いた、ふっくらとした婦人の声に遮られてしまった。

「警護隊長、ジャン、タルクが呼んでるから、早く、広場へ行つて。王女も待っていることだし、ラピスには私がついてるから」

「もう、そんな時間になったのか」

ゴットフリーは、緊張した面持ちで部屋に入って来たフレアおばさんと顔を見交わした。潤んだ瞳で、おばさんはこくりと首を縦に振る。

「私は他のみんなと王女に挨拶をすませてきたけど、警護隊長からも、もう一度、よろしく言っておくれね」

無理に作ったような笑顔の婦人に、分かったと低い声音で頷いてから、ジャンを伴い、ゴットフリーは部屋を出て行くとする。だが、ふと何かに引き止められたように立ち止まり、ラピスの方を振り返った。灰色の瞳を少し翳らせて言う。

「ラピス、お前は至福の島”レインボーヘブン”を見てみたいか」

唐突に出された質問に、ラピスは戸惑う。何故って……

「見たいっかって聞かれても……困るよ。俺は生まれながらに目は見えないってこと、お前だって知ってるじゃないか。そりゃあ、心で感じることはできるけど……」

「ならば、それが見れるとしたら、お前は、俺と一緒に来る意思はあるか。今のグラン・パールでの生活も両親もすべてを捨てて」

ラピスは一瞬、言葉を失ってしまった。

「突然、そんなことを言われても、俺には答えが見つからない」

ゴットフリーは、そうかと一言呟いたきり、沈黙する。

傍らにいて、そのやり取りを見ていたジャンは、心が痛んで仕方なかった。彼にはゴットフリーの心が手にとるように分かっていたから。

* *

家の玄関を出て、王女の待つ広場へ行く道すがら、ゴットフリーはジャンに言った。

「ほんの少し前まで、俺は、俺たちの島は、レインボーヘブンのような幸福の島でなくても構わないと本気で思っていたんだ。」樹林”がラピスの寿命が尽きるまで、あいつの中にいたければ、それはそれで、”樹林”の力が及ばない荒れた土地でも、人の力で切り開くことはできるのだと。……が、事態はそれでは済まなくなった。

”スウオード・リリー”を水晶の棺から救い出すためには、是が非でも、俺たちは、レインボーヘブンの七つの欠片を集めて、”至福の島”を復活させねばならないんだ。けれども、そのためにラピスを失ってもいいものなのか。その上、俺たちはまだ、レインボーヘブンの欠片の最後”七番目の欠片”をまだ見つけていない」

遠くの空に迷いきった灰色の瞳を向ける。

今まで見たこともない、その表情に、ジャンも深い息をついたが、

”レインボーヘブンの七番目の欠片”

そう呟いた瞬間、

「待てよ……僕は、もう僕らの真近に、それがいるような気がするぞ」

「真近について、七番目の欠片がか？」

「そう！ お前が”樹林”の緑の枷にがんじがらめにされて海に沈められていた時に、僕とタルクとラガーは見たんだ。海の中から飛び出してきた恐ろしく研ぎ澄まされた銀の光を！」

「銀の光？ それはアイアリスの光輝ではなかったのか。俺が海の中に囚われている時にすでに、あの女神がこの地に潜んでいたとすれば……」

「いや、絶対に違う！ あの輝きに邪心の色は少しもなかった。ただ、あの銀の光は、ひどく高貴で、見ていた僕らが震えるほどの畏れを纏っていたんだ」

二人は沈黙した。分からなかった。銀の光の主が本当にレインボ―ヘブンの七番目の欠片であったとしたら、こんな事態になってしまった今、何故、それは、彼らの前に名乗り出てこないのだろう？ 言葉のないままに広場への道を歩いてゆく。すると、前方から小走りに駆けてくる巨漢の姿が見えた。タルクだった。

「ゴットフリー、ジャン、王女が海岸で待ってるぞ。広場よりも、そちらの方が良いからって」

Chapter 95

日が暮れた海岸には、静かな波が打ち寄せていた。上弦の月が夜空に輝いている。王女が居住区の住民たちと催したささやかな晩餐会の残り火なのだろうか、浜辺では幾つかの松明の灯が、沖から吹いてくる海風にゆらゆらと揺れていた。波打ち際で、その灯に金の髪を照らされながら、王女リリーはゴットフリーたちを待っていた。

「もう、住民たちとの話は終わったのか」

そう声をかけられ、慌てて手で目をぬぐって振り返る。表情を硬くしたゴットフリーを見て、王女は小さく微笑んだ。

「別に永遠の別れてわけでもないし、よく考えてみると、このグラン・パールの守護神になれるんですもの、何も哀しむことなどなかったのよ。それに、あなたは必ず、レインボーヘブンを復活させて、水晶の棺から私を出してくれる。私はそれだけを信じて、その時を待っていればいいのよね」

泣きはらした目が、彼女の言葉と裏腹で、ジャンはいたたまれないような気持ちになってしまった。ゴットフリーは言う。

「レインボーヘブン、その存在価値が今の俺には分からない。けれども、俺は、水晶の棺の中に”守護神”などという名目をつけて、王女を永遠に生きながらえさせることだけは絶対にさせない。人として生き、人として死ぬ。それが、人間の真の幸せだと思うから」
彼の傍らにいたタルクがこくりと頷いた。

その時、不意にゴットフリーが東の方向に目を向けたのだ。夜の海辺から弧を描くように、七色の光が月に向かって伸びてゆく。海岸に集まった一同は、つられるように、彼の視線を目で追った。

レインボーヘブンの虹の道標

その光は、夜であっても、至福の島に彼らを誘う。

王女リリーは、くると海に背を向けると、彼らの方へ向き直り、凜と瞳を輝かせた。

「明日、私は水晶の棺に入って、この国の守護神になる。私には、あの虹を追って行くことはできないけれども、どんな時でも、グランパス王国やあなたたちの姿をこの目に焼き付けておきたいの。だから、ジャン、私が遠くを見渡せるように、水晶の棺をこの土地で一番、高い場所に作って！ 暗い場所で祈り続けるのは絶対に嫌！」

ジャンは一瞬、驚いた様子だったが、ゴットフリーと顔を見合すと、

「そういえば、元王妃が入った水晶の棺は、エターナル城の地下の迷宮ではなく、西の尖塔の最上階にあったんだっけ……」

ゴットフリーを騙すために、レインボーヘブンの欠片”樹林”を名乗っていた元王妃。彼女を拘束するため、ジャンは西の尖塔の最上階を水晶の部屋に変えたのだ。けれども、その場所は、彼自らが崩壊させてしまっている。

「分った。尖塔どころか、エターナル城も、もう、ここには存在しないのだけれど、その約束はきちんと守る。アイアリスだって、別に文句は言わないだろ」

王女リリーは、その言葉にくくりと首を縦に振り、

「それと、このレイピアはあなたにお返ししておくわ」

と、腰に装着したレイピアを鞘ごと、ゴットフリーに差し出した。

「それは、もう、お前の物だ。俺が持っても何の役にもたたない」

「いいえ、あなたが持っていて。これは私の分身のような物。至極の島が復活し、水晶の棺から、この世界に戻って来た時、私は、このレイピアをグランパス王国の王女として、再びあなたから授かり

たい。レインボーヘブンの王としての　―　ゴットフリー・フェルト　―　から」

リリーは、紫暗の瞳を真っ直ぐにゴットフリーに向けた。

エターナル城の礼拝堂で、思わず、彼にかしずきたくなる衝動を懸命にこられた自分が、今では愚かに思われてならない。そう、最初からこうしていれば、良かったのだ。

「私　―　グランパス王国王女、グラジア・リリース・グランパス　―　は畏敬と憧憬の念をもって、レインボーヘブンの王、ゴットフリー・フェルトにかしずき、至極の宝剣、レイピアを貴方にお返し致します」

膝を折り、その宝剣を恭しくゴットフリーに差し出す。

ゴットフリーは、研ぎ澄まされた灰色の瞳を王女に向ける。そして、

ただ無言で手を伸ばし、その剣を受け取った。

＊　＊

次の日の正午。女神アイアリスは、居住区近くの海岸の空に現れた。空は晴れていたが、女神の白い衣が吹き上げる冷気が疾風となつて、海の波を荒らげていた。

「時は満ちた。約束通り、王女には水晶の棺に入ってもらいましょう。許されざる元王妃の罪を償い、亡国の民を扶くために！」

銀色の光を迸らせながら、アイアリスは、波打ち際に王女リリーと共に立つゴットフリーとジャンに、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「あれが、アイアリス……。綺麗すぎて、怖いくらいだ。けど、俺

には、レインボーヘブンの伝説の女神をこの目で見ていることが、まだ信じらんねえ」

タルクとラガーは、王女たちの後方に控えながら哑然と空を見上げた。

すると、女神は蔑んだ眼で、海岸に集まったグラン・パープルの人々をぐるりと見渡してから、

「ジャン、何をぐずぐずしているの？ 早くそこへ王女の棺を作りなさい。グランパス王国の守護神”スウォード・リリー”の名に相応しい極上の水晶を使って」

「分かってるよ。分かってるけど……」

ジャンは、天空からの声に、気の進まぬままに王女の前に進み出たが、はたと後ろを振り返り、乞うような瞳をゴットフリーに向けた。

思いあぐねているような少年の態度。すると、ゴットフリーが、王女に歩みより、

「目を閉じていていいんだ」

「え……？」

王女は、小声で言った彼の台詞に、戸惑った顔をする。

「昨夜、この海岸で、お前は、”どんな時でも、人々の姿を自分の目に焼き付けておきたい“と言ったな。けれども、身動きのとれない棺の中で、これから巻き起こる悲喜交々を見ているだけの日々、人が耐えられると思うか？ それは、結局は元王妃が志を見失い、守護神の座を捨てたのと同じ道を辿るだけだ」

天空の女神をちらりと見てから、ゴットフリーは、彼女に気づかれぬよう、王女の耳元で囁いた。

「悲嘆と後悔にまみれながら、住民たちを見つめ続ける守護神。その絶望の思いは、海の鬼灯にとっての最高のご馳走なんだ。これは、あの紅の邪気が、アイアリスを使って、“スウォード・リリー”の心を砕こうと仕向けた巧妙な罠だ。あの女神は、自分でさえも気づ

かぬうちに、奴らに操られている。だから、そんな思惑にはのるな」

「でも、私は……」

その言葉を遮って、ゴットフリーは言った。

「眠っていた方がいいんだ。ジャンの作り出した水晶はすべての邪悪を退ける。水晶の棺の外に出るまでの間は、平和を願う心だけを感じながら、祈り続けていればいいんだ。静かな水のごとくに澄みきった心。それが、海の鬼灯の力を削ぐ。闇の部分は俺が請け負う。そして、そう長くは待たせないから」

いつになく柔らかな笑みを浮かべた彼に、思わず、王女の頬に涙が伝った。流れおちたその粒を手のひらで受けとめてから、ゴットフリーは彼女の頬に軽く口づけた。

リリーは思わず頬を赤らめる。……が、すぐに顔をあげ、

「分かったわ。私はあなたを信じてる。そして、祈るわ。グラン・パープルの人々のために！」

紫暗の瞳に強い決意の色を浮かべると、海岸に集まった住民たちをぐるりと見渡した。人々の口々から溢れ出した王女の無事を願う祈りの声に、身ををふるわせて、ジャンに言う。

「もう時間よ。だから、私のために、このグラン・パープルで一番高い場所に水晶の棺を作りだして。目を閉じていても、揺るがぬ人々の意思を感じとれるように。陽の光をこの体にかけていられるように！」

とび色の瞳の少年は、もう1度、ゴットフリーと顔を見合わせ、

こくりと強く頷くと、海岸に立ったまま目を閉じた王女に向かって、ぐんと手を差し出し、グラン・パープルの大地に向けて声をあげた。

「蒼の力よ、大地に宿る無垢なる光よ！」

天に高く峙ちて

穢れなき乙女をその高嶺に抱け！」

ジャンが手のひらを大きく開けた瞬間、辺りに蒼の光が煌いた。王女リリーをとりまきながら蒼の光がドーム型を作り出してゆく。やがて、それは、蒼から無色透明の水晶の輝きに色を変えて、空に向かってせり上がりだした。

その先端に深く眠る乙女を取り込んだまま、螺旋を描き、巨大な水晶の塊が上へ上へと伸びてゆく。

天に聳え立つような水晶の峰

「水晶の棺というより、これは”スウォード・リリー”を取り込んだ水晶の山だ……」

驚き、天を仰ぐ住民たちの声に押し上げられるように、水晶の頂は、王女の姿がきらりと陽光に煌く光にしか見えなくなる程に、空へ伸び上がっていった。

ジャンは、住民たちの方を向き直り、水晶の山の頂を指差す。

「あの輝きは、グランパス王国の至極の宝剣”スウォード・リリー”が地上に灯す希望の光だ。水晶の頂に身を納められた王女は東を向いている。そのどこかに至福の島――レインボーヘブナーがあるんだ。僕らは何としてもその島を手に入れなければ。彼女をこの場所に還すためにも！」

Chapter 96

波飛沫を受けながら、水晶の峰を仰ぐグラン・パールの住民たちを、天空の女神は冷やややかに見つめていた。……が、

「では、ゴットフリー、あなたは私と一緒に来てもらうわ」
ジャンはとび色の瞳を大きく見開く。

「馬鹿なことを言うな！！ ゴットフリーの意思を曲げてまで、お前は彼を連れていけないはずだ！」

「ということは、彼の意味ならば、連れていっても構わないということね」

妙に自信に満ちたアイアリスの声音。なぜ？ ……と、胸に押さえきれない不安がつのってくる。当のゴットフリーといえど、表情を硬くして、天空の女神を見据えたままだ。堪らず、ジャンが彼の前に立ちはだかった時、アイアリスが白い衣を風に翻した。
すると、

「ココっ!？」

ぽかんと、衣の間から顔を出したサライ村の少女。誰も彼もが啞然として、女神の袖元に囚われ、空に浮かびあがった少女の姿に見入ってしまったている。

ラガーが叫んだ。

「ココっ!! お前、そんな所で何してる!？」

「そ、そんなの、こっちが聞きたい台詞よ！ ハイラスの実を取りにゆくのに、白い鳥で飛んでたら、急に目の前が眩しくなって、それから……」

頬に柔らかな布地の肌触りを感じる。ふと上を見上げると、天使と見紛う玉の肌の乙女が、涼やかに微笑んでいる。

「あんた……誰？」

「呆けてる場合か!!　それが、レインボーヘブンの女神、アイアリスだ!!」

「ええっ!!??」

驚くばかりの少女。

何でアイアリスがあの小娘を捕らえてるんだ!?

ジャン、タルク、ラガーの3人は理解し難い顔をする。ただ、ゴットフリーだけは鋭い眼差しで空を睨めつけていた。その視線が楽しくてたまらないと……女神は悦に入った声音で、

「念のために張り巡らしておいた天空の罠により獲物が引っかかりてくれたわ。でも、こちらは今は必要ないので返しておくわね」

翻した衣の下から白い鳥が、ぽろりと海の上に落ちてゆく。

「天喜の白い鳥!」

波間に浮かび上がった小鳥はびくとも動かない。慌てて、波をかき分け海の中へ入ってゆくジャン。その様を見ていた少女が、堪らず女神に声を荒らげた。

「あんた、レインボーヘブンの守護神なんですよ!!　どうして、大切な欠片のあの鳥を苛めるのよ!」

「あら、この私に向かってその言い様。何と、気の強い娘だこと。まあ、このくらいでないと、選ばれし者とはいえないけれど」

口元でくすりと笑い、ゴットフリーの方に青い瞳を向ける。そして、

「さあ、どうする?　お前が私のもとに来るのなら、娘の命は助けてやるが、嫌だと言うなら、私はこの娘の首をかき切ってしまうわ。お前はこの娘の半身。もし、それを失えば、レインボーヘブンを蘇らせても、島を率いる者はいなくなるのよ」

ココの首にアイアリスが白い手を伸ばす。

「止めて、く、苦しい!」

咽喉もとをきつく絞められた少女が、顔を歪めた。

「止めろ!! その娘に手をかけるな!!」

アイアリスの勝ち誇った笑みに、無言の圧力をかけられて、ゴットフリーは唇を震わせた。天空を見つめるその胸に、様々な疑問が湧きあがり、それらがぐるぐると脳裏を巡りだした。

あの娘がいないと、至福の島を率いる者がいなくなる?

そして、今だに姿を現さない七番目のレインボーヘブンの欠片……。

俺がああ娘の半身……? いや、違うぞ。レインボーヘブンの伝説は伝えている。……七つの欠片とその住民が集まった時に至福の島は蘇ると。

灰色の瞳が急速に光を強めてゆく。

そうか……分った。俺にはすべての絡繰^{からく}りが。

酷く動揺した様子のゴットフリーに、ラガーとタルクは、訝しげに視線を向けた。ジャンでさえも驚きを隠せなかった。サライ村の泥棒娘をアイアリスに殺されたとしても、この男が、ここまで、うろたえる意味が分らない。

「その娘を返してくれ!! 俺が代わりにそちらへ行くから!」

その台詞は、天空に囚われたココでさえも驚かせた。

「馬鹿っ!! ゴットフリー、なんで私なんかのためにっ!」

少女を捕えたアイアリスが浮ぶ天空。海岸に広がる波を踏みしめて、その下の海へ入ってゆこうとするゴットフリーをラガーが血相を変えて止める。

「おい! お前、気は確かか? ガルフ島ではゴキブリ扱いしてい

た娘の代わりになるなんて……こんな場面で正義派ぶったって、何の得もならないんだぞ!!」

肩を掴んだその手を払いのけて、ゴットフリーは海へ進む。タルクが、前に立ちはだかろうとするが、それを眼で拒絶する。

先に天喜の白い鳥を救い上げるために、海の浅瀬にいたジャンは、白い鳥を抱きあげたまま、啞然とその様子を見つめていた。

「やはり、あなたなら、そうすると思ったわ」

微笑み、アイアリスは白い衣を一振りする。

「ゴットフリー!! あんた、気でも違ったの!!」

浅瀬に下ろされたココが、波飛沫をあげながら走り寄ってきた。

同時にジャンも彼の元へ駆けだしていった。

近くに来た少女を両手で受け止めると、ゴットフリーは、わずかに笑った。その時、ジャンの腕の中から、天喜の白い鳥が空へ飛び立っていった。後ろを振り返ると、頬を膨らませた少女の頭にそっと右手を伸ばし、彼は言う。

「サライ村のココ」

その瞬間、ジャンはとび色の瞳を大きく見開いた。

「ココ……?」

どうしようもないほどの懐かしい思いが、胸に込み上げてくる。

サライ村のココ。火の玉山で、必ず迎えにゆくと約束を交わした大切な友達!

「ココ、僕はどうして、今まで、分からなかったんだろう。こんなに近くにいたのに……」

「ジャン!? 私を思い出したの? 私が分るの?!」

「分るよ!! 分らないわけがないじゃないか」

歩み寄り、少女を胸に抱きしめたジャンを見据えて、ゴットフリーが言った。

「俺の言葉に封印されていたジャンの記憶が戻ったんだ……長い間、悪かった」

身を切るような冷たい風が、天空から吹いてくる。事の成り行きに為す術のないグラン・パールの人々を見据え、残酷な笑みを浮かべた白い女神が、黒衣の男を手元に招く。

「さあ、約束どおりこちらへ来なさい。あなたの意思で」

「ゴットフリー、行っちゃ、駄目!!」

女神の足元に向けて、浅瀬の中を歩き出した男を少女が止める。

その時、

「これはお前に」

おもむろに、目の前に差し出された豪華な鞘と剣に、ココは不思議な顔をした。

「これは、スウォード・リリーから俺が預かったレイピアだ。けれども、俺よりお前が持っていた方がいい」

手に握らされた宝剣。ココは訳が分らず目を瞬かせたが、ジャンは驚きを隠せぬ顔をした。

「まさか……お前、知ってるんじゃない……」

ココの襟元に手を伸ばし、その胸にかかった銀のロケットの蓋をそつと開いた黒衣の男。その中には、自分と良く似た男の写真が入っていた。

これが、俺の父の写真……そして、この娘の……。

「ゴットフリー!! だからお前はココを助けようとしているのか？」

けれども、小さく首を横に振り、

「俺は、とんでもない思い違いをしていたようだ。俺は、その娘のことをアイアリスが残した一房の人間のおまけのような者かと思っていたが……」

もしかしたらと……彼は言った。

「スペアは俺の方だったのかもしれない」

アイアリスが待つ海の中へ歩いてゆくゴットフリーに、ジャンが声を荒らげる。

「駄目だ、行くんじゃない!! お前がいないと虹の道標が消えてしまう!! そんなことになったら、僕たちは何を指針に、レインボーヘブンを探せばいいんだ!!」

「虹の道標が消えても、お前には俺の行く先が分かるはず」
その声に、はっとジャンは足を止めた。

そう、^{シンクロ}同調している……ゴットフリーと僕は。

軽く笑みを浮かべると、レイピアを手にした少女を見やり、それから、ゴットフリーは、浅瀬に立ち尽くす少年に研ぎ澄まされた灰色の瞳を向けた。そして、

「妹をよろしく頼む」

そう告げると、海の中へ入って行ってしまった。

ココはきょとんと目を見開いている。

海に波が寄せるごとに、黒衣の姿が薄れてゆく。女神の光輝も、いつの間にか青い空に溶け込み、今は、銀の光だけが陽光と交じり合って、天頂に煌いていた。

その姿が完全に海の中に消えてしまった瞬間に、ジャンは、東の空に七色に輝く虹を見た。だが、それは追ってゆこうとしたとたんに、溶けるように消えてしまった。

レインボーヘブンへの虹の道標。

けれども、その幻影さえも今はもう見えない。

Chapter 97

静寂が戻ってきた海岸の上に広がる冬の空は高く澄み渡っていた。広がる青は美しかったが、それは、女神アイアリスの冷め切った瞳の色を思いおこさせて、人々の心に厚い雲を蔓延らせた。おまけに、王女リリーが絶大な信頼を寄せていたゴットフリーまでが、彼女に捕らえられてしまったのだ。そんな心許ない住民たちの頭上に、明るい光が差し込んできたのは、陽光に映えて輝く水晶の山の頂からだった。

スウォード・リリー

グラン・パープルを救うため、自ら水晶の棺に入り守護神となった王女。

「そうだよ……王女はいつだって、どんな時だって、グラン・パープルを守っていてくれる。それに報いるためにも、僕らはレインボーヘブンを蘇らさなければならぬんだ。泣き言を言ってる暇なんかないんだよ」

自分自身にそう言いかけながら、ジャンは、煙に包まれたような顔つきのココの手を取り、タルクやラガーがいる海岸に戻ってきた。

「お、おい……ジャン、ゴットフリーをアイアリスに獲られて……俺たちはどうすりゃいいだ?！」

顔を蒼白にしたタルクが駆け寄ってくる。すると、ラガーが、レイピアを握り締めたココを訝しげに見やり、

「それに、浅瀬の中でお前たちは、あいつと何を話してた?」レインボーヘブンの王”がサライ村の泥棒娘を庇い、しかも、王女か

ら預かった大切な宝剣を渡しちまうって、一体、どういふことなんだ?!」

ジャンはその質問に答えあぐねる。すると、

「ねえ、ゴットフリーが言ってた”妹”って……?」

「しっ、ココ! 今は、それに触れちゃいけない」

その事については、ジャンもまだ分からないことが多すぎるのだ。慌ててココを制止した時、

突然、西の方向に灰色の雲が湧き上がった。薄墨のような雲が流れ、西から東へと空が不自然に暗に色を変えてゆく。

「な、何だ、今度は何が来るっていうんだ?!」

徐々に上空が灰色から漆黒に色を変えてゆく。住民たちは、ざくりと身を震わせた。

「こ、これは……!?!」

「ま、まさか……」

巨大な影の下。冬晴れの青は急速に翳り出し、すべての光を遮ぎらんかとする勢いで暗黒の靄が増殖しはじめた。漆黒の闇。これと同じ光景を以前に見た誰も彼もが、背中に冷たいモノが流れてゆくの止めることができなかった。この闇がグランパス王国を崩壊させたのだ! あの紅の灯と相まみえて。

「闇の戦士!?!」

人々が声をあげた時、空を覆う影の間を縫うように、巨大な羽を広げた黒い鳥が飛翔してきた。

「あれは……伐折羅の黒い鳥!?!」

ジャンは、滑空してくる黒い鳥に咄然と目を向ける。

その背の上で一人の少年が冷ややかな視線を地上に落としていた。

夜が化身したかと思うほどの漆黒の髪、静かな夜の湖底のように寂しく美しい同色の瞳。

「夜叉王” 伐折羅!!」

我知らず声を荒らげたジャンをちらりと見据えて、少年は、羽ばたく黒い翼の隙間から、冷涼な透き通った笑みを浮かべた。

「ジャン、そんな風に呆気にとられて、空を見上げてる場合じゃないだろ？ もう、みんながレインボーヘブンに向けて集結し始めているんだ。もたもたしていると、ゴットフリーを見失ってしまうよ」「お前、まさか、実体なのか！？ 伐折羅の本体は黒馬島にいるはずなんじゃ……」

エターナル城が崩壊寸前の時に現れた伐折羅は、レインボーヘブンの欠片” 夜風” — 霧花 — の体を仮宿にした精神体だった。ジャンは、はたとその時の彼の台詞を思い出す。

時をおかず黒馬島もゴットフリーの元に現れるだろうと……。

「霧花は、” 闇の戦士” の先発隊を率いてとくに目的地に向かっているよ。こんな所で無駄な時間を使ってる暇はないんだ。じゃあね、僕はゴットフリーを追ってゆくから」

少年は、背中から吹きつけてくる冷たい風に漆黒の髪をなびかせると、ジャンたちの頭上に低空飛行させていた黒い鳥を一気に上昇させ、東の方向に翼を向けさせた。すると、空を占拠していた黒い影 — 闇の戦士 — が、一斉にその後を追いつ出したのだ。

” 夜叉王” 伐折羅に率いられた闇の軍。その巨大な黒い帯が、暗い河のように西から東へ空を流れてゆく。

グラン・パープルの住民たちは、それらが空の彼方へ消えてゆく様を畏れ慄いた表情で、見送るばかりだった。

＊ ＊

「ジャン、俺たちもゴットフリーの後を追おう！ お前には、あいつの居場所が分るんだろ？ なら、早く！」

タルクが焦って、ジャンの元に詰め寄ってくる。けれども、ジャンは困り果てた顔をした。

「……僕とゴットフリーが同調してシンクロいると言っても、それはレーダーみたいに、的確なものではないんだ。奴の気持ちが不意に僕の頭に浮かび上がるだけで……」

そうこうしているうちに、グラン・パールの空に太陽の明るい日差しが戻ってきた。……が、無意識に海岸に集まった人たちが光の方向へ目を向けた瞬間、

「……！！」

突然、足元に大きな揺れが起こったのだ。

立っていられない程の大地の震え。そして、轟音。それと共に、グラン・パール島の周囲に黒い塊がせり上がってきた。徐々に高く伸び上がり、島は黒い岩石でできた厚い壁に取り囲まれた。

「な、何だ？」

住民たちは大きく目を見開く。

島の周囲を黒い地層が覆っていた……その表面には砂岩と泥岩の筋が波のように続いている。だが、礫も砂もすべてが炭化した鉱物であるかのように光を吸収し、その地を黒に染めていた。

「こ、これは……?!」

ジャンはタルクと顔を見合わせ、同時に叫んだ。

「黒馬島か!!」

彼らが驚くのも無理はなかった。黒馬島は、女神アイアリスに宿命づけられ、自分の意思とは裏腹に移動を繰り返している流浪の大地だ。ゴットフリー、ジャン、タルク、ミッシェの4人は、消えゆ

こうとする黒馬島から寸での所で脱出し、このグラン・パープル島へやって来たのだから。

Chapter 98 〈最終章〉

「な、何で、黒馬島がグラン・パープルに?!」

その時、空気が急に密になり、海岸が鉄色に輝き出した。寄せてくる波頭を悉く押さえつけてしまいそうな銀色よりも重くのしかかる光。それが一瞬にして縦に伸び上がった。砂煙が舞い、その隙間を抜けた光彩が徐々に人の形をとりだしてゆく。そして……

光の中に、日に焼けた少年が立っていた。

浅黒い肌。短い髪。”夜叉王” 伐折羅の漆黒の瞳とは、全く対照的な活気に満ちて、聞かん気な黒い瞳。

「クロちゃん!!」

何故、この場所に、このタイミングでクロが現れる? この少年は実体ではないのだ。クロの正体は、”黒馬島そのもの”だ。それは、レインボーヘブンの欠片“黒馬島”が自分の心に、少年の形を付けているだけの存在なのだから。

「ジャン、また会ったねなんて、悠長なことを言ってる暇はないんだ。アイアリスがゴットフリーを連れて行ったのは、至福の島が蘇る場所に決ってる。だから、行こう! 僕たちも、彼の後を追って!」

ジャンはその言葉に唇を噛む。

「……でも、今の僕には、あいつが何処にいるかが分らないんだ……」

「まったく、情けのない話だな。ジャンはレインボーヘブンの礎なんだろ? それが、自分が帰る場所が分らないなんて。ならば、僕がみんなを連れてゆく。お前はまだ思い出さないのか? 黒馬島は

ドーナツのような型をしていて、はるか昔、丸く空いた中心にレインボーヘブンを抱えていたってことを。ここにきて、何かしらの強い力が僕の体呼び寄せようとしている。多分、その力の出所がレインボーヘブンが元々あった場所なんだ。ゴットフリーの気配に引き寄せられてここにやって来たが、僕は、またすぐに、彼を追って移動を始めるぞ。だから、ジャンたちは、グラン・パープル島から黒馬島に移って。それも、なるべく早く！」

クロの姿がおぼろげに薄れてゆく。それと同時に、足元に、大地の震えが小刻みに伝わってきた。焦る気持ちを抑えきれず、ジャンは、

「タルク、ラガー、サライ村の住民を集めて黒馬島に移動するんだ！！ 黒馬島が消えてしまっっては、僕らはゴットフリーの行方を見失ってしまう」

どんなに唐突な事態でも、こんな時は、考えるより行動するに限る。

「分かった！」

タルクに迷いはなかった。……が、

「ちょっと待てよ！ 移動するたって、ここから見えるのは、黒馬島の切り立った岩肌ばかりだ。闇雲に黒馬島を目指して走って行っても、断崖絶壁につきあたるだけだぞ！」

声を荒らげたラガーに、確かに……と、強く眉をしかめた。クロが言ったように、黒馬島がドーナツ型をしているのなら、今、グラン・パープルは、その中央の空いた場所にすっぽりと入り込んでいるに違いない。その時、

「タルクーっ！！」

海岸の向こうから彼を呼ぶ声が聞こえてきたのだ。

「えっ……？」

一人の少女が、手を大きく振りながらこちらへ駆けてくる。

「天喜^{あまき}！？ 天喜なのか！！」

タルクは瞼がちぎれそうな勢いで目を瞬かせて、海岸に視線を向けた。

白桃の色合いをした頬。琥珀色の瞳。そして、薄い褐色の巻毛が背中で揺れる度、辺りの空気を花のような香りに染めてゆく。

「タルク、タルク！ 会いたかったわ！！」

走り寄って思わず手を広げた大男に迎えられ、少女はその腕の中へ飛び込んでゆく。

「おいおい、あの美人は一体、誰なんだ？」

呆気にとられて隣のジャンを見るラガー。

「レインボーヘブンの欠片”空”の落とし子。”夜叉王”伐折羅の双子の姉、天喜だよ。タルクや僕らは黒馬島で彼らに出会い、そして、別れて、グラン・パープルにやってきたんだ」

夜叉王が出たかと思うと、次は得体の知れない小僧、その次は、超美人の姉ちゃんか……入れ代わり立ち返り、何だってえんだ！？それにしても……。

ラガーは頬の傷を微妙に歪め、波打ち際でタルクに抱えあげられて満面の笑みを浮かべる少女に目を向けた。小指を軽くあげ、

「あの娘って、もしかしてタルクのこれか？」

問われたジャンは、きょとんと目を瞬かせている。

「鈍い奴だな！ タルクとあの娘はいい仲なのかって聞いてんだよ」「……まあ……将来的にはそうなるかもしれないけど」

「やってらんねえ！ 美女と野獣とはあれを言うんだ」

けれども、そのうちに地震の揺れがひどくなってきた。タルクの腕から降りた天喜は、海岸の向こうを指差し、

「ジャン、早く私の後に着いて来て！ あちらの方向に、安全に黒

馬島に移れる場所があるの」

天喜が突然、現れたのはそのためかと、ジャンは頷き、彼の周りに集まってきた人々に高く声をあげた。

「天喜が黒馬島までの道を案内してくれる。だから、サライ村の人たちは急いで彼女と一緒に黒馬島に移って！ 次に行き着く場所は、レインボーヘブン。その七つの欠片と元々の住民が集結した時に至福の島は蘇る。アイアリスはもう僕らの女神じゃない。だから、僕らは自分たちの力で本当の至福の島を手に入れるんだ！」

こっちよ！ と言う天喜の強い声音に誘導され、サライ村の住民たちは堰を切ったように走り出した。しかし、タルクとラガーは、同時に、

「ジャン、ラピスは どうする！？ それに、残してゆくグラン・パールの住民たちは？」

「グラン・パールの人たちは、彼らだけでも大丈夫だ。だって、ラガーとタルクが十分に再生の手ほどきをしたんだろ。それに、この地は”スウォード・リリー”によって守られている。水晶の光の中で、真の平和を祈り続ける守護神に！」

「……なら、ラピスは！？」

「僕が今から、彼のいる家へ行って連れてくる。だから、タルクとラガーはサライ村の住民たちを追って、先に黒馬島へ移ってて！！」
駆け出そうとするジャン。ところが、上着の裾を握り締める強い力が、不意に彼の邪魔をした。

「嫌よ！！ ラピスはグラン・パールの住民なのよ。ラピスを連れて行かないで！！」

それは、ゴットフリーに、ハイラスの実を託した、居住区の娘の一人だった。

「いくら友達だって、あなたたちに彼を連れてゆく権利はないわ。私たちからラピスを奪わないで！ 生れた場所が違ってたって、この

グラン・パープルが、ラピスの故郷なの。レインボーヘブンと何の関係もない彼をこれ以上、おかしい戦いに巻き込むのは止めて!!」

その娘の言葉にジャンは、戸惑いを隠せぬ顔をした。

グラン・パープル島で一介の医者としての、ひた向きに生きてきたラピス。

レインボーヘブンの欠片”樹林”と同調シンクロさえしなければ、その運命は、確かに変わっていただろう。けれども、それは、生まれながらの彼への”死”の啓示だったのかも知れないのだ。

＊ ＊

何かが来る……濁流の中を、研ぎ澄まされた黒い流れが逆走してくる。

胸の鼓動の高鳴りを堪え切れなくなった時、ラピスは、居住区の一軒家の中で、がばとベッドの上に身を起こした。タルクに強く止められたのと、まだ本調子でなかったこともあって、外出するのを控えていたが、外で何かが起こっているのは明らかだった。

ラピスはベッドから降りると、隣の部屋に向かい、徐々に強くなってゆく力を最も感じる場所――玄関の扉――に向かって歩き出した。

相変わらず、目が見えなくとも不便はなかった。それどころか、視覚以外の感覚が以前よりも冴え渡り、グラン・パープル島で動く空気の流れが、手にとるように読み取れてしまっていた。

何かが来る……? いや……この扉の向こうに、それは、もう……

玄関のノブに、手をかけた瞬間、ラピスは緊張感で全身がぴりぴ

りと痺れるような気がした。扉の向こうに何かがいる。そして、圧倒的な力で”扉を開けよ”と命じてくる。

背中に冷たい汗が流れ落ちた。おそろおそろ、扉のノブを回した時、

嘶き……馬の声？

耳に響いてきた高い声音に圧倒され、ラピスは驚いて、2、3歩、後ずさった。扉の向こうに、巨大な漆黒の馬が立ちはだかっていたからだ。

かたく閉ざされた彼の目では、姿を見ることはできなかったが、それは、日常の空気をすべて押しつけてしまいそうな暗い気を纏い、にもかかわらず、邪悪な翳りは一片も感じとれなかった。

愕然としながらも、目の前に感じる黒馬の体に手を伸ばす。冷たく艶やかな毛並みが指に伝わってくる。

「お前……まさか、シャドウ……ゴットフリーの黒馬か？」

シャドウは、光と闇を駆ける馬。そして、”闇の王”ゴットフリーの乗馬。

「ここには、ゴットフリーはいないぞ！ それなのに、何で、お前がこんな場所に現れるんだよ」

だが、無意識のうちに、ラピスは悟ってしまっていた。

昨日、不意にゴットフリーが口に出した台詞が脳裏に浮かんできたからだ。

”至福の島、レインボーヘブン。その島が、自分の目で見れるとしたら、お前は、俺と一緒に来るか。今のグラン・パールでの生活も、両親もすべてを捨てて”

その言葉が、胸に痛いほど染みってくる。

「ちよっと、待ってて！ 奥の部屋から弓を取ってくるから！」

迷うより先に、足がそうさせていた。ラピスは脱兎の勢いで隣の部屋に駆け込むと、壁に立てかけてあった愛用の弓矢を取り、それを肩に背負ってから、玄関先で待つ黒馬の背に飛び乗った。

「お前は俺を迎えに来てくれたんだろ？ なら、連れて行ってくれ

！！」それが、ゴットフリーの意思ならば、俺は彼についてゆく」

その言葉に高く嘶き、ラピスを背に乗せた黒馬は、グラン・パールの大地を蹴って、海岸に向かって疾走しはじめた。

＊ ＊

「ラピスを連れて行かないで！ お願いだから！！」

ジャンは、すぐるような瞳をして訴えかけてくる娘に、戸惑いを隠しきれない表情をした。

至福の島を復活させるために、レインボーヘブンの欠片”樹林”が体から出てゆけば、ラピスの命はその時点で尽きてしまう。それが分かっていながら、この娘の手を振りほどいてもいいのか？

「ジャン！ 何をやってんだ！？ ラピスを迎えに行く気なら、早くしないと黒馬島が消えてしまうぞ！！！」

いつまでも動こうとしない少年の態度に焦れて、先に行ったタルクとラガーが叫び声をあげている。天喜の後を追っていったサライ村の住民たちは、黒馬島へすでに乗り移ったのだろうか、もうほとんどが海岸の向こうに姿が見えなくなってしまっていた。

「おい、ジャン！！！！」

再三にわたる呼びかけにも、少年は、応じようとしなかった。たまりかねて、タルクが後戻りしようとした時、

「ちょ、ちよつと待てよ！ まさか、あれって……」

海岸に居合わせた面々は、一様に驚いた表情をした。

波飛沫と舞い上がる砂煙。海岸を暗に染めながら、こちらへ向かってくる黒い影。異様に密になった空気が、圧力を増し疾風となつて、その陰影を運んでくる。

蹄の音、高い嘶き、黒い鬣たてがみ

「黒馬？！ ゴットフリーの！！」

「おまけにあの背に乗っているのは……」

ジャンは、黒馬の背に揺られながら、彼らの横を通り過ぎていった青年の姿に目を見張った。

「ラピス！！」

「ジャン！ 俺は行く。誰が何て言っただって！！」

振り落とされまいと、黒馬の首筋にしがみついた盲目の弓使いの背で、銀の弓矢がきらりと陽光に輝いた。

「ラピス、行かないで！！ 行けばあなたは、戻ってこない！！」

居住区の娘は、泣きながら彼の名を叫んだ。けれども、それを気にも留めず、漆黒の馬は波飛沫を高くあげて、黒い大地が見える方向へ走り去ってしまった。

ラピス自身にも、黒馬の行く場所が何処なのか分らなかった。けれども、その行く手には、確かに至福の島、レインボーヘブンへの糸口があるに違いないのだ。

その後姿を見つめながら、ジャンは唇をきりりと噛みしめた。

そうだよ。乗ってしまった運命の輪。僕らは、そこから降りる術を知らない。そして、知りたいとも思わない。

先に待つタルクと目をあわせ強く頷く。そして、ジャンは高く声をあげた。

「ごめん、もう僕は迷わないよ。だから、行こう、あの黒馬の後を追って!!」

その瞬間、タルクは形振り構わず走り出した。急がなければ、黒馬島が消えてしまう。彼の後を追おうとして、ジャンはたと後ろを振り返った。海岸に膝をついまま、目を泣きはらしている娘にとび色の瞳を向けて言う。

「お願いだから泣かないで。ラピスは必ず、僕がここに返すから。あいつの両親にも約束したんだ。どんな事があるうとも、その約束だけは守るから!」

にこりと笑みを浮かべた少年。けれども、居住区の娘が顔をあげたと同時に、彼はくると体を翻すと、黒い大地に向かって駆け出してしまった。

大地が揺れている。

少年の姿が海岸の向こうに見えなくなった瞬間、グラン・パープルの廻りに地層を広げていた黒馬島が唸るように大きく隆起した。砂埃のような粒が空に舞い上がり、黒い大地が、白い靄に覆われていった。白と混ざり合った黒が灰色となり、空の蒼に溶け込んで、その姿を薄れさせてゆく。

「黒馬島が消えてゆくぞ……」

グラン・パープルに残された人々は、祈るような気持ちでその跡を見送った。

すべての黒馬島の輪郭が消えてしまった後、グラン・パープルの空は、抜けるように高く澄み渡っていた。

空の蒼に残されたのは、
陽光に煌く水晶の峰。

その頂から、凜とした一筋の光が、東へ向かって迸った。

” レインボーヘブン ”

その幸せの島への道を辿りながら、輝く光が蒼天の空を駆け抜けてゆく。

水晶の棺の中に眠る乙女の想いを遠い空へ運ぶかのように。

【アイアリス第3部 虚無の王宮 水晶の棺】

（完）

地上を照らすは穢れなき光

乙女の祈りに見守られ

望郷の想いは天を馳せる

すべてが生まれ、還る場所に

深遠の闇があろうとも

光と闇を架ける者 漆黒の道を遠乗りて

満ちる生命に光を紡ぎ

闇の扉を開く時

至福の島は蘇る

Chapter 98 〈最終章〉（後書き）

アイアリス第3部「虚無の王宮 水晶の棺」完結しました。

アイアリスシリーズは、第4部をもって完全完結の予定です。

女神に捕えられたゴットフリーの行方は？ レインボーヘブンの七つの欠片は集まることができるのか？ そして、至福の島の復活は？

その結末は、第4部「闇の女神 夜明けの大地」にて掲載。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4929i/>

アイアリス～虚無の王宮 水晶の棺～

2011年8月27日20時53分発行